

日本レジャー・レクリエーション学会の歩み

— 1964~1995 —



The 32 years History on Japan Society of
Leisure and Recreation Studies

☆ 1964~1995 ☆

日本レジャー・レクリエーション学会

1995年9月

第 32 号

学 会 案 内

日本レジャー・レクリエーション 学会とは……

レジャー・レクリエーションに関するあらゆる科学的研究をなし、レクリエーション学的发展をはかり、レクリエーションの実践に寄与することを目的として昭和46年3月に設立された日本学術会議所属の学術研究団体です。学会設立までには、6年にわたり、「日本レクリエーション研究会」として地道な活動を続け、その基礎の上に学会として発展してきました。

現在支部を有しており「九州支部」、「近畿支部」そして「東海支部」の三つのそれぞれの地区においても活発な活動をつづけております。

いうまでもなく、現代の急激な社会変化は、レジャー・レクリエーション研究の重要性を一層増大させております。従来までの研究に加え、より広範で多角的な研究をし、人間生活の質的向上を目指しているのが、この学会の特徴です。

このようなことから、この学会は、レジャー問題、レクリエーション研究に直接たざざる研究者、専門家はもちろんのこと、レクリエーション環境、組織、指導など実践家の統合体ともいえます。

学会では、着実にその研究の質的深化を目指しつつ、現代から将来にかけてのこの大きな人類のニーズにこたえていこうとしております。

日本レジャー・レクリエーション学会

Japan Society Leisure and

Recreation Studies

事務局 東京都国立市富士見台4-30-1

東京女子体育大学内

電話・FAX 0425-72-4136

郵便振替 東京 5-6023353

口座名 「日本レジャー・レクリエーション学会」

日本レジャー・レクリエーション 学会の会員となったら……

日本レジャー・レクリエーション学会は、つぎの事業を行っております。メンバーとなったら、ご自分の研究や指導に役立つと共に、レクリエーション界に大いに貢献することができます。

- 学会大会の開催……年一度の学会大会です。研究発表をはじめ、シンポジウムなど意見交換の機会です。
- 研究集会の開催……年数回、研究会を開き、メンバーのニーズに合う問題を提供し、相互研究の機会をつくっております。
- 学会ニュースの発行……年2回、ニュース・レターを配布し、学会内のできごとはもちろん、広く情報を提供しております。
- 「レジャー・レクリエーション研究」の発刊……学会における研究発表、論文発表誌です。レジャー・レクリエーションにおける学問レベルの向上がこの研究誌を通して期待されております。
- 研究・調査資料の発行……レジャー・レクリエーション問題を中心に、研究・調査資料を折にふれて発行します。
- 委託研究の実施……レジャー・レクリエーションに関する研究を学会が受託し、チームを組んで研究をすすめる体制ができております。
- 情報交換……学会相互の研究を推進するために、お互いに情報をとりかわす機会をつくっております。
- 共同研究……学会員が協力して、ひとつの問題に対して、あらゆる角度から研究できる機会があります。

レクリエーション よこはま



第16号

平成7年9月1日発行

社団法人 横浜市レクリエーション協会

〒231 横浜市中区寿町2-5-1

☎ 045 (671) 5 0 4 9

編集 広報委員会

「レジャーとレクリエーションの関係を知る」

事業第1委員長 鈴木秀雄

(関東学院大学法学部教授)

1) “器(水槽)論”と“調理(金魚)論”

レクリエーションは、レジャーという“器(うつわ)”の中に存在するものと考えるとき、器の中にある“料理”そのものがレクリエーションである。色々な料理方法や盛り付け、そして味のミックス、様々な隠し味など、多種多様である。器(レジャー)にしても、幅の広いものから深いもの、沢山の量を入れることができるもの、色、柄、形、創られた過程もそれぞれの趣を有している。このようにレジャーとレクリエーションとの関係は、無限の広がりを持っていることになる。

レジャーの“器論”とレクリエーションの“料理論”を、今度は、レジャーを水槽に見立て、中を泳ぐ金魚をレクリエーションと考えるなら、金魚の泳ぐ位置は水槽の中では一次元の世界で、レクリエーションの技術としての縦軸、レクリエーションの楽しさとしての状態である横軸、そして、人間の活動領域(頭、心、体)としての高さ軸、それらの交わる点に金魚(レクリエーション)が泳いで(存在して)いることになる。そこからレジャーの中でどのようにレクリエーションがなされているかを理解するためのレジャーの水槽論が生まれ、レクリエーションの金魚論がみえ

てくる。この金魚が悠然と水槽の中を泳ぐとしても、決して一点に常に留まっていることはない。この水槽(レジャー)からはみ出した金魚(レクリエーション)は、余暇の概念からはずれ、レクリエーションとしての意味を持たなくなってくる。それは、金魚の死を意味する。どのような状況であろうと、レジャー(水槽)の中にレクリエーション(金魚)は位置づけられなければならないのである。条件が悪く、水が濁ろうが、酸素の少ない水であろうが、そこで生活しなければならないのが、金魚の宿命である。換言すれば、自由に、そして、必要に応じて泳ぎ回ることができる、よりよい金魚の住環境を持つ水槽が必要となる。いわゆる水槽管理(余暇管理能力)が問われてくる。

金魚の存在(レクリエーションそのもの)は認知したとしても、金魚の場所・泳ぎ方(レクリエーションの形態)を特定・固定したり、次の行動を確実に予測することが難しいところに、“ファジー”たるレクリエーションのゆえんがある。

しかし、それでは、そのまま、レクリエーションを単にファジーな概念に押し込めていてよいかと言えばそうはいかないであろう。

なぜなら、個人が自身の楽しみを求める活動として行うには、さして理論的な根拠や、合理的な行動を求めず、むしろ自身の感覚的な部分で自身に好ましいとする範囲において行動を起こし活動するからである。換言すれば、レクリエーションを指導するためには、この個人的な感覚的ともいえる嗜好にまで配慮を示し、レクリエーション活動を取り上げ、提供していくというステップが必要視される。それだからこそ、他者がするレクリエーションとは、どのような動機で、どのような価値判断をもって、そのレクリエーションが行われているかを感覚的な理解からではなく、理論的な理解に基づいて判断する必要がある。この視点からこそ指導者はレクリエーションの理論的背景を十分理解したうえで感覚的でない実際の活動指導が求められてくる。

2) レジャーの語源とその意味

レジャーの語源は、ラテン語の *Lecce* を経て、古典フランス語の *Leisir* (*Loisir*) から由来しているといわれる。また、ギリシャ語である *スコレ* (*Schole*) と関連を持ち、この *スコレ* は英語における学校 (*School*) や学者 (*Scholar*) に通ずるものであり、レジャーと教育とは密接に結び付いている。*スコレ* はレジャーという意味を持つだけでなく、学問的討論の場をさすものである。その場は小さな森で、*Lyceum* として知られている。この *Lyceum* からフランス語の学校という意味である *Lycee* が生まれた。英語の *Leisure* は、フランス語である「許される」あるいは「自由である」という意味の *Licere* に直接的な関連を持っている....古代ギリシャにおいて、上級階級には、労働という拘束はなく、自由に知的な、文化的な、そして芸術的な形式で活動に接することができたのである。このラテン語 *Licere* からフランス語の *Loisir* は由来し、英語では *Leisure* と同意味であり、社会からの拘束、奉仕 (仕事) か

らの自由、すなわち *Leisure* という英語にあたるもので、これらの色々な言語は、すべて意志の自由であったり拘束的要素のないこと、そして自由な選択を意味している。

レジャーの語源を総合してみると、古代ギリシャにおいて、仕事 (労働) を持たない自由で許されている人 (いわゆるレジャークラスである有産階級) が教育的・建設的・学問的意味をもった活動をレジャーとして享受していたわけで、労働との対比 (対蹠要素) として存在していたものではない。それが時代の変遷と共に、仕事を持つ労働者階級にも自由と自由時間が生まれ、それがレジャーとして用いられるようになった時、現代社会のような労働との対比としてマスレジャー (大衆余暇) が理解されるようになってきたのである。この意味からすれば、古くレジャーが自由で許されている人たちによって享受されていたものは、特に学問的であったり建設的であったりしたのだが、許された人の枠が広がり、大衆化してきて、仕事の後でなされるレジャーは、むしろ建設的、学問的な意味合いより、労働からの解放、気晴らし、娯楽としての活動にその中心がおかれ、単なる遊び (*Mere Play*) へと変化してきた。

しかし、近年の余暇時間の急増により、仕事をもつ者にとっても、余暇 (*Leisure*) は単なる、遊びや、休養、気晴らしにとどまらず、“単なる遊びでもない、仕事もない、いわゆる創造的活動”としても余暇が理解され始めてきた。本来の余暇の機能には、3つの機能があり、①休養・休息、②気晴らし・娯楽、③自己啓発・自己実現、の機能に分類することができる。余暇社会化した現代社会の中で、これらの機能を意識的に活用し、他者からの圧力や強制からの選択ではなく、自身の選択として、これらの3つの機能の間を振り子が左右に動くように、時には休養であったり、娯楽や気晴らしであったり、自己を高めようとする自己啓発活動であったりすることが必

要なのである。そこから創造的余暇といわれる活動が生き生きとして活用されることになる。単なる遊びから創造的活動に至る一連の広がりの中で幅広い活動が求められているのである。

レジャーの中でなされるレクリエーションの理解は、表面上に現れている活動形態と、内面的な心の有様と動きとを複合的に捉えて判断しなければならない。表面上の活動形態のみから、その活動をレクリエーション種目として決めつけてはいけない。Recreationの -ation は接尾辞で、動詞に付けて、本来“～である状態”～である状況を意味するのだから、レクリエーションは活動種目でなく、休養、娯楽、気晴らし、楽しさやおもしろさ、自己啓発の状況や状態を示すものだと理解すべきなのである。それらの状況や状態を通して生活の中に“真のゆとり”を求めるものであることは言うまでもない。

余暇社会の到来にあって、その余暇（レジャー）の価値を認識せず、ますます増大するレジャーを、“宝の持ち腐れや猫に小判的な存在”にするのか、はたまた、人生にとって大切な“至上の宝”として活用していくのかは、いつになく、このレジャーそのものの理解とレクリエーションそのものの認識をいかに“正しく生活の中に反映していくか”、レジャーとレクリエーションの関係をどう“正しく理解し行動として享受していくか”というあなた自身の問題に尽きるのである。

レクリエーション指導者といわれる者、またレクリエーション指導者であると自認する者がまず、自身のレジャー・レクリエーションに対する再認識をするときがとうにきているということである。レジャー・レクリエーションそのものの十分な理解や認識をさておいて、その目先の技術論に一喜一憂している指導者は全体を俯瞰せず、その場のおもしろさを求めているだけに過ぎないことを認識すべきである。(社)横浜市レクリエーション協

会が目指す指導者養成の視点は、ここにエネルギーが注がれるべきで、そうでなければ市民不在の指導者養成になりかねず、個人が求める資格の獲得に貢献しているだけに過ぎず、運動体 (Movement) の担い手の養成にはなっていないことにもなる。現状に疑問を持つことから進歩があることを忘れてはいけなく、変わることはエネルギーと努力を必要とすることは言うまでもない。指導者養成は市民へのサービスと共に協会活動推進のための支援者養成への道なのである。指導者そして筆者も含めて、ここで改めてレジャー・レクリエーションの正しい関係を再考し、次への方向性も摸索したい…。

'95レクワーカーネットワーク 活動の展開について

指導第2委員長 緒方浩臣

レクワーカーネットワークが発足して1年半が過ぎました。レクワーカーの自主的な活動と会員相互の連携を目的としてつくられたレクワーカーネットワークですが、活動はすすんでいるでしょうか。

指導第2委員会では、協会に依頼された派遣要請をネットワークに流してきました。横浜シティウォーク、協会スキー事業、鶴見区自然教室、六角橋中学校区レク講師依頼等にネットワークが関わることができました。今後も、多くの要請に答えられるよう、ネットワークの体制づくりをすすめていきたいと考えています。

また、指導第2委員会では、レクワーカーとしての活動を支援するため、今後の活動について以下のように考えています。

- ・レクワーカーの資質向上のため学習会（講習会）を行う。
- ・会員相互の連携をはかるための会を開く。
- ・シティウォーク等へネットワークとして参加していく。

今後、レクワーカーネットワークが積極的な

活動を行っていけるよう支援していきたいと考えています。多くの方のネットワークへの参加を期待しています。

民踊愛好者お誘い

横浜市民踊協会

日々の余暇を活かしながら心と体の健康づくりと、人との和（輪）を大切に、老若男女を問わず誰もが参加出来、踊りを楽しみながら民踊の伝承と普及につとめています。1年の事業実施内容をのせて見ましょう。

期日	行事名	会場
1月26日	新年踊り初め大会	野毛地区センター
2月5日	梅まつり	横浜三溪園にて
6・7月	盆踊り巡回指導	各依頼会場
9月10日	いきいき体操フェア	藤沢市秋葉台文化体育館
10月15日	秋のおどり	関内ホール
12月	クリスマス市民踊のつどい 神奈川唄まつり民舞大会	文化体育館

毎月第3木曜日 一般市民踊講習会

PM1:00～ 野毛地区センター

<問い合わせ先は>

会長 近藤貞子 ☎ 045 (641) 1749

横浜市家庭婦人卓球連盟

理事 遠藤紀美枝

家庭婦人卓球連盟は、平成4年に発足20周年の記念大会を開催し、年月の速さと、急速な社会の変化にあらためて目を見張る思いがしたものでしたが、もうあれから3年…今ではいわゆる主婦業と呼ばれる人達が自分の趣味を生かしながら上手に生活を営む知恵を身につけ、生き生きとした人生を送ることが当たり前のようになっています。よく、婦人卓球（スポーツ）と、家庭婦人卓球（スポーツ）とはどう違うのですか？という質問を受けることがあります。今こそ独身女性も既婚女性も区別なく、スポーツをしたいと思えば何時でも出来得る環境が整っていますが、私達、卓球連盟が活動のスタートを

きった時点では、まだまだ女性は結婚したら家を守り、子供を育て、働く夫を支え、といったような風習が残っている時代でもありました。そのような中で、ようやく女性が自我に目覚め、家庭の外にも目を向け始め、先ず健康でありたい、それにはスポーツが必要であると考えた訳ですが、勿論現在のように各区に地区センターがあり、スポーツ会館がありといったような恵まれた環境とはほど遠く、横浜市の周辺ではやっと平沼スポーツ会館が完成、一般に公開されはじめ、隣の県立スポーツ会館では第1期の卓球教室、体操教室の受講性の募集が始まったところで、仮に任意のスポーツサークルが出来たとしても、練習場の確保など困難をきわめておりました。それで先程の質問に戻りますが、家庭に一旦入ってしまった女性と、社会で活躍している女性との区別をつける意味で頭に家庭婦人をつけた訳ですが、現代ではもう区別する意味がなくなっているようです。スポーツの持つ意義と必要性は現代社会では欠くことが出来ないということを一早く実践しているのは今では家庭に入った主婦達だと言っても過言ではないと思います。テレビではトンネルズがピンポンをしてみたり、愛ちゃんが茶の間を湧かせ、今や完全な愛ちゃんブームです。その影響か、あるいは世の中が不景気のせい、お金のあまり掛からない卓球に人気が集まってきたということ。確かに卓球というスポーツは施設さえあれば、誰でも手軽に楽しめ、それでいてかなりハードなスポーツでもあり、といったところが魅力といえば魅力ですが…。かつては大義名分のごとく生涯スポーツを叫び、卓球人口を増やそうと躍起になった時代もありましたが、昨今ではそんな必要もないほど自然と輪も広がり、毎月のように必ず何処かで大会があり、参加者の行動半径も大きく広がって全国的な展開で活躍の場が出来ております。この9月には横浜市の一大イベントホールでもある横浜アリーナで家庭婦人卓球大会の開催も予定されており、年々、参加者数が拡大の盛況です。

協会主催事業のお知らせ

1. トリップイン奥会津ウォーク

日 時／10月20日(金)夜～22日(日)夜
申込み／9月12日より受付開始

2. ネイチャーゲーム

日 時／11月5日(日)
申込み／10月11日より受付開始

3. バウンズテニス

日 時／12月17日
申込み／11月13日より受付開始

4. 市民スキー日程

- ・お正月親子スキー戸狩 1月3日(夜)～7日(朝)
 - ・ジュニアスキー戸狩 1月3日(夜)～7日(朝)
 - ・春休み親子スキー蔵王 3月28日(夜)～4月1日(朝)
 - ・春休み親子スキー野沢 3月28日(夜)～4月1日(朝)
- 申込み 11月15日と12月13日に受付開始

よこはま子どもマリンスクール 「南伊豆自然教室」でたくましく

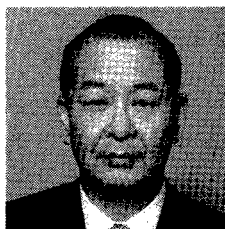


8月15日から19日までの5日間、静岡県南伊豆町の「横浜市少年自然の家、南伊豆臨海学園」にて、小4年～6年の男女170名参加で行われた。

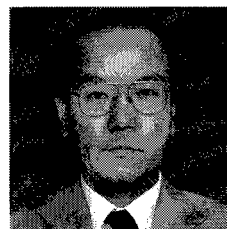
場所は、南伊豆妻良湾の子浦海水浴場の海を舞台に、カッター訓練、磯の生物観賞会、遠泳、組立て式イカダに乗って、湾内の冒険など内容は盛り沢山。たくましく日焼けして。

提供／神奈川新聞社 写真部

事務局よりのお知らせ



相川 健



前田 進

○去る3月31日付で、事務局長の青野利夫さんが退職され、磯子区にある社会教育コーナー所長に就任されました。

また、6月7日付横浜市の異動により事務局次長の杉山純子さんが戸塚区役所戸籍課戸籍係長に転出されました。ご苦労様でした。

これに伴い同日付で事務局長に相川健が、事務局次長に前田進が就任いたしました。

どうぞよろしくお願いします。

○事務局のレイアウトを変更し、衣替えをしました。是非お立ち寄りください。

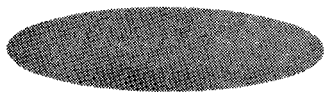
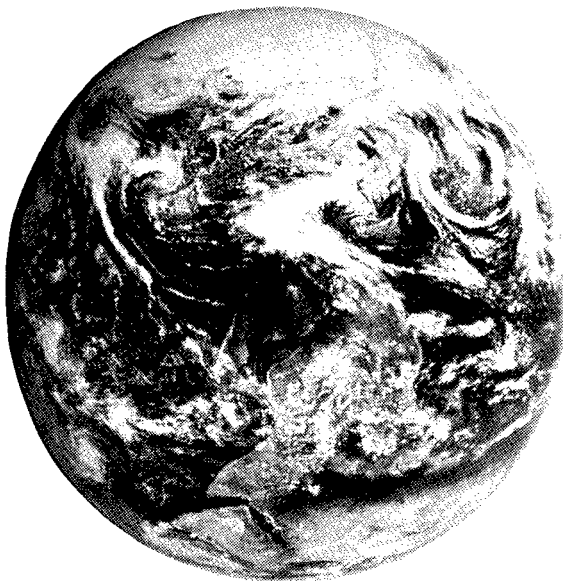
編 集 後 記

平成7年度「16号」の広報発刊に、ご協力ありがとうございました。掲載されました内容のとおり、刊頭には、レク協の運動推進をはじめ、年間に亘る実践活動を支える指導者自身の相互に問題意識を高め合い乍ら、確かなステップを一步一步市民の日常生活で、期待されるサービスが求められている「豊かなライフスタイルとワークを求める展開を根ざす!!」を合い言葉に、参加意欲を創造して実践する大きな前進へと一歩を踏み出しました。その成果は次号に掲載していきたいと思います。協力いただいた原稿提出の取りまとめや、校正作業の遅れから、発刊月日になりました事をお詫び申し上げます。

広報委員会

FRIENDS OF EARTH

美しい星だから、次の世代にそのまま残したい——川本はそう考えます。



環境技術で未来をひらく——

川本工業(株)

●本社—〒231 横浜市中区寿町2丁目5番地の1 ☎045(662)2021
●営業種目— 空調・衛生工事、電気工事、土木工事、水処理・公害防止工事

レクリエーション よこはま



第17号

平成8年3月31日発行

社団法人 横浜市レクリエーション協会

〒231 横浜市中区寿町2-5-1

☎ 045 (671) 5 0 4 9

編集 広報委員会

「レジャー・レクリエーションの関係を知る(その2)」

事業第1委員長 鈴木秀雄

関東学院大学法学部教授
日本レジャー・レクリエーション学会理事

[1] レジャーであるためには

レジャーとは、スコーレ（ギリシャ語）とリセーレ（ラテン語）の二語に語源がある（レクリエーションよこはま第16号参照）ことは知られている。これらは「自由で許されている身分や状態にあり建設的な活動をする」意味である。また人が楽しむ時であり、楽しんでよい枠組みの中にあることでもある。しかし楽しむの時、その枠組みの中にいたとしても楽しみが向こうから必ずしもやってきてくれるものでもない。すなわち、「こころよさ」という個人の快迫及の状態と「こころよい」という快活動がされなければレジャーとしての存在を意味しない。自由時間が全て余暇であることを意味してはいない。快状態と快活動が必要であり、それらがレクリエーションとしてレジャーの中でなされ初めて真のレジャーの存在となる。余暇にあたるのに何もせず、意識もしない時間や状態で、あたかも植物人間的状態ようになっていたのではそれをレジャーとは決して言わない。

[2] レクリエーションとは

過般の平成7年度(社)横浜市レクリエーション協会主催事業（平成8年3月1日開催の研

修会：レクリエーション再考～そのファジー（曖昧）なるものへの挑戦～）の中でも詳しく述べたように、レクリエーションとは、「単なる遊び（Mere play）から創造的活動（Creative activity）までを含む一連の広がり（spectrum & span）の中にあって①余暇（レジャー）になされ、②自由に選択され、③楽しみを主たる目的としてなされる活動（Activity）で、歓娛（よろこび楽しむこと）の状態（State of being）をいう。」であり、レジャーの中にレクリエーションが存在していることが明確にわかる。

[3] レジャーの「構造(つくり)」と

「機能(はたらき)」

レジャーの構造(つくり)は、生活機能からの離脱、社会機能からの離脱、そして歓娛の獲得という三つの部品(条件)からなり、レジャーの機能(はたらき)は、休息・休養；娯楽・気晴らし；自己啓発・自己実現、の三つの状態である。生活必需から離れ、仕事や社会的役割から開放され、初めてレジャーたる歓娛の迫及や獲得がなされる。そしてその時どきの個人的な条件や状態により「つくり」の三条件、そして「はたらき」の三状態はレ

クリエーションの一連の幅広さとして選択された結果現われてくる。単なる遊びも家族での外食もごろ寝やカラオケそして冬山登山、また難しい読書や自身を高める学習や訓練も生活機能からの離脱、社会機能からの離脱、そして歓娛の獲得の条件のもと、休息・休養；娯楽・気晴らし；自己啓発・自己実現、の三つの状態がその割合・強調される度合いや複合的な組み合わせによりレクリエーションの活動 (Doing recreation activity) として、あるいはレクリエーションの状態 (Being the state of recreation) として、時には自然発生的に、時には意図的・計画的に現われたり、なされたりする。

[4] 外延と内包の曖昧さ

外延 (それぞれの概念が適用される事物の範囲) と内包 (一つの内容の中に含まれる全ての属性すなわち意味や性質) を考えれば、レジャーとレクリエーションにそれぞれ外延と内包が存在するのだが、そう考えずにそれよりも、レジャーの主たる外延としてのレクリエーションがあり、内包としてレクリエーションのあらゆる活動・状態があると考えることがよいであろう。例えば、芸術家という概念の外延は、詩人・小説家・音楽家・彫刻家・画家・俳優・演出家などであり、その中の例えば、俳優の内包は、演劇・映画等に出演することを職業とする人、役者である。レクリエーションの内包としてなされているさまざまな活動や状態にはそれぞれ名前がついていることから、レクリエーションと言わずにそのままの活動名や種目名、状態名で表現する。それは、レクリエーションの内包が狭く捉えられ例えば三種の神器といわれたダンス、ソング、ゲームなどに限定されてしまったりする。レクリエーションはレジャーの外延の単なる部分としての存在ではなく、レジャーの中で快追及の活動 (Activity) や歓娛 (喜び楽しむこと) の状態 (State of being) が

求められる全てのものなのだから、二重円に例えるならば外輪と内輪の関係となり、概念的にはレジャーはレクリエーションを含み、大きく広いものであるが、外輪と内輪に曖昧さは存在するもののその差は歴然としている。個人が有するレジャー (外輪) の枠組みの中で内輪としてのレクリエーションが享受されることになる。

例えば、スノースキーがレクリエーションであるか否かではなく、レジャーの外延としてのレクリエーションとして位置づけられ、その内包としての活動でなければ、レクリエーションにはならない。換言すれば、レジャーの枠組の中でその活動・状態が存在しなければレクリエーションの活動・状態としてなされていないのだからレクリエーションにはならない。意識・活動・状態が関係して、その行為をレクリエーションであるかないかということを明らかにしている。

[5] 余暇時間化のためのレクリエーションの意識化と活動の三次元的分析

自由裁量時間が増大する余暇社会にあって、豊かなゆとりある生活をしていくうえで個人が自身の余暇をどうマネージするかは、重要な課題である。お金さえあれば、仕事してさえいれば豊かになれるという時代ではない。いかに余暇能力 (Leisurability) を高めていくかが現代社会の中で求められている。

日常生活の中に存在しているのに気付かずにいる活動や、潜在化してしまっている活動を意識化し、それをレクリエーションに創り変えて「昇華させる」工夫をしていくことである。例えば、家族での「夕食の一時」、これを意識的にレクリエーション化し楽しさや豊かさにゆとりを加えるにはどうしたらよいのだろうかと考えたりすることである。これは生活機能からの離脱を図ることになり、余暇時間化を可能にする。歓娛の状況を創り出す原点が生まれてくる。快追及のための努力

をしなければ、日常生活の中で楽しさや喜びは生まれてこない。この意識化こそレクリエーションの自然発生的な誕生を可能にする。

また、レクリエーションに関するかぎり、活動の分析とは、その活動の価値や意義を評価するためのものではなく、自身にとってよりよいレクリエーションはどうあるべきかを知るためのもので、余暇能力 (Leisurability) を高めていくために理解しておくべきである。活動の分析としては、レクリエーション活動の三次元的分析法 (詳細は拙著『レクリエーション指導法』誠信書房刊参照) でその時どきの活動を分析することができる。レクリエーション活動の三次元的分析法を簡単に説明すれば、水槽 (レジャー) の中の金魚 (レクリエーション) にあてはめることができる。ある活動を分析し、それが技術的にはどのようなものであるかを縦軸 [レクリエーション技術 (Recreation technique) 系] にとり、楽しさやおもしろさの度合いを横軸 [レクリエーション状態 (Being recreation) 系] にとり、また高さ軸には人間活動領域 (Humanistics activity domain) 系を組み合わせれば、それら三つの軸の交わる点に金魚は位置していることになる。その金魚の位置こそが分析できるレクリエーション活動の内容ということになる。高さ軸の人間活動領域 (Humanistics activity domain) 系は三本柱からなり①あたま (Cognitive domain) である知的活動領域②こころ (Affective domain) である情緒的活動領域③からだ (Psychomotor domain) である神経・筋的いわゆる身体的活動領域の組み合わせや強調されている領域により活動内容に変化があるということがいえる。縦軸の技術系を達成度、横軸の楽しさ喜びの状態系を歓娛度、高さ軸を、あたま、こころ、からだの柱がときに応じてそれぞれ④最大関与⑤中間的関与⑥副次的関与を示す領域関与度とすれば、三次元の達成度、歓娛度、領域関与度の総合判断とし

て、レクリエーションの満足度を尺度化して測定することも可能となる。レジャー・レクリエーションがファジー (曖昧) に捉えられるものであるからこそ、明確にする意識化が大切であり、明確化の過程を経ることにより余暇能力 (Leisurability) を高めていくことができる。

公益法人である本協会の事業展開においても既述の内容を理解したうえで十分な議論とそれに基づいた機構改革、組織化とそのネットワーク化、旧態依然のレクリエーション指導形態でもある“手段化したレクリエーション指導”の形態から脱却し、新たなレクリエーション運動を推進する幅広い担い手としての指導者養成を独自にはかり、市民への多様なプログラム提供 (Leisure Services and Studies) を多角的にしていくことが大切である。そのためにもレジャー・レクリエーションの本質と現実をしっかりと理解し、(社団法人) 横浜市レクリエーション協会がめざすべき、そしてこうあるべきという市民に見えるさわやかな“あるべき論”を掲げ、市民に対し地域性、文化性を充分意識した特色ある「横浜型レクリエーション」あるいは「レクリエーションよこはま型」を確立し、市民に対する余暇活動 (レクリエーション) についての十分な心豊かな情報発信基地としての情報提供機能や相談機能そして指導に関する人的援助 (指導者バンク) 機能なども兼ね備え、市民に求められ多くを期待される活力ある協会づくりをめざしていきたいものである。

「市民とともに」～“使命共同体”への道を拓く

第2次中長期計画と協会事業の展開について

総務財政委員長 深津 米男

平成6年度に発足した「中長期計画推進会議」は、「第2次中長期計画」の実施推進をねらって、平成7年度末の現在まで極めて精力的に活動し、約1年半の間に、延べ13回の会議開催とそれに伴う作業を行い、協会基本

方針（案）、事業方針（案）それに伴う機構改革（案）などをものにし、3月に本協会長に検討結果の「報告」を行いました。

報告した基本方針（案）では、「第2次中長期計画」で現在の社会の流れや横浜市の方向性（「2010プラン」）等を背景にして示された協会の“存在意義”そして“目的、本来果たすべき役割”等を具体的に検討して、横浜331万市民の余暇生活の活性化を促し、余暇活用のニーズに対応する公益的な「レクリエーション運動体」としての協会の姿を明確にしました。さらに事業方針（案）では、運動展開の目標を「横浜市におけるレクリエーション環境の改善と活動を通じた市民の喜びづくり」と設定、当面の事業テーマを示しながら、あわせて平成8年度事業方針（案）を提示しました。

その詳しい内容や項目は、平成8年度総会の議案として示され、それをもとに会員による活発な議論が起こることを期待しています。

さて、今回の「報告」には、事業を進めながら何をを目指すのか、地域に密着した活動展開を進めていくにはどうすればよいか等といった、従来曖昧であった部分についての具体的なしっかりとした方向性が示されていると自負しています。

個人的な印象をいわせていただければ今回の「報告」で、昭和62年の「第1次中長期計画検討委員会」の設置から既に8年、ようやく協会改革の体制が整ってきたという感じがします。

今回の検討は「“協会”とは何なのだ。何を、どうすべきなのか。」という実にシンプルな、そして重要な問いかけから始まりました。そして「今、何をなすか。今後どうやっていくのか。」というところまで続きました。その論議の基本には、“レクリエーションを運動としてとらえる”ことがありました。そして、運動を進めていく背景となる理論的な考えも求めました。ここの部分については、

会議のメンバーにお二人の学識豊かな方を得たことが大きな力になりました。特にレクリエーション活動や事業を「ねらいと目的の設定軸」でとらえ直す視点は、今まで漠然としていたものを整理するうえで有効でした。

そして、従来のイメージや理想とするレクリエーション協会の姿を基にした、いうなら《思いの世界での論議》から一步踏み出して、現実の協会の姿、おかれた位置、役割を強く意識した論議が行われました。

それは、「従来の日本協会と県協会、そして横浜市協会というラインの中で考えていて、市民のための横浜の“運動”は成立するのか。」という厳しい問いかけでしたし、「横浜を含む大都市におけるレクリエーション運動の進め方には、前例やモデルがないに等しく、また、どちらに進むという既に敷かれたレールがある訳ではない。おおげさにいえば私たちの営みそのものが、大きな試み、先例になっていくんだ。」というメンバーの共通の認識に支えられていると思います。

そして、レクリエーションの世界だけが、現代の社会の動きや変化と無関係には存在しているはずもないこと、331万人という、とてつもなく多くの老若男女の市民の顔を想像しながら私たちの運動を進めていくこと、また、世界にひとつしかない「横浜の協会」のこれからの姿を思い描きました。

今回の「報告」は近未来のものではありません。現在の協会を動かしながら、“従来の協会からの脱皮”を目指しています。ご承知の通り、協会は公益法人の中の「社団法人」です。「社団法人」はふたり以上の人が、共同の公益的な目的をもって設立した、法律上の権利や能力を認められている団体です。ここで注目して欲しいポイントは「ふたり以上の人」「共同の公益的な目的」というところです。

いままで述べてきた通り、今回の「報告」で「共同の公益的な目的」については明らか

になったわけです。残るのはその目的をもった「ふたり以上の人」＝社員（民法上の呼称。正会員のこと）の姿や意識さらに関わり方についてだと思います。

ここからは私見になりますが、人によって構成される共同体にはいくつかのものがあるようです。私的利益を追求する企業などの「利益共同体」、公的な利益を共有する地域や自治体などの「運命共同体」といわれるものなどですが、私たちの協会はどんな「共同体」なのでしょうか。「社員」といっても私たち会員と協会の関係は、協会は企業ではありませんから、当然、雇用と被雇用の契約関係などありません。また、協会は法人として法律上の権利や能力を認められてはいますが、公的な利益を共有する団体ともいえません。

あえて私たちの協会を「共同体」として定義づければ「横浜市民の余暇能力の開発や余暇生活の向上を目指す」という同一の使命（ミッション）を共有する人々の自発的で水平的な集まり。そこでは働く（活動を進める）ものだけが「社員」になることができ、「社員」だけが働くことができる「使命共同体」だろうと思うのです。

レクリエーション協会の会員である、あるいは会員になるということは、だれかが「提供」や「用意」してくれたレクリエーションにかかわる活動や事業に“参加”するということの意味しているのではなく、自らが主体的にさまざまな立場や角度からレクリエーション運動に“参画”していくこと、働く（活動を進める）ことだと思います。

私たち会員には、今、そんな会員イメージの認識変革が求められているのではないのでしょうか。そして、それを進めながら、さらに多くの「市民」が協会の会員として運動推進の列に加わってくれる、そんな「状況づくり」こそが協会の使命だと思います。

もし、レクリエーション運動に主体的に“参画”するなんていわれても、専門的な指

導能力がないからと思う方がいらしたら、その方こそ、その意識からの脱出が必要なのではないかと思います。

なぜなら、私たちは日常生活の中で「楽しさ」を求め「健康づくり」を願うさまざまな活動で、多くの「人との交わり」を深め、それぞれの「生きがい」の認め合いを、まず自分から率先して実践できる人こそ、また多くの市民とともに楽しく活動することを求める人こそ、他の人に働きかけられる人、運動の担い手と考えているからです。

平成8年度から毎年、協会の総力を挙げて地域団体起こしや活動開発をねらうイベント「レクリエーションよこはまフェスタ'96」を開催していきます。ここから「横浜のレク」市民に、他の大都市のレクリエーションの仲間、さらに海外の都市に発信していこうと夢を広げて考えています。ぜひ一緒に進んでいきましょう。

指導者養成講習会について

指導第一委員会 兼松ムツミ

平成7年度養成事業は昨年11月に終了致しました。前期後期とも30名ほどの方が受講され、レク資格申請予定者は8名ほど居られます。

講習内容は1年間で資格申請が出来るようにプログラムされています。お仕事の都合や情熱が持続出来なかつたりの理由で受講を断念される方が多い中で、今回の申請予定者の情熱努力を感じずにはられません。

講習に携わる指導第一委員会のメンバーも総力をあげて受講者相互の人間交流を引き出し講習会の雰囲気作りに勤めてきました。

断念された方々が次年度も受講され、横浜市レクリエーション運動振興に携われますことを希望致します。

平成8年度講習会も7年度と同じ内容で5月15日からスタート致します。広報よこはまでもご案内致しますがお近くの方で養成講習

会に興味のお有りの方にご案内下さると幸いです。

協会自主事業好評のうちに実施される!!

今年度は中止事業もなく、各事業は好評のうちに実施されております。「トリップイン白馬」と「尾瀬と桧枝岐の旅」は受付当日2時間程で定員になってしまい何十人ものキャンセル待ちの人があり、それでも電話は鳴りっ放しで、白馬・尾瀬の人気的一端が伺えました。天候にも恵まれ参加者から「すばらしかった」とのお礼の手紙も届いています。

「外国の料理を楽しむインド編」では、男性の希望者からも何人もの申込みがあり、やはり受付当日で満杯になってしまいました。

「ネイチャーゲーム」では親子での参加者も多数あり、秋の日の一日、自然の中で楽しく過していました。

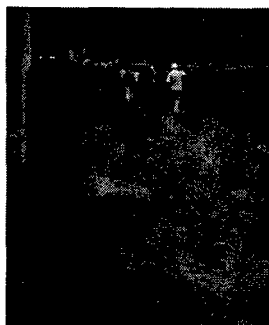
「カラオケ段級位認定」「バウンドテニス」「ジュニアスキー教室」「お正月親子スキー戸狩」も無事終了しました。2月13日に受付をした「春霞の湘南を描く」も当日で締切りとなりました。初心者に人気がありますが、中には友人はだしの人も何人も居り、キャンパス持参の参加者も多数おります。

最後のしめくりに「春休み親子スキー」を残すのみとなりました。

自主事業は充実した1年であったと思います。

①トリップイン白馬 9/29~10/1 参加者49人

榎池自然園と塩の道散策を主目的とした小旅行は、好天に恵まれ、すばらしい景色に参加者の皆さんに大変喜ばれたものになり、協会としては大成功に終わったと思います。来年もこのような企画をしてほしいという要望がありました。



(塩の道と千国街道)

②トリップイン会津 10/20~10/22 参加者43人

晩秋の尾瀬の自然の展望と桧枝岐の奥深い山波に参加者の皆さん、おおいに感激をしたいと思います。またバスの中でのレクリエーションの企画の楽しさに皆さん喜びもひとしおだったと思います。



(桧枝岐村にて参加者揃って)

③市民レクリエーションカラオケ段級位

認定会 10/29 参加者75人

吉野町市民プラザ



(三嶋、斉藤両先生、桑垣副会長と入賞者)

④ネイチャーゲーム 11/5 参加者29人

大池こども自然公園内



(親子協力して木の形を作る)

⑤外国の料理を楽しむインド編 12/2

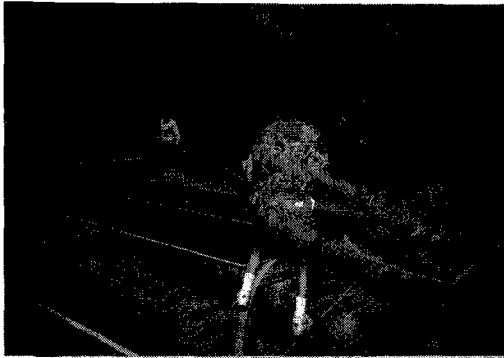
「レストラン・タージマホール」参加者30人
タージマホール一流シェフ3名による指導を支配人の通訳で、参加者全員でチャレンジし、本場のインド料理をフルコースで堪能しました。



(シェフの説明を聞く参加者)

⑥やってみよう!!バウンドテニス 12/17

栄スポーツセンター 参加者17人



(バウンドテニスを楽しむ参加者)

⑦お正月戸狩スキー 1/3~1/7

親子 74人

ジュニア 40人

お正月をスキー場でということで参加者の皆さん大へん喜んでおりました。天気の方はスキー場特有の寒さでありましたが、スキーをする楽しさの中で寒さも何のそのでありました。



(講習会風景)

市民クリスマスの集いを終えて
横浜市フォークダンス協会

吉井 勤

横浜市レクリエーション協会主管事業の一環としまして、平成7年12月17日(日)横浜市フォークダンス協会では、保土ヶ谷スポーツセンターにて、市民フォークダンスクリスマスの集いを実施しました。

毎年各区のスポーツセンターを利用して開催していますが、今回は地理的条件もよく、交通の便利さも手伝い参加者の出足は好調でした。800余名の参加者があり、盛大裡に終ることができました。

主催者側から横浜市レクリエーション協会相川事務局長、横浜市フォークダンス協会朝倉会長の挨拶、来賓からは神奈川県フォークダンス連盟芝野先生のご祝辞を得、来賓並びに関係者の紹介のあと、恒例の表彰式と抽選会を行ないました。

ここにきて、フォークダンス人口が徐々にではありますが、増加の傾向をたどっていることを、喜ばしく思っております。

三ツ沢モーニングコールクラブ

副会長 山本 忠三

今年度事業計画の一環として、三ツ沢モーニングコールクラブでは平成8年1月15日観光バスで、伊香保、水沢観音初詣でに参りました。当日は前日とうって変わったような好天に恵まれ、赤城山の雄大な眺望と紺碧の空、周辺の山なみには一面の雪景色。大自然のバ

ノラマを目のあたりにして、都会では味わえない感動を覚えるのでした。又古刹坂東第十六番札所水沢寺では、往時の面影をそのままに偲びながら、今年度の一層の発展を祈願しました。車中では会員各自で持ち寄った物を共に分かち合い、語らい、思いやりのある一刻を過ごすさま等、コミュニケーションの場をつくる事によって、人は皆人間関係のすばらしさを味わう事が出来るのではないのでしょうか。大変楽しい有意義なバス旅行の一日でした。

「協会事務局だより」

平成7年度もあますところ僅かになりましたが、各事業も委員の方々の積極的な取り組みの中で、順調に進めてまいることが出来ました。特に恒例の「新春のつどい」は、高秀横浜市長のご臨席を賜り、参加者記録も大幅に更新し、258名のご参加を得て盛会に開催することが出来ました。有難うございました。

只今、事務局では平成8年度にむけて、スポーツレクリエーションを取りまく環境の変化や市民ニーズを踏まえながら「中長期計画推進会議」で計画を検討いただき、事業計画、予算(案)を作成しているところです。

平成8年度は、この計画に沿って活動を推進することになりますので、より一層のご協力をいただきたいと思います。

また、正会員、賛助会員の増員をはかってまいりますので、会員の皆様のご支援、ご紹介をいただきたいと思いますので重ねてお願い申し上げます。



(市長・会長と功労者の皆さん)

鈴木司専務理事 文部大臣表彰に輝く

本協会専務理事鈴木司氏は昨年10月の全国体育指導委員大会で文部大臣表彰を受けました。永年体育振興に尽くされた功績によるものです。

編 集 後 記

会報17号の発刊に際し、貴重なご提言をはじめ、事業活動の成果がグラビア報告で掲載。内容として、楽しく伺えるようにされましたご盡力に対して心よりお礼を申し上げます。

表題を飾っていただきました“これまでのレジャー観に関して指導者への大切な心構え”を寄りどころとなります様に、レジャーの水槽の中で、自由に動き廻る金魚をレクリエーションとしてわかり易く、解説された内容には特段の敬意を表したいと思います。

市民の一人ひとりが、自己のかけがえなき豊かな生涯を、自分らしく生きる時代に、多様な、自由な嗜好にも応えられる魅力を目指す時代こそレクリエーションの果たす役割りと痛感いたします。さらに、身に覚えた余暇能力を適切に、他人の日常生活行動の魅力として活動展開を求められる自信づくりにも、忘れかけていた大切な意義づけと、声を大にした励ましのお言葉として受けとめたいと思います。

総務財政委員会の過去2ヶ年間に亘る検討を重ねられて来た「協会運営の柱づくり」第2次中長期計画こそ、新年度を迎えます協会運動と共に諸事業の展開を指標する拠り所として、豊かに生きる喜びを与えられ、多様な市民の余暇ニーズに応えた行動組織づくりが見直され、更には横浜らしい大都市生活を支え乍ら、広く大きな相互交流の機能を発信するベースづくりも、寄与出来るものと信じます。

過日のレクリエーション指導者研修会の折にも、確かな軌道を知恵と行動によって、相互に研き合い乍らの大切な、知らしむ啓蒙と、寄らしめる交流によって、力強く一步を踏み出そうではありませんか。期待に応え、絶え間なき活動支援の増進を心より念じて、広報委員各位よりのまとめといたします。

広報委員会 委員一同

『発刊』によせて

会長 浅田 隆夫

本学会が四半紀の星霜を経た今日、本書によって自らの歴史を回顧することができたことは誠に記念すべきことであり、また、この機に居あわせた幸運を会員の皆さんと心から喜びたいと思います。

思えば、昭和39年3月、15名から発足した創業時代から学会への発展を夢みてきただけに、一人、感慨深いものがあります。

今日、対外的には東西対立の解消とそれに伴って生じている紛争があり、対内的には55年体制の崩壊と経済社会の変革、自由時間の増大、高齢化社会の急進など未曾有の難題が山積しています。

このような社会変動により、21世紀に向けてパラダイムの転換が求められているものの、それへの不透明さはさらに増し、その対処法は難しくなっています。

たしかに、この'90年代後半は、「本もの」（自然との共育・調和など）の世界創造に向けて人類がどのような知恵を発揮するか否かの分水嶺に差しかかっているといっても過言ではないでしょう。レジャー・レクリエーション（以下、L/Rと略記）生活についてもまた然りです。

周知のように、Leisure and Recreation Life の Life には、「生命」「生活」「生きがい」の3つの内容があり、「生命」は肉体的生命でいつまでも生き生きとした肉体であること、「生活」は豊かな社会生活で物心とも豊かな生活を充実させること、「生きがい」は精神的な満足感をうることであり、これらは要するに、よい人生設計には「健康」（生命）、「所得」（生活）、「自己充足」（生きがい）の3つが大切だということなのでしょう。しかし、これまでは、この3つを個人の問題として考え、社会の問題として捕えることと全く欠けていたように思います。

21世紀におけるL/R生活における問題解決は、社会の問題として捕え解決するような研究態度が重要だし、それを優先させるべきでしょう。

いうまでもなく、また、L/R問題は広領域に誇がる研究分野だし、個人の自由で制限のない状態になり易い対象だけに、明確なビジョンのもとに自由な発想を出し合い、かつ、異なる専門分野の人達の間で刺激し合い課題を出し合って自己改革の一助にすることが望まれます。そして、できればこれを継続的なプロジェクト研究として実施していくような試みが、実りの多い成果を生むことになるでしょう。特に、この'90年代後半から21世紀初年代にかけては（前述の状況からも）、この知恵の源泉としての学会の存在とその役割がますます期待され、かつ、重要なものとなるでしょう。

おわりに、本書の刊行にあたり、ご尽力頂いた役員の方々の努力に対して敬謝の意を表するとともに、'95年というこの機を本学会の充実発展の年にしたいと思います。

また、さらには、本書が、今後のL/R研究や振興に資する資料として本学会員はもちろん、隣接科学や関心のある方々に活用されることを願い、発刊によせる言葉といたします。

目 次

『発刊』によせて	会 長 浅 田 隆 夫	
[I] 歴代理事長による就任時の学会の振り返り		1
学会の発足の頃	(初代理事長 江橋慎四郎)	2
就任時の学会を振り返って	(第2代理事長 浅田 隆夫)	3
共創の学会を期時して	(第3代理事長 高橋 和敏)	4
就任時の学会を振り返って	(第4代理事長 田中 鎮雄)	5
就任時の学会を振り返って	(第5代理事長 黒田 信寛)	6
理事長就任中の学会を考える	(第6代理事長 鈴木 秀雄)	7
[II] 研究懇談会・研究会時代を振り返って	現 会 長 浅 田 隆 夫	8
[III] 学会名称の変更とその組織の変遷について	現 理 事 長 鈴 木 秀 雄	11
[IV] 資 料		
1. 記念講演・特別講演・基調講演・シンポジウム		15
2. 研究会・学会大会における研究(実践)発表		23
3. レジャー・レクリエーション研究(投稿論文・資料)		55
4. 学会大会開催期日・会場及び各大会発表演題数		63
5. 学会歴代事務局		65
6. 会員数の推移		67
7. 学会歴代役員		69
8. 学会会則(規定・内規)の推移		77
9. 学会ニュース(No.1号～No.57号)		103
編集後記	現 理 事 長 鈴 木 秀 雄	216
編集企画・編集委員会		217

[I] 歴代理事長による就任時の学会の振り返り

学会の発足の頃	(初代理事長	江橋慎四郎)
就任時の学会を振り返って	(第2代理事長	浅田 隆夫)
共創の学会を期時して	(第3代理事長	高橋 和敏)
就任時の学会を振り返って	(第4代理事長	田中 鎮雄)
就任時の学会を振り返って	(第5代理事長	黒田 信寛)
理事長就任中の学会を考える	(第6代理事長	鈴木 秀雄)

学会発足の頃

(’71年3月～’80年5月 学会大会1回～9回)

初代理事長 江橋 慎四郎

レクリエーション学会の発足は、昭和46年3月である。それ以前は、研究会として関係者の努力によって研究のつみあげがなされてきたが、研究会の発足後7年目にして、学会の結成をみるに至った。

会員数も約200名余となり、体育学関係者以外の造園学、観光学、家政学、社会学、教育学等の学問領域の研究者も会員として加入していた。しかし、最大の悩みは、レジャー・レクリエーション研究を専門とする研究者の少いこと、すなわち、他の学問領域に籍をおきながらレクリエーション学会員となっている人々が多く、如何にして、レジャー・レクリエーション研究を専門とする研究者を育て、獲得してゆくかが一つの課題であった。

初代の会長は、前川峯雄氏、筆者が理事長ということになったが、学会発足早々の最低限の目標は、会員の研究の場を確保することであり、学会機関紙の発行と、定例研究会の開催として、年1回の学会大会の開催ということであった。また、庶務担当理事には、イリノイ大学の大学院でレクリエーションの専攻をされてきた池田勝氏（現大阪体育大学教授）にお願いし、アメリカでの経験を生かし学会活動の活発化をはかることとした。発足早々の学会が、遅々とした歩みではあるが発展をはかり得たのは、池田氏の企画力、行動力、実行力におうところが大きい。

学会大会の開催については、全国レクリエーション大会と同時に、大会の開催地で開くことにした。アメリカでも、アメリカのレジャー・レクリエーション学会の研究発表大会は、全米レクリエーション公園大会と平行して開催されており、私自身、レクリエーション研究者は、現場、実際の活動の理解を深めることは必須のことであると考え、かつ、レク大会と同時に開催すれば、開催地は事前に分り、会場選定の心配はなく、学会大会開催には、好都合であると考えたからである。

しかし、レク大会との平行開催には、異論がなかった訳ではなく、学会の独自性が失われるという意見もあった。私自身は、レク大会と同時にレク学会大会を開催しても、何等学会の独自性は失われることはなく、また、レク協会から学会に干渉がある訳ではなく、レク協、レク学会が共に大会をもつことによって、相互に補充し、研究者と実践家との相互理解を深め、日本のレクリエーション運動の発展に寄与し得ると考えたからである。現在は、両者は分離して開かれているようであるが、日本のレジャー・レクリエーション関係者の総意を結集する意味でも同時開催が望ましいと考えている。また、研究者は、現場、現実から学び得る機会も多いのではあるまいか。

学会発足早々といえどもやるべきことは多く、研究がすすめば、分化の方向が自然に生れてくる。専門分科会設置の動きもあらわれてきた。筆者は、レクリエーション学会とは至って、専門の研究者は少なく、いわば学際領域の研究者の混合世帯の一面のあることも否定できなかった。従って、専門分科会の設置は、急ぐべきではなく、10年位は、研究は多岐にわたっても、共通の土台の構築に力をそそぐべきではないかと考えていたが、会員の声には枕し難く、専門分科会設置の規程をつくることになってしまった。しかし、筆者は、今でも、レジャー・レクリエーション研究の核は何か、分化とともに統合の方向も大切ではないかと考えている。

就任時の学会を振り返って

(’80年5月～’84年6月 学会大会10回～13回)

第2代理事長 浅田 隆夫

1 研究活動・運営について

(1) この期(’80～’84年)のねらい

思えば、私は、懇談会・研究会時代(7年—’64年～’71年)の基盤づくりはほぼ完了し、当初からほぼ20年を経たこの期に、計らずも理事長を仰せつかったのであった。

私が、まず考えたことは、①この20年を回顧し会員の研究を跡づけること ②研究領域を改にし、専門分野ごとの研究を推進すること ③会員の力を結集して、①②の内容を精査・検討し、継続的な共同作業(「連続シンポジウム」などを含む)を通してこれらの内容を「一本」にし、会員の研究資料に資すること ④このために理事会の業務を活性化し、会員の研究動向を把握すること ⑤「日本学術会議」の登録認可を受けること……などであった。

幸い、’81年3月5日「日本学術会議」の登録認可があり、これによって機関誌の郵送、学術会議会員の推薦などに便宜が与えられることになった。

また、’81年11月には、筑波大学において学会初めての試みとして研究合宿を実施(1泊2日)し、以後、会員の、会員による月例研究会を計画・実施。2ヶ月後の月刊誌「レクリエーション」には、これらの内容を詳述・掲載し、関心のある読者の便に供するよう企図した。

(2) 連続シンポジウムの試み

’82年から’86年にかけて「rec. 学の体系化に関する研究」と題して、rec. 学の研究分野を6つの領域に分け、隔月一領域ごとに数名のスピーカーとコーディネーターを配して「連続シンポ」を実施、また、これを補うために学会大会時にもいずれかの分野をテーマに「シンポ」を行い内容の深化を計った。

私が、この連続シンポを試みたのは、さきにも触れたように、これによって学会の研究が一層高まり、また、過去20ヶ年の研究内容が分野ごとに跡づけられて整理され、しかも、これを学会の事業として会員の有志がとり組めば、きっと rec. 学なるものの対象と方法がより一層鮮明になると考えたからであった。したがって、私は、この連続シンポには最後まで欠かさず出席し内容の検討を計った。この成果は、会員の協力によって『rec. 学の方法』として’87年4月世に問うことになった。

(3) 会員に対する調査

これよりさき、’81年度には「会員の動向と学会に対する要望」といったアンケート調査を実施(年齢・職業・研究分野・研究対象別に集計)した。会員数は500名に達していた。

2 研究内容について

’80年代に入ると、rec. の対象の背後に横たわる条件を明らかにするために因子分析や数量化理論、重回帰分析を試み、数量的に説明しようとする傾向が顕著になり、また、「施設・環境」分野(拙稿、「4)研究会時代を振り返って」表2・参照)の研究では、rec. の環境保全や rec. 資源の有効なスペース・デザインや都市の rec. 空間整備に関する研究の時期を経て、’80年代ではさらにこれらが拡大して景観を計画的に策定していくような研究が顕著になったといえよう。

また、この期以後になると、rec. の意味の拡大とともに、わが国でも漸く週休2日制といったまさにレジャー時代を迎え、経済的豊かさと同相俟って、rec. を行動科学的に解明し、これによって rec. 需要やレジャー・マーケットの方向づけをしようとの意図も強くなり、経済的視点からの分析が目につくようになった。

思うに、これからは数量化がますます進んでくることであろう。数量化は、たしかに、意味づけする際の有力な手段ではあるが、それ以前に、研究者に「rec. とは何か」の認識がなされていなければならない。この認識は至難なことであるだけに、これを補う意味でも先行研究に当ることが望まれる。既研究物のドキュメンテーションが求められるゆえである。さきの「連続シンポ」による成果は、いつに、これを企図したものであった。

共創の学会を期待して

(’84年6月～’88年6月 学会大会14回～17回)

第3代理事長 高橋和敏

共創とは、石川光男先生（ICU教授）の言葉を借用した。すなわち従来までの社会における「競争」パラダイムから、これからは「共創」への転換が必要であるという先生の説に、大いに共鳴するところを感じたからである。

さて、私が学会の理事長職をお受けしたのは、1984年6月であった。それから4年の間職責を果たすのに精一杯であったというのが実感である。1988年6月、一学会員として学会の発展に協力することをお約束し、その後は役職につかなかった。それは、学会の役職にあまり長く携わることは、却って学会の現実を見失うことになりかねないという個人的な懸念があったからである。

ともあれ、学会の運営には会長をはじめ役員の方々の力量によることも大きい。むしろ事務局が重要な役割を果たすものと、現在でも思っている。私の在任中には、幸にも上智大学の師岡先生をはじめ事務局の方々の努力があった。その後、東海大学社会体育研究室に移転し、大学自体の協力も得られた。その点、私は事務局に恵まれ、事務局員の献身的な努力に支えられたことを心から感謝しているところである。

ひるがえってみると、本学会発足当初の学会ニュース（No.2, 1971年6月）に、会員発言として「学会活動への期待」を投稿させて頂いたことがある。その要旨は、4点あった。すなわち ①人間そのものの追求であり、人間不在の学会にはなりたくない ②学会は優れた研究者もいればこれから研究を志す人もいる。したがってこれらの人達の連帯と励まし合いによって学会が成り立つもので在りたい ③学会自体が学会員に対してサービス精神が旺盛であるとともに、学会員の能動的な働き掛けが不可欠であるという認識をもちたい ④学会やそこのレクリエーション研究は、運動体や実践活動と有機的な繋がりをもつ必要がある……ということであった。

学会設立14年目に理事長となり、学会ニュース（No.31, 1985年1月）に「現場を志向した研究を」をテーマにご挨拶をした。その中では、①本学会が、さまざまな分野の専門家の集まりであり学際的である特徴を十分生かし、相互の協力と理解のもとに、学会活動を推進したい ②レジャー・レクリエーションの問題は、常に現場の実践が伴う。その研究も当然その線上に在るべきであろう。しかし基礎研究などは、直接現場につながらないこともあり得るが、人間の幸福とレクリエーション運動の発展を志向し、フィードバックさせるような研究活動の展開が望まれる……という趣旨を記して挨拶に替えた。

これらの願いが、どの程度かなったかは、ほんとうのところ分からない。しかし、その願いは現在でも変わっていない。一般的にみて学会は往々にしてボスを生み出しやすい。しかし学会活動はヨコの連帯が基本である。それが活発であればある程、活性化されるものと思われる。とくに研究活動については、いわゆるシニア研究者は質の高い研究を目指すと同時に、相互協力によってより高いものを求め、さらに将来を担うジュニア研究者を励まし、その育成に力を注ぐべきものとする。また、レジャー・レクリエーションの研究分野でも最近とくに「So what?」が厳しく求められる時代となってきた。この問いに応えるには、本学会員一人一人が、共に創りあげる意識をもちながら、それに基づいた研究活動を、地道に続けることが極めて重要なのであろう。期待して稿を終えたい。

理事長在任時の学会を振り返って

(’88年6月～’92年6月 学会大会18回～21回)

第4代理事長 田中 鎮雄

1988年からの4か年は、浅田会長時代の幕明け期であった。江橋会長から浅田会長にバトンタッチされただけではない。従来からの日本レクリエーション協会と日本レクリエーション学会との緊密な協調体制から脱出して日本レクリエーション学会を独立させ、いわゆる浅田会長体制を確立していく過程であったとみてよい。表面的には新旧会長の交代にすぎないが、日本レクリエーション学会にとっては、正に激動期突入を意味するものであった。江橋前会長は、日本レクリエーション協会のレジャー・レクリエーション研究所長として引続き活動される形をとったので、同所長について移籍していった会員も少なくなかった様である。日本レクリエーション学会と日本レクリエーション協会との分離独立が、果して賢明な策であったかどうかは、わが国のレクリエーション運動史家、ないしはレジャー・レクリエーション学会史の研究者に評価を託したいと考えている。

日本レクリエーション学会との個人的な係わりについてみれば、理事長就任までの何年間かは、多くの学会員を入会させ、学会大会では数多くの研究発表をさせて来た。学会の活性化に貢献大であると認められたのも事実である。やがて理事としての職務を遂行し、理事長職を拜命して学会の発展のため、微力ながら渾身の力を振り絞って努力したことはいうまでもない。浅田会長はもちろんのこと、役員の方々も学会の発展を願って知恵を出し合い、力を尽くして頑張って下さった。「それにも拘らず」と申し上げたい。学会の中心事業である「レクリエーション研究」普通号発行が遅滞し、学術会議登録団体の資格を喪失するなど、信じられないような失態を演じてしまったのである。会員の皆様には申し訳なく、全く弁解の余地がない。

「レクリエーション研究」普通号の遅れについては、常任理事会で再三対策を論議し、然るべき手を打ったのであるが、結果は周知の通りであった。この件に関しては、第22号の「レクリエーション研究」(92年7月)の編集後記で会員に陳謝して次のように述べている。

会員の皆様……、特に投稿いただきました方々には大変ご迷惑をおかけいたしました本号は、本来1990年前期に発刊されているべき号であり、丸2年の遅れとなってしまいました。これは一重に編集委員会の怠惰が招いた結果であり、深く反省し、一刻も早く遅れを取り戻すよう尽力する……所存でありますので、ご寛恕願えれば幸いです、……既に23号と25号とが「レクリエーション研究」の名称で発刊されていることから、本22号および次回24号は旧名称で発刊させていただくことにいたします。

云々……。

学術会議登録団体の資格喪失問題は、学会の存立にかかわる重大な問題であり、一事務局の失態ですまされる問題では勿論ない。学会総会で会長が陳謝し、理事長が事実の経緯を詳細に説明し、固い決意を秘めて深謝したのであった。理事長職を退いてからは学会に参加していない。このため現状は不明であるが、苦い体験を踏まえて、次のように提言するのをお許し願いたい。(一)理事長は事務局と同じ機関に所属していること。(二)東京または関東の支部組織を育て、支部選出理事制度を確立すること。

新しいレジャー時代を迎え、J.L.R.学会の益々の発展を心から願って擱筆したい。

就任時の学会を振り返って

(’92年6月～’94年3月 学会大会22回～23回)

第5代理事長 黒田 信 寛

’92年、6月の総会で役員改選がおこなわれ、田中理事長の後任として、私が新理事長に押された。その任にあらずと一度はお断りしたが、理事会の互選だからと留意され、新理事の先生方も協力するから是非にということでその場はやむなく一期という条件で理事長という大任をお引き受けすることになった。お引き受けしてみると、学会運営の責任の重大さを痛感し果たして大過なく運営して行けるかどうか非常に不安になった。振り返って見ると就任前の当時の学会は非常に困難な危機的状況下にあったといえる。事務局の交代による事務不慣れのため学術会議への書類提出のおくれにより学術会議登録団体の無効、学会機関紙レクリエーション研究の発行のおくれ、学術刊行物の郵送手続をとらなかつたための郵送費の増大、又学会費未納者も非常に多く特に財政上は厳しいものがあつた。上記のような状況下で青山学院大学から聖学院短期大学に事務局も移り、新理事会が発足し、次の様なことに鋭意取り組んだ。

1. 財政の立て直し。先ず会費の徴収を良くするために、会員の確認、名簿の整備に着手し事務局の大変な御努力により92年6月に会員名簿を発行することができた。これにともない会費未納者への再三の督促により会費の徴収も漸次よくなつてきた。又会員諸君の努力により新入会員の入会も逐次増えてきた。然し学会の財政は如何ともし難く、各支部にお願いして支部援助金を当分の間打ち切つてを御諒解いただいた。財政立ち直しの一環とはいえ支部活動の根源である支部援助金を割愛していただいたことは非常に心苦しいものがあつた。
2. 学会誌の発行は、会員からの論文がなかなか集まらず遅延ぎみであつたが編集部の御努力と会員の御協力により学術団体登録までに何とか遅延の解消にこぎつけることが出来た。
3. 日本学術会議登録団体の登録申請については、93年3月に小委員会を作り準備を整え4月下旬申請、9月に登録団体として正式に認められ、会員の皆様に対して責務の一端を果たしほつとした思いであつた。深山氏の文部省の折衝など、その労を名としたい。
4. 学会大会開催については、日本レク協会から独立分離して学会の独自性を確立して行くことは、数年に亘り大きな検討課題であつたが、学会大会への本部からの援助金はわずか20万であり、その他の必要経費は、参加費、広告料、当該大学からの助成金等で賄わなければならない苦しい綱渡りの運営を強いられていた状況下で会場校を探するのはなかなか困難であつた。20回大会（明治大学）からやっと自前の学会大会を持つことが出来るようになった。在任中の大会であつた22回大会（立教大学）は大学の御理解と石井允氏の御尽力により、立教大学で開催することが出来た。当大会に対しては本部事務局から大会援助金は支出しておらず、大会運営にあつては大会事務局は並大抵の御苦勞ではなかつたと思われる。本部からは赤字分38,595円を負担したに過ぎなかつた。学会大会の反省をふまえて、次期大会からは大会援助費は次期会場の決定次第早期に渡すように決定した。23回大会は山市氏の御儘力により埼玉大学で無事開催出来たことに感謝している。在任2年間で振り返ると、事務局は献身的によくやり会の運営を支えてくれたが、後半には理事会と事務局の間の多少の行き違いから事務の停滞なども多々出て来、意志の疎通の難しさを改めて痛感しているところである。最後に在任中の理事諸氏の御協力と事務局の御苦勞に対して心から感謝いたします。

理事長就任中の学会を考える

('94年4月～ 学会大会第24回～)

第6代理事長 鈴木 秀雄
(現理事長)

本学会は、前身である、懇親会、研究会、レクリエーション学会から、日本レジャー・レクリエーション学会へと時代と共にその名称や果たすべき役割も変化させつつ現在に至っている。多くの先人のご苦勞とその努力の延長線上に現在の学会が存在していることは論を待たない。この『日本レジャー・レクリエーション学会の歩み—1964～1995—』の中で歴代の理事長にあたる諸先輩方が就任時を振り返り学会の歴史を語られているので、現理事長として紙幅の関係からも、現在学会が抱える諸課題に対しての取り組みや今後改革すべきであろう事柄など、学会そのもの、そして学会運営について考えてみたい。

★学会が抱える諸課題

長年の懸案は、“会員の獲得・会員数の拡大”をどうしていくかという問題である。また会員に対するサービスの充実については、学会として何をすべきかという本来の目的の再確認をすべきだし、それによって入会者を増やすことができるのである。学会誌の定期刊行や学会大会の充実など会員サービスの向上をはかるためにも会費の徴収方法などの検討によりその納入率を高め、しっかりした学会の基礎財源の確保に基づく会員サービスが必要不可欠となる。

またレジャー・レクリエーションという広い概念の中で“研究活動と実践研究（活動）の融合及び活性化”をどう図っていくか、加えて外部機関からの多分野に及ぶ委託研究（プロジェクト）の獲得も学会の更なる発展に対して努力していかなければならない重要な課題である。何にも増して学会を効率的に運営していくためには“学会事務局の機能強化と共に強いリーダーシップが発揮できうる学会役員の民主的な選出方法の確立”をしていかなければならない。

★課題解決に対する現在の動き（対応）

本年（1995年）の第25回学会記念大会を期に研究発表と共に実践研究（活動）の発表に伴う研究と実践の融合による実践家と研究者の相互交流の活性化を試みたが、多岐にわたる演題の発表があり幸先の良いスタートとなった。この融合と活性化のために、さらに工夫を凝らし活動・実践を伴う分野・領域を扱う学会としての使命を果たし、市民活動への影響力も増していく学会へと発展していかなければならない。学会の歴史的なまとめ及び学会25周年の視点からは『日本レジャー・レクリエーション学会の歩み“1964～1995”～』の刊行を計画したが、学会そのものの存在や内容を詳細につかみ、今後の方向性を会員それぞれが積極的に見いだしていくためにも必要と考えたものである。

設置が二度目となる役員候補者選考委員会と共に、次期の役員選出に向けて役員選挙規程検討委員会を設置したが、通例の選挙で事足りるというのではなく、事務局機能との連携や、会長、理事長、事務局長、の人選も含めた総合的な選挙制度を作り上げる必要があり、そのような視座で役員選挙規程検討委員会は審議を深めている。大会開催地の市民参加の奨励については第24回大会に実現し、記念大会においても開催地である小田原市文化交流課を窓口として積極的な市民参加を求めている。財務委員会による会費納入制度については銀行口座より自動引き落とし等による会費納入の検討も進めているところである。複雑で複合的な課題に対しては、総務、財務、研究企画、編集、広報の各専門委員長及び理事長と事務局長とで構成されている特別委員会が設置されているので十分な審議をしていきたい。理事長が果たす役割は情熱を持って学会を運営し、方向性を見失うことなく強いリーダーシップを発揮すべきものと信じている。

多くの課題解決を必要とする今、会員の皆様のご協力とご理解、そして積極的なご支援を切にお願いしたい。学会のため、現役員による地道な活動を今後も継続していきたいと思う。

〔Ⅱ〕 研究懇談会・研究会時代を振り返って

会長 浅田 隆夫

この世に「存在するもの」の本質はすべて、その「もの」の発生ないし成立の契機を問うことによって明らかになる。この意味で、まず、この点に触れることにしたい。

1 創設の契機

今日の日本レジャーレクリエーション学会創設の発端は、昭和39年3月のレクリエーション（以下 rec. と略記）研究懇談会の設立に始まる。

この rec. 懇談会が発足するには、それなりの理由があった。早くも昭和28年には日本体育学会でも、前川峯雄氏・竹之下休蔵氏・塩谷宗雄氏（いずれも故人）等をチーフとする「健康と能率よりみた社会体育の改善に関する研究」が平塚市の農年部を中心に一連の研究（文部省科研費による調査・測定）として3カ年計画で行われ（その結果の一部は昭和33年11月日本体育学会第9回大会で発表 ― 筆者）、他方、28年から前川峯雄氏を中心に「コミュニティ rec. の基礎的研究」と称する一連の研究が山梨県増穂町を皮切りに、毎年対象町村を代えて調査が行われ、日本体育学会でも毎年継続的に数名の発表者によって発表がなされていた。

一方、昭和30年代後半から rec. の概説書の訳出本が相次ぎ、また、雑誌「体育の科学」や「学校体育」をはじめ他の諸雑誌にも rec.（社会体育等の名称でも）の現状や課題、諸外国の rec. 研究の動向などの記事がみられるようになり、昭和34年には雑誌「レクリエーション」も発刊されるようになった。このような背景の中で、先の rec. 懇談会が発足したのであった。

この懇談会は、研究会の構想が固まれば、いち早く研究会を発足させる。入会は、原則として懇談会のメンバー、または既に入会した会員の推薦により入会するものとし、責任ある活動を展開するようにする。研究部門は、原理・方法・指導法・管理・施設などに分け、発表会や協議会、調査活動を行い、特に、現場の希求する問題に 대응していくようにする。さらに、研究会の基礎が固まれば、内容・規模を拡大して学会へと発展させ多彩な活動に入っていく。他方、rec. を生きた生活文化の中心的なものとして根づかせるために、若い研究者の活躍を促すとともに、その一助として機会あるごとに外国研修の場を提供すること……など、学会のあるべき姿を描き、そこへ向って鋭意研鑽すべく昭和39年3月より月例会がもたれた。テーマは rec. とは何か、rec. 研究会や学会の構想について、本年度の rec. 研究の課題、rec. の対象と研究方法……など、今日でもそのまま学会で問題となる研究の基礎的内容についてであった。いつも10～15名の参加者があり、これらの人達は、いつの日か rec. を「学」として理論化したいとの夢を抱いていたのであった。

2 研究会の設立とその研究内容

(1) 研究会の設立

懇談会は、1年後の昭和40年3月、日本 rec. 研究会へと活動を拡大した。

設立に当たっては、懇談会のメンバーをそのまま研究会設立の発起人（表1参照）とし、趣意書と会則を掲げ、

各方面からの熱心な会員の加入を訴えた。設立趣意書(表2)にみられるように、研究会は、発足の当初から現場の rec. 問題を理論的科学的に解明し、それを實際生活に生かしていこうとの旺盛な意欲から生まれたものであった。

(2) その研究内容

研究内容は、機関誌によるもの(研究会当時は未刊)と研究大会時の発表集録とに分けられるが、研究会当時の研究内容とそれ以後の時代の研究内容とを比較するには、上述の理由により、大会発表時の内容だけに依存せざるを得ない。

試みに、研究会当時の研究大会1~6回(昭和40~45年)をI期とし、それ以後の学会大会を5年おきに区切り、1~5回(昭和46年~50年)をII期、6~10回(昭和51~55年)をIII期、IV期を11~15回(昭和56~60年)とし、かつ、研究会発足時から20年間の研究発表の内容をテーマ別に10の内容領域に区分し、各期の発表数の割合を示すと、表3のようになる。

これとみると、20年を通して関心のある研究領域は、「意識・行動」領域34.0%(以下、()内は%)であり、次いで「教育・指導」(21.9)、「歴史・原論」(15.1)、「施設・環境」(10.1)となっている。

次に、この4領域を中心にI期とII期以降を比較すると、「意識・行動」分野はI~IV期を通じて関心が高く(44.2, 37.3, 30.0, 26.1……上から順にI・II・III・IV期、以下同じ)、「教育・指導」分野は各期を通じて2割程度(21.1, 26.4, 18.0, 21.2)の関心となっている。

また、1割以上の関心のみられる領域には、「施設・環境」分野にIII期(15.0)、IV期(13.5)が、「セラピー」に関する分野にはII期(13.6)があげられるに過ぎない。

各期ごとの傾向では、I期は「意識・行動」(44.2)、「歴史・原論」(27.3)、「教育・指導」(21.1)、II期では「意識・行動」(37.3)、「教育・指導」(26.4)、そして、III・IV期ともこの2分野についてはほぼII期と同じ傾向といえるが、II期では「セラピー」に、III・IV期では「施設・環境」の分野に比較的関心があるといえよう。

表1 日本レクリエーション研究会発起人

(五十音順, ○印世話人)

日本レクリエーション協会総裁	三笠宮崇仁
東京教育大学講師	浅田隆夫
○日本レクリエーション協会専務理事	小川長治郎
文部省社会教育審議会委員	寒河江善秋
東京工業大学教授	塩谷宗雄
文部省社会教育官	高橋真照
東京YWCA幹事	竹内菊枝
○東京教育大学教授	竹之下休蔵
東京学芸大学助教授	田村喜代
東京教育大学助教授	長島貞夫
経済企画庁専門職	林実
大妻女子大学助教授	前川当子
○東京教育大学教授	前川峯雄
日本レクリエーション協会会長	町田辰次郎
○日本消費者協会理事	山崎進

表2 日本レクリエーション研究会設立趣意書

現代社会における機械文明の急激な発達には、われわれに多くの便宜をあたえてくれているが、反面人間の生活をおびやかしつつあります。このようなときに、人間能力の開発と人間疎外を防止するためのレクリエーションが、われわれの生活の中で重要視され、認識が高まってきたことは周知のとおりであります。

しかしながらレクリエーションに関する科学的研究は遅々として発展をみない現状であります。この研究は緊急の問題として、各方面から強く要望されております。このときにあたり「日本レクリエーション研究会」を設立し、レクリエーションに関する科学的な研究活動をととしてレクリエーションの発展と推進に寄与するとともに、会員相互の親睦を深めたいと考えています。

表3 過去20年間の研究発表数と内容

(テーマと発表者の主要な研究分野とによって、10の内容領域のいずれか1つに割り当てたもの)

内容領域 回数(研究・学会名 および年度)	1 歴史 原論 に関するもの	2 意識 行動 に関するもの	3 教育 指導 に関するもの	4 集団 組織 に関するもの	5 指導者 に関するもの	6 施設 環境 に関するもの	7 健康 に関するもの	8 セラピー に関するもの	9 研究方法 測定 に関するもの	10 レクリエーション 運動 に関するもの	計
I 期 昭和40～45年 研究会 1～6	19 7 26 (27.37)	27 15 42 (44.21)	12 8 20 (21.05)	2 (2.11)		4 (4.21)				1 (1.05)	(95)
II 期 昭和46～50年 学会 1～5	8 3 11 (10.00)	21 20 41 (37.27)	22 7 29 (26.36)	2 (1.82)	2 (1.82)	8 (7.27)		15 (13.64)	1 (0.09)	1 (0.09)	(110)
III 期 昭和51～55年 学会 6～10	11 5 16 (16.00)	13 17 30 (30.00)	9 9 18 (18.00)	1 (1.00)	10 (10.00)	15 (15.00)	3 (3.00)	3 (3.00)	2 2 4 (4.00)		(100)
IV 期 昭和56～60年 学会 11～15	9 2 11 (9.24)	19 12 31 (26.05)	23 3 26 (21.18)	3 (2.52)	7 (5.88)	16 (13.45)	3 (2.52)	10 (8.40)	6 4 10 (8.40)	2 (1.68)	(119)
計	64 (15.09)	144 (33.96)	93 (21.93)	8 (4.88)	19 (4.48)	43 (10.14)	6 (1.41)	28 (6.60)	15 (3.53)	4 (0.94)	合計 (424)

(3) まとめ

研究会時代は、漸く rec. 問題がマス・レジャーへの動きの中で国民の間に積極的にとりあげられるようになったこともあって、先進諸国の実情や紹介に触れたり、rec. とおぼしき対象に対して、何が、いつ、どこで、どのようにみられるかの実態を、性・年齢などの属性や社会経済的変数をもとに、平均や相関係数によって検討・記述していった rec. 研究の過渡期といえるであろう。

要するに、懇談会に続くこの6年間は、発起人を中心に学会への夢を描きながら、そこへ向って自らが卒先して継続的に研究発表し、「rec. とは何か」を世に問うてきた時代であった。

〔Ⅲ〕学会名称の変更とその組織の変遷について

理事長 鈴木秀雄

(関東学院大学法学部教授)

本学会は、多くの先人の努力により、前身である、懇親会、研究会、レクリエーション学会から、日本レジャー・レクリエーション学会へと時代と共にその名称や果たすべき役割も変化させつつ現在に至っている。会の発足から現在の日本レジャー・レクリエーション学会に至るまでの学会名称の変更とその組織の変遷について内外の資料の精査と共に、関係者に対する歴史を縮く貴重なインタビューを通して得た内容の検討によりその概要を述べる：

(1) レクリエーション研究懇談会（1964年（昭和39）年3月10日）の発足

レクリエーション運動の推進団体としては日本厚生協会（1938年）が組織され戦後に日本厚生運動連合となり、その後日本レクリエーション協議会と改称し、現在の財団法人日本レクリエーション協会（略称 NRAJ）があるが、これらの運動体の推進には学会にも関係した白山源三郎氏（NRAJ 初代専務理事、関東学院大学初代学長）や三隅達郎氏（前日本キャンプ協会会長）があげられるが、一方レクリエーションの研究の動向が盛んに見え始めたことをきっかけに、小川長治郎氏（昭和38年日本レクリエーション協会専務理事就任）や前川峯雄氏（東京教育大学教授）らが中心に、学術的な研究推進団体としてレクリエーション研究懇談会を創設

(2) 日本レクリエーション研究会（1965（昭和40）年3月9日）の発足

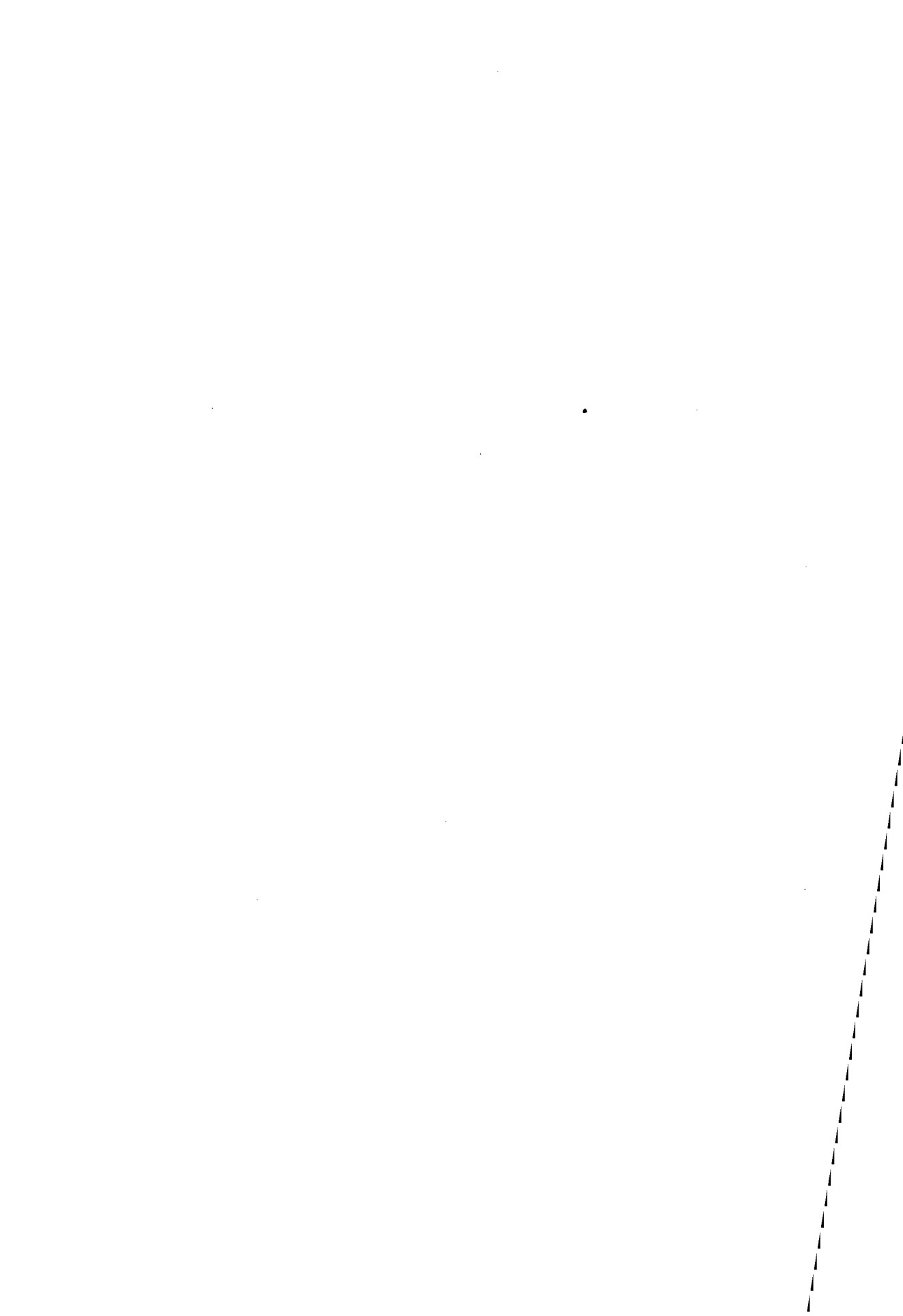
現場のレクリエーション問題を科学的・論理的に解明し、それらを実生活の中に反映させ、生かしていこうという視点、また組織的な研究活動を推進するために各方面からの会員の参加を求め、前身である懇談会15名のメンバーによる発起人総会を開催し、日本レクリエーション研究会を設立

(3) 日本レクリエーション学会（1971（昭和46）年3月21日）の発足

研究会時代の6年間（足掛け7年）には、各研究大会で1965年に12題、1966年15題、1967年15題、1968年23題、1969年15題、1970年の10題、そして1971年には4題の研究論文及び調査報告1題が旧研究会誌「レクリエーション研究」（第6・7合併号）に発表されるなど、定期的で確かな発表がなされると共に、会員数の増大、研究領域の具体化等、研究活動推進の形態も整ってきたことにより、日本レクリエーション研究会を発展的に解消し、日本レクリエーション学会を設立

(4) 日本レジャー・レクリエーション学会（1991（平成3）年11月10日）への改称

第18回日本レクリエーション学会（1988年8月22日）が北海道函館市の新装なったハーバービューホテルで開催され、この時のシンポジウムのメインテーマは「レクリエーション研究の今日的課題」であった。この折に学会名称についても論議され、既に、欧文名称にも Leisure という語が組み込まれており、規約の整備と共に外国人研究者にも開かれた学会とするためにも欧文名も Japanese から Japan と統一することし、Japan Society of Leisure and Recreation Studies（略称：JSLRS）とすることを含め、その後の数次の常任理事会、理事会の論議を経て、第21回学会大会（1991年11月9日～10日、於：名古屋市中区、朝日会館）の総会において名称変更の議案が上程され、会員からの承認を受け、現在の日本レジャー・レクリエーション学会へと改称し、本年9月23日（土）・24日（日）の両日にわたり研究発表（23題）と実践報告（21題）を含め記念講演、基調講演、そしてシンポジウムが計画され、第25回記念学会大会として関東学院大学法学部小田原校舎での開催に至っている。



[IV] 資 料

1. 記念講演・特別講演・調講演・シンポジウム ……15
2. 研究会・学会大会における研究（実践）発表 ……23
3. レジャー・レクリエーション研究（投稿論文・資料）…55
4. 学会大会開催期日・会場及び各発表演題数 ……63
5. 学会歴代事務局 ……65
6. 会員数の推移 ……67
7. 学会歴代役員 ……69
8. 学会会則（規定・内規）の推移 ……77
9. 学会ニュース（No.1号～No.57号） ……104

1. 記念講演・特別講演・基調講演・シンポジウム

(p. 16～22)

資料(1) 記念講演・特別講演・基調講演, シンポジウム

《第4回研究大会》 -1968年-

1. 日本におけるレクリエーションのビジョン
小川長治郎 (日本レクリエーション研究会理事)
巻 正 平 (日本レクリエーション研究会理事)
林 実 (日本レクリエーション研究会理事)
司会 - 前川 嶋雄 (日本レクリエーション研究会会長)

《第5回研究大会》 -1969年-

1. レクリエーション研究の方向と課題
(1) わが国におけるレクリエーション研究の動向
団 琢磨 (島 根 大 学)
(2) レクリエーション研究の独自性
北森 義明 (順 天 堂 大 学)
(3) 研究会の動行と今後のあり方
林 寿彦 (国 際 青 少 年 協 会)

《第1回学会大会》 -1971年-

1. 職場生活とレクリエーション活動についての研究
— 特に公務員のレジャー生活の現状と問題点 —
秋吉 嘉範 (九 州 大 学)

《第2回学会大会》 -1972年-

1. 都市化する社会における地域レクリエーションの発展のために
— 地域住民の生活と意識構造 —
(1) 地域住民意識に基づいた組織(クラブ)作り
会田昭一郎 (国民生活センター)
(2) 公営体育施設(体育館)の利用実態から見た地域住民のレクリエーション意識と生活構造
三原 忠雄 (府中市教育委員会)
(3) 都市化地域における生活の変容とレクリエーション意識
齊藤 定雄 (順 天 堂 大 学)

《第3回学会大会》 -1973年-

1. レクリエーション行政の基本的方向
福士 昌寿

(シンポジウム)

テーマ「週休2日制と職場レクリエーション」

1. 日本産業構造の変化とレクリエーション
中条 毅
2. 生きがいを作り出すレクリエーション
足立 克己

《第4回学会大会》 -1974年-

1. レジャーの将来性について
鈴木 広 (九 州 大 学)

《第6回学会大会》 -1976年-

1. 秋田風土とレクリエーション
工藤 英三 (秋 田 大 学)

《第7回学会大会》 -1977年-

1. 富山の風土とレクリエーション
稲垣 保彦 (富 山 大 学)

《第8回学会大会》 -1978年-

1. アメリカにおける最近のレジャー動向, 公共レクリエーション行政システム, 大学における指導者養成の現状について
ジョン E. シェロー博士
(マサチューセッツ大学準教授)

《第9回学会大会》 -1979年-

1. 現代社会における余暇利用度の研究
金 命祚 (国 立 釜 山 大 学)

《第10回学会大会》 -1980年-

1. 野外レクリエーションと自然保護
ジョン・J・カーク 博士 (モントクレア大学教授)
2. 1980年代の動向
(1) 80年代のレクリエーション
前川 峯雄 (東 京 教 育 大 学)
(2) 体力作りの発想の転換からレクの発想の転換へ
塩谷 宗雄 (東 海 大 学)
(3) 問題提起
三隅 達郎 (関 東 学 院 大 学)

《第11回学会大会》 -1981年-

1. 専門分野別連続シンポジウム

(テーマ) わが国野外レクリエーションの現状と課題

(パネラー) 進士五十八 (東京農業大学)

中田総一郎 (財・日本交通公社)

有賀 一郎 (株・サンコー・コンサルタント)

麻生 恵 (東京農業大学)

毛塚 宏 (株・ラック計画研究所)

宮林 茂幸 (東京農業大学)

(司会) 前野淳一郎 (株・スペース・コンサルタント)

千葉大学

(テーマ) レクリエーション・プログラムの開発

(パネラー) 宮下 桂治 (順天堂大学)

安原 輝雄 (習志野レクリエーション研究会)

鈴木 秀雄 (関東学院大学)

(司会) 北森 義明 (順天堂大学)

《第12回学会大会》 -1982年-

• 講演ライブ・サイクルとレジャー・レクリエーション
~中高年の余暇問題を含めて~

ジョン・R・ケリー (米国イリノイ大学)

• 専門分野シンポジウム (政策研究分野)

「シニア・エイジのレクリエーション行政とその展開」

浅田 隆夫 (筑波大学)

秋吉 嘉範 (福岡教育大学)

諫山 秋利 (大分県立総合体育館)

木下 茂徳 (日本大学)

金崎 良三 (九州大学)

• 講演『レジャー・カウンセリングについて』

ピーター・A・ウィット (ノース・テキサス州大学)

田中 祥子

訳 池田 勝

• 連続シンポジウム

「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究」

(1) レクリエーション学の体系化の方法と戦略

話題提供者 鈴木 忠義 (東京農業大学)

コーディネーター 進士五十八 (東京農業大学)

報告者 麻生 恵 (東京農業大学)

(2) レクリエーション学の対象と方法

話題提供者 西野 仁 (東海大学)

山崎 進 (相模女子大学)

前野淳一郎 (千葉大学)

コーディネーター 今井 毅 (日本体育大学)

報告者 石橋 宏宜 (日本体育大学)

(3) レクリエーション原論を中心として

話題提供者 川村 英男 (体育学研究家大学)

近藤 英男 (近畿大学)

浅田 隆夫 (筑波大学)

コーディネーター 蕪木 隆 (電気通信学園)

《第13回学会大会》 -1983年-

• 専門分野シンポジウム (政策研究分野)

「現代社会におけるレクリエーション概念の再検討

~我が国のレクリエーション研究史からの問いかけ~」

コーディネーター 小田切毅一 (奈良女子大学)

パネリスト 藺田 碩哉 (日本レクリエーション協会)

仲村 要 (同志社大学)

影山 健 (愛知教育大学)

西野 仁 (東海大学)

• 講演『アメリカにおける野外教育・野外レクリエーションの現状』

ウィリアム・B・ニーボス

訳 田中 祥子

• 連続シンポジウム

『わが国におけるレクリエーション学体系化に関する研究』

(4) レクリエーション資源、レクリエーション空間
を中心として

鈴木 忠義 (東京農業大学)

杉尾 邦江 (ブラック研究所)

涌井 史郎 (石勝エクステリア)

前田 豪 (ラック計画研究所)

進士五十八 (東京農業大学)

報告 麻生 恵 (東京農業大学)

(5) レクリエーション行動, レクリエーション指導
を中心として

今村 浩明 (千葉大学)
大堀 孝雄 (東海大学)
千葉 和夫 (日本レクリエーション協会)
松原 洋三 (立教大学)
報告 松原 祥三 (立教大学)

(6) レクリエーション学教育を中心として

藤本祐次郎 (日本体育大学)
高橋 和敏 (東海大学)
田中 祥子 (津田塾大学)
松浦三代子 (東京女子体育大学)
報告 松浦三代子 (東京女子体育大学)

(7) レクリエーション政策を中心として

小林 秀夫 (長岡市レクリエーション
課元課長 現広報課長)
半田真理子 (経済企画庁国民生活政
策課 課長補佐)
長田嶮玖郎 (東京生活文化局観光
レクリエーション課 課長)
今井 毅 (日本体育大学)

《第14回学会大会》 - 1984年 -

- 講演『これからのレクリエーション研究について』
江橋慎四郎 (鹿屋体育大学)
- 専門分野別シンポジウム (行動研究分野)
『余暇行動研究の動向と今後の方向
～特に研究の方法論について～』
コーディネーター 西野 仁 (東海大学)
パネリスト 原田 宗彦 (ペンシルバニア州立院)
山口 泰雄 (鹿屋体育大学)
川西 正志 (中京大学)
- シンポジウム
- (1) 『関連学会から見たレクリエーション研究の視
点』
パネリスト 除野 信道 (上智大学)
古田 勝彦 (社会工学研究所)
白石 克己 (玉川大学)

田畑 貞寿 (千葉大学)
コーディネーター 池田 勝 (鹿屋体育大学)
報告 芳賀 健治 (東京家政学院大学)

- (2) レクリエーション学研究の対象と課題
パネリスト 高橋 和敏 (東海大学)
西野 仁 (東海大学)
コーディネーター 渡辺 貴介 (東京工業大学)
報告 西野 仁 (東海大学)

《第15回学会大会》 - 1985年 -

- 実践報告 地球社会でレク文化の定着をめざして
- シンポジウム 丸山 正 (八王子市レクリエーション協会事務局長)
『地域文化とレクリエーション』
司会 田畑 貞寿 (千葉大学)
パネリスト 足立 省三 (中日新聞論説委員大学)
鈴木 忠義 (東京農業大学教授)
田中 祥子 (津田塾大学教授)
川村 英男 (本学会東海支部長)

(講演)

- レクリエーションとしてのフィットネスプログラム
Charles E. Hartsoe
訳 原田 宗彦
- アメリカにおけるレクリエーションスペース計画の
動向
Leslie M. Reid
訳 諸風 裕

《第16回学会大会》 - 1986年 -

- 講演
北米におけるレジャー・レクリエーションの動向
Dr. コー・ウェストランド (前オタワ大学教授)
原田 宗彦
訳 山口 泰雄
- 特別研究発表
沖縄の生活とレクリエーション
～伝統芸能とマリンスポーツ～
金城 光子 (琉球大学教授)
- 公園とレクリエーション

～その方法と未来像～

第1部 現場報告

コーディネーター

毛利 宏

瀬下 明

小須田 伸

出淵 顕

岸 達男

木下 勇

第2部 パネルディスカッション

コーディネーター

藺田 碩哉

伊達 建夫

高橋 效

西野 仁

林 耀子

蓑茂寿太郎

報告 麻生 恵

《第17回学会大会》 - 1987年 -

特別講演

「レジャー・レクリエーション研究の明日」

Dr.J.BANNON (イリノイ大学教授)

・シンポジウム

《第18回学会大会》 - 1988年 -

シンポジウム ▶ テーマ ◀

レクリエーション研究の今日的課題

S-1 日本人のレクリエーション行動の現状と
解析

松田 義幸 (筑波大学)

S-1 比軽文化論的見地からみたレジャー・レ
クリエーション

村山 紀昭 (北海道教育大学)

S-1 これからのレクリエーション研究・政策
の課題

荒井 貞光 (広島大学)

総合司会

鈴木 秀雄 (関東学院大学)

《第19回学会大会》 - 1989年 -

○総合テーマ

「魅力あるレクリエーション行動に向けて」

○基調講演

「人間にとって遊びとは何か、そして今」

～比較生活文化の視点から～

原子 令三 (明治大学教授)

○シンポジウム

「人間にとって遊びとは何か」

・地域生活文化の立場から

岡部定一郎 (東洋開発㈱取締役企画部長)

・企業レクリエーションの立場から

石川 文雄 (日本アイ・ビー・エム㈱人事厚生次長)

・ディベロッパーの立場から

藤 賢一 (福岡地所㈱常務取締役営業本部長)

・司会

秋吉 嘉範 (福岡教育大学)

(日本レクリエーション学会監事)

《第20回学会大会》 - 1990年 -

○大会テーマ

『生涯学習時代のレジャー・レクリエーション』

○基調講演

『生活文化としてのレジャー・レクリエーション』

講師 小塩 節 (中央大学教授)

司会 徳久 球雄 (青山学院大学教授・学会常任理事)

○シンポジウム

『学習社会におけるレジャー・レクリエーション』

パネラー 稲垣 良典 (九州大学教授)

佐藤 敏夫 (東京神学大学教授)

野中ともよ (中京女子大学客員教授)

司会 松田 義幸 (筑波大学助教授・学会常任理事)

《第21回学会大会》 - 1991年 -

○大会テーマ

『人生80年時代のレジャー・レクリエーション』

○基調講演

『豊かな時代を創るために』

— 70万時間の人間化 —

加藤 雅（経済企画庁国民生活局局长）

○シンポジウム

『現代レジャー・レクリエーションの直面する課題』

1. 村おこし、町おこし

山崎 充（静岡県立大学教授）

2. リゾート開発

辻 醇（名鉄総合企画取締役）

下村 彰男（東京大学農学部助手）

3. 福祉・教育

大田 弘子（生命保険センター・研究員）

≪第22回学会大会≫ -1992年-

大会テーマ

『レジャー・レクリエーションと環境』

統括・記念講演

『新・日本人の余暇』

青木 利夫（文教大学教授）

シンポジウム

【第1シンポジウム】

テーマ『レジャー・レクリエーションにとって
望ましい社会環境を探る』

パネリスト

川上 和久（明治学院大学助教授）

嵯峨 寿（余暇開発センター研究員）

佐々木 享（トヨタ自動車事業開発部部長）

林 裕三（日本体育施設運営協会会長）

司 会

松田 義幸（筑波大学・多摩大学客員教授）

【第2シンポジウム】

テーマ『地球・自然環境との調和あるレジャー・
レクリエーションのあり方を探る』

パネリスト

糸賀 黎（筑波大学大学院環境科学研究科教授）

西田不二夫（㈱ブレック研究所専務取締役）

井上 忠佳（建設省建築総合研究所研究員）

油井 正昭（千葉大学園芸学部助教授）

コメンティーター

永嶋 正信（東京農業大学教授）

下村 彰男（東京大学農学部助手）

総 括

進士五十八（東京農業大学教授）

司 会

杉尾 邦江（㈱ブレック研究所専務取締役）

第1シンポジウムの課題とパネリスト

1) 第1の問題について

『7カ国L/R活動選考調査』から、日本人のL/R享受能力が低く、また加齢につれて、なぜL/Rに消極的になるのか。

パネリスト

川上 和久（明治学院大学助教授）

2) 第2問題について

『勤労者の余暇ニーズに関する意識調査研究』（労働省）結果を参考にしながら、日常のL/R環境整備の新しい視点を探る。

パネリスト

嵯峨 寿（余暇開発センター研究員）

3) 第3の問題について

L/R産業の魅力とフィランソロピー、メセナ活動のあり方について。

パネリスト

佐々木 享（トヨタ自動車事業開発部部長）

林 裕三（日本体育施設運営協会会長）

（通産省産業構造審議会生涯学習部会委員）

4) 司会と第4問題について

パネリスト

松田 義幸（筑波大学・多摩大学客員教授）

第2シンポジウムの課題とパネリスト

1) “持続可能性”からみた地球環境と調和、共存するレジャー・レクリエーションの新たな概念の構築

パネリスト

糸賀 黎（筑波大学大学院環境科学研究科教授）

2) 地球環境と調和共存するレジャー・レクリエーション資源、空間、施設の開発整備と環境保全
“我国のリゾート開発の直面する問題点と整備

について”

パネリスト

西田不二夫（㈱ブレック研究所専務取締役）

（東京工業大学講師・環境学専攻法務委員会委員）

3) 都市環境における地球環境と調和共存するレジャー

・レクリエーション活動の展開と課題

パネリスト

井上 忠雄（国営昭和記念公園工事事務所所長）

（建設省関東地方建設局）

4) 環境と調和するレジャー・レクリエーション資源

源、空間、施設のデザインとその整備についての自然的方向を求めて

パネリスト

油井 正昭（千葉大学園芸学部助教授）

5) コメンテーター

永嶋 正信（東京農業大学教授）

下村 彰男（東京大学農学部助手）

6) 総括

進士五十八（東東農業大学教授）

7) 司会・進行

松尾 邦江（㈱ブレック研究所専務取締役）

《第23回学会大会》－1993年－

□大会テーマ

『自然に遊び、自然に学ぶ』

□基調講演

『生態学的文明に向けて』

— 自然に学ぶレジャー・レクリエーション —

講師 柴田 敏隆（㈱日本自然保護協会理事）

□シンポジウム

テーマ 『自然教育とレジャー・レクリエーション』

パネリスト

飯田 稔（筑波大学教授・野外活動分野）

柴田 敏隆

（㈱日本自然保護協会理事・自然教育分野）

額田 信哉

（㈱自然公園環境管理財団理事・自然教育分野）

塚田 弘一（山梨県観光協会・ツーリズム分野）

司会 油井 正昭（千葉大学）

《第24回学会大会》－1994年－

□大会テーマ

〈21世紀を迎えるレジャー・レクリエーション環境〉

－北海道の自然と生活文化に学ぶ－

□基調講演

〈21世紀に向けてのライフスタイルを展望する〉

－20世紀の社会を総括して－

講師 鷲田小彌太（札幌大学教授）

□シンポジウム

〈21世紀を迎えるレジャー・レクリエーション環境〉

－北海道の自然と生活文化に学ぶ－

1. 「北海道の自然・生活文化とレジャー・レクリエーション」

森山軍次郎（専修大学北海道短期大学教授）

2. 「北海道の豊かな自然の利用と保護」

生方 秀紀（北海道教育大学教授）

3. 「北海道における産業構造の変化とレジャー・レクリエーション対応」

下川 哲央（北海道銀行調査部部長）

4. 「アイヌの遊び、祭りとは北海道の自然」

魚井 一由（北海道旭川市博物館）

・アイヌの生活における自然との豊かな関わり

・アイヌの人々の生活の楽しみ方と祭り

司会 寺嶋 善一（学会常任理事・明治大学教授）

□公開講座

テーマ 「遊びとまちづくり」

1. 「豊かな遊びのまちづくり — 楽しみながらまちづくり —」

講師 前野淳一郎

（学会副会長・㈱スペースコンサルタンツ会長）

2. 「遊びやスポーツの変化に対応した新しいまちづくり」

講師 宮下 桂治（学会常任理事・順天堂大学教授）

《第25回学会大会》－1995年－

□大会テーマ

『新しい時代の創造的余暇』

□ 記念講演

『21世紀への提言

これからのレジャー・レクリエーションのあり方を
探る』

～若者のレジャー・レクリエーションを中心に～

浅田 隆夫

(日本レジャー・レクリエーション学会会長)

□ 基調講演

『ボランティアに見る創造的余暇』

福永佳津子 (海外生活カウンセラー)

□ シンポジウム

『新しいレジャー・レクリエーション時代の生き方』

パネリスト

(1) 『グローバル時代のレジャー・レクリエーション』

原田 宗彦 (大阪体育大学教授・学会理事)

(2) 『生涯学習社会の到来と新しい時代の余暇の
あり方』

松田 義幸 (実践女子大学教授・学会常任理事)

(3) ボランティアに見る新しい時代の方向性とネット
ワークづくり

宮下 桂治 (順天堂大学教授・学会常任理事)

コーディネーター

芳賀 健治

(東京家政学院大学助教授・学会常任理事)

2. 研究会*・学会大会における研究（実践）発表

(p. 24～54)

※学会の前身である研究会の第1回研究大会から第5回研究大会までの研究発表論文は、旧「レクリエーション研究」の第1号から第5号に発表抄録として掲載され、第6回研究大会の研究発表の発表抄録は、第7回研究大会にあたる研究論文（研究発表形態ではなく投稿形態がとられている）と共に「旧レクリエーション研究」第6・7合併号への掲載となっている。

資料(2) 研究会・学会大会における研究(実践)発表

《第1回研究大会》 -1965年-

1. レクリエーションの価値に関する研究
渡辺 三城(鹿 沢 大 学)
2. 仕事と余暇を結ぶレクリエーション理論について
瀬口 彰(同 志 社 大 学)
3. 都市化過程にある地域住民のレクリエーション意識に関する研究
江橋慎四郎(東 京 大 学)
- 池田 勝(東 京 大 学)
4. レクリエーション意識とその規定要因との関係
浅田 隆夫(東 京 教 育 大 学)
5. レクリエーション意識の研究
— 中小企業に働く卒業生を在学時と比較して —
稲垣 保彦(富山県立大谷技術短大)
6. 労働者の労働対余暇意識について
前川 峯雄(東 京 教 育 大 学)
7. 中年以上の主婦を対象としたレクリエーション
— N体操会の指導と実践を通じて —
森園 澄子(東京女子体育大学)
8. キャンプ・カウセリングの一考察
斎藤 仲次(東 京 学 芸 大 学)
9. 「Wide-Recreation System」によって実験した児童生徒の教育効果について
林 寿彦(広島国際青少年協会)
10. 出羽三山地区観光レクリエーション調査
阿南 文也(福 島 テ レ ビ)
11. ある企業のレクリエーション施設の基本計画と展開例
江橋慎四郎(東 京 大 学)
12. ヨーロッパにおけるレクリエーション運動
小川長治郎(日本レク協会大学)

《第2回研究大会》 -1966年-

1. レクリエーション振興にはたす協同組合の役割

に関する社会的研究

- 影山 健(都 立 大 学)
- 中島 豊雄(名古屋学院大学)
- 寺沢 猛(豊 田 工 専)
2. 琵琶湖のレクリエーションに関する計画的な研究
阿南 文也(環境デザイン研究所)
3. 簡単にできるスポーツの体系化および考案
三隅 達郎(基 督 教 大 学)
- 高橋 和敏(基 督 教 大 学)
4. サバービアにおけるスポーツ、レクリエーションに関する研究
その1. 研究の意図と方法
前川 峯雄(東 京 教 育 大 学)
- 斎藤 定雄(順 天 堂 大 学)
- その2. スポーツ、レクリエーションの現状
浪越 信夫(順 天 堂 大 学)
- その3. スポーツレクリエーション意識
北森 義明(順 天 堂 大 学)
5. 年齢からみたレクリエーション活動分化の動向
浅田 隆夫(東 京 教 育 大 学)
6. 大阪市を中心とする地域の中小企業従業員のレクリエーションについて
○西山 勝次(大 阪 工 業 大 学)
- 島崎 秀雄(大 阪 工 業 大 学)
7. 職場レクリエーションの研究
— とくに週休2日制の職場について —
秋吉 嘉範(九 州 大 学)
8. レクリエーションからみた社交ダンスの在り方
深町 一夫(昭 和 空 圧 K K)
9. デイキャンププログラムについて
斎藤 仲次(東 京 学 芸 大 学)
10. レクリエーションにおける使用用語の反省
三隅 達郎(基 督 教 大 学)
11. 「楽しみ」の意識について

瀬口 影 (同志社大学)

とその影響について

12. レクリエーション意識の変化について

◎野間口英敏 (東海大学)

稲垣 保彦 (富山県立大谷短大)

塩谷 宗雄 (東海大学)

13. インテグレートッドパーソナリティとコ・レクリエーション

森田徳之助 (東海大学)

小林 修平 (東海大学)

山崎 進 (昭和女子短大)

越智三王 (東海大学)

王 貞彦 (東海大学)

《第3回研究大会》 -1967年-

村上 繁 (東海大学)

1. 辺地校と養護施設の交流林間学校実施記録について

三尾 輝行 (㈱大隈鉄工所)

8. 主婦の生活態度とレクリエーションについて

田村 喜代 (東京学芸大学)

2. 高校生の余暇活動の実態および余暇観についての研究

齊藤 耕二 (東京学芸大学)

9. レクリエーションの意識と態度について

◎西山 勝次 (大阪工業大学)

島崎 秀雄 (大阪工業大学)

3. 教員の勤務時間の確立に伴う学校におけるクラブ活動の将来について

前川 峯雄 (東京学芸大学)

10. レクリエーション意識の研究 (第3報)

稲垣 保彦 (大谷技術短期大学)

4. 教育キャンプに関する研究 (看護学生の場合)

その1. 健康観について

11. レクリエーション運動に影響する要因について

片岡 暁夫 (日本女子大学)

◎山本 武彦 (順天堂大学)

北森 義明 (順天堂大学)

宮下 桂治 (順天堂大学)

井上 忠夫 (順天堂大学)

松波 慎介 (順天堂大学)

12. ゴールデンウィークにおける東京都区部居住者のレクリエーションの実態調査 (昭和42年度)

林 実 (経済企画庁)

13. 一宮市におけるレクリエーションに関する調査研究

長谷川純三 (東京教育大学)

5. 教育キャンプに関する研究 (看護学生の場合)

その2. キャンピングの評価について

14. 農村におけるレクリエーションの摂取容態について

鈴木 勝衛 (福島大学)

◎宮下 桂治 (順天堂大学)

山本 武彦 (順天堂大学)

北森 義明 (順天堂大学)

井上 忠夫 (順天堂大学)

松波 慎介 (順天堂大学)

15. 農村生活の変化とこれに対応するレクリエーション組織の発展に関する研究

団 琢磨 (島根大学)

《第4回研究大会》 -1968年-

6. 教育キャンプに関する研究 (看護学生の場合)

その3. 生活構造における教育キャンプの位置

1. 高等学校ホーム・ルームレクリエーションに関する研究

安尾宏一郎 (都立王子工業高校)

◎北森 義明 (順天堂大学)

山本 武彦 (順天堂大学)

宮下 桂治 (順天堂大学)

井上 忠夫 (順天堂大学)

松波 慎介 (順天堂大学)

2. 子供のレクリエーションと安全能率開発について (第1報)

稲垣 保彦 (富山県立大谷技術短期大学)

3. レクリエーション意識について (その1)

森園 澄子 (東京女子体育大学)

7. 職場におけるレクリエーション・スポーツの実施

◎松浦三代子 (東京女子体育大学)

- 立花 照美 (東京女子体育大学)
4. 過疎地域におけるこどもの生活とあそび
 団 琢磨 (島 根 大 学)
5. 学童における SNORKEL の取扱い指導に関する二、三の研究
 山本 武彦 (順 天 堂 大 学)
 ◎宮下 桂治 (順 天 堂 大 学)
 川合 武司 (順 天 堂 大 学)
 井上 忠夫 (順 天 堂 大 学)
 河野 静也 (東 京 歯 科 大 学)
6. 職場におけるレクリエーション活動の機能に関する研究 (第1報)
 前川 峯雄 (東 京 教 育 大 学)
 塩谷 宗雄 (東 海 大 学)
 越智 三王 (東 海 大 学)
 山崎 進 (土 浦 短 期 大 学)
 金塚 弘 (三 共 株 式 会 社)
 柴田勝次郎 (日 立 習 志 野 工 場)
 山本 武彦 (順 天 堂 大 学)
 ◎北森 義明 (順 天 堂 大 学)
 宮下 桂治 (順 天 堂 大 学)
 井上 忠夫 (順 天 堂 大 学)
7. 某モデル職場におけるレクリエーション実施の影響に関する研究
 塩谷 宗雄 (東 海 大 学)
 ◎越智 三王 (東 海 大 学)
8. 職場のスポーツクラブに関する調査研究
 — 市原市の企業体の事例を中心として —
 斎藤 定雄 (順 天 堂 大 学)
 ◎浪越 信夫 (順 天 堂 大 学)
 加藤 欣一 (市原市教育委員会)
9. 戦後のレクリエーション文献に関する研究 (雑誌を中心として)
 守能 信次 (東 京 大 学 大 学 院)
10. レクリエーションに対するイメージの研究 (第1報)
 高橋 和敏 (東 海 大 学)
11. 英国の Physical Recreation の最近の動向について
 — 特に C. C. P. R. の刊行誌
 Physical Recreation を通して —
 浅田 隆夫 (東 京 教 育 大 学)
 山市 孟 (都立第一商業高校)
12. ORRRC のレポートと California Public Outdoor Recreation Plan の比較研究
 荘司 正徳 (都立第一商業高校)
13. 米、独におけるレクリエーション行政の比較
 川口 貢 (横 浜 国 立 大 学)
14. 教育キャンプに関する研究 (看護学生の場合)
 その1. 健康観について
 山本 武彦 (順 天 堂 大 学)
 北森 義明 (順 天 堂 大 学)
 宮下 桂治 (順 天 堂 大 学)
 井上 忠夫 (順 天 堂 大 学)
 松波 慎介 (工 学 院 大 学)
 ◎杉森みど里 (順天堂高等看護学校)
 大林 和子 (順天堂高等看護学校)
15. 教育キャンプに関する研究 (看護学生の場合)
 その2. キャンピングの評価について
 山本 武彦 (順 天 堂 大 学)
 北森 義明 (順 天 堂 大 学)
 宮下 桂治 (順 天 堂 大 学)
 井上 忠夫 (順 天 堂 大 学)
 松波 慎介 (工 学 院 大 学)
 杉森みど里 (順天堂高等看護学校)
 大林 和子 (順天堂高等看護学校)
16. 教育キャンプに関する研究 (看護学生の場合)
 その3. 生活構造における教育キャンプの位置
 山本 武彦 (順 天 堂 大 学)
 北森 義明 (順 天 堂 大 学)
 宮下 桂治 (順 天 堂 大 学)
 井上 忠夫 (順 天 堂 大 学)
 ◎松波 慎介 (工 学 院 大 学)
 杉森みど里 (順天堂高等看護学校)
 大林 和子 (順天堂高等看護学校)

17. 大学正課体育におけるキャンプクラフト指導法の研究
(正課体育におけるキャンプクラフトの位置づけ)
三隅 達郎(関東学院大学)
高橋 和敏(東海大学)
◎今井 毅(国際基督教大学)
18. 勤労青年の野外活動に関する調査研究
江橋慎一郎(東京大学)
◎高橋 盾男(東京大学大学院)
19. 離島における主婦の生活意識と余暇活動
田村 喜代(東京学芸大学)
20. 余暇行動における職業的地位・役割因子の分析
池田 勝(東京大学大学院)
21. 19世紀後半の米国初・中教育におけるレクの位置
片岡 暁夫(日本女子大学)
22. 20世紀初期のアメリカにおけるレクリエーション
指導者養成の過程
今井 浩明(東京農産大学)
23. Physical exercise における概念の変容過程
浅田 隆夫(東京教育大学)
17. 大学正課体育におけるキャンプクラフト指導法の研究
井戸 和郎(奈義町教育委員会)
9. 中小企業におけるレクリエーション活動について
池田 豊彦(森下製網所)
10. レクリエーション疲労回復に関する研究(パドミ
ントンが都立第一商業高校夜間定時制高校生の疲労
とどう関係しているか)
荘司 正徳(都立第一商業高校)
11. 週休2日制実施と職場レクリエーションの動向
(特にレクリエーション管理の問題を中心として)
高橋 健夫(東京教育大学)
12. 職場におけるレクリエーション活動の機能に関す
る研究(第2報)
(委託共同研究)
13. 観光とレクリエーションの関係について
出口 一重(伊豆観光開発)
14. 社会人の余暇行動に関する分析
池田 勝(東京大学大学院)
15. 昭和40・60年国民外出回数推計
林 実(地域計画研究所)
- ◀第5回研究大会▶ -1969年-
1. 小学校におけるレクリエーション教育の意義と位
置づけについて(生活教育を再検討する立場から)
弘中 栄子(東京教育大学)
2. 米国諸州の体育指導要領における Recreation の原理
片岡 暁夫(日本女子大学)
3. 米国における地域社会のレクリエーションについて
木庭 修一(東京学芸大学)
4. 英国における Physical Recreation の近代化
(特に19世紀末~20世紀初頭について)
浅田 隆夫(東京教育大学)
5. 野外教育・学校キャンプと余暇教育の関連について
斉藤 伸次(東京学芸大学)
6. キャンプの教育的機能に関する研究(その3)
井上 忠夫(順天堂大学)
7. 老人の余暇に関する研究
守能 信次(東京大学大学院)
8. 岡山県奈義町における家庭レクリエーションの振興
- ◀第6回研究大会▶ -1970年-
1. 都市児童における遊戯の発達課題
高橋 健夫(東京教育大学)
2. 都市家庭における遊戯教育の検討
弘中 栄子(東京教育大学)
3. 都市における児童の遊戯の文化内容についての調
査と分析
片岡 暁夫(日本女子大学)
4. 都市における社会制度と児童遊戯の関係
川口 貢(横浜国立大学)
5. 都市の物的環境と児童遊戯についての一考察
荘司 正徳(都立第一商業高校)
6. 遊戯の近代化と構造
浅田 隆夫(東京教育大学)
7. 家庭におけるレクリエーション種目の分類
山崎 進(昭和女子短期大学)
木村 静枝(昭和女子短期大学)
8. 職場におけるレクリエーションの機能に関する研

究(第三報)

北森 義明(順天堂大学)
 前川 峯雄(東京教育大学)
 塩谷 宗雄(東海大学)
 山崎 進(昭和女子短期大学)
 山本 武彦(順天堂大学)
 金塚 价弘(三共株式会社)
 柴田勝次郎(日立習志野工場)
 越智 三王(東海大学)
 宮下 桂治(順天堂大学)
 井上 忠夫(順天堂大学)

9. ナワなし「ナワとび」動作のエネルギー代謝に関する研究

三宅 義信

10. キャンピングの教育的機能に関する研究(その4)

山本 武彦(順天堂大学)
 北森 義明(順天堂大学)
 宮下 桂治(順天堂大学)
 井上 忠夫(順天堂大学)
 杉森みどり(順天堂高等看護学校)
 奥井 鈴江(順天堂高等看護学校)
 伊藤 祐子(順天堂看護学校)

《第7回研究大会(旧「レクリエーション研究」

第6・7合併号に掲載)》-1971年-

(投稿形態)

1. レクリエーションへの想い

三隅 達郎(基督教大学)

2. 余暇教育序論

高橋 眞照(淑徳大学)

3. レジャーラーとしての芭蕉の研究素描

岡田 日郎

4. レクリエーション・リーダーの任務に関する原理的考察

片岡 暁夫(日本女子大学)

〈調査〉大学の正課体育における影響等の現在の余暇生活に及ぼす影響に関する調査報告

江橋慎四郎(東京大学)

池田 勝(東京大学大学院)

守能 信次(東京大学大学院)

《第1回学会大会》-1971年-

1. Stanley Parker の「Work-Leisure」論に関する一考察

高橋健夫, 浜本定彦(大阪大学)

2. ニューディール政策とレクリエーション

瀬口 彰, 仲村 要(同志社大学)

3. 遊びの考察

青木 泰三(大阪府立大学)

4. ゲーム指導法の実験的考察

— GSR による分析を中心に —

高橋和敏, 今村義正, 大北文生, 野間口英敏

(東海大学)

5. わが国に於ける地域フォークダンス団体及び指導者の意識と活動

服部洋子, 武井正子, 神山 須

(順天堂大学)

6. 青年団におけるレクリエーション活動の現状と問題点

川口 文子(日本青年館)

7. 地域社会のレクリエーションに対する大学の寄与

齊藤 定雄(順天堂大学)

8. 職場におけるレクリエーション実施の影響に関する研究

野間口英敏, 塩谷宗雄, 高橋和敏, 今村義正

(東海大学)

9. 社会教育施設におけるレクリエーションの指導について

— 北九州市立玄海青年の家における現状と課題 —

音成彦始郎(青年の家)

10. わが国における体育・スポーツ施設利用の社会的分析

厨 義弘(福岡教育大学)

11. キャンプにおける野外教育プログラムについて

斉藤 伸次(明治学院短期大学)

12. キャンプ生活における実証的研究

鈴木 孝雄 (麻布獣医科大学)

13. キャンプ教育的機能としての可能性について
— 社会的感受性訓練としての可能性について —
宮下桂治, 山本武彦, 北森義明, 井上忠夫
(順天堂大学)
14. キャンプの教育的機能に関する研究
— 社会的感受性訓練としてのオリエンテーリングの効果について —
井上忠夫, 山本武彦, 末吉義明, 宮下桂治
(順天堂大学)
15. 生活指導としての病院レクリエーションについて
古賀正宏, 末吉光彦, 紫木憲彦
(八幡厚生病院)
16. 精神病院におけるレクリエーション療法に関する研究
武井正子ほか (順天堂大学)
17. 精神病院におけるレクリエーション療法の新しい試み (その1)
— レクリエーション療法の理論的背景 —
浅井正昭ほか (日本大学)
18. 精神病院におけるレクリエーション療法の新しい試み (その2)
— 個人の体力・運動機能およびレク要求に応じたレク療法の実際 —
浅井正昭ほか (日本大学)
波越 信夫 (順天堂大学)
19. 精神病院におけるレクリエーション療法の新しい試み
浅井 利勇 (浅井病院)
浅井 義弘 (日本大学)
波越 信夫 (順天堂大学)
浅井 邦彦 (東京医科歯科大学)
武内 三二 (浅井病院)
浅井 正昭 (日本大学)
20. 東京都野外スポーツ・レクリエーション施設計画のための調査研究 (報告)

《第2回学会大会》 — 1972年 —

1. 遊びの考察
青木 泰三 (大阪府立大学)
2. レクリエーション理論の妥当性に関する研究
池田 勝 (大阪体育大学)
3. レクリエーションの意味論的検討
藺田 硯哉 (日本レクリエーション協会)
4. スポーツとピューリタニズム
小野 罔芳 (東京教育大学)
5. スポーツ意識の社会的背景
片岡 暁夫 (東京教育大学)
6. 個人の属性からみた青少年のスポーツ意識
山市 孟 (都立第一商業高校)
7. スポーツ意識とクラブ活動の問題
川口 貢 (横浜国立大学)
8. スポーツ意識とスポーツ種目の関連
荘司 正徳 (都立第一商業高校)
9. 総括・スポーツ教育試論 (中・高校生のスポーツ意識調査の結果)
浅田 隆夫 (東京教育大学)
10. レジャー研究におけるM・カプランの位置
金崎 良三 (九州大学)
11. 本学学生にみられるレジャーレクリエーション観
仲村 要 (同志社大学)
瀬口 彰 (同志社大学)
12. 地域におけるスポーツ普及に関する一考察
江橋慎四郎 (東京大学)
桑野 豊 (文部省)
森部 宏英 (東京大学)
13. 主婦のレクリエーション活動の動向について
大森雅子, 森園澄子, 松浦三代子
(東京女子教育大学)
14. 主婦の自由時間利用について
佐藤 幸子 (仙台大学)
15. 福島市内の職場レクリエーション・クラブ実態に

ついて

佐瀬 一夫 (福島盲学校)
黒沢 勝利 (市教育委員会)
鈴木 勝衛 (福島大学)

16. 主婦のスポーツクラブの現状

鈴木 孝雄 (麻布獣医科大学)

17. 精神病院におけるレク活動・指導考察

末吉 光彦 (八幡厚生病院)

18. レクリエーション療法に対する新しい試み

武内 三二 (浅井病院)

19. レクリエーション療法に対する新しい試み

山崎 友大 (浅井病院)

武内 三二, 浅井 利勇

(浅井病院)

浅井正昭, 浅井義弘 (日本大学)

20. 精神病院におけるレクリエーションに関する研究
(その2)

河野信弘, 武井正子, 井上忠夫, 神山須真

(順天堂大学)

鈴木 定, 矢島幸子 (越ヶ谷病院)

21. キャンプ・プログラムの研究

— ボランティア・ラリーの効果について —

井上忠夫, 宮下桂治 (順天堂大学)

22. 人間関係訓練としてのキャンプの方法論について

宮下桂治, 井上忠夫 (順天堂大学)

23. アメリカにおける私設組織的教育キャンプの経営
に関する実態について

斉藤 仲次 (日本キャンプ協会)

24. フォークダンス普及に関する研究

— 学校におけるフォークダンス指導について —

吉永トシ子, 松木 真吾

(新潟女子短期大学)

25. 国際交流の場におけるフォーク・ダンス・民踊に
ついての考察

池間 博之 (日本レクリエーション協会)

26. レクリエーション指導者に関する研究2

— 職場レクリエーション・リーダーの養成情況

について—

秋吉 嘉範 (福岡教育大学)

27. パーソナリティとレクリエーション活動との関係
について

川口文子, 染谷洋子 (日本青年館)

小田切毅一 (日本レクリエーション協会)

28. 企業の第一線監督者(フォアマン)を対象とした
レクリエーションに関する調査

千葉 和夫 (日本レクリエーション協会)

29. ゲーム指導法の実験的考察(II)

— G・S・Rによる分析を中心に —

大北文生, 高橋和敏, 今井義正, 野間口英雄,

川向妙子 (東海大学)

鈴木 秀雄 (北里大学)

30. ゲームに対するイメージの比較考察

— SD法によるグループの比較 —

鈴木 秀雄 (北里大学)

高橋和敏, 大北文生, 野間口英雄, 川向妙子

(東海大学)

31. モータリゼーションに関するナショナル・コンセン
サスの形成と新しい交通公園

浅井正昭, 吉田和夫 (日本大学)

稲吉 博, 鈴木辰雄, 横田 東

(ホンダ安全運転普及部)

32. 新しい交通公園とその役割

稲吉 博 (ホンダ安全運転普及部)

浅井正昭, 吉田和夫 (日本大学)

鈴木辰雄, 横田 東 (ホンダ安全運転普及部)

33. 新しい交通公園における具体的なシステムについて

鈴木 辰雄 (ホンダ安全運転普及部)

浅井正昭, 吉田和夫 (日本大学)

稲吉 博, 横田 東 (ホンダ安全運転普及部)

34. 新しい子供の遊び場計画とその利用実態について

杉尾 邦江 (こどもの国)

《第3回学会大会》—1973年—

1. 「スポーツ参加」における阻害条件

山市 孟 (都立第一商業高校)

- 浅田 隆史 (東京教育大学)
2. 産炭過疎地域におけるレクリエーションの研究(1)
金崎 良三 (九州大学)
3. レクリエーション集団の現状と問題点
(1) 集団の規約の有無による比較
佐瀬 一夫 (県立福島盲学校)
鈴木 勝衛 (福島大学)
4. 地域のレクリエーション講習会の需要の増大と、
それが家庭に及ぼす影響について
佐藤 幸子 (仙台大学)
5. コミュニティレクリエーションセンターとしての
YMCA に関する事例研究
永吉 宏英, 江橋慎四郎
(東京大学)
6. 野外レクリエーションの適正環境に関する研究Ⅰ・Ⅱ
進士五十八 (東京農業大学)
7. 頸肩腕障害対策の実験的研究
塩谷 宗雄 (大正大学)
8. 少年矯正教育におけるレクリエーション
— カナダ・オンタリオ州を例にとって —
諸屋 裕 (オンタリオ州矯正省)
9. 精神病院におけるサイクリング療法について
音田 篤, 川口 宏, 渡辺 弘, 浜田 透
(紀泉病院)
10. プレセラピーのプログラムに関する研究
須田 柳治 (順天堂大学)
11. 現代レクリエーションの問題点
長谷川修一郎
(桃山学院大学)
12. 我国キリスト教主義・レクリエーション運動の歩
み(その1) 成瀬・松浦・安部の論説について
泰 芳江 (同志社女子大学)
13. レクリエーションの意味論的研究(その2)
藪田 硯哉 (日本レクリエーション協会)
14. 最近のレジャー・レクリエーション観についての
一考察
— 特に京都市周辺部小企業従業員を中心に —
- 仲村 要 (同志社大学)
瀬口 彰 (同志社大学)
15. 新聞にみるレクリエーションへの示唆
西山 勝治 (大阪産業大学)
16. 子供の体育遊びに関する研究(その3)
— 広場での遊びの問題点 —
松木 真言 (新潟女子短期大学)
17. 組織キャンプに関する一考察
— 学校におけるキャンプの再検討 —
山本 英毅 (日本福祉大学)
18. 露営キャンプについて
野沢 巖 (埼玉大学)
19. 教育的効果を高めるキャンプファイヤーの運営に
ついて
河村 文人 (山口県石城山青少年宿泊訓練所)
20. 余暇におけるスポーツサウナの位置づけ
神山 須真 (順天堂大学)
21. 学生の夏期休暇利用法に関する実態調査
瀬崎 節子 (大阪基督教短期大学)
- ◀第4回学会大会▶ —1974年—
1. 老人の健康生活とスポーツ
秋吉 嘉範 (福岡教育大学)
2. 日本人のスポーツ規範
— 社会科学的アプローチ —
難波邦雄, 浅田隆夫 (東京教育大学)
3. スポーツクラブの管理運営に関する試論
宮下 桂治 (順天堂大学)
宮下 弘子 (フジスポーツクラブ)
4. キャンプの教育的機能に関する研究
— 感受性訓練の応用とその効果 —
井上 忠夫, 宮下桂治 (順天堂大学)
5. レクリエーションリーダー研修会における態度の
変化について
川向妙子, 高橋和敏, 大北文生, 野間口英敏
(東海大学)
鈴木 秀雄 (フロリダ州立大学大学院)
6. レクリエーション指導効果に関する研究

(その1) — レクリエーション集団の性別構成比
のさがいによる指導効果の差異について —

外木場達雄, 田中正志, 久富さよ子
(福 岡 大 学)

7. 大学生の余暇活動調査

日比野朔郎 (京 東 府 立 大 学)

8. 大学生のレクリエーションの経験と意識について

山本久乃武, 長島 博
(専 修 大 学)

9. スポーツ教室にみられる女性の余暇観(その1)

寺岡 一郎 (大 阪 体 育 協 会)

10. サイクリングの社会的考察

青木 泰三 (大 阪 府 立 大 学)

11. ポーランドにおける Physical-recreation の
推移

清和 洋子 (中 央 大 学)

12. 最近のレジャー, レクリエーション観をめぐる問
題点について

仲村 要, 瀬口 彰 (同 志 社 大 学)

13. フィジカル・レクリエーション成立に影響を与
える諸要因の研究

— 林の数量化理論Ⅱ類を用いて —

永吉宏英, 江橋慎四郎 (東 京 大 学)

14. 生活時間調査による「レジャー」の測定

池田 勝, 江藤明英 (大 阪 体 育 大 学)

15. 新入生の健康管理について

塩谷 宗雄 (大 正 大 学)

16. 視力障害児のおそびの実態とその意識に関する研
究

— 第1報盲, 準盲について —

佐瀬 一夫 (福 島 盲 学 校)

17. 精薄児のレクリエーションセラピーに関する一考
察

梅田靖次治 (福岡県立直方養護学校)

ついて —

佐藤 幸子 (仙 台 大 学)

A-2 家族レクリエーションについての研究

— 夏休み中の小学生のレクリエーション —

秋吉 嘉範 (福 岡 教 育 大 学)

A-3 陸上競技における中高年者運動競技能力の事
例的研究

近藤 公夫 (奈 良 女 子 大 学)

A-4 参加児童を中心としたキャンプの試み

— 短期キャンプによる —

石井 英行 (社会福祉法人興望館)

A-5 キャンプの教育的機能に関する研究

— システム化の問題について —

井上 忠夫 (順 天 堂 大 学)

A-6 スポーツクラブの管理運営に関する試論

— 運動機能の評価基準設定について —

宮下 桂治 (順 天 堂 大 学)

A-7 学生の音楽に関する嗜好調査

久富さよ子 (福 岡 大 学)

A-8 女性の余暇における公共体育施設の位置づけ
(国立西ヶ丘競技場スポーツサウナ及び婦人ス
ポーツ教室)

武井 正子 (順 天 堂 大 学)

A-9 高年層の保養意識行動に関する研究就業面か
らのアプローチ

原田 憲一 (東 京 教 育 大 学)

A-10 高年層の保養意識行動に関する研究特に世代
間交流について

加藤 泰樹 (東 京 教 育 大 学)

B-1 地域レクリエーション指導者の活動実態

— 運動的視点から —

千葉 和夫 (日本レクリエーション協会)

B-2 ポーランドにおけるレクリエーション

Physical recreation (第二次世界大戦後)

清和 洋子 (中 央 大 学)

B-3 旅の考察

— 宿泊の意識と実態から —

《第5回学会大会》 — 1975年 —

A-1 企業体における週休2日制の完全実施と厚生
— スポーツ, レクリエーション施設の実態に

- 青木 泰三(大阪府立大学)
- B-4 コミュニティ、観光レクリエーション構想計画に就いて
— 鳥取県西部地域をケース・スタディとして —
進士五十八(東京農業大学)
- B-5 レクリエーション・イメージの構造について
金崎 良三(九州大学)
- B-6 日常用語にみられるレクリエーションレジャー観について
仲村 要(同志社大学)
- B-7 権田保之助に見る娯楽概念の変貌
蘭田 硯哉(日本レクリエーション協会)
- B-8 組織キャンプの自我概念の変化に及ぼす影響
野沢 巖(埼玉大学)
- B-9 視害障害児のあそびの実態とその意識に関する研究 第二報 先天盲と後天盲の比較研究
佐瀬 一夫(福島県立盲学校)
- B-10 肢体不自由者のバドミントンについての研究
水田 賢二(国立身障者センター)
- 《第6回学会大会》 -1976年-
- A-1 余暇情報の提供について
鳥海宗一郎(千葉中央コミュニティセンター)
- A-2 保護行動の顕現化に関する一考察
加藤 泰樹(東京教育大学)
- A-3 保護意識と保養施設に対する希望について
松原 周信(筑波大学)
- A-4 レクリエーション教育の一考察(1)
坂口 正治(東洋大学短期大学)
- A-5 レクリエーション教育の一考察(2)
石井 允(立教大学)
- A-6 レクリエーションの形式観と価値観について
沢村 博(日本大学)
- A-7 視覚障害児のあそびの実態とその意識に関する研究 第三報
佐瀬 一鼓(福島県立盲学校)
- A-8 ぶらさがり健康法の実験的研究
塩谷 宗雄(日本体育大学)
- A-9 レクリエーション指導法
小泉 紀雄(日本体育大学)
- B-1 小学生の野外活動指導に関する一考察
鈴木 孝雄(麻布獣医科大学)
- B-2 冬の林間学校の自由活動について
山田 誠(神戸外国語大学)
- B-3 小学生冬の林間学校における期待と成果についての実践的研究
富松 京一(東京教育大学大学院)
- B-4 高齢者の近隣意識の実態について
渡辺 本江(淑徳大学)
- B-5 シニア・エージのレクリエーション活動の動向について
大森 雅子(東京女子体育大学)
- B-6 老後の生活意識と世代間交流について
原田 憲一(東京教育大学)
- B-7 民謡教室の実態とその意識について
和田 忠(秋田大学)
- B-8 一過性組織キャンプ継続性組織キャンプについての実践的研究
野沢 巖(埼玉大学)
- B-9 レクリエーション登録指導者の活動実態について
— 運動的視点から —
千葉 和夫(日本レクリエーション協会)
- 《第7回学会大会》 -1977年-
- 1 余暇とコミュニティ
— コミュニティ活動とその拠点づくり —
鳥海宗一郎(千葉市コミュニティ事務局)
- 2 日常生活圏におけるコミュニティ施設整備のための基礎的研究
— 一般住民及び活動グループからみた施設相互の関係 —
木村 誠(東京都立大学建築学科)
- 3 パキスタン共和国におけるレクリエーション緑地の計画
近藤 公夫(奈良女子大学住居学科)

4. 遊戯論の座標
近藤 英男 (奈良 教育 大学)
5. レクリエーションの概念に関する原理的考察
平井 章 (筑波 大学 大学院)
6. 「社会体育」論におけるレクリエーションの位置づけについて
浜口 義信 (筑波 大学 大学院 大学)
7. RE-CREATIVE BEHAVIOR の研究
澤村 博 (日 本 大 学)
8. 戦後における「Leisure と Recreation の論義」の展開過程に関する一試論
小田切毅一 (奈 良 女 子 大 学)
9. ポーランドにおけるレクリエーション指導員の養成
清和 洋子
10. レクリエーション教育と野外活動
— 日本とフィリピンと比較的研究 —
G.Ida Lasat.
11. 受験期にある青少年の余暇生活に関する研究
— とくに健康および体力への影響について —
池田 勝
12. 二部学生の生活・余暇時間に関する調査
渡辺 岑生
13. 生活時間配分調査による余暇構造分析
神崎 清一
14. トーチの照度と燃焼時間に関する実験的研究
大石 示郎
15. 井桁の照度と燃焼時間に関する実験的研究
大石 示郎
16. 高齢者の健康状態と生活意識
音海 哲子
17. 高齢者の学歴と生活意識について
音海 哲子
18. 高齢者の旅行意識と実態
音海 哲子
19. 高齢者の仕事の有無からみた余暇活動旅行について
20. 教育効果を高めるオリエンテーリングの一考察
国馬 善郎
21. 精神障害者 (分裂病) におけるキャンプの影響について
富永 京二, 手塚 一郎
22. 頸肩腕障害に対する治療的レクリエーションの実践的研究
— 運動療法のあり方に関して —
大塚 孝夫
23. 企業内における健康づくりとその影響に関する実験的研究
田端 太
塩谷 宗雄 (東 海 大 学)
24. 国際線スチュワーデスにおける勤務後の過ごし方と時差への対応について
山崎 律子 (東 海 大 学 大 学 院)
25. レクリエーション・リーダーの性格について
西野 仁 (東 海 大 学 大 学 院)
26. レクリエーション指導者の活動実態について
— レク運動的機能レベルの分析 —
千葉 和夫)
27. キャンプ・カウンセラーの性格的特性に関する一研究
— 特にキャビン・グループに凝集性との関係について —
原田 宗彦, 長谷川純三
28. 教育的組織的キャンプにおけるキャンプカウンセラーの指導に関する研究
— 日本体育大学キャンプ実習の場合 —
森 慶治
29. スキー実習時における人間関係の深まりに関する研究
土井 浩信, 野沢 巖

《第 8 回学会大会》 - 1978年 -

1. 地域社会のレクリエーション活動に関する研究
— 寺分地域と城島地域の比較検討から —

- 竹内 雅和
2. 新聞にみる「レクリエーション」という語の用例
についての考察
藪田 硯哉
3. レクリエーション活動種目に関する興味について
— 大学生の場合 —
西野 仁
4. 地域社会のスポーツ振興に関する調査研究
— とくに住民調査の結果を中心に —
塚本真也
5. 婦人スポーツサークル参加者の健康・意識に関する
実態調査
角田 享子
6. 高齢者の若い世代に対する意識について
杉町百合子
7. 戦前の林間学校について
— 主として「日本学校衛生」誌にみられる資料
より —
山田 誠
8. 厚生運動の一考察
— 特に社会情勢とのかかわりに於いて —
坂口 正治
9. 「余暇教育」のための大学体育について
稲垣 保彦
10. “よく遊びよく学ぶ” 児童・生徒の健康および生
活状況の特性
山口 泰雄, 長久 保賢
11. キャンプにおける泣きの研究
飯田 稔
12. 幼児キャンプ参加者の社会性の発達と母親の養育
態度
諸澄 敏之
13. 幼児キャンプにおけるキャンパー・カウンセラー
人間関係, 評定尺度に関する研究
赤井利男
14. 看護学校におけるキャンプの実態について
野沢 巖
15. 女子大生のキャンピング体験と意識に関する調査
国馬 善郎
16. アメリカにおける Outward Bound School に
関する研究
— Doctoral Dissertation を中心に —
井村 仁
17. 義務教育段階における野外教育の将来 (中間報告)
— デルファイ法による将来予測 —
師岡 文男
18. キャンプにおけるカウンセラーのリーダーシップ
機能に関する研究
倉本 満枝
19. 現代レジャーブームの一環としてのスキーブーム
伊藤 新子
20. レクリエーション指導者 (上級・一級) の現状と
特性
神崎 清一, 池田 勝
- 《第9回学会大会》 - 1979年 -
1. 高齢者のコミュニティー活動に関する実態
— 自主運営の高齢者健康クラブを中心として —
梅津 迪子
2. コミュニティー・スポーツ活動の拠点づくり
— 住民の組織化について実践的考察
斉藤 源吾
3. 学校開放施設における一考察
鈴木 孝雄
4. 市区町村レクリエーション団体の実態について
千葉和夫ほか
5. ゲームで使用される用具の変遷 (その1)・さい
ころの形とその使い方
小林 武雄
6. 幼児における体力測定方法についての一考察
— 従来の方法と興味づけした場合 —
田村 岳史, 山崎 律子
7. 農耕従事者レクリエーショントレーニングについて
稲垣 保彦, 足立 原貫
8. 体育・スポーツ的レクリエーション活動が身体障

害者に果たす役割

〈四肢麻痺者のケース事例より〉

渋谷美和子

9. 女性のからだと運動について

角田享子

10. 心理的特性と余暇活動に関する調査研究

— 職業訓練校生を事例として —

小田南州生

11. レクリエーション活動の社会的構造について

西野 仁

12. 義務教育段階における野外教育の将来

— デルファイ法による将来予測 —

師岡 文男

13. ビブリオグラフィカルワークの検討と修正に関する研究

— Rolf Meyershon が Journal of Leisure Research Vol. 1., Winter 1969に発表したものを中心に —

鈴木 秀雄 (関 東 学 院 大 学)

〈第10回学会大会〉 - 1980年 -

1. キャンプにおける女子学生の対人態度の変容

橋 直隆

2. 冒険キャンプ経験が中学生の不安に及ぼす影響

井村 仁, 飯田 稔

3. レクリエーションとしてのサイクリング教育

— 特にサイクリングコースのセッティング —

田崎健太郎

4. 石川県におけるアウトドア・レクリエーション活動と環境教育に関する実態

杉尾邦江 (フ レ ッ ク 研 究 所)

5. フランスにおける自然公園行政の現状と問題点

— 特にレジオン自然公園のレクリエーション的および社会経済的意義について —

守能 信次 (中 京 女 子 大 学)

6. パーコロジー研究①

— 自然空間におけるレクリエーション行動の生態調査と分類 —

進士五十八 (東 京 農 業 大 学)

小倉きみえ

7. ゲームで使用される用具の変遷 (その2)

— 盤ゲーム分類について—考察 —

小松 武雄 (日 本 大 学)

8. ゲーム指導の評価の分析

末吉守英ほか (大 阪 体 育 大 学)

9. 運動経験のもつ意味とレクリエーション指導に関する一考察

近藤 良享

10. 女性のからだと運動について

— 動きと排尿 —

角田 享子 (淑徳保育専門学校)

11. コミュニティ・レクリエーションの社会的機能に関する一考察

— 社会的相互作用性と社会的事業参加について —

海老 原修 (東 京 大 学)

12. コミュニティスポーツの住民組織に関する研究

新出 昌明 (東 海 大 学)

13. 企業内レジャーと人間関係

— Work Motivation への寄与という観点から —

香川 真

14. 職場レクリエーションの実態調査

浅野 晃 (日本レクリエーション協会)

15. ゲートボールに関する調査研究

金崎 良三 (九 州 大 学)

16. ゲートボール運動の現状と課題

青木 泰三

17. 体育専攻学生の生活時間について

瀬戸純子ほか

18. 社会福祉におけるレクリエーション視点

藺田硯哉ほか

19. 日本人のレジャー構造に関する研究

— クオリティ・オブ・ライフと関連して —

畑 孝幸ほか

20. 北アメリカにおけるレジャー行動研究の動向

原田 宗彦

21. アメリカにおけるレクリエーション指導者の養成方法に関する研究

—特に現職教育にいて—

三浦 裕, 浅田 隆夫

22. キャンプ・カウンセラーの性格的特性に関する一研究

—特にキャビン・グループに凝集性との関係について—

原田 宗彦 (筑波大学大学院)

23. 教育的組織的キャンプにおけるキャンプカウンセラーの指導に関する研究

—日本体育大学キャンプ実習の場合—

森 慶治 (日本体育大学)

24. スキー実習時における人間関係の深まりに関する研究

土井 浩信 (警察大学)

研究

～明治初期の日光地域について～

永嶋 正信 (東京農業大学)

A-8 自然歩道の計画標準策定に関する研究

麻生 恵 (東京農業大学)

A-9 森林のレクリエーション開発と地場産業について

宮林 茂幸 (東京農業大学)

A-10 現地社会におけるレジャーの検討

～創造性の問題を中心に～

力野 由美 (筑波大学大学院)

A-11 Interest からみな Recreation の Concept Design に関する研究

～特にその Interest-Habituation について～

新保 淳 (筑波大学)

A-12 子どものスポーツ参加における家族の影響について

～スポーツ組織参加者と非参加者の比較検討～

海老原 修 (東京大学大学院)

A-13 コミュニティ・スポーツとコミュニティ形成

堺 賢治 (愛媛大学)

A-14 スポーツクラブ参加と生活構造の変化

～三鷹市家庭婦人スポーツクラブ参加者の場合～

今野 守 (日本大学)

A-15 公民館組織の委員とスポーツ活動に関する研究

新出 昌明 (東海大学)

B-1 プレイ教育について若干の考察

～その方向性について～

高松 昌宏 (筑波大学大学院)

B-2 キャンプ・カウンセラーの不安に関する研究

平野 吉直 (筑波大学大学院)

B-3 キャンプにおけるカウンセラーの者動分析

～特に「しかる」を中心に～

久保田康雄 (筑波大学大学院)

B-4 Adventure Program 経験が参加者の不安に及ぼす影響

《第11回学会大会》 - 1981 -

A-1 高齢者キャンプ参加者のキャンプに対する期待と満足について

高見 彰 (筑波大学大学院)

A-2 高齢者の体育・スポーツ指導に関する研究

松浦三代子 (東京女子体育大学)

A-3 高齢者の余暇の意識構造と利用度の考察

金 命祚 (国立釜山大学)

A-4 精神薄弱(児)者の心身の発達と社会参加を促進するためのスペシャル・オリンピックに関する研究

鈴木 秀雄 (関東学院大学)

A-5 パーコロジー研究②園地空間に於ける静的休養行動者間の安定間距のスケール実験調査

進士五十八 (東京農業大学)

A-6 中高層住宅団地内における子どもの情操にかかわる屋外レクリエーション空間のあり方

満園 武雄 (榊石勝エクステリア)

A-7 我が国の野外レクリエーション利用に関する

井村 仁 (筑波大学大学院)

B-5 女子学生のキャンプにおける自己概念の変化
に及ぼす要因

星野 敏男 (明治大学)

B-6 長期キャンプの意義に関する研究

～特に人間関係を中心として～

清水 雅己 (筑波大学大学院)

B-7 学校キャンプ参加者のキャンプ活動に関する
調査

仲野 寛 (筑波大学大学院)

B-8 青少年海外自然教育活動の運営に関する一考
察

竹谷 和之 (筑波大学大学院)

B-9 雪上キャンプにおけるテント及びイグルー内
温度の変動について

金子 和正 (筑波大学大学院)

B-10 飯盒炊さんにおける飯盒反転の意味

野沢 巖 (埼玉大学)

B-11 登山時における幼児の心拍変動

山本 悟 (筑波大学大学院)

B-12 日本における溪流カヌーの普及の現状と問題
点

芳賀 健治 (山口女子大学)

B-13 スキーにおける片側偏重に関する研究

村上 利栄 (筑波大学大学院)

B-14 イメージ・トレーニングを用いたパラレル・
ターンの指導法について

浦田 憲二 (筑波大学大学院)

B-15 全日本スキー連盟のスキー教室におけるスキー
技術と指導体系の変遷

外川 重信 (筑波大学大学院)

《第12回学会大会》 -1982-

1. 「レクリエーション活動の誘因構造について」

早崎 正城 (宮崎法律経済研究所)

2. 「機能概念としての「体育」と「レクリエーシ
ョン」に関する一考察」

山下 和彦 (福岡大学)

3. 「子どもの水泳教室参加に対する親の役割」

梶沢 聖子 (日本大学)

4. 「子どもの水泳教室参加に対する親の意志決定過
程」

山岸 明郎 (日本大学)

5. 「レクリエーションに関する若干の考察

— 観光レクリエーションを中心として —」

松原 洋三 (立教大学)

6. 「家庭婦人のスポーツクラブ参加と家族関係」

今野 守 (日本大学)

7. 「ランニング愛好者にみる価値志向の変容」

宮川 雅 (日本大学)

8. 「スキー・セミナー参加学生の意識調査」

阿部 信博 (日本大学)

9. 「〈クリケット〉に関する研究」

山田 誠 (神戸市外国語大学)

10. 「鹿教湯温泉ヘルスケアトレーナーの運動プログ
ラム

— 第一報 —」

丸山久美子 (鹿教湯温泉健康保養協会)

11. 「リハビリテーション病院におけるレクリエーシ
ョン (第1報)

— 鹿教湯病院におけるレクリエーション活動10
年のあゆみ —」

藤田 勉 (鹿教湯病院)

12. 「わが国野外レクリエーションの利用に関する研
究II

— 特に日光地域の基地条件について —」

永嶋 正信 (東京農業大学)

13. 「児童の野外空間活動における基本問題等との考
察

— 特に児童の野外キャンプにおける自然との接
触について —」

五十嵐葉子 (杉並区役所)

14. 「女子学生のキャンプにおけるプログラムと不安
の変化について」

星野 敏男 (明治大学)

15. 「野外活動指導者に関する管理的研究
— Leader Serviceをめぐる基本的課題 —」
石橋 保 (福岡教育大学)
16. 「野外レクリエーション活動が活動地域に及ぼす
インパクトについて
— 特に、地元中学生の意識を中心に —」
高野 透 (筑波大学大学院)
17. 「中高年高血圧者のキャンプ生活による効果につ
いて」
川村 協平 (山梨大学)
18. 「視覚障害者の夏山登山の現状について
— 大阪市盲人福祉協会の場合 —」
堀 良子 (帝塚山学院大学)
19. 「精神病院におけるゲートボール活動
— レクリエーション療法種目の一つとして —」
鈴木 定 (順天堂越谷病院)
20. 「精神科病院における集中的レクリエーション指
導の試み
— 3泊4日の野外活動を通じての報告と考察 —」
末吉 光彦 (八幡厚生病院)
21. 「高齢者の健康体力意識調査の一報告」
渡辺 岑生 (専修大学)
22. 「高齢者の体育・スポーツ指導に関する研究 (第
2報)
— 運動経験による体力の変化について —」
大森 雅子 (東京女子体育大学)
- 《第13回学会大会》 - 1983 -
1. 「学生のレジャー行動と交友関係についての研究
— とくにライフ・スタイルの側面から —」
栗原 邦秋 (東海大学大学院)
川向 妙子 (東海大学)
高橋 和敏 (東海大学)
2. 「大学生の余暇活動の変容」
日比野朔郎 (京都府立大学)
3. 「子どもスイミングスクール参加に対する親の期
待」
椛沢 聖子 (日本大学)
- 田中 鎮雄 (日本大学)
山岸 明郎 (日本大学)
松林 肇 (日本大学)
武田 正司 (日本大学)
4. 「地域における家庭婦人ソフトボールクラブ活動
の一考察」
大杉 淳子 (作陽音楽大学)
5. 「家庭婦人のスポーツクラブ参加と家族関係
— バレーボールクラブの分析を中心にして —」
今野 守 (日本大学)
田中 鎮雄 (日本大学)
武田 正司 (日本大学)
6. 「ランニング愛好者にみる価値志向
— 女性ランナーを中心にして —」
宮川 雅 (日本大学)
田中 鎮雄 (日本大学)
藤井 立三 (明星大学)
今野 守 (日本大学)
7. 「企業内における健康づくりの実態について」
星野 敏男 (明治大学)
鎌田 英爾 (工学院大学)
鈴木 文夫 (余暇開発センター)
8. 「勤労者の健康・体力に関する調査研究」
横山 文人 (筑波大学大学院)
池田 勝 (筑波大学)
9. 「精神分裂病患者における在院時のレク活動への
関わり方」 鈴木 定 (順天堂越谷病院)
10. 「肢体障害者の運動興味に関する考察」
金 命祚 (釜山大学)
11. 「治療的レクリエーションが軽症成人病所見者に
及ぼす影響」
植屋 悦男 (中日本体力問題研究所)
植屋 節子 (中日本体力問題研究所)
加藤 道子 (中日本体力問題研究所)
横野しず香 (中日本体力問題研究所)
12. 「スポーツ・レクリエーション車椅子者 (背髄損
傷者) に対するテニス指導の試み」

村上 茂子

(神奈川県総合リハビリテーション・センター)

13. 「第6回国際スペシャルオリンピック夏季大会日本選手団参加報告とその足跡」

鈴木 秀雄 (関東学院大学)

14. 「高齢化社会における指導者養成(横浜市)についての一考察」

角田 亨子 (濃徳保育生活文化専門学校)

松浦三代子 (東京女子体育大学)

15. 「ゲートボール活動の普及と変化」

田中 史郎 (勸公園緑地管理財団)

16. 「楽しみの構造分析

～スポーツや運動における世代的、性的特性～」

山本 清洋 (岡山県立短期大学)

犬飼 義秀 (岡山県立短期大学)

17. 「レジャー行動における「動機」と「期待」について

～第1報 方法の検討と手法としての質問紙の開発～」

西野 仁 (東海大学)

メアリー・ウォルシュ (イリノイ大学大学院)

今野 守 (日本大学)

18. 「レクリエーション活動と社会・経済的要因の関係に関する研究」

海老原 修 (東京大学大学院)

《第14回学会大会》 -1984-

- A-1 高齢化社会におけるスポーツ・レクリエーションの対応に関する一考察

後藤 哲也 (中京大学大学院)

- A-2 宗教活動のもつレクリエーション要素について

～レクリエーションの生活化からのアプローチ～

田中 一行 (尼崎南高等学校良元分校)

- A-3 ジョルジュ・パタイユの視角からとられたスポーツ・レクリエーション

芳賀 健治 (東京家政学院大学)

- A-4 児童の心理的特性と親の教育的態度, 感覚教

科目の好悪, 成績との関係

～一次集計による基礎的考察～

梅津 廸子 (女子聖学院短期大学)

- A-5 子供の体育教室参加に伴う遊び生活の変容

綿田 育代 (日本大学)

- A-6 スポーツ参加と職場環境への適応

増田 慧 (日本大学)

- A-7 スポーツ参加と従業員の生きがい

今野 守 (日本大学)

- A-8 老後における余暇に関する一研究

～サークル所属者と非所属者との相違について～

鷲見 勝博 (中京大学)

- A-9 スポーツ・レクリエーション行動研究における方法論考察I

～活動参加調査における回答誤差に関する研究～

原田 彦彦 (ペンシルベニア州立大学)

- A-10 肢体障害大学生の障害部位別による体育活動興味調査研究

金 命祚 (釜山大学)

- B-1 欧米における余暇・レクリエーションに関するデータベースと文献情報検索システムについて

山口 泰雄 (鹿屋体育大学)

- B-2 浜名湖地域における水域利用拠点の適性配置に関する調査

毛塚 宏 (ラック計画研究所)

- B-3 フィットネス運動に関するシステム・アプローチ

横山 文人 (筑波大学大学院)

- B-4 新聞記事にみる「緑のレクリエーション活動」の成立とその特性

伊藤 俊哉 (ダイヤモンド造園技研)

- B-5 リハビリテーション病院におけるレクリエーション(第2報)

～レク・アンケートを実施して～

金野 智秀 (鹿教湯病院)

- B-6 保育所にみる健康・体力づくりに関する試み

～体力測定結果の指導へのフィードバックにつ

いて～

深代 千之(鹿屋体育大学)

B-7 学校レクリエーションの視標

稲垣 保彦(富山大学)

B-8 地域における家庭婦人ソフトボール・クラブ
活動の特に技術面についての一考察

大杉 淳子(作陽音楽大学)

B-9 高齢化社会における指導者養成(横浜市)に
ついての一考察(第2報)

角田 享子(淑徳保育生活文化専門学校)

B-10 余暇生活診断法の開発に関する研究(1)
～既存余暇生活関連診断法の内容分析～

今井 毅(日本体育大学)

《第15回学会大会》 -1985-

A-1 キャンプリーダーの不安について

— 障害児デイ・キャンプにおける初参加リー
ダーの場合 —

高橋 伸(国際基督教大学)

A-2 中途視覚障害の余暇時間

— 生活時間調査の結果から —

渡辺 文治

(神奈川県総合リハビリテーションセンター)

A-3 野外レクリエーション空間としての都道府県
立自然公園の現状に関する調査研究

永嶋 正信(東京農業大学造園学科)

A-4 大都市近郊における森林レクリエーションに
ついて

— 東京都西多摩都奥多摩町におけるレクリエ
ーション需給の現状と問題点 —

宮林 茂幸(東京農業大学林学科)

A-5 都市公園の利用者による公園評価等に関する
研究

— 北習志野近隣公園の場合 —

小川 貫(日本大学)

A-6 スキー講習中におけるスキーヤーの危険認知
について

金子 和正(共栄学園短期大学)

A-7 レジャーと身体活動の運動量に関する研究

— 短大生の場合 —

西田 俊夫(淑徳短期大学)

A-8 スポーツ参加のコミュニティ・モラル形成
機能に関する研究

— 特に、自治省モデル・コミュニティについ
て —

川西 正志(鹿屋体育大学)

A-9 三隅達郎のレクリエーション観に関する研究
谷戸 一雅(余暇問題研究所)

B-1 レクリエーションワークの効果測定法につい
ての研究

千葉 和夫(日本レクリエーション協会)

B-2 伝承遊びの構造分析

山本 清洋(東京都立大学)

B-3 勉学志向とスポーツ・レクリエーション行動
樺澤 聖子(日本大学)

B-4 高齢者のための健康・レクリエーション教室
参加とその機能

小俣里知子(日本大学)

B-5 従業員のレクリエーション行動と職場環境
(認知)

武田 正司(日本大学)

B-6 スポーツクラブ参加に対する親の期待

— 期待のタイプと関連要因との関係 —

綿田 育代(日本大学)

B-7 キャンプ事前調査結果についての一考察

— 特に参加の動機と期待についての親子の比
較を中心として —

上野 幸(余暇問題研究所)

B-8 農村生活体験が子供に与える影響について

宮下 桂治(順天堂大学)

B-9 余暇生活診断法の開発に関する研究(2)

— 診断法モデルの構造と機能 —

今井 毅(日本体育大学)

B-10 レクリエーション指導の基本構造に関する一
考察

藪田 颯哉 (日本レクリエーション協会)

- B-11 地域レクリエーション協会による長期継続型
指導者養成機関の運営に関する考察 (第1報)
— 八王子レクリエーション学園における実践
モデルの分析 —

三本 勲夫 (八王子レクリエーション学園)

《第16回学会大会》 - 1986 -

- A-1 幼児の運動遊びと親の教育態度
綿田 育代 (日本大学)
- A-2 子どもの社会化過程と運動・スポーツ行動
— 親の意識分析から —
松村 悦博 (日本大学)
- A-3 勉学志向とスポーツ・レクリエーション行動
(第2報)
栞沢 聖子 (日本大学)
- A-4 幼児保育の今日的課題 — 「就学前教育」 —
『課業と遊び』 — の予備的考察 —
浅田 隆夫 (目白学園短期大学)
- A-5 「幼児期」における発達課題について
— 基本的生活習慣・母親の期待像等を中心と
して —
梅津 廸子 (女子聖学院短期大学)
- A-6 幼児の社会的な生活習慣の育成について
堀 良子 (帝塚山学院大学)
- A-7 領域: 「音楽リズム」に関する幼児の遊戯行
動
深山千穂子 (女子聖学院短期大学)
- A-8 幼児教育における「課業 (領域「自然」「健
康」「絵画製作」)」遊びとの関係についての考
察
松浦三代子 (東京女子体育大学)
- A-9 ソビエトのピオネールキャンプに関する研究
里見 悦郎 (東海大学大学院)
- A-10 児童キャンプの教育的効果に関する一研究
— 自主性診断検査 (DTI) からみた自主性の
効果を中心として —
馬場進一郎 (日本体育大学)

- A-11 キャンプ期間についての基礎的研究

— 中学校教員の意識の分析 —

福田 芳則 (大阪体育大学)

- A-12 レクリエーションスキーの技術評価に関する
研究

金子 和正 (共栄学園短期大学)

- A-13 アメリカにおける野外教育の歴史と展望

星野 敏男 (明治大学)

- B-1 「レクリエーション」に対するイメージの研
究

— とくに大学生の事例比較を中心に —

高橋 伸 (国際基督教大学)

- B-2 学生生活における Re-creation 行動に関
する研究

— N大学の場合 —

阿部 信博 (日本大学)

- B-3 日本厚生協会設立までの経緯

沢村 博 (日本大学)

- B-4 女子従業員のレクリエーション参加と職場環
境認知

増田 慧 (日本大学)

- B-5 余暇・スポーツデータベースの情報サービス
の現状と課題

山口 泰雄 (鹿屋体育大学)

- B-6 体育・レクリエーション・プログラム評価に
関する経営学的研究

— ライフサイクル理論の応用 —

原田 宗彦 (鹿屋体育大学)

- B-7 高齢者の健康・レクリエーション教室参加と
その効果

小俣里知子 (日本大学)

- B-8 高齢者スポーツの振興に関する研究

— 高齢者スポーツの在り方とその方向性につ
いて —

山本 英毅 (日本福祉大学)

- B-9 コミュニティ・レクリエーション活動圏と日
常生活圏の関係について

- 海老原 修 (東 京 大 学)
- B-10 ニュージーランドの都市空間における創造的野外レクリエーションの実態とその事例
杉尾 邦江 (プレッス研究所)
- B-11 都市公園の利用者による評価等に関する研究
— 船橋市内二公園の比較から —
小川 貫 (日 本 大 学)
- B-12 キャンプ場の利用状況と施設の評価について
— 白州町菅尾白の森キャンプの場合 —
朝倉 徳雄 (日 本 大 学)
- 竹内 正雄 (星 薬 科 大 学)
- B-4 スポーツ消費者のライフスタイルに関する研究
原田 宗彦 (大 阪 体 育 大 学)
- B-5 生涯スポーツとしてのディスク・スポーツに関する研究(1)
～高齢者におけるディスク・ゴルフについて～
手塚 麻美 (榊 ピ ー プ ル)
- B-6 レクリエーションに関するイメージの研究
～特に「楽しい」および「遊び」を中心として～
高橋 伸 (国 際 基 督 教 大 学)
- B-7 学生生活における RE-CREATION 行動に関する研究
阿部 信博 (日 本 大 学)
- 《第17回学会大会》 -1987-
- A-1 ソビエトのピオネール組織に関する研究
～ピオネールの活動と組織, 運営について～
里見 悦郎 (東 海 大 学)
- A-2 キャンパーの観察方法に関する一考察(第2報)
谷戸 一雅 (余 暇 問 題 研 究 所)
- A-3 「アメリカ大統領野外活動諮問委員会(PCAO)答申」にみるアメリカの野外レクリエーションの動向
師岡 文男 (上 智 大 学)
- A-4 子ども社会化過程と運動遊び
綿田 育代 (日 本 大 学)
- A-5 「運動遊びの課業化」カリキュラム構成に関する研究
梅津 廸子 (女子聖学院短期大学)
- A-6 幼児の運動遊びの規定要因
松浦三代子 (東京女子体育大学)
- A-7 音楽・リズムあそびの課業化に関する研究
深山千穂子 (女子聖学院短期大学)
- B-1 リゾート地における男子中高年での軽度健康異常者の短期保養の効果
大堀 孝雄 (東 海 大 学)
- B-2 高齢者健康・レクリエーション教室参加とその効果(Ⅱ)
小俣里知子 (日 本 大 学)
- B-3 中高年者の社交ダンスに関する研究
～参加者の意識とその運動強度について～
- 《第18回学会大会》 -1988-
- A-1 子どもの遊びの実態について
大平 滋 (浜 松 短 期 大 学)
- A-2 リズムあそびを通しての対人認知発達について
鈴鹿 信子 (第 1 保 育 短 期 大 学)
- A-3 体力レベルと日常生活関連要因の関係について
海老原 修 (横 浜 国 立 大 学 教 育 学 部)
- A-4 事務職員のレクリエーション活動の疲労回復効果に関する研究(1)
伊藤 順子 (日 本 体 育 大 学)
- A-5 学校キャンプ実施期間についての基礎的研究Ⅱ
福田 芳則 (大 阪 体 育 大 学)
- A-6 リゾート開発の現状と課題
村越 千春 (住 環 境 計 画 研 究 所)
- A-7 社会体育「専門職」の指導者マーケットに関する研究
原田 宗彦 (大 阪 体 育 大 学)
- A-8 フライングディスクの普及と発展に関する研究
島 健 (上 智 大 学)
- A-9 ソビエトの社会人レクリエーション制度成立過程に関する研究
里見 悦郎 (東 海 大 学)
- A-10 ホノルルマラソンフィニシャー・日米比較研究
山田 文男 (大 谷 女 子 大 学)

《第19回学会大会》 - 1989 -

- A-1 自然意識について
○塚本 珪一（日本余暇文化振興会）
- A-2 環境教育の視点を持つ野外レクリエーション・プログラムの開発に関する研究（I）
～プログラム開発の意義を中心として～
○伊藤 順子（日本体育大学）
- A-3 山岳性リゾートにおける統合化の分析
～長野県八方尾根，岩岳，栲池高原スキー場の事例研究～
○井坂 保子（鹿屋体育大学大学院）
- A-4 地域住民側からみたリゾート開発（I）
～旅行型レジャー活動実施者のリゾートイメージ～
○川西 正志（鹿屋体育大学）
- A-5 地域住民側からみたリゾート開発（I）
～リゾート法の認知状況とリゾートイメージについて～
○菊地 秀夫（鹿屋体育大学）
- A-6 西歴2000年の我が国レジャー施策の方向
～デルファイ調査結果より～
○西野 仁（東海大学）
- A-7 民間スポーツクラブの将来予測に関する研究
○富山 浩三（大阪YMCA社会体育専門学校）
- A-8 スポーツクラブ会員のプログラム参加に影響を及ぼす要因に関する研究
～特に，クラブ内の仲間の影響について～
○藤本 淳也（鹿屋体育大学大学院）
- A-9 登校拒否中学・高校生に対する冒険キャンプの効果
○飯田 稔（筑波大学）
- A-10 キャンプと健康（第1報）
～中高年・老人のキャンプ～
○川村 協平（山梨大学教育学部）
- A-11 中高年齢者とダンスの適合性に関する研究
○山下 昭子（神奈川大学）
- A-12 社交ダンスの運動強度に関する研究
～一般中高年者について～
○竹内 正雄（星葉科大学）
- B-1 学校レクリエーションの研究
～その内容と推移について～
○田中 一行（兵庫県立西宮今津高等学校）
- B-2 児童・生徒の生活時間に関する国際的比較研究
○長ヶ原 誠（鹿屋体育大学大学院）
- B-3 子ども会におけるスポーツ活動の現状と課題
～特に，球技大会を中心に～
○仲野 隆士（中京大学）
- B-4 コミュニティ・モラルとコミュニティ活動の関連性に関する研究
～地域スポーツ集団を中心に～
○金子 守男（中京大学）
- B-5 地域スポーツ指導者におけるキャリア・パターンの分析
○岳藤 史泰（鹿屋体育大学大学院）
- B-6 レクリエーション指導者養成Ⅱ類課程認定校の就職マーケットに関する研究
～特にリゾート関連企業のマーケットについて～
○野村 一路（日本体育大学）
- B-7 スポーツ・レクリエーション指導者のドロップアウトに関する要因論的研究（I）
～指導活動にともなう生活支障とのめり込み度との関連を中心に～
○松尾 哲也（福岡大学）
- B-8 スポーツイベントにおけるボランティア活動の継続意欲に関する研究
～満足度が継続意欲に及ぼす影響について～
○綿 祐二（鹿屋体育大学大学院）
- B-9 オープンスペースでの体育・スポーツ的活動について
○青沼 増美（勤労青少年指導者大学講座）
- B-10 視覚障害者のレクリエーションに関する研究
○永松 義博（福岡県立久留米農芸高校）
- B-11 精神薄弱者のレクリエーション活動における

心拍数の変化について

○御代田成人（相模原市けやき体育館）

B-12 ユーザーからみた海洋スポーツの需要に関する研究(1)

○酒井 哲雄（鹿屋 体 育 大 学）

B-13 水辺レクリエーション活動における水難事故の統計的推移

○真竹 昭宏（筑 波 大 学）

《第20回学会大会》 - 1990 -

A-1 レジャー時代の余暇教育

○久川 太郎（流 通 経 済 大 学）

A-2 ヨハン・ホイジンガのプレイ論に関する歴史的研究

○杉浦 恭（筑波大学大学院研究生）

A-3 東洋的身体観に基づくレクリエーション概念分析の試み

○芳賀 健治（東京家政学院大学）

A-4 「レクリエーション指導」概念の変遷と展望

○千葉 和夫（日本社会事業大学）

A-5 ニュージーランドにおけるガーデニングのレクリエーション的価値

○杉尾 邦江（ブ レ ッ ク 研 究 所）

A-6 自然意識(2)

○塚本 珪一（大阪薫英女子短期大学）

A-7 キャンプ経験による児童の自然観の変化

～連想法を用いて～

○中野 友博（筑 波 大 学）

A-8 冒険キャンプ経験が児童の一般性セルフ・エフィカシーに及ぼす影響

○関根 章文（筑波大学大学院）

A-9 キャンプに対する高齢参加者の意識

～キャンプ参加高齢者の不安を中心として～

○中島 一郎（国 際 武 道 大 学）

A-10 神奈川県における盲人卓球

～練習を支援するボランティアを中心に～

○渡辺 文治

（神奈川県総合リハビリテーションセンター）

A-11 生涯学習社会に向けての生涯学習システムとしての地域生活文化

～山形・黒川能を支える人々の生活史研究をモデルとして～

○梅澤 佳子（日本航空レジャーライフ研究所）

A-12 転換期における国民体育大会の意義と役割に関する調査

～特に生涯スポーツの振興事業としての観点から～

○鴨井 啓（大竹総合科学専門学校）

B-1 「歩くスキー」の概念の明確化に関する一考察

○三浦 裕（北 海 道 教 育 大 学）

B-2 100キロハイクに関する研究

○佐藤 初雄（国際自然大学校NOTS）

B-3 ホノルルマラソン完走者の満足要因の分析

～日本人完走者を対象として～

○松本 耕二（鹿屋体育大学大学院）

B-4 地域におけるスポーツイベントの研究(1)

～菜の花マラソン完走者の満足要因の分析～

○野川 春夫（鹿 屋 体 育 大 学）

B-5 地域におけるスポーツイベントの研究(2)

～ボランティアの継続意欲を規定する要因の分析～

○長ヶ原 誠（鹿 屋 体 育 大 学）

B-6 地域におけるスポーツイベントの研究(3)

～地域ビジネスとの関連から～

○菊地 秀夫（鹿 屋 体 育 大 学）

B-7 成人男性のライフステージから見たレジャー・ライフスタイル

○川西 正志（鹿 屋 体 育 大 学）

B-8 成人男性の旅行程レジャー実施者のパケージン・ライフスタイル

○北村 尚浩（鹿 屋 体 育 大 学）

B-9 スポーツにおける若者（女子）のライフスタイル

○梅津 迪子（女子聖学院短期大学）

B-10 現代青年（女子）のスポーツ意識・行動の傾

向について

○松浦三代子（東京女子体育大学）

B-11 女性の余暇活動参加歴に関する研究

○三宅 基子（日本レクリエーション協会）

B-12 リゾート地におけるレジャー・ダイバーの意識について

○千足 耕一（筑波大学大学院）

B-13 民間スポーツクラブの将来予測に関する研究Ⅱ

～成熟期におけるスポーツクラブ運営への提言～

○富山 浩三（大阪YMCA社会体育専門学校）

《第21回学会大会》 -1991-

A-1 「我が国古典文学に見る“余暇・生活文化”能力の評価」

～『源氏物語』を中心に～

○米村 恵子（財・余暇開発センター）

A-2 「社会体育専攻学生の友人関係における話題と契機についての調査研究」

～とくにその生きがい感とのかかわりから～

○蔦田 倫子（余暇問題研究所）

A-3 「現代女子大生のスポーツ意識の動向」

～大学間の比較～

○松浦三代子（東京女子体育大学）

A-4 「女性の余暇活動に影響を及ぼす要因に関する研究(1)」

～妻の余暇活動に対する夫婦の意識調査から～

○野村 一路（日本体育大学）

A-5 「女性の余暇活動に影響を及ぼす要因に関する研究(1)」

～妻の余暇活動参加パターンの分析から～

○三宅 基子（財・日本レクリエーション協会）

A-6 「余暇行動の実態に関する日・韓比較研究」

～経済的発展と内在・外在的要因との関わりから～

○尹 光鉉（中京大学大学院）

A-7 「レクリエーション運動の展開に関する一考察」

～個に視点をあてたプログラムの試み～

○宮下 桂治（順天堂大学）

A-8 「レクリエーション運動の展開に関する一考察」

～個に視点をあてた余暇情報システムの開発について～

○戸田 安信（船橋市自遊人協会）

A-9 「レクリエーション運動の展開に関する一考察」

～市民の意識変化に対応した実践例から～

○木村 博人（東京水産大学非常勤講師）

A-10 「公共体育館の利用とその誘因に関する研究（Ⅰ）」

～利用者の居住分布との関係～

○田原 淳子（中京大学）

A-11 「公共体育館の利用とその誘因に関する研究（Ⅱ）」

～利用者の活動内容と施設満足度との関係～

○佐藤 馨（中京大学大学院）

A-12 「スポーツ施設のプログラム評価に関する研究」

～特にプログラム・ライフサイクル分析について～

○原田 尚幸（大阪体育大学特別研究生）

A-13 「スポーツイベントへの評価に関する比較研究」

～ホノルルマラソンVS指宿菜の花マラソン～

○野川 春夫（鹿屋体育大学）

A-14 「トライアスロン参加者の満足要因の分析」

○太田 繁（聖徳大学短期大学部）

A-15 「日常的ライフスタイル因子とバケーション・ライフスタイル」

○北村 尚浩（鹿屋体育大学大学院）

A-16 「幼少年期のレジャー行動と青年期のチャンピオンスポーツ志向」

○田辺 英夫（日本大学）

B-1 「商業スポーツクラブ指導者の職務満足に関する研究」

～二要因理論を適用して～

- 岳藤 史泰 (大阪YMCA社会体育専門学校)
- B-2 「レクリエーション上級指導者に関する研究 (I)」
 ～指導者の活動実態について～
 ○永松 昌樹 (中京大学大学院)
- B-3 「レクリエーション上級指導者に関する研究 (II)」
 ～指導及び資格に対する意識を中心に～
 ○仲野 隆士 (中京大学)
- B-4 「社会福祉分野における“レクリエーション指導”概念の変遷と展望」
 ～主として高齢者福祉分野を中心として～
 ○千葉 和夫 (日本社会事業大学)
- B-5 「障害児キャンプ指導者のボランティア活動の継続に関する研究」
 ～ボランティア活動に対する価値意識と役割意識について～
 ○綿 祐二 (東京都立大学)
- B-6 「重度障害者を対象としたかかわり方に関する一考察」
 ～重症心身障害者の余暇生活支援を促進する～
 ○茅野 宏明 (武庫川女子大学)
- B-7 「ブラインドスキー参加者の意識」
 ～アンケート調査の結果から～
 ○渡辺 文治
 (神奈川県総合リハビリテーションセンター)
- B-8 「熟年者の余暇活動に関する研究」
 ○藤本 淳也 (大阪体育大学スポーツ産業特別講座)
- B-9 「高齢者のスポーツに関する調査研究」
 ～グラウンドゴルフ愛好者を対象として～
 ○佐橋 由美 (樟蔭女子短期大学)
- B-10 「高齢者のスポーツイベント参加における意識と行動」
 ○山口 泰雄 (神戸大学)
- B-11 「キャンプに対する高齢参加者の意識(2)」
 ～事前事後における不安の変化を中心として～
 ○中島 一郎 (国際武道大学)
- B-12 「キャンプと健康 (第2報)」
 ～キャンプにおける高齢者の加速度脈波および血圧の変化～
 ○川村 協平 (山梨大学教育学部)
- B-13 「ダンス・パーティー中の心拍反応について」
 ○竹内 正雄 (星葉科大学)
- B-14 「レクリエーションダンスにおける attractive な動きの研究」
 ～上肢について～
 ○井上 九美 (樟蔭女子短期大学)
- B-15 「環境教育の視点を持つ野外レクリエーションプログラムの開発に関する研究II」
 ～環境教育プログラム・ネイチャーゲームの分析～
 ○大島 順子 (日本体育大学)
- B-16 「都市近郊の歩行道“京都トレール”の思考と設定方法」
 ○塚本 珪一 (大阪薫英女子短期大学)
- B-17 「関東地方におけるゴルフコースの立地特性について」
 ○油井 正昭 (千葉大学園芸学部)
- ◀第22回学会大会> -1992-
- A-1 「“レクリエーション指導”からみた高齢者福祉サービスの考察」
 千葉 和夫 (日本社会事業大学)
- A-2 「中高年労働者における定年退職後の余暇活動に関する研究」
 松永 敬子 (大阪体育大学大学院)
 原田 宗彦 (大阪体育大学)
- A-3 「高齢者のキャリアと余暇観・労働観に関する研究」
 綿 祐二 (東京都立大学)
- A-4 「視覚障害者のレクリエーションとボランティアの役割」
 渡辺 文治
 (神奈川県総合リハビリテーションセンター)
- A-5 「ネイチャーゲームの普及と指導者養成に関

- する一考察」
 降旗 信一（ネイチャーゲーム研究所）
 大島 順子（日本体育大学）
- A-6 「S社の野外生活カウンセラー養成報告」
 塚本 珪一（大阪薫英女子短期大学）
- A-7 「子どもスキースクール参加者の期待と満足
 について」
 浦田 憲二（武蔵丘短期大学）
- A-8 「学校週5日制の余暇論的考察」
 山本 清洋（鹿児島大学）
- A-9 「女性市民のスポーツ活動の実施頻度別活動
 状況とニーズに関する研究」
 佐藤 馨（中京大学大学院）
 田原 淳子（中京大学）
 守能 信次（中京大学）
- A-10 「ライフコースの視点から見たスポーツ活動
 参加パターンに関する研究」
 藤本 淳也（大阪体育大学）
 原田 宗彦（大阪体育大学）
- A-11 「体力と生き甲斐の関連性検証の試み」
 橋本 和秀（余暇問題研究所）
 栗原 邦秋（余暇問題研究所）
 川向 妙子（東海大学）
- A-12 「レジャー行動からみた身体活動量に関する
 研究」
 — 高校生の場合 —
 西田 俊夫（淑徳短期大学）
- B-1 「女子大学におけるレジャー教育の問題と今
 後への期待」
 — 短大卒業生からみた —
 荒井 啓子（武蔵野短期大学）
- B-2 「草野球参加に及ぼす高校野球の影響」
 横井 康博（中京大学大学院）
 藤原 健固（中京大学）
- B-3 「台湾における早期レクリエーションに関す
 る研究」
 — 台南市での晨間運動を事例に —
- 蔡 守浦（中京大学大学院）
 守能 信次（中京大学）
 永松 昌樹（中京大学大学院）
- B-4 「スポーツとしてのゴルフに関する一考察」
 — ニュージーランドのゴルフを事例として —
 山本 英毅（日本福祉大学）
- B-5 「ニュースポーツ愛好者のスポーツ意識と活
 動参加意欲について」
 佐橋 由美（樟蔭女子短期大学）
- B-6 「スポーツクラブ・ユーザーの消費者行動研
 究」
 — 性差と婚姻別にみた消費者選好について —
 二宮 浩彰（中京大学大学院）
 菊地 秀夫（中京大学）
 守能 信次（中京大学）
 永吉 宏英（大阪体育大学）
- B-7 「“まちづくり”としてのスポーツ戦略の検
 討」
 — “船橋市スポーツ健康都市宣言”による活
 動を事例として —
 戸田 安信（船橋市自遊人協会）
 宮下 桂治（順天堂大学）
 木村 博人（順天堂大学嘱託）
- B-8 「地域と学校のネットワーク化をめざしたス
 ポーツ活動の実践的戦略」
 — フライング・ディスク・ゴルフの展開を事
 例として —
 宮下 桂治（順天堂大学）
 木村 博人（順天堂大学嘱託）
 戸田 安信（船橋市自遊人協会）
- B-9 「長期移動型キャンプの効果に関する一考察」
 — “房総フロンティアアドベンチャー'92イ
 ン山武”の事例から —
 木村 博人（順天堂大学嘱託）
 宮下 桂治（順天堂大学）
 戸田 安信（船橋市自遊人協会）
- B-10 「水戸偕楽園の開園目的について」

永嶋 正信 (東京農業大学)

B-11 「新潟県燕温泉の発展過程に関する研究」

油井 正昭 (千葉大学)

木下 晴雄 (千葉大学大学院)

古谷 勝則 (千葉大学)

B-12 「遊園地に関する研究」

— 特に遊園地の選択条について —

上林 利広 (大阪体育大学大学院)

原田 宗彦 (大阪体育大学)

上野 直紀 (明星大学)

鈴木 秀雄 (関東学院大学)

A-11 「周遊型旅行者の旅行形態に関する研究」

— 特に北海道でバイクツーリングをしている
旅行者に注目して —

永井 信 (大阪体育大学大学院)

A-12 「スポーツに関するコマーシャル・フィルム
が企業イメージに与える影響に関する研究」

松岡 宏高 (大阪体育大学大学院)

B-1 「レクリエーション指導者の養成制度をめぐる
諸問題について」

堀 建治 (名古屋文化学園保育専門学校)

B-2 「レクリエーション・ワークショップが指導
者養成に果たした役割について」

高橋 伸 (国際基督教大学)

B-3 「地域社会におけるリーダー育成の事例報告」

阿部 信博 (日本大学理工学部)

B-4 「高齢者の生活充足と余暇活動参加に関する
研究」

— 愛好スポーツの性格と関連して —

佐橋 由美 (樟蔭女子短期大学)

B-5 「軽度痴呆患者に対する現実見当識訓練を用
いたレクリエーションについて」

松本あづさ (鶴岡学院リハビリテーション科)

B-6 「盲学校におけるレクリエーション・スポー
ツについて」

— 行事・体育・クラブの種目 —

渡辺 文治

(神奈川県総合リハビリテーションセンター)

B-7 「キャンプと健康(3)」

— キャンプにおける幼児とカウンセラーの加
速度脈波 —

川村 協平 (山梨大学教育学部)

B-8 「高校生のライフスタイルと身体活動量との
関係」

西田 俊夫 (淑徳短期大学)

B-9 「ボールルームダンスの健康意識に関する研

《第23回学会大会》 -1993-

A-1 「韓国の国立公園における自然環境保全のた
めの利用規制について」

趙 泰東 (千葉大学大学院)

A-2 韓国の智異山国立公園の景観特性と利用動向」

古谷 勝則 (千葉大学大学院)

A-3 「八溝山地域の景観特性について」

油井 正昭 (千葉大学園芸学部)

A-4 「ネイチャーゲームの普及と指導者養成に関
する一考察2」

降旗 信一 (日本ネイチャーゲーム協会)

A-5 「アウトドア・レジャーや自然志向の高まり
におけるネイチャーゲームの役割と可能性」

大島 順子

(日本体育大学・日本ネイチャーゲーム協会)

A-6 「『地図づくり』プログラムについて研究」

塚本 圭一 (大阪薫英女子短期大学)

A-7 「日本厚生協会の活動に関する一考察」

谷戸 一雄 (余暇問題研究所)

A-8 「Russell L.Durgin に関する研究」

— Russell L.Durgin が果たした我国レクリ
エーション運動における功績 —

半谷 謙寿 (東京YMCA社会体育専門学校)

A-9 「ラケットボールの経緯と今後の動向」

石塚千登勢 (明治大学)

A-10 「レジャー及び生涯スポーツとしての海洋講
座 (マリンプログラム)」

— 大学におけるヨットカリキュラムの検討 —

究」

竹内 正雄(星 葉 科 大 学)

B-10 「川崎市在住女性の自由時間行動に関する分析」

—とくに休日の実態・希望及び目的について—

川向 妙子(東 海 大 学)

B-11 「居住意識と地域スポーツ活動の関連性についての検討」

大北 文生(東 海 大 学)

B-12 「余暇生活相談室利用者の分析」

三本 勲夫(八王子レクリエーション学院)

≪第24回学会大会≫ -1994-

A-1 女性の「ライフスタイル」と学習意識との関係
～特にM短大卒業生について～

○堀 良子(帝 塚 山 学 院 大 学)

A-2 女性の学習行動の現状と課題

～学習内容の比較から～

○荒井 啓子(武 蔵 野 短 期 大 学)

A-3 「学習タイプ」からみた女性の生き方について

○松浦三代子(東京女子体育大学)

A-4 生涯学習の意識に関する一考察

～「家族の収入」と「ライフコース」を中心に～

○寺嶋 文代(都 立 北 多 摩 高 校)

A-5 白山源三郎・三隅達郎にみる日本における初期のレクリエーション観

～関東学院大学でのインタビュー(1980年1月13日)を中心に～

○鈴木 秀雄(関 東 学 院 大 学)

A-6 幼児の「自然-自由遊び」の教材化に関する試み

～特に教材化とその価値の決め手の問題を巡って～

○佐藤 朝代(け や の 森 学 園)

A-7 サッカーくじ導入の功罪に関する一考察

○山田 文男(大 谷 女 子 大 学)

A-8 国民体育大会の意義と役割に関する研究

～特に沖縄、京都、東四国国体における地域住

民の意識の比較について～

○長積 仁(大阪体育大学研究員)

A-9 高齢者の QOL に対する余暇活動参加の影響

○佐藤 由美(樟 蔭 女 子 短 期 大 学)

A-10 中・高年者の日常行動における快・不快の意識

○阿部 信博(日 本 大 学 工 学 部)

A-11 セラピューティックレクリエーションの視点からみた社会福祉施設支援

～デイホームのプログラムサービスについて～

○飯田 明(東京体育専門学校)

鈴木 秀雄(関 東 学 院 大 学)

A-12 障害者スポーツ施設職員のレクリエーション認識に関する研究

○野村 一路(日 本 体 育 大 学)

B-1 「地図づくり」プログラムについての研究(2)

○塚本 圭一(大阪薫英女子短期大学)

B-2 キャンプと健康(第4報)

○川村 協平(山 梨 大 学)

B-3 野外活動における子どもの健康状態の評価

○正武家重治(札幌市立上野幌東小学校)

B-4 キャンプにおけるボランティア指導者の研究
～東京YMCAキャンプリーダーの調査から～

○杉内 伸生(東京YMCA野外教育研究所)

B-5 大学におけるレジャー教育・生涯スポーツとしてのヨット

○上野 直紀(いわき明星大学)

鈴木 秀雄(関 東 学 院 大 学)

B-6 大学生のレジャースポーツ行動の参加動機に関する研究

～定期的参加と不定期参加者との比較～

○西田 俊夫(淑 徳 短 期 大 学)

B-7 ESM法を用いたファミリー・レジャー研究の試み

○西野 仁(東 海 大 学)

B-8 民間スポーツクラブにおけるプログラムサー

ビスの進化

～特に off-site プログラムとしてのイベントに注目して～

○松永 敬子 (スポーツ産業特別講座研究員)

B-9 大規模公園における利用状況の調査方法に関する研究

○栗田 和弥 (東京農業大学農学部造園科)

B-10 韓国の智異山国立公園における公園政策の変遷について

○趙 泰東 (千葉大学)

B-11 沖縄におけるリゾート開発の一考察

○小泉勇治郎 (神戸YMCA学院専門学校)

◀第25回記念大会▶ [研究発表] -1995-

A-1 「過去3年間のNRPAシンポジウム抄録にみられるレジャー・レクリエーションの研究動向——1992～1994年——」(OHP)

○栗原 邦秋 (余暇問題研究所)

高橋 和敏 (余暇問題研究所)

A-2 「J社におけるリラクゼーション研修の試みとその自覚効果について」(OHP)

～その研修内容と追跡調査の結果から～

○本田 真次 (日本航空株式会社)

山崎 律子 (余暇問題研究所)

川向 妙子 (東海大学)

A-3 「リハビリテーション・トレーニングにおける質的指導重視の事例研究」(OHP)

～頸椎後縦字靱帯骨化症患者の場合～

○若林 恭子 (日本航空株式会社)

松浦 良一 (日本航空株式会社)

飛鳥田一郎 (日本航空株式会社)

A-4 「小中学生の野外活動に関する課題と方向性について」(スライド)

～特にプログラム展開を中心に～

○森 孝昭 (横浜市立菊名小学校)

鈴木 秀雄 (関東学院大学)

A-5 「大学生におけるレジャー活動の満足度に関する比較研究」(OHP)

～日本(東海大学)韓国(ギョンヒ大学)アメリカ(アリゾナ州立大学)の学生を対象として～

○周 廷鎬 (韓国レクリエーション協会)

高橋 和敏 (余暇問題研究所)

A-6 「フィットネス指導と健康に関する一考察」(OHP)

～ホリスティック・アプローチから～

○藤原 武志 (スポーツ・エデュケーション・アカデミー)

勝 宏史 (スポーツ・エデュケーション・アカデミー)

A-7 「日本における国土開発に伴う風景問題について」(OHP)

～1960年代～1970年代前半までの自然公園を対象として～

○裏 重南 (千葉大学大学院)

油井 正昭 (千葉大学)

A-8 「アメリカの国立公園利用におけるペットの規制について」(OHP)(スライド)

○古谷 勝則 (千葉大学)

A-9 「スポーツ産業・レジャー産業に従事している体育系大学の卒業生の実態調査」(OHP)

○黒田 次郎 (日本体育大学)

A-10 「公共と民間の体育・スポーツ施設における棲み分けと競合に関する一考察」(OHP)

○松永 敬子 (一宮女子短期大学)

原田 宗彦 (大阪体育大学)

池田 勝 (大阪体育大学)

A-11 「商業スポーツ施設における会員の満足度に関する研究」(OHP)

～満足空間モデルにおける満足度の変化について～

○原田 尚幸 (中京大学大学院)

原田 宗彦 (大阪体育大学)

池田 勝 (大阪体育大学)

守能 信次 (中京大学)

A-12 「レジャー経験における主観的要素の分析法に関する検討」

～ESMによるデータ収集と主要な構成概念に

- 注目して～
- 佐橋 由美 (樟蔭女子短期大学)
- B-1 「大学受験とそのあり方に関する研究」
～特に一次集計の結果からみた女子高生の一般的傾向～
- 小西 啓子 (竹早教員養成所)
- B-2 「女子高校生の大学選択理由 (5 因子) とその受験意識との関係」
～高群と低群の比較を中心に～
- 田中美智子 (飯田女子短期大学)
 - 浅田 隆夫 (筑波大学)
- B-3 「大学受験とそのあり方に関する研究・母親の大学教育観」
～女子高生の志望・母親の年齢・子どもの数との関係から～
- 寺嶋 文代 (都立北多摩高校)
 - 浅田 隆夫 (筑波大学)
- B-4 「家族関係からみた女子高生の大学受験意識」
- 角田 亨子 (神奈川県大学)
 - 浅田 隆夫 (筑波大学)
- B-5 「女子高生の大学受験意識と母親の大学教育に対する期待観との関係」
～特に文系と理系の比較～
- 深瀬 嘉子 (山形女子短期大学)
 - 浅田 隆夫 (筑波大学)
- B-6 「国際交流で知る地域づくりの視点」
～オーストラリア・クイーンズランド州ヌーサでのホームステイ・自然活動を通して～
- 坂口 正治 (東洋大学短期大学)
 - 石井 允 (立教大学)
 - 矢川 律子
 - (Cultural Exchange Holidays オーストラリア隊)
 - 鈴木 秀雄 (関東学院大学)
- B-7 「学外コースにおける Physical Recreation “ヨット” を通してのレジャー教育」
～ヨット実践プログラムからの満足度の研究～
- 上野 直紀 (いわき明星大学)
- 鈴木 秀雄 (関東学院大学)
- 五十嵐幸一 (いわき明星大学)
- B-8 「ファミリーレクリエーション活動の実態調査」
～親の運動部経験による比較から～
- 梅原 俊子 (あさひな幼稚園)
- B-9 「キャンプの教材化とその価値の決め手の問題を巡って (第2報)」 (ビデオ)
- 佐藤 朝代 (けやの森学園)
- B-10 「1950年代における野外活動の傾向に関する研究」
- 中村 正男 (東横学園女子短期大学)
- B-11 「救急法・蘇生法カリキュラム指導の検討」
- 杉浦 俊之 (東京体育専門学校)
 - 鈴木 秀雄 (関東学院大学)
- ◀第25回学会大会▶ [実践報告] -1995-
- A-1 「神奈川における視覚障害者のレクリエーションの展開(1)」 (スライド)
～神奈川の現状とサポート体制～
- 古畑 英雄
 - (光友会藤沢障害者自立生活援助センター)
 - 渡辺 文治
 - (神奈川県給付リハビリテーションセンター七沢ライトホーム)
 - 塩沢 哲夫
 - (神奈川県給付リハビリテーションセンター七沢ライトホーム)
 - 末田 靖則
 - (神奈川県給付リハビリテーションセンター七沢ライトホーム)
- A-2 「神奈川における視覚障害者のレクリエーションの展開(2)」 (スライド)
～盲人卓球～
- 渡辺 文治
 - (神奈川県給付リハビリテーションセンター七沢ライトホーム)
 - 塩沢 哲夫
 - (神奈川県給付リハビリテーションセンター七沢ライトホーム)
 - 末田 靖則
 - (神奈川県給付リハビリテーションセンター七沢ライトホーム)
 - 古畑 英雄

(光友会藤沢障害者自立生活援助センター)

A-3 「神奈川における視覚障害者のレクリエーションの展開(3)」(スライド)

～フロアバレーボール(盲人バレーボール)～

○塩沢 哲夫

(神奈川県給りハビリテーションセンター七沢ライトホーム)

渡辺 文治

(神奈川県給りハビリテーションセンター七沢ライトホーム)

末田 靖則

(神奈川県給りハビリテーションセンター七沢ライトホーム)

古畑 英雄

(光友会藤沢障害者自立生活援助センター)

A-4 「神奈川における視覚障害者のレクリエーションの展開(4)」(スライド)

～視覚障害者のスキー、ブラインドスキー～

○増田 良二

(神奈川県給りハビリテーションセンター七沢ライトホーム)

間嶋 和子

(神奈川県視覚障害者援助赤十字奉仕団)

末田 靖則

(神奈川県給りハビリテーションセンター七沢ライトホーム)

渡辺 文治

(神奈川県給りハビリテーションセンター七沢ライトホーム)

A-5 「神奈川における視覚障害者のレクリエーションの展開(5)」(スライド)

～スポーツ以外のレクリエーションにていて～

○末田 靖則

(神奈川県給りハビリテーションセンター七沢ライトホーム)

渡辺 文治

(神奈川県給りハビリテーションセンター七沢ライトホーム)

丸山 哲雄

(神奈川県給りハビリテーションセンター七沢ライトホーム)

間嶋 和子

(神奈川県視覚障害者援助赤十字奉仕団)

古畑 英雄

(光友会藤沢障害者自立生活援助センター)

A-6 「知的障害者施設におけるレクリエーション

の実践」(スライド)

～楽しく、豊かな生活をおくるには～

○大場 伸(東京都千葉福祉ホーム)

A-7 「高齢障害者を対象としたグループレクリエーションの選沢」(OHP)(スライド)

～能力に合わせたレクリエーションゲームについて～

○松本あづさ(鶴巻温泉病院)

A-8 「高齢者レク活動の視点からみたエルダーホステル活動について」(スライド)

～北米インカネーション・キャンプの事例から～

○広田 治久(余暇問題研究所)

山崎 律子(余暇問題研究所)

川向 妙子(東海大学)

A-9 「第54回 NESRA 年次大会にみられる職場レクリエーションの動向」(スライド)

○浅宮佐知子(余暇問題研究所)

橋本 和秀(余暇問題研究所)

山崎 律子(余暇問題研究所)

A-10 「学外コースにおけるマリンプログラムとしてのヨット授業の実践」(スライド)

○上野 直紀(いわき明星大学)

鈴木 秀雄(関東学院大学)

五十嵐幸一(いわき明星大学)

A-11 「神戸YMCA学院専門学校社会体育学科・海洋スポーツ学科におけるレジャー・レクリエーション実習実践報告」(スライド)

○小泉勇治郎(神戸YMCA学院専門学校)

山下陽一郎(神戸YMCA学院専門学校)

片岡 麻理(神戸YMCA学院専門学校)

A-12 「東京家政学院大学におけるカヌー実習について」(ビデオ)

○芳賀 健治(東京家政学院大学)

A-13 「オーストラリア・クイーンズランド州ヌーサでのホームステイ・自然活動を通してのレジャー・レクリエーション」(スライド)

○上村都貴絵(貞静学園)

- 石井 允 (立 教 大 学)
 矢川 律子
 (Cultural Exchange Holidays オーストラリア陣)
 鈴木 秀雄 (関 東 学 院 大 学)
 坂口 正治 (東洋大学短期大学)
 加藤 恵子 (立 教 大 学 研 究 生)
- A-14 「オーグスポーツ・プログラムと受講生の
 反応について」(スライド)
 ◦下田 由香
 (スポーツ・エデュケーション・アカデミー)
 田代みみこ
 (スポーツ・エデュケーション・アカデミー)
- B-1 「高齢化・福祉化社会の新しい生涯スポーツ：
 バーンゴルフ (BAHN GOLF)」
 ～日本バーンゴルフ協会の設立と今後の方向性～
 ◦西田 俊夫 (淑 徳 短 期 大 学)
 荒井ルリ子 (日本バーンゴルフ協会)
- B-2 「市町村レク協会における生涯学習事業の可
 能性を探る」(ビデオ)
 ～八王子市レクリエーション協会の実践紹介を
 通して～
 ◦丸山 正 (八王子レクリエーション協会)
- B-3 「レクリエーションダンス教育課程構築への
 実践報告」(ビデオ)
 ◦浦江 千幸
 (BLUE THREE レクダンス研究会事務局)
- B-4 「レク指導者が地域スポーツにはたす役割」
 ～制度ボランティアの関わりから～
 ◦杉本 晴夫 (船橋市自遊人協会)
 宮下 桂治 (順 天 堂 大 学)
 戸田 安信 (船橋市自遊人協会)
- B-5 「地域余暇情報提供の実践活動」
 ～ベルクリンの発行から～
 ◦戸田 安信 (船橋市自遊人協会)
 宮下 桂治 (順 天 堂 大 学)
 杉本 晴夫 (船橋市自遊人協会)
- B-6 「消化不良損塾・横須賀市レクリエーション
 指導研究会」
 ～オーバーナイト・ウォーク実践活動報告～
 ◦岸 正晴
 (横須賀市レクリエーション指導研究会)
- B-7 「フライング・ディスク・ゴルフによる「楽
 しさ」を導き出す授業の実践」
 ～生涯スポーツの視点から～
 ◦宮下 桂治 (順 天 堂 大 学)
 杉本 晴夫 (船橋市自遊人協会)
 戸田 安信 (船橋市自遊人協会)

3. レジャー・レクリエーション研究（投稿論文・資料）

(p. 56～62)

資料(3) レジャー・レクリエーション研究 (投稿論文)

《第1号》 -1971年-

1. レクリエーションの構造論(1)
—「内包をめぐる論議」—
小田切毅一 (日本レクリエーション協会)
2. レクリエーション構造論(2)
—「外延」をめぐる—
藺田 碩哉 (日本レクリエーション協会)
3. レクリエーションの構造論(3)
—「内包と外包」をとりまくもの—
片岡 暁夫 (東京教育大学)
4. 学卒者の余暇意識と余暇行動に関する調査研究
(第一報)
— とくに大企業に勤務するエリート社員を中心に —
江橋慎四郎 (東京大学)
守野 信次 (東京大学)
池田 勝 (東京大学)
5. 地域における体育・スポーツ振興の計画化に関する研究の一事例について (第一報)
斉藤 定雄 (順天堂大学)
6. 東京都野外スポーツ・レクリエーション施設計画
のための調査研究 (報告)
(日本レクリエーション学会委託研究調査委員会)

《第2号》 -1972年-

1. 余暇教育に関する基礎的研究
都市中学生およびスポーツ意識の実態
浅田 隆夫 (東京教育大学)
片岡 暁夫 (東京教育大学)
弘中 栄子 (東京教育大学)
川口 貢 (横浜国立大学)
山市 孟 (都立第一商業高校(定))
荘司 正徳 (都立第一商業高校(定))
高橋 健夫 (大阪大学)
2. レクリエーションおよびゲームに対するイメージ
の分析

とくに日労組のレクリエーション・リーダーの
事例を中心に

- 高橋 和敏 (東海大学)
3. レクリエーション指導者に関する研究
性別・年齢別にみた指導者の意識とその実態に
ついて
秋吉 嘉範 (福岡教育大学)
4. 学卒者の余暇意識と余暇行動に関する研究
とくに大企業に勤務するエリート社員を中心に
(第2報)
江橋慎四郎 (東京大学)
守野 信次 (東京大学)
池田 勝 (東京大学)
5. 地域における体育・スポーツ振興の計画化に関する研究
斉藤 定雄 (順天堂大学)

《第3号》 -1973年-

1. 労働と余暇の適応メカニズムの分析
池田 勝 (大阪体育大学)
2. 「レジャー研究におけるM. カプランの位置」
金崎 良三 (九州大学)
3. 地域レクリエーションに関する研究
— 長崎県高島町におけるスポーツ活動
秋吉 嘉範 (福岡教育大学)
4. 地域におけるフィジカル・レクリエーション普及
に関する一考察
永吉 宏英 (東京大学)
江橋慎四郎 (東京大学)
糸野 豊 (文部省)
5. 環境系レクリエーション環境容量に関する計画的
研究序説
近藤 公夫 (奈良女子大学)

《第4号》 -1974年-

1. 都市化過程にある地方都市のフィジカル・レクリ

エーションに関する事例研究

江橋慎四郎 (東京大学)

永吉 宏英 (東京大学)

2. 学校レクリエーションの研究

— 福岡県下の高等学校体育祭、運動会の現状と
問題点について —

秋吉 嘉範 (福岡教育大学)

3. レク・リーダー研修会における教育効果に関する
一考察

— とくにその態度の変化について —

高橋 和敏 (東海大学)

大北 文生 (東海大学)

野間口英敏 (東海大学)

川向 妙子 (東海大学)

鈴木 秀雄 (東海大学)

4. 生活時間からみた主婦の余暇行動の分析

— 性格、体格による相違について —

池田 勝 (東京大学)

江藤 明美 (東京大学)

《第5号》 - 1975年 -

1. 社会人のフィジカル・レクリエーションに関する
研究

— 名古屋市内公立高等学校の卒業生の場合 —

中島 豊雄 (名古屋総合体育センター)

坪田 暢允 (名古屋学院大学)

2. レジャーとレクリエーションの補完関係に関する
一考察

— レクリエーションの構造論 (その2) —

小田切毅一 (奈良女子大学)

3. レクリエーションの意味論

蘭田 碩哉 (日本レクリエーション協会)

4. A Typology for the Study of Recreation
Decision Styles

D. L. Groves

5. Environmental Meaning-A Case Study

H. Kahalas

〈論 説〉

6. レジャーを考える

三隅 達郎 (関東学院大学)

《第6号》 - 1979年 -

1. 戦後の余暇研究

卷 正平 (日本レクリエーション協会)

2. レクリエーション教育に関する研究

— 中・高校の保健体育教科書及び大学に於ける
レクリエーション講義の現状調査 —

矢川 律子 (東洋大学短期大学)

石井 允 (立教大学)

坂口 正治 (東洋大学短期大学)

3. レクリエーション施設に関する技術的検討

— 陸上トラックの事例研究 —

近藤 公夫 (奈良女子大学)

4. フィジカル・レクリエーション成立を促がす要因
分析

— 林の数量化理論第I類を用いて —

永吉 宏英 (大阪体育大学)

江橋慎四郎 (東京大学)

桑野 豊 (筑波大学)

島崎 仁 (文部省)

5. An Analysis of Values for Kahalas Deve-
lopment of Recreational policy

Davidl. Groves

Harvey Kahalas

《第7号》 - 1980年 -

1. 心理的特性と余暇活動に関する調査研究

— 職業訓練校生を事例として —

塚本 真也 (職業能力開発大学校)

小田南州生 (職業能力開発大学校)

松原 五一 (職業能力開発大学校)

寺光 鉄雄

田口 節芳 (近畿大学)

2. レクリエーション参与の社会的要件に関する研究

藤原 健固 (中央大学)

3. レクリエーションの企画と運営に関する研究

— あそこどもジャンポリーから —

秋吉 嘉範 (福 岡 教 育 大 学)

4. ソビエト連邦における「自由時間」とフィジカル・レクリエーション

寺島 善一 (明 治 大 学)

5. インディアカ試合時の心拍数の変動に関する研究
和田 實 (徳山工業高等専門学校)
高倉 正樹 (徳山工業高等専門学校)

6. 全国キャンプ場の実態調査
前野淳一郎 (株・スペース・コンサルタンツ)

《第8号》 - 1981年 -

1. 余暇活動と社会的成層に関する一研究
藤原 健固 (中 京 大 学)
2. 性格とレクリエーション活動の関係について
— 第一報 大学男子学生のレクリエーション活動の実態と性格特性との関係について —

西野 仁 (東 海 大 学)

今村 義正 (東 海 大 学)

3. レクリエーションの概念に関する研究
— 活動的観点を中心にして —

澤村 博 (日 本 大 学)

4. レクリエーション教育とその関連領域との概念の明確化に関する研究

三浦 裕 (北 海 道 教 育 大 学)

近藤 良亨 (筑 波 大 学)

5. コミュニティ・スポーツの社会的機能について
— コミュニティ形成に果たす役割の検討 —

海老原 修 (横 浜 国 立 大 学)

江橋慎四郎 (鹿 屋 体 育 大 学)

6. スポーツ・グループの組織化からみた学校体育施設開放の問題点

— 大阪市の学校体育施設開放を事例として —

永吉 宏英 (大 阪 体 育 大 学)

塚本 真也 (職 業 能 力 開 発 大 学 校)

山本 隆久 (大 阪 体 育 大 学)

田口 節芳 (近 畿 大 学)

7. 日本のレクリエーション研究の動向

— 機関誌・研究会・学会発表を中心に —

矢川 律子 (東 洋 大 学)

石井 允 (立 教 大 学)

野間口英敏 (東 海 大 学)

鈴木 秀雄 (関 東 学 院 大 学)

上野 直紀 (明 星 大 学)

坂口 正治 (東 洋 大 学)

《第9号》 - 1982年 -

1. 高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究

— ゲートボールの実態と効果について —

金崎 良 (佐 賀 大 学)

徳永 幹雄 (九 州 大 学)

2. 我が国における公共社会体育人口に関する一研究

藤原 健固 (中 京 大 学)

3. 子どものスポーツ参加における家族の影響

— スポーツ組織参加者と非参加者・比較検討 —

海老原 修 (横 浜 国 立 大 学)

江橋慎四郎 (鹿 屋 体 育 大 学)

4. 北米における余暇行動研究の動向

原田 宗彦 (ペンシルバニア州立大学)

5. 日本におけるカヌーの普及状況に関する調査研究

— 特にスロラーム・カヤックを用いた活動の普及状況について —

芳賀 健治 (東京家政学院大学)

6. 日本のキャンプ研究の動向

— 日本レクリエーション学会・日本体育学会発表及び両学会機関誌を中心に —

大森 雅之 (東 海 大 学)

矢川 律子 (東 洋 大 学)

石井 允 (立 教 大 学)

野間口英敏 (東 海 大 学)

鈴木 秀雄 (関 東 学 院 大 学)

坂口 正治 (東 洋 大 学)

7. アメリカにおける組織キャンプ最近の動向

— 第10回 日本レクリエーション学会大会特別講演要旨 —

ジョン・J・カーク (江 橋 慎 四 郎 訳)

8. レクリエーション・プログラミングの開発原理に関する研究

北森 義明 (順天堂大学)
鈴木 秀雄 (関東学院大学)
宮下 桂治 (順天堂大学)
安原 照雄

9. わが国における野外レクリエーションに関する計画論的考察

進士五十八 (東京農業大学)
中田総一郎 (日本通公社)
有賀 一郎 (サンコーコンサルタント)
麻生 恵 (東京農業大学)
毛塚 宏 (ラック計画研究所)
宮林 茂幸 (東京農業大学)

《第10号》 -1983年-

〈原著論文〉

1. 河川空間におけるレクリエーションの研究

鈴木 誠 (東京農業大学)

2. 野外レクリエーション活動の入込か地域社会に及ぼす影響に関する調査研究

— 特に地元中学生の意識を中心に —

高野 透 (筑波大学)
池田 勝 (筑波大学)

3. レクリエーション・エリア利用者のレジャー行動に関する研究

原田 宗彦 (ペンシルバニア州立大学)
ジョフレイ・C・コッドヘイ (ペンシルバニア州立大学)
デビッド・R・チェイス (ペンシルバニア州立大学)

〈研究発表〉

レジャー・レクリエーションに関する短期大学・

大学・大学院等の卒業論文発表会

昭和58年3月12日(土)

(上智会館 第5会議室〈東京都千代田区〉)

〈学士論文の部〉

1. 「レクリエーションとスポーツに対するイメージの分析的研究」

石井 康宏 (筑波大学体育専門学群)

池田 勝 (指導教授)

2. 「自由裁量活動の関心とその行動に関する研究」

木村 博人 (順天堂大学体育学部)
宮下 桂治 (指導教授)

3. 「勤労者の健康・体力に関する調査研究」

横山 文人 (筑波大学体育専門学群)
池田 勝 (指導教授)

4. 「健康増進センターにおける休養指導の現状 — 定性的現状把握 —」

東浦 一裕 (日本体育大学体育学部)
今井 毅 (指導教授)

5. 「身体障害者の身体的レクリエーション活動が日常生活に及ぼす影響の分析」

渡辺 剛 (筑波大学体育専門学群)
池田 勝 (指導教授)

6. 「実態調査による海水浴場における利用客の行動分析」

富田由紀志 (東京農業大学林学科)
鈴木 忠義 (指導教授)

7. 「レクリエーションとしての釣りと釣り場の研究」

林 進 (東京農業大学造園学科)
鈴木 忠義 (指導教授)

8. 「海中公園のこれからの利用について — 特にダイビングについて —」

牛山ゆきか (東京農業大学造園学科)
鈴木 忠義 (指導教授)

9. 「ブランコに関する一考察」

小倉 善夫 (東京農業大学造園学科)
進士五十八 (指導教授)

10. 「幼児期の遊びと社会的行動に関する研究 — 主として遊び場面での攻撃行動について —」

高杉 淳子 (上智大学社会福祉学科)
春見 静子 (指導教授)

11. 「組織キャンプにおけるプログラム・ディクターのリーダーシップ」

渡植 理保 (筑波大学体育専門学群)

飯田 稔（指 導 教 授）

12. 「長期キャンプに関する研究」

田中みや子（東京女子体育大学体育学部）

松浦三代子（指 導 教 授）

13. 「キャンプ活動における燃料についての実験的研究

— ストーブ燃料・固型燃料について —」

角田 浩（東海大学体育学部）

大北 文生（指 導 教 授）

<修士論文の部>

14. 「野外活動における事故と法的責任に関する研究

— 日米の事故事例を中心として —」

竹谷 和之（筑波大学大学院体育研究科）

<<第11号>> -1984年-

<原著論文>

1. 山岳レクリエーション地域における廃棄物処理に関する研究

～特に山小屋のし尿処理問題について～

麻生 恵（東京農業大学）

永嶋 正信（東京農業大学）

2. 野外レクリエーション行動の予測に関する調査研究

高見 彰（関西女学院）

長谷川純三（中京女子大学）

池田 勝（大阪体育大学）

3. 高齢者のスポーツに関する社会心理学的研究(2)

～ゲートボール実施の規定要因について～

金崎 良三（佐賀大学）

徳永 幹雄（九州大学）

4. 都市化の程度からみた公共スポーツ施設に関する一研究

藤原 健固（中京大学）

鷺見 勝博（中京大学）

山本 学（高知県立西高校）

徐 柄世（中京大学）

後藤 哲也（中京大学）

<<第13号>> -1985年-

<原著論文>

1. 精神科レクリエーションとしてのゲートボールに関する一考察

鈴木 定（順天堂精神医学研究所）

2. レジャー行動の「動機」「期待」そして「満足」について

～その1 質問紙開発方法の検討～

西野 仁（東海大学）

下山メアリー（東海大学）

今野 守（日本大学）

<<第15号>> -1986年-

<原著論文>

1. 従業員のフィジカルレクリエーションと戦場環境認知

～大手自動車メーカーの場合～

増田 慧（日本大学）

田中 鎮雄（日本大学）

今野 守（日本大学）

武田 正司（日本大学）

2. 発生サイドからみた過去10年間における海浜型レクリエーションの特性変化

～海浜リゾート成立のための諸条件の検討～

渡辺 貴介, 沼田洋一郎

<<第17号>> -1987年-

<原著論文>

1. 高校生にみる社会化過程と課外クラブの選好

武田 正司（日本大学）

田中 鎮雄（日本大学）

樵沢 聖子（日本大学）

綿田 育代（日本大学）

2. 地域スポーツ集団のコミュニティ活動に関する一考察

～大阪市「とうちゃんソフトボール」の事例より～

金子 守男（中京大学）

守能 信次（中京大学）

3. 冒険プログラムが自己の発達に及ぼす効果に関する文献的研究

井村 仁

昭和61年度日本レクリエーション学会

レジャー・レクリエーションに関する

専門学校・短大・大学・大学院生論文発表会

(1) ユースホステル活動指導者の現状と課題

小川 暁子 (八王子レクリエーション学園)

三木 勲夫 (指導)

(2) 野外教育が児童の自主性に与える影響について

浅見 真一 (順天堂大学)

宮下 桂治 (指導)

(3) 丸沼高原とその周辺の森林レクリエーション利用について

姜 在元 (東京農工大学)

川名 明 (指導)

(4) 都市と農村の交流事業におけるレクリエーション利用について

三橋 淳一 (東京農業大学)

麻生 恵 (指導)

(5) 観光活動の集積による観光地の特性と観光地域の形成

小林 浩一 (東京農業大学)

鈴木 忠義 (指導)

(6) 公園における飲食施設の評価の変遷

頓所 弘行 (東京農業大学)

進士五十八 (指導)

《第20号》 - 1989年 -

<研究資料>

1. 実験的手法におけるデータ解析の応用に関する一考察

～千葉らの研究を事例として～

茅野 宏明 (武庫川女子大学)

2. 余暇教育としての子どもの野外教育に関する一考察

福満 博隆 (都留文科大学)

東原 昌郎 (東京学芸大学)

3. 視覚障害者のダンス指導に関する研究

～特に、指導法と運動量のかかわりから～

堀 良子 (帝塚山学院大学)

《第22号》 - 1992年 -

<原著論文>

1. 青少年教育施設の性格とその源流

～特に集団宿泊施設との関連から～

小畠 哲 (筑波大学)

<研究資料>

1. ソビエトの社会人レクリエーション施設経営に関する一考察

里見 悦郎 (東海大学)

高橋 和敏 (東海大学)

<評論>

1. 「ホモ・ルーデンス」の歴史的背景に関する研究

杉浦 恭 (筑波大学)

松田 義幸 (筑波大学)

《第24号》 - 1993年 -

<研究資料>

1. 中高年齢者の余暇活動参加パターンに関する研究

～特に定年退職予定者の余暇活動について～

藤本 淳也 (大阪体育大学)

原田 宗彦 (大阪体育大学)

<評論>

1. レジャー・カウンセリングの視点に関する考察

～Mc Dowell のレジャー論に基づいて～

後藤由紀子 (エンゼル財団)

<研究会報告>

1. レジャー産業政策の基本課題

～フィランソロビー、メセナ活動を中心に～

松田 義幸 (筑波大学)

《第27号》 - 1994年 -

<原著論文>

1. The Significance of the Ideas of Johan Huizinga on Culture and Play and Their Contribution to the Qualitative Improvement of Free Time Activities

Takashi SUGIURA (筑波大学)

2. セラビューティック・レクリエーション

— その理解と普及の視点 —

鈴木 秀雄 (関東学院大学)

<特集：21世紀に向けてのレジャーの価値>

1. 現代における余暇の意義

松田 義幸 (筑波大学)

2. レジャー・レクリエーション教育の国際的動向

原田 宗彦 (大阪体育大学)

3. 日常的レジャー・レクリエーション環境の整備

下村 彰男 (東京大学)

<<第29号>> -1995年-

<研究資料>

1. ガナリー・キャンプの検証

高橋 伸 (国際基督教大学)

川向 妙子 (東海大学)

山崎 律子 (東海大学)

高橋 和敏 (余暇問題研究所)

<評論>

1. スポーツの楽しみ

— テニスを事例として —

古城 健一 (大分大学)

<特集：21世紀に向けてのレジャーの価値>

1. レジャー産業の枠組みに関する考察

栗田 房穂 (朝日新聞論説委員)

2. レジャー産業の動向と現状、展望

嵯峨 寿 (筑波大学)

<資料>

3. 余暇・生活文化行政をめぐる主要な動向

経済企画庁・余暇生活文化関係資料

4. 学会大会開催期日・会場及び各発表演題数

(p. 64)

学会大会開催期日・会場及び発表題数

学会大会(回数)	開催時期	開催会場	発表題数
第1回大会	1971年(昭46)11月4日	北九州市戸畑文化ホール(福岡県北九州市)	20題
第2回大会	1972年(昭47)11月10日	日本都市センター(東京都)	34題
第3回大会	1973年(昭48)10月27日	水戸市常陽銀行(茨城県水戸市)	21題
第4回大会	1974年(昭49)10月31日	唐津文化会館(佐賀県唐津市)	18題
第5回大会	1975年(昭50)11月21日	徳島県郷土文化会館(徳島県徳島市)	20題
第6回大会	1976年(昭51)10月3日	秋田大学教育学部(秋田県秋田市)	17題
第7回大会	1977年(昭52)9月10日	富山大学教養部(富山県富山市)	30題
第8回大会	1978年(昭53)10月7日	横浜市教育文化センター(神奈川県横浜市)	20題
第9回大会	1979年(昭54)11月10日	徳山大学(山口県徳山市)	13題
第10回大会	1980年(昭55)8月2日	石川県立社会教育センター(石川県金沢市)	22題
第11回大会	1981年(昭56)11月8日	埼玉県国立婦人教育会館(埼玉県嵐山町)	30題
第12回大会	1982年(昭57)10月31日	日名子ホテル(大分県別府市)	22題
第13回大会	1983年(昭58)10月30日	北浜労働センター(大阪府大阪市)	29題
第14回大会	1984年(昭59)11月4日	国立鹿屋体育大学(鹿児島県鹿屋市)	19題
第15回大会	1985年(昭60)10月28日	三重県厚生年金休暇センター(三重県伊勢市)	21題
第16回大会	1986年(昭61)10月24日	パシフィックホテル沖繩(沖縄県那覇市)	23題
第17回大会	1987年(昭62)10月17日	蔵王エコーホテル(山形県山形市)	14題
第18回大会	1988年(昭63)8月22日	函館ハーバービューホテル(北海道函館市)	10題
第19回大会	1989年(平1)8月27.28日	セントラルホテルフクオカ(福岡県福岡市)	25題
第20回大会	1990年(平2)10月10.11日	明治大学附属中野高等学校(東京都中野区)	25題
第21回大会	1991年(平3)11月9.10日	朝日会館(愛知県名古屋市)	33題
第22回大会	1992年(平4)11月7.8日	立教大学(東京都豊島区)	24題
第23回大会	1993年(平5)10月16.17日	埼玉大学(埼玉県浦和市)	24題
第24回大会	1994年(平6)9月10.11日	拓殖大学北海道短期大学(北海道深川市)	24題
第25回大会 (記念大会)	1995年(平7)9月23.24日	関東学院大学法学部小田原校舎(神奈川県小田原市)	研究発表 23題 実践発表 21題

5. 学会歴代事務局

(p. 66)

歴 代 事 務 局

年 度	事 務 局
1971年 昭46年	日本レクリエーション協会
72 47	〃
73 48	〃
74 49	〃
75 50	東 海 大 学
76 51	〃
77 52	〃
78 53	〃
79 54	〃
80 55	日本レクリエーション協会
81 56	〃
82 57	〃
83 58	日本レクリエーション協会より7月1日上智大学に移転
84 59	上 智 大 学
85 60	上智大学より6月1日東海大学に移転
86 61	東 海 大 学
87 62	〃
88 63	東海大学より明治大学に移転
89 平成元年	明 治 大 学
90 2	明治大学より4月1日青山学院大学に移転
91 3	青山学院大学より女子聖学院短期大学に移転
92 4	女子聖学院短期大学
93 5	〃
94 6	女子聖学院短期大学より東京女子体育大学に移転
95 7	東京女子体育大学

6. 会員数の推移

(p. 68)

会 員 数 の 推 移

年 度	会 員 数	事 務 局	備 考
1971年 昭46	6月10日現在 246名	日本リクリエーション協会	
72 47	3月31日現在 319名	"	
73 48	3月31日現在 363名	"	
74 49		"	
75 50		東海大学	
76 51		"	
77 52		"	
78 53	3月31日現在 499名	"	
79 54	3月31日現在 521名	"	
80 55	3月31日現在 312名	日本リクエーション協会	
81 56		"	
82 57	3月31日現在 408名	"	
83 58		日本リクリエーション協会より 上智大学に移転	
84 59	3月31日現在 504名	上智大学	
85 60	3月31日現在 481名	上智大学より東海大学に移転	
86 61		東海大学	
87 62	3月31日現在 576名	"	
88 63		東海大学より明治大学に移転	
89 平元		明治大学	
90 2		明治大学より青山学院大学に移転	
91 3	3月31日現在 651名	青山学院大学より女子聖学院 短期大学に移転	
92 4	3月31日現在 631名	女子聖学院短期大学	
93 5	3月31日現在 514名	"	※ 会費3ヶ年間滞納者の整理
94 6	3月31日現在 530名	女子聖学院短期大学より 東京女子体育大学に移転	
95 7	9月1日現在 526名	東京女子体育大学	

7. 学会歴代役員

(p. 70~75)

歴 代 役 員

昭和46年・47年度（1971年～72年度）

役 員

名誉会長 三笠宮崇仁親王殿下（宮内庁書陵部三笠宮研究所）
 会 長 前 川 峯 雄（順天堂大学教授）
 副会長 塩 谷 宗 雄（東海大学体育学部教授）
 “ 三 隅 達 郎（関東学院大学教授）
 “ 山 崎 進（相模女子大学教授）
 理事長 江 橋 慎四郎（東京大学教育学部助教授）
 理 事 浅 田 隆 夫（東京教育大学助教授）
 “ 小 川 長次郎（財団法人日本レクリエーション協会専務理事）
 “ 金 塚 价 弘（日本体育協会）
 “ 木 下 静 子（東京 Y M C A）
 “ 糸 野 豊（文部省体育局スポーツ課専門員）
 “ 最 所 迪 太（国立武蔵療養所厚生技官）
 “ 高 橋 和 敏（東海大学体育学部教授）
 “ 田 村 喜 代（東京学芸大学助教授）
 “ 出 口 一 重（出口コンサルタント事務所）
 “ 長谷川 純 三（東京教育大体育学部助教授）
 “ 前 野 淳一郎（財団法人スペースコンサルタンツ代表取締役）
 “ 松 原 五 一（神奈川県青少年事務局）
 “ 卷 正 平（消費者問題研究所）
 監 事 高 橋 真 照（日本学校安全会常任監事）
 “ 林 実（地域計画研究所）
 幹 事 岡 田 優 子（東京女子医大病院精神看護婦長）
 “ 小田切 毅 一（日本レクリエーション協会）
 “ 窪 田 恭 子（光塩学園女子短大）
 “ 藺 田 碩 哉（日本レクリエーション協会）
 “ 深 町 一 夫（昭和空圧機工業㈱総括部総務課長）
 “ 宮 下 桂 治（順天堂大学講師レクリエーション研究）

昭和48年・49年度（1973年～74年度）

役 員

名誉会長 三笠宮崇仁親王殿下（宮内庁書陵部三笠宮研究所）
 会 長 前 川 峯 雄（大正大学教授）
 副会長 塩 谷 宗 雄（大正大学教授）
 “ 三 隅 達 郎（関東学院大学教授）
 “ 山 崎 進（相模女子大学教授）
 理事長 江 橋 慎四郎（東京大学教授）
 理 事 浅 田 隆 夫（東京教育大学教授）
 “ 小 川 長治郎（財団法人日本レクリエーション協会専務理事）
 “ 木 下 静 子（東京 Y M C A）
 “ 糸 野 豊（文部省体育局）
 “ 最 所 迪 太（国立武蔵療養所）
 “ 高 橋 和 敏（東海大学教授）
 “ 田 村 喜 代（東京学芸大学教授）
 “ 高 橋 真 照（日本学校安全会）
 “ 長谷川 純 三（東京教育大学助教授）
 “ 林 実（地域計画研究所）
 “ 前 野 淳一郎（財団法人スペースコンサルタンツ代表取締役）
 “ 松 原 五 一（神奈川県立三浦臨海青少年センター館長）
 “ 卷 正 平（消費者問題研究所）
 “ 兼 松 保 一（中央大学）
 “ 青 木 泰 三（大阪府立大学）
 “ 西 山 勝 二（大阪産業大学）
 “ 獺 口 章（同志者大学）
 “ 鈴 木 勝 衛（福島大学）
 “ 東 根 俊 一（名古屋市レクリエーション協会）
 “ 団 琢 磨（島根大学）
 “ 秋 吉 嘉 範（福岡教育大学）
 “ 松 延 陽 一（福岡大学）
 監 事 金 塚 弘（日本体育協会）
 監 事 出 口 一 重（出口コンサルタント事務所）

昭和50年・51年度（1975年～76年度）

役員

名誉会長	三笠宮崇仁親王殿下（宮内庁書陵部三笠宮研究所）
会長	前川峯雄（中京大学）
副会長	川村英雄（福岡大学）
“	近藤英男（奈良教育大学）
“	塩谷宗雄（日本体育大学）
“	三隅達郎（関東学院大学）
“	山崎進（相模女子大学）
理事長	江橋慎四郎（東京大学）
理事	浅田隆夫（筑波大学）
“	岡田優子（カウンセラー協会）
“	小川長治郎（日本レクリエーション協会理事）
“	兼松保一（中央大学）
“	木下静子（東京X M C A）
“	窪田恭子（女子聖学院短大）
“	桑野豊（筑波大学）
“	最所迪太（国立武蔵療養所）
“	高橋和敏（東海大学）
“	高橋真照（淑徳大学）
“	田村喜代（東京学芸大学）
“	長谷川純三（筑波大学）
“	林実（地域計画研究所）
“	深町一夫（松戸商工会議所）
“	前野淳一郎（スペースコンサルタント）
“	卷正平（評論家）
“	松原五一（職業訓練大学校）
“	宮下桂治（順天堂大学）
“	秋吉嘉範（福岡教育大学）
“	松延陽一（福岡大学）
“	青木泰三（大阪府立大学）
“	池田勝（大阪体育大学）
“	仲村要（同志社大学）
“	丹羽劭昭（奈良女子大学）
“	鈴木勝衛（福岡大学）
“	団琢磨（島根大学）
“	東根俊一（名古屋レクリエーション協会）
監事	金塚价弘（日本体育協会）
“	出口一重（出口コンサルタント事務所）
幹事	川向妙子（東海大学）
“	野々宮徹（日本レクリエーション協会）
“	野間口英敏（東海大学）

昭和52年・53年度（1977年～78年度）

役員

名誉会長	三笠宮崇仁親王殿下（宮内庁書陵部三笠宮研究所）
会長	前川峯雄（順天堂大学教授）
副会長	塩谷宗雄（日本体育大学）
“	三隅達郎（関東学院大学）
“	山崎進（相模女子大学）
“	小川寿一（大阪成蹊女子短大）
“	川村英男（福岡大学）
理事	浅田隆夫（筑波大学）
“	池田勝（筑波大学）
“	江橋慎四郎（東京大学）
“	岡田優子（カウンセラー協会）
“	兼松保一（中央大学）
“	木下静子（東京Y M C A）
“	窪田恭子（女子聖学院短大）
“	桑野豊（筑波大学）
“	最所迪太（国立武蔵療養所）
“	瀬沼克彰（日本余暇文化振興会）
“	高橋和敏（東海大学）
“	高橋真照（淑徳大学）
“	田村喜代（東京学芸大学）
“	長谷川純三（筑波大学）
“	深町一夫（松戸商工会議所）
“	前野淳一郎（スペース・コンサルタント）
“	卷正平（評論家）
“	松田義幸（余暇開発センター・筑波大学）
“	松原五一（職業訓練大学校）
“	宮下桂治（順天常大学）
“	秋吉嘉範（福岡教育大学）
“	松延陽一（福岡大学）
“	青木泰三（大阪府立大学）
“	草川一枝（滋賀大学）
“	田口守隆（大阪体育大学）
“	西山勝次（大阪産業大学）
“	鈴木勝衛（福岡大学）
“	団琢磨（島根大学）
監事	金塚价弘（日本体育協会）
“	林実（地域計画研究所）
幹事	浅野晃（日本レクリエーション協会）
“	野間口英敏（東海大学）
“	川向妙子（東海大学）
学会事務局	高橋和敏（東海大学）
九州支部	秋吉嘉範（福岡教育大学）
近畿支部	永吉宏英（大阪体育大学）

昭和54年・56年度（1979年～81年度）

役員

名誉会長 三笠宮崇仁親王殿下（宮内庁書陵部三笠宮研究所）
 顧問 川村英雄（福岡大学）
 " 塩谷宗雄（日本体育大学）
 " 高橋眞照（淑徳大学）
 " 三隅達郎（関東学院大学）
 " 山崎進（相模女子大学）
 会長 前川峯雄（中京大学）
 副会長 江橋慎四郎（東京大学）
 " 梶山彦三郎（九州支部会長・福岡大学）
 " 小川寿一（近畿支部会長・大阪成蹊女子短期大学）
 監事 岡田優子（カウンセラー協会）
 " 深町一夫（松戸商工会議所）
 理事 浅田隆夫（筑波大学）
 " 池田勝（筑波大学）
 " 窪田恭子（女子聖学院短大）
 " 進士五十八（東京農業大学）
 " 高橋和敏（東海大学）
 " 田中祥子（津田塾大学）
 " 田村喜代（東京学芸大学）
 " 長谷川純三（筑波大学）
 " 前野淳一郎（スペース・コンサルタンツ・千葉大学）
 " 松浦三代子（東京女子体育大学）
 " 松田義幸（余暇開発センター・筑波大学）
 " 松原洋三（立教大学）
 " 宮下桂治（順天堂大学）
 " 吉田正志（日本レクリエーション協会）
 九州支部選出理事 秋吉嘉範（福岡教育大学）
 " 金崎良三（九州大学）
 近畿支部選出理事 青木泰三（大阪薫英女子短期大学）
 " 草川一枝（滋賀大学）
 " 田口守隆（大阪体育大学）
 " 西山勝次（大阪産業大学）
 幹事 浅野晃（日本レクリエーション協会）
 " 川向妙子（東海大学）
 " 西野仁（東海大学）
 " 師岡文男（上智大学）
 九州支部事務局長 大谷善博（福岡大学）
 近畿支部事務局長 永吉宏英（大阪体育大学）

昭和57年・58年度（1982年～83年度）

役員

名誉会長 三笠宮崇仁親王殿下（宮内庁書陵部三笠宮研究所）
 顧問 小川寿一（大阪成蹊女子短大）
 " 塩谷宗雄（日本体育大学）
 " 高橋眞照（淑徳大学）
 " 三隅達郎（関東学院大学）
 " 山崎進（相模女子大学）
 会長 江橋慎四郎（鹿屋体育大学）
 副会長 梶山彦三郎（九州支部長・福岡大学）
 " 青木泰三（近畿支部長・大阪薫英女子短期大学）
 監事 草川一枝（滋賀大学）
 " 深町一夫（松戸商工会議所）
 理事長 浅田隆夫（筑波大学）
 理事 池田勝（筑波大学）
 " 今井毅（日本体育大学）
 " 岡田優子（東京女子医科大学病院）
 " 木下茂徳（日本大学）
 " 進士五十八（東京農業大学）
 " 高橋和敏（東海大学）
 " 田中祥子（津田塾大学）
 " 田畑貞寿（千葉大学）
 " 長谷川純三（筑波大学）
 " 藤本祐次郎（日本体育大学）
 " 前野淳一郎（㈱スペース・コンサルタンツ）
 " 松浦三代子（東京女子体育大学）
 " 松田義幸（筑波大学）
 " 松原洋三（立教大学）
 " 宮下桂治（順天堂大学）
 " 吉田正志（㈱日本レクリエーション協会）
 九州支部選出理事 秋吉嘉範（福岡教育大学）
 " 金崎良三（九州大学）
 近畿支部選出理事 仲村要（同志社大学）
 " 永吉宏英（大阪体育大学）

昭和59年・60年度（1984年～85年度）

役員

名誉会長 三笠宮崇仁親王殿下（宮内庁書陵部三笠宮研究所）
 名誉会員 小川寿一（大阪産業大学）
 “ 塩谷宗雄（日本体育大学）
 “ 白山源三郎（関東学院大学）
 “ 高橋眞照（淑徳大学）
 “ 三隅達郎（国際基督教大学）
 “ 山崎進（第一経済大学）
 会長 江橋慎四郎（鹿屋体育大学）
 副会長 浅田隆夫（目白学園）
 “ 梶山彦三郎（福岡大学）
 “ 青木泰三（大阪薫英女子短期大学）
 監事 鈴木忠義（東京農業大学）
 “ 深町一夫（神戸商工会議所）
 理事長 高橋和敏（東海大学）
 常任理事 秋吉嘉範（福岡教育大学）
 “ 池田勝（鹿屋体育大学）
 “ 今井毅（日本体育大学）
 “ 進士五十八（東京農業大学）
 “ 藺田碩哉（勸業日本レクリエーション協会）
 “ 田中祥子（津田塾大学）
 “ 仲村要（同志社大学）
 “ 前野淳一郎（㈱スペース・コンサルタンツ）
 “ 松浦三代子（東京女子体育大学）
 “ 宮下桂治（順天堂大学）
 理事 金崎良三（九州大学）
 “ 木下茂徳（日本大学）
 “ 鈴木秀雄（関東学院大学）
 “ 田中鎮雄（日本大学）
 “ 田畑貞寿（千葉大学）
 “ 夏目暁（神戸市立母子寮ひよどり荘）
 “ 長谷川紙三（筑波大学）
 “ 日比野朔郎（京都府立大学）
 “ 藤本祐次郎（日本体育大学）
 “ 松原洋三（立教大学）
 “ 渡辺貴介（東京工業大学）
 幹事 浅野晃（勸業日本レクリエーション協会）
 “ 麻生恵（東京農業大学）
 “ 梅津迪子（女子聖学院短期大学）
 “ 川向妙子（東海大学）
 “ 寺島善一（明治大学）
 “ 芳賀健治（東京家政学院大学）
 “ 師岡文男（上智大学）

昭和61年・62年度（1986年～87年度）

役員

名誉会長 三笠宮崇仁親王殿下（宮内庁書陵部三笠宮研究所）
 会長 江橋慎四郎（東京大学）
 副会長 青木泰三（桃山学院大学）
 “ 浅田隆太（目白学園）
 “ 梶山彦三郎（福岡大学）
 “ 川村英男（大同工業大学）
 監事 長谷川純三（日本体育・学校保健センター）
 “ 前野淳一郎（㈱スペース・コンサルタンツ）
 理事長 高橋和敏（東海大学）
 理事 秋吉嘉範（福岡教育大学）
 “ 飯田稔（筑波大学）
 “ 池田勝（鹿屋体育大学）
 “ 今井毅（日本体育大学）
 “ 梅津迪子（女子聖学院短期大学）
 “ 川口光雄（名古屋経済大学）
 “ 木下茂徳（日本大学）
 “ 進士五十八（東京農業大学）
 “ 鈴木忠義（東京農業大学）
 “ 鈴木秀雄（関東学院大学）
 “ 藺田碩哉（勸業日本レクリエーション協会）
 “ 田中鎮雄（日本大学）
 “ 寺島善一（明治大学）
 “ 西野仁（東海大学）
 “ 松浦三代子（東京女子体育大学）
 “ 宮下桂治（順天堂大学）
 “ 渡辺貴介（東京工業大学）
 支部選出 守能信次（中京大学）
 理事 大谷善博（福岡大学）
 “ 永吉宏英（大阪体育大学）

昭和63年・平成元年度（1988年～89年度）

役員

名誉会長 三笠宮崇仁親王殿下（宮内庁書陵部三笠宮研究所）
 会長 浅田隆夫（目白学園短期大学）
 副会長 青木泰三（大阪薫英女子短期大学）
 “ 梶山彦三郎（福岡大学）
 “ 川村英男（福岡大学）
 “ 前野淳一郎（㈱スペースコンサルタンツ）
 顧問 江橋慎四郎（中京大学）
 監事 秋吉嘉範（福岡教育大学）
 “ 長谷川純三（日本体育・学校保健センター）
 理事長 田中鎮雄（日本大学）
 理事(常任) 飯田稔（筑波大学）
 “ 梅津迪子（女子聖学院短期大学）
 “ 黒田信寛（明治大学）
 “ 鈴木秀雄（関東学院大学）
 “ 寺島善一（明治大学）
 “ 松浦三代子（東京女子体育大学）
 “ 吉田章（筑波大学）
 理事 大谷善博（福岡大学）
 “ 小田切毅一（奈良女子大学）
 “ 椛沢聖子（日本大学）
 “ 川口光雄（名古屋経済大学）
 “ 毛塚宏（ラック計画研究所）
 “ 関一誠（早稲田大学）
 “ 蘭田碩哉（レジャー・レクリエーション研究所）
 “ 永吉宏英（大阪体育大学）
 “ 西野仁（東海大学）
 “ 松本真言（新潟女子短期大学）
 “ 宮下桂治（順天堂大学）

平成2年・3年度（1990年～91年度）

役員

会長 浅田隆夫（目白学園短期大学）
 副会長 前野淳一郎（㈱スペースコンサルタンツ）
 “ 木下茂徳（日本大学）
 “ 青木泰三（大阪薫英女子短期大学）
 “ 石橋保（福岡教育大学）
 理事長 田中鎮雄（日本大学）
 顧問 江橋慎四郎（中京大学）
 監事 秋吉嘉範（福岡教育大学）
 “ 藤本裕次郎（日本体育大学）
 常任理事 徳久球雄（青山学院大学）
 “ 鈴木祐一（東京女子体育大学）
 “ 黒田信寛（明治大学）
 “ 鈴木秀雄（関東学院大学）
 “ 吉田章（筑波大学）
 “ 松田義幸（筑波大学）
 “ 杉尾邦江（ブレック研究所）
 “ 松浦三代子（東京女子体育大学）
 “ 梅津迪子（女子聖学院短期大学）
 理事 寺島善一（明治大学）
 “ 北條明美（国際武道大学）
 “ 越智三王（東海大学）
 “ 石井允（立教大学）
 “ 西野仁（東海大学）
 “ 永嶋正信（東京農業大学）
 “ 川口光男（名古屋経済大学）
 “ 守能信次（中京大学）
 “ 永吉宏英（大阪体育大学）
 “ 梅田靖次郎（西日本工業大学）
 幹事 赤井利男（青山学院大学）
 “ 師岡文男（上智大学）
 “ 芳賀健治（東京家政学院大学）
 “ 星野敏男（明治大学）
 “ 下村彰男（東京大学）

平成4年・5年度(1992年～93年度)

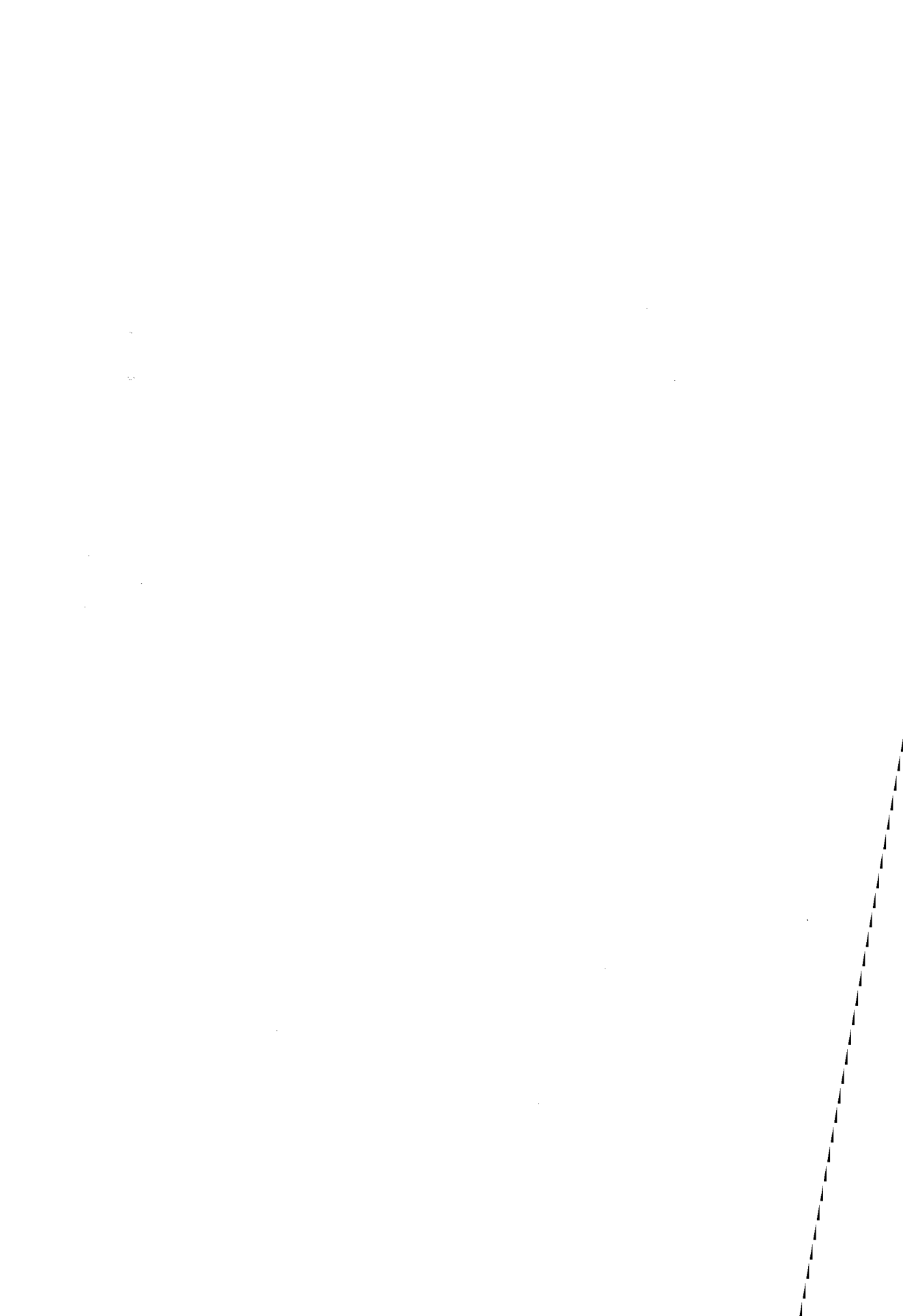
役員

会長 浅田 隆夫(目白学園短期大学)
 副会長 前野 淳一郎(㈱スペース・コンサルタンツ)
 " 木下 茂徳(日本大学)
 " 青木 泰三(桃山学院大学)
 " 高橋 和敏(東海大学)
 " 秋吉 嘉範(福岡教育大学)
 顧問 江橋 慎四郎(東京大学)
 理事長 黒田 信寛(明治大学)
 監事 越智 三王(東海大学)
 " 藤本 裕次郎(日本体育大学)
 常任理事 鈴木 祐一(東京女子体育大学)
 " 山市 孟(埼玉大学)
 " 永嶋 正信(東京農業大学)
 " 杉尾 邦江(㈱プレック研究所)
 " 松浦 三代子(東京女子体育大学)
 " 油井 正昭(千葉大学)
 " 松田 義幸(筑波大学)
 " 鈴木 秀雄(関東学院大学)
 " 寒川 恒夫(早稲田大学)
 " 師岡 文男(上智大学)
 " 下村 彰男(東京大学)
 " 梅津 迪子(女子聖学院短期大学)
 " 深山 千穂子(聖学院大学)
 理事 石井 允(立教大学)
 " 寺島 善一(明治大学)
 " 西野 仁(東海大学)
 " 永吉 宏英(大阪体育大学)
 " 中島 豊雄(名古屋大学)
 " 守能 信次(中京大学)
 " 白木 静枝(中村学園大学)
 " 矢川 律子(東洋大学短期大学)
 幹事 坂口 正治(東洋大学短期大学)
 " 野村 一路(日本体育大学)
 " 梅澤 佳子(湘南国際短期大学)

平成6年・7年度(1994年～95年度)

役員

会長 浅田 隆夫(目白学園短期大学)
 副会長 前野 淳一郎(㈱スペース・コンサルタンツ)
 " 木下 茂徳(日本大学)
 " 秋吉 嘉範(福岡教育大学)
 " 高橋 和敏(東海大学)
 " 黒田 信寛(明治大学)
 顧問 江橋 慎四郎(東京大学)
 監事 鈴木 祐一(東京女子体育大学)
 " 越智 三王(東海大学)
 理事長 鈴木 秀雄(関東学院大学)
 常任理事 松田 義幸(筑波大学)
 " 寺島 善一(明治大学)
 " 鈴木 文明(拓殖大学北海道短期大学)
 " 油井 正昭(千葉大学)
 " 下村 彰男(東京大学)
 " 杉尾 邦江(㈱プレック研究所)
 " 松浦 三代子(東京女子体育大学)
 " 芳賀 健治(東京家政学院大学)
 " 宮下 桂治(順天堂大学)
 " 石井 允(立教大学)
 " 師岡 文男(上智大学)
 " 坂口 正治(東洋大学短期大学)
 理事 守能 信次(中京大学)
 " 中島 豊雄(名古屋大学)
 " 塚本 圭一(蕪英女子短期大学)
 " 原田 宗彦(大阪体育大学)
 " 秋吉 嘉範(福岡教育大学)
 " 白木 静枝(中村学園大学)
 " 西野 仁(東海大学)
 " 永嶋 正信(東京農業大学)
 " 山市 孟(埼玉大学)
 " 梅津 迪子(女子聖学院短期大学)
 " 飯田 稔(筑波大学)
 " 深山 千穂子(聖学院大学)
 幹事長 大森 雅子(東京女子体育大学)
 副幹事長 野村 一路(日本体育大学)
 " 梅澤 佳子(湘南国際短期大学)
 幹事 金子 和正(東京家政学院大学)
 " 西田 俊夫(淑徳短期大学)
 " 杉浦 俊之(東京体育専門学校)
 " 飯田 明(東京体育専門学校)
 " 嵯峨 寿(筑波大学)
 " 荒井 啓子(武蔵野短期大学)
 " 浪越 一喜(帝京大学)



8. 学 会 会 則（規定・内規）

(p. 77~102)

学会会則

- | | |
|---------------------|--------------|
| ① 1971（昭和46）年3月31日 | 施 行 |
| ② 1976（昭和51）年5月1日 | 一部改訂 |
| ③ 1980（昭和55）年5月11日 | 一部改訂 |
| ④ 1981（昭和56）年11月8日 | 一部改訂（含むA） |
| ⑤ 1982（昭和57）年6月12日 | 一部改訂（含むB, D） |
| ⑥ 1983（昭和58）年10月30日 | 一部改訂（含むC） |
| ⑦ 1984（昭和59）年6月9日 | 一部改訂 |
| ⑧ 1985（昭和60）年10月28日 | 一部改訂 |
| ⑨ 1987（昭和62）年10月17日 | 一部改訂 |
| ⑩ 1988（昭和63）年8月22日 | 一部改訂 |
| ⑪ 1990（平成2）年10月11日 | 一部改訂 |
| ⑫ 1991（平成3）年11月10日 | 一部改訂 |
| ⑬ 1993（平成5）年10月17日 | 一部改訂（含むE） |

支部に関する規定

- | | |
|--------------------|--------|
| ① 1981（昭和56）年11月8日 | 制 定（A） |
|--------------------|--------|

理事会の運営に関する規定

- | | |
|---------------------|---------|
| ① 1982（昭和57）年6月12日 | 制 定（B） |
| ② 1983（昭和58）年10月30日 | 一部改訂（C） |

専門分科会設置に関する規定

- | | |
|--------------------|--------|
| ① 1982（昭和57）年5月12日 | 制 定（D） |
|--------------------|--------|

役員選出内規

- | | |
|------------------------------------|---------|
| ① 1988（昭和63）年度以降の
役員選出から適用することで | 制 定 |
| ② 1993（平成5）年10月17日 | 一部改訂（E） |

日本レクリエーション学会会則

(昭和46年3月21日より施行)

〈第1章 総則〉

第1条 本会を日本レクリエーション学会、(英語名 Japan Society of Leisure and Recreation Studies) という。

第2条 本会の目的は、レクリエーションに関する調査研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。

第3条 本会の事務所は、(財)日本レクリエーション協会内に置く。

〈第2章 事業〉

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

〈第3章 会員〉

第6条 本会の正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を経て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 学生会員は、大学生(大学院を除く)およびそれに準ずる者とする。
3. 特別会員は、大会の目的に賛同する外地在住者とする。
4. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者

で、理事会の承認を得た者とする。

5. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌(紙)等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

〈第4章 役員〉

第9条 本会を運営するために、総会において正会員の中から次の役員を選ぶ。

会長1名、副会長若干名、理事長1名、理事若干名、監事2名

第10条 会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、これを代行する。

理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

監事は、事務局と理事会の運営を監査する。

第11条 役員は任期は2年とし、再任を妨げない。

第12条 本会に名誉会長を置くことができる。

〈第5章 会議〉

第13条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第14条 通常総会は、毎年1回開催し役員を選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事の運営に関しては別にこれを定める。

第15条 理事会が必要と認められた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第16条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

〈第6章 支部および専門分科会〉

第17条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専

門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

〈第7章 会計〉

第18条 本会の経費は、会費・寄附金およびその他の収入をもって支弁する。

第19条 会員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円（3米ドル）
2. 正会員年額 2,000円
3. 学生会員 “ 1,000円
4. 特別会員 “ 7米ドル
5. 賛助会員 “ 20,000円以上

第20条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終る。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より施行する。

日本レクリエーション学会会則

（昭和51年5月1日一部改訂）

〈第1章 総 則〉

第1条 本会を日本レクリエーション学会、(英語名 Japan Society of Leisure and Recreation Studies) という。

第2条 本会の目的は、レクリエーションに関する調査研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。

第3条 本会の事務所は、東海大学体育学部社会体育学科レクリエーション研究室内に置く。

〈第2章 事 業〉

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

〈第3章 会 員〉

第6条 本会の正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を経て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 学生会員は、大学生（大学院を除く）およびそれに準ずる者とする。
3. 特別会員は、大会の目的に賛同する外地在住者とする。
4. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者

で、理事会の承認を得た者とする。

5. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌（紙）等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

<第4章 役員>

第9条 本会を運営するために、総会において正会員のの中から次の役員を選ぶ。

会長1名、副会長若干名、理事長1名、理事若干名、監事2名

第10条 会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、これを代行する。

理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

監事は、事務局と理事会の運営を監査する。

第11条 役員の任期は2年とし、再任を妨げない。

第12条 本会に名誉会長を置くことができる。

<第5章 会議>

第13条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第14条 通常総会は、毎年1回開催し役員の選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事の運営に関しては別にこれを定める。

第15条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第16条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

<第6章 支部および専門分科会>

第17条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専

門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

<第7章 会計>

第18条 本会の経費は、会費・寄附金およびその他の収入をもって支弁する。

第19条 会員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円（4米ドル）
2. 正会員年額 4,000円
3. 学生会員 " 1,000円
4. 特別会員 " 20米ドル
5. 賛助会員 " 20,000円以上

第20条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終る。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より施行する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日に一部改訂する。

日本レクリエーション学会会則

(昭和55年5月11日一部改訂)

〈第1章 総則〉

第1条 本会を日本レクリエーション学会（英語名 Japan Society of Leisure and Recreation Studies）という。

第2条 本会の目的は、レクリエーションに関する調机研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。

第3条 本会の事務局は、財団法人日本レクリエーション協会内に置く。

〈第2章 事業〉

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業をなう。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

〈第3章 会員〉

第6条 本会は正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を得て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 学生会員は、大学生（大学院生を除く）およびそれに準ずる者とする。
3. 特別会員は、大会の目的に賛同する外地在住者とする。
4. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者

で、理事会の承認を得た話とする。

5. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌（紙）等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

〈第4章 役員〉

第9条 本会を運営するために、総会において正会員の中から次の役員を選ぶ。

顧問若干名、会長1名、副会長若干名、理事長1名、理事若干名、監事2名

第10条 顧問は、事務局と理事会の運営に対して必要に応じて助言を行ない、相談に応じる。

会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、これを代行する。

理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

監事は、事務局と理事会の運営を監査する。

第11条 役員は任期は2年とし、再任を妨げない。

第12条 本会に名誉会長を置くことができる。

〈第5章 会議〉

第13条 本会の会議は、総会および理事会

第14条 通常総会は、毎年1回開催し役員を選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が招集し、当日の出正会員をもって構成する。

議事の運営に関しては別にこれを定める。

第15条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第16条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

＜第6章 支部および専門分科会＞

第17条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

＜第7章 会計＞

第18条 本会の経費は、会費、寄付金およびその他の収入をもって支弁する。

第19条 八員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円（4米ドル）
2. 正会員 年額 4,000円
3. 学生会員 “ 1,000円（大学院生は除く）
4. 特別会員 “ 20米ドル
5. 賛助会員 年額 20,000円以上

第20条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、年3月に終わる。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より施行する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。

日本レクリエーション学会会則

（昭和56年11月8日一部改訂）

＜第1章 総 則＞

第1条 本会を日本レクリエーション当会（英語名 Japan Society of Leisure and Recreation Studies）という。

第2条 本会の目的は、レクリエーションに関する調机研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。

第3条 本会の事務局は、財団法人日本レクリエーション協会内に置く。

＜第2章 事 業＞

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業をなう。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

＜第3章 会 員＞

第6条 本会は正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を得て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 学生会員は、大学生（大学院生を除く）およびそれに準ずる者とする。
3. 特別会員は、大会の目的に賛同する外地在住者とする。
4. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者

で、理事会の承認を得た話とする。

5. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌（紙）等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

＜第4章 役員＞

第9条 本会を運営するために、総会において正会員の中から次の役員を選ぶ。

顧問若干名、会長1名、副会長若干名、理事長1名、理事若干名、監事2名

第10条 顧問は、事務局と理事会の運営に対して必要に応じて助言を行ない、相談に応じる。

会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、これを代行する。

理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

監事は、事務局と理事会の運営を監査する。

第11条 役員任期は2年とし、再任を妨げない。

第12条 本会に名誉会長を置くことができる。

＜第5章 会議＞

第13条 本会の会議は、総会および理事会

第14条 通常総会は、毎年1回開催し役員を選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が招集し、当日の出正会員をもって構成する。

議事の運営に関しては別にこれを定める。

第15条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第16条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

＜第6章 支部および専門分科会＞

第17条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

＜第7章 会計＞

第18条 本会の経費は、会費、寄付金およびその他の収入をもって支弁する。

第19条 八員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円（4米ドル）
2. 正会員 年額 4,000円
3. 学生会員 “ 1,000円（大学院生は除く）
4. 特別会員 “ 20米ドル
5. 賛助会員 年額 20,000円以上

第20条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、年3月に終わる。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より施行する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。
5. 本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。

日本レクリエーション学会会則

(昭和56年11月8日一部改訂)

※支部に関する規定を判定した。

支部に関する規定

昭和56年11月8日制定

1. 本学会会員が、支部を設けようとする場合には、下記により、本学会会長に申請し、理事会の議を経て総会の承認をえるものとする。
 1. 設立の経過概要
 2. 名称
 3. 支部長および役員
 4. 会則
 5. 会員名簿
 6. その他
2. 各支部の運営は、本部との関係については本規定に従って行われるが、その他の事項については各支部規則においてこれを定めるものとする。
3. 支部は原則として隣接する地域に在住する本会員20名以上をもって構成する。
4. 支部運営のための経費によって賄うものとする。句部会費の額は各支部毎に決定するものとする。
5. 支部は次の事項について各年度ごとに本部に報告する。
 1. 役員の変更
 2. 活動状況の概要
 3. その他必要と認められる事項

日本レクリエーション学会会則

(昭和57年6月12日一部改訂)

〈第1章 総則〉

- 第1条 本会を日本レクリエーション学会、(英語名 Japanese Society of Leisure and Recreation Studies) という。
- 第2条 本会の目的は、レクリエーションに関する調査研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。
- 第3条 本会の事務所は、財団法人日本レクリエーション協会内に置く。

〈第2章 事業〉

- 第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業を行なう。
1. 学会大会の開催
 2. 研究会、講演会等の開催
 3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
 4. 研究の助成
 5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
 6. 会員相互の親睦
 7. その他本会の目的に資する事業
- 第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

〈第3章 会員〉

- 第6条 本会の正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。
1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を経て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
 2. 学生会員は、大学生(大学院を除く)およびそれに準ずる者とする。
 3. 特別会員は、大会の目的に賛同する外地在住者とする。
 4. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者

で、理事会の承認を得た者とする。

5. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌（紙）等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

＜第4章 役員＞

第9条 本会を運営するために、総会において正会員の中から次の役員を選ぶ。

顧問若干名、会長1名、副会長若干名、理事長1名、理事若干名、監事2名

第10条 顧問は、事務局と理事会の運営に対して必要に応じて助言を行い、相談に応じる。

会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、これを代行する。

理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

監事は、事務局と理事会の運営を監査する。

第11条 役員任期は2年とし、再任を妨げない。

第12条 本会に名誉会長を置くことができる。

＜第5章 会議＞

第13条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第14条 通常総会は、毎年1回開催し役員を選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事（会則改正を除く）は、出席者の過半数をもって決定される。

第15条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第16条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

理事会は、運営の円滑化をはかるため、常任理事会を置くことができる。

＜第6章 支部および専門分科会＞

第17条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

＜第7章 会計＞

第18条 本会の経費は、会費・寄附金およびその他の収入をもって支弁する。

第19条 会員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円（4米ドル）
2. 正会員年額 4,000円
3. 学生会員 “ 1,000円（大学院生は除く）
4. 特別会員 “ 20米ドル
5. 賛助会員 “ 20,000円以上

第20条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終る。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より施行する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。
5. 本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。
6. 本会則は、昭和57年6月12日より一部改訂する。

日本レクリエーション学会会則

(昭和57年6月12日一部改訂)

※理事会の運営に関する規定及び専門分科会設置に関する規定

理事会の運営に関する規定

昭和57年6月12日制定

1. 会則第16条の規定により、理事会の運営は、会則に定められているほか、この規定に基づいて行うものとする。
2. 理事会は、原則として年に1回以上開催するものとし、理事長がその議長となる。
3. 理事会の招集に当っては、書面によって付議事項を明示しなければならない。
4. 理事会は、理事の過半数の出席により成立し、議決は出席者の2分の1以上の賛成を必要とする。ただし、表決に当っては、予め書面(書名捺印)を以って当該議事に対する意向を表示した者を、出席者とみなす。
5.
 - (1) 常任理事会構成員は若干名とする。
 - (2) 常任理事会は、理事会決定の方針にもとづき、日常業務の執行にあたる。
 - (3) 常任理事会の議事録(概要)はできるだけすみやかに各理事に送付するものとする。
6. 理事会には、業務を遂行するために次のような専門委員会をおく。
7. 理事会には、専門的に研究、調査および審議を必要とするような場合には、特別委員会を設置することができる。特別委員会の委員には、理事以外の適任者を委嘱することができるがその人選は理事会の承認を必要とする。
8. その他理事会の運営に必要な事項は、理事会で決定することができるものとする。

専門分科会設置に関する規定

昭和57年6月12日制定

1. 会則第17条の規定により、本会会員が専門分科会を設置しようとする場合は、この規定に基づいて行うものとする。
2. 専門分科会の設置は、原則として研究分野を同じくする本学会正会員20名以上の要請があった場合とする。
3. 専門分科会の設置を求めようとする正会員は下記により本学会会長に申請するものとする。
 1. 設立経過および主旨
 2. 名称
 3. 発起人代表者
 4. 発起人名簿
 5. 連絡事務所
 6. その他
4. 専門分科会は次の事項について各年度ごとに本部に報告する。
 1. 活動状況の概要
 2. その他必要と認められる事項

日本レクリエーション学会会則

(昭和58年10月30日一部改訂)

〈第1章 総則〉

第1条 本会を日本レクリエーション学会、(英語名 Japanese Society of Leisure and Recreation Studies) という。

第2条 本会の目的は、レクリエーションに関する調査研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。

第3条 本会の事務所は、財団法人日本レクリエーション協会内に置く。

〈第2章 事業〉

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

〈第3章 会員〉

第6条 本会の正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を経て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 学生会員は、大学生(大学院を除く)およびそれに準ずる者とする。
3. 特別会員は、大会の目的に賛同する外地在住者とする。
4. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者

で、理事会の承認を得た者とする。

5. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌(紙)等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

〈第4章 役員〉

第9条 本会を運営するために、総会において正会員の中から次の役員を選ぶ。

顧問若干名、会長1名、副会長若干名、理事長1名、理事若干名、監事2名

第10条 顧問は、事務局と理事会の運営に対して必要に応じて助言を行い、相談に応じる。

会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、これを代行する。

理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

監事は、事務局と理事会の運営を監査する。

第11条 役員の任期は2年とし、再任を妨げない。

第12条 本会に名誉会長を置くことができる。

〈第5章 会議〉

第13条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第14条 通常総会は、毎年1回開催し役員を選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事(会則改正を除く)は、出席者の過半数をもって決定される。

第15条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第16条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

理事会は、運営の円滑化をはかるため、常任理事会を置くことができる。

〈第6章 支部および専門分科会〉

第17条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

〈第7章 会計〉

第18条 本会の経費は、会費・寄附金およびその他の収入をもって支弁する。

第19条 会員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円(4米ドル)
2. 正会員年額 4,000円
3. 学生会員 " 1,000円(大学院生は除く)
4. 特別会員 " 20米ドル
5. 賛助会員 " 20,000円以上

第20条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終る。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より施行する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。
5. 本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。
6. 本会則は、昭和57年6月12日より一部改訂する。
7. 本会則は、昭和58年10月30日より一部改訂する。

日本レクリエーション学会会則

(昭和58年10月30日一部改訂)

※理事会の運営に関する規定を一部改訂した。

理事会の運営に関する規定

昭和57年6月12日制定

昭和58年10月30日改定

1. 会則第16条の規定により、理事会の運営は、会則に定められているほか、この規定に基づいて行うものとする。
2. 理事会は、原則として年に1回以上開催するものとし、理事長がその議長となる。
3. 理事会の招集に当っては、書面によって付議事項を明示しなければならない。
4. 理事会は、理事の過半数の出席により成立し、議決は学席者の2分の1以上の賛成を必要とする。ただし、表決に当っては、予め書面(署名捺印)を以って当該議事に対する意向を表示した者を、出席者とみなす。
5.
 - (1) 常任理事会構成員は若干名とする。
 - (2) 常任理事会は、理事会決定の方針にもとづき、日常業務の執行にあたる。
 - (3) 常任理事会の議事録(概要)はできるだけすみやかに各理事に送付するものとする。
6. 理事会には、業務を遂行するために次のような専門委員会を置く。

総務、研究企画、編集、広報渉外、財務
7. 理事会には、専門的に研究、調査および審議を必要とするような場合には、特別委員会を設置することができる。特別委員会の委員には、理事以外の適任者を委嘱することができるがその人選は理事会の承認を必要とする。
8. その他理事会の運営に必要な事項は、理事会で決定することができるものとする。

日本レクリエーション学会会則

(昭和59年6月9日一部改訂)

<第1章 総則>

第1条 本会を日本レクリエーション学会、(英語名 Japanese Society of Leisure and Recreation Studies) という。

第2条 本会の目的は、レクリエーションに関する調査研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。

第3条 本会の事務局は、東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学研究室内に置く。

<第2章 事業>

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

<第3章 会員>

第6条 本会の正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を経て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 学生会員は、大学生(大学院を除く)およびそれに準ずる者とする。
3. 特別会員は、大会の目的に賛同する外地在住者とする。
4. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者

で、理事会の承認を得た者とする。

5. 購読会員は、本会の機関誌を購読する機関・団体とする。

6. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌(紙)等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

<第4章 役員>

第9条 本会を運営するために、総会において正会員の中から次の役員を選ぶ。

顧問若干名、会長1名、副会長若干名、理事長1名、理事若干名、監事2名

第10条 顧問は、事務局と理事会の運営に対して必要に応じて助言を行い、相談に応じる。

会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、これを代行する。

理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

監事は、事務局と理事会の運営を監査する。

第11条 役員任期は2年とし、再任を妨げない。

第12条 本会に名誉会長を置くことができる。

<第5章 会議>

第13条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第14条 通常総会は、毎年1回開催し役員を選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事(会則改正を除く)は、出席者の過半数をもって決定される。

第15条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第16条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

理事会は、運営の円滑化をはかるため、常任理事会を置くことができる。

〈第6章 支部および専門分科会〉

第17条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

〈第7章 会計〉

第18条 本会の経費は、会費・寄附金およびその他の収入をもって支弁する。

第19条 会員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円（4米ドル）
2. 正会員 年度額 5,000円
3. 学生会員 " 1,500円（大学院生は除く）
4. 特別会員 " 25米ドル
5. 賛助会員 " 20,000円以上
6. 購読会員 " 5,000円（25米ドル）
7. 名誉会員 " —

第20条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終る。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より一部改訂する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。
5. 本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。
6. 本会則は、昭和57年6月12日より一部改訂する。
7. 本会則は、昭和58年10月30日より一部改訂する。
8. 本会則は、昭和59年6月9日より一部改訂する。

日本レクリエーション学会会則

（昭和60年10月28日一部改訂）

〈第1章 総 則〉

第1条 本会を日本レクリエーション学会、（英語名 Japan Society of Leisure and Recreation Studies）という。

第2条 本会の目的は、レクリエーションに関する調査研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。

第3条 本会の事務局は、東海大学体育学部社会体育学科レクリエーション研究室に置く。

〈第2章 事 業〉

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

〈第3章 会 員〉

第6条 本会の正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を経て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 学生会員は、大学生（大学院を除く）およびそれに準ずる者とする。
3. 特別会員は、大会の目的に賛同する外地在住者とする。
4. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者

で、理事会の承認を得た者とする。

5. 購読会員は、本会の機関誌を購読する機関・団体とする。

6. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌（紙）等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

第9条 会員は原則として、いずれかの支部に所属するものとする。

＜第4章 役員＞

第10条 本会を運営するために、総会において正会員のの中から次の役員を選ぶ。

顧問若干名、会長1名、副会長若干名、理事長1名、理事若干名、監事2名

第11条 顧問は、事務局と理事会の運営に対して必要に応じて助言を行い、相談に応じる。

会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、これを代行する。

理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

監事は、事務局と理事会の運営を監査する。

第12条 役員の任期は2年とする。任期を妨げない。

第13条 本会に名誉会長を置くことができる。

＜第5章 会議＞

第14条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第15条 通常総会は、毎年1回開催し役員を選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事（会則改正を除く）は、出席者の過半数をもって決定される。

第16条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の

1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第17条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

理事会は、運営の円滑化をはかるため、常任理事会を置くことができる。

＜第6章 支部および専門分科会＞

第18条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

＜第7章 会計＞

第19条 本会の経費は、会費・寄附金およびその他の収入をもって支弁する。

第20条 会員の会費は次の通りとする。

- | | |
|------------|-------------------|
| 1. 入会金 | 1,000円（10米ドル） |
| 2. 正会員 年度額 | 5,000円 |
| 3. 学生会員 | ” 1,500円（大学院生は除く） |
| 4. 特別会員 | ” 30米ドル |
| 5. 賛助会員 | ” 20,000円以上 |
| 6. 購読会員 | ” 5,000円（30米ドル） |
| 7. 名誉会員 | ” — |

第21条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終る。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より一部改訂する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。
5. 本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。
6. 本会則は、昭和57年6月12日より一部改訂する。
7. 本会則は、昭和58年10月30日より一部改訂する。
8. 本会則は、昭和59年6月9日より一部改訂する。
9. 本会則は、昭和60年10月28日より一部改訂する。

日本レクリエーション学会会則

(昭和62年10月17日一部改訂)

〈第1章 総則〉

第1条 本会を日本レクリエーション学会、(英語名 Japan Society of Leisure and Recreation Studies) という。

第2条 本会の目的は、レクリエーションに関する調査研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。

第3条 本会の事務局は、東海大学体育学部社会体育学科レクリエーション研究室に置く。

〈第2章 事業〉

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

〈第3章 会員〉

第6条 本会の正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を経て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 学生会員は、大学生(大学院を除く)およびそれに準ずる者とする。
3. 特別会員は、大会の目的に賛同する外地在住者とする。
4. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者

で、理事会の承認を得た者とする。

5. 購読会員は、本会の機関誌を購読する機関・団体とする。

6. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌(紙)等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

第9条 会員は原則として、いずれかの支部に所属するものとする。

〈第4章 役員〉

第10条 本会を運営するために、総会において正会員の中から次の役員を選ぶ。

顧問若干名、会長1名、副会長若干名、理事長1名、理事若干名、監事2名

第11条 顧問は、事務局と理事会の運営に対して必要に応じて助言を行い、相談に応じる。

会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、これを代行する。

理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

監事は、事務局と理事会の運営を監査する。

第12条 役員任期は2年とする。任期は原則として1期とし、2期を再任の限度とする。

第13条 本会に名誉会長を置くことができる。

〈第5章 会議〉

第14条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第15条 通常総会は、毎年1回開催し役員を選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事(会則改正を除く)は、出席者の過半数をもって決定される。

第16条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第17条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務役員を選出し、会務を処理する。

理事会は、運営の円滑化をはかるため、常任理事会を置くことができる。

＜第6章 支部および専門分科会＞

第18条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

＜第7章 会計＞

第19条 本会の経費は、会費・寄附金およびその他の収入をもって支弁する。

第20条 会員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円 (10米ドル)
2. 正会員 年度額 5,000円
3. 学生会員 " 1,500円 (大学院生は除く)
4. 特別会員 " 30米ドル
5. 賛助会員 " 20,000円以上
6. 購読会員 " 5,000円 (30米ドル)
7. 名誉会員 " —

第21条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終る。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より一部改訂する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。
5. 本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。
6. 本会則は、昭和57年6月12日より一部改訂する。
7. 本会則は、昭和58年10月30日より一部改訂する。
8. 本会則は、昭和59年6月9日より一部改訂する。
9. 本会則は、昭和60年10月28日より一部改訂する。
10. 本会則は、昭和62年10月17日より一部改訂する。

日本レクリエーション学会会則

(昭和62年10月17日一部改訂)

※1988(昭和63)年度以降の役員選出から適用すること
で役員選出内規を制定

役員選出内規

1. 会則第10条の規定により、役員を選出は、会則に定められているほか、この内規に基づいて行なうものとする。
 2. 会長は原則として、副会長経験者であること。
 3. 顧問は、原則として会長経験者をもってあて、終身とする。
 4. 理事は選出方法により、支部選出理事、改選前理事会選出理事、会長選出理事の3つに分け、理事数20名程度とする。
支部選出理事は支部最少1名とし、文部の会員数に比例して、理事数を決める。
当分の間、東海、近畿、九州の各支部は、それぞれ2名、関東地区4名、関東地区以外の支部未所属者1名とする。
改選前理事会選出理事は、専門領域、地域、研究機関、団体及び事務運営等を考慮して選出する。理事は5名。
会長選出は、会長就任後、副会長と協議のうえ選出する。理事は5名。
 5. 会長、副会長、及び監事の各候補は、理事会において選出する。
 6. 理事長及び常任理事は、改選後初理事会で選出する。
 7. 役員の兼任は認めない。
 8. 役員選出は総会承認事項であるため、役員選出の理事会は、学会大会前の適当な時期に開催する。
- 付則 この内規は1988年度以降の役員選出から適用する。

日本レクリエーション学会会則

(昭和63年8月22日一部改訂)

〈第1章 総則〉

第1条 本会を日本レクリエーション学会、(英語名 Japan Society of Leisure and Recreation Studies) という。

第2条 本会の目的は、レクリエーションに関する調査研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。

第3条 本会の事務局は、明治大学和泉校舎体育研究室内に置く。

〈第2章 事業〉

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

〈第3章 会員〉

第6条 本会の正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を経て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 学生会員は、大学生(大学院を除く)およびそれに準ずる者とする。
3. 特別会員は、大会の目的に賛同する外地在住者とする。
4. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者

で、理事会の承認を得た者とする。

5. 購読会員は、本会の機関誌を購読する機関・団体とする。

6. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌(紙)等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

第9条 会員は原則として、いずれかの支部に所属するものとする。

〈第4章 役員〉

第10条 本会を運営するために、総会において正会員のの中から次の役員を選ぶ。

顧問若干名、会長1名、副会長若干名、理事長1名、理事若干名、監事2名

第11条 顧問は、事務局と理事会の運営に対して必要に応じて助言を行い、相談に応じる。

会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、これを代行する。

理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。監事は、事務局と理事会の運営を監査する。

第12条 役員任期は2年とする。任期は原則として1期とし、2期を再任の限度とする。

第13条 本会に名誉会長を置くことができる。

〈第5章 会議〉

第14条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第15条 通常総会は、毎年1回開催し役員を選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事(会則改正を除く)は、出席者の過半数をもって決定される。

日本レクリエーション学会会則

(平成2年10月11日一部改訂)

〈第1章 総則〉

第1条 本会を日本レクリエーション学会、(英語名 Japan Society of Leisure and Recreation Studies) という。

第2条 本会の目的は、レクリエーションに関する調査研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。

第3条 本会の事務局は、青山学院大学2号館2002研究室に置く。

〈第2章 事業〉

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

〈第3章 会員〉

第6条 本会の正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を経て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 学生会員は、大学生(大学院を除く)およびそれに準ずる者とする。
3. 特別会員は、大会の目的に賛同する外地在住者とする。
4. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者

第16条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第17条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局長を選出し、会務を処理する。

理事会は、運営の円滑化をはかるため、常任理事会を置くことができる。

〈第6章 支部および専門分科会〉

第18条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

〈第7章 会計〉

第19条 本会の経費は、会費・寄附金およびその他の収入をもって支弁する。

第20条 会員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円(10米ドル)
2. 正会員 年度額 5,000円
3. 学生会員 " 1,500円(大学院生は除く)
4. 特別会員 " 30米ドル
5. 賛助会員 " 20,000円以上
6. 購読会員 " 5,000円(30米ドル)
7. 名誉会員 " —

第21条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終る。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より一部改訂する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。
5. 本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。
6. 本会則は、昭和57年6月12日より一部改訂する。
7. 本会則は、昭和58年10月30日より一部改訂する。
8. 本会則は、昭和59年6月9日より一部改訂する。
9. 本会則は、昭和60年10月28日より一部改訂する。
10. 本会則は、昭和60年10月17日より一部改訂する。
11. 本会則は、昭和63年8月22日一部改訂する。

で、理事会の承認を得た者とする。

5. 購読会員は、本会の機関誌を購読する機関・団体とする。

6. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌（紙）等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

第9条 会員は原則として、いずれかの支部に所属するものとする。

〈第4章 役員〉

第10条 本会を運営するために、総会において正会員の中から次の役員を選ぶ。

顧問若干名、会長1名、副会長若干名、理事長1名、理事若干名、監事2名

第11条 顧問は、事務局と理事会の運営に対して必要に応じて助言を行い、相談に応じる。

会長は、本会を代表し、会務を総括する。

副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、これを代行する。

理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

監事は、事務局と理事会の運営を監査する。

第12条 役員は任期は2年とする。任期は原則として1期とし、2期を再任の限度とする。

第13条 本会に名誉会長を置くことができる。

〈第5章 会議〉

第14条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第15条 通常総会は、毎年1回開催し役員を選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事（会則改正を除く）は、出席者の過半数をもって決定される。

第16条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第17条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

理事会は、運営の円滑化をはかるため、常任理事会を置くことができる。

〈第6章 支部および専門分科会〉

第18条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

〈第7章 会計〉

第19条 本会の経費は、会費・寄附金およびその他の収入をもって支弁する。

第20条 会員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円（10米ドル）
2. 正会員 年度額 5,000円
3. 学生会員 " 1,500円（大学院生は除く）
4. 特別会員 " 30米ドル
5. 賛助会員 " 20,000円以上
6. 購読会員 " 5,000円（30米ドル）
7. 名誉会員 " —

第21条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終る。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より一部改訂する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。
5. 本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。
6. 本会則は、昭和57年6月12日より一部改訂する。
7. 本会則は、昭和58年10月30日より一部改訂する。
8. 本会則は、昭和59年6月9日より一部改訂する。
9. 本会則は、昭和60年10月28日より一部改訂する。
10. 本会則は、昭和60年10月17日より一部改訂する。
11. 本会則は、昭和63年8月22日より一部改訂する。
12. 本会則は、平成2年10月11日より一部改訂する。

日本レジャー・レクリエーション学会会則

(平成3年11月10日一部改訂)

〈第1章 総則〉

第1条 本会を日本レジャー・レクリエーション学会(英語名 Japan Society of Leisure and Recreation Studies)という。

第2条 本会の目的は、レジャー・レクリエーションに関する調査研究を促進し、レジャー・レクリエーションの普及・発展に寄与する。

第3条 本会の事務局は、埼玉県上尾市戸崎1-1 聖学院大学、女子聖学院短期大学内に置く。

〈第2章 事業〉

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

〈第3章 会則〉

第6条 本会は正会員のほか、賛助会員、議読会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を得て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者で、理事会の承認を得た者とする。
3. 議読会員は、本会の機関誌を講読する機関・団体とする。

4. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌(紙)等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

第9条 会員は原則として、いずれかの支部に所属するものとする。

〈第4章 役員〉

第10条 本会を運営するために、総会において正会員の中から次の役員を選ぶ。

理事25名以上30名以内(うち会長1名、副会長若干名、および理事長1名)、監事2名

第11条 会長は本会を代表し、会務を総括する。

2. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるとき又は会長が欠けたときは、会長が予め指名した順序により職務を代行する。

3. 理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

4. 監事は、会計および会務の執行状況について監査する。

第12条 役員は任期は2年とする。但し再任をさまたげない。役員を選出についての規則は別に定める。

第13条 本会に名誉会長および顧問を置くことができる。

2. 名誉会長は理事会の推薦により会長が委嘱する。

3. 顧問は、本会の会長又は副会長であった者および本会に功労のあった者のうちから理事会の推薦により会長が委嘱する。

〈第5章 会議〉

第14条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第15条 総会は、年1回開催し本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

議事(会則改正を除く)は、出席者の過半数をもって決定する。

第16条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催精求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第17条 理生会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

理事会は、運営の円滑化をはかるため、常任理事会を置くことができる。

＜第6章 支部および専門分科会＞

第18条 本会の事業を推薦するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

＜第7章 会計＞

第19条 本会の経費は、会費、寄付金およびその他の収入をもって支弁する。

第20条 本会の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円（5米ドル）
2. 正会員 年度額 5,000円
3. 賛助会員 “ 20,000円以上
4. 購読会員 “ 5,000円

第21条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終わる。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より一部改訂する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。
5. 本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。
6. 本会則は、昭和57年6月12日より一部改訂する。
7. 本会則は、昭和58年10月30日より一部改訂する。
8. 本会則は、昭和59年6月9日より一部改訂する。
9. 本会則は、昭和60年10月28日より一部改訂する。
10. 本会則は、昭和60年10月17日より一部改訂する。
11. 本会則は、昭和63年8月22日より一部改訂する。

12. 本会則は、平成2年10月11日より一部改訂する。

13. 本会則は、平成3年11月10日より一部改訂する。

日本レジャー・レクリエーション学会会則

(平成5年10月17一部改訂)

〈第1章 総則〉

第1条 本会を日本レジャー・レクリエーション学会、(英語名Japan Society of Leisure and Recreation Studies)という。

第2条 本会の目的は、レジャー・レクリエーションに関する調査研究を促進し、レジャー・レクリエーションの発展に寄与する。

第3条 本会の事務局は、東京都国立市青柳谷川620 東京女子体育大学レクリエーション研究室に置く。

〈第2章 事業〉

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその他の情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の親睦
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究成果を発表する。

〈第3章 会員〉

第6条 本会の正会員の他、賛助会員、購読会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および、理事会の承認を経て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者で、理事会の承認を得た者とする。
3. 購読会員は、本会の機関誌を購読する機関・団体とする。

4. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集刊行する機関誌(紙)等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会の名誉を棄損した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

第9条 会員は原則として、いずれかの支部に所属するものとする。

〈第4章 役員〉

第10条 本会を運営するために、総会において正会員のの中から次の役員を選ぶ。理事25名以上30名以内(うち会長1名、副会長若干名、および理事長1名)、監事2名

第11条 会長は、本会を代表し、会務を総括する。

2. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故がある時、又は会長が欠けたときは、会長が予め指名した順序により職務を代行する。

3. 理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

4. 監事は、会計および会務の執行状況について監査する。

第12条 役員は任期は2年とする。但し、再任を妨げない。役員を選出についての規則は別に定める。

第13条 本会に名誉会長を置くことができる。

2. 名誉会長は理事会の推薦により会長が委嘱する。

3. 顧問は、本会の会長又は副会長であった者および本会に功勞のあった者のうちから理事会の推薦により会長が委嘱する。

〈第5章 会議〉

第14条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第15条 総会は、毎年1回開催し本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が招集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事（会則改正を除く）は、出席者の過半数をもって決定される。

第16条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第17条 理事会は理事長が招集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。

理事会は、運営の円滑化をはかるため、常任理事会を置くことができる。

<第6章 支部および専門分科会>

第18条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

<第7章 会計>

第19条 本会の経費は、会費・寄附金およびその他の収入をもって支弁する。

第20条 会員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円
2. 正会員 年度額 5,000円
3. 賛助会員 " 20,000円以上
4. 購読会員 " 5,000円

第21条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終る。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より一部改訂する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。
5. 本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。
6. 本会則は、昭和57年6月12日より一部改訂する。
7. 本会則は、昭和58年10月30日より一部改訂する。
8. 本会則は、昭和59年6月9日より一部改訂する。
9. 本会則は、昭和60年10月28日より一部改訂する。
10. 本会則は、昭和62年10月17日より一部改訂する。
11. 本会則は、昭和63年8月22日より一部改訂する。
12. 本会則は、平成2年10月11日より一部改訂する。
13. 本会則は、平成3年11月10日より一部改訂する。
14. 本会則は、平成5年10月17日より一部改訂する。

日本レジャー・レクリエーション学会会則

(平成5年10月17日一部改訂)

※役員選出内規を一部改訂した

役員選出内規

1. 会則第10条の規定により、役員を選出は、会則に定められているほか、この内規に基づいて行なうものとする。
2. 会長は原則として、副会長経験者であること。
3. 理事は選出方法により、支部選出理事、改選前理事会選出理事、会長選出理事の3つに分け、理事数25名以上30名以内とする。
 - (1) 支部選出理事は6名とし、その候補者の選出は支部が行う。
 - ① 東海支部 2名
 - ② 近畿支部 2名
 - ③ 九州支部 2名
 - (2) 関東地区およびその他の地域より選出される理事は5名とし、その理事数は以下のとおりとする。なお、その選出については理事会の議を経て、役員改選前年の総会で承認された委員長を含む7名の「役員候補選考準備委員会」（以下「選考委員会」という）によりその候補者を選出する。
 - ① 関東地区 4名
 - ② その他の地域（東海、近畿、九州、関東地区を除く） 1名
 - (3) 改選前理事会によって選出される理事は9名とし、その選出については専門領域、地域、研究機関、団体および事務運営等を考慮して選考委員会により候補者を選出する。
 - (4) 会長推薦により選出される理事は5名とし、その候補者の選出は会長就任後副会長と協議し、会長が指名する。
4. 会長、副会長、及び監事の各候補は、選考委員会により選考された者のなかから理事会において選出される。

5. 理事長及び常任理事は、改選後初理事会で選出する。
6. 役員の兼任は認めない。
7. 役員候補者選出の理事会は学会大会前あるいは学会大会期間中の適当な時期に開催する。

付則 この内規は平成5年10月17日より施行する。

理事会の運営に関する規定

昭和57年6月12日制定

昭和58年10月30日改定

1. 会則第16条の規定により、理事会の運営は、会則に定められているほか、この規定に基づいて行なうものとする。
2. 理事会は、原則として年に1回以上開催するものとし、理事長がその議長となる。
3. 理事会の招集に当っては、書面によって付議事項を明示しなければならない。
4. 理事会は、理事の過半数の出席により成立し、議決は出席者の2分の1以上の賛成を必要とする。ただし、表決に当っては、予め書面（署名捺印）を以って当該議事に対する意向を表示した者を、出席者とみなす。
5.
 - (1) 常任理事会構成員は若干名とする。
 - (2) 常任理事会は、理事会決定の方針のもとづき、日常業務の執行にあたる。
 - (3) 常任理事の議事録（概要）はできるだけすみやかに各理事に送付するものとする。
6. 理事会は、業務を遂行するために次のような専門委員会を置く。

総務、研究企画、編集、広報渉外、財務
7. 理事会には、専門的に研究、調査および審議を必要とするような場合には、特別委員会を設置することができる。特別委員会の委員には、理事以外の適任者を委嘱することができるがその人選は理事会の承認を必要とする。
8. その他理事会の運営に必要な事項は、理事会で決定することができるものとする。

専門分科会設置に関する規定

昭和57年6月12日制定

1. 会則第17条規定により、本会会員が専門分科会を設置しようとする場合は、この規定に基づいて行うものとする。
2. 専門分科会の設置は、原則として研究分野を同じくする本学会正会員20名以上の要請があった場合とする。
3. 専門分科会の設置を求めようとする正会員は下記により本学会会長に申請するものとする。
 1. 設立経過および主旨
 2. 名称
 3. 発起人代表者
 4. 発起人名簿
 5. 連絡事務所
 6. その他
4. 専門分科会は次の事項について各年度ごとに本部に報告する。
 1. 活動状況の概要
 2. その他必要と認められる事項
5. 支部運営のため経費は支部会費によって賄うものとする。支部会費の額は各支部毎に決定するものとする。
6. 支部は次の事項について各年度ごとに本部に報告する。
 1. 役員の変更
 2. 活動状況の概要
 3. その他必要と認められる事項

支部に関する規定

昭和56年11月8日制定

1. 本学会会員が、支部を設けようとする場合には、下記により、本学会会長に申請し、理事会の議を経て総会の承認をえるものとする。
 1. 設立の経過概要
 2. 名称
 3. 支部長および役員
 4. 会則
 5. 会員名簿
 6. その他
2. 各支部の運営は、本部との関係については本規定に従って行われるが、その他の事項については各支部規則においてこれを定めるものとする。
3. 支部は原則として隣接する地域に在勤または在住する本会正会員20名以上をもって構成する。

9. 学会ニュース (No.1 号~No.57 号)

(p. 104~215)

学会ニュース

No 1

May 1971

日本レクリエーション学会

5年余にわたるレクリエーション研究会としての活動から脱皮して、より広いレクリエーション、レジャー問題の研究者、指導者を結集した日本レクリエーション学会の発足をみたことは、わが国のレクリエーション研究の土壌に、まことに転機を画したといえるであろう。

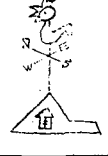
従来は、やむを得ずレクリエーション活動ということを中心とした指導者、研究者の研究者集団であったものが、さらに関連する諸領域の分野の参加を得て、本当に多様で、複雑なレジャー、レクリエーションの問題を多面的にとらえる可能性がよくなるに開かれたといえることができる。

このような意味では、レクリエーションが一面では、個人の嗜好、選択の問題であるために、レクリエーション研究もやむを得ず、個人的な好み、個人的な趣味・関心で行われていたという側面があったのにならして、これからは、より広い観点から、それぞれの専門分野とする研究領域の壁をのりこえて、レジャー、レクリエーションの諸問題を、共通の課題として、協同で究明してゆくという方向も大切とされねばならないのであろう。即ち、個人的な研究とともに、各分野の研究者による共同の研究こそ、今後大いに期待されるのであり、学会の発足が、そのような共同研究への道を開く一つの礎石になり得るのではあるまいか。

さらに、学会の発足によって、国際的な研究交流の促進も期待されるであろう。余暇問題、単にわが国だけの問題ではなく、国際的な問題

であり、多くの未来学者の指摘するように、未来社会の一つの大きな問題となること指摘されている。世界各国においても、既にレジャー、レクリエーションの科学的基礎の究明がすすめられている。我々は、これらの世界各国における研究成果に学ぶとともに、国際的な評価にたえ得る研究成果をつみあげ、国際的な発言をしてゆくことも必要であらう。もちろん、レジャーやレクリエーションは、それぞれの国の生活、文化、国土と関わりをもつ、夫々の固有の国民生活の一側面であることはいうまでもないが、一面では、すべての国民に共通する基本的な生活の一側面でもある訳で、わが国のレジャー、レクリエーション研究の成果は、世界的に共通な関心事たり得るであろう。レクリエーション学会の発足では、いよいよ国際的な研究者集団であったものが、学会の発足とともに、研究を通して国際社会にかけ得る道が開かれたといえるのであり、このような意味でも、わが国のレクリエーション研究は、新しい転機を迎えたといえることができる。

日本レクリエーション学会の発足にあたって



学会活動への提案

幹事対談
S. 齋田 碩哉
O. 小田切 毅一

○ 学会が発足してすでに1ヶ月。現実には旧研究会からの引きつぎで追われる中で、1日でも早く学会を軌道にのせなくてはなりません。ところでこの学会ですが、会員の方々の期待を背負って、どういった問題に对应してゆく必要があるか、レクリエーションをどうおさえるか、といった問題ですが。たとえば現代は余暇の時代であって、レクリエーションの必要性が強調されているとも言われています。

○ いろいろな領域から人が集まっているこの学会は、レクリエーションについてかなり「同床異夢」の感じがするなあ。これまでの研究者の中には、レクリエーションをその教育的側面から考える人が多かったと思うんです。けれども各領域からの参加者が共同作業を進める上では、より客観的な、夜面性的な考え方を採用した方がいんじゃないかな。たとえば「生活の変化を求め、人間性の解放をめざして行なわれる行為」くらいに考え、それが人間にとってどんな意義をもつか、そうしてレクリエーションが現代の社会的条件の中で、いかなる状態にあるかを明らかにすることが、「レクリエーション学」の使命ということにならないでしょうか。

○ よく置かれることですが、個々のレクリエーションへの価値観の観点といったものを大切にしたらいかがですか。余暇の価値基準といったものは、時代や文化状況によって変化するものだと思いますが、余暇に象徴される時代を迎えようとするか、それと学会として、研究の対象として考える場合、夜面性的というより客観的といった点で、これと異なると、例えば「再創造のパターン」にいった、レクリエーションの構造を主題にした定義を考えてみる価値はあるでしょうか。

○ そのへんをいすれませんが、もう少しついでに検討してみたいですね。

○ ところでレクリエーションの価値観にかかわらず、これから学会として発展してゆくためには、科学的、客観的な研究方法が必要にな

ると思います。いうなればレクリエーション学というべき応用科学の諸領域を体系化する必要があるんじゃないでしょうか。これは学会の分科会のあり方ともかかわる問題でしょうが、いままでの研究会のように、職場か学校とか地域といった別け方は駄目だと思います。研究の水準を高めるためにも、たとえば行政管理的、自然科学的、社会心理的、臨床的、教育的、哲学的の各々のアプローチ等を考えて、分科会を把握する必要があると思います。

○ まったく賛成ですね。どういった分科会が組み立てられるか、学会の成果の大きな部分が占められるか、これはたぶんどの「核」が確立しなければ、分科会も作りようがないわけで、当面はこれらの問題に對しての討議を、積極的につみ上げる必要があると思います。レクリエーションの核づくりセミナーでもつめてみたいですね。

○ これからできるだけ具体的な、現実的な方策を立てたいものをいろいろ考えてみてはいかがでしょうか。

○ S 会員で東京の周辺にいる方は約半数くらい。あとはこの日本に散在しているわけですが、その人たちがいかにかつなげていけることも大変重要な課題ですね。この機関紙はそのための武器であるわけですね。

○ 今後できる限り、各地の会員の意見を入れて編集していきたいですね。○ 僕もそう思います。この対談を見て、学会私物を私物化するな、なんて批判が来れば……うーれいではないですか。出来るだけ早く分科会がつかれば、場合によっては地方支部まで出来るようになって欲しいですね。

○ いささか言いけれど「初心忘るべからず」を座右の銘にして、この新鮮なテーマに打ちかわっていきなさい。

学会事務局は会員の投稿受付の窓口です。すぐ研究仲間をつくるため、よりよい研究をすすめる上で、御利用下さい。
(財)日本レクリエーション学会 事務局
(Tel) 460-5464

研究資料を提供いたします

- 発会創立を契機に、現在学会本部に眠っているさまざまな資料を提供いたします。
- 下記の文献を御入用の方は、学会事務局まで御連絡下さい。

1. 日本レクリエーション協会編	レクリエーションに関する文献リスト(1) 戦後の雑誌より	¥200(含送料)
2. 同 上	レクリエーションに関する文献リスト(2) 戦後の雑誌より	¥200(含送料)
3. 同 上	黄金計画 西独のレクリエーション施設	¥300(含送料)
4. 同 上	人間にとってレジャーとは何か?	¥350(含送料)
5. 同 上	協会20年史	¥600(含送料)
6. 日本レクリエーション研究会	レクリエーションの定義 辞典、Encyclopediaより	¥200(含送料)
7. 同 上	レクリエーション研究1号	
	第1回研究大会発表抄録	¥250(含送料)
8. 同 上	レクリエーション研究2号	
	第2回研究大会発表抄録	¥300(含送料)
9. 同 上	レクリエーション研究3号	
	第3回研究大会発表抄録	¥400(含送料)
10. 同 上	レクリエーション研究4号	
	第4回研究大会発表抄録	¥600(含送料)
11. 同 上	レクリエーション研究5号	
	第5回研究大会発表抄録	¥600(含送料)
12. 同 上	レクリエーション研究6、7合併号	
	第6回研究大会発表抄録 研究発表	¥600(含送料)
13. 日本レクリエーション協会	全国レクリエーション大会	
	● テーマ別研究会発表抄録	各150(送料)
	● 指導者講習会資料	各150(送料)
	● 第1回~第24回までの記録号	各150(送料)

- ⑭ 総理府青少年対策本部 レクリエーションの実態とその影響に関する研究 ¥300(送料)
- ⑮ 総理府青少年局 職場におけるレクリエーションの実態に関する調査 ¥300(送料)
- 16. 日本レクリエーション協会 世界のレクリエーションめぐり ¥500(含送料)
- 世界レクリエーション大会より
- 17. 日本レクリエーション協会 Recreation in Japan ¥450(含送料)

◎第1回レクリエーション学会大会で研究の成果を発表しよう

第1回レクリエーション学会大会を1月に北九州市において開催する予定です。この大会はレクリエーション全国大会(11月5日~7日)の前日に行なわれるものです。

詳しい報告や企画は、今後の学会だよりでいたしますが、会員の皆様には、どしどし研究の成果を発表していただきたく、今から御準備下さるようお願いいたします。

☆ そのためにも上記資料(先行研究)を参考して下さい。

◎ 旧研究会誌「レクリエーション研究」 第6・7合併号を用入の方は、事務局まで、お申し込み下さい。(1部500円)

目次	
第6号	第6回研究大会発表抄録
第7号	レクリエーションへの想い 三 隅 達 郎
	余暇教育序論 高 橋 真 真
	レジャーラーとしての芭蕉の研究素描 岡 田 日 郎
	レクリエーションリーダーの任務に 関する原理的考察 片 岡 曉 夫
<調査>	
	大学の正統体育における経験者の現在の余暇生活に及ぼす影響 江 橋 慎 田 郎
	池 田 勝
	守 能 信 次

役員の仕事分担のお知らせ

- さる4月12日午後5時30分より岸記念館(日本レクリエーション協会)の会議室で、第1回理事会が開催され、その折次より役員の仕事分担がなされました。
- 1) 庶務 松原 五(神奈川県立相模原技術高等学校) 長谷川 純三(東京教育大学)
 - 2) 会計 最折 進夫(国武蔵野農務) 小川長寿館(日本レクリエーション協会)
 - 3) 編集 高橋 和敏(東海大学)
 - 4) 研究 津松 一夫(昭和空圧機務), 宮下 桂治(順天堂大学), 藤田 碩哉(日本レクリエーション協会), 岡田 優子(東京女子医大), 窪田 基子(光塩学園短期大学)
 - 5) 小田切敏(日本レクリエーション協会)
- また幹事として次の方々が委嘱されました。
- 源町 一夫(昭和空圧機務), 宮下 桂治(順天堂大学), 藤田 碩哉(日本レクリエーション協会), 岡田 優子(東京女子医大), 窪田 基子(光塩学園短期大学)

機関誌「レクリエーション研究」(仮称)の発刊について

○ 機関誌の発刊は年2回とし、とりあえず第1集を11月に予定しています。会員の方々はふらって応募して下さい。原稿の切は8月末です。

「レクリエーション研究」投稿規定

1. 投稿者は原則として本会会員であること。
2. 論文は他誌に未掲載のものに限る。
3. 論文は新なつかない。制漢字使用を原則とし、横書き400字詰原稿用紙を使用する。欧文はタイプライターによるか、または特に明瞭に手書きする。
4. 論文はカンマに論文・資料・その他(書評・沿革・学校紹介等)を休する。
5. 論文・資料の原稿にはかならず論文の表題、ローマ字書きふた名の氏名および図版・写真の英文説明をつける。
6. 邦文論文には欧文要約(Resume)をつけ、欧文論文には邦文の要約・氏名および80字以内の邦文要約をつけること。
7. 図版はかならず白紙に墨書きとし、図版・写真類は上下の宛を明記すること。
8. 論文の原稿には第1頁下端に勤務先(匿名)を記すこと。
9. 論文は1篇につき40字詰で30枚以内(図版・写真類、別紙)を記すこと。其の他の原稿は5枚以内とする。若し長篇のものでも上記規定を越えるものについては、投稿に先立ち編集委員会宛打合せのこと。なお朝刊より5頁以上の超過分は実費にて執筆者持ちとする。
10. 編集委員会は編集の都合により、執筆者の承諾を得て、原稿の一部を省略・訂正することができる。
11. 論文の取扱は編集委員会に任すること。
12. 投稿期限(略)
13. 論文の送り先及び連絡先 東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念館内(財)日本レクリエーション協会受付
日本レクリエーション学会 編集部

会員の入会状況

3月21日に学会創立式を終った約1ヶ月たとうとして、学会事務局には毎日学会入会申込みに関する問い合わせが、殺到しています。そこで中間報告として、その概況をお知らせします。レクリエーション研究を志す会員の皆さんに、なにかのお役に立てば幸甚です。

会員総数 204名(4月15日現在)

北海道 0
東北地区 3名
関東地区 143名(東京77名)
中部地区 18名
関西地区 31名(大阪5, 京都7)
中国地区 6名

九州・四国地区 1名

ところで会員の職業は大きく、幼稚園から大学にいたる先生方が最も多く、全体の4割程度。教育委員会や社会教育関係の仕事にたづさわっている会員が1割弱。その他公務員、官庁、観光や福祉事業関係、病院などに関係する方々。そして学生会員という層でなまられます。

次に申し込み用紙に書かれていた「関心のある研究テーマ」を分類すると、4月9日現在次の通りです。

1. 人間存在とレクリエーション(遊びの人間の考察、生とレクリエーション、レクリエーションの文化史、レクリエーション行動の成立要因等……) 回答28
2. レクリエーション教育(人間形成とレクリエーション、学校教育の場におけるレクリエーションの在り方、社会教育等……) 回答22
3. 現場のレクリエーション指導、計画・管理(レクリエーション経営、指導者養成、指導場法等……) 回答23
4. レクリエーション行政・制度(レクリエーション運動の組織化、諸外国のレクリエーション行政等……) 回答7

5. レクリエーション施設の開発(レジャー・ビル、レクリエーション・リゾート等の開発、レクリエーションをする環境、広範観光開発、都市計画との関係等……) 回答23

6. レクリエーションの社会的効果その他(健康との関係、身体療養とレクリエーション、レクリエーション療法等……) 回答15

7. 現代社会におけるレクリエーション・レクリエーションの社会的研究、レクリエーションと社会心理、人間関係とレクリエーション、非行少年とレクリエーション、マス・レジャーとレクリエーション、都市・農村・家庭のレクリエーション、職場のレクリエーション等……) 回答45

8. レクリエーション活動(種目)(レクリエーション技術、簡易スポーツ・ゲーム、ついでに演出、野外活動等……) 回答25

9. その他(レジャー産業、消費社会とレクリエーション、経済との関係等……) 回答5

以上

○ 第1回定期研究会のお知らせ

5月22日(日) 午後4時より、岸記念館会議室で開催いたします。是非御出席下さい。

話題提供はNHK放送文化研究所の藤竹氏にお願ひし、その後討論の場とします。

お話し「国民生活からみたレジャー、レクリエーション」

○ 旧研究会の方で、昭和45年度の会費未納の方は、至急学会事務局宛にお送り下さい。



学会ニュース June 1971

日本レクリエーション学会

すでに学会ニュース1号でお知らせした通り、5月22日(日) 午後4時より、岸記念館で、第1回定期研究会が開催された。話題提供等としてNHK放送文化研究所の藤竹氏を招き、その話題を中心に熱心な議論がかわされた。藤竹氏はすでに1962年に、「テレビ・コミュニケーションの基礎理論」で第5回城戸浩太郎賞を受賞しており、その後もマスコミュニケーションやテレビに関する基礎理論を発表している。レジャーに関する著書としては昨年4月の「個性あるレジャー」(日経新聞17頁)がある。今回の話題「国民生活からみたレジャー・レクリエーション」も、基本的にはこのレジャー論から出発したものとされた。研究会当日氏によって提供された話題の原稿は、およそ次の通りである。

こころのおれは増大する余暇によって、いざば戦を受けているといえる。こうした時代においては、余暇のどのように創造性を求め、これを克服すべきか? 話題提供はまずこのような余暇の受け止め方を前提に述べられた。そして第1に、生活消費の単位を、1日(24時間)と考えたこと、これまでも慣例がわかって、新しく一週間単位で生活を把握する必要性を強調された。このことはたとえば、連休2日状況に目をやる場合に明白である。すなわち連休2日制は生産効率を下げることに(仕事の密度を高め)、一貫した長い休みを取ろうとする動向(これは現代を象徴するものである)の所産と考えられるから

国民生活からみたレジャー・レクリエーション

である。ところで毎週こすこすの余暇を得ている場合と、更にまとまった余暇を与えられる場合とでは、余暇はその意味を変えてくる。たとえば休みが長くなれば、その時間は休息ばかりでなく、更に積極的な余暇利用の活動をも含んだものになり得る。従って仕事(労働)の倫理と分離した新しい「レジャー」の倫理を考えなくてはならない。

こうした発想から提議されるレジャーの倫理は、なによりもまず従来のレジャー論のように、節制的な人間とのかかわり合いの終極のものではあり得ない。そしてまたこの倫理は社会的活動への参加ということと結びつけて考えられる。

氏の意はここから具体的なくわの対象とその生活サイクルに波及した。たとえば家庭生活の余暇の重要性とあり、こうしした余暇がさらに人々の各階層においての機能を果たすことが認められた。この説明は従って老人ホームにみる対社会的機能維持や、老人の余暇状況にまで進められ、時期近づく及ばず話題提供を前提に要するものとし、われわれに数多くの示唆をもたらした。

話題提供後、討論に入ったが、時間の都合で途中で切りあけなくてはならない。そこで特に注目すべき論点としては、レジャーとレクリエーションをどう位置づけ理解するか、という問題があった。とわけ藤竹氏というレジャーの倫理内容について、激しいやりとりがあった。

学会活動への期待

会員発言 高橋和敏
東海大学体育学部助教授

あまりむずかしいことはわからない。レクリエーション学会は、新しい学会である。いわば、時代の要請に対応して生れたもの。だから、この時代つまり現代から将来への学会だろう。現代とひとちにおいて、その中核は被疑。そのなかで、忘れてならないのは「人間」。レクリエーション学会は、一見レクリエーションを追求するかに見えるが、そうではないと思う。人間そのものの追求こそ本会だろう。そのためにレクリエーションがあるのである。学会員が、その対象たるレクリエーションだけ追い求めたならば、学会活動は、人間不在の活動である。こんな学会には、まずなりたくない。

学会は、学問研究者の集りであるという。だからきびしいものであるという。そのとおりには違いない。しかし、こればかり大段にふりかかっていると、やがてあがきで、みくに競争社会にもなりかねない。他人の研究をけなし、あるいは目を向けないようなことが、レクリエーション学会にあってはならない。学会員の間には、固執的もすくれている研究者もいれば、これから教養を受けようとしている人もいる。いろいろな傾城からみ合っている。これらの人たちが、いっしょに問題解決、研究に向かう姿勢が必要となる。連帯感のある共同社会とすべきではない。人間は思想が必要である。思想の根柢は、人間に幸福がある。われわれは、何が幸福なのかかわからない。しかし、それを求める追求があるし、追いつめるべきであらう。とするならば、レクリエーション学会は、どうも、動かしをお互に期待している。

学問研究は科学であるという。しかし、科学には思想が必要である。思想の根柢は、人間に幸福がある。われわれは、何が幸福なのかかわからない。しかし、それを求める追求があるし、追いつめるべきであらう。とするならば、レクリエーション学会は、どうも、動かしをお互に期待している。

人間の動機は欲求とはいえず、学会員ひとりを受けようとしている人もいる。いろいろな傾城からみ合っている。これらの人たちが、いっしょに問題解決、研究に向かう姿勢が必要となる。連帯感のある共同社会とすべきではない。人間は思想が必要である。思想の根柢は、人間に幸福がある。われわれは、何が幸福なのかかわからない。しかし、それを求める追求があるし、追いつめるべきであらう。とするならば、レクリエーション学会は、どうも、動かしをお互に期待している。

ともあれ、新生の学会への期待は大きい。日本の枠から超える必要もあろう。国際シンポジウム、国際交流……あれこれ夢のある

学会に、われわれの手で育てていきたいものである。

レクリエーション定例研究会の年間計画まとまる

昭和46年度定例研究会年間計画の変更

- 「自由発表会」の構想

さる5月22日(日)第2回理事会が開催されました。その折定例研究会の方も議論され、自由発表会の構想が明確にされました。自由発表会とは会員の発表希望者
- 「大阪での定例研究会の延期」

今年の事業計画案で7月に予定していた大阪での定例研究会は、誠に残念ながら9月に延期せざるを得なくなりました。おわ

6月	自由発表会(24日)	東京
7月	"	東京
8月		
9月	職場レクリエーション研究の実際と問題点	大阪市
10月	諸外国におけるレクリエーション研究の現状	東京
11月	学会大会	北九州市
12月	自由発表会	東京
1月	レクリエーション技法(研究と実情)	東京
2月	自由発表会	東京
5月		

今後も定例研究会を各地方でやりたいと考えています。各地方の先生活でこうした催しに御意見を御持ちの方は是非、事務局までお寄せ下さい。さしあたり、9月に開

催する研究会には、近畿地域の会員の方の積極的な参加をお願いします。

連絡版

- 研究資料を提供いたします。

協会ではこのたび海外資料シリーズとして系統的に資料を揃えていくことになりました。そのはじめとして下記の資料ができましたので、お知らせいたします。

 - 1. "国家青年領袖訓練学院" ¥250
 - シンガポール社会教育活動の報告
 - 2. "黄金計画と第2の道" ¥500
 - 西ドイツにおける社会体育活動の10年間のまとめ

※なお送料(その他)として100円をそえて事務局宛て申し込み願います。(学会ニュース版1で提供した資料もひきついでにお申し込み下さい。)



- 第2回定例研究会に御出席下さい。

6月24日(日)午後6時より岸記念会館504にて「自由発表会」を行ないます。

 - ① 松林謙至「企業内におけるレク活動の実践例」
 - ② 朝倉・守野・江橋「横浜市職員の余暇利用に関する調査」

※なお自由発表会前に理事会を開催しておりますので、おまちがいのないよう。会員の皆様多数の参加をお待ちしています。

旧研究会員の方で、昭和45年度会費未納の方は、至急学会事務局宛にお送り下さい。

学会事務局は会員の相談受付の窓口です。良い研究仲間をつくるため、よりよい研究をすすめる上で、御利用下さい。

(附) 日本レクリエーション協会発行
日本レクリエーション学会事務局 (T01) 460-5464

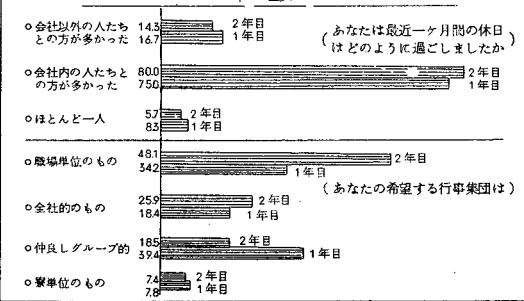


No 3 学会ニュース June 1971 日本レクリエーション学会

定例研究会は、午後6時より「第2回定例研究会」が開催された。今回の自由研究発表会では、守野俊次氏(YMCA武蔵野クラブ勤務)による「横浜市職員の余暇利用に関する調査」と、松林謙至氏(日本オイルシステム工業株式会社勤務)による「余暇と仕事との関係に関する調査」が提供された。2つでは特に後者の話題について、その内容を紹介したい。

松林氏は職場のレクリエーションに関する有効性を特に新入社員と会社入社後2年目を迎えた社員との比較によって、どのような変化がもたらされるか、という点から考察しようとしている。そしてまた仕事との関係でどのような自由時間の活用が見られるか、という点に着目している。

それによれば、余暇と仕事とをわり切つて考える人々が多数を占める。そして入社後1年間に、①社内の交友関係を基盤としたものは1年目でも大多数を占めるが、2年目になって更に増加し、その上計画性をもった休日の過ごし方が増える。②スポーツや野外活動から、ドライブ、旅行あるいはクラブサークル活動が目立つようになる。③それと同時にパソコン、飲食などのいわゆる大人の遊びも、未成年の社員の間には浸透しつつある。「遊ばせたいと思うが、そうもいかな時が多い」というのが一般的な受け止め方になっている。④希望する行事集団は、仲良しグループ的なものから職場単位のものへ移行する傾向にある。



第1回日本レクリエーション学会大会のご案内

第1回日本レクリエーション学会大会の要項が次のように決定いたしましたので、お知らせいたします。今から御準備下さい。

日時 昭和46年11月4日(例) 13:00~18:00
会場 北九州市戸畑文化ホール
住所 北九州市戸畑区千砂町
交通 鹿見島本線千砂駅より、徒歩5分

- 研究発表
- 発表資格 昭和46年度会費を9月15日までに納入した正会員。
 - 発表形式 口頭発表。
 - 登壇回数 共同発表をふくめて1人1回に限りです。
 - 発表
 - a. 時間 一題10分(2分間の質疑応答を含む)。プログラム作成上の都合により若干変更することがあります。
 - b. 資料 発表用紙を提出する(後述)。
 - c. スライド・フィルム映写を必要とするものは、申し込みのとき明記してください。
 - 研究発表申し込み
 - a. 申し込み手続き 演題1題ごとと所定の申し込み用紙に記入し、返信用封筒と50円切手をそえて、事務局に申し込み。申し込みと同時に事務局から発表用紙を送付します。
 - b. 申し込み期間 8月15日から9月15日。9月15日の消印があるものは有効です。
 - c. 申し込みの取消し、変更
 - i) 申し込み後の取り消し変更は至急学会事務局に連絡してください。
 - ii) 大会当日の取り消し変更は、至急大会本部に申し出し、本部の承諾なしに発表会場での取り消し、変更をしないでください。
 - 発表用紙の提出 学会大会後の「研究抄録号」の発行はしません。資料として提出される発表用紙を製本し、学会当日配布します。
 - a. 用紙 用紙は事務局で送付するものに限りです。原稿はタイプまたは楷書による手書き(黒字)で撰書します。
 - b. 提出期限 発表用紙の提出は10月15日とします。この日までに事務局に届かないものは、発表を認めません。(厳守)

特別研究発表
研究発表が終わったあと、福岡教育大学の秋吉富雄氏の特別研究発表を予定しています。大会参加の申し込み 所定の申し込み用紙に記入のうえ、事務局あて9月15日までに御送り下さい。後日プログラム等をお送りします。宿泊などのあせんはいいたしません。

参加費

- 1) 正会員 会費は500円(学生会費300円)です。
資料は当日お渡しいたします。
- 2) 当日会員 会費は入場料として500円(学生会費300円)です。資料費は300円(希望者のみ)です。なお参加のしかたはあくまでオブザーバーとしてであり、会場の発言は認められません。

発表用紙の申し込み
学会大会に欠席されるかたは、発表用紙(抄録)が必要なかたは、所定の申し込み用紙に記入し、用紙代350円を同封の上、9月15日までに事務局までお送りください。

(詳細は全国レクリエーション大会の事務局にお問い合わせください。)
TEL 468-4381

— 日本レクリエーション学会総会のご案内 —

下記より日本レクリエーション学会総会を開催いたします。御参加ください。

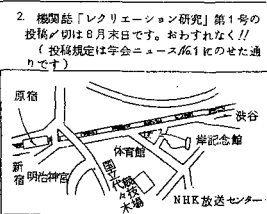
日時 昭和46年11月4日(水) 学会研究発表終了後
会場 北九州市戸畑ホール

(北九州学会大会事務局開設)//
学会開催にそなえて現地北九州では、学会大会事務局を開設しました。学会に関する現地の情報に御注目下さい。お問い合わせをお待ちしております。

北九州学会大会事務局 福岡教育大体育学研究室
福岡県宗像郡宗像町赤間729 TEL09403(2)2381
事務局担当責任者 秋吉嘉範



1. 研究資料を提供いたします。
学会ニュース(第1, 第2)でお伝えした研究資料の申し込みをお待ちしています。



学会に思う

会員発言 福岡教育大助教授 秋吉嘉範

学会第1回大会を北九州市がひきうけ、その準備を完了した。第1回という名譽ある大会を成功させるために、できるだけ努力をしたいと思っています。さて、準備や交渉の段階で、学会の話しに多くの人達がげんか顔をしました。「レクリエーションとは、どんなことですか?」「遊ぶことでも研究があるのですか?」「レクリエーションの学会は何の研究をすすめるのですか?」などいろいろの意見をききます。私は私なりの考えを言いますが、なかなか理解してくれない。
レジャーや、レクリエーションという言葉は流行りとして多くの人に知られておりますが、さて、レジャーとは何か、レクとは何か、と問われると、それぞれの人によって異なる解答をするのが現状です。
私は、素直に言って、2年程度の準備期間では学会発足は、時期早送りと考えていた。というのは従来の研究会で、もっと検討し問題点を明らかにしなければならない点があったと考えたからである。だから内容的には研究会の名称を学会にすりかえただけではいまいかという、うがった意見もでてくるのである。
学会は学問の発達推進を要する。学問の研究には情熱がなくてはならないのは、言うまでもない。しかし、一方で冷静さやけんきよさも必ず必要ことを忘れてはならない。学会が時代の流れを、時代の進歩に対応することは、「住たて学問、研究」として当然必要なことである。しかし、時代の流れに誘われたり、レジャーブーム、ムードの中で学問の本質や原則を見失うようなことがあってはならないと思う。
次に学会役員人事について希望を述べたい。

たい。今回の人事をみると、レクに関連する幅広い領域の専門家を選んでいる点は出色である。しかし、もっとも新しい学会、ユニークな学会であるのだから、もっと若手層からも選んでいただきたかったと思う。学会が今までにない「何か」をやらなければ、よりフレッシーなメンバーも必要であると思う。また、いづれ全国各地に学会支部が誕生するだろうが、全国各地の意見を反映するような役員人事も考えて欲しい。
九州では北九州市を中心に、すでに10名近くの入会希望者がいるので、九州支部を結成しようと思っている。次に学会がいつまでもレク協会に甘えていようか考えおぼろげな。協会にいつまでもおんぶされることは、学会の独立という点でよくないと思う。同様に学会大会も、レク大会の脇談行事として行うことがよいかどうか吟味の余地がある。
最後に、私は他の会員の皆さんと同様に、学会を愛するもの1人である。今後この学会が発展することを祈念したい。そのための努力はおしまないつもりである。いろいろ勝手な意見を述べたが、ポイントはこれら点があればおゆるしいただきたい。(完)

旧研究会の方で、昭和45年度の会費未納の方は、至急学会事務局にお送り下さい。学会事務局は会員の相談受付の窓口です。良い研究仲間をつくるため、よりよい研究をする上で、御利用下さい。
(財) 日本レクリエーション協会発行
日本レクリエーション学会事務局
(Tel) 468-4381

学会ニュース

No. 4

September 1971

日本レクリエーション学会

<はじめに>

この報告は、横浜市職員厚生会が昭和45年9月に実施した「会員意向調査」の余剰利用に関する部分の結果の概要である。調査の目的は、横浜市職員厚生会が会員のために実施している諸事業への会員の参加の程度、厚生会活動に対する理解、認識、関心の程度を知るとともに、各会員が今後どのような厚生会事業ないし活動を期待しているのかについての手がかりを得、より有意義な内容の厚生会に発展させようという点にある。

<調査の対象>

対象は、横浜市職員厚生会に所属する会員(現16130人)で、回答をした人数は12522人であった。匿名調査であったにも拘らず、調査回収率は77.6%非常に高く、これは対象層が不特定多数ではなく、一定の組織の構成体であることに強く寄るものといえる。

<図1>対象の年齢階層比を示す。

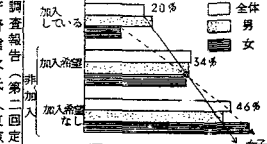
男子	20代	30代	40代	50代
	(32)	(24)	(29)	(15)
	(9.3 9.1)			
女子	(30)	(26)	(22)	(14)
	(5.1 3.1)			

<図2>対象の年齢階層比を示す。

図2は、会員のサークル(厚生会が予算

的措置をしているもの)への加入状況を示している。

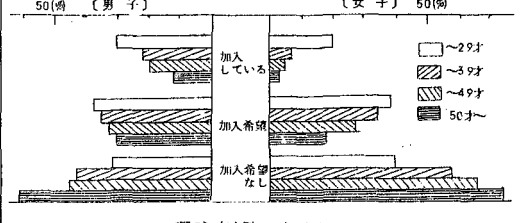
全体の傾向を見ると「加入」→「加入希望(非加入)」→「加入希望なし(非加入)」の順に会員の占める比率の増加することは男女とも同じであるが、この比率増加の勾配は女子の方が男子よりも大きいという点に注目すべきであろう。つまり「非加入+加入希望あり」の男女における比率にはそれほど顕著な差がみられないのだが、「加入」における比率の男女差(男>女)が、そのまゝ、「非加入+加入希望なし」の男女差(男<女)と相殺される形になっている(約10%の差)。



<図2>サークル加入 男子 女子

これを男女別に年齢階層間で見ると、図3のようである。
「加入している」についてみると特に女子の場合30年代以上になると、それぞれ5~8%にすぎず、男子の50年代以上よりも、その比率は小さくなくなっている。女子の30年代以降の加入率の低さは一体何に起因するものであろうか。これは、年齢による体力的限界というより、むしろ結婚と

いう社会的ステータスの発生によるものといえる。
「非加入、加入希望なし」では、男子は年齢階層的に少しの差はあるが、全体の加入率30%強という比率で纏めることができる。女子は40年代以上の構成員の比率の低下が目立っている。逆に女子の「加入希望なし」では、既に30代において50%を優に越えている。女子のサークル加入への消極性を打破する方法が研究されるべきであろう。



<加入サークルの種別>

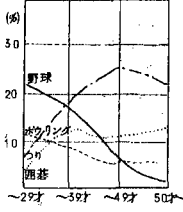
表1に男女における加入サークル種別の上位6位を示す。一見してわかるように、男子ではスポーツ活動を主体とするサークルが上位を占めている。(余サークルは40余ありである。加入率の年齢的变化に着目すると、表2および図4、図5のとおりである。)

順位	男子	女子
1	軟式野球(13.2)	藤道(21.6)
2	つり(9.1)	将道(7.8)
3	ボウリング(9.1)	茶道(7.8)
4	囲碁(9.0)	ボウリング(7.3)
5	軟式テニス(4.6)	軟式テニス(5.4)
6	卓球・ゴルフ(4.2)	コースラ(4.6)

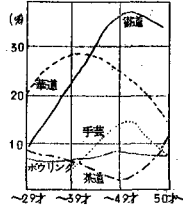
()内は%を示す

<表2>男・別年齢階層別加入サークル順位(上位6位まで)

男子						女子					
20代	30代	40代	50代	60代	70代	20代	30代	40代	50代	60代	70代
野球	2.1	1.7	2.4	2.2	2.0	藤道	20.2	28.3	37.8	33.3	33.3
ボウリング	1.1	1.6	1.8	1.8	1.8	茶道	8.7	2.5	2.4	2.5	1.2
つり	7.4	1.6	7.5	7.5	7.5	将道	6.7	6.7	1.5	1.5	1.5
囲碁	6.8	8.8	6.9	6.9	6.9	ボウリング	8.3	6.6	8.9	8.9	1.2
卓球	4.6	6.1	6.8	6.8	6.8	手張スノー	7.0	5.0	2.2	8.4	8.4
囲碁	4.5	4.0	5.7	5.7	5.7	コースラ	6.2				8.3



〈図4〉年代別サークル加入率(男子)
(注)図4、図5のサークルは4年余の期間のうち3年余の期間以上で6人以上のレクリエーションサークルのみを扱っている。



〈図5〉年代別サークル加入率(女子)

図4(男子について)によれば「野球」は、はっきりと年代上昇とともに加入率が低下しており、その逆は「ゴルフ」である。「ゴルフ」は年代別影響があまり見られない。
図5(女子について)をみると、「茶会」は20才代以上では、約25%の加入率の差がみられ、年代上昇と共に加入率が増加するサークルの典型である。
ボウリングという、年齢階層に活動でなく、しかもスポーツとしての特徴を備えているこの余暇活動は、若年を軸として一定の年齢のものと定着しているといえる。

〈おわりに〉

以上、主としてサークル加入に焦点を合わせて報告した。この「会員意向調査」の余暇・レクリエーションに関する調査項目は、運動会、遊園地、各種遊戯(釣り、スキー、乗馬)、観劇会への意見なども多岐に亘っており、ここではスペースの関係でも全部を報告することはできない。しかし、横浜市職員厚生

会では、この調査にもづく結果の上に立って更にレクリエーションに関する詳細な意向調査へと発展させていく考えである。たとえば、会員の居住地と勤地との距離、通勤時間と余暇活動との関係の究明、レクリエーションリーダーの養成施設設立上の諸要素、行政的には予算措置の方法などである。

企業や官公庁の余暇対策には、指導が人事管理の延長線上に乗った、単なる小手段のものではあてにならない、またそういう内容のものは決して推進されるものではない。労働と余暇という生活の2つのカテゴリーが現代社会においてより明確に分離・別置されていなければならないという問題を見出し得なければならない。

横浜市厚生生命が従来のレクリエーションの事業から脱却しようとする、このような点への留意が先決であるが、おられる今後の活動に大いに期待するものである。
(なお、この意向調査の詳細については、横浜市職員厚生生命から中間報告が出ていることを付記します。)

遊 絡 版

① レクリエーション学会の発展と参加の申し込み受付中

学会コース3号で郵送した通り、学会の発表・参加を申し込み中。9月15日までに所定の用紙に記入のうえ、事務局までにお送りください。
* 社名の委託もお忘れなく。//

② 学会機関誌「レクリエーション研究」の投稿切欠について。

「レクリエーション研究」の投稿は、8月末日をもって一応切欠としていたましたが、事務局手続の都合上、2週間ほど延期いたします。投稿もれの方は大至急事務局まで御連絡ください。

③ 第3回定例研究会(大阪)を左記のとおり開催いたします。おさそい合わせのうえ御出席ください。

期日 9月17日(木) 午後1時より
場所 大阪大学本館
(大阪市北区中ノ島)

新刊提供

- 瀬川彰氏(同志社大学教授)「レクリエーションの概念をめぐって(仮題)」
- 楠本定彦氏(大阪大学教授)「楽道のレクリエーションとしての効用(仮題)」
- 他
- ④ 研究資料(海外資料シリーズ)を提供いたします。

- A. 青年期年報訓練学院(250円)
— シンガポール社会教育活動の報告
- B. 黄金計画と第2の道(500円)
— 10ドイツにおける社会体育活動の10年間のまとめ

学会の質への希望

<会員の声>

大阪産業大学教授 山田 勝次

なんと云っても、大阪から東京で行われる研究発表会、研究会に行くことは、困難です。この前、なんと東京以外の地域、でも研究会が開催されればよいと言うようなことを申し入れてはと御願いしましたところ、本年の行事予定に近畿地方で発表会を行うことが盛り込まれていて、大変うれしかったのですが、日本体育学会の支部の事、大学保健体育協議会近畿の部会の事で追われているうちに、近畿の方の開催を頼られました。今更おかしき事ながらあらわして、学会本部の小田切さん、大阪大学の高山さんに大変御迷惑をおかけしました。高松まで御呼びよせました。レクリエーション学会として発展した事には、皆様の大変な努力が裏切られたものと思います。しかし、九州の秋吉さんも述べておられましたように「レクリエーションを科学的に研究する」とは一体どんな事をするのかと云う疑問はあるようです。

また、「生活の体育」の理論の基本的なもの、レクリエーションの存在はどのようない関係にあるか、体育文化と云われるが、概念の意味は各自自由に解釈を覚えながら確立しているの、ますます混乱しております。これからのレクリエーション学会の大いなる発展、このような基本を一つ一歩ずつ確立することも一つであると考えております。さ

らに秋吉さんは、学会人事や、レク協会との関係についても率直な意見をのべておられました。熱心な研究者が全国におられることが、この学会の強味でもあり、この力を育てることが大切だと考えます。さいわいに、本年は学会大会を北九州市で、「定例研究会」が大阪で行われますことは、学会活動の進歩として、研究活動の発展を意味するものと思ひ、さらに次々と年を重ねるに、会員の意志がみるみるよりにして行きました。私の知る限りにおいても、大阪で大学教員入会希望者もおられます。おそらく近畿35名の方の他にも御存じの方が多いとおられるでしょう。
会員の増加も学会の一つの勢いでもあります。しかし、既に加入人数が増えるだけでは、学問の発達交通はできません。1人の加入3年か4年か5年か述べておられましたように「レクリエーションを科学的に研究する」とは一体どんな事をするのかと云う疑問はあるようです。

また、「生活の体育」の理論の基本的なもの、レクリエーションの存在はどのようない関係にあるか、体育文化と云われるが、概念の意味は各自自由に解釈を覚えながら確立しているの、ますます混乱しております。これからのレクリエーション学会の大いなる発展、このような基本を一つ一歩ずつ確立することも一つであると考えております。さ

レクリエーション研究情報(1)

—アメリカ・イギリスのレクリエーション研究のために—

- この系32名会員の皆様の研究に参考していただくため、従来の研究成果の一部を報告するためのものです。御意見をお寄せください。

アメリカにおけるレクリエーション研究の動向

昭和44年2月の福田勝氏(大阪大学助教授)「現在アメリカ・イリノイ大学(下野中)の報告より」

I 最近におけるレクリエーション研究の発展要因

(1) 社会問題としての余暇への注目

第一に、余暇がひとつの社会問題として注目されるようになり、その問題解決のために各方面からアプローチされるようになった。余暇時間の増加、所得の上昇、労働内容の質的な変化に伴い、人々のレクリエーション活動への要求がますます増大していく一方、産業化による都市への人口集中、自然資源の減少などによってレクリエーションの場が不足していく。こうした状況がレクリエーション研究への大きな刺激となったといえる。

また、増大する余暇と豊かな物質文明を背景として生まれた「アクティビティ」状況の中で、人間の創造的な余暇利用ということが問題にされる一方、教育年数の延長と寿命の伸びによって生じた今日の新たな「有閑階級——若年と老人」、さらには現在アメリカのもっとも大きな問題である黒人の余暇のすじ方がこれまで以上に注目されるようになった。これらの問題に対し、各学問分野が積極的に取り組むに始めるとも、厚生福祉省、都市住宅開発省などの政府諸機関の研究への財政的援助が飛

躍的に増大した。

(2) 野外レクリエーション局の設置とその研究員への援助

第二に、1959年6月連邦政府内閣に野外レクリエーション資源調査委員会(Outdoor Recreation Resources Review Commission)が前設されたことがあげられている。この委員会は

- (1) 現在ならびに1976年、2000年におけるアメリカ人のレクリエーションの要求は何か。
- (2) この要求を満たすに有効な国内のレクリエーション資源はどうか。
- (3) 現在ならびに将来の要求が有効かつ効率的に満たされるためには、いかなる施策および計画がなされるべきか。

の三点の課題に答えるべく設置されたもので、1962年1月には3年半の歳月と約3億ドルの費用をかけて実施された調査委員会の報告書「アメリカの野外レクリエーション(Outdoor Recreation for America)」が時のケネディ大統領ならびに議会で提出された。

この委員会の勧告により、1962年4月内務省に野外レクリエーション局(Bureau of Outdoor Recreation)が設置され、こ

れまで政府各局でバラバラに行なわれていたレクリエーション政策を統合ならびに調整するとともに、レクリエーションに関する調査研究を積極的に助成するようになった。

(3) 研究者ならびに研究機関の充実

第三の要因として、研究発展の根本的な問題である研究者ならびに研究機関の質的両面の充実があげられる。現在アメリカにおいてレクリエーション関係の大学院コースをもつ研究機関は、39(うち博士課程は15)で、レクリエーションを専攻する大学院生は1967年時において980名(うち博士課程173名)である。1967年1月にワシントンで「レクリエーション専攻コースの大学院カリキュラム改善委員会」がもたれて以来、既習科生などに本格的な研究者養成への姿勢が強くうかがわれるようになった。研究機関についてみると、大学においてレクリエーション専攻コースは教育学部や体育学部で置かれているところが多いが、ノース・カロライナ大学においては社会学科の中に、シンガルス大学では自然資源学科の中に専攻コースが置かれているといったようなケースもみられる。また、最近開設されたグリーンベアの州立ワシントン大学では余暇問題を総合的に研究する余暇学科(Department of Leisure Science)が設けられた。この余暇学科は、資質学、コミュニケーション学、管理学、生態学の四つのコースからなり、その成果が大いに注目されている。

レクリエーション研究者のための団体としては「余暇公園レクリエーション学会(American Park and Recreation Society)」と「レクリエーション専門教育者連合(National Federation for Recreation Educators)の二つがあり、両団体とも余暇公園レクリエーション協会

(National Recreation and Park Association)の外部団体となっている。

余暇やレクリエーション研究に関する大規模な全国会議も多く開催されるようになった。これらの会議の内容については、いずれも立派な報告書が公開されている。⁽²⁾

なお、全米公園レクリエーション協会では、レクリエーション研究の専門機関誌「余暇科学(Journal of Leisure Science)」が今年はじめより発行されることとなり、これによって、アメリカのレクリエーション研究が、いそいで促進されることが予想される。

(4) 行動科学ならびに情報科学の発達と研究への適用

第三の要因と関連しているが、行動科学、さらには情報科学の発展により、余暇やレクリエーションの問題が多面からアプローチされるようになった。とくに、コンピューターの行動科学への適用範囲がきわめて広くなったことにより、現代人の複雑な余暇行動を正確に分析し、予測することが可能になってきた。
以上今日、アメリカのレクリエーション研究が急速に発展してきている原因について、四点について指摘したが、その具体的な研究の中味についてなごめなす前に、これまでのアメリカにおけるレクリエーション研究の流れについて簡単に振り返ってみよう。

II レクリエーション研究の歴史的な三つの発展段階

(1) 遊びの心理的、教育的意義の強調

第一の時期は、19世紀末から20世紀初頭にかけて「遊び場遊戯運動(Playground Movement)」が展開された時期である。当時アメリカは、移民の都市への

集中等により、都市問題のひとつとして子どもに自由な遊び場を提供する運動がひろがっておきた。1896年に成約した児童公園がポストンに、1906年には現在の全米公園レクリエーション協会の前身である「全米遊戯地協会(National Playground Association)」が創立されるに及んで、この遊び場設置運動は組織化されるのであるが、この運動を支える理論的背景となったのが、遊びの心理学的、教育学的意義を強調した当時の遊びの理論ならびに学説であった。

とくに、生活主義の立場から子どもの遊びの教育的意義を強調したデュロイの遊戯理論⁽⁵⁾ならびに遊びの心理学的意義を説いたドイッのグロウサーの二つの名着⁽⁶⁾が紹介されて以後、心理学者、教育学者などによって遊戯論が盛んに論じられた。今日の遊戯ならびにレクリエーション理論の基礎はこの時期に形成されたと言ってもよい。リ⁽⁷⁾、カチ⁽⁸⁾、マニ⁽⁹⁾、ジョン⁽¹⁰⁾、ジョン⁽¹¹⁾などの文獻はその代表である。また、社会運動のひとつとしての遊び場設置の社会的分析を試みたレイノウタ⁽¹²⁾や子どもの遊びを調査し、性、年齢、人種グループ、知能指数などによってその違いを明らかにしたレマン⁽¹³⁾もこの時代の研究も見逃せないものがある。

② 恐慌期における余暇対策

第二の時期は、1930年代の恐慌期においてである。すなわち、突然暴落した経済危機、それによってもたらされた大衆の失業と、強制的な余暇の増大、街頭の犯罪、青少年の非行、地方行政におけるレクリエーション関係予算の削減、映画・ラジオなどのマス・メディアの急速な普及、プロスポーツの発展など余暇に関する重要な問題が生れたのであった。このような社会的な異常な状況の中での余暇問題、とくに

観点から「健全な余暇のすこし方」が盛んに論じられる一方、行政的にも青少年や失業業者などの余暇をいかにコントロールするものが大きな問題となり、その対策のための基礎的なデータが必要とされた。

この社会的な要請に答えるべく、余暇時間やレクリエーション活動に関する社会調査がこの期に飛躍的に発展するのであるが、なかでも全米レクリエーション協会⁽¹⁴⁾ランドバーク⁽¹⁵⁾、リント⁽¹⁶⁾の三つの調査は方法的にもレクリエーション調査の先駆的なものであり、まわって興味のある研究である。

恐慌という社会の特殊な時期におけるレクリエーションの問題は、社会的、経済的な学問的立場からはもちろん、行政的観点からもまた大きな課題である。この時期の様々な研究ならびに資料は、たんに歴史的な価値をもつのみならず、今日の、あるいはあすのレクリエーション施策に大きな示唆を与えてくれるものである。そうした意味からも、当時の状況の中で、余暇に関する種々の研究法を採ったスタイナー⁽¹⁷⁾の研究ノート「恐慌期のレクリエーションに関する研究メモ」は貴重な資料である。また彼は、多くの資料を駆使して当時のアメリカ人のレクリエーションの動向を調べ、まとめている⁽¹⁸⁾。なお、この分野のチャートブックとして有名なニューマイヤー⁽¹⁹⁾の「余暇とレクリエーション」の初版が出版されたのもこの時期においてである。

③ 大衆余暇論

第三の時期は、第二次世界大戦ならびにその後に続いた「大衆余暇」の時代である。1950年、シカゴ大学の余暇研究センターのラビとマイナー⁽²⁰⁾が古今の余暇に関する文獻約40篇と1900年以降の詳細な文獻目録からなる一冊の本を編集し、そのタイトルに「マス・レジャー」とつけ

たことから始まる。清水幾太郎⁽²¹⁾のことをかりれば、「マス」と「レジャー」という本来結びつかなかった二つの名詞を結びつけることによって、この著書は、まさに新しい時代を告げたのであった。

この著書と前後して、1956年アメリカンゲームでの国際社会学会で「余暇に関する国際研究グループ」が作られ、ユネスコの援助の下に、フランス、ベルギー、デンマーク、ユーゴスラビアそしてアメリカなど東西11ヶ国におたる大規模な余暇の比較国際研究がなされた⁽²²⁾。1957年、AFL-CIO⁽²³⁾が労働時間の短縮とそれに対する対策をまとめている。同年ローゼンバークとホイットの共編で「マス・カルチャ」が刊行されている。

また、社会科学関係の研究機関にも余暇やレクリエーション等集として取りあげられた。これらの特集号に掲載された論文の多くは、今日においてもなおその生命力をもち続け、多くの研究者によって引用されている。

さらに、カプランの「アメリカの余暇」、アンダーソンの「労働と余暇」、ブライトの「人間と余暇」などの、この分野でのチャートブックとなる書物がタイムリクよくこの時期に出版されている。

□ 参考文献

- (1) Sessoms, H. D. "Education for Recreation and Park Professionals". Park and Recreation 1967, 12, 24-30.
- (2) University of Michigan, National Conference on Outdoor Recreation Research 1963. Annals of American Academy of Political Science 1964, 58, 1-19.
- (3) Deyve, J. J. Democracy and Educa-

tion: Introduction to the Philosophy of Education. N. Y., Macmillan 1916.

(4) Groos, K., Play of Animals, 1898, Play of Man, 1901, N. Y.: Appleton.

(5) Lee, J., Play in Education. N. Y.: Macmillan 1915.

(6) Curtis, H. S., Education Through Play. N. Y.: Macmillan 1915.

(7) Gulick, L. H., A Philosophy of Play. N. Y.: Charles Scribner's Sons, 1920.

(8) Johnson, G. C., Education by Play and Games. Boston: Ginn & Co., 1907.

(9) Rainwater, C., The Play Movement in the United States: A Study of Community Recreation. Chicago: Univ. of Chicago Press, 1922.

(10) Lehman, H. C. & Witty, P. A., The Psychology of Play Activities. N. Y.: Barnes, 1927.

(11) National Recreation Association, The Leisure Hours of 5000 People. N. Y., 1934.

(12) Lundberg, G., Komarovsky, M., & McInerney, M., Leisure: A Suburban Study. N. Y.: Columbia University Press, 1934.

(13) Lynd, R. S. & H. M., Middletown, 1929. Middletown in Tradition, 1937. N. Y.: Harcourt Brace.

(14) Steiner, J., Research Memorandum on Recreation in the Depression (The Social Science Research Council Bulletin 32) 1937.

(15) Steiner, J., American at Play: Recent Trends in Recreation and Leisure Time Activities. N. Y.: McGraw-Hill, 1933.

(14) Neumeyer, M. H. & E. S., Leisure and Recreation. N. Y.: Barnes, 1936.

(15) Larrabee, E. & Meyersohn, R., Mass Leisure, III: The Free Press, 1958.

(16) 清水幾太郎「現代思想」下、岩波全書1946.

(17) International Study Group on the Sciences of Leisure, Evaluation of the Forms and Needs of Leisure. UNESCO Publication Center, 1960.

(18) AFL-CIO, The Shorter Work Week. Washington: Public Affairs Press, 1957.

イギリスにおける「フィジカル中央協議会(COCP R)」の活動について

昭和22年2月の浅田隆夫氏(東京教育大学助教授)の報告より。

全国統轄団体

まずイギリスのフィジカル・レク・サービスクオリティイニシエーションに含まれる組織について、非常に複雑多岐で、文部省、公園委員会、地方当局、地方教育委員会、法的団体、地方、全国的レベルにある自発的団体等があります。全ヨーロッパでは、余暇はスポーツが最大の国民的安楽を促進すべき手段であるとの考えが国民のとりとけに浸透しています。イギリスでも全国的統轄団体として、スポーツ統轄協会の(CBS)と日本の体育協会に似た一野外活動協会(OAA)が高層地位を占めています。ユネスコ、登山、キャンプ、サイクリング、カヌー、スキー等の促進活動も全国的統轄として、各種の団体と横の連絡とを目的とした活動があります。その他、ダンスとリズム運動会(DRMA)青年サービス団体(YSO)などがあり、後者はエンパワメントの奨励目的の奨励を受けています。学校がある施設を利用した野外活動をする機会としての、アウトワードバンド・トリプスです。

全国統轄団体にはこれをまとめる技術的サービス、安全基準を立法化する間、寛

伝・設備とこのえコーチング計画をたてるなど重要な役割をはたしています。たいせつな点は財政面と設備面で各種団体の管理機構の強化が言われています。

混成団体

混成団体では全英オリンピック協会(BOA)があり、その目的はアマチュアスポーツの公共利権に関係する人々と協議し意見を調整したりする国際的ネットワークとすることです。この場合は全英共和国ゲーム協会、イングランド、スコットランド、ウェールズの総協会で含まれます。全国運動協会(NPFA)は子ども・青少年のための施設を増設することを、宣伝や財政的援助を他から請う働きが主です。1925年ロンドンで設立されました。ロンドン本部、スコットランド、北アイルランドに支部があります。協会は16個目の統轄団体とその他種目団体で、BOAやCCPR、教育団体、自発的青少年団体等の代表者から役員が選出されており、ほか31名の会員が加わり全国の運動場づくりに推進しています。活動内容は運動場の設備・デザイン、維持と同時に諮問的サービスにも応じ、研究費

料提供提供の部門もあります。文部省、州、地方自治体からの援助金はありません。経費は1961年度で計1億400万円。このうち寄付金・4200万円、遺産・1100万円、利息配当・1500万円、その他・2700万円、計9500万円で大衆省からは必ず3700万円が交付されているだけです。これは施設をつくるのに用いられています。

CCPRの機構ですが、本部はロンドンにあり、小中学校体育指導者の団体、リッジ体育協会、全国体育職能協会、その他体育指導者団体が発達の解消し1935年CCPRを設立したのです。内容は、技術、訓練、全国テスト、戦術教育、海外、情報宣伝、資料、出版、会計の9部からなり、スコットランド2、イングランド19、ウェールズ1支部があります。職場関係では産業福祉団体、工業福祉委員会、政府関係では文部、労働、厚生、本國と共和国の植民地も自外関係部局もはっています。教育団体関係は大学・専門学校の統轄に関係ある組織団体の組織、講師、教授、リーダーの協会が含まれています。地方当局は教育委員会、青年委員会、公園、公衆衛生、芸術、民衆教育等があり、ゲーム、スポーツ、野外活動組織団体、BOA、ホビーサービスクオリティイニシエーション、自発団体関係では全国青年自発団体定例会、地方支部青少年成人組織団体等があります。レクリエーションに関心をもつ団体関係では、スポーツ発展諮問委員会、奨励所関係、物理療法関係、医療体育の研究支助会、NPFAもここにはあります。諸外国関係では英米州協会、外国大使館、広報機関、新聞、写真などの報道関係もここにはります。

政府の下付金については、1961年には文部省が中心で全国的自発的団体定期給に充てられており、その額は2億3,500万円です。これからCCPRは1億2,100万円をとり、他はアマチュアや技術連、馬術協会、柔道協会、卓球協会、カヌー関係、バドミントン協会等

に配分されます。地方自治体には4億2,770万円が与えられますから、計6億6,100万円が下付金の総額といえます。地方自治体では農村のビルドアップ・ホール216に2億5,800万円、コミュニティセンター、28に5,800万円、運動場その他スポーツ施設1,060万坪、なっています。中央からの下付金のだし方、中央よりも地方の県段階に集中しています。スコットランドでは1957年、スポーツと射撃訓練の立法化ができて、施設の促進をさせました。イングランドも将来教育への法廷が1959年にできて1961年から2年にかけて下付金の総額6,000万円が計上されています。スコットランドCCPRが2,900万円、その他、3,200万円の75万はビルドアップホール建設にあてられています。北アイルランドは1960年の下付金が3,900万円です。

CCPRの活動について

CCPRの活動は事業組織は前述の連絡調整機関と協働して行ない、諮問サービス、技術提供サービス、施設サービスの三つが考えられます。一般市民へのPR、プログラムと指導者養成のコーチングとの二本の柱で、前者は大きな国立センターが全国に五つあり、それを休日利用をレシマスアブ・ホリデーとの名称である期間対象を定め開設します。たとえばイースター休暇の週間は18才〜25才までの男女、つぎの週間は16才〜18才の女子と定め、プログラムはCCPRが中心、技術は陸上の場合、ナショナルコーチがおり、彼は政府からサラリーを8万円保証され毎の20名は統轄指導者の例が支払います。文部省の定期コース全開夏季学校とか、その他諮問会の夏にふさわしいものがくりか

対し対象をかえて開催されます。大学教員兼職のチャーター、助手としての研修、カレッジ教員、自発的リーダー養成、さらに幅広いユースサビリティの養成コースなども含まれます。他の三つの国立センターでもほぼ同様だと思います。

1941年創立のアウトワード・バンド・オブ・エン・マウンテンスクール、つまり野山学校ですが、これは小学校高学年から中学生を1か月間徹底的に野外で訓練する学校で、参加者は1人あたり4,000円を負担し、他に一さい文部省、地方自治体からの費用でまかなわれます。軟弱な最近の青少年を強く育成するには単一のスポーツ種目ではむづかしく、山野や海でのキャンプや水泳、スポーツを共同生活の中からリーダーシップのとれる人間をつくることに意義があり、将来カウントリーカレッジ、農業大学、夏季大学へ移行するのではないかと考えられます。次の指導者の計画は1940年シヨナル・フィットネス・テストがつかれば、日本の一般青少年に対するスポーツテストとは異なり、コーチが同様のレベルに相当するかをテストします。これはリーダーの技術向上のためとリーダーシップの質を高める手段であると書いている。年々内容はかわっていますが、1940年までの内容は11種目のコーチはスポーツ経験団体に登録すると同時にCCPRにも登録します。たとえば3種目をとり、ナショナルコーチとして認定されたら、ナショナルリーダー・オブ・フィジカルエデュケーションの免許状とバッジが与えられます。これはそれぞれ専門科目は種目団体が行うほか、理論の試験があります。この資格は西ヨーロッパではドイツ、スウェーデン、オーストリアなどでも高じるフリーパスのような形で認定付与されていることが特徴です。科目は運動のねらいと効果、指導とコーチングの原理、健康教育、救急法、フィジカルトレーニングなどがあります。コーチがプロではなくアマの統

輔にすることもイデオロギの弊弊のようです。有名選手よりも技術的多面的研究をした指導法の優れた人が望まれており、認定もその方向で行なわれていました。ナショナルコーチは個人的ではなく公的に教育委員会等が開くリーダー、ボランタリーリーダー等の集いに技術提供を行ないます。技術提供のしかたは智理的プログラムをくむことや連絡調整はCCPRが行ない技術のムコウがひきうけます。この調整はうまくいっているようです。

国立センターは常に国が維持するのではなく、スポーツ統括団体、青少年団体、職場クラブ、地方教育当局がその施設を使うか否かということがセンターが維持できるかどうかのポイントであるといわれています。そのため産地運動もたいせいで、CCPRのフィジカル・レクリエーション活動に対する責任は重大です。

CCPR 小史

CCPRが発足した初期の歩みは、およそそのような過程をたどっている。
CCPRは、リング体育協会(Ling Physical Education Association)と全国体育指導者連盟(National Association of Organisers of Physical Education)とが協同して、3万円をきき金し、1935年に設立された。年がたて文部省から法人として認められ、ジョージ五世とマリー女王とを母親として敷き、初代会長はウォルズ王子を、事務局長としてアストル卿・ジョージ・ニューマンを迎えた。活動を開始するため、この年の秋、Physical Recreationに関心をもつ82名の自発団体が、この協議会を構成メンバーとなり、第1回会議を開いた。
1936年、医学協会(British Medical Association)が保健者の要請により、特

別体育委員会を設立した。この特委のおもな理由は、次のようであった。

(1)Physical Recreationを通じて国民の健康を改善すること、(2)BMAは、昨年創設されたこの協議会(Central Council of Recreation Physical Training)が、共通の政策で、文部省と多くの自発団体の活動を統一するというプランを勧告、(3)このプランにも、全国的な規模において、既存の経験と知識をひき出すことができると考えられること。

Hampden 卿が事務局長となり、George's Jubilee Trust と全国運動協会(National Playing Fields Association)とから、それぞれ百万円ずつ計二百万円の下付金を受け、2人の技術者を採用。8月、ハンブルグで開かれた「余暇とレクリエーションの世界会議」に協議会が代表者を送った。

1937年、「身体訓練とレクリエーション」(Physical Training and Recreation)という白書を刊行。その中で、全国運動協議会(National Fitness Council)の構成を提案した。協議会は、このために文部省から補助金をうけた。

ようやく協議会の事業も諸外国に知られるようになり、およそ30数か国から交換が求められた。

1937年の「身体的レクリエーションと訓練に関する法令」(Physical Recreation and Training Act)は、施設に関する財政的援助を準備することになった。戦時中の青少年事業政策は、リーダーシップに焦点をおかれ、中央・地方の法的団体と自発団体とが密接に協同するようになった。

1938年、協議会の事務局長は著しく拡大し、5人の男子と女子技術者が、新しく雇われた。そして全国連立協議会が、新委員と密接な共働が行なわれたが、全国的に普及することには余りにも手うすであった。他面、産業労働が発達したことで、産業福祉協会が発足され、協

議会を指導するようになった。

1939年、協議会は、7月、ストックホルムで開かれたLingiad 代表者を選んだ。9月、世界大戦の勃発により、全国連立協議会の活動は中止の止むなきに至った。しかし協議会は、文部省からの下付金の増加と相まって、訓練された教師をレクリエーション活動にさし向けていくため、貴重な仕事を積極的に続けていった。
1940年、CCPRは、政府の依頼をうけて、労働者の民間防衛のための訓練コース「適性事業計画」を、フットボール連盟と共同して設けることになった。7月末までに4万人の青少年が、この計画に参加した。またこの計画は、戦争への備えとなし、身体訓練とレクリエーションのための施設を築ることにもなった。

8月には、リーダーの資格を改訂し、道徳審査の規程をつくるために、身体的レクリエーション指導資格試験(National Test for Leaders of Physical Recreation)が、文部省から認可された。

10月には、労働者と国民兵役者から11月には文部省から、それぞれ補助金や下付金の増額支給が行われ、労働者のレクリエーションの促進やユースサービスの拡大が計られた。

CCPRは、他の多くの組織と並んでその技術的側面を分業させ、これによって経費の節約が計った。14人の男子と24人の女子が、宿舎を生かすために民間防空地域に配属された。

1941年、軍省は、文部省、労働省とは別個に、労働者の安寧のために援助の手を差し伸べるべきだとし、内務省は、新設の民間防空スポーツ委員会(Civil Defence Sports Committee)をCCPRの管理下においた。

1942年、CCPRには、62人の技術者と5人のパートタイムの職能リーダーが雇われた。

学会ニュース

第 5 号
January 1972

日本レクリエーション学会

会員の皆様 明けましておめでとうございます。 今年もよろしくお願ひ申し上げます。



「レジャー」という言葉が、人々の生活体験にもつて使われるようになってからどの位になるだろうか。山崎進先生を中心に「レジャー時代」といわれる名着が出版されたのは昭和37年のことであるが、そのころは、まだレジャーが体験からじみでるまでにはいたっていなかった。ある意味では、まだ観念的であったのである。ところが、それから数年もたないうちに、まさにそれが實現中では、お国で「レジャー時代」に入ったようになっているのである。

しかし、このレジャー時代は、働く人々が血みどろに汗を、つくり出したものではなく、働く人々には、まだ賃金も低く、時間労働費までも求める傾向にあった。レジャーの到来などもとをわが国ではじめての、マスコミとレジャー産業であった。それから苦戦をくり、働く人々の賃金も次第に高くなり、同時にレジャーをもっと増やすべきであると主張されるようになったのである。時代的には、昭和40年をすぎたからであり、GNPが世界で何番目だときざまわが国である。そして、このことから、レジャー時代が、まさしく国民の美徳となって受けとられるようになった。

しかし、上述のように国民の美徳とまでな

ったレジャーではあるが、それは主体性の乏しいものであった。レジャー産業によっておだてられ、かれに計画されたコースに乗せられて、はこばれていた。いわば、「すえり」を食べていた時代であった。そして、国民は、数年の間、このすえりを食べつづけてきたのである。この傾向に対して物足りなさを感じようになつたのはごく最近である。それは、「レジャー時代におけるレクリエーション」の経験であるといえよう。つまり、マスコミやレジャー産業の宣伝のおかげで、すえりを食べている間に、人間が、自分の要求をわが国に、他からの拘束や束縛なく、自由、しかも、人間性の回復のためにレジャーをいかにしてこうとする動きとなつてあらわれたのである。戦後、フォークダンスやレクリエーションなどを使われていたが、本当にレクリエーションを理解し、それを求めるようになったのであるから、この意味ではかたじけなく、レクリエーション時代の本格的な幕を開いたといえる。今後、レジャーの時間量はまだまだ拡大しよう。人間性の回復を求めて、自主性、立体的なレクリエーションの展開が期待される時代を迎えよう。

旅とレクリエーションに想う —— 著書紹介と関連して

＜ 会員の声 ＞
東京農業大学造園学研究室 進士 五十八

紹介著書

私は過去の日本人のレクリエーション活動
NHKブックス143 「庶民と旅の歴史」
著者 新城 第三(成城大学教授・文壇)
発行日 昭 46.6.25
発行所 日本放送出版協会
価 格 360円(P.P. 213 B6版)

に注目してきたが、レクリエーションが日常のものになるのは「旅」が大いに役立って以降のことである。
中でも日常生活圏内で行なわれた祭礼などの年中行事や、圏外で行なわれた登山への登山、参詣などの「旅」としての当時の日本人のレクリエーション行為を捉えたいと考える。

レクリエーションと近似した言葉に、レジャーとか観光とかの言い方が在る。昭和44年4月の観光政策審議会の第9号に対する第1次答申では、これを区別して呼ぶべくに表わした。レジャー(レクリエーション)観光とそうでないものと——そうでないもの、また実際の用法としてレジャー(観光、レクリエーション、そうでないもの)としている。すなわち自己の自由時間(=余暇=レジャー)の中で遊興、知識、体験、活動、休養、参加、精神の鼓舞等、生活の変化を求める人間の基本的欲求を充足するための行為が「レクリエーション」であり、その中、日常生活圏外で行なう行為を特に観光と呼びたい。さらに観光の本質を形成するものは「移動」即ち「旅」にあると書きよめた。我々が、高橋和雄(学会ニュース 第21971)の言われるように、人間存在を肯定し、人間生活でのレクリエーション活動を追求める場合、二つの系統に分けて考察すべきであろうと思ふ。人々の日常生活圏内でとら得なかつたが、なによりも交通条件の好転と消費生活の向上が、一般庶民の旅を主目的とした参詣旅行に実質を成した。それに伴う、非日常生活圏でのレクリエーション行為に分けることもそのひとつである。

ここで私は、新城第三氏の「庶民と旅の歴史」をおすすめしたいというものこそは、以上述べてきたような意味で、庶民のレクリエーション史を考えると、避け得ない「旅」について、取る極度の具体的事例を掲げ、教養的にも明らかにされた一面があるからである。

本書はまず、旅を生活手段として旅と、自由な旅に分けている。前者は人間発生と同時に始まるものであり、後者は経済力、時間的余裕などが前提条件となつて生じたといえよう。ところがこの自由な旅とは、現実逃避、観光、参詣、湯治、避暑、遊学などを含んでいる。こうした旅が、いわゆるレクリエーションと結びつくのは、それに経済力、我々の実業家が入って来た以降のことである。まじめな医療で信仰のものでなく、楽しむための旅は、本書によれば江戸時代以降のことである。所謂観光旅行として独立した形態となり得なかつたが、なによりも交通条件の好転と消費生活の向上が、一般庶民の旅を主目的とした参詣旅行に実質を成した。それに伴う、非日常生活圏でのレクリエーション行為に分けることもそのひとつである。

このようにして本書は、庶民と旅のかかわり合いを、時代的変化の中でなめている。最後の部分では、日本交通公社の昭和41・43年の調査結果(家族旅行の目的は第一位が自然風景をみる旅行、第二位が温泉旅行、第三位が登山海水浴旅行、第四位が名所旧蹟めぐり(参詣旅行)を最優先の現象としてとらえ、「日本人の旅に長く濃厚にまつわりついで

た宗教色も、今よりやく色あせようとしている」と述べている。過去の日本人の旅と宗教との密接さというまでもない。本書は、言葉をかえれば、旅の近代性—観光教養への関心をかけたものといえよう。レクリエーションの領域から旅をとりあげようとするに当って、このような背景をふまえることが必要とされよう。

紹介
RECREATION RESEARCH AND PLANNING

—T. Bunta 編
本書は、イギリスのバミンガム大学の都市及び地域開発研究センターでなされた最初の研究課題報告をまとめたものである。イギリスにおいても、1955年頃より、大衆レクリエーションが急激に成長し、著しく膨張した多様なレクリエーション需要と土地や自然資源の確保の問題が緊急の課題となってきた。そして、このように急激に増大する国民の野外レクリエーション需要の解決をはかるためには、現実の分析と将来の需要予測にもとづく計画的な対策の必要が痛感されて、そのための研究が行なわれたのである。
本書は全体で4部12章からなっており、第1部では、現在のレクリエーション需要の動向について述べられ、特に、英国における野外レクリエーション需要の将来と将来の予測が述べられ、将来に向けて問題の解決のためにレクリエーションの調査研究が必要であると指摘され、第二部はレクリエーションの調査研究ということで
1. レクリエーション研究のための枠組
2. レクリエーションにおける社会学的研究

3. レクリエーション活動の経済的側面
4. 地方計画局によってなされている調査研究
の4論文がおさめられている。
第3部は、レクリエーションのための計画と題して、田園地方でのレクリエーションのための計画、都市近郊地域における野外レクリエーションのための計画、旅行のための計画、レクリエーション計画のための組織の4論文がのっている。
そして、第4部は、レクリエーション計画にあたっての現在の問題をいうのであり、ここでは、レクリエーションの質的問題、地方行政当局におけるレクリエーションの機構、将来に向けて構想という4編がのっている。
編者、T. Bunta氏は、カナダ・オンタリオ州オタワ—ル大学地域開発研究所助教授で、各論文は、バミンガム大学の都市及び地域開発研究所の研究員その他が分担執筆している。本研究も、いわばアメリカの野外レクリエーション調査に刺激されて、イギリスという国土に即してすすまれ、さらに研究結果をどう政策にうつしていくかについてまで論ぜられている点が注目される。
George Allen and Unwin, London

紹介
レクリエーション

渡辺俊男 著
本書は、附録「健康の生理学」全10巻の中の一番である。したがって、著者がこの書にきこもことわっているように、「個々のレクリエーション活動の方法を説明するものではなく、「レクリエーション活動は時間の面でも、エネルギーの面でも消費的活動でありながら、人間回復の機能をもっているもの」とし、このような「レクリエーション活動は共通に内在する価値にたいして執筆されたものであり、この点でユークな書であるといえる」として、著者の構成をみてみると、次のような8章で構成されている。
I レクリエーションと人間の脳
II レクリエーションの生理学の基礎
III 遊びながらはじまるレクリエーション
IV レクリエーションの意味づけ
V 生活の多面的変化
VI レクリエーションの活動
VII 成人・青少年とレクリエーション
VIII 自然とレクリエーション
特に第二章でレクリエーションの生理学的基礎について述べ、レクリエーション行動を人の大脳皮質のはたらきと即してわかりやすく説明している。
本書全体を通じて早くレクリエーション活動ばかりでなく、人の生活全体をとらえて、労働、疲労、休息、リラクゼーション、運動、遊びなどについての生理的考察を行なっている。そして、最後の方では、人の生活の中におけるリズムを、生体のほたらきの中にあるリズムとの関係でとらえ、人の生活におけるリズムと調和をもつ意識について、とらえられている点も注目される。(医療書出版)

- ◎ 正会員の部(奈良県)に、下記の先生の御住所をお書き入れ願います。
渡辺俊男 奈良女子大学教授
京京市西六町 124 505
TEL.0742(45)0132
◎ 下記の項目について訂正願います。
1頁及び7頁の氏名を「小川長次郎を小川長俊」とし、
5頁の氏名を「斎藤宗雄を斎藤宗雄」とし、7頁の高橋健夫のTEL.069-561-0572を11頁の林喜徳の住所、京京都京2條町 御前町宗徳」とし、
◎ 先日の理事会で、第2回全国学会大会に関する基本線が話し合われました。その結果次の通りです。 ◎会場は東京都内で行なうこと。 ◎学会大会の日程は、全国大会と関連して、11月10日に行なうこと。 ◎今年の庶民をふまえて、発表と質疑応答に充分時間をとる。場合によっては会場を2つにすることも考える。 ◎今から御準備下さい。

パーカーは、今日セグメンタリズムとホリズムの2つの哲学があるとし、諸者の論議を分析する中で、次のように述べている。「社会発達の結果は、労働と余暇の統一を示すような社会制度や、それに相応する文化的なパターンはない。せいぜいある少数者の、ある生活パターンの中で、統一を可能にする個人的態度や行動を見出し得るだけである。」
● Stanley Parker. "The Future of Work and Leisure"
Mac Gibbon & Kee Ltd.

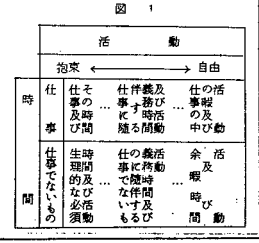
レクリエーション研究情報(2)
—全国学会大会より

第1回学会大会は去る11月4日、北九州市戸畑文化ホールで開催された。学会大会当日発表された研究は後頁の通りである。ここでは皆様の研究の参考になることを念じつつ、2、3の発表の内容を紹介したい。

(A) Stanley Parker の「Work—Leisure」論に関する一考察

発表 高橋 健夫 <大阪大学>
明し、現代産業社会での労働と余暇との関係実態を、多面的調査によって実証している。そして、次の3分類(パターン)を試みている。◎The Extention(労働と余暇活動との間に、明確な区分のある人) ◎The Opposition(余暇活動は労働活動と全く異っており、2つの間に明確な区分を持つ人) ◎The Neutrality(一般に労働とは異った余暇活動から成り立っているが、それは絶対的なものではない。一方を他方の不在のものに考えるのではなく、二つの活動の間の相異を認める人)である。さらにこれらの三つのパターンが、①Work—Leisure relationship ②Work ◎Non—Work of Variablesの中で考察される(表略)。

社会的矛盾と人間関係の増大に平行して、余暇への期待が拡大し、オプティミスティックな余暇の展開と逆に、労働の人間的面価値の裏面がある。これにはある種のペニシズムを伴っている。
S.パーカーは、こうした風潮を批判的にとらえ、次のように述べている。「労働と余暇のそれぞれの分野の最大の人間の発達を一方を替とみ、他方を悪とするのではなく、相互に補いあうことを要求するものであり、「余暇の問題は同様に労働の問題」である。ここでは特に(余暇が労働と余暇とを概念の上でどのような関係において把握したか) ◎歴史的、社会的実態をふまえて、現代産業社会における人間の労働と余暇の関係実態を、どのように把握したか、を中心に考察してみたい。
まず①について。彼は労働と余暇との諸定義を分析する中で、次の3つの結論を得た。◎時間と活動とは「生活空間」のすべてのカテゴリに表われる「次元」である。◎抱束的活動と自由に選択される活動との間に、齟齬をもたない活動がある。◎余暇は比較的自由を持つことを意味し、それ故余暇時間に働くことも同様である。右図は労働と余暇との相互浸透の関係を許容する関係図式である。
次に②について。彼は歴史的考察や未開社会の分析を通して、労働と余暇との関係を表



(B)ゲーム指導法の実験的考察
—GSRによる分析を中心に

発表者 高橋 健夫 <東海大学体育学部教授>
流現象について考察した。
◎ ゲームのリーダーが、ゲームを熟知し、メモを見ないで、表情豊かにデモンストレーションをおこなう指導しているのを見る場合(A)。
◎ ゲームのリーダーが、無表情で、ゼスターを余り入れないで指導しているのを見る場合(B)。
◎ ゲームのリーダーが、大きめのメモ(B版大のノート)を持って、上記3場面を熟知し、実験指導を行なっているところを8ミリカメラによって撮影した。
◎ 被験者をA・B・Cの3群に分け、1名ずつGSRの測定を行なった。このときAグループは、A・B・Cの順に測定し、BグループはB・C・Aの順、CグループはC・A・Bの順に測定し、できるだけかたよりを少なくしようとした。
◎ GSRの測定後、ただちに、快・不快の反応を明らかにするため、あらかじめ作成されたチェック用紙に、5段階法でチェックさせた。
(3) 被験者 撮影におけるゲーム指導の参加者は、本

グループ、レクリエーション活動において、ゲームは重要な役割を果たす活動のひとつである。ゲーム自体のもつ興味性に加えて、いかにそのゲームを指導するかということが、ゲームに参加する人達の楽しみの大小に影響してくる。
それゆえ、ゲームの指導法は、レクリエーションの場において、深く考えられなければならないが、従来みられる指導法は、指導法というよりも、むしろ指導上の留意点に止まっているものが多い。
ゲーム指導における経験は、当然重視されなければならないが、それを科学的に追究し、普遍化させ、ゲーム指導法の体系づけがなされなければならないように思われる。
この研究は、ゲーム指導法の体系化の一環としての実験的研究といえる。それ故、その終局的な目的は、ゲーム指導法の体系化であり、より多くの人がゲームに参加し、楽しむことができるようになることである。
その第一ステップとして、ゲーム中の参加者の情動変化が、指導の仕方によってどのように変化するかを明らかにしたい。そしてリーダーが、どのような仕方の場合に特に多くの情動変化が現れるかを明らかにしたい。
◎この実験の方法>
(1) 実験の項目。次のような三つの条件を設定し、その条件における被験者の精神電

学社会体育研究室三年次学生である。GSR
測定の被験者は、直接ゲームに加わらな
かった一年次学生とした。各グループ5名と

し、合計15名の測定を行った。
*実験の結果及び考察は省略します。

(C)精神病院におけるレクリエーション療法 —理論的背景—

発表者 浅井正昭 <日本大学助教>

今日では、多くの精神病院で、精神科治療
の一環として、レクリエーション療法が実施
されてきている。しかし治療法としてのレク
レーション療法はまだ確立されているとはいえない。こ
れはその理論的根拠が曖昧で、効果評定がむづ
かしいこと。またこれに専従できる職能者が、
今日の精神病院の中には確立されていない為
に、身体的治療等の業務の余暇にだけ、レク
レーション療法を実施せざるを得ない、などの理由によ
るものとされている。

現在はレクリエーション療法の対象として、精神科病
院の半分近くを占める。長期入院の慢性患者
が、その主体である。低域で自閉傾向に
陥りかねた後戻り動かし、自発性を回復させ、
社会性を身につけさせようとするようにもつ
ていくには、「遊び」の要素を、精神科力を
発達させるように利用していく必要がある。

しかし精神科院に於けるレクリエーション療法は、従来と
もすると、形式的な年中行事として、マンネ
リ化した。あるパターンのくり返りに陥りや
すい傾向を強く持っている。こうした傾向
の中で、本来の意味でレクリエーション療法を必要とする
患者がほおばれてしまい、治療の努力の対象外
に置かれることになる。そしてレクリエーション療法は、患
者一人一人の個性(生活・運動歴・体力・興味
)を無視した「画一化」の傾向を強くする。

われわれは約1年半前から、こうした反省
にたち、「いかにして精神科治療の有力な手
段として、レクリエーションを活用できるか」
を、実験を通して検討を加えてきた。レクリエ
ーション療法が、治療としての効果を持つためには、創
意と創造性が必須となる。形式的治療を打破

われわれはこの解答として、広義のレクリエ
ーション療法の中でも、体育療法(または運動療法)と
よばれるものを、主として精神科病室を中心
に、積極的に行なって来た。

まづ、一人一人の患者の生活-教育-意思
-運動歴-身体計測値(肥満度など)、基礎体
力、運動能力、病気の程度などの情報を、一
枚の個人別パンチカードを作成して、個々の
患者の特徴と全体像を把握した。これに基づ
いて、集団活動を考慮して、あるいは意図的
に、あるいは自発的に、グループ分けを行な
って指導してきた。

われわれの最も注意したのは、体力や技術
にこだわらないで、一人一人がその人たりの
活動能力を發揮できるように、動機づけ、
興味を保持させることであり、一人一人の患
者の状態を見極め、集団性を考慮して、そ
れぞれの患者がグループに遅した運動を工夫
することであった。

この試みは、まだ経過中であるが、現時点で著し
い成果をみることはむづかしい。しかしなが
ら、レクリエーションに対する態度(患者の
自発性、持続性、運動能力の向上など)にも、
一言で活発と明るさがみられるようになった。
過去一年間における退院者も、従来は退院率
の約1.4倍となっており、レクリエーションが、こ
うした問題に明確な好影響を及ぼしている。

<以下略>

前記以外に発表された諸研究の一覽

樋口 彰, 他1名 (同志社大学)	ニュー・ディール政策とレクリエーション
青木泰三 (大阪府立大学)	遊びの考察
服部早子, 他2名 (成蹊大学)	わが国に於ける地域・フォーカス団体及び指導者の意識と活動
川口文子 (日本青年館)	青年団におけるレクリエーション活動の現状と問題点
斉藤定雄 (順天堂大学)	地域社会のレクリエーションに対する大学の寄与
野間口英敏 (東海大学)	戦場におけるレクリエーション実施の影響に関する研究
音成孝治郎 (立海青年の家)	社会教育施設におけるレクリエーション指導について
— 北九州市立立海青年の家に於ける現状と課題	
野 義弘, 他6名 (福岡教育大学)	わが国における体育・スポーツ施設利用の社会学的分析
斉藤伸次 (明治学院短大)	キャンプにおける野外教育のプログラムについて
鈴木孝雄 (麻布医科大学)	キャンプ生活における実証的研究 富士山麓・山中湖畔のキャンプ場を中心にして
宮下性治, 他3名 (順天堂大学)	キャンプの教育が機能に関する研究 社会的感受性訓練としての可能性について
井上忠夫, 他3名 (順天堂大学)	キャンプの教育的機能に関する研究 — リンダの効果について —
古賀正宏, 他2名 (八幡厚生病院)	生活指導としての病院レクリエーションについて
武井正子, 他7名 (順天堂大学)	精神科院におけるレクリエーション療法に関する研究
浪船信夫, 他5名 (順天堂大学)	精神科院におけるレクリエーション療法の新しい試み(その2)
— 個人の体力・運動能力およびレクリエーション療法に 求めた応じたレクリエーション療法の実際	
武内三三, 他5名 (浅井病院)	精神科院におけるレクリエーション療法の新しい試み(その3)
学会委員研究委員会	レクリエーションに対する態度調査 東京都野外スポーツ・レクリエーション施設設計 画のための調査研究(報告)
特別研究発表 秋百真範 (福岡教育大学)	戦場生活とレクリエーション活動についての研究 — とくに公務員レジャー生活の現状と問題点

学会ニュース

第6

June 1972

日本レクリエーション学会

日本レクリエーション学会

近畿支部会結成される

すでに昨年9月大阪大学教習部で定例研究会を開催した時以来、近畿地区に学会支部を
結成したいという声が強かった。以後、約半
年にわたって新成市会のための会合が開かれ
ていたが、去る4月8日、大阪市の大正成
女子短期大学で近畿支部設立準備委員会、ひ
きつづき設立総会が開かれ、会則および役員
を選出して、ここに日本レクリエーション学
会近畿支部が発足した。学理事務ではこれを
正式に承認し、今後より充実した学会活動
を進めるために、常任に協力することを認
めて承認した。以下は支部学会から送って
きた「発足に関する報告」である。

*日本レクリエーション学会近畿支部発足
のため結成総会を開き午後2時から発
足第一回総会を開催いたしました。様子を
報告します。

*参加人員 31名

*講師 榎本 浩一

[役員選出]

会長 佐藤 信一(大阪成蹊短大)
副会長 青木 泰三(大阪府立大)
“ 瀧口 彰(同志社大)
“ 松田 隆雄(大阪府立大)
理事長 西山 勝次(大阪産大)
理事 大阪 田口 守雄(大体系大)
京都 藤一(堺市市民館)
西山 勝次(大阪産大)
新波 昭宜(会社人事課)
京都 河島 達彦(京都市役所)

日比野野郎(京府大)
高塚 敏(大阪成蹊短大)
兵 庫 船田 幸子(兵庫短大)
阿部 吉次(神戸女大)
赤塚山 宗本(住友金業)
高野 尚雄(福慶院)
原 良 高橋 勉夫(奈良教育大)
その他11名
滋 賀 栗川 一枝(滋賀大)
清水源太郎(大津市役所)
監 夢 馬嶋 太郎(嵯峨山)
小川 寿一(大阪成蹊短大)

[行事予定]

1 研究発表会(年2回) 2 講演会
3 東京・近畿合同研究会
[本報掲載の選出]
本報より本理事務に5名支部より選出
してはいたの選出の下記の3氏が決定
佐藤 信一氏 青木 泰三氏
西山 勝次氏
[会 費]
規約より本報会費2,000円、支部会
費500円、計2,500円を支部に納入す
る。本報には支那からまとめて送付す
*近畿支部事務局下配の様に決定いたしました。

大阪府東淀川区相川中通2-5
大阪成蹊女子短期大学
体育学研究室(〒533)
電話 04-327-1515
内線 80番 81番

—日本レクリエーション学会総会開催される—

去る5月20日(日)、日本都市センターにおいて総会と
記念シンポジウムが行われた。ここでは特に総会の結
果を報告したい。

総会内容	
1. 昭和46年度事業報告	(5) 昭和46年度総会の開催
2. 昭和47年度事業計画	(6) 日本レクリエーション学会会長名辭作 成(11月)
3. 昭和46年度会計報告	(7) 委託研究調査「長野県八ヶ岳山麓高原 野外レクリエーション・ スポーツ施設について」 ……東京都教育委員会体 育課より。
4. 昭和47年予算案	
5. その他	

1. 昭和46年度事業報告	
(1) 定例研究会の開催(年6回)	2. 昭和47年度の事業計画について 定例研究会(東京)——わが国における レクリエーション行政の現状 と課題 学会ニュース 6月 関閑誌「レクリエーション研究」 第2号刊 7月 定例研究会(東京) 8月 学会ニュース 9月 定例研究会(大阪) 10月 学会ニュース 11月 学大会(東京) 12月 学会ニュース 1月 定例研究会(東京) 2月 関閑誌「レクリエーション研究」 第3号刊 学会委員会務(昭和47年度追加分)

(2) 学大会	
第1回学大会の開催 * 研究発表20題、特別研究発表1題 ……抄録作成 1月4日(北九州市戸畑 文化ホール)	3月 定例研究会(東京)——近者のレクリエ ーションの意識<各大学 の卒論から> * 記念シンポジウムについては、次回 で詳しく連絡いたします。

3. 昭和46年度収支決算報告

収入の項 (単位 円)			
項目	予算	決算	差額 (△印は減)
入会金	250,000	212,000	△18,000
会費	1500,000	551,000	△789,000
寄付金		6,190	
大会参加収入	200,000	38,800	△161,200
学会設立発会式費	0	71,000	71,000
雑収入	100,000	9,342	△6,156
研究会より繰越金	0	219,897	219,897
計	1850,000	1,227,729	

支出の項 (単位 円)			
項目	予算	決算	差額
事務費	250,000	83,185	△166,815
会議費	650,000	13,200	△526,800
大会費	200,000	60,750	△139,250
定例研究会	200,000	43,930	△156,070
印刷費	770,000	607,080	△162,920
学会設立発会式	0	231,179	231,179
研究調査費	200,000	0	△200,000
雑費	50,000	0	△50,000
予備費	95,000	0	△95,000
計	1850,000	1,039,324	

今期決算 1,227,729 - 1,039,324 = 188,405 (収入) (支出) (欠陥繰越金)

＜別途会計＞ 費用 400,000 東京部より委託研究 東京都野上スポーツレクリエーション施設計画のための調査

4. 昭和47年度予算案

収入の項 (単位 円)		
項目	予算額	内容
前年度繰越金	188,405	
入会金	100,000	1,000×100(名)=100,000
会費	930,000	2,000×400(名)=800,000(正) 1,000×30(名)=30,000(学) 2,000×5(名)=10,000(幹)
大会参加収入	200,000	1,000×200(名)=200,000
雑収入	100,000	利息, 資料代など
計	1,518,405	

支出の項 (単位 円)		
項目	予算額	内容
事務費	150,000	交通費20,000, アルバイト30,000, 備品40,000 消耗品4,000
会議費	80,000	理事会5,000×7=35,000, 幹事会2,000×10=20,000 その他委員会5,000×5=25,000
通信費	120,000	機関誌, 学会ニュース, その他の通知発送
印刷費	640,000	機関誌(2,200×30=66,000) 学会ニュース(2,000×6=12,000) その他(1,000×10=10,000)
例会費	50,000	謝礼, 借入料
大会費	200,000	会場費5,000, プログラム, 抄録作成10,000, 雑費5,000
総会費	50,000	会場費, 印刷費
支部助成金	30,000	近畿支部
研究調査費	50,000	調査費, 印刷など
予備費	148,405	
計	1,518,405	

(報告)

＜日本レクリエーション学会3月定例研究会＞

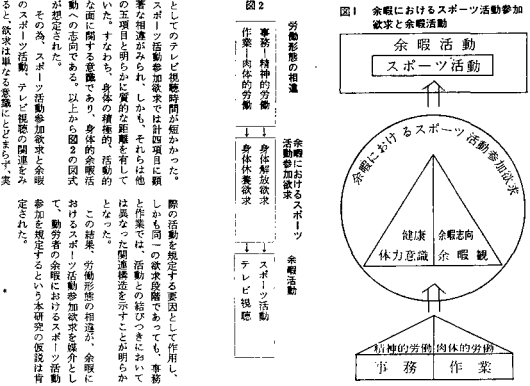
若者のレクリエーション研究意識

—46年度各大学卒業論文より—

昭和四十七年四月、日本レクリエーション学会では、若者層を対象に、昭和四十六年度卒業論文の発表会を行った。内容は各大学の卒業論文のいくつかを基盤として、レクリエーションに対する研究意識を若者層の熱意でみせ、活発な研究意識が知られた。ここでは各々の論文の要旨を抄録する。

『労働者の余暇におけるスポーツ活動参加要因に関する分析的研究』
特に労働形態の相違を中心として、東京大学 鹿島実美

従来、労働形態と余暇活動の相違については、社会階級の相違を媒介として説明されてきたが多かった。今回は、この点に注目し、スポーツ活動参加要因を分析して、労働形態とスポーツ活動参加との関係をとらえる立場に立った。具体的には、健康体力意識六項目、余暇三項目の計九項目を設定した。分析の結果は次のとおりである。事務職と作業者では、過去にスポーツ経験とスポーツ活動参加が相違がなかったにもかかわらず、事務職の方が余暇のスポーツ活動参加が著しく、実質的にその相違に際する活動



現代男子高校生生活の定態とスポーツ意識について、カヨの「若者の基本的レクリエーション」から一瞥

東京教育大学体育学部 大立真夫

これからの社会環境において、遊びやスポーツの果たす役割はますます重要になっていくであろう。そのためには、まず、高校生やスポーツ愛好者の現況の調査を必要とする。東京部内の男子高校生を対象に調査を行った。特に、全国にスポーツを普及させるためには、このように影響を及ぼす中心人物を育てることが重要である。

カヨの「若者の基本的レクリエーション」から一瞥

現代男子高校生生活の定態とスポーツ意識について、カヨの「若者の基本的レクリエーション」から一瞥

カヨの「若者の基本的レクリエーション」から一瞥

カヨの「若者の基本的レクリエーション」から一瞥

『他人との親密性に関する研究』
Aレクリエーションの傾向にあるが、活動そのものは身体的なものである。自分本位の傾向が強い。インテリゲンシア志向者は、余暇志向の傾向にあり、活動そのものは身体的に行ない、常に何らかの相違を求めている。ミッドレンジ志向者は、健康志向の傾向にある。余暇志向者は、健康的に遊ぶ傾向にある。余暇志向者は、健康的に遊ぶ傾向にある。余暇志向者は、健康的に遊ぶ傾向にある。

『労働形態と余暇活動の相違に関する研究』
特に労働形態の相違を中心として、東京大学 鹿島実美

従来、労働形態と余暇活動の相違については、社会階級の相違を媒介として説明されてきたが多かった。今回は、この点に注目し、スポーツ活動参加要因を分析して、労働形態とスポーツ活動参加との関係をとらえる立場に立った。具体的には、健康体力意識六項目、余暇三項目の計九項目を設定した。分析の結果は次のとおりである。事務職と作業者では、過去にスポーツ経験とスポーツ活動参加が相違がなかったにもかかわらず、事務職の方が余暇のスポーツ活動参加が著しく、実質的にその相違に際する活動

連絡板

○昭和47年度学生会費を早目に納入してください。事務の都合上8月末までに学務局宛お送りください。(近畿支部会員の方は支部宛お送りください。)

☆渋谷区神南1-1-1 岸記念体育会館
日本レクリエーション協会会館
日本レクリエーション学会事務局

<近畿支部会>
大阪市東淀川区相川中道2-5
大阪成蹊女子短期大学 体育研究室
電話 06-327-1515 休

○第2回学生会大会の発表申し込みを受け付中です(締切期8月末日)。
ふるって申し込みください。

○学生会員名簿の訂正について
おてもとの会員名簿を次のように直してください。

<福島県>
英 繁 (住所)磐城市常盤工場長宅
町堀ノ内41

<埼玉県>
中倉 教雄 共立電機工業商事部
電話 0429(34)6145

<千葉県>
浅井 邦彦 電話 04755(2)2810
神山 須真 (住所)東大和田1丁目

22-11 やまき荘B棟3号

<東京23区>
関 一敏 (住所)〒194町田石木會町
1250-2421-208
羽鳥 直之 (勤務先)YMCA
電話 0472-27-0266

滝子義代子-滝子美代子
<東京都下>
小笠原悦子 東京女子短期大学部
(住所)立川市菟野町1-13-2

けやき台地9-508
加藤 隆 (住所)世田谷区松上4-1
松上水戸地16-102 電話 03-5047
森岡江若枝 (住所)八王子市上野町3丁目
106-1

田畑 葵子-田畑真寿
守野 恒次 (勤務先)東京YMCA
電話 03-293-1911
(住所)津浦市中里1-733

<神奈川県>
藤坂 実 (勤務先)愛川中学校教諭
<愛知県>
西塚 宏彦-西塚 完彦

<奈良県>
堀内 茂夫(住所)〒410-24静岡興島
方崎稲倉町御原緑地台 伊豆白岩一
スホテル 電話 0558-(72)-1738

<大坂府>
佐藤 保一 (勤務先電話)06-327-1515
<兵庫県>

野口 (勤務先)三菱電機株. 伊丹
製作所 教育課課長
(住所電話)078-411-1980

会員の声

青少年とレクリエーション

青少年育成国民会議議員・社会教育家 嶋島 森太郎

1. はじめに
近年の文明の進歩と、社会の移り変わりと
最近の自然科学の恐るべき進歩と大衆衆の発
達が、私共の社会の人間関係をすたすたに阻
害している。

こうした地的な自然と社会の変遷は、青少年
自身を凌ぎて行きつづめるは当然なこと
であろう。然し昔から今日に至るまで、テレビ
や映画のないこの青少年と、今日の青少年
との向にあるあらゆる人間の成長のまきりの
ようなものばかりに、自然や社会の変化と共に
変化するものがあることも確かである。この
時代に相違、空間を超えて、なお変わらない
ものと、変わるものとの、いやこの対立する
両者を2つながら自分の内に秘めて、すま
す発展の原動力を働かせる人間の実事
に目を向けに行くことが、当体育教育指導者の
心掛ける教育の仕事かと思う。人間を育てる
教育をその本質から即ちしようとする、と
どうしても矛盾しているように思われる
人間の心の奥深いところまでのかねは
ならない。それに人間の行動を解き明かに
に争いがかりを求めない人間に一つ一
このように考えて来ると、青少年の素朴な
行動から、大人の複雑な行動までを分析し
なければならない。そしてその成長と発達
のために大切な生活活動としてのレクリエー
ションを、学習と共に大切な条件として考
慮される。青年や成人の学習は、学習だけで
成立するのではなく、学習とスポーツ、レ
クリエーションが結合する。つまり精神的発達
と身体的発達が必要と保って行くことによ
り、より大きな効果をもたらしてくる。こ

の場合のレクリエーションの効果は、一つは
緊張のリリースと生活へのうおい(消極
的意義)と健康を守る(積極的意義)とい
うことであるが、青少年の場合は、更にまだ
大きな意義を内蔵している。
19世紀イギリスの社会運動家ラスキン
は「美は花のためにある」と言った。花の方が
実より大事だと云うのである。これはどうい
うことだろう。たぶんラスキンは、実とな
って人間の役に立ったり、種子によって子孫を
残すよりも、花の美しさや香り、心を引
かれたのであろう。

労働と休息、あくせとした生活と遊び、学
習とレクリエーション、丁度この花と実の関
係に似ている。労働が大事であるが、休息が
欠かれば遊びが大事か、学習が大事かレクリ
エーションが大事かと云えばどちらも大事であ
る。労働のない休息は考えられないし、休息
のない労働も不可能である。

17世紀フランスの物理学者であり、哲
学者であるパスカルは、「人間は考える葦であ
る」と言った。ホモ・サピエンス(考える人
間)という言葉は、昔からあって、それが
(考えることが)人間に一つ一重大な事
こととされた。しかしホモ・ファール
(つくる人間)という言葉もある。この思想
では物をつくり出すことが一番大事なこと
と考える。ところがホモ・ルデンス(遊ぶ
人間)という言葉もある。これはオランダの
歴史学者のヨハン・ホイジンガ(1872-1945)
という人が唱出したもので、遊びの中にこ
そ人間の本当の姿があるという考え方であ
る。これも花と実の関係と同じで、どれか一つ
だけ、人間の唯一の本質であると言っ

はいかない。人間には、考える(思考)つ
く(労働)遊ぶ(レクリエーション、スポ
ーツ、娯楽)の3つの面が、バラバラでなく
1つになって同居している。特に青少年の関
係は、大人と異なった特性を持っている。即
ち「青少年は、遊びという生活の中で、集団
化し知性や徳性をつくり上げるのである」
と云うのである。この場合の遊びという生活
が、ここで言う健全なレクリエーションと同
義語である。

このような考えから、体育教育者や指導者
の考えるレクリエーションに対して、第一に
遊びの事実と必要性を、地獄の嵐がりや時
代の変遷との関係から明らかにし、第二に遊
びの本質を追求し、どのような配慮をもとに、
どのような指導すべきかを検討し、遊ぶこ
とこそ、逞しく、創造力豊かな青少年を育
むことだということを具体的に示そうとし
た。

2. 遊びの事実とレクリエーションの必要性
をレクリエーション(遊び)は、次のよ
うな条件を備えなければならない。

- a 簡単な環境条件で楽しむことが、最大
な喜びとなるものである。(例・自然)
- b 簡単な道具、設備があるために、絶え
ず新しい経験と創意工夫の機会が与えら
れる。
- c 日常生活を反省し、人生に新しい意
義を見出す機会が与えられる。
- d 日常生活の解放により、自分の今まで
気づかなかった興味、関心、能力などが
見出される。
- e 共同活動により、自分のなおおぼ
ならない役割を学び、その技術を身につけ
ることができる。
- f 共同活動することにより、共同生活
のあり方と、それがどのように計画され、
運営されるか、計画から実行の結果までを
通じて全体的に体験することができる。

このような素晴らしい効果を持つレクリ
エーションが、現代社会で如何に大切なも
のであるかは詳述されているをおりだが、一般
の大人と異なり、青少年にとってレクリエ
ーションが如何に大切な、又特別な重要な必
要性と意識がある。今の教育は、メソッド
スタップ、エレキ等の唱える新教育論で
あるが、その中で青少年の特性を、「青少年
は、大人とは異なる責任や興味を持ち、自
身の生活に生活し、この生活を極めて真
の大人になるのだ」と語っている。この中
で述べている特別な責任、特別な興味、自
身の生活に忠実に正しい生活態度のために
これに応じた適切なレクリエーションが必
要である。ここで述べている責任とは、大人
は何時の間にかなくなっているもので、「青
少年は、集団化し乍ら、遊びという生活
の中で、知性や徳性をつくり上げて行く」と
いう大切な特性がある。この遊びという生活
がレクリエーションそのものであるからである。

ここで大人が、大人の立場で考えた教育的
なレクリエーションや施設、道具、備等を
与えさえすればそれで宜しとする風潮も
あるが、これは親戚や指導者にとって余
程心しなげられない。青少年は青少年特有
のレクリエーションとしての遊びがなけれ
ばならない。そしてそれが絶対必要な
ことである。これは昔の時代、子どもは
大人の遊ばされたものだという考えがあ
った。この考えでは大人の教育に用いられ
るものを青少年に強制的に押し込むこと
で、立派な人間形成が行なわれると信
ずるのである。こんな古い教育観が、
実は今もなお、多くの親子の間で
横行しており、子どもへの愛情は、高
級な玩具や遊具をみだりに与え、沢山の
小遣いを浪費させることで満足し
たりする親が多いことでも明らかである。
青少年には青少年特有の欲求に基づ
た、大人とは全く異なった責任や興味
を基に、特有の環境の中で行な
われる、広義の遊びが、レクリエー
ションとし

て、どうしても必要なものであり、本
当に役に立つ立派な大人となるために絶対
不可欠な青少年の生活条件である。
従ってこの条件に満たないレクリエー
ションは、大人の楽しみやレクリエー
ションの縮小されたものであり、価値
も低く、明日の大人への生活の期待
と可能性もたらさずであろう。即ち遊
びの創造性とは、大人に求められ
べきレクリエーションの真の姿であ
る。創造性のないレクリエー
ションは、青少年にとってむしろ
害を及ぼすものと考えても過言
ではない。この点は最も留意すべき点
である。

3. 創造性豊かなレクリエーションの本質と指導の方法

子ども達の遊びの生態を捉えて見よう、
子ども達の遊びの生態は、実に楽し
そうである。そこには大人に見られる
装飾もなく、喜怒哀楽を素直に現わし
つつも、喜びが充満している。遊びは
自由であり、本能であり、しかも
最も楽しいものでなくてはならない。遊び
は子ども達にとっては、大切な生活
の一片であり、窮乏子ども達の生活
に切り離してはならないものである。
遊びが子ども達にとって、それ
程大切なものであるならば、と
子ども達を驚かせながら、勝手に
モラルで、遊びに何らかの目的を
与えようとするのは、却って遊びを
壊してしまうことになる。「遊びは、
それ自身自由であり、目的が
なく生まれ、面白く活動する」と
云う。目的を持って行なわれるもの
は、遊びとは言えないということに
もなる。子ども達は、気が入った
所があれば、どんな相手でも、
どんな状況でも、又どんな成長
に役立つ要素があっても、そんな
ことおぼせずに、楽しもうという
のが子どもの実

態である。

以上述べた2つの遊びの条件を巧みに備
えたものが、青少年に必要なレクリエー
ションの型であって、このような2要素
を持ったレクリエーションを如何に上手
に指導し、こなして行くかというこ
とは、青少年団体の指導者や
育成者にとって大切な仕事である。
次に青少年にとって好ましい遊び
としてのレクリエーションを効果
的に3つの条件がある。それは遊び
仲間と遊び道具と遊び場の3つ
で相対して行われており、
どれもレクリエーションを有する
という事は、この3つの条件に
深い理解と協力のために努力
することが大切なのである。

<略>

4. むすび

青少年は、大人とは知
りもなかった生界にお
り、本能的に大人より
はるかに勝った創造力
を持っている。それを
どう生かしてやるか
が大人の役目であり、
その大切な役目がレ
クリエーションである。
従って大人のレクリ
エーションとは全く
似て非なる創造力
豊かなものである。



学会 ニュース 167

September 1972

日本レクリエーション学会

— 本号の内容 —

- 9月定例研究会(大阪で開催)について
- 第二回学会大会に参加しよう
- 自然保護からみた野外レクの問題(7月定例研究会の報告)
- 「レク研究誌」第3号の原稿募集
- 新入会員の紹介
- レクリエーション行政の現状と展望(5月学会シンポジウムの報告)

◎9月に定例研究会が大阪で開催されます

学会理事会では、47年度第3回日本レクリエーション学会定例研究会を大阪で開催することに決定しました。すでに学会ニュース5号でも伝えましたように、学会の近畿支部会も結成され、活動を始めています。今回は特に近畿支部会の先生方のお骨折りで、下記のように開催されることになりました。ご出席ください。

1. 期 日 昭和47年9月28日(木) 1時~4時
2. 会 場 大阪成蹊女子短期大学第一会館
3. 会場への経路
 - 阪急京都線相模川駅下車5分
 - 東京方面よりは新大阪駅下車し、国鉄吹田(スイタ)駅までどり、バスで10分川下車
4. 会場住所 大阪府東淀川区相模川通2-5 大阪成蹊女子短期大学

電話 06-327-1515番

5. 誌題提供

A レジャー・レクリエーション・ツーリズムの相関関係(特にトワイニングループ)を探索して相乗効果を導き出す研究

大阪成蹊女子短期大学 小川 壽一
我々のライフ・スタイルに占めるレジャー・ワークは、機械化、情報の中で、そのスペースを拡大していく。もともと開眼研究という義のギリギリ圏から出たラテン語 schola から schoo(学校)となった語源も考慮せねばならない。レジャーの原義が be allowed であることも銘記したい。
「レクリエーション」がポピュラーな国語辞典の中に解説されたのは、敬儀のことで、「楽しみや喜びにより、精神的・肉体的に新しい力をもたえすこと」(昭和30年前後)とされ、やがて「休業や休暇により、精神的・肉体的に回復すること」(昭和40年代)といったことになる。即ち楽しみや喜びは休

業、娯楽と具体化する。なかも進んで、レクリエーションの施設が、追求せられる現状に到達するのである。

ツーリズムは、ツアーから、turnを原義とする。従来 sightseeing が一般の方向とされていたのであるが、これをまた doing (行為をする)を加味し、「観光レクリエーション」といったものを、その概念のうちに推進し来たのである。

レジャーを頂点(因)とする従来の観点は改められ、その相関関係の持つ相乗効果を高めしめる函数(果)を見出した。

B 刊行とレクリエーション(その1)

「遊覧事務所におけるレクリエーション教育」

滋賀大学 藤川一 氏

新しい矯正教育は、「収容者も人間であり、その人間に希望と向上の道をひらかねば

ならぬ」という精神から、「今日受刑者を刑務所に収容することは、もはや単なる処罰のためではなく再教育・社会再適応の手段としてである」と考えられている。したがって行刑とは、すべてこれらの新しい人間形成を目的としてなされているものといえるであろう。

収容者も人間らしさをとりもたすために、労働で消耗したエネルギーの回復を補充するために、レクリエーション活動の果たす役割は大きい。健全なレクリエーションをすることは、新しい時代に生き抜くために、責任を果たすための人間を形成することにも通じる。人間復活を目標とする矯正教育とレクリエーション活動との調整は相反するものでないといえよう。ここでは遊覧事務所におけるレクリエーション教育の実践の場を分析してみました。

◎第2回学会大会に参加しよう

すでにお知らせしたように、11月10日(金)、午前9時より、日本都市センターにて、第2回日本レクリエーション学会大会が開催されます。

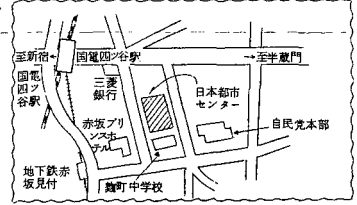
大会内容
①研究発表。会員が日頃から研究しているもの成果発表。

②シンポジウム。東京教育大学教授磯崎夫氏を司会とした討論の場で、都市化する社会の中で、地域のレクリエーションをどう展開させるかという問題を、特に住民のレクリエーション意識と生活構造から分析し、検討を加えようとするものです。

③懇談会。会員が自由に話し合う場を設けようとする準備中です。

今回の学会大会は第26回全国レクリエーション大会の前日に行われます。学会大会も東京大会をきっかけに大きく飛躍したいものです。会員の皆様の積極的な参加をお待ちしております。

※会員の大会参加費1000円(学生会員600円)、当日会員の大会参加費1500円(学生会員1000円)です。当日大会資料(研究抄録)をお渡しします。
※日本都市センター(会場)までの地図
◀住所▶〒100 東京都千代田区千代田2丁目5番地
◀地下鉄赤坂見付下車 徒歩5分



自然保護からみた野外レクの諸問題

— 日本レクリエーション学会7月定例研究会より —

話題提供者 江山正美(東京農業大学教授) 常藤 和良(東京YMCA) 司会者 巻 正平(消費者問題研究所)

日本レクリエーション学会では、7月14日(金)午後6時より、岸記念体育会館会議室において定例研究会を実施した。自然保護が問題化する時、特に野外レクリエーション活動に後検討が必要とされる問題は何か? 今回の定例研究会では以上のような命題のもと、まず自然保護協会会員でもある江山氏と、さらに長い間青少年のキャンプ活動を指導されてきた常藤氏に、話題を提供していた。

自然保護と必要無意識の革命—江山氏
私はですが、レクリエーションといものは個人的なものだと思ってるんですよ。まあ皆様を前にしてこんなことを言っているんですけど、集団を指導するんどもってのほか、レクは人間の本能に基づくものだから、指導しなくても良いんじゃないだろうか……

私がなぜこんなことを言うかといいますかね。自然保護の問題がレジャーやレクとの関連で云々される原因はですね、レジャー産業へ資本を投資されるようになってきているんですよ。そしてこの傾向は、大した指導もできない人(これは監督方のような人)にはあたらなんでしょうけど)集団をまとませ、野外にくり出させるように作用する……

こんな環境破壊は、あと10年このまゝ進めれば地球はだめになるころまで来てるんですよ。ローマ字の報告もありませんが、生産を5年間ストップすることの意義も再検討せざるを得ない。たとえ人間が生き残るためには、今後物を作るのが価値がないという転換が必要。ないでしょうか? 「無理がかんたんで耐久年数がながい」ということは、消費の質にかわって必要とされ

ると思ってるんですよ。レクとの関係で私が主張したいことは「生物としての人間に自覚する」必要があるということなんですよ。これからは心の時代ですよ。今の時代じゃない。キャンプ場の衛生のためにコンピューターで薬を散布するなんて感覚じゃなしに……、蚊に食われて、熊の声をきく。これが自然なんですよ……。もしあつては指導者の意識改革が必要ですね。

私は自然保護とレクリエーションとは根本的には結びつかないと思っておりますけれども、可能な指導者によって、自然の中でなにをやつたらよいか知らないような子供を、自然にふれさせ、レクリエーションを単なる週末のセッションでなくならせることは重要だと思っておりますよ。

哲学のある指導者が必要—常藤氏
私は長い間子供たちのキャンプ活動を指導してきましたけれど、やはり江山さんがご指摘のような問題を心に残っています。こうした状況に対しては、たとえキャンプの報道を防ぐために必要になるとか、場合によっては団体の政策も必要になると思います。トイレがなくなり、かつて指導を受けた方法で自分でトイレを作る。それも他人が使えないような粗末な、その場かぎりのものを作らざるを得ないといった現状。これでは「マナー」を考へ、自発的行動するキャンプ」は望めないと思います。

さてこれからのキャンプ活動は、いまでもなく「自然のままのところで、人間のそのまゝを生かしたもので、「単に集団行動を中心としたものでなく個々に行なうもの」に注目が向けられると思います。こうした活

動の残りが、子供の世界の拡がりをもたらすと思います。

自然への探究心が高まった海のキャンプの事例として、たとえ自然のままの姿を水そうの中に再現しようとした子供たちが、「ひどい、で、が」を「食べる」という事件を偶然目撃し、自分たちで研究をはじめたという例がありました。この場合、単に動物の名前を覚えるといった程度ではなく、木道の意味で自然の理解につながったと思ふ。子供たちは相談して、最後に水そうの中の生物を海に返すところまで、自分たちでやってのけた。こうした例は、いわば指導者妙利つき

る例なんです。

食事を煮てつくり、テントで休むキャンプという考え方は、今後自然との融合、自然理解という観点から多いに反省され、克服されなければならないと思います。先ほども話題になりましたが、「生物としての人間に自覚する」ということは、従来の人との倫理学から、自然と人間との倫理学が必要とされるということだと思ふ。こうした意味で哲学のある指導者が、今後のキャンプ活動でまず必要とされると思います。具体的キャンプの設営や準備の方法ももちろん必要です。

連絡板

「レクリエーション研究」第3号の原稿の応募は次の通りです。皆様方の投稿をお待ちしてあります。

1. 投稿者は原則として本会員に限ること。
2. 論文は他誌に未投稿のものに限ること。
3. 論文は新かきづかい、加刷漢字使用を原則とし、横書き400字詰調用紙を使用する。欧文はタイプライターによるか、または特別印刷にか。
4. 論文はカラーに論文・資料・その他(書評・抄録・学校紹介等)を添書する。
5. 論文・資料の原稿はかならず欧文の表題・ローマ字書きフルネームの氏名および「図版・写真の欧文説明をつける」。
6. 邦文論文には欧文摘要(Resume)をつけ、欧文論文には和文の表題・氏名および(財)日本レクリエーション協会発行日本レクリエーション学会 編集部
7. 図版はかならず白紙に書き出し、図版

写真献上上の別を明記のこと

8. 論文の原稿に第1頁下段に勤務先(職名)を記すこと。
9. 論文は1篇につき400字詰にて30枚分(図版・写真共、刷り上り8頁)以内を原則とする。その他の原稿は5枚以内とする。若し長篇のもので上記規定を超えるものについては、投稿に先立ち編集委員会宛打合せのこと。なかつた上り5頁以上の超過分は実費にて献取者持ちとする。
10. 編集委員会は編集の一部を行い、執筆者の承諾を得て、原稿の一部を省削、訂正することができ。
11. 論文の取扱は編集委員会に一任のこと。
12. 投稿期限 第3号 原稿〆切日 昭和47年12月末日(予定)
13. 論文の送り及び連絡先 東京都渋谷区神南1-1-1岸記念体育会館800字以内の邦文表題を付けること。(財)日本レクリエーション協会発行 日本レクリエーション学会 編集部



新入会員の紹介

S.4.7. 4月~8月まで

氏名	勤務先	住所	電話
西野 啓介	坂倉建築研究所(建築家) 403-3551	杉並区方南1-11-16 ①168	321-2757
佐藤 剛	九州リハビリテーション大学 九州作業療法学科講師 (財)日本レク協会	北九州市小倉区基郷 522-2 九州リハビリテーション大学 府中市本町 326	47-7912 0423 64-8456
知念 一郎	教員	世田谷区谷 3-30-14	416-6361
島田 昭治	沖繩YMCA	沖縄県那覇市古島 272	34-2658
曾田 昭一郎	環境計画及び造園設計家	豊島区南大塚2-29-8-502 ①170	944-2960
柳田 優	国民生活センター調査研究部	国立市西2-30-9 ①186	0425 72-2561
井坂 久次	大阪経済女子短期大学体育学科 06-327-1515	和歌山県有田郡金野町大字中井原 3-7	075
乾 道作	大版成蹊女子短期大学体育学科 06-327-1515	京都市右京区太 榎ヶ本町 14 ①10 ①16	861-3086
鈴木 秀雄	北里大学教務部・体育科教員 0427-78-8038	神・平塚市真土 126の1 ①254	0463 55-4848
広瀬 元良	兵庫県生活部生涯課長 078-341-7711	神戸市東灘区東灘町中道通 2丁目 17	078 751-0360
金崎 良三	オリエンタル記念青少年総合 センター運営部 467-7201	渋谷区福原 1の24-5 木野町内定 ①151	460-1517
安保 明	*学生会員	名古屋市南区元樂田東町 4- 82 竹内1二方	名古屋 611-4775
北条 明夫	(財)日本レク協会	江戸川区南小岩 3-22-3	659-0665
高田 勝次	兵庫県生活部生涯課	神戸市生田区下山手通 5-1	078 341 7711
神代 古典	愛知工業大学	愛知県豊田市東大東町原田 2572-214	052
中山 由介	レク開発研究所	名古屋市南中村区小松路西通り 3の9	586-2231
泰 芳江	同志社女子大	京都市左京区北白川伏町 3	791-6448
岩井 富子	県立体育館主事	大阪市南船場 3丁目 431の4	0775 24-8558
横田 東	本田安全運転センター本部 561-6191	杉並区天沼 2-29-11 ニュー天沼マンション	398-2147
西田 通弘	#	杉並区上井草 4-21-7	399-2364
吉田 和夫	#	目黒区駒場 4-3-47	467-2723
橋本 博	#	堀・川越市中原町 2-22	
鈴木 辰雄	#	東・保谷市下保谷 4-3-25	0424 23-3222

氏名	勤務先	住所	電話
藤部 宏英	大学院学生	三磨市下道安 2の2106東大井 の原学寮	0422 43-4722
池田 勝	大阪体育大講師	大阪府茨木市榎の内 3丁目 14 -28	0726 35-5095
Edwin f Slaley	Recreation and Youth Service Planning Council	2140W. Olympic Blvd. Room 401 Los Angeles, California 90006	

「おねがい」
昭和47年度学生会費の納入について
第2回学生会大会もせまり、学生会事務局も忙しさを増しておりますが、なにはさ
ておき、金欠病では充分な活動ができません。学生会大会を成功に終わらせるため
にも、是非会費を納入願います。
年度会費は2,000円です。おまちがいのようご注意ください。現金封筒
その他どんな方法でも結構です。ご送金ください。
おわび 先日お送りした「会費納入・未納」の連絡が、一部まちがっ
てあり、ご迷惑をおかけしました。おわび申し上げます。

.....ETC. ETC. ETC.....
☆学生会事務局では、会員の皆様のご意見や
投稿をお待ちしています。最近「日本レクリ
エーション指導者クラブ」と当学生会との両方
に所属している会員の方々の間から、「学会
活動はもっと実際(た)とえば指導」と結
びつくべた」という意見があがっています。
理論と実践を融合させて、レクリエーション
運動の真の推進力となるように、皆様の積極
的な働きかけをお願いします!!



レクリエーション行政の現状と展望

――日本レクリエーション学会シンポジウムから
前田 博 鳴谷 正夫 佐藤 忠好 桑野 豊 長谷川 純三

都市公園整備五カ年計画――建設省

都市公園(以下公園)は、私たちが生活するに必要不可欠な環境であり、生活の質を決定づける重要な要素である。レクリエーションは、公園を有効に活用し、その機能を最大限に引き出すための重要な活動である。本稿では、都市公園の整備とレクリエーションの発展について、現状と展望を論じていく。

公園の整備は、一人あたり二平方メートルを目標として、現行では、二平方メートルに満たない現状である。これは、健康維持や生活の質の向上に十分な環境を提供できていないことを意味する。したがって、公園の整備は、単に緑地を増やすだけでなく、多様なレクリエーション施設を提供し、市民の生活に親しみやすい環境を整える必要がある。

都市公園の整備には、ハードウェアの整備だけでなく、ソフトウェアの整備も重要である。ハードウェアとは、公園の施設や設備のことであり、ソフトウェアとは、公園の管理や運営のことである。両者のバランスがとれることで、公園の機能を十分に発揮させることができる。

都市公園の整備には、市民の参加が不可欠である。市民は、公園の整備に関与し、その意見を反映させることで、自分たちの生活環境をより良くすることができる。また、市民の参加は、公園の管理や運営にも重要な役割を果たす。市民は、公園の清掃活動やボランティア活動などに参加し、公園を美しく保つことに貢献することができる。

都市公園の整備は、市民の生活の質を向上させるための重要な手段である。公園は、市民の憩いの場であり、健康維持の場であり、市民のつながりをつくる場である。公園を整備し、それを有効に活用することで、市民の生活の質を向上させることができる。また、公園の整備は、環境の保全や美化にも重要な役割を果たす。公園は、自然環境を保全し、市民に自然環境を身近に感じさせることができる。

都市公園の整備には、持続可能な取り組みが必要である。公園の整備には、多くの資金や労力が必要である。したがって、公園の整備を継続的に実施するためには、持続可能な取り組みが必要である。持続可能な取り組みとは、環境にやさしい材料の使用や、エネルギーの節約など、環境負荷を低減するための取り組みのことである。持続可能な取り組みを実施することで、公園の整備を長期的に維持することができる。

都市公園の整備は、市民の生活の質を向上させるための重要な手段である。公園は、市民の憩いの場であり、健康維持の場であり、市民のつながりをつくる場である。公園を整備し、それを有効に活用することで、市民の生活の質を向上させることができる。また、公園の整備は、環境の保全や美化にも重要な役割を果たす。公園は、自然環境を保全し、市民に自然環境を身近に感じさせることができる。

自然環境保全法をめぐって――環境庁

自然環境保全法(以下自然環境保全法)は、自然環境を保全し、市民に自然環境を身近に感じさせるための重要な法律である。本稿では、自然環境保全法の現状と展望を論じていく。

自然環境保全法の目的は、自然環境を保全し、市民に自然環境を身近に感じさせることである。自然環境を保全するためには、自然環境を破壊する行為を規制し、自然環境を保全する行為を奨励する必要がある。自然環境保全法は、自然環境を破壊する行為を規制し、自然環境を保全する行為を奨励する法律である。

自然環境保全法の対象となる行為は、自然環境を破壊する行為である。自然環境を破壊する行為とは、自然環境を破壊する行為の総称である。自然環境を破壊する行為には、自然環境を破壊する行為の総称である。自然環境を破壊する行為には、自然環境を破壊する行為の総称である。

自然環境保全法の効果は、自然環境を保全し、市民に自然環境を身近に感じさせることである。自然環境を保全することで、自然環境を破壊する行為を規制し、自然環境を保全する行為を奨励することができる。自然環境を保全することで、市民に自然環境を身近に感じさせることができる。自然環境を保全することで、市民の生活の質を向上させることができる。

自然環境保全法の展望は、自然環境を保全し、市民に自然環境を身近に感じさせることである。自然環境を保全するためには、自然環境を破壊する行為を規制し、自然環境を保全する行為を奨励する必要がある。自然環境保全法は、自然環境を破壊する行為を規制し、自然環境を保全する行為を奨励する法律である。

自然環境保全法の効果は、自然環境を保全し、市民に自然環境を身近に感じさせることである。自然環境を保全することで、自然環境を破壊する行為を規制し、自然環境を保全する行為を奨励することができる。自然環境を保全することで、市民に自然環境を身近に感じさせることができる。自然環境を保全することで、市民の生活の質を向上させることができる。

自然環境保全法の展望は、自然環境を保全し、市民に自然環境を身近に感じさせることである。自然環境を保全するためには、自然環境を破壊する行為を規制し、自然環境を保全する行為を奨励する必要がある。自然環境保全法は、自然環境を破壊する行為を規制し、自然環境を保全する行為を奨励する法律である。

自然環境保全法の効果は、自然環境を保全し、市民に自然環境を身近に感じさせることである。自然環境を保全することで、自然環境を破壊する行為を規制し、自然環境を保全する行為を奨励することができる。自然環境を保全することで、市民に自然環境を身近に感じさせることができる。自然環境を保全することで、市民の生活の質を向上させることができる。

自然環境保全法の展望は、自然環境を保全し、市民に自然環境を身近に感じさせることである。自然環境を保全するためには、自然環境を破壊する行為を規制し、自然環境を保全する行為を奨励する必要がある。自然環境保全法は、自然環境を破壊する行為を規制し、自然環境を保全する行為を奨励する法律である。

「これは既述しているが、その後のためめは落...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

勤労青少年にレクリエーションを—労働省

（労働省労働政策課）労働省の...
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

「...」
「...」
「...」

学会ニュース January 1973

日本レクリエーション学会

あけましておめでとうございます。

- 本号の内容
- 第2回学会大会を待って、(理事放談)
- 大会報告(シンポジウム、研究発表)
- レクリエーション研究情報
- 連絡紙(会費納入について、機関誌3号の原稿)

第2回学会大会を終って

—理事放談(12月15日の反省会より)—

先日第2回学会大会が終わったわけですが、ここで今後の活動の展望も含めて、いろいろ御意見をうかがいたいと思います。

まず大会の反省ですが、二会場に分かれて研究発表を行ったのは良かった。参加者が全部の発表を聞きたいのはやまやまだと思いますが、今年学会の発展とともに、研究発表数も多くなっていくと思っております。

ただ発表の分けかたは検討を要する。たとえばセラピーなどの、いわば特殊な領域をプログラミングする場合、そのために参加者のかたよりを生じないよう。多少の増減はやむを得ないと思うが、

- 発表 やり方も、ずいぶん良かったですね。15分という時間も良かったです。
- ただ抄録原稿の量もってふやせないだろうかと、特に若手の研究者を養成するためには、せましく研究した内容も十分に参加者に伝わらない。
- 今年シンポジウムをやって、いよいよ

学会大会の「核」にした。その点は良かったが、内容的には思うように展開しなかった。討議する時間も少なかったように思う。

シンポジウムをやる場合、もっと基本的な問題を考える必要がある。たとえば、学会活動との関連で、テーマが設定されるべき。こうした点については、学会の一貫した研究方針のようなものが、明確にされたいと、

- その点は、今後じっくり検討していきたい問題ですね。たとえばよく「レクリエーション 運動」などといいますが、それを学会活動の何にどう具体化するべきかなど、
- 会員の方々の積極的な意見を伺かせていただけたらいいんですが、
- 学会活動もいよいよ三年目を迎えるわけですが、今年は役員改選の時期でもあり、忙しいになりそうなんです。全国各地で活発な研究活動が展開するように、われわれも努力をおしまないようにしましょう。

第2回学会大会報告

第2回日本レクリエーション学会大会は、11月10日(金)に日本都市センター会議室で開催された。会場には全国から150名ほどの会員がつけかけ、熱心な研究成果の交換を行なった。

また三笠宮殿下も御参観くださり、当日の研究発表やシンポジウムに興味よく耳をたぐりつけられた。大会の概況は次の通りである。

〔研究発表の部—発表者とテーマ—〕

発表者	発表内容	発表者	発表内容
山崎友大	レクリエーション療法に対する新しい試み(ダンス・セラピーを中心として)	鈴木 定	精神病院におけるレクリエーションに関する研究(その2)
池田三	遊びの考察(その2)	井上忠夫	キャンプ・プログラムの研究
菅田 勝	レクリエーション理論の妥当性に関する研究	園田碩哉	レクリエーションの意味論的検討
園田碩哉	レクリエーションの意味論的検討	小野野郎	スポーツ意識の社会的背景
小野野郎	スポーツ意識の社会的背景	山本 孟	個人の属性からみた青少年のスポーツ意識の特性
山本 孟	個人の属性からみた青少年のスポーツ意識の特性	川口 貴	スポーツ意識とクラブ活動の問題
川口 貴	スポーツ意識とクラブ活動の問題	荘司正徳	スポーツ意識とスポーツ種目の関連
荘司正徳	スポーツ意識とスポーツ種目の関連	浅田隆夫	総括・スポーツ教育試験(中、高校生)のスポーツ意識調査の結果
浅田隆夫	総括・スポーツ教育試験(中、高校生)のスポーツ意識調査の結果	金崎良三	レジャー研究におけるM・カプランの位置
金崎良三	レジャー研究におけるM・カプランの位置	中村 敬	レジャー観に関する調査
中村 敬	レジャー観に関する調査	森脇宏英	地域におけるスポーツ普及に関する一考察
森脇宏英	地域におけるスポーツ普及に関する一考察	大森雄子	主婦のレクリエーション活動の動向について
大森雄子	主婦のレクリエーション活動の動向について	佐藤幸子	主婦の自由時間利用について
佐藤幸子	主婦の自由時間利用について	佐瀬一夫	福島市内の職場レクリエーションクラブの発展について
佐瀬一夫	福島市内の職場レクリエーションクラブの発展について	鈴木孝雄	主婦のスポーツクラブの現状と課題
鈴木孝雄	主婦のスポーツクラブの現状と課題	未吉光彦	精神病院内におけるレクリエーション活動指導の考察
未吉光彦	精神病院内におけるレクリエーション活動指導の考察	武内三二	レクリエーション療法に対する新しい試み(短期間集中運動療法の効果について)

(シンポジウム)
都市化する社会における地域レクリエーションの発展のために

—地域住民のレクリエーション意識と生活構造—

司会者 浅田 篤夫(東京教育大学)

演 題

1. 地域の住民意識に基づいた組織(クラブ)づくり
会 田 昭一郎(国民生活センター)
2. 公営体育施設(体育館)の利用実態からみた地域住民のレクリエーション意識と生活構造
三 原 忠 雄(東京都府中市教育委員会)
3. 都市化地域における生活の変容とレクリエーション意識
斎 藤 定 雄(順天堂大学)

<概 容>

地域住民の生活構造は、その地域社会の人口構成や産業構造などに左右される。そして地域社会が都市化することによって、住民の生活構造は複雑になり、そのための生活範囲も多様化し、広域化し、流動化も促進される。いうまでもなく都市環境は人工的で、欲求の多様化ともなう緊密な関係も、新たな問題となる。したがって住民の健康、体力、レジャーの方向づけ、人工と自然とのバランスなどを考えたレクリエーション活動の計画の促進が必要になる。

一般に都市は農村にくらべて、レクリエーション活動への志向性が高い。これは青少年層が多く、機械化した労働の密度が高く、自由時間にめぐまれ、施設や、専門家にめぐまれ、野外活動への欲求が高い……などといった諸条件がともなうからである。けれどもこれは決して満足すべき状態ではない。

たとえば「生命や健康」は、国民の大多数が高い関心を示しているが、積極的に自分の生活に、レクリエーションをとりこんでいる人は少ない。ある会員制の団体のスポーツクラブでは、マッドランニングやランボリンを用いた、サーキット・トレーニングを実施しているが、昭和45年5月開設以来、延べ257名が入会した。けれども現在80名程度が残っているにすぎない。そしてやがてこの97パーセントが3月以内の会員となっている。

都市におけるレクリエーションの直接参加を妨げている問題はいろいろ考えられる。たとえば、住民のレクリエーションへの要求や、そこから生まれるレクリエーションに対する認識の程度を知り、住民の側でどれ程の能動的な働きかけや実践がなされているかを把握し、それに沿った対策をたてていくことが何よりも必要である。

府中市(東京郊外)のある体育館では、来館目的によって住民意識を、①健康志向型、②技術志向型、③余暇利用型、④生活向上型と区分し、また体育館の利用形態を、①日常化型、②一時期型、③断続型、④思いっきり型として、参加要素を把握しようとしている。そしていづれの来館目的を持った人でも、その利用形態を「日常化型」にしむべきだと考えて指導を進めている。

このよう地域レクリエーションの実態調査や体験の結果に基づき、それぞれ地域社会の生活構造と立地条件などを配慮しながら、地域住民のレクリエーション意識と、クラブ参加者へ活動状況や施設の利用のしかた、および住民の階層(ライフサイクル)などの関係から、住民のレクリエーションの志向性を導き出す必要がある。そしてそのような志向性を示す住民に対して、どのような処方や条件を具備させていけばよいかを明らかにすべきである。

レクリエーション研究情報

学会大会の研究発表より、ここでは皆様の研究の参考になることを念じながら、2、3の発表の内容をご紹介します。

レクリエーション理論の妥当性に関する研究

池 田 池田 勝(大塚体育大学)

(目 的)

本研究は、社会人の余暇行動のパターンを労働に対する適応のメカニズムからとらえよとするもので、従来より論議されてきた「余剰エネルギー説」「代償説」「カタルシス説」「クラクセーション説」「汎化説」の5つの労働と余暇に関連した「遊戯学説」あるいは「レクリエーション学説」を、仮定的な日常生活の場面で分析し、現代社会におけるこれらの学説の妥当性を検討しようとするものである。

(方 法)

米国イリノイ州ディケーター市に在住一般労働者から層化抽出した261人に対して「余暇行動質問調査票(LBI)」を配布し、面接調査を実施した。LBIは上述した5つの「レクリエーション学説」に対応する5つ考えられる仮定的な10の状況もしくは場面(Situation)を設定して、その状況の後に選択すると思われる余暇活動との関係を明らかにするために作成されたものである。10の仮定的な状況は、いずれも対象者が日常の仕事の場面で経験すると考えられるもので、たとえば、「金曜日の夕方、今週を振り返ってみると息をつく間もない忙がかりだった……」(リラクセーション状況)とか「仕事のことばかり話したとき、同僚はあなたも自分を無視したようなイヤな態度をとった」(カタルシス状況)といった質問形式であった。余暇活動については、「テレビをみる」「パ

ーティに行く」などの具体的な15の活動をあらかじめ列挙し、それらの活動に対するそれぞれの場面で参加への欲求の度合を5段階尺度で示すた。

(結 果)

下の表は、仕事における仮定的状況と余暇欲求の「高い」「低い」は5段階尺度による各活動の平均値が5以上もしくは25以下の基準で区分し、この基準値に該当する活動だけを高い(あるいは低い)順に列挙した。

表からもわかるように、余暇活動への志向は仕事におけるそれぞれの仮定的状況に応じて変化した。特徴ある対応を示している。すなわち、これまでのレクリエーション学説から仮定的に推定されてきた活動形態がその結果からうかがわれる。たとえば、「リラクセーション状況」においてはあまり活動のない家庭的なものに対する参加への欲求が、また「余剰エネルギー状況」においてはスポーツなどの活発な活動への志向が強くみられる。「カタルシス状況」においては、参加欲求の「高い」活動が少なく「低い」活動が多く、この状況に於ける余暇への回避傾向が推察される。「代償状況」に関しては、「友人と雑談」「読書」など仕事に関連した活動を選択しており、この説と一致している。

参加欲求度	代 償 説	カタルシス	リラクセーション	余剰エネルギー	汎 化
高	友人と雑談 暇活動 釣、狩猟	ゴルフ、散歩 釣、狩猟	ゴルフ、散歩 友人と雑談、ス ポーツ(1人)、 パーティ、テレ ビ、ジョッキン グ、庭いじりな ど家庭内	釣、狩猟、友人 と雑談、ス ポーツ(他人) と、パーティ、 ジョッキン、 ゴルフ、ス ポーツ、ドライブ	友人と雑談、パ ーティ、 仕事関連活動、 釣、狩猟、読書
低	テレビ、庭いじ りなど 仕事関連活動、 パーティ、読書 ジョッキン	パーティ、テレ ビ、暇活動、ス ポーツ(他人) と庭いじりなど 友人と雑談	仕事関連活動、 コンピュータ スポーツ(他人) と暇活動、 ドライブ	ゴルフ、散歩、 仕事関連活動、 読書、テレビ	テレビ、ゴルフ

精神病院におけるレクリエーションに関する研究(その2)

○鈴木 定 河野信弘 武井正子 矢島幸子 井上忠夫 神山須直
(超谷病院) (順天堂病院) (順天堂病院) (順天堂病院) (順天堂病院)

研究の目的

我が国、レク療法の中で意図してきたことは、無為で自閉的に陥りやすい慢性分裂患者の社会化をはかることであった。本研究はスタッフ对患者という働きかけをさらに拡大、多面化するために、グループをつくることによって、同じ経験を経験を基盤とし、これらの経験を通じての患者同士のコミュニケーションにより、患者の社会化をはかろうとしたものである。

研究の方法

グループ及びグループ内の個人を意識し、自分の役割を判断して行動するという患者にとっては、わずかしい人間関係を基盤とし、コミュニケーションのとれやすい空間でゲームが進行すること。人と人の接触が、ゲームを媒介していること、緊張性があり、興味を保持しつづることの両面がバレーボールとあてた。グループにレク参加可能なうちからバレーボールのグループに入るものが可能と考えられるもの約40名を選び、技術的にはバランスのとれた男女混合の4チームを編成した。

A、分裂病の慢性的経過をたどり感情鈍麻

で身体的な動きも不活発で他人との接触のあまりないものチーム。

B、種々な病状を示すものの混合グループ(比較的軽症のものを含む)

C、Bチームと同じ混合チームに男子選入を含む

D、同じバレーボール経験のある看護婦を含む

又、グループごとにキャプテンを選ばせ、次のような動きづけを行なった。

①12か月後の7月中旬に院内バレーボール大会を行なう。②チームでの練習は、随時門外にて行なうことができる。

又、患者の社会化がどのように行なわれるかを観察するために、技術的指導は、バスとサーブのみにあつた。期間は、昭和47年5月17日～7月19日であり練習の経過を8mmフィルムにおさめ、患者個人に対しては、レク記録カードに行動記録をとり、終了後に患者の意識調査を行なった。

研究の結果と考察

Aチームは、チームとしてのまとまりがみられず、練習でもとこぞ自室にじこもつ

ているものが毎回あったため、こちらからの働きかけを積極的に行ない看護婦にも応答したため、まわりからの打合せを行なったが6月中旬になっても、どんなゲームでもわきめもふらずに一本でかえすような現象ができた。他人を意識して行動することがなかなかできなかったが、7月に入って練習、ポジション、チェンジを行ったりする際にもどうにか参加することができるようになった。これに対してBチームは、はじめはAチームと同じような傾向であったが、6月に男子と女子アプテンを中心に男子が女子にパス、サーブ、レシーブを教え、ミーティングを行ない、ゲーム中にも、タイムをとったり簡単なチームプレーができるようになった。

C、Dチームは、バレーの上手なものと言

者が中心になって、常に重要なポジションを認め、一部のものみが活発し、反面とりの意識的にも見ることができた。これらの傾向は、意識調査にも見ることができた。

以上、2か月の観察、意識調査、行動記録などから、次のようなことが考察される。①一定期間、同じ経験を通じてグループに所属すること、患者の社会化をはかる上には有効であると考えられる。②グループは、患者のみのグループよりも、混合チームの方がより傾向がみられる。③無為で自閉的傾向にある患者のみのグループにおいても、外からの多面的働きかけによつては、生活面の改善が期待できる。④グループのリーダーの人は総合的な観点からなされるべきである。

人間関係訓練としてのキャンプの方法論について

○宮下桂治 井上忠夫
(順天堂大学) (順天堂大学)

キャンプの研究はこれまでに数多くなされているが、キャンプが人間関係訓練の場として意図的に仕組む、その効果を考慮した論文は少ない。

この種の研究は、キャンプ以外では、K. Lewinを中心としたGroup dynamicsの基礎的研究に始まり、最近ではLaboratory Training in Human Relations and Sensitivity Training in Human Relationsに至る訓練が世界各国で実施されている。著者等がキャンプを人間関係訓練の場としてとりあげ、そこへ、意図的に教育を仕込んだ理由は、キャンプの準備開始時に「あなたはどのキャンプにどんな目標をおきますか」の質問に対して約7割までが人間関係に係わる問題提起し、キャンプを通してよりよい人間関係への助接を望んでいることが明らかになったからである。人間関係訓練の方法としてはSensitivity Trainingの原理を応用して仕組んだ。この原理は基に

人間関係のみの訓練に止まらずK.Mannheimが云っているように、自己、自発性、創造性の回復等人間性を豊かにするために必要とした。過去5年間実験的にこの研究を経験し、人間関係を主題としたキャンプの方法を整理してきた。

次に方法上特に問題となった点について明記する。

a) 主体を誰におくか

目標設定やグループ分けを教師が行なった場合は、feedbackの場面において教師と生徒の身分の序列や価値観にとらわれ共感的理解に立てない例が多い。従って共感の相互理解関係や個人格理念に基づいて主体的洞察意見を生み出す新しい民主的教育方法によって可能になる。

b) カウンセラーの役割

各グループにカウンセラーをつけない場合は、役割を持っているリーダーのみが変革するのが目立ち、グループが発展しない

のに対し、カウンセラーをつけた場合は、心の楽さを知り、Self conceptionを打破することもカウンセラー介入によつて可能となった。従つてグループの発展はカウンセラーの能力次第にけられることも同時に明らかになった。

c) 話し合いと会議の重視

行動プログラムにおける対人接触上の諸問題をはじめ、このキャンプ生活展開中に生起する全ての事項を題材として「グループの話し合い」や、会議で意見や感情を交換し合つて、柔軟かつ的確に捉え行動修正をしていく、いわゆるfeedbackを体験するという傾向がみられた。更にメンバーから出た一つの問題もリーダー会議にかけられ、その日のうちにメンバーに戻されて実行に移される。

d) プログラムの配列

最初は無難なものから次第に集団思考を促すプログラムへと発展されることに

より、グループ内のコミュニケーションが発展する傾向がみられた。

o) 体験の整理とその一般化

generalizationによつて理論と行動の普遍化や一般化が必要になる。初期の頃はキャンプ中1回で終わったが、1回よりも2回、2回よりも3回に分けて実施した方が理解度は高かった。

generalizationの内容は

Communication
feedback
Leadership

について行い、Sensitivityの養成に努めた。以上Sensitivity Trainingの原理を意図的に仕組み実施してきたが、その効果を上げるためには、従来までの一般的なキャンプから抜け去り、メンバーを主体にしてカウンセラーによる介入技術を身につかせ理論セッションで一般化すれば、かなりの効果があらうことが証明できき。

主婦のレクリエーション活動の動向について

大森雅子 藤岡道子 松浦三代子
(東京女子体育大学)(東京女子体育大学)(東京女子体育大学)

余暇時間の増大ともない、主婦のレクリエーション活動も年々活発に行なわれているが、その実態はいかなる動向を示しているかを調査し、レクリエーション活動のあり方についての一貫とした見

(今回は主に、水泳教室に子供を参加させている主婦を対象として調査した。)

調査対象

■ 専科水泳教室に子供を参加させている主婦(183名)

■ 朝顔学園水泳教室に子供を参加させている主婦(70名)

調査期日、方法

昭和47年7月25日～8月12日、アンケート調査

回収率	配布	回収	率
専科水泳教室	300枚	183枚	61.0%
朝顔水泳教室	150枚	70枚	46.7%
総計	450枚	253枚	56.2%

現代の主婦がどんな暮らしをしているのか近年さまざまな角度から主婦の生活時間調査がなされている。

本調査より趣味活動の実態を眺めると87.7%と多くの主婦が趣味活動があると解答した。その内容は48種目もあげられた。それらを大きく分類すると表1に示された。

表1. 趣味活動の分類

種別	創作 手工芸	スポーツ	音楽	文学	その他	野外 活動	ダンス	解 決
%	35.7	12.2	7.7	6.3	5.4	5.0	1.4	59.0

次に趣味活動の状況としては、内容にもよると考えられるが、表2のように示された。

表2 趣味活動の状況

思いついた時に活動する	58.1%	率
定期的に活動する	29.7%	重複を 控えて のえ 為る 百分 率
暇ができた時活動する	27.0%	
毎日活動する	0.9%	
解なし	9.9%	

さらに夫の趣味活動への理解状況をみると63.5%と半分以上が理解をしていることが判った。理解を示している理由として、共通

の話題ができた。生活に張りができる。ストレス解消になる。心豊かな人間になる等多くの利点を挙げて賛意を示していることが判った。さらに現在行なっている趣味活動について料米のように発展させているかをみると、約半数が生徒続けていき先にも判った。

次に主婦のスポーツ活動について調査した。それによると、主婦のスポーツ経験種目を上位5種目を見ると、1位、卓球、2位、バレーボール、3位、水泳、4位、ダンス、5位スキーとむげられた。

次に家族スポーツの実態をみると全体の54.9%が実際に活動していることが判った。

表3 家族スポーツ活動の実態 (上位7位まで)

順位	種目名	%	実施場所	%	実施相手	%
1	バドミントン	36.7	庭	58.1	家族 全員	12.6
2	水 泳	31.7	プール、海	56.7	兄 弟	3.1
3	ボーリング	24.5	ボーリング	24.5	主人と子ども	23.0
4	スキー	18.7	スキー場	18.7	主婦と子ども	15.1
5	登山ハイキング	17.3	山	18.0	夫	12.2
6	卓 球	14.4	あき地	10.1	夫婦と子ども	7.2
7	バレーボール	12.2	道 路	9.4	夫 婦	6.5

また、主婦のスポーツクラブの経験の有無により家族におけるスポーツ活動がどのような傾向を示すものかをみた。それによると経験の有無による特別の変化はみられず、それよりも家族の状況や生活環境等の影響の方が強いように思われた。

以上を通してみると、主婦の趣味活動は大半が趣味を持ってはいるが、活動がまだまだ

生活化されておらず、また内容をみると実益をもたないとするものが多いことが判った。また、主婦のスポーツ活動や家族のスポーツ活動がまだまだ少ないことが判った。これらを通して考えてみると、主婦のレクリエーション活動の実態は、参加の意識は充分に伺われるが、積極的に活動が行なわれていない傾向がみられた。

◎大会での発表抄録を御入用の方は事務局までお申し込みください。
残部ある限り、1部200円でおわけします。

＜おねがい＞

◎昭和47年度学生会費の納入について

いよいよ正月、今年度もあと残り少なくなってきました。すでにこれまで何回かにわたっておねがいしてきましたが、いまだに昭和47年度の学生会費を納入いただけでない方が、一部あります。大至急2,000円をお送りくださるようお願いいたします。

◎機関誌「レクリエーション研究」第三号の原稿募集について

事務局ではたゞいま、機関誌「レクリエーション研究」第三号の原稿を募集しております。多くのかたの投稿を待ちしております。ご連絡ください。

投稿規定は「レクリエーション研究」巻末をごらん下さい。ただし

投稿期限 第3号 原稿〆切日 昭和48年1月末日

論文の送り先及び連絡先 東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育館内
(財)日本レクリエーション協会受付 日本レクリエーション学会 編集部

◎新入会員の紹介 (昭和47年9月～11月まで)

氏 名	動 務 先	自 宅 住 所	
池 田 勝	大阪体育大講師	大阪府茨木市橋の内3丁目14-28	0726 35-5095
森 部 宏 英	東大大学院	三鷹市下連雀 202106東大井の原寮	0422 43-4722
佐 藤 幸 子	仙台大学助手 02245411121	宮城県栗田郡柴田町字高岡山崎1の1 仙台大学	02245 4-1121
沢 村 博		東京都府中市本町4の7の4 三根方	0423 62-6195
山 崎 友 丈	洗 井 病 院 04755(2)2330	足立区梅島3丁目43の20	03 840-4475
塩 谷 寿 彦	大阪工業大学助手 06(952)3131	奈良市鶴舞町西一番26号-204	0742 48-6851
池 間 博 之	財団法人レクリエーション協会(区468)3031 朝国民休耕村協会 (501)0466-8	横浜市緑区青葉台1-1-1 青葉台団地13-403	045 982-8435
藤 塚 博 道	東教大大学院	千葉県松戸市栗ヶ沢7-7	0473 87-1908
岡 馬 善 郎	郡山女子大学	郡山市吹田2-17-14	02492 2-4764
桑 谷 洋 子	日本青年団協議会 (401)0181	杉並区和泉1-33-1 鈴木方	0427 45-4787
大 塚 孝 雄	東海大学教員 0463(58)1211	神奈川県横浜市南台 5-14-10 倉本荘	03 302-9555
小 野 園 芳	東教大大学院	世田谷区上北沢3-1-3 横坂方	0425 24-4456
大 森 雅 子	東京女子体育大学 045(22)4131	東京都立川市羽衣町2-52-2 井口方	052 711-1955
斎 藤 正 晴	常知青年会事務 05616(2)2111	名古屋市中千代区赤坂町6-70	

氏 名	動 務 先	自 宅 住 所	
及 川 一 典	立正大学保健専門学校 校	板橋区飯橋4-6-1 飯橋スカイプラザ610	03 964-2775
渡 辺 博 之	同志社大学教員 075(21)2311	京都市左京区下鴨森ヶ畑内町2401	075 781-0961
久 美 恵 子	和歌山大学学生 山口県石炭山 青少年育成センター (08248)2	和歌山市南中町50	0734 22-3219
河 村 文 人	豊田大学教員 (052)631111	山口県萩市郡大町若田	082048 2108
兵 藤 昌 彦		鎌倉市岡本120	0457 46-3819
野 呂 雅 秀	中京大学	愛知県豊田市見降町101 中京大学内	0565 45-0971
土 肥 冬 男	グリーンスタンプ社	神奈川県横浜市2-9-22	0466 22-6833

◎「老人レクリエーション研究会」の活動に参加しませんか

このたび山崎進氏、高橋美照氏、前川雄雄氏、塩谷宗雄氏が世話人になって、「老人レクリエーション研究会」を結成することになりました。老人のレクリエーションに関心をおもちの会員の方々は、次の住所にお問い合わせください。

☆山崎進 目黒区三田2-10-35
中銀目黒マンション201号室
電話 03 (715) 0617

◎「レクリエーション白書」随日本レクリエーション協会発行が出来ました。御入用の方は、協会内照品課まで、お申し込みください。一部300円(送料込み)という特価でおわけします。

申し込み当っては、学会員とすることを明記して下さい。

◎1月定例研究会のお知らせ

1月の定例研究会を次のとおり開催いたします。万障あきらめ合わせのえ、ご出席ください。

日時 昭和48年1月25日(木) 午
後6時より

場所 岸記念体育館会議室

話題 「週休2日制実施——現状と問題点」

※話題提供者には、すでに週休2日制を実施している会社の方を予定しています。



学会ニュース 16, 9

June 1973

日本レクリエーション学会

＝本号の内容＝

- 昭和48年度総会報告
- 連絡（学会大会、6月定例研究会、機関誌4号の発行、九州地区学会支部会の結成、……など）
- 研究報告（昨年度定例研究会より）

＜盛況だった学会総会＞

5月26日（当初4月末に予定されていたが、セネストのため1か月延期された）日になった大阪市にある大阪ガス地味レクリエーションセンターで、日本レクリエーション学会総会が開かれた。これには大阪府レク協会が全面的に協力し午前中は、府レク協の「研究協議会」とし、学会員以外のメンバーもひろく参加して「現代社会におけるレクリエーションの役割」と題した2つの講演を聞いた。

まず、前川肇雄東京教育大名誉教授が、時間、空間の変化と情報量の拡大という3つの面からレジャーを考え、現代のレジャーが「カネを払って、レジャー産業の投資したものに乗る」式の色彩が強いことを指摘した。そして、レクリエーションなるものは、レジャー活動のうち「自分自身が満足し、社会的にも認められるもの」と考えて、レジャーをよりよいものにしていく活動にしたい、と述べた。

余暇開発センターの松田義幸氏は「生活の余暇化」がすすみ余暇をめぐっては産業も

行政をも動かすことができなくなった現況から出発すべきことを指摘する。

そして現代の直面する余暇時代は、生産回路の中に生活回路があるのではなく、生活回路の中に生産回路が含まれるような時代である。もはやマスマネジメントによる画一的供給では人々は満足せず、個性と好みによる自由選択の幅がひろげられることこそが課題になる。このことをふまえて、松田氏はレク・リーダーの発想の転換の必要をとき「余暇コミュニティ」を建設して、日常生活の充実をめざすべきことを説いた。午後からは、学会総会が開かれ、47年度の事業報告・決算報告と、48年度の事業計画・予算案が承認された。役員改選では、前川肇雄会長、江橋慎四郎理事長はじめ、旧役員のリ選と、さらに地域理事の追加が認められた。関西支部について九州支部の結成が軌道にのりつつあることが報告され、総会あと「週休2日制と職場レク」をめぐるシンポジウムが開かれ、職場レクをめぐるいくつかの問題点がうきまわされた。（次号で詳細の予定。）

昭和48・49年度の新役員決定される!!

総会の席上、次の方々に昭和48・49年度の役員をお願いすることが、満場一致で決定されました。これまでも増して、学会活動を充実させていくために、会員の皆様の積極的な意見をお寄せ下さい。

名誉会長	三笠宮崇仁親王殿下	林 英（地域計画研究所）
会 長	前川肇雄（大正大学教授）	前野淳一郎（スペースコンサルタンツ社）
副会長	塩谷宗雄（大正大学教授）	松原五一（神奈川県立三浦臨海青少年センター館長）
	三隅達郎（関東学院大学教授）	巻 正平（消費者問題研究所）
	山崎 道（相模女子大学教授）	兼松保一（中央大学）
理事長	江橋慎四郎（東京大学教授）	青木泰三（大阪府立大学）
理 事	浅田隆夫（東京教育大学教授）	西山勝二（大阪産業大学）
	小川長治郎（レク協会専務理事）	相口 章（同志大学）
	木下静子（東京YWCA）	鈴木勝希（福島大学）
	余野 豊（文部省体育局）	兼松保一（名古屋レク協会）
	最所道太（国立武蔵野学院）	岡 琢磨（鳥取大学）
	高橋和敏（東海大学教授）	秋吉嘉穂（福岡教育大学）
	田村晋代（東京芸術大学教授）	松延保一（福岡大学）
	高橋真照（日本学校安全会）	監 事 金塚 弘（日本体育協会）
	長谷川純三（東京教育大学助教授）	監 事 出口一弘（出口コンサルタンツ事務所）

会 員 状 況（昭和47年度3月現在）

	正会員	学生会員	特別会員	賛助会員	計
昭和47年3月31日	319	12	2	1	334
昭和48年3月31日	363	9	4	0	376
増 減	+ 44	- 3	+ 2	- 1	

昭和47年度日本レクリエーション学会事業報告

◎ 研究・調査活動

(1) 第2回学会大会の開催

<期 日> 11月10日
<場 所> 日本都市センター
<内 容> ①研究発表……………34題

②シンポジウム

討議メンバー： 会田昭一郎氏、斉藤定雄氏、三原忠雄氏
司 会： 浅田隆夫氏
テ - マ： 「都市化する社会における地域レクリエーションの発展のためにー地域住民のレクリエーション意識と生活構造ー」

※抄録作成

(2) 昭和47年度学会総会シンポジウムの開催

<期 日> 5月20日
<場 所> 日本都市センター
<内 容> 討議メンバー： 鴨谷正夫氏、佐藤忠好氏、糸野豊氏、前田博氏

司 会： 長谷川純三氏
テ - マ： 「レクリエーション行政の現状と展望」

(3) 定例研究会活動

- ① 江山正美氏、常藤恒良氏、「自然保護からみた野外レクの諸問題」
- 7月22日 岸記念体育館

- ② 小川寿一氏、「レジャー・レクリエーション・ツーリズムの相関関係（特にトライアングルアプローチ）を探求して相乗効果を生み出す研究」
- 9月28日 大阪成蹊女子短大

- ③ 池田勝氏、「アメリカにおけるレクリエーション研究」
斉藤定雄氏、「国際ブレイクランド会議に参加して（報告）」
- 10月20日 岸記念体育館

- ④ 桑原龍男氏、高頼達三氏、「週休2日制の現状と問題点」
- 1月25日 岸記念体育館

- ⑤ 「卒業論文発表会 若者のレク研究意識」
- 3月23日 岸記念体育館

- (4) 老人レクリエーション研究会の発足

◎ 広報活動

- (1) 機関誌「レクリエーション研究（第2巻3号）」の発刊
- (2) 学会ニュース（第6号～第8号）の発刊

◎ 組織の拡充

(1) 学会近畿支部会結成大会

- 4月8日 大阪成蹊女子短大

※近畿支部会で昭和47年度に行なわれた研究会活動

- ① 青木泰三氏、「日本ユースホステル運動の現状と展望」
- 1月27日 同志社大学

- ② 「学生の卒論発表会」
- 3月20日 奈良女子大学

昭和47年度収支決算報告				
<収入の部>				単位 円
項目	予算	決算	差額(△印) (増)	内 容
前年度繰越金	188,405	188,405	0	
入会金	100,000	44,000	△ 56,000	1000×44名
会費	930,000	568,140	△ 361,860	正会員258名×2000 S.46年産分会費8名×2000 学生会員9名×1000 特別会員4名
大会参加費	200,000	159,200	△ 40,800	
雑収入	100,000	20,215	△ 79,785	
日レク協会より補助	0	80,000	80,000	日常事務費、事務局出張費、食事代として
計	1,518,405	1,059,960	△ 458,445	
<支出の部>				
項目	予算	決算	差額(△印) (減)	内 容
事務費	130,000	69,350	△ 60,650	日常事務消耗品代 事務局出張費・アルバイト代など
会議費	80,000	23,370	△ 56,630	部歴代(理事会6回、幹事会2回、 委員会1回)、食事代
通信費	120,000	79,845	△ 40,155	印刷物郵送、その他の連絡
印刷費	660,000	564,220	△ 95,780	機関誌(版2 版5)、学会ニュース など
例会費	50,000	22,600	△ 27,400	謝礼、部歴代など
大会費	200,000	157,129	△ 42,871	会場費、席着板、アルバイト、こん だん会費、プログラム・抄録代
総会費	50,000	46,110	△ 3,890	会場費、謝礼など
支部助成金	30,000	30,000	0	近畿支部
研究調査費	50,000	0	△ 50,000	
予備費	148,405	0	△ 148,405	
計	1,518,405	992,624	△ 525,781	

<今期決算>		
(収入)	(支出)	(次期繰越金)
1,059,960	992,624	67,336

昭和48年度事業計画

◎ 研究調査活動

- 第3回学会大会の開催(各研究発表、課題研究発表、シンポジウムなど)
 - 10月25日 茨城県水戸市
- 昭和48年度学会総会シンポジウム
 - 5月26日 大阪市ガスビル
- 定例研究会活動………年に5回を予定(うち1回は近畿支部会と合同、近畿支部会は年に3回を予定)
- 研究・調査活動………「老人レクリエーション研究会」

◎ 広報活動

- 機関誌「レクリエーション研究(版4)」の発行
- 学会ニュース(第9号～第11号)の発行

◎ 組織の拡充

月	内 容	近畿支部
4月	総会およびシンポジウム 機関誌版3発行(前年度分)	総会・シンポジウム
5月	定例研究会	学会ニュース
6月	定例研究会(近畿支部会との合同)	研究会
7月	定例研究会(近畿支部会との合同)	研究会
8月	〈機関誌 版4〉	研究会
9月	第3回学会大会(茨城県)	研究会
10月	定例研究会	研究会
11月	定例研究会	研究会
12月	定例研究会	研究会
1月	定例研究会	研究会
2月	定例研究会	研究会
3月	定例研究会	研究会
4月	定例研究会	研究会

昭和48年度予算案		
<収入の項>		
項目	予算額	内 容
前年度繰越金	6,733.6	
入会金	50,000	1000×50名
会費	800,000	正会員2000×360名 学生会員1000×20名 賛助会員2000×3名
大会参加費	150,000	当日参加者1000×150名
雑収入	100,000	利息、資料代など
計	1,167,336	
<支出の項>		
項目	予算額	内 容
事務費	60,000	アルバイト代・事務局出張費、事務用品(含 学会封筒の作成)
会議費	50,000	部歴代(理事会6回、幹事会など)
通信費	100,000	印刷物郵送、会員への連絡など
印刷費	400,000	機関誌版4、学会ニュース他
例会費	40,000	謝礼、部歴代など
大会費	200,000	会場費、プログラム代、謝礼など
総会費	150,000	会場費、交通費、謝礼など
支部助成金	30,000	近畿支部
研究調査費	100,000	「老人レクリエーション問題」など
雑費	7,336	
予備費	30,000	
計	1,167,336	

★「第三回全国レクリエーション学会大会」について

第三回全国レクリエーション学会大会は例年通り「第27回全国レクリエーション大会」の前日に、下記のとおり開催されます。

期日 10月27日(土)

時間 午前12時～午後5時(予定)

場所 茨城県水戸市市民会館(予定)

◇学会大会で研究発表をするように、今から御準備下さい。次号のニュースで、会員の「参加申込み」「研究発表申込み」を正式に受け付けます。締切8月15日

★九州レク学会(九州支部会)設立記念行事

期日 6月30日

時間 午前9時半～12時

場所 福岡市民体育館(福岡市東区千代田野)

内容 高齢者レクリエーションのつどい
遊びましょう! 踊りましょう! 歌いましょう!

★6月定例研究会に御出席下さい!!

新役員の体制もとのつたところ、今年度第1回目の定例研究会を下記のように開催することになりました。

このたびは、全国勤労青少年会館(サンブラザ)6月に開催)の集會室を会場とし、勤労青少年の生活意識や余暇の実態について、討論することになりました。なお館内の施設見学も行ないたいと予定しております。

日時 6月29日(金)、午後5時30分より

場所 全国勤労青少年会館(サンブラザ)8階集會室
※国電中央線中野駅前

話術提供者 鈴木雅男氏(千葉大学教養部助教授)

テーマ(予定)「勤労青少年のレジャー、レクリエーション」

日曜・月曜休みの週休二日制を採用した日本楽器



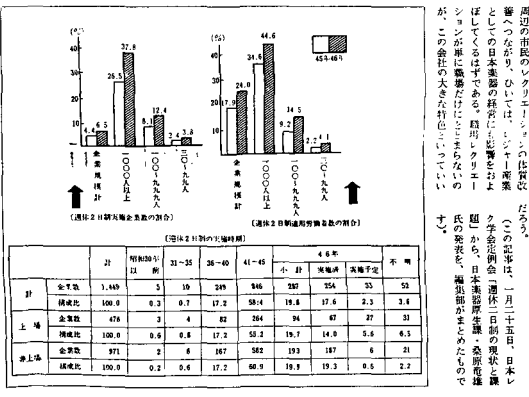
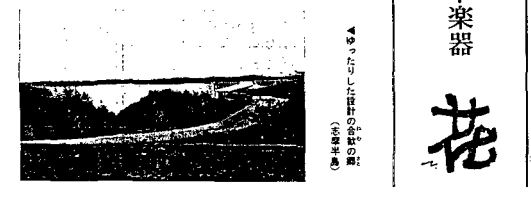
効果としては、次のようなものがある。

1. 週末の遊園地・レジャーから解放される。
2. 土曜日は、自立的・創造的な「自分のレジャー」をエンジョイできる。
3. 公共施設の利用率は土曜日より高い。
4. 商店街の活性化は土曜日より高い。
5. 月曜日は私用で官公庁や病院へ行くの便が良い。
6. 月曜日は仕事のための勉強ができる。
7. 土曜日の夜は以前以上にゆっくりできる。
8. 週末の買い物は月曜日に済ませられる。
9. 月曜日はあきらめず、世間の賑わいを楽しむことができる。
10. 土曜日は仕事日なのに、会社のワークライフバランスが保たれる。

「わが国の消費者意識は、欧米諸国に比べて遅れている。欧米では、ほとんどの企業が、消費者意識のなかで『レジャー』というキーワードを用いている。また『アウターライフ』も使われている。『アウターライフ』とは、アウトドア、スキー、サーフボード、マリンスポーツなど、アウトドア系スポーツ全般を指している。『アウターライフ』というキーワードは、欧米では、消費者意識のなかで、『レジャー』というキーワードと同等の位置づけを占めている。『アウターライフ』というキーワードは、欧米では、消費者意識のなかで、『レジャー』というキーワードと同等の位置づけを占めている。『アウターライフ』というキーワードは、欧米では、消費者意識のなかで、『レジャー』というキーワードと同等の位置づけを占めている。

「わが国の消費者意識は、欧米諸国に比べて遅れている。欧米では、ほとんどの企業が、消費者意識のなかで『レジャー』というキーワードを用いている。また『アウターライフ』も使われている。『アウターライフ』とは、アウトドア、スキー、サーフボード、マリンスポーツなど、アウトドア系スポーツ全般を指している。『アウターライフ』というキーワードは、欧米では、消費者意識のなかで、『レジャー』というキーワードと同等の位置づけを占めている。『アウターライフ』というキーワードは、欧米では、消費者意識のなかで、『レジャー』というキーワードと同等の位置づけを占めている。

「わが国の消費者意識は、欧米諸国に比べて遅れている。欧米では、ほとんどの企業が、消費者意識のなかで『レジャー』というキーワードを用いている。また『アウターライフ』も使われている。『アウターライフ』とは、アウトドア、スキー、サーフボード、マリンスポーツなど、アウトドア系スポーツ全般を指している。『アウターライフ』というキーワードは、欧米では、消費者意識のなかで、『レジャー』というキーワードと同等の位置づけを占めている。『アウターライフ』というキーワードは、欧米では、消費者意識のなかで、『レジャー』というキーワードと同等の位置づけを占めている。



学会ニュース No. 10

December 1973
日本レクリエーション学会

- ＝ 本号の内容 ＝
- 学会大会を終って
 - 学会大会の発表から (5冊を撰挙して報告を紹介)
 - 九月定期研究会と報告
 - 事務局だより(連絡)

第三回学会大会を終って

学会大会も第3回目をむかえ、ようやくカタチが定まってきたといってもよいかもしれない。今次大会の反省点をいくつか挙げてみた。

A. まず会場(常陸銀行本店会館)はさすがだった。余裕もあった。よい会場を選ぶことは忘れてはならないことでした。

B. 1人15分の発表時間もまあ適当でした。

C. あまり長いと出なくなる人もいてしょうが長くてもよい発表を聞きたい。

D. 発表内容ですが、全体としてはいえ、テーマのひろがりにも、内容のほりひろがりにも、レク学会らしくなってきたのではないだろうか。

E. しかしまだ、体育学会でも発表すればよいという内容もあつたようです。レク学会でなければならぬ独自の内容のものもあつてほしいと思います。

F. その中で、レク学会は、「レクリエーション」の立場を明確にするための共同討議を各領域の研究者をあつめて、もっと

<研究発表紹介> 一抜粋

① わが国・キリスト教主義レクリエーション運動の歩み

秦 芳江(同社女子大)

この研究は、日本の近代レク運動を欧米からの生活文化の移入形態としてとらえ、その継体であり規範でもあるキリスト教的人間観と生活倫理がどのような影響を与えてきたかを探ろうとするものである。

レクリエーションの考え方や多くの具体的活動が、他の文化とともに、開教、外人宣教師、学校、教会等を中心に紹介され発展してきた。欧米式の室内、屋外のゲーム、酒・芸能的なパーティ、スポーツ試合、日曜休日制、クリスマスの風習、キャンプなど多くの例があげられる。これらは政府サイドからすすめられた生産力増強のための整安提供ともいべき健全な娯楽運動とは全く異なり、市民の側から組織的・教育的の裏側としてとられる。これらはプロテスタント派を中心とする教会、学会、YMCA、

YMCAなどの団体によって主張され実践された。

日曜の家族外遊や四季の山遊外遊など、英国型の余暇利用のすめものをせた民友社、徳富新花らによる「家庭雑誌」をはじめ、早稲谷の「女子雑誌」、姉崎名子や子の「新女界」、福田英子らの「世界婦人」などにもこうした主張が見られる。とくに、次の3人の意見はもっとも典型的なものである。

成瀬二枝 一その著「女子教育」(明治28年)において体育単に強健体育の大見地のみからなく、身体の教育と休養の面からとらえ、遊戯や気分転換の価値を力説している。

松浦敬華 一遊戯教育論を各方面で寄稿しました。明治40年にわが国最初の総合的室内遊戯誌『世界遊戯法大全』を世にふり、850種にわたるゲームを紹介している。

安部龍雄 一学生野球の父として著名な彼は、社会教育の教として労働局の設置8時間労働制などを提唱し、さらに彼が教育の中で社会体育施設の必要や家庭内娯楽の必要性をのべている。

② 最近のレジャー、レクリエーション感についての一考察

仲村 豊・瀬川 彰(同社女子大)

レジャー、レクリエーションという概念がわれわれの日常生活の中でどのような意味をもつて使用されているかに比べて、実証的に明らかにしようとするものである。京都市周辺の小企業11社の従業員143名を対象に調査を行ない、次のような結果を得た。

①レジャーについては対象者の2/3が娯楽的概念、5/7が活動的概念として考え、レクリエーションについては組織的概念をもち、活動的概念が7/11を占めている。

②レジャーについては「金遣ひのみの娯楽的活動」というわけとめ方が多い。

③レジャーは多くの人々がマスコミによって印象づけられているのに対し、レクは学校教育

の中で印象づけられたとする者が多い。

①レジャーもレクリエーションも両者の上では好意的な評価をうけている。両者の比較ではレクの方が評価が高い。

②「レクの保持をもち人生を新鮮に」「仕事との両面で肯定的に見る見方」がレクに偏してはよく明確にあらわされている。

③「個人の自主的、自発的活動」「個人の楽しみ」などの項ではレジャーがレクを上まわっており、個人、自由、楽しみ等の表現とのつながりがレジャーは強いようである。

④レジャーとレクとの対比ではレジャーが「金遣ひの娯楽」だとする見方が強く、他方、レクは「レジャーと比べて」「集団的」だとする見方がつよい点である。

③ 野外レクリエーションの適正環境に関する研究
進士 五十八 (東京農工大学)

高度化発達した先進工業国、野外レクリエーションの拡大傾向が著しい。このように需要量の増加は既存の Rec. Area に対し、一方で Overuse として適正 Rec. 環境を破壊し、他方で寧ろ自然環境を汚すための自然破壊や高密度で非 Rec. 環境を発生させる圧力となっている。このままでは Out-door Rec. の本質的な特性であり本能的である自然との対話はもちろん、各 Rec 本来の適正環境の確保は困難となる。こうした状況から適正 Rec. 環境を保護造成し、先ず第一に各 Rec. の適正環境を確保し、そのための具体的な計画的、技術的差を有る必要がある。本研究はこのような目的に向かっての試みである。

この方法は、①環境の複雑な様態の Total としての適正イメージを詳細に把握すること

②そのイメージを形成するために必要な条件をあらゆる角度から追求すること。③、④で得た計画原案の試行、原則より Rec. Area の実定環境の計画と立案を行うことにより確保を可能にしてゆく。

適正環境を規定する要素は、自然、人間の二次表に分けられるが、野外 Rec. である限り自然要素は各 Rec. を特徴づけるものとなり得ず、人間要素に立脚した基本数値が各 Rec. 毎の環境条件となる。このことは具体的に利用者同志の間隔及び利用者密度の制御に帰結する。

それゆえ、この基本数値に影響を与える環境条件としては、⑤空間広域の開放 閉鎖性、⑥自然立地 (地形・気候・植生・風光・景観・色彩など風俗的要素) の自然 人工度、⑦利用主体の規模 (グループ構成人数等) 速度 (歩き、自転車など) が考えられる。

④ 経営キャンプについて
野沢 隆 (埼玉大学)

キャンプは生活そのものであり、キャンププログラムは1日24時間について考えられる。このことから言えば、キャンプにおける宿泊は小屋もテント、更衣室等において睡眠時間をより積極的プログラム化してとらえる。

都市化が急激に進行している今日、創造を体験の場としてのキャンプの在り方を考えるとき、また改修改良の著しいキャンプ施設、用具の現状等と経営キャンプについての研究が望まれる。

本研究は、一般大学生男女を対象として組織的な経営キャンプを行ない、組織キャンプにおける経営の可能性、運営等について考察しようとするのである。

アンケート結果によると、経営に対し、81%のキャンパーが満足しており、O.L. 登山

自由活動と共に主要プログラムの一つであったことがわかる。また面白かった (77%)、よい思い出になる (62%)、またいっしょに思い出 (62%)、今まで違った自然を感じた (27%)、自然はすばらしい (27%)、人生にプラスになった (27%)、自信がもった (23%)、自分の新しい面を発見した (15%) 等の意見も得られた。他のキャンプ形態との比較研究今後の課題としても、経営の成果としてあげることができよう。

施設の充足程度については十分な結果は得られなかったが、経営形による他プログラムへの影響は認められず、経営形による組織キャンプは可能であり、経営そのもののプログラムとしての効果も認められた。時期、場所、対象等の条件がそろえば、キャンプ期間中の一泊をグループと結びつけて経営する等の方法でプログラム化できるものと思う。

⑤ 精神病院におけるサイクリング療法について
紀原病院グループ (発表者 川口 宏)

精神病、特に精神分裂病においては、単に病的体験が消失するだけでなく、社会復帰ないしは職業復帰ができてはじめて“治癒”したと云える。

紀原病院では、回復期にある患者に、生活意欲を高め、体力つくりをめざしてレクリエーション療法を実施してきたが、その一端として、このたび「サイクリング療法」をこころみた。

レクリエーション療法にサイクリングをとりに入れた理由は、①自己練習の訓練となる。②年令・性格にかかわらず行なえる。③年間を通してできる。④自分自身の力で走らなければならない。⑤自分自身と他人の安全に注意せねばならない。⑥「閉鎖性」と「開放性」が要求される。⑦病院内の活動のため新しい刺激になる。⑧社会復帰の意欲が高まる。

昭和46年9月、和歌山県サイクリング協会の協力を得て、11月には7kmコースで実験的プログラムを行なった。

これに基づいてその後2ヶ月おきに計8回、10km〜24kmの院外ツアーを実施、延81名について7ヶ月間のデータを検討した。そして全体的に以下のような留意点を確認した。

①参加者はそれまでの院内レクリエーションに参加したもので、体力的にハンディキャップの少ないものを対象とする。②体力がよく似た3〜5名を1班とすると良い。③出発前は女子の班からにする。④20〜30分以内の小休憩をとり、自転車の点検を行ない、参加者の疲労感を確認する。⑤交通規則の説明は毎回くりかえす。⑥大休憩の時、ゲームや合宿を行ない、気分転換をはかる。⑦野外状態を行ない、協同作業を入れると効果的である。……等々。

< 9月定例研究会 (東京) >
今回の研究会は、夏期休暇を利用して海外を視察してこられた、後藤新平氏 (日本レクリエーション協会)、高橋和敏氏 (東海大学) 松原五氏 (日本レクリエーション協会) の三氏に、「レクリエーションの国際的状況」というテーマで話を伺った。

司会の江藤氏より研究会というところかわらず、満洲印象を聞かされたことによりお話しあり、会はなごやかな雰囲気の中で始められた。

まず、海外交流協会二十周年行事の一端でドイツへ行ってこられた後藤氏は、ゾナアルプハイターと称するリーダー選とキャンプ生活を共にした、ユングハイムス (青年の家) 等を見学した事の中で、「私は決してドイツ礼賛主義者でもなければ、日頃日本を過少評価していたわけでもない。しかし彼等が示した所、行動の規範は主体的、自主的なものでなければならぬという点には着

眼に偽りなく、すばらしいものであることを痛感した」と感想を述べられた。

つぎに、第一回アジア地域 Y.M.C.A. 大会に出席した、東海大学 Y.M.C.A. の代表高橋氏は、「都市化と Y.M.C.A. の役割」というテーマで各団の代表者と意見を交換された。氏は、Y.M.C.A. とは、組織ではあるが、メンバーでもあるということ、それは道徳があるからそこに集まるということではなく、積極的に地域に介入してゆくことではないうちか、という印象に深い指摘をされた。

最後に、オランダ研究グループで、主としてオーストリアへ行ってこられた松原氏は、豊かな自然の中で大らかに生活する人々を見て、日本のレクリエーションは、「やらされる」という感じがしてならないという点を強調された。これは、これからのわが国のレクリエーション運動が押し進められていくに反してはならない点であることを出発者一同確認して散会した。

連絡版 (事務局だより)

◎ 昭和48年度学生会費の納入について
いよいよ正月、今年度も残り少なくなってまいりました。すでにこれまでにもお願いしてまいりましたが、いまだに48年度の学生会費を納入していただけない方が、一部におります。大変急務ですのでお送り下さるようお願いいたします。

◎ 機関誌「レクリエーション研究」第4号の原稿募集について
事務局では来月、機関誌「レクリエーション研究」第4号の原稿を募集しております。ご予定の方は1月末日まで、事務局にお送り下さい。事務局には是非とも採刊したいと考えておりますので、ご協力ください。至急事務局までご連絡下さい。

◎ 第3回レクリエーション学会大会の模様をお知らせします
第3回学会大会に欠席された会員の方で、第3回大会お礼を希望の方は、500円を送付してください。若干お誤りがあります。

◎ 1月定例研究会について
1月定例研究会の開催を検討中です。この定例研究会は、1月下旬に記念体育会館 (渋谷区神南1の1) 日本レクリエーション協会) の会議室で開催されます。話題は特に「レクリエーション・セラピー」に関するテーマにしたいと思います。今からご出席の準備をして下さい。詳しい日時が決定しだい、連絡をいたします。特に要領などがありましたら、大至急事務局までご連絡下さい。

◎ 課題研究へのとりくみについて
先日開催された学理理事会の折、日本レクリエーション学会も、会員全体の研究成果を集大成してゆく必要がある、という意見が出されました。その結果、学会として取りくむべき何らかの「課題研究」が必要であるという意見の一致を見、とり合せが今後、「指導者養成」に焦点を置いた研究を研究会小委員会の先生方のリードによって集大成することになりました。研究会小委員会のテーマは、池田隆夫氏 (東京教育大学教授) です。

研究プランは世界のあらゆるタイプのレクリエーションを対象にして、その養成課程や社会的地位づけなどについて考察しようとするのですが、当面は日本の状況がその中心になります。この研究に会員の皆様が各々の研究成果を持ち寄り、協力をいただいたら、レクリエーションの大きな実績づくりに進められますように、お願いいたします。ご意見をぜひお寄せ下さい。

◎ 事務局では会員の皆様のご意見、心待ちにしております。お気づきの点を何でも結構です。どしどし投稿して下さい。

◎ レクリエーション白書 (第1) 日本レクリエーション協会発行) が出来ました。御利用の方は日本レクリエーション協会商品課までお申し込み下さい。一部500円 (送料込み) でおわけします。

< 会員の意見 >
九州学会支部の活動の中で・・・

教 官 富 翁

立選れている行政
そして、地域社会へレクリエーション活動を普及するために、いくつかの提案をしたい。

まず、第一に組織づくりである。行政面からみると、九州各県や市町村にレクリエーションを専門に担当する課や係はまだない。現在、教育委員会を中心に担当しているが、労働部や民生部などにも関係がある。兵庫県や新潟市などは、すでに余暇課が発足し、サービス行政の機能を果たしている。西日本の自治体でも、住民の福祉や健康問題を強調しているが、意外にレクリエーション行政は立選れている。そろそろ検討していただきた。

また、民間団体であるレクリエーション協会をつくらねばならない。現在協会があるところでは活動を促進させて欲しい。北九州市は早くから協会が発足し、全国でも指折りの実践活動をしている。ところが、同じ大都市である福岡市に協会がない。設立しようとする動きがあるのだから、ぜひ実現させたい。佐賀県は、来年1月1日唐津市で全国レクリエーション大会を開く予定である。この機会に内容の充実をはかり、一層発展させて欲しい。

「リーダー」作れ
第二に、手帳に利用できる身近な施設とプログラムをつくることである。(中略)

最後に指導者づくりとボランティア・サービスマンである。レクリエーションの振興は指導者である。自治体と民間協会がタイアップして、レクリエーション・リーダー、すなわち、遊び指導者を養成して欲しい。ゆくゆくは市町村に「ホム・リーダー養成」を設けたい。このボランティアリーダーを登録していただく。地域や職場から要請があれば、ボランティアから指導までお話しするのである。おわたりの学会ですべてに満足させ好評をばしてはいて。< 都合で1日お休みさせていただきます >

学会ニュース No. 11

May 1974

日本レクリエーション学会

＝本号の内容＝

- 5月理事会より(4,9,59) (48年度事業報告、決算報告) (49年度事業計画、予算案)その他
- 支部ニュース(近載)
- 1月定例研究会報告

理事會報告

→4月に引き続き5月の理事会で次のように決定いたしました→

1. 昭和48年度決算報告(次頁以下参照)
2. 昭和49年度事業計画及び予算案(次頁以下参照)
3. 第4回学会大会について
 - 大会の趣意(事項)を6月理事会まで作成する。
 - 各研究発表、課題研究発表、シンポジウムなどを内容とする大会準備については九州支部におねがいする。
4. 学会の経理状況について
 - 学会の経理状況は、物価の高騰や会費の未納者があることなどによって年々苦しくなっている。
 - 今年度は見合せるとしても、近年中には値上げせざるを得ない。
 - 会費未納の会員には会費の納入をよびかけ、今後会費を払う意向のない会員については退会処分をする。
5. 研究グループの助成などに関して

昨年度は「老人レクリエーション研究会」と「指導者養成課程研究会」が学会で承認され、予算化されたが、今年度は助成対象を公募する方向で検討する。

昭和48年度事業報告

- ☆ 研究調査活動
 - (1) 第3回学会大会の開催
 - <期日> 48年10月27日
 - <場所> 水戸市常陸銀行会議室
 - <内容>
 - ①研究発表 ……………21題
 - ②講演と討論
 - 演者 福士昌寿氏
 - テーマ「レクリエーション行政の基本的方向」
 - 司会 松原五一氏
 - (2) シンポジウムの開催
 - <期日・場所> 48年度学会総会と同じ
 - テーマ「遊休2日制と専修レク」
 - 討議メンバーおよび論議
 - 中条教枝「日本産業構造の変化とレクリエーション」
 - 尾上克己氏「生きがいを作り出すレク

リエーション」
司会 青木泰三氏

(3) 定例研究会活動
○ 鈴木春男氏「勤労青少年のレクリエーション」
- 6月29日 全国勤労青少年会館
○ 後藤新平氏、高橋和敏氏、松原五一氏
「レクリエーションの国際視察を終って」
- 今後の研究課題をさぐる -
- 9月28日 岸記念会館

○ 問題 武氏、中村典男氏
「セラピューティックレクリエーションはどうあるべきか」
- 1月25日 全国婦人会館

○ 「卒業論文発表会-若者のレク研究意識」
- 3月22日 岸記念会館

☆ 組織の拡充、支部活動
(1) 九州支部
○ 九州レクリエーション学会の設立
- 48年6月30日 福岡市、三隈ホール
○ 第一回九州レクリエーション学会大会
<期日> 49年2月2日
<場所> 福岡市第一動線ビル内三隈ホール

<内容>
① 研究発表 ……………4題
② シンポジウム
テーマ「レジャー時代におけるレクリエーションの役割」
話題提供 川村英男氏、芳野敏章氏、金崎良三氏
司会 秋吉嘉範氏

(2) 近畿支部
○ 定例研究会の開催
○ 研究協議会の開催
テーマ「現代社会におけるレクリエーションの役割」
話題提供 前川 峯雄氏、松田 藤幸氏
<期日・場所> 学会総会と同じ

＝告知板＝

☆ 学会経理の現状について
48年度決算報告をご覧いただければわかりますように、会費納入者は334名でした。これは新入会員53名を加えた数ですので、47年度までの会員に限れば納入者は300名も大幅に減っています。つまり、督促にもかかわらず40名前後の会員数の内、約10%が未納者という結果になるわけですよ。それゆえ、理事會報告にもありましたように、再督促の上、長期未納者は退会処分致す予定ですのでご了承下さい。(49年度予算案の会費収入項目は、退会者を見込んだものです)

☆ 新しい研究仲間を増やそう
最近では、これまであまり関連のなかった領域の人々がレクに関心をもち、入会する傾向が見られます。みなさんの周囲にも関心をもっておられる方が沢山いると思いますので、レク界の充実のためにも是非入会を呼びかけ下さい。

昭和48年度決算報告

<収入の部>

項目	予算額	決算額	増減額(減△)	備考
繰越金	67,336	101,486	34,150	年度末取組精算の結果34150円の差額がた
入会金	50,000	53,000	3,000	53名入会(53×1,000)
会費	800,000	668,000	△132,000	334名入会(334×2,000)
大会参加費	150,000	98,000	△52,000	98名参加
雑収入	100,000	36,868	△63,132	資料代(資料購入者がほぼより少なくなった)
計	1,167,336	957,354	△209,982	

<支出の部>

項目	予算額	決算額	増減額(減△)	備考
事務費	60,000	31,680	△28,320	日常事務消耗品代
会議費	50,000	19,760	△30,240	会費、食費代
通信費	100,000	82,480	△17,520	印刷物郵送ほか
印刷費	400,000	387,160	△12,840	機関誌No.4 330,000(繰越支出) ニュースその他57,160円
例会費	40,000	28,550	△11,450	謝礼、会場費
大会費	200,000	108,860	△91,140	招待費、会費費 ※大会会場費は全国レク大会との関連で無料となる。
総会費	150,000	145,700	△4,300	会費費謝礼など
支部助成金	30,000	60,000	30,000	九州支部、近畿支部各30,000
研究調査費	100,000	50,000	△50,000	「レクリエーション関係指導者養成調査グループ」へ
雑費	7,336	20,250	12,914	昭和47年度学会大会会場費予約金未払分の精算
予備費	30,000	0	△30,000	
繰越金	30,000	22,914	2,2914	
計	1,167,336	957,354	△209,982	

昭和49年度事業計画

◎ 研究調査活動
(1) 第4回学会大会の開催(各研究発表、課題研究発表、シンポジウムなど)
- 10月31日
- 学会大会と併せて行う

(2) 昭和49年度学会総会
- 11月に予定

(3) 定例研究会活動
- ……年に5回を予定

(4) 研究・調査活動

◎ 広報活動
(1) 機関誌「レクリエーション研究」No.5の発行
(2) 学会ニュース(第11号～第14号)の発行

◎ 組織の拡充

月	内 容	近畿支部	九州支部
4月			
5月	定例研究会 学会ニュース		
6月			
7月	定例研究会(近畿支部会との合同)	(合同研究会)	
8月			
9月		研究会	
10月	第4回学会大会(唐津市)	(学会)	(学会)
11月			
12月	定例研究会		
1月	定例研究会		
2月		<機関誌No.5>学会ニュース	
3月	定例研究会	研究会、総会	

☆ 機関誌「レクリエーション研究」第4号をお届けいたしました。遅くなりましたが5月中には出来上がる予定ですので出来次第お送りいたします。なお、第5号の原稿を募集いたしますので、奮ってご投稿下さい。投稿規定はレク研究の巻末をごらん下さい。

昭和49年度予算案

<収入の部>

項目	予算額	内容
前年度繰越金	22,914	
入会金	50,000	50名分
会費	800,000	400人×2,000円
大会参加費	120,000	120名分 (120人×1,000円)
雑収入	50,000	広告等
	1,042,914	

<支出の部>

項目	予算額	内容
事務費	300,000	日常事務、消耗品代
会議費	250,000	会場費、食費代
通信費	100,000	印刷物送達 送料
印刷費	400,000	機関誌 ニュース
例会費	400,000	会場費 謝礼
大会費	200,000	吊看板 会場費
雑会費	50,000	謝礼など
支那助成金	60,000	近畿、九州支部
研究調査費	100,000	
雑費	7,914	
予備費	30,000	
	1,042,914	

支部ニュース

☆ 近畿支部の役員が下記のとおり改選されました。
 ◎印は本部理事、△印は本部副会長
 名誉会長 佐藤 信一 (大阪成蹊女短大)
 会長 △山口 彰 (同志社大)
 副会長 岡部 吉治 (神戸女子大)
 馬場 太郎 (宝珠学院)
 小川 寿一 (大阪成蹊女短大)
 ◎青木 泰三 (大阪府立大)
 ◎西山 隆次 (大阪産大)
 理事長 ◎日比野朝郎 (京都府立大)
 理事
 (大阪) 斯波 昭宣 池田 勝
 杉本 正実 吉田 博一郎
 赤塚 勲 酒井 哲雄
 寺岡 一郎
 (京都) 仲村 孝 松本 龍雄
 河崎 健次 栗 芳江
 (奈良) 高橋 義夫 丹羽 昭

(和歌山) 森 幹雄 松本 一男
 (滋賀) 森川 一枝 北川 崇忠
 (兵庫) 飯田 泰子 野口 徹
 足立 克巳 戸田 久一
 監事 松野 生 松田 裕
 ※事務局 同志社大学保健体育研究室
 〒602 京都市上京区今出川通烏丸東入
 TEL (075) 211-2311 (内線 278)

1月定例研究会より

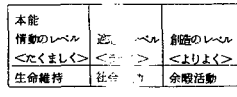
セラピューティック・レクリエーションはどうかあるべきか。

話題提供者 岡庭 武 (一橋大学助教授、医学博士)
 中村典男 (跡見学園女子大学教授)
 司会 最所進大 (国立武蔵療養所厚生技官)

恒例の、レクリエーション療法に関する研究会は、今回はその方向性を問う意味で、標題のテーマで、1月25日渋谷の全国研人会館で行なわれました。

会は、精神病院等の実例から中村氏が総論的な面を、岡庭氏が各論的な面をそれぞれ受けた。中村氏は、レクの本質を問う意味も含め、これまでのレクが how to ということばかり関心があって、why という問いかけが極めて少なかったことを指摘し、レクリエーションのもつイメージも、「遊び」という言葉の中に、より積極的なものがあることを強調された。つまり、レクとは生活に密着したものでなければならないということであり、世の中で楽しんでいることを、そのまゝ病院で行ってもそれ決して楽しいものではない、患者は隔離されているが、患者のレクにはならないという指摘でした。

そこで、氏の考えで「生活の中における遊び」について、次のような段階が示された。



そして、患者の自己決定すること、ゆとりある環境を決定すること、そ

こに、セラピューティックといえるものが存在するのではなかろうかと答へられた。

これを受けて岡庭氏は、広義のレクを、セラピとしてどう生かしてゆくか、という点を語を重められ、心理学的、社会的解釈の必要性を説かれた。しかし現在までのところ、レクは概念と実践化の不完全さが困難となり、特に慢性患者に対するものがより困難であることも指摘された。しかしながら、レクのもつ補償機能を十分に活用するための①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、㊻、㊼、㊽、㊾、㊿、

このセラピストの養成問題については、疾病医学から人間医学へ、疾病看護から人間看護へ、また精神科の関連領域との連携等が是非とも必要であることが強調された。

最後に、recreation-therapy は、最善の手段によって、患者の非現実的野心にアプローチする広義の心理療法というべきであろう、という語で締めくくられた。

学会ニュース No. 12

February 1975

日本レクリエーション学会

＝本号の内容＝

- 第4回学会大会報告
- 第4回学会理事會報告 (第5回学会大会開催決定)
- 論文紹介
- おおがわい、おしらせ

【第4回学会大会報告】

第4回学会大会は、昨年10月31日、唐津市立文化会館で開催しました。当日は前日の国鉄ストライキの影響で発表を取りやめた方も多かったが、参加者は百数十名を数え、盛況のうちに終ることができました。数ヶ月前からこの大会の準備に当たった九州レクリエーション学会を中心とする方々のご苦労に対し、紙面を借りましてお礼申し上げます。

研究発表は17題で特に新しい領域からのものはなかったと言えますが、前回の第3回大会に比し、キャンプ、ゲーム等に関するものが減り、原理的なものや、社会的なレベルでのレジャー・レクに関する調査研究が増えた感があります。

また今回の講演は、九州大学の鈴木氏に「レジャーの将来性について」というテーマでお願いしました。この内容の一部は、体育科教育2月号の「スポーツと面白さ」というお話の中にも触れておられますのでご覧下さい。

◎総会について：本大会から、総会を学会大

会と一緒に持つことになりました。川村九州学会支部会長の挨拶に始まり、三郎副会長の講話で進められました。すでに前号＝本号でお知らせしております、昭和48年度事業、決算報告、昭和49年度事業計画並びに予算案が審議され、了承されました。なお来年度から、総会時の事業、決算報告では時期がずれるため、単年度で報告を伺うような方法を取ることと考えておりますので、ご協力をお願い致します。

また、学会大会の開催手続として、事前に発表プログラムを送付すべきであるという意見も出されました。

【第4回理事會報告】

1月に開かれた理事會で、来年度学会大会の開催地と期日が決定しました。

＝第5回学会大会は昭和50年10月31日(金)徳島市で開催予定＝

今のごとく徳島市には学会員がおまじりなので関西地方の方々を中心に招集の予定です。レク学会の総会等、積極的にお願い致します。

＝論文紹介＝

レクリエーション研究自体が学際的であるといえればそれまでですが、最近では各領域にまたがる研究が目立って増えてまいりました。本号では、大阪府立大学の杉本正実氏他3名による研究を、遠隔誌第35巻第4号(1972年3月)から抜粋でご紹介します。

広域観光レクリエーション計画に関する研究

近畿圏の人的資源のポテンシャルの分析

はじめに

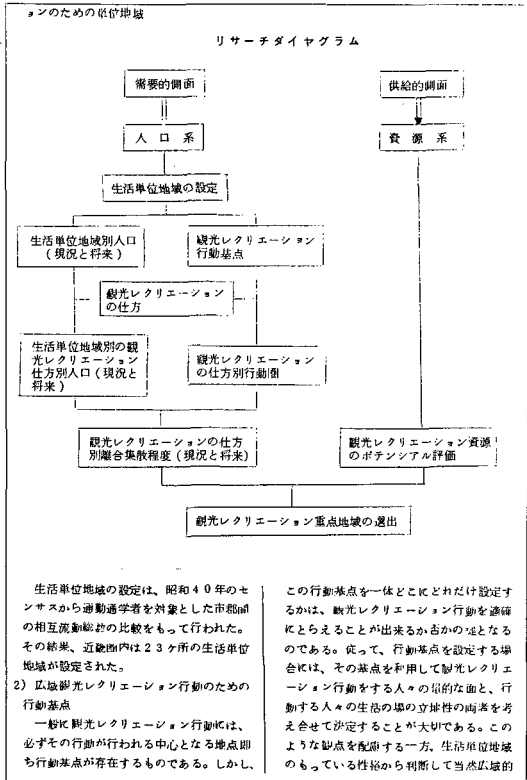
ここ数年の社会構造の変化に伴い観光レクリエーション活動は個別的にも動的にもその形を徐々に変えてきてきており、これと相まって各地に観光開発アームを生起せしめている。しかし、ここで注意しなければならないことは、何の計画的なサポートもなしにその場かぎりの無秩序な観光開発に至る所で見られるという弊害である。従って、これらの観光レクリエーション活動に対応した開発計画を樹立するためには、その対象地域のもっている全ゆる背景を認識した上で、地域全体を有機的に関連づけるような計画的な方法論を導くことが大切である。

このような観点から本研究では、近畿圏という広大な地域を対象に一般に観光レクリエーションが支えられていると考えられる人々の質的によるポテンシャルと資源性によるポテンシャルの分析を、計画的にしか必要と供給の両側面の関係を一かに追求するということにある。つまり、需要の側面からの分析は、両内居住者による流動性の主眼が置かれ、そういった人々が内居の一団のあたりに離合集散するといったポテンシャルを把握し得る(昭和60年)の臨時点から探ることにある。一方、供給の側面からの分析は、とりもなおさず資源的の分析であり、所謂内に存在している観光レクリエーション行動を誘発させる資源が具備しているポテンシャルを探ることにある。

以上の両側面からの計画的な支持される分析を通してはじめて重点地域への足掛りが見い出されるのである。

◎分析のための前提条件

1) 広域的な視野からみた観光レクリエー



を異にするのである。

おわりに
本研究の目的は、近畿圏を対象にこれからの観光レクリエーションのあり方について検討を要し、その結果を所与地域のもっている特殊性に還元しながら広域的な視点から観光レクリエーション計画の手段を確立することにある。この目的のために本研究では、一体どの程度の観光レクリエーション人口が適合集積するかの需要側の側面からのポテンシャルティとして各拠点に把握するための方法論を検討する一方、観光レクリエーション資源的のみにて、どの地域がこれからの観光レクリエーションに対応できるだけの量を備えた地域であるかを供給側の側面からのポテンシャルティとして把握し、これら両側面からの結果をオーバラップして観光レクリエーションの観点から重点的に整備されなければならない地域の選出が試みられた。今後、細部の諸問題について検討を要する一方、近畿圏外からの人々の流動によるポテンシャルティを計画的に呼び、より適正な広域観光レクリエーション計画のための手法を開発したいと考えている。

おねがい・おしらせ
◎学会ニュース等、会員の皆様にはニュースの流れが少ないというお取りを致すかも知れませんが、学会財政も印刷費等の高値でなかなかサービスができない現状です。今年度会費未納者も二百数十名おりますので、サービスと財政難が悪循環している現状です。今回も僅儀の用申を入れておりますので宜しくお願ひ致します。
◎第2回~4回学会大会研究発表抄録(一部300円)と、レクリエーション研究2号~4号(各500円)の在庫がございましてご入用の方は事務所までご一筆下さい。
◎住所の変更される方は事務局宛必ずご連絡下さい。現在住所のわからない方はご方々です。叩ておられる方はお知らせ下さい(加田昭裕、松本祥子、馬場太田、神野隆、秋本晃、中山道夫、前水元子、芦原泰吉、杉本雄、小野郷治の各氏です)また学生会員の方も必ずされた場合はご返答をお願い致します。
◎レクリエーション研究5号は、3~4月出版の予定です。

学会 ニュース 16 13

May 1975

日本レクリエーション学会

◆本号の内容◆

- 5月理事会より
- 第5回日本レクリエーション学会大会要項(案)
- (49年度事業報告、決算報告)
- (50年度事業計画、予算案)
- 昭和49年度学会活動関係発表論文一覧

◆理事会報告◆

◎49年度事業を振り返って
ニュース等による情報提供を中心としたサービスが少なかったという反省がある一方、会費の納入状況が極めて悪く、活動も自ら制限されるという悪循環を断ち切ることができなかった。この辺の教訓を生かし、50年度事業を行う。

◎49年度決算について
決算報告(監査済み)からもわかるように、会費納入者は単純計算で291名である。しかし、この中には賛助会費3名分や、前年度または前々年度に納めて納入した人もいるので、49年度の会費納入者は250名(現会員数446名一住所不明者20名)弱である。このため、今年度から当年度会費未納者には「レク研究」の送付は行わない。

◎ 会費値上げについて
昨今の印刷費の高騰や、郵便料金の値上げも予定されている関係上、51年度(来年度)から会費を値上げする。

◎ 第5回学会大会について
次ページ要項案を柱に行う。なお、総会においては、役員改選も併せ行う。

アジア太平洋地域保健体育レクリエーション会議開催のお知らせ
8月11日~15日に台北において開催の会議が開催されます。参加ご希望の方は、事務局までご連絡下さい。

第5回日本レクリエーション学会大会要項(案)

<日時> 昭和50年11月21日 午前11時~午後5時(予定)

<会場> 徳島市

<研究発表> ○発表資格 会費を7月末日までに納入した正会員
○発表時間 一題15分(質疑応答3分を含む)

<発表申し込み> ○申し込み締切り 7月末日
○原稿提出締切り 9月末日

<大会参加費> ○会員、一般 1,000円(抄録代を含む)
○学生 (500円)
○抄録(頒価一部 400円)

◎ 特別講演(予定)
◎大会事務局: 東海大学(予定)

昭和49年度事業報告

※研究調査活動 2月27日
1. 第4回学会大会の開催 「レクリエーションと環境問題」
昭和49年10月31日 宇野 佐 於岸記念会館
於 唐津市文化会館 3月26日 卒業論文発表会
発表演題数 17 発表演題数3
○特別講演 鈴木 広 「レジャーの将来性について」

2. 昭和49年度総会 広報活動
学会発表後(場所・日程同上) 1. 広報誌 5号発行<予定>
第5回学会大会の日程決定 第11号(5月) 第12号(2月)

3. 定例研究会活動 2. 近畿支部
5月 9日 7月26日 合同研究会
「情報システムの国際的動向」 3月15日 研究会、総会
池田 勝 於岸記念会館
7月26日 (近畿、東京、合同会) 2. 九州支部
於同志社大学 7月5日 研究会
「広域スケールにおけるレクリエーション計画について」 杉本 正美 支部学会大会、総会
「レクリエーション概念への接近」 3月 研究会
付 件 要

昭和49年度決算報告

<収入の部>

項目	予算額	決算額	増減額	
前年度繰越金	22,914	22,914	0	
入会金	50,000	32,000	△18,000	1,000×32
会費	80,000	582,000	△218,000	(徴収会費40,000) 291(人分)×2,000
大会参加費	120,000	100,000	△20,000	
雑収入	50,000	52,938	2,938	利息、レク研究販売収入
補助金	0	50,000	50,000	日本レクリエーション協会
	1,042,914	839,852	△203,062	

<支出の部>

項目	予算額	決算額	増減額	
事務費	30,000	7,050	△22,950	日常事務消耗品代
会議費	25,000	4,020	19,020	会場費、食事代
通信費	100,000	89,320	△10,680	印刷物郵送費
印刷費	400,000	401,400	1,400	ニュース等、レク研究5号
例会費	400,000	16,000	△24,000	書札
大会費	200,000	216,270	16,270	九州支部へ
総会費	50,000	50,000	0	#
支部助成金	60,000	60,000	0	九州近畿、各30,000
研究調査費	100,000	0	△100,000	
雑費	7,914	6,851	△1,063	レク協会会費、手数料
予備金	30,000	0	△30,000	
	1,042,914	890,911	△152,003	

※ 収入と支出の決算額の差 51,059円が不足金

昭和50年度事業計画

◎ 研究調査活動

- (1) 第5回学会大会の開催
- (2) 昭和50年度総会の開催
- (3) 定例研究会活動
- (4) 研究調査活動

◎ 広報活動

- (1) 機関誌「レクリエーション研究6号」の発行
- (2) 学会ニュース第13号～第16号の発行

◎ 組織の拡充

- (1) 会員の獲得
- (2) 支部との交流、新支部結成のための活動

月	内 容	近畿支部	九州支部
4月			
5月	定例研究会 <学会ニュース>		
6月			研究会
7月	定例研究会(近畿との合同会) (合同研究会)		
8月	<学会ニュース>		
9月	定例研究会		
10月	<学会ニュース>		
11月	第5回学会大会 (学会大会)		九州支部学会総会
12月	<学会ニュース>	研究会	
1月	定例研究会		
2月	機関誌の発行		研究会
3月	定例研究会	総会、研究会	

- ☆ 機関誌「レクリエーション研究」第5号のお届けが遅れておりますが、印刷中ですのでもう少しお持ち下さい。なお、第6号の原稿も募集いたします。
- ☆ 先般雑誌「レクリエーション」にて、第5回学会大会の開催日を10月30日とお知らせ致しましたが、地元福岡市との調整がつかず11月21日に変更致しましたのでお詫び申し上げます。

昭和50年度予算案

<収入の部>

項目	予算額	内容	項目	予算額	内容
赤字繰越金	△51,059		事務費	15,000	消耗品代
入会金	50,000	50名分	会議費	30,000	会場費、食事代
会費	700,000	350名分	通信費	150,000	印刷物郵送費
大会参加費	100,000	100名分	印刷費	450,000	機関誌、ニュース
雑収入	250,000	広告等	総会費	50,000	書札など
			大会費	150,000	会場費、看板
			支部助成金	60,000	九州、近畿支部
			事務局運営費	100,000	
			雑費	3,941	
			予備金	10,000	
	1,048,941			1,048,941	

昭和49年度学会活動関係発表論文

研究者	所属	研究テーマ	発表年月日
秋吉嘉郎	福岡教育大学	老人の健康生活とスポーツ	49. 10. 31
藤波邦夫	東京教育大学	日本人のスポーツ規範	第 四 回 学 会 大 会
藤田隆夫	順天堂大学	スポーツクラブの管理運営に関する試論	第 四 回 学 会 大 会
宮下桂弘	順天堂大学	スポーツクラブの管理運営に関する試論	第 四 回 学 会 大 会
宮下桂弘	順天堂大学	キャンプの教育的機能に関する研究	第 四 回 学 会 大 会
井上下雄治	順天堂大学	キャンプの教育的機能に関する研究	第 四 回 学 会 大 会
川向紗英	東海大学	レクリエーションリーダー研学会における態度の変化について	第 四 回 学 会 大 会
野間口英和	東海大学	レクリエーションリーダー研学会における態度の変化について	第 四 回 学 会 大 会
高木文彦	福岡大学	レクリエーション指導効果に関する研究(その1)	第 四 回 学 会 大 会
外堀達也	九州大学	レクリエーション指導効果に関する研究(その1)	第 四 回 学 会 大 会
久嶋北木	福岡大学	レクリエーション指導効果に関する研究(その1)	第 四 回 学 会 大 会
金田正志	九州大学	レクリエーション指導効果に関する研究(その1)	第 四 回 学 会 大 会
日比野期郎	京都府立大学	大学生の余暇活動調査	第 四 回 学 会 大 会
山本久乃	専修大学	大学生のレクリエーションの経験と意識について	第 四 回 学 会 大 会
長島博	専修大学	大学生のレクリエーションの経験と意識について	第 四 回 学 会 大 会
寺岡一郎	(<small>前>大阪体育協会</small>)	スポーツ教員にみられる女性の余暇観(その1)	第 四 回 学 会 大 会

研究者	所属	研究テーマ	発表年月日
青木孝三	大阪府立大学	サイクリングの社会的考察	49. 10. 31
清和祥子	中央大学	ポーランドにおけるPhysical recreationの推移	第 四 回 学 会 大 会
野々宮徹	日本レクリエーション協会	楽しさに関する一考察	第 四 回 学 会 大 会
仲村 要	同志社大学	最近のレジャー、レクリエーション観をめぐめる問題点について	第 四 回 学 会 大 会
江崎美由紀	東京大学	フィジカル・レクリエーション成立に影響を与える諸要因の研究	第 四 回 学 会 大 会
水谷宏	文部省	ふるさとに関する研究	第 四 回 学 会 大 会
池田勝美	大阪体育大学	生活時間調査による「レジャー」の測定	第 四 回 学 会 大 会
田中明美	大正大学	新生活の健康増進について	第 四 回 学 会 大 会
佐藤一夫	福岡県立福岡盲学校	視力障害児のあそびの実態とその意識に関する研究	第 四 回 学 会 大 会
梅田次郎	福岡県立直方養護学校	精神障害児のレクリエーションセラピーに関する一考察	第 四 回 学 会 大 会
杉本正美	大阪府立大学	広域スケールにおけるレクリエーション計画について	49. 7. 26
仲村 要	同志社大学	レクリエーション概念への接近	49. 7. 26
近藤公夫	奈良女子大学	レクリエーションマスタープランの事例研究	49. 12. 8
張野紀三郎	同志社女子大	古代日本における「あそび」について	49. 12. 8
日比野期郎	京都府立大学	大学生の余暇活動	49. 12. 8
林田裕子	奈良女子大学	余暇 - 現代の意義 -	50. 3. 15
牛津洋子		現代における野外教育の意味	50. 3. 15
松本清	大阪体育大学	学校教育における野外活動の実態分析	50. 3. 15
正木輝美		定時制高校におけるスポーツ活動の実態分析	50. 3. 15
中本智治		健康増進の余暇生活の特性に関する調査研究	50. 3. 15
坂井 尚		クラブ活動の社会体育移行措置に対する教師の意識について	50. 3. 15
佐藤 昭	九州リハビリテーション大	障害者のレクリエーション	49. 9. 21
末吉光彦	大阪府立大学	リハビリテーションとしてのダンス指導実施	49. 9. 21
福島和郎		報告	49. 9. 21
秋吉嘉郎	福岡教育大学	報告	49. 9. 21
森島義也	東海大学	人間関係の手段としての遊び	50. 3. 26
市川路子		現代人の余暇活動に関する一考察	50. 3. 26
設野邦雄	東京府立大学	日本人のスポーツのロカル自について	50. 3. 26

学会ニュース

№. 14

JUN 1976

日本レクリエーション学会

＝本号の内容＝

- 昭和51年度総会報告
 - 1) 昭和50年度事業報告
 - 2) 昭和50年度決算報告
 - 3) 51年度事業計画
 - 4) 昭和51年度予算
 - 5) 新役員決定
 - 6) 学会会則改訂
 - 7) 第6回学会大会について
- 支部ニュース (近畿・九州)
- 事務局より

◎ 昭和51年度総会報告

1 昭和50年度事業報告

1) 定例研究会の開催

順	氏名	テーマ	期日	場所
1	松原洋三	コミュニティ・レクリエーションの推進調査について	SS0-5-27	岸記念体育館502会議室
2	秦芳江 永吉宏英	社会改良運動と近代レクリエーション 幼児・児童の生活におけるスイミングスクールの機能と役割	SS0-7-26	京都府立大学図書館
3	池間博之 江橋慎四郎	ヨーロッパにおけるフオクダグスの事情 TCHPERアジア会議の報告	SS0-10-3	岸記念体育館401会議室
4	各大学生による	若者のレクリエーション研究の意識	SS1-3-26	#

2) 第5回学会大会の開催

- <期日> 昭和50年11月21日
- <会場> 奈良県郡土文化会館
- <研究発表題数> 20題
- 3) 学会ニュースの刊行
第12～第13
- 4) 学会機関誌「レクリエーション研究」発刊
第6号

3 昭和51年度事業計画

1) 研究調査活動

- (1) 第6回学会大会の開催……秋田県10月
- (2) 昭和51年度総会の開催
- (3) 定例研究会活動……5回を予定
- (4) 研究調査活動

2) 広報活動

- (1) 機関誌「レクリエーション研究」の6,7号の発刊
- (2) 学会ニュース第14号～第16号の発刊
- (3) 月刊「レクリエーション」の学会日より投稿

3) 組織の拡充

(1) 会員の獲得

	本部	近畿支部	九州支部
4月			総会
5月	総会・定例研究会(東京)		
6月	学会会員名簿作成		
7月	定例研究会(東京)	東京・近畿支部 合同研究会	研究会
8月			
9月	定例研究会(東京)		支部学会
10月	第6回学会大会(秋田県)	学会大会	
11月	学会ニュース		
12月			
1月	定例研究会(東京)	支部研究会	研究会
2月	機関誌「レクリエーション」第7号発刊、学会ニュース		
3月	定例研究会(東京) 若者のレク研究の意識<各大学の卒論から>	卒論発表会 総会	

<事務局より>

○機関誌「レクリエーション研究」6号の発刊について
機関誌「レクリエーション研究」6号の発刊が遅くなり、会員の皆様には大変御迷惑をおかけしておりますが、近日中には出来る予定ですので、出来る上り次第お送りいたします。

2 昭和50年度決算報告

(収入の部)

(51年3月31日現在)

項目	予算額	決算額	増減額	内容
赤字繰越金	△51059	△51059	0	
入会金	50000	44000	△6000	1,000×44人
会費	70000	555000	△145000	一般2000円×275人学生1000円×5人
大会参加費	100000	97000	△3000	1000円×97人
助成金	0	50000	50000	
雑収入	250000	37079	△212921	機関誌発表抄録……売上戸
計	1048941	732020	△316921	

(支出の部)

項目	予算額	決算額	増減額	内容
事務費	15000	19060	4060	日常事務消耗品代
会議費	30000	52570	22570	会場費、食事代
通信費	150000	79515	△70485	総会通知、例会通知、機関誌郵送
印刷費	450000	102050	△347950	機関誌、ニュース……
例会費	30000	5000	△25000	謝礼
大会費	150000	131745	△18255	大会案内通知、抄録印刷と郵送費
総会費	50000	0	△50000	
支部助成金	60000	60000	0	九州支部、近畿支部
事務局運営費	100000	8860	△91140	交通費
雑費	3941	5000	1059	
予備費	10000	0	△10000	
計	1048941	463800	△585141	

※ 収入と支出の決算額の差 268,220円が来年度繰越金

(注) △印は、予算額に対して決算額が少ないもの

<事務局より>

○会費納入について

総会報告にありますように、51年度より会費が値上りしましたので、よろしく願います。

51年度会費……3000円

50年度以下は従来通り 2,000円

※会費納入は、同封の振替用紙を御利用ください。

4 昭和51年度予算

<収入の部>

項目	予算額	内容
前年度繰越金	268,220	
入会金	50,000	
会費	1,050,000	350名分(300名+50名)
大会参加費	120,000	120名×1,000円
雑収入	55,200	
計	2,043,420	

<支出の部>

項目	予算額	内容
事務費	20,000	日常事務消耗品代
会議費	80,000	会場費、食事代
通信費	400,000	総会通知、例会通知、機関誌郵送
印刷費	1,050,000	機関誌、ニュース、名簿作成……
例会費	40,000	謝礼
大会費	160,000	大会案内通知、抄録印刷と郵送費
総会費	50,000	謝礼など
支部助成金	80,000	九州支部、近畿支部
研究助成金	100,000	
事務局運営費	30,000	交通費……
雑費	10,000	
予備費	20,220	
計	2,040,220	

注1 印刷費が多いのは機関誌6号が本年度に出せないため、来年度に計上してある。

<事務局より>

○機関誌「レクリエーション研究」7号の原稿の募集について

今年度中(来年2月)に、7号を発刊する予定であります。つきましては、今から準備を進めて、奮ってご投稿くださいますようお願いいたします。投稿規定はレクリエーション研究の巻末をごらん下さい。

5 新役員決定

Table listing new board members and officers. Columns include position (e.g., 名誉会長, 会長), name, and affiliation (e.g., 三笠宮様仁親王殿下, 前川肇雄 (中京大学)).

<事務局より>

○会員名簿作成について

事務局では、只今新たに「会員名簿」を作成しております。近日中には出来上がる予定ですので、出来次第お送りします。

6 日本レクリエーション学会則改訂

第 3 条 本会の事務局は、東海大学体育学部社会体育学科レクリエーション研究室内に置く。

第 19 条 会員の会費は次の通りとする。

- 1. 入会金 1,000円(3米ドル)
2. 正会員 年額 3,000円
3. 学生会員 # 1,000円
4. 特別会員 # 10米ドル
5. 賛助会員 # 2,000円以上

付則追加

3. 本会則は、昭和51年5月1日に一部改訂する。

7 第6回日本レクリエーション学会大会について

開催は、日本レクリエーション協会の全国大会の行なわれる秋田県に決まっています。日時については全国大会の実施要領がはつきりしていませんので、未定ですが、10月3日の公算が強いようです。

○支部ニュース

<近畿支部>

●役員が下記のとおり改選されました。

<◎印は本部副会長、△印は本部理事、△は事務局担当>

- 会長 ○近藤 美男 (奈良教育大学)
副会長 ○近藤 公次 (奈良女子大学)
理事 ○丹羽 治昭 (奈良女子大学)
(大阪) 赤塚 照 (大阪成蹊女子短大)
○青木 泰三 (大阪府立大学)
○池田 勝 (大阪体育大学)
酒井 育雄 (大阪YMCA)
杉本 正実 (大阪府立大学)
寺岡 一郎 (大阪—スミス学院)
西山 勲次 (大阪産業大学)
(京都) 瀬口 彰 (同志社大学)
河嶋 健次 (京都市役所)
○中村 要 (同志社大学)
日比野翔郎 (京都府立大学)
秦 芳江 (同志社女子大学)
(奈良) 江刺 正吾 (奈良女子大学)
△小田切 一 (奈良女子大学)
高橋 健夫 (奈良女子工業)
(和歌山) 松本 一夫 (住友金属工業)
森 幹雄 (保養所)
(滋賀) 北川 宗忠 (日本ホームステル協会)
原川 一枝 (滋賀大学)
(兵庫) 足立 克己 (神戸新聞)
飯田 泰子 (兵庫女子短大)
戸田 久一 (兵庫県ユースホステル)
野口 徹 (三菱電機) 協会

夏目 皓 (神戸市立真近中学校)
監事 小川 寿一 (校)
馬場 太郎
☆事務局移転のお知らせ
昭和51〜52年度の2年間、支部会事務局が下記に転移しました。
奈良女子大学文部体育学研究室
〒630 奈良市北黒屋西町
TEL.0742 23-1131 内293or283
☆おたのしみ、支部会活動の活性化のため、積極的なご意見などお聞かせください。
<九州支部>
☆役員が下記のとおり決定しましたので、お知らせします。
本部副会長 川村 英男 (福岡大学)
本部 理事 秋吉 嘉範 (福岡教育大学)
(支部事務局担当)
本部 理事 松延 陽一 (福岡大学)
☆事務局連絡先
福岡教育大学
福岡県宗像郡宗像町赤間729
TEL.094 03-2-2381
<事務局より>
○住所変更の連絡について
最近、事務局からの郵送物が返送される部数が多くなっております。つきましては、住所の変更があるときは、必ず事務局まで連絡くださるようお願いいたします。
※学生会事務局
〒259 12 神奈川県平塚市北金目117
東海大学体育学部社会体育学科 レクリエーション研究室 TEL.0463-58-1211ex465

学会ニュース No. 15

NOV 1976

日本レクリエーション学会

三本号の内容三

- 第6回学会大会報告 ○新入会員紹介
○第1回大会から第6回大会までの発表演題と発表者所属一覧

* 第6回学会大会報告

第6回学会大会は、10月3日秋田大学教育学部で開催され、盛会のうちに終ることができました。

この大会を開催するにあたり、大会準備にご尽力くださった、秋田大学の工藤、和田両先生をはじめとする多くの関係者の方のご苦勞に対し、紙面を借りましてお礼申し上げます。

研究発表は17題(演題は別表参照)、と特別発表として、秋田大学教育学部教授の工藤英三先生に「秋田の風土とレクリエーション」を、お願いしました。

* 新入会員紹介 (昭和51年2月26日~昭和51年11月5日現在)

Table of new members with columns: 氏名, 所属, 住所. Includes names like 広井 宗幸, 小林 忠幸, 木村 彰国.

Table of members with columns: 氏名, 所属, 住所. Includes names like 中島 秀夫, 今牧 隆樹, 岩坪 宏.

* 発表者所属一覧

Table showing publication statistics with columns: 第何回, 発表者数, 発表題数, etc.

第1回日本レクリエーション学会大会(昭和46年)

(於 北九州市戸畑文化ホール 11/4)

No	発表者	所 属	発表テーマ	共同研究者	
				氏 名	所 属
1	高橋 健大	大阪大学	Stanley Parkerの「Work-Leisure」論に関する一考察	播本 定彦	大阪大学
2	栗口 彰	同志社大学	ニューディール政策とレクリエーション	仲村 要	同志社大学
3	青木 泰三	大阪府立大学	遊びの考察		
4	高橋 和敏	東海大学	ゲーム指導法の実験的考察-GSRによる分析を中心に	今村 義正 大北 文生 野間口英敏	東海大学
5	服部 洋子	成蹊大学	わが国に於ける地域フォークダンス団体及び指導者の意識と活動	武井 正子 神山 須真	順天堂大学
6	川口・文子	日本青年館	青年団におけるレクリエーション活動の現状と問題点		
7	斉藤 定雄	順天堂大学	地域社会のレクリエーションに対する大学の寄与		
8	野間口英敏	東海大学	職場におけるレクリエーション実施の影響に関する研究	塩谷 宗雄 高橋 和敏 今村 義正	東海大学
9	音成彦治郎	北海道青年の家	社会教育施設におけるレクリエーション指導について -北九州市立北海道青年の家における現状と課題-		
10	研 義弘	福岡教育大学	わが国における体育・スポーツ施設利用の社会学的分析	染野 豊 島崎 仁 岡 琢磨 梅田晴次郎 多々納秀雄 稲田 俊治	文 部 省 鳥 取 大 学 東京教育大学
11	芥藤 伸次	明治学院短大	キャンプにおける野外教育のプログラムについて		
12	鈴木 孝雄	麻布獣医科大学	キャンプ生活における実証的研究* -富士山麓・山中湖畔のキャンプ場を中心にして-		

No	発表者	所 属	発表テーマ	共同研究者	
				氏 名	所 属
13	宮下 桂治	順天堂大学	キャンプの教育的機能に関する研究 -社会的感受性訓練としての可能性について-	山本 武彦 北森 義明 井上 忠夫	順天堂大学
14	井上 忠夫	順天堂大学	キャンプの教育的機能に関する研究 -社会的感受性訓練としてのオリエンテーションの効果について-	山本 武彦 北森 義明 宮下 桂治	順天堂大学
15	吉賀 正宏	八幡厚生病院	生活指導としての病院レクリエーションについて	木吉 光彦 柴 俊彦	八幡厚生病院
16	武井 正子	順天堂大学	精神病院におけるレクリエーション療法に関する研究	河野 信弘 須田 桂治 宮下 桂治 井上 忠夫 神山 須真 矢島 幸子 鈴木 定	順天堂大学 順天堂越谷病院
17	浅井 正昭	日本大学	精神病院におけるレクリエーション療法の新しい試み(その1) -レクリエーション療法の理論的背景	浅井 利勇 武内 三二 浪越 信弘 浅井 義弘 浅井 邦彦	浅井 病院 順天堂大学 日本大学 東京医科大学 歯科大学
18	浪越 信夫	順天堂大学	精神病院におけるレクリエーション療法の新しい試み(その2) -個人の体力・運動能力およびレク要求に応じたレクリエーション療法の実際	浅井 利勇 武内 三二 浅井 正昭 浅井 義弘 浅井 邦彦	浅井 病院 日本大学 東京医科大学 歯科大学
19	武内 三二	浅井 病院	精神病院におけるレクリエーション療法の新しい試み(その3) -レクリエーションに対する態度調査	浅井 利勇 浅井 正昭 浅井 義弘 浪越 信夫 浅井 邦彦	浅井 病院 日本大学 順天堂大学 東京医科大学 歯科大学
20	学会委託研究委員会		東京都野外スポーツ・レクリエーション施設計画のための調査報告(報告)		

第2回日本レクリエーション学会大会(昭和47年)

(於 日本都市センター 11/10)

No	発表者	所 属	発表テーマ	共同研究者	
				氏 名	所 属
1	青木 泰三	大阪府立大学	遊びの考察(その2)		
2	池田 勝	大阪体育大学	レクリエーション理論の妥当性に関する研究		
3	藤田 碩敏	日本レクリエーション協会	レクリエーションの意味論的検討		
4	小野 邦昭	東京教育大学	スポーツとヒューリタニズム		
5	片岡 暎夫	東京教育大学	スポーツ意識の社会的背景		
6	山市 孟	東京都立第一商業高校	個人の属性からみた青少年のスポーツ意識の特性		
7	川口 貢	横浜国立大学	スポーツ意識とクラブ活動の問題		
8	荻町 正徳	東京都立第一商業高校	スポーツ意識とスポーツ種目の関連		
9	浅田 隆夫	東京教育大学	統括・スポーツ教育試論(中・高校生のスポーツ意識調査の結果)		
10	金崎 良三	九州大学	レジャー研究におけるM・Dプランの位置		
11	中村 空	同志社大学	レジャー観に関する調査研究	関口 彰	同志社大学
12	森部 宏英	東京大学	地域におけるスポーツ普及に関する一考察	江崎慎四郎 染野 豊 文 部 省	東京大学
13	大森 雅子	東京女子体育大学	主婦のレクリエーション活動の動向について	森部 雅子 松浦三代子	東京女子体育大学
14	佐藤 幸子	仙台大学	主婦の自由時間利用について		
15	佐藤 一夫	県立福島盲学校	福島市内の職場レクリエーション・クラブの実態について	鈴木 勝彦 黒沢 勝利	福島大学 福島市教育委員会
16	鈴木 孝雄	麻布獣医科大学	主婦のスポーツクラブの現状と問題点		
17	木吉 光彦	八幡厚生病院	精神病院内におけるレクリエーション活動指導の考察		
18	武内 三二	浅井 病院	レクリエーション療法に対する新しい試み(短期間集中運動療法の効果について)	浅井 利勇 浅井 正昭 浅井 義弘 浪越 信夫	浅井 病院 日本大学 順天堂大学

No	発表者	所 属	発表テーマ	共同研究者	
				氏 名	所 属
19	山崎 友大	浅井 病院	レクリエーション療法に対する新しい試み(ダンス・セラピーを中心として)	浅井 利勇 武内 三二 浅井 正昭 浅井 義弘	浅井 病院 日本大学
20	鈴木 定	越谷谷病院	精神病院におけるレクリエーションに関する研究(その2)	河野 信弘 武井 正子 井上 忠夫 神山 須真 矢島 幸子	越谷谷病院 順天堂大学
21	井上 忠夫	順天堂大学	キャンプ・プログラムの研究 -ポテンシャル・クリーの効果について-	宮下 桂治	順天堂大学
22	宮下 桂治	順天堂大学	人間関係訓練としてのキャンプの方法論について	井上 忠夫	順天堂大学
23	斉藤 伸次	日本キャンプ協会	アメリカにおける私設組織的教育キャンプの経営に関する実態について		
24	吉永 トシ子	県立新島女子短期大学	フォークダンスの普及に関する研究-小学校におけるF・D指導について	松本 真直	県立新島女子短期大学
25	池間 博之	日本レクリエーション協会	国際交流の場におけるフォーク・ダンス・民謡についての考察		
26	秋吉 嘉範	福岡教育大学	レクリエーション指導者に関する研究(2)-職場レク・リーダーの養成状況について-		
27	川口 文子	日本青年館	パーソナリティとレクリエーション活動との相関について	染谷 洋子 小出切敷一	日本青年館 日本レクリエーション協会
28	千葉 和夫	日本レクリエーション協会	レクリエーション講習会の効果に関する研究		
29	大北 文生	東海大学	ゲーム指導法の実験的考察(M-G-SRによる分析を中心に)	高橋 和敏 今村 義正 野間口英敏 川向 妙子 鈴木 秀雄	東海大学 北里大学
30	鈴木 秀雄	北里大学	ゲームに対するイメージの比較考察-S/D法によるグループの比較-	高橋 和敏 大北 文生 野間口英敏 川向 妙子	東海大学

No.	発表者	所 属	発表 テーマ	共同研究者	
				氏 名	所 属
31	浅井 正昭	日本大学	モータリゼーションに関するナショナル・コンセンサスの形成と新しい交通公園	吉田 和夫 稲吉 博 鈴木 辰雄 横田 東	日本大学 ホンダ安全運転普及部
32	稲吉 博	ホンダ安全運転普及部	新しい交通公園とその役割	吉田 和夫 浅井 正昭 鈴木 辰雄 横田 東	日本大学 ホンダ安全運転普及部
33	鈴木 辰雄	ホンダ安全運転普及部	新しい交通公園における具体的なシステムについて	吉田 和夫 浅井 正昭 稲吉 博 横田 東	日本大学 ホンダ安全運転普及部
34	杉尾 邦江	子どもの国	新しい子供の遊び場の計画とその利用実態について		

第3回日本レクリエーション学会大会(昭和48年)

(於 水戸市・常陸銀行会館 10/27)

No.	発表者	所 属	発表 テーマ	共同研究者	
				氏 名	所 属
A 会 場					
1	山市 孟	東京都立第一商業高等学校	「スポーツ参加」における困窮条件	浅田 隆夫	東京教育大学
2	金崎 良三	九州大学	産業過疎地域におけるレクリエーションの研究(1)		
3	佐藤 一夫	奈良福島盲学校	レクリエーション集団の現状と問題点(1)集団の規約の有無による比較	鈴木 勝南	福島大学
4	佐藤 幸子	仙台大学	地域のレクリエーション講習会の需要の増大と、それが家庭に及ぼす影響について		
5	永吉 宏英	東京大学	コミュニティ・レクリエーションセンターとしてのYMCAに関する事例研究	江橋慎四郎	東京大学
6	進士五十八	東京農業大学	野外レクリエーションの適正環境に関する研究 I・II		

第4回日本レクリエーション学会大会(昭和49年)

(於 藤津市・市立文化会館)

No.	発表者	所 属	発表 テーマ	共同研究者	
				氏 名	所 属
1	秋吉 嘉範	福岡教育大学	老人の健康生活とスポーツ		
2	藤波 邦雄	東京教育大学	日本人のスポーツ規範—社会科学的アプローチ—	浅田 隆夫	東京教育大学
3	宮下 桂治	順天堂大学	スポーツクラブの管理運営に関する試論	宮下 弘子	フジスポーツクラブ
4	井上 忠雄	順天堂大学	キャンプの教育的機能に関する研究—感受性訓練の応用とその効果—	宮下 桂治	順天堂大学
5	川向 妙子	東海大学	レクリエーションリーダー研修会における態度の変化について	高橋 和敏 大北 文生 野間口英敏 鈴木 秀雄	東海大学 東海大学 東海大学 フロンティア立大学
6	外木場達郎	福岡大学	レクリエーション指導効果に関する研究(その1) —レクリエーション集団の性別構成比のちがいがよる指導効果の差異について—	金崎 良三 田中 正志 久富さよ子	九州大学 福岡大学 福岡大学
7	日比野明郎	京都府立大学	大学生の余暇活動調査		
8	山本久乃武	専修大学	大学生のレクリエーションの経験と意識について	長島 博	専修大学
9	寺岡 一郎	財大版体育協会	スポーツ教室にみられる女性の余暇観(その1)		
10	青木 泰三	大阪府立大学	サイクリングの社会的考察		
11	濱和 洋子	中央大学	ボードランドにおけるPhysical recreationの推移		
12	野々宮 徹	日本レクリエーション協会	楽しさに関する一考察		
13	仲村 要	同志社大学	最近のレジャー、レクリエーション観をめぐる問題点について	親口 彰	同志社大学
14	永吉 宏英	東京大学	フィジカル・レクリエーション設立に影響を与える諸要因の研究—統計的數量化理論Ⅲ類を用いて—	江橋慎四郎 島野 仁 桑野 豊	東京大学 文部省

No.	発表者	所 属	発表 テーマ	共同研究者	
				氏 名	所 属
7	路星 裕	大正大学	煩悶脱離善対策の実験的研究		
8	塩谷 宗雄	オタリオ州 矯正省	少年矯正教育におけるレクリエーション—カナダ・オタリオ州を例として—		
9	川口 宏	紀泉病院	精神院におけるサイクリング療法について	吉田 篤 渡辺 弘 浜田 進	紀泉病院
10	須田 勝治	順天堂大学	プレイセラピーのプログラムに関する研究	河野 信弘 武井 正子 宮下 桂治 井上 忠夫 三浦 忠雄 神山 須真	順天堂大学

B 会 場

1	長谷川 修一郎	桃山学院大学	現代レクリエーションの問題点		
2	桑 芳江	同志社女子大学	わが国キリスト教主義レクリエーション運動の歩み(その1)成瀬、松原、安部の論説について		
3	窪田 碩哉	日本レクリエーション協会	レクリエーションの意味論的検討(その2)		
4	仲村 要	同志社大学	最近のレジャー、レクリエーション観についての考察—特に京都市周辺部小企業従業員を中心して—	親口 彰	同志社大学
5	西山 勝次	大阪産業大学	新聞にみるレクリエーションの示唆		
6	松本 真吾	奈良新島女子短期大学	子供の体育遊びに関する研究(その3)—広場での遊びの問題点—		
7	山本 英敏	日本福祉大学	組織キャンプに関する一考察—一学級におけるキャンプの再検討—		
8	野沢 巖崎 玉	大学	露營キャンプについて		
9	河村 文人	山口県石城山青少年宿泊訓練所	教育的効果を高めるキャンプファイターの運営について		
10	神山 須真	順天堂大学	余暇におけるスゴロツウナへの没没づけ	武井 正子 服部 洋子	順天堂大学 放送大学
11	潮崎 節子	大阪基督教短期大学	学生の夏期休暇利用法に関する実態調査		

第5回日本レクリエーション学会大会(昭和50年)

(徳島県郡士文化会館)

No.	発表者	所 属	発表 テーマ	共同研究者	
				氏 名	所 属
1	佐藤 幸子	仙台大学	企業体における週休2日制の完全実施と厚生、スポーツ、レクリエーション施設の実態について		
2	秋吉 嘉範	福岡教育大学	家族レクリエーションについての研究—夏休み中の小学生のレクリエーション—		
3	近藤 公夫	奈良女子大学	陸上競技における中高年者運動競技能力の事例的研究		
4	石井 英行	社会福祉法人興産館	参加児童を中心としたキャンプの試み—短期キャンプによる—	大村 教子 小池 京子	社会福祉法人興産館
5	井上 忠夫	順天堂大学	キャンプの教育的機能に関する研究—システム化の問題について—	宮下 桂治	順天堂大学
6	宮下 桂治	順天堂大学	スポーツクラブの管理運営に関する試論—運動機能の評価基準設定について—	宮下 弘子	フジスポーツクラブ
7	久富さよ子	福岡大学	学生の音楽に関する嗜好調査		
8	武井 正子	順天堂大学	女性の余暇における公共体育施設の位置づけ(国立西ヶ丘競技場スポーツウナ及び購入スポーツウナ)	神山 須真	順天堂大学
9	加藤 泰樹	東京教育大学	高齢者の保養施設行動に関する研究時に世代間交流について	浅田 隆夫	東京教育大学

No	発表者	所 属	発表テーマ	共同研究者	
				氏 名	所 属
10	原田 憲一	東京教育大	高年層の保護意識に関する研究就業面からのアプローチ	浅田 隆夫	東京教育大学
11	千葉 和夫	日本レクリエーション協会	地域レクリエーション指導者の活動実態一運動的視点から一	松原 五一 藤田 碩哉	職業訓練大学校 日本レクリエーション協会
12	清和 洋子	中央大	ポランドに於けるレクリエーション Physical recreation (第二次世界大戦後)		
13	青木 泰三	大阪府立大	旅の考察一宿泊の意識と実態から一		
14	進士五十八	東京農大	コミュニティ、観光レクリエーション 構想計画に就いて 一鳥取県西部地域をケーススタディとして一		
15	仲村 要	同志社大	日常生活にみられるレクリエーション レジャー観について	彌口 彰	同志社大学
16	金崎 良三	九州大	レクリエーション・イメージの構造について		
17	野沢 巖	埼玉大	組織キャンプの自我概念の変化に及ぼす影響	大石・愛島	東京教育大学
18	徳田 碩哉	日本レクリエーション協会	福祉保の助に於ける旅業概念の変貌		
19	佐藤 一夫	福島県立盲学校	視覚障害児のあそびの実態とその意識に関する研究 第二報 先天盲と後天盲の比較研究		
20	水田 賢二	国立身障者センター	肢体不自由者のバドミントンについての研究		

第6回日本レクリエーション学会大会(昭和51年)

(於 秋田大学教育学部 10/3)

No	発表者	所 属	発表テーマ	共同研究者	
				氏 名	所 属
1	島高京一郎	千葉市コミュニティ事務局	余暇情報の提供について		
2	加藤 泰樹	東京教育大学	保護行動の顕現化に関する一考察	浅田 隆夫	筑波大学

No	発表者	所 属	発表テーマ	共同研究者	
				氏 名	所 属
16	和田 忠	秋田大学	民謡教室の実態とその意識について	茂泉 陽子	秋田大学
17	野沢 巖	埼玉大学	一適性組織キャンプ継続性組織キャンプについての実践的研究		
18	千葉 和夫	日本レクリエーション協会	レクリエーション登録指導者の活動実態について一運動的視点から一		
19	工藤 英三	秋田大学 教育学部教授	秋田の風土とレクリエーション		

No	発表者	所 属	発表テーマ	共同研究者	
				氏 名	所 属
3	松原 周信	筑波大学	保護意識と保護施設に対する希望について	浅田 隆夫	筑波大学
4	坂口 正治	東洋大学 短期大学	レクリエーション教育の一考察(1)	矢川 律子 石井 允立	東洋大学 立教大学
5	石井 允立	教大	レクリエーション教育の一考察(2)	矢川 律子 坂口 正治	東洋大学 短期大学
6	沢村 博	日本大学	レクリエーションの形式と価値観について		
7	佐藤 一夫	福島県立盲学校	視覚障害児のあそびの実態とその意識に関する研究 第三報		
8	塩谷 宗雄	日本体育大学	ぶらさがり健康法の実験的研究	竹内 雅和 田端 太	日本体育大学
9	小泉 紀雄	日本体育大学	レクリエーション指導法		
10	鈴木 孝雄	麻布医科大学	小学生の野外活動指導に関する一考察		
11	山田 誠	神戸外国語大学	冬の林間学校の自由活動について		
12	富松 京一	東京教育大学	小学生の林間学校における期待と成果についての実践的研究	野沢 巖 橋 直隆	埼玉大 東京教育大学
13	渡辺 本江	淑徳大学	高令者の近隣意識の実態について	杉町百合子 春田八重子 二宮 遙代 大森 雅子 小西 啓子 音海 哲子 堀 良子 松浦三代子	国立音楽大学 青山学院大学 東京女子 体育大学 竹早教員養成所 相模女子大学 帝塚山学院大学 東京女子 体育大学
14	大森 雅子	東京女子 体育大学	レニア・エージのレクリエーション活動の動向について	松浦三代子 堀 良子 渡辺 本江 音海 哲子 小西 啓子 二宮 遙代 春田八重子 杉町百合子	東京女子 体育大学 帝塚山学院大学 淑徳大学 相模女子大学 竹早教員養成所 国立音楽大学 青山学院大学 国立音楽大学
15	原田 憲一	筑波大学	老後の生活意識と世代間交流について	浅田 隆夫	筑波大学

学会ニュース

№. 16

MARCH 1977

日本レクリエーション学会

三本号の内容

- 2月定例研究会報告
- 3月定例研究会報告
- 近畿支部より
- 九州支部より

＊ 2月定例研究会報告

2月の研究会は「諸外国のレクリエーション動向」と題し、去る2月25日(金)に開かれ、19名の会員の参加がありました。

まず、学会会長前田基雄先生による中国のレクリエーションが資料により発表され、さらに藤原克彰先生(日本余暇文化振興会)のヨーロッパ会議の概要および資料説明がありました。

今回は、全員が自由に話し合うこともねらいのひとつで、活発な意見交換ができました。以下は、前川先生の話をもとに編集したものです。

中国のレクリエーション

前川 峯 雄

◎余暇のとらえ方

我々の余暇活動にあたるものとして中国には余暇活動がある。しかしそれは、一応対応するものとしていうことであり、余暇と余業とはそれぞれのとらえ方がずいぶん違っている。たとえば、我々は余暇を時間的なものとしてとらえ、余暇活動の代表格レクリエーションは、自由かつ自主的、主体的にとりくまれるところに特徴があると考えている。しかし、余暇というのは時間的なもののみを意味しているわけではなく、余暇活動も主体的にまかされた日本のレク活動とは趣きを異にしているようである。

余暇のとらえ方の違いは、休日のとらえ方でもよくわかる。日本では日曜日は休日という観念があるが、中国では、休日は固定化されていない。人によって水曜日であったり、木曜日であったりする。これは生産との関係でそうなるようである。つまり機械は止めないが、人間は休まなくてはならない。だとしても全員一緒に休む必要もなからずという考えらしい。そのために、朝早くから夕方まで働いている間中、しかも一週間は通して地域の運動場は常に使われているという。なかなかできないことを断固としてやり抜くこの国の方式が、こんなところにもよくあらわれているようだ。

◎娯楽について

娯して娯楽は少ないようだ。新聞は大衆向け全国紙は『人民日報』一種、雑誌は数種、

テレビはほとんど白黒で放映時間も夕方のわずかな間だけである。我々が宿泊したホテルにもテレビは各室になく、大きなフロアーに一台あり、それを見に大勢が集まってくる。それに比べラジオの普及度が高く、道を歩くときも持っているほど。重要な情報源となっている。日本に比べマスコミに接する機会が非常に少ないことを痛感した。

その他の娯楽としては演劇、映画、音楽を観賞することが多い。日本で国民1人あたり年10回ほど観ていた昭和28～30年ごろの状態と同じようである。これは娯楽の最たるものであり、人々の生活の中で重要な部分である。

工場では毎週1回、家族とともに映画館を見るのが非常にさかんだし、博物館などでも、大衆が観賞、学習できるように最大限の努力を払っている。

一方、観賞だけでなく、自ら演じることもさかんである。工場では終業後、職場の中でスポーツをしたり、演劇や音楽活動をしている。その成果を発表する機会も多い。

ところでこれらの内容となると、革命に関係するもの、国防意識昂揚、生産力増進に関するもの、どのようにして新しい中国ができたかというように、すべてが革命と、そのための国防と生産に結びついているようだ。

◎大衆スポーツについて

最後に大衆スポーツにふれておこう。中国では、老若男女誰もが何らかのスポーツ活動を楽しんでいる。日陰で中高年齢が大団扇をやり、少年層はよくて武術をやる。もちろん運動場は一日中使われている。種目はバスケ、バレーボール、サッカー、卓球が多く、練習のあとには必ず試合をする機会がひかえている。大ききくは全国大会にまでなる。近所の人間同士でもしゅっしゅ試合をする。

こういったことをつまみ合わせれば、大衆スポーツの普及につながっていくのだろう。ここにも、人民が一つの目的に向かって行動する大きな力を感じてはいただけない。

＊ 3月定例研究会報告

3月の研究会は「若者のレクリエーション意識」と題し、去る3月22日(火)に開かれ32名の会員の参加がありました。

今回は、各大学の卒業生による卒業論文3題で、若さにあふれた発表と討議がみられました。

以下は、発表者の抄録を編集したものです。

「我が国における自然保護の現状と問題点」

～森林レクリエーションと関連して～

東京教育大学 体育学部 菊 池 秀 夫

＜動機及び目的＞

今日、公害問題をはじめとして様々な環境問題が大きくクローズアップされてきて、特に自然環境の保護、保全は今より最優先と与えられるべき課題となりつつある。このように現状にあって、危機に直面しつつある自然環境の現状およびその対策について明らかにし、これについての正しい認識を得ておくことは極めて重要であると思われる。

そこで、本研究では、森林レクリエーションを中心として関連する自然保護の現状を明

らかにするとともに、更に発展して広く我が国の自然の保護、保全に関する諸問題を概観し、現在、我が国が各々もつところの問題点を挙げてみるものである。

＜研究方法＞

野外レクリエーション、特に森林レクリエーションに関する資料・文献と自然の保護、保全、開発に関する資料・文献を中心として本論文を展開する。

＜研究内容＞

第一章 森林レクリエーションの現状

第一節 野外レクリエーションの背景

I 国民所得の増大

II 余暇時間の増大

III 交通手段の発達

IV 都市化の進展

第二節 森林レクリエーション

I 国土の特色

II 土地利用の現状とレクリエーション

III 森林レクリエーション

1) 「自然公園」制度

2) 「レクリエーションの森」制度

○ 自然休養林

○ 総合森林レクリエーション・エリア

第二章 森林レクリエーションと自然環境破壊

第一節 レジャー公害

第二節 自然環境破壊の現状

～森林破壊を中心に～

I 観光道路による破壊

II 林業による破壊

第三章 自然保護と我が国の対策

第一節 自然保護とその必要性

I 自然保護

II 自然保護の必要性

1) 産業経済のため

2) 国土保全のため

3) 学術研究のため

4) 国民の健康休養のため

第二節 我が国の自然保護対策

I 自然保護制度の概要

II 自然保護制度の現状

1) 自然公園制度

2) 文化財保護制度

3) 保安林制度

4) 自然休養林・保護林

5) 鳥獣保護制度

6) 古物保存制度

7) 自然環境保全地域

8) 都市緑地保全制度

9) 各都道府県自然保護条例

第四章 自然保護保全上の問題点

(行政組織上の問題点)

我が国の自然保護、保全に関する行政は、環境庁をはじめとして農林省、建設省、総務庁等々様々な所管省庁にわたっており、そのそれぞれが独自の立場から活動を展開する。いわゆる「縦割行政」となっており、そこから問題が生じてくるものが少なくない。自然保護の代表とも言うべき富士スバルラインの不祥事は道路関係者や林務関係者、又公園関係者らの相互の連絡が不十分であったために起きたと言われ、その典型にほかならない。そのほか、自然公園の計画策定時での各省庁の骨抜き行為や、1972年の「自然環境保全法」の成立をめぐる各省庁間の意見対立や骨抜きなど多くの併呑が指摘され、自然保護の中心となるべき行政そのものが健全な保護対策をなせざりし、ひどい場合には、自然保護を招来していると言えざるを得ない。

(法令施行上の問題点)

我が国の自然資源等の保護、保全に関する法令(制度)は、地域を指定して、それらの地域に対して規制、保護措置を講じるという「地域指定制」の形がとられているが、今日の大きな自然破壊はこれら規制の網のからないうらんく・エリアを中心に発生してきている。又、各種の制度によって指定をうける地域のべ面積はたしかに伸びを示しているものの、それらの指定地域の重複度が非常に高くなってきているのも事実で、特に自然公園と保安林の重複はかなりのものだと言われている。しかも、その重複度は自然公園の特別保護地区、特別地域、普通地域の順に高くなっていくのである。このようにしてみると、我が国「自然の保護、保全対策」というものが、国土の有効的な利用という面からみて未だ極めて限られた地域でしか行われてこなかったとしか思わざるを得ない訳である。

(国民意識上の問題点)

観光地等での利用者間(観光客等)の自然破壊は、レジャー業者(供給者側)の施設建設等の大規模な破壊に比べると、あまり目立たないが、今日ではこれらの小さな破壊行為が供給者側の大きな破壊を一層拡大せしめ、又、悪質なものが増えているというところで、特に注目すべきである。この点で「教育」の果たす役割は重要となるのであるが、これまでのこの種の教育活動は自然公園での利用者啓蒙活動や、ボランティアによるものなど、いずれも規模が小さく、実効性のあるものとは思えない状態にある。早急に国家的な立場からの編成を検討する必要がある。

第五章 総 括

国土面積が極めて小さく、かつ人口の稠密国である我が国においては、自然環境の保護、保全は極めて重要な問題となる。これに対して行政面からも様々な対策が講じられつつあるが、未だ円滑に行われる段階には至っておらず、検討を要する問題が山積みされている状態にある。今後の改善が期待されることである。

しかしながら、真に重要であるのは国民一人ひとりの自然への深い愛情と理解であって、これなくしては何も期待することはできないのである。しかるに、従来このことの方針は誠不備であったと見てよ、このことが自然の破壊に拍車をかけてきた

とも書える。今後は、特にこの点に関する検討がより一層なされ、その充実がはかられることが望まれる。

＜参考文献及び文献＞

- (1) 総理府：観光白書，昭和51年版
 - (2) 環境庁：環境白書，昭和51年版
 - (3) 国土庁：国土利用白書，昭和51年版
 - (4) 内閣総理大臣官房参事官：観光レクリエーション地区の概要，昭和51年3月
 - (5) 経済企画庁総合開発局：新全国総合開発計画関係資料
 - (6) 経済企画庁余暇開発室：余暇雑誌出(7)，1974ダイヤモンド社
 - (7) 経済企画庁余暇開発室：余暇社会への構図，昭和50年3月
 - (8) 総理府：時の歌：1976年6月19日，1976
 - (9) 国土庁編集協力：人と国土（臨時増刊）
- ～国土計画の基礎資料集 その1～，昭和50年
- (10) レジャー産業：資料62号（1973年3月号），1973 エコセン
 - (11) 森田哲郎：林野庁，1975年3月 教育社新書
 - (12) 柴野浩一郎：環境庁，1976年6月 教育社新書
 - (13) 只木良也：森の生活，1971年 共立出版
 - (14) 四手井綱英：日本の森林，1974年 中公新書
 - (15) 読売新聞環境問題取材班：森と人間，1975年 集英社
 - (16) 福島要一編：自然の保護，1975年 時事通信社
 - (17) 全国自然保護連合：自然保護の手引き，1974年 昌平社
 - (18) 上山孝平編：黒澤林文化，1969年 中公新書
 - (19) 宮脇昭雄：現代のエスプリ62 ～エコロジー～，至文堂
 - (20) 吉良竜夫：生態学から見た自然，1971年 河出書房新社
 - (21) 山と澤谷：1972-1 特集 自然保護 '72の課題，1971年 山と澤谷社
 - (22) 江橋慎四郎その他編：現代レクリエーション講座1，1974年 ベースボールマガジン社
 - (23) 松島茂善・江橋慎四郎編：社会体育，昭和47年 第一法規
 - (24) 祖父江孝男編：レジャーの構造，1974年 日本経済新聞社
 - (25) 日本レクリエーション協会：レクリエーション02，1976年
 - (26) 日本体育学会：体育の科学 1973年7月号，1973年 体育の科学社
 - (27) Robert W. Douglass: Forest Recreation，1969年 Pergamon

社会体育行政の広報活動

東海大学体育学部 渡辺正人

目的

体育、スポーツ活動への関心は、非常に高まりつつある。このように住民の意識をうまく行政に反映させ、行政の機能をスムーズに行わせるためには、広報活動の役割が大きなウェイトを占める。社会体育行政機関が、体育、スポーツ活動を管理、運営し、よりよいコミ

ュニケーションを住民との間につくりあげようとするとき、サービスの機能に含まれる広報活動が必要になる。社会体育行政機関における広報活動の実態を調査することによって、問題点を把握し、今後の課題について検討し、広報活動の重要性をとらえなおすことにした。

＜方法＞

行政広報の概念、意義を文献からとらせ、社会体育における広報活動の実態を、神奈川県7市（平塚、藤沢、相模原、栗原、伊勢原、厚木、座間）に広報紙を中心に把握した。次に行政には市民からのアプローチも必要であるという観点から、広報と市民参加について、文献、調査報告書から検討し、最後に社会体育行政広報の今後の課題について考察した。

＜結果及び考察＞

広報という概念は、Public Relationsの訳であり、戦後GHQによってわが国に積極的に導入された。しかし現在は、広報という言葉はより、PRとして扱われる場合が多い。行政のもつ本来の意味がサービスにあり、このサービスを徹底させるため、広報活動の重要性は、企業が行なうPR以上に大きいとあるといえよう。

社会体育行政においても、広報活動によって、住民とのコミュニケーションをはかることが要求されているが、神奈川県7市の場合をみると、社会体育行政機関が組む予算には、広報活動に関する予算が全くとられていないのが現状であり、広報担当課が発行する「広報紙」に依存する場面が多いのである。広報紙に掲載される社会体育記事は、スペースに限られる場合が多く、あまり効果をおいていないようである。表1は、社会体育に関する記事

表1

種別	4.8%
平塚	9.5
相模原	6.4
栗原	10.3
伊勢原	10.8
厚木	10.1
座間	8.3
7市平均	8.6

を、広報紙からそのベースを計算したものであるが、平均1.0%という結果が出た。全紙面の1.0%という割合をどう評価するかという問題も考察するとき、その効果をみれば、多きは期待できそうもない。つまり、広報紙に頼るだけの広報活動では、積極的に住民とのコミュニケーションをきづこことは、できないのではないだろうか。

表2 望ましいPR方法(%)

項目	青少年体育	弓道教室
広報紙にもっと大きくのせる	56.0	76.5
婦人会、青年会等を通じて知らせる	48.5	0
自治会を通じて回覧にする	39.8	5.9
ポスターを各所に掲示する	27.8	41.2
年度初めに年間行事計画表を配布	12.9	41.2
P.T.A.を通じて家庭に知らせる	6.3	0
新聞の地方版にのせる	5.7	17.7
各行事ごとにその案内を各家庭に配布	5.4	47.1
宣伝カーで知らせる	3.9	0
有聲で放送	0.9	5.9
その他	1.5	0
不明	1.5	0

社会体育関係記事1ヶ月平均(S.S.O.1-12)

表2、表3をみると、市民にとって広報紙などの発行物に対して、かなり注目していることがわかるし、発行物等に期待をよせていることがわかる。

住民の期待にもかかわらず、広報紙での社会体育記事は、低い割合でしか掲載されていない。この事実、広報紙に

「広報(PR)」に関する調査、藤沢市
東海大学体育学部社会体育学科
社会体育研究室(昭和48年)

頼るだけの広報活動を改める時期にきていることを示唆しているといえよう。

- 井出憲重氏は、行政広報の理念として、次の4つをあげている。
1. 情報における実質性
 2. コミュニケーションにおける相互過程の原則
 3. 公共利益合致の原則
 4. 人間的アプローチ、ふれあいの原則

以上、4項目の理念を持って広報活動は、なされるべきであるということであるが、この理念を満足する広報紙が存在するかという、疑問の残るところである。広報活動は、広報紙に依存するだけでなく、広報紙をひとつの広報媒体としてとらえることが必要であろう。広報媒体には、広報紙のほか、ポスター、ビラ、案内状、回覧板、広報車、映画、新聞、TVなど数多くのものがある。これらのなかで、効果の高いと思われる媒体を選択し活用していかなければならない。

効果の高い広報媒体には、次のものがあげられる。第1に、広報車による呼びかけ。広報紙にくらべタイムリーであり、必要に応じて、何回も利用できる。第2に、ポスター、広報板、ビラの作成。これらは視覚に訴えるもので、内容によっては強い印象を与えることができ、行幸への参加を動機づけることが可能となる。第3に、新聞やTVに対するパブリシティ活動。社会体育に関する情報を、いわゆるマスメディアに提供し、取り上げてもらう方法である。新聞、TVに接触する機会が非常に多い現在、かなり有効な広報媒体となると考えられる。また年間行事計画を年度初めに各家庭に配布しおき、その行事が近づいたら、これらの媒体を利用し、参加を呼びかけるという方法をとると、その効果が高まることが期待できる。今後は、行政広報の理念を把握するとともに、それを基盤として、積極的に広報媒体を活用して行かねばならぬであろう。

＜まとめ＞

社会体育行政が、広報紙だけに頼り、その他の広報活動に目を向けていないのは、今後その課題を残しているといえよう。広報紙に依存する広報活動だけでは、広報活動を満足させたことにはならない。住民との積極的なコミュニケーションは、生まれてこない。社会体育行政機関の職員によって、まず広報に対する認識の向上がはからねばならない。広報を改めて考えなおしたりして、効果的と思われる広報活動を推進して行く必要がある。また、行政の広報活動を一方的に終わらせないために、広報活動の実施、市民の積極的参加が必要となって来ることも事実であり、今後検討の余地を残している。

キャンプにおける教育的効果についての研究

順天堂大学 伊与田 勝

1. はじめに
教育的立場から、現代社会の変化を捉えるならば、人口の過密化・公害問題、自然破

壊、人間関係の断絶等は人間にとって教育環境の悪化であると考えられる。すでに従来の教室における教育を野外に移すことにより教育効果を得ようとする試みや研究もなされているし、その重要性についても論じられている。

本研究は教室における教育を野外に移し、自然の豊かな教育環境を提供することにより、日常生活とのかかわり合いの中から社会環境と人間生活の在り方を学び、更に対象者の個々の質質の変革や、自然・人間とのかかわり、人間関係の融れ合い、健康的な生活の在り方等を感じとらせ、理解させることが可能なキャンプの生活をとおしてキャンパーにどのような影響が与えられ、機能してゆくかについて明らかにしようとしたものである。

2. 調査の対象者

調査の対象は順天堂高等看護学校本科および別科(以下本科および別科という)と葛西病院付属高等看護学院(以下葛西という)で、その人数は表1の通りである。

表1 調査の対象者

	順天堂		葛西
	本科	別科	
学 年	1	3	1
年 齢	18.5	2.2	18.4
対 象 数	37	49	29

T115名

3. 調査の方法

1) 調査の方法

調査の項目は過去数年に行なってきた研究の中から、本研究のねらいに応じて抽出を行なったものと、本研究上必要項目を作成し、あわせて組み立てたものである。調査はキャンプ実施前・実施後の2回を選び集合調査法を用いた。

2) 調査の期日

4. 調査内容
調査用紙の骨組みは「自然環境と人間」「人間関係」「健康に関する認識」という3つの内容を軸として項目を設定した。具体的には「自然環境と人間」に関しては、自然の豊かなキャンプ場を提供することにより、日常生活における自然に対する認識の変容をみようとしたものである。

また「人間関係」では日常生活における人間関係が、キャンプという共同生活の場で親交を共にするなかでどのように変化してゆくのか、また対人接触の理解度をみるより考え、「健康に関する認識」は日常生活とかけ離れた野外で生活した場合、対象者の健康観がどのように変化してゆくかをみるための項目である。

5. 結果と考察

研究の骨組みは「自然環境と人間」「人間関係」「健康に関する認識」に視点をあてているが、紙面の関係で「人間関係」のみをとり出して考察し、ここでは一部の資料を掲載する。キャンプ実施前のクラス全体のまとまり、つまり集団としての人間関係についてみると表3のような結果になる。

表3では、本科と別科別比較すると、逆に葛西はまとまりがあると答えているものが多く、

これは母集団の生活構造にそれぞれ違いがあるので必ずしも比較して論ずることはできないが、まとまりがあると「思わない」と答えた者の理由では、「協調性がない」「利己主義の人が多い」が比較的多い。これは集団の団結をはかするための基本的な事柄であるが、その点の欠陥が指摘されているといっているであらう。

表3 あなたはあなたのクラスは、まとまりがあると思いますか。

	本科	別科	専攻	T
思う	9	11	22	42
思わない	27	38	6	71
N	1	0	1	2
T	37	49	29	115

→S.Q. それは何故でしょう。

	協調性がない	利己主義の人が多い	お互いの理解が足りない	グループではまとまるが全体ではまとまらない
人数	15	14	8	8
%	2.1	1.9	11.3	11.3

	自己主張の強い人が多い	個性の強い人が多い	まとまる機会がない	その他	T
人数	7	6	3	16	77
%	9.9	8.5	4.2	22.5	

注) キャンプ実施前調査

同じ内容の質問をキャンプ実施後に行なった結果が表4である。

ここではほとんどの者がクラスがまとまったと「思う」と答え、そのためには「相互理解」や「話し合い」「協力」「自己表現」が重要であることを示している。特に表3と対比してみると、前述の理由がクラスをまとめるための条件になったということがいえる。

表4 あなたはこのキャンプ場に来て、来る以前よりも今のほうがクラスがまとまったと思いますか。

	本科	別科	専攻	T
思う	19	39	28	86
どちらともいえない	17	10	1	28
思わない	1	0	0	1
T	37	49	29	115

→S.Q. それはどうしてですか

	相互理解ができた	話し合いがなされた	協力しあえた	自己表現ができた	その他	T
人数	32	22	14	13	22	103
%	3.72	25.6	16.3	15.1	25.6	

注) キャンプ実施後調査

ており、教育的視点から効果を果たしたということがいえる。この調査は対象者の数が少なく、今後も同様の調査を続け、比較検討してゆかねばならないと考える。

【資料】 キャンプ指導の方法論

本研究の対象となるキャンプ実習は、専任の教師によって、正統体育の一環として指導されているが、参加者に感じられない範囲において教育者の側では意図的計画をすすめている面もある。このキャンプはキャンプ実施前の準備段階と実施中の生活の仕方を適確にフィードバックすることにより、考え方を革新させることが主たるねらいである。

(1) キャンプ実施前の学習方法

教師サイドでおこなう準備段階が終了すると、参加者に対して教師によりオリエンテーションをおこない、それ以後はすべて対象者を中心に準備がすすめられる。

(2) 現場での学習方法

社会的感受性訓練の原理を応用して、人間関係訓練が展開されている。具体的に特記するところの通りである。

a) 対象者に主体をおく

目標の設定からグループ分け、キャンプ実施前の準備のすべてを対象者がおこない、主体的な観察発見を生み出す方法を取り、教師も対等・人格的立場に立って意見感情を交換する。

b) 話し合いと会議の重視

行動プログラムにおける対人接触上の諸問題をはじめ、このキャンプ生活を展開中発生する全ての事柄を題材として、グループでの話し合いや、全員での意見や感情の交換によって行動修正をしてゆく、いわゆるFeed backを体験的に獲得するように計画されている。

c) プログラムの配列

ハイキング等の単純型プログラムから、オリエンテーリングなどの集団思考を要する複雑思考型のプログラムと、日程がすすむにつれて展開されるよう、意図的に仕組まれている。

d) 体験の整理とその一般化

プログラムの中に理論セッションを設けて、理論と行動の普遍化・一般化を行なうための配列がなされている。その主な内容は「コミュニケーション」「フィードバック」「リーダーシップ」の3項目で、これらによって社会的感受性が高揚されるようになっていく。

* 近畿支部だより

◎ 近畿支部で昭和51年度に行なわれた研究会の内容は以下の通りです。

- (第1回研究会) 昭和51年7月17日(土) 奈良女子大学理学部会議室
- 丹羽昭昭：「児童の屋外遊戯時間と及ぼす社会的要因」
- 藤波昭宣：「最近におけるレクリエーション運動の実態」
- 近藤公夫：「欧州のレクリエーションとその環境」

次に表6ではこのキャンプに参加することにより、物の考え方、生活の仕方、対人接触等についてのどのような変化があったかという質問の結果である。

ここでは対象者が圧倒的な変化があったことを示しており、このキャンプ生活を通して対象者はそれぞれのメンバーとの対人関係の中で相互理解を深めると同時に、自己の革新があったことを認めることができた。

表5 あなたはこのキャンプを通して、物の考え方、生活の仕方、他人とのつきあい方等に何か変化がありましたか。

	本科	別科	専攻	T
大変変化した	11	17	23	51
まあまあ変化した	15	27	6	48
普通	6	3	0	9
あまり変化したなかった	4	2	0	6
全く変化したなかった	0	0	0	0
N	1	0	0	1
T	37	49	29	115

注) キャンプ実施後調査

同様に表6ではこのキャンプを通して学ぶべき点があったかという質問の結果である。ここでは学ぶべき点が「あった」と答えている者が圧倒的で、その内容も自分自身反省するような内容であり、キャンプが自己革新の契機になっていくことは確かといえる。

表6 あなたはこのキャンプに来て、何か学ぶよりなことはありましたか。

	本科	別科	専攻	T
あった	34	47	29	110
どちらともいえない	2	2	0	4
なかった	1	0	0	1
T	37	49	29	115

→S.Q. それはどんなことですか

	自己のあるべき姿勢	人間関係について	他人への接し方	他人への思いやり
人数	53	39	27	10
%	48.2	35.5	24.6	9.1

	キャンプ技術とマナー	自然について	その他	T
人数	5	5	18	157
%	4.6	4.6	16.4	

注) キャンプ実施後調査

6. 結論

以上のようにこのキャンプは対象者の「人間関係」についての認識や態度に多大な影響を与え、実習の契機となった。また「自然環境と人間」においては、自然への接し方について、さらには社会的な自然保護の問題に至るまで、参加者に対し自然の認識をあらためさせたり、「健康に関する認識」においては、日常忘れがちな、真の健康とは何かという問題を再認識する場を与えた。このようにこのキャンプは参加者自己の質を向上させる機会を提供し

- (第2回研究会) 昭和52年1月22日(土) 同志社大学会館305号室
- 植田 勝：「最近のヨーロッパにおけるリリズム運動」
- 足立寛己：「レクリエーションによるつくりー明石市での事例から」
- 丹羽昭昭：「日本における社会体育の現状」
- (第3回研究会) 学生による卒業論文の紹介 昭和52年3月13日(日)

- 大原体育大会(大阪体育大)：「女子高校生の子余暇意識の分析 週五日制の生徒と対比」
- 永水邦子(大阪体育大)：「地域の特性からみた子供の遊びの生活圏の比較考察」
- 折井 寛(大阪体育大)：「将来のスポーツ実施を決定する要因の分析」
- 藤本陽子(奈良女子大)：「女子学生のスポーツ活動に影響を及ぼす要因について」
- 奥木明夫(奈良女子大)：「江戸時代後期における農民の余暇活動 長閑澤三島郡浦村の場合」

※ なお昭和52年度には、下記の計画で定例研究会を開催していくことになっています。
(1) 第1回定例研究会、7月(昭和51年度は都合により出来ませんでした。が、出来れば従来通り)「東京・近畿合同研究会」にしたい。
(2) 第2回定例研究会 1月
(3) 第3回定例研究会(卒論紹介) 3月

* 九州支部だより

九州支部の活動状況を簡短に報告しよう。昭和51年度は5月14日に理事会を開催して、本年度の活動方針を決定した。

まず、6月18日に定例研究会を福岡市中央区天神福岡市立青年センターで開催した。会員の集まりが予想外に高かったが、遠く鹿児島から会員が出席していたのが、大変嬉しかった。鹿児島は九州だろと思えない人もいて、福岡(博多駅)を基点に考えると、新幹線まで東京駅に着くのは時間的にかまわず変わらないうちである。

この日のテーマは「レクリエーション・プログラム」会員の発言を自由にさせる、いわゆるブレーストミングによる討議を行った。出席者が全員が建設的な発言をし、満足した行動方法をとったのは成功であった。

さて、11月20日に福岡市中央区西公園、福岡教育大学付属中学校で「第4回支部大会(総会)」を開催した。出席者は川村英男男女部会長(日本レク学会副会長)ほか30名程度であった。

研究発表のテーマは2題で、その1は「スポーツ活動の決定要因について」金崎良三氏(九州大学教養部)であった。彼は社会学の立場から要因分析を統計的手法を用いた結果を発表した。すなわち、相関係数による導き求めたものである。しかし、スポーツ要因の分析では定量的なもので測れないものもあるため、すべて定められるような方法を考えたいとしていた。彼の研究に期待したい。

さて、二つ目は「ヨーロッパにおけるスポーツ・レクリエーションの現状について」太田祐造氏(福岡教育大)であった。彼は1年間のヨーロッパ留学で得た知識を資料により十分伝えた。とくにスライドによってわかりやすく説明したのが大変よかった。共産圏の国でありながらレクリエーション活動の進展が理解できては会員も喜んだ。研究発表終了後、いつものように懇談会を開催した。ところで、支部会の活動は正直いって、マヤンリ化の傾向になっている。昭和52年度は反省しながら前進したい。

事務局(支部理事長) 秋吉嘉範

学会ニュース

第 17

APR 1978

日本レクリエーション学会

三 本号の内容三

- 昭和53年度総会及び特別研究会のお知らせ
- 国際余暇研究会議開催のお知らせ
- 第8回学会大会開催のお知らせ
- 全米公園レクリエーション会議の参加について
- 2月定例研究会報告
- 理事会報告(2月、3月)
- 事務局より

1. 昭和53年度総会開催及び特別研究会のお知らせ

期 日：昭和53年5月13日(土) PM2:00~7:00

会 場：東京海洋会館

東京都新宿区百人町 2-27-7

TEL 03-368-1121

◎ 総 会 (PM2:00~3:00)

- 1 会長挨拶
- 2 52年度事業報告及び決算
- 3 会計監査報告
- 4 53年度事業計画案及び予算案
- 5 役員改選
- 6 第8回学会大会について
- 7 国際余暇研究会議について
- 8 その他

◎ 特別研究会 (PM3:00~5:00)

テーマ：アメリカにおける最近のレジャー動向、公共レクリエーション行政システム、大学における指導者養成の現状について

演 者：ジョンE. シュロー博士(マサチューセッツ大学準教授)

司 会：江橋慎四郎

◎ パーティ開催 (PM5:00~7:00)

ジョンE. シュロー博士を囲んでパーティを計画しております。

ごぞって参加ください。

会費：4,000円(記念品代を含む)

2. 国際余暇研究会議開催のお知らせ

——ポスト・マズレジャーを考える——

上記の国際会議が日本レクリエーション学会、日本レクリエーション協会、余暇開発センター、日本余暇文化振興会の協賛によって開催されることになりました。学会員のみなさまが多数参加されるようご案内いたします。

期 日：昭和53年10月4日、5日

会 場：横浜市国際会議場

会議内容：全体会……3~5名の演者により、特別講演を主体にする。

分科会……各国代表を含め下記のテーマによりシンポジウム形式で、

フロアからの意見交換も行なわれる。

1. 余暇と行政
2. 余暇と教育
3. 余暇と労働福祉
4. 余暇と文化
5. 観光開発と資源保護

参 加 者：諸外国より約20名 国内より200名

参 加 費：12,000円

※ 詳細については、後日お届けする開催要項をご覧ください。

3. 第8回学会大会開催のお知らせ

学会大会の日程が決定しました。詳細については追ってお知らせしますが、参加予定をお立てください。

日 時：昭和53年10月6日(金)午後1時~5時

会 場：横浜市(会場は後日決定します)

参加費：1,000円

研究発表申込み：7月15日

発表抄録原稿の届切り：8月15日

第7回学会大会は30題の発表がありました。今回はさらに多くの発表がありますよう、会員各位のご協力をお願いします。

4. 全米公園レクリエーション会議の参加について

標記会議が昭和53年10月14日より1週間にわたってフロリダ州マイアミにて開催されます。

この会議の中で国際部分も開かれ、日本からの参加を要請されておりますので、会員各位のご協力をお願いします。

参加ご希望の方は、事務局までご連絡ください。

5. 2月定例研究会報告

期 日：昭和53年2月27日

会 場：岸記念会館会議室

テーマ：学生の卒業論文発表会

今年は例年になく13題(下記参照)もの申込みがあり、当日も熱心な意見交換が行なわれました。

尚、この発表会の抄録は「学会ニュース№7」別冊に掲載します。

№	演 者	テ ー マ
1	鈴木 秀雄 (52年12月帰国)	米国におけるレジャー・レクリエーション研究の動向
2	塚原 和良 (順天堂大)	運動会のプランニング・プログラムに関する研究 —新しい試みに対する母親の意識調査を中心にして—
3	城 念 久雄 (順天堂大)	精神病におけるレクリエーション活動
4	池 尻 あき子 (東京農大)	水辺空間のレクリエーションの考察
5	小 西 雅 宏 (東京農大)	児童公園の計画的な研究
6	金 子 由 寛 (福岡大)	福岡市におけるコミュニティー住民のスポーツ意識の比較的研究
7	池 田 修 二 (日本体育大)	ヘレンケラー学院における盲人の余暇構造について
8	森 慶 治 (日本体育大)	職場体育の導入とその影響に関する研究
9	井 藤 次 郎 (日本体育大)	横浜市における社会体育の振興に関する調査研究
10	山 岸 千 恵子 (東 亜 大)	フィールドアスレチックにおけるケガについての調査
11	藤 原 誠 (順天堂大学院生)	子供の遊びの実態に関する社会学的一考察
12	芳 賀 健 治 (筑波大学院生)	体育、スポーツ、レクリエーションの日本的風土性に関する一考察 —柳田國男の考え方をもとにして—
13	原 田 宗 彦 (筑波大学院生)	オーカナイドキャンプにおける観衆団の研究
14	西 野 仁 (東亜大学院生)	スキー人口増加現象の要因についての研究(I) スキー人口増加現象の把握とスキー文化の要因の内容変化の状況について

6. 理事会報告（2月、3月）

2月と3月に理事会が単記念会館において開催され、① 昭和53年度総会 ② 第8回学会大会 ③ 国際余暇研究会議について、それぞれの会議の内容、日時、会場、演者等について話し合わせ、本号の事柄が決まりました。

7. 事務局より

- 1) 会員名簿作成について
今年度は会員名簿を作成します。したがって「昭和53年度総会開催通知」のご返送を必ずお出しください。返送がない場合は会員名簿から削除されることとなりますのでお忘れなくご協力ください。
- 2) 会費納入について
振替用紙を総会開催通知等と同封しますのでご確認の上会費納入をお願いします。
- 3) 住所変更通知は必ずお出しください。
学会の郵送物が会員に届かないで返り返されてくる場合があります。住所変更のときは、お忘れなくご連絡ください。
- 4) 機関誌「レクリエーション研究」№7の投稿について
機関誌「レクリエーション研究」№7を昭和54年3月に発行を予定しております。つきましては原稿を昭和53年9月末日までにお送りください。投稿規定は「レクリエーション研究」№6をご覧ください。
会員多数の投稿をお待ちしております。

事務局

神奈川県平塚市北金目1117
東海大学体育学部社会体育学科
レクリエーション研究室
TEL 0463-58-1211 内線465

学会ニュース

第18

JUN 1978

日本レクリエーション学会

本号の内容

- 昭和53年度総会報告
- 特別研究会報告
- 東京・近畿合同研究会開催のお知らせ

○ 昭和53年度総会報告

53年度の総会が東京海洋会館において5月13日(土)にされ、会員53名の出席がありました。下記の事柄について資料に基づき説明され、承認されました。

1. 昭和52年度事業報告

1) 研究会の開催

№	演者	テーマ	期日	会場
1	園田 碩 哉 (日本レクリエーション協力会) 瀬沼 克 彰 (日本余暇文化振興会) 松田 義 幸 (余暇開発センター)	現代日本における レジャー・レクリエーション研究の 動向と課題	5.2. 5.21	公立学校 共済組合 本部
2	江 橋 慎 四 郎 (日本レクリエーション学会副会長)	世界におけるレクリエーションの動向	5.2. 11.25	私学会館
3	鈴木 秀 雄 (52年12月帰国)	米国内におけるレジャー・レクリエーション研究の動向	5.3. 12.7	単記念 会館

塚 原 和 良 (順 天 堂 大)	運動会のプランニング・プログラムに関する研究 ——新しい視点に対する組織の意識調査を中心として——		
城 念 久 雄 (順 天 堂 大)	精神病におけるレクリエーション活動		
池 尻 あ き 子 (東 京 農 大)	水辺空間のレクリエーションの考察		
小 西 雅 宏 (東 京 農 大)	児童公園の計画的設計		
金 子 由 寛 (福 岡 大)	那珂町におけるコミュニティ住民の スポーツ意識の比較的研究		
池 田 修 二 (日 本 体 育 大)	ヘレンケラー学院における盲人の余暇 構造について		
森 慶 治 (日 本 体 育 大)	職場体育の導入とその影響に関する研 究	5.3. 2.27	単 記 念 会 館
井 商 次 郎 (日 本 体 育 大)	横浜市における社会体育の振興に関する 調査研究		
山 岸 千 恵 子 (東 海 大)	フィールドアスレチックにおけるケガ についての調査		
藤 原 誠 (順 天 堂 大 学 院 生)	子供の遊びの実態に関する社会学的一 考察		
芳 賀 健 治 (筑 波 大 学 院 生)	体育、スポーツ、レクリエーションの 日本的風土性に関する一考察 ——脚田国男の考え方をもとにして——		
原 田 宗 彦 (筑 波 大 学 院 生)	オーガナイドキャンプにおける縦集団 の研究		
西 野 仁 (東 海 大 学 院 生)	スキー人口増加現象の要因についての研究① スキー人口増加現象の把握とスキー文 化の要因の内容変化の状況について		

※ 学生による卒論発表会として実施

2) 総会の開催

日 時：昭和52年5月21日(土) PM 2:00~5:00

場 所：公立学校共済組合本部

- 議 題：1) 51年度事業報告および決算報告
2) 52年度事業計画および予算
3) 第7回学会大会について

<注> 総会に先だち、研究会が開催された。

3) 第7回学会大会の開催

期 日：昭和52年9月10日

会 場：富山大学教養部

研究発表：30題

特別発表：「富山の風土とレクリエーション」榎垣保彦（富山大学）

4) 学会ニュースの発行

頁16 昭和52年 3月（12ページ）

5) 機関誌「レクリエーション研究」の発行

第6号 昭和52年11月

6) 組織の拡充

入会者 31名

退会者 0

会員数 499名（昭和53年3月31日現在）

7) 支部活動

1) 近畿支部

- * 昭和52年度事業報告

1. 定例研究会の開催

<第一回研究会>……昭和52年7月2日（土）

奈良女子大学文学部会議室

* 水吉宏英、池田勝、神崎清一

「レクリエーションリーダーの機能化を阻害する要因の分析」

- * 丹羽隆昭、長沢邦子

「女子大生のスポーツ参加を規定する要因の検討」

- * 江橋慎四郎

「第三次産業に働く勤労青少年の余暇活動」から」

<第二回研究会>……昭和53年1月28日（土）

同志社大学会館305号室

- * 丹羽隆昭

「女子大生のスポーツ参加とパーソナリティ」

- * 「特別企画」：新春討論・談話

「レジャー、レクリエーションの

実践と研究をめぐる今日的課題」

（司 会） 夏 目 晃

<第三回研究会>……昭和53年3月12日（日）

大阪体育大学会議室

学生による卒業論文の紹介

- * 上田晃生（大阪体育大学）

「ランニング愛好者の実態に関する調査研究」

- * 村田彰一（大阪体育大学専攻科）

「児童のスポーツ参加の社会的背景」

- * 大橋美子（奈良女子大学）

「大学生の生活とスポーツに関する研究」

男子学生のスポーツに対する態度からの分析

- * 内海昌子（奈良女子大学）

「大学生のスポーツ活動に影響を及ぼす要因の検討」

2. 第7回日本レクリエーション学会大会への参加

昭和52年10月 富山大学教養部

3. 学会近畿支部会ニュース（1～3号）の発行

4. 総 会

昭和53年3月12日（日） 大阪体育大学会議室

2) 九州支部

- * 昭和52年度事業報告

1. 定例研究会

① 日 時：昭和52年6月22日

場 所：福岡市西区福岡大学体育学部

テーマ：「運動場の土質について」 新田伸三（九州芸術工科大学）

② 日 時：昭和52年12月10日

場 所：福岡市中央区福岡市青年センター

テーマ：「レクリエーション・アラカルト」

秋吉真範（福岡教育大学）

2. 支部総会および研究発表会

日 時：昭和52年10月29日

場 所：福岡市西区福岡大学体育学部

総会および研究発表

① レクリエーション需要の意識・構造について

甲城正城（南九州大学）

② 遊びの論に関する一考察 その承継と問題点

金崎良三（九州大学）

③ 老年期における健康生涯について

白木静枝（中村学園大学）

佐久本寿代（精華女子短期大学）

3. 支部ニュース発行

① 第9号 8月発行（定例研究会特集）

② 第10号 11月発行（支部総会特集）

2. 昭和52年度決算報告書

（昭和53年3月31日現在）

<収入の部>

項 目	予算額	決算額	増減額	内 容
前年度繰越金	532,732	532,732	0	
入 会 金	60,000	310,000	△ 31,000	31人分
会 費	1,080,000	917,000	△ 163,000	203人分+31人分
大会参加費	80,000	0	△ 80,000	※大会費はとらなかったため。
雑 収 入	247,268	32,200	△ 215,068	抄録機関誌
寄 付	100,000	30,000	△ 70,000	広告費
計	2,100,000	1,542,932	△ 559,068	

<支出の部>

項 目	予算額	決算額	増減額	内 容
事務費	20,000	5,800	△ 14,200	日常事務消耗品
会議費	60,000	66,670	6,670	会場費、食事
通信費	350,000	124,520	△ 225,480	理事会通知、機関誌郵送
印刷費	1,000,000	444,550	△ 555,450	学会ニュース、ご案内、その他
例会費	40,000	18,000	△ 22,000	会場費
大会費	350,000	246,000	△ 104,000	抄録代、発送代、会場運営費
総会費	60,000	49,700	△ 10,300	総会通知、会場費
支部助成金	80,000	80,000	0	九州支部、近畿支部
研究助成金	100,000	0	△ 100,000	※53年度プロジェクトチームに繰越
事務局運営費	20,000	20,000	0	交通費（アルバイト）
雑 費	100,000	5,000	△ 5,000	日本レク協会維持会費
予 備 費	100,000	0	△ 100,000	
計	2,100,000	1,062,240		

収入と支出の決算額の差、480,692円が来年度繰越金

（注）△印は、予算額に対して決算額の少ないもの。

3. 昭和53年度事業計画

1) 研究調査活動

1. 昭和53年度総会の開催……………5月 東京
2. 第8回学会大会の開催……………10月 横浜市
3. 国際余暇研究会……………10月
4. 定例研究会の開催……………5回予定

2) 広報活動

1. 機関誌「レクリエーション研究」 系7の発刊
2. 学会ニュース発刊……………系7～19
3. 月刊「レクリエーション」への投稿

3) 組織の拡充性

1. 会員の獲得
2. 会員名簿の作成

4) 日程

	東京地区	近畿地区	九州地区
4月	学会ニュース		
5月	総会・研究会		
6月			研究会・支部ニュース
7月	学会ニュース・合同研究会		
8月			
9月	「レクリエーション研究」 系7投稿ノ切 研究会		
10月	第8回学会大会 国際余暇研究会議		
11月	学会ニュース		
12月			研究会・支部ニュース
1月	研究会		
2月	研究会(卒論発表会)		
3月	「レクリエーション研究」 系7発刊		

5. 役員改選

新役員が下記の通り改選されました。尚「理事長」につきましては6月27日に理事会を開催して決めることになっています。

名 譽 会 長	三笠宮崇仁親王殿下	(中 京 大 学)
会 長	前 川 肇	(日 本 体 育 大 学)
副 会 長	坂 谷 宗 雄	(関 東 理 学 院 大 学)
理 事	三 隅 達 夫	(相 模 女 子 大 学)
	山 崎 健 一	(大 阪 政 議 女 子 短 大)
	小 川 寿 一	(廣 岡 大 学)
	村 英 夫	(流 波 大 学)
	浅 田 隆	(京 大 学)
	池 田 勝 夫	(東 京 大 学)
	江 崎 慎 四 郎	(カ ウ ン セ ラ ー 協 会)
	岡 田 謙 子	(中 央 大 学)
	兼 松 保 子	(東 京 Y W C A)
	木 下 静 子	(女 子 聖 学 院 短 大)
	洋 田 恭 子	(流 波 大 学)
	野 島 豊 子	(国 立 立 蔵 塚 養 老 所)
	農 所 迪 夫	(日 本 余 暇 文 化 振 興 会)
	潮 沼 克 彰	(東 海 大 学)
	高 橋 和 敏	(淑 徳 大 学)
	高 橋 眞 一	(東 京 学 芸 大 学)
	田 村 眞 三	(京 戸 商 工 会 議 所)
	谷 川 大 夫	(松 戸 商 工 会 議 所)
	深 野 一 郎	(ス ペ ー ス ・ コ ン サ ル タ ン ト)
	野 澤 平 平	(浮 城 学 校)
	原 正 幸 一	(余 暇 開 発 セ ン タ ー ・ 京 波 大 学)
	松 田 原 五 三 郎	(職 業 訓 練 大 学 校)
	宮 崎 隆 一	(順 天 堂 大 学)
	秋 吉 隆 一	(福 岡 教 育 大 学)
	松 尾 吉 夫	(大 阪 府 立 大 学)
	青 草 田 三 枝	(浜 質 大 学)
	山 口 守 隆	(大 阪 体 育 大 学)
	西 山 勝 次	(大 阪 産 業 大 学)
	木 野 謙 夫	(福 島 大 学)
	鈴木 球 磨	(島 根 大 学)
	団 体 研 究 所	(日 本 体 育 協 会)
	金 塚 謙 一	(地 域 計 画 研 究 所)
幹 事	林 見 栄	(日 本 レ ク リ エ ー シ ョ ン 協 会)
	浅 野 一 夫	(日 本 レ ク リ エ ー シ ョ ン 協 会)
	野 間 英 敏	(東 海 大 学)
	川 向 妙 子	(東 海 大 学)

学 会 事 務 局	東 海 大 学	高 橋 和 敏	TEL 0463-58-1211
九 州 支 部	福 岡 教 育 大 学	秋 吉 嘉 範	TEL 09403-2-2381
近 畿 支 部	大 阪 体 育 大 学	永 吉 宏 英	TEL 0726-34-3141

4. 昭和53年度予算

(53年3月31日現在)

<収入の部>

項 目	予 算 額	
前年度繰越金	480,692	
入 会 金	50,000	50人分
会 費	1,050,000	350人分(新入会員50人分を含む)
大 会 参 加 費	100,000	100人分
雜 収 入	253,708	
寄 付	50,000	
計	1,984,400	

<支出の部>

項 目	予 算 額	内 容
事 務 費	14,400	日常事務消耗品代
会 議 費	70,000	理事会、幹事会、会場費、食事
通 信 費	160,000	理事会通知、機関誌郵送
印 刷 費	600,000	学会ニュース、ご案内、その他
例 会 費	30,000	会場費
大 会 費	255,000	抄録代、会場運営費
総 会 費	50,000	総会通知、会場費
支 部 助 成 金	80,000	九州支部、近畿支部
研 究 助 成 金	200,000	※ 52年度繰越金10万円を含む
事 務 局 運 営 費	20,000	交通費、アルバイト
雑 費	5,000	日本レク協会維持会費
国 際 会 議 費	500,000	
計	1,984,400	

6. 第8回学会大会について

○ 大会日の変更……………10月7日(土)

※ 変更理由は、当初予定していた10月6日(金)が「全国レクリエーション大会」の開会式と重なる為。

7. 国際余暇研究会議について

開催要領、日程概略、参加要領について資料に基づき説明があり承認されました。(別紙参照)

○ 特別研究会報告

総会に引きついで、ジョンE.シエロ博士(マサチューセッツ大学准教授)の講演が行なわれました。以下は講演の内容を要約したものです。

アメリカにおける最近のレジャー動向、公共レクリエーション行政システム、大学における指導者養成の現状について

① アメリカにおける最近のレジャー動向は文化・芸術的な技術・知識の指向、自然保護と野外レクリエーションの重要性、レジャーカウンセリングとレジャー教育の今後の研究の必要性などが傾向としてとりあげられ、レジャーカウンセリングでは社会における各段階での人間関係をとらえて行くことより実益をかねた趣味のためのカウンセリングがもっと研究されるべきだと説かれた。

② 公共レクリエーション行政システムにおいてはレジャーサービスが地方自治の原理にもとずきレクリエーション委員会が権限賦与を受けその委員会がレクリエーション政策を創出し明確化して行く。自治体の長より任命を受け議会から承認された委員は次の機能を有する。

1. レクリエーションプログラム実行のための長であるレクリエーションディレクター等の任命
2. 議会において承認され作られているプログラムの、レクリエーションセンター、プール、競技場などの施設の管理、運営及びそれらの拡充、発展をはかる。
3. 自治体が持つところの色々な施設において健全なレジャープログラムを発展させる権限を与えられており、公的な場所、施設にとどまらず私的なものも所有者との協働によって利用できるよう努力がなされる。

以上の機能はレジャーの必要性のP・Rそれによる財政的な支援を官民からも得るという役割をはたす。

レジャープログラムにおける予算のシステムは一般基金・特別賦課金・債券発行・譲渡金(敷金)・参加費、入場料、使用料;その他進取政府あるいは地方自治体からの補助金などが含まれる。

もちろん財政的根拠を得るためのレクリエーション委員会の効率的な活動が望まれる訳である。

③ 大学における指導者養成の現状についてはやはり指導者としてあるべき姿としての理論はもちろんのこと技術修得があげられるが、その中で指導者としてレジャープログラムの計画は大切であり、個人の指導につけ、グループの指導につけかわりのある人々の要求を知り得て目的目標をかかげそして計画をたて、評価をするという一連の過程が大切であると説いている。

○ 東京、近畿合同研究会開催のお知らせ

下記の要領で東京、近畿の合同研究会を開催します。

会員の皆様、万障お繰り合せの上ご参加ください。

日 時：7月8日(土) 2:00~4:00 p.m

会 場：奈良女子大学文学部体育教室

TEL 0742-26 2239 (奈良女子大学)

テーマ 1) 学校開放利用スポーツグループの社会的性格と機能

— 大阪市のスポーツグループ実態調査より —

永 吉 宏 英(大阪体育大学)

2) 組織キャンプ参加者の意識の分析

— 自己および他者修飾語による —

福 田 芳 則(大阪体育大学)

学会ニュース

第 19

APRIL 1979

日本レクリエーション学会

本号の内容

○ 昭和53年度卒業論文発表抄録

フィールドアスレチックの現状

東京女子体育大学
 恩 田 善 美
 福 原 洋 子

1. 研究目的

現代社会は、機械化に伴って、私達人間の生活における身体活動が不足してきている為、スポーツを全生涯にわたって位置づけることが大切になってきた。この様な風潮の中で企業によるスポーツクラブや社会体育施設などが数多く設置されてきているが、私達は中でも野外における自然を相手にしたフィールドアスレチックというものに深く興味をもち、数ヶ所の地域を比較、観察し、その構造や特徴が利用する人々の目的に一致しているかという点を研究・追求することにした。又、経営者側、利用者側の両者にアンケートを取り、息の長いフィールドアスレチックにするため、運営の方法や、それに伴う改善策を、私達なりにまとめた。

2. 研究内容

東京近辺のフィールドアスレチック場の場を得て、経営者側に質問を行なうとともに競技場内の見学をさせて頂き、その構造上の違いと、利用状態を確かめた。又、対象となる4つの施設をポイント別に、身体運動学に結びつけ、運動を行なう上で、身体のどの部分の筋力を主に使うか、又、平衡性、柔軟性、調整力の必要性がどの程度あるか、7項目に分類して調査した。

対 象

- ① 鹿島園フィールドアスレチック
- ② 武蔵野狭山林間コース
- ③ 水森フィールドアスレチック(青森)
- ④ 八王子今泉フィールドアスレチック

利用者側アンケート 160名

実施期間

昭和53年9月上旬~昭和53年12月上旬

3. 結果と考察

これまでの資料をもとに考察してみると、まず体力測定カードの意味のなさに気が付いた。これは、利用者の年齢、性別、身長、体重などの差を考慮されていない為に測定結果は必ずしも本人の運動能力とは言いきれない。

又、実際にフィールドアスレチックに挑戦してみても気が付いた事であるが、この種の運動は、運動能力だけでなく、かなりの度胸を必要とするものである。この意味でも、フィールドアスレチックというものは肉体的ばかりではなく、精神的な鍛錬にも大きな影響を及ぼしている事がわかった。見るからに怖そうなポイントに挑戦してみても、できたときの克服感は何とも言えないものである。社会人のストレス解消にも、とても効果があるのではないだろうか。

次に、運営についての意見であるが、各施設とも、苦情処理のシステムが設けられていないが、今後の発展、改善の点で利用者側の意見を積極的に取り入れ、現状を良く把握することが必要ではないかと思う。例えば、出口に「意見の窓口」などと書いた投書箱を備えつけておき、定期的に整理し、検討する機会を設けることも1つの方法であると思う。又、一般に料金が高いという意見が多かったが、フィールドアスレチックのバスや回教券を発売すれば、固定者もつくれるし、利用者側も、かなり利用しやすくなるのではないだろうか。

最後に、日本フィールドアスレチック協会の公認の条件についてであるが、1つ疑問に思う事があった。それは「指導員をおかないこと」である。安全を計る為に、関係者が必ず、施設内に数人は入っている様であるが、指導員ではあってはならないのである。私達は実際にフィールドアスレチックに挑戦して、やはり、危険な方法で行なう人を数多く見かけた。そこで、施設を管理する人だけでなく、利用者の危険を防ぐ為の指導員というものが必要になってくるのではないだろうか。歴史が浅いだけに、このフィールドアスレチックの運営が、いかに難しいものであるかわかった。

今後の課題

研究の結果、フィールドアスレチックは、健康増進や体力向上の面でも大変役れていることがわかった。しかし、先に述べたように発達の上であるこのフィールドアスレチックというものは、まだまだ多くの問題をかかえている。そこでこの問題の1つ1つを序々に解決し、理想の施設を築くことができたら素晴らしいことだと思ふ。又、このような施設を営利追求の民間企業だけでなく、公共施設として、多くの人々が自由に活用できるようにすることを強く望みたい。

精神障害者社会自立への過程と現状

— レクリエーションが社会自立に果たす役割 —

東京女子体育大学
郡 九 千佳子

1. 研究の目的

「レクリエーション」という語は、身近な日常語として通用し、多くの国民が地域や職場、団体の中で、さまざまな活動を行っている。しかし、誰にでも、このレクリエーションを楽しむ権利があるはずなのに、活動したくとも制限されている人々がいる。それは、ハンディキャップのある人達である。彼らは活動の情報を得られなかったり、情報を得ても、その場に行けないことが多い。又、彼らのために使いやすく設計された施設、設備も少ない。これは、福祉意識が欠如して、社会的理解がないためであるが、彼らにこそレクリエーションが必要なのではないだろうか。

そこで、まず身体障害者の施設を訪ねてみた。そこは、精神障害者の通所療養施設で、中学校を卒業しても、すぐに就職するのが困難な者、又、就職に失敗した者等を対象に、社会自立できるように集団生活、作業を通して、独立させていくことがねらいの施設であった。日課の中ではレクリエーションと思われる活動はないが、年間行事として、旅行、運動会などといったレクリエーション的行事が含まれていた。そこで、こういった行事が彼らにどのような効果をもたらすのか、レクリエーションが精神障害者の社会自立に果たす役割を中心に研究しようと思う。

2. 研究の方法

彼らとともに運動会に参加し、彼らの運動能力の実態、興味性等を把握した上で、運動会が彼らに及ぼす効果を研究する。

3. 結果及び考察

心身全体を使って活動的に運動することは、身体機能の発達を促り、運動の基礎的能力を高めるとともに、気力、忍耐力、注意力などを養う。又、仲間とともに活動したことで、協力、きまり、役割の重要性を体験し、理解したことだろう。そして何よりも、身体を動かす機会の少ない彼らにとって、充分な身体活動の満足感を再得した1日だったと思えるが、このような体験は、人間の行動や生活に必要な力を育成していくことに貢献するところが大きいと思われる。つまり、精神障害者が自立していくために最も必要な、社会適応能力の育成につながっているということである。

4. 今後の課題

彼らは、レクリエーション的行事に興味をもち、楽しみにしている。そして、意欲を燃や

し、精神的に充実して、作業にも張りがでてくるようであるが、楽しい思い出となっても、その後は、実践していこうとしない。たとえ運動することに興味をもって、自分からは、やろうとしないのである。これは、過去の生活を通過して積み重ねられてきた人間形成によって、できてしまったようである。

ところで、彼らと接する上で、明白かつ正確に認識しておかなければならないことは、彼らの可能性、限界ということである。彼らは、身体的活動、知的感覚、感情、人間関係など、さまざまな分野で差障っている。したがって、レクリエーションプログラムを計画する前には、これらを認識し、彼らが達成できるレベルに限定してやるということである。又、プログラムに興味をもたせることが大切であるが、興味があるから行い、興味がないから行わないというのではなく、彼らにとって必要なことであれば、プログラムを計画しなければならぬし、興味をおこすように指導していくということが大切である。レクリエーションを自ら取り入れることが苦手な彼らであるがゆえに、効果は目に見えて現れないが、レクリエーションが社会自立への基礎的能力の育成に役立っていることは確かである。今まで、何らかのハンディキャップをもった人々のためのレクリエーションは、あまり関心がむけられていなかったが、社会福祉をすすめる一環として、それぞれのハンディキャップに応じて、具体的、効果的にレクリエーションの方法を考えていかなければならない。

社会自立ということについては、彼ら自身が努力しなくてはならないのは当然であるが、たとえ努力しても、彼らを受け入れる条件が整わねば、社会自立は、おぼつかないものである。したがって、社会的理解と協力が必要であり、障害者をおいたる気持が、社会的進歩となるような社会を作っていくかなければならない。彼らとともに生き、長い目で見、接していくことが必要なのである。

スミングクラブの機能に関する研究

一 某スミングクラブに通う子供

をもつ母親の意識を中心に—

順天堂大学体育学部

中村 友治、樋口 秀樹

大野 祐一、金木 祐輔

<研究の目的>

近年、スポーツに対する需要が高まり、スポーツにおける大衆化現象が生じ、「みんなのスポーツ」としての気運が高まってきている。この需要を受け入れる限として、行政レベルでは、スポーツ振興法に基づいて、公営施設の設置や指導者の養成、等を図っている。この施設に対しては、需要度が高いため、それを補う手段の1つとして、学校開放運動が実施されている。一方、

民間では、プールやアスレチッククラブなどを設置して、住民のニーズに応じているが、このことについては異論のないところであろう。更にこれらの施設を利用する愛好者によって作られるクラブや、公営、民間を問わず、会員を募集するスポーツクラブなどが増加してきている。

この様に国民のスポーツに対する需要が増加するに伴って、学校体育から更にコミュニティでのスポーツへと発展していく現状の中で、これらスミングクラブの在り方も、人間の一生を通じての活動の一コマとしてとらえるならば、そこには当然、新しい理念や指導の方法論、等の研究が必要になってくるであろう。

本研究では、従来、学校体育に依存していた子供達が、在住地域に民間のスミングクラブが設置されることにより、そこに通う子供達にスミングクラブがいかに機能するかということに視点を置き、スミングクラブに通う子供をもつ母親の意識から実態を把握し、現状の問題点を探り出し、そこに内在する問題の発見を通して、新しい方向性を見い出そうとするものである。

<研究の方法>

1. 調査の期日

1978年9月10～23日

2. 調査の対象

スミングクラブに子供を通わせている母親

3. 標本数

1598

有効標本回収率 63.0%

(注) 本調査にあたっては事前に予備調査を実施し、質問内容の選択、類型化をおこなった後、調査用紙を組んだ。

<結論と今後の課題>

本調査では、子供の体力の向上や健康の増進、人間的な成長にまで影響を及ぼし、機能していることが明らかになった。

宮志野市及び、近隣3市のスミングクラブ設置状況から、スミングクラブはこの地域において、すでに過当競争の第一歩を踏み出していると考えられる。このスミングクラブでは、主に送迎バスで会員の移動を行っているが、このことは激化する競争の中で、必ずしも有利な条件とはならないだろう。即ち、身近に同程度の機能をもつクラブができた場合、送迎バスを利用しなくても、徒歩、または自転車を通えるような距離なら母親は、より近いクラブに子供を入会させるだろう。

将来このような状況になった場合、スミングクラブが存続していくためには、会員募集の基本となる「ロコミ」の重要性を考慮し、他のクラブとの比較において、子供たちの親からより高い評価を受ける必要があるだろう。そのために施設、設備への細かい配慮が必要なものは当然であ

るが、最も重要なのは、そのクラブの中で、子供に対して何を与えられるか、また、母親の期待にどの程度応えられるかが決めてとなる。その時にはじめて、技術指導の充実にとどまることなく、子供の人間性、人格、等にもまでアプローチしていく総合的な指導が価値をもち、地域社会のニーズに応えて機能し、存続していくであろう。

本研究で、スミングクラブの大きな姿を明らかにかすることができた。これを基にして、更に具体的な面にアプローチをしたいと考えている。

適正利用間隔に関する計画的調査

一 特に Space Capacity 概念からみた

尾瀬でのケーススタディー

東京農業大学高橋学科

杉 浦 良 二

1. 研究の目的

野外レクリエーション活動の中心的な場である自然公園において、過剰利用(over use)による弊害が深刻化している。それは自然の側においては自然破壊を生じ、また一方利用者の側では人が多すぎることにより本来レクリエーションの場である自然公園内で逆にストレスを生じる結果となっている。自然公園本来の目的を果たすためには、厳重保護でもなくまた開発一辺倒でもないいわば第三の道、つまり「保護と開発」の調和をはかることが必要であると考えられる。そこで「保護と開発」の調和を解決する手法として発表された地域容量(Space Capacity)概念を基礎として新しい計画をなすことが、より快適な公園利用へのアプローチではないかという認識にたつて、ケーススタディとして取り上げた尾瀬(詳しくは尾瀬ヶ原)において、利用者が利用に際し不快感を感じない人間と人間の間の距離(適正利用間隔)を算出し、また新しい利用レート計画を試みた。

2. 適正利用間隔算出

(1) 適正利用間隔算出調査方法

尾瀬ヶ原中田代十字路附近で4.0mから2.0mまで2.0m間隔にスライド写真計13枚を撮り、後にスライド写真を用いてアンケート調査を行った。アンケート調査の内容ははじめに被験者に対して「風景の中で人間が気にならなくなる距離はどの段階ですか。」という質問を与えておいて、次に間隔4.0mのスライド写真から順に間隔2.0mまでのスライド写真を見せ、各段階に順番をつけ、被験者に答える一つの番号を答えてもらった。

(2) 調査結果及び考察

アンケート調査結果は図1のようになった。この調査結果を累積度数分布にして表すと

表1のように、この表から考察して尾瀬ヶ原における適正利用間隔は200mとした。その理由としてまず第一に今回のアンケート調査において90%を超える人々が、200m間隔を越えれば風景の中で人間が気にならなさと感じていること。次に既存の研究報告に、江山正美らによるほぼ同じ地区と考えられる調査報告によれば、最も理想的な間隔として216mという数値が出ており、その数値と比べて近似値であることなどからによる。

3. 適正利用間隔の応用

尾瀬ヶ原における適正利用間隔を一様に200mと考えるならば、その数値を基に尾瀬ヶ原園路内での同時収容人数(収容力)を算出することができ、収容力を基礎数値として山小屋の規模及び配置計画、到達手段である交通機関の規模などを導き出すことができる一つの手がかりとなると考えられる。

4. 新利用ルート計画

現在の尾瀬ヶ原における利用ルートの他に利用者のフメニティを優すことなく更に新しい利用ルートを設置する(利用の増強をはかる)ことができないであろうか、また現在の利用ルートではたして満足いく公園利用がなされているであろうかという問題意識にたって考えてみると、新しい利用ルートを計画する余地があると考えられる。そこで、ⅰ)尾瀬を訪れる利用者の意識 ⅱ)既存の利用ルート ⅲ)土地利用規制 ⅳ)尾瀬ヶ原の植生及び地形 ⅳ)現況ルート利用状況等を考慮して新たな利用ルート計画を試みた。(図2が種々の要因を重畳させた図であり、図3が新たに計画したルートを示した図である。)

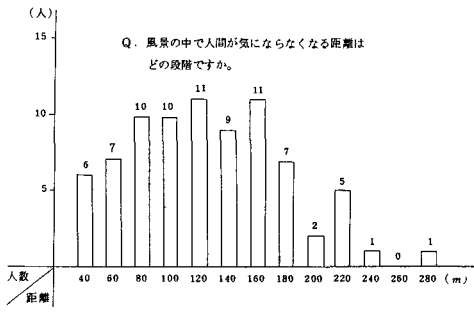


図1 アンケート調査集計結果 (n=80人)

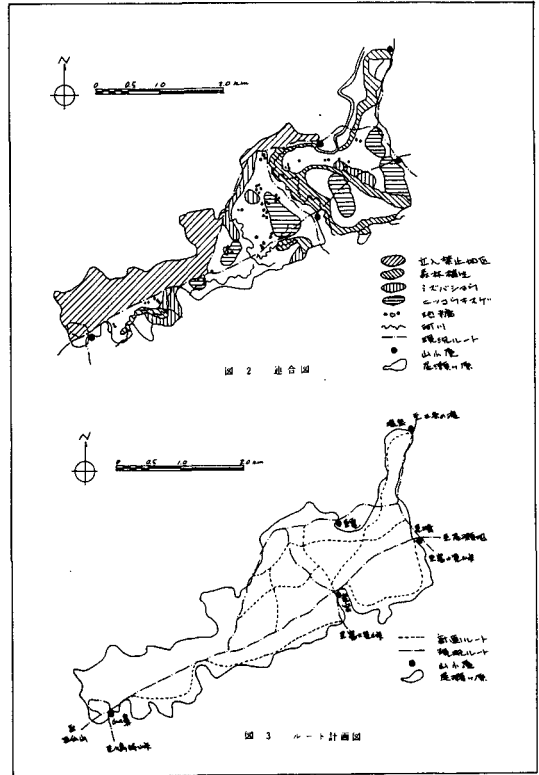


図2 適合図

図3 ルート計画図

距離	人数	累積人数	累積百分率
40	6	6	7.5
60	7	13	16.3
80	10	23	28.8
100	10	33	41.3
120	11	44	55.0
140	9	53	66.3
160	11	64	80.0
180	7	71	88.8
200	2	73	91.3
220	5	78	97.5
240	1	79	98.8
260	0	79	98.8
280	1	80	100.0
計	80		

表1 被験者の累積度数分布

遊戯施設における利用動線の調査研究

— スベリ台における利用動線について —

東京農業大学 造園学科
加藤 正

1. 初めに

遊戯施設を持つ生理的、知的、情緒的、社会的効果は、その安全性と大きな関係がある。効果だけを高めれば、安全性に問題が生じ、また安全性だけを高めれば、魅力の乏しい遊戯施設となってしまう。

ここで問題とする安全性とは、構造上の安全と、当然必要な配置のことを示す。この中の当然必要な配置とは、遊戯施設の配置距離のことである。現在、多くの公園を見ると、その敷地面積に対して比較的多くの遊戯施設が設置されている。この設置に際して、どのような基準で、その配置位置を決定したのであろうか。施設間の配置距離が短いと利用者同士が交差して安全性に大きな問題がある。

公園の配置計画は、ただ単に机上で敷地に対して適当に遊戯施設を配置するということであっては行けない。この配置計画に、必要な遊戯施設間距離を知る一つの方法として、子供の行動、

つまり利用動線に着目したい。今回の調査は、この適当な配置を知る一つの手法として、遊戯施設に対する子供の利用動線を調べてみた。

2. 調査方法

a) 調査地: 新宿区落合公園(新宿区中井1丁目14番地)

b) 調査対象遊具: 同公園内に設置されている放射型スベリ台

※ 形状寸法 …… 高さ2.0m、檯面の長さ3.76m、檯面の幅0.40m

檯面の構造: 亜鉛メッキ導肉鋼管15A(径21.7mm、肉厚2.8mm)

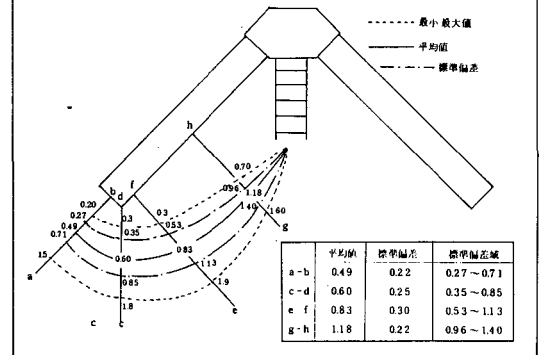
JISG2323のパイプを13本使用して、檯面を形成している。

c) 調査方法

対象スベリ台下の地面に4本の直線を引き、これに50cm間隔の目盛りをつける。(網罫に透過すると思われる2.0m以内は1.0cm間隔)スベリ台を利用した幼児、子供の動線が、この直線と交わった点を目盛りにより実測し、記録する。同時に、利用者の年齢、性別、利用方法(滑る、かけおける、かけのぼるetc)もあわせて記録する。

3. 調査結果

54名の子供(男子33名、女子21名)について利用動線を実測し、これを統計的に処理して、平均値ならびに標準偏差を算出した。



4. 終わりに

以上のような調査によって得られた標準偏差は、最も子供が過剰利用する範囲であり、服装等に十分な管理や配慮が必要である。また最小～最大値の範囲には、植栽、他施設の設定、および他の遊戯施設の利用動線の交差等は、さなければならぬ。さらにこの利用動線を圧迫するような施設のつめこみはさけるべきである。

今回調査した「遊び」に対する利用動線だけでは、スペリ台に関して具体的な配置距離は出てこない。このような方法を利用した総合的な動線調査を行う必要がある。今回はその一つの例にすぎない。

訓練校生の余暇活動の特性に関する研究

職業訓練大学校
寺光 鉄雄

研究目的

本研究の出発点は、私が訓練校での実務実習期間中に訓練校生の余暇の過し方を見て、余りにも享乐的・利便的・消費的活動が多いことに気がついたところにある。

もっとも、余暇の過し方を一過的にレクリエーションに求めることはできないが、ここでは、余暇におけるレクリエーション活動の重要性を考え、また、レクリエーション活動に必要な不可欠な心理的要因として自主性が考えられることから、訓練校生の中にレクリエーションの活動があまりみられないのは、その自主性の水準によるものではないかと仮説をたてた。

研究方法

方法としては、余暇活動を社会的に分析するための質問紙と自主性を心理学的に分析するためのテスト(金子温房発行『自主性診断検査』)を用いた。この自主性というものは、10種の下位心理特性より形成されているが、調査の都合上、特に必要かつ重要と思われる5つの心理特性、すなわち自発性・主体性・自己主義・独創性・自律性を採択した。

調査対象には、全国の訓練校より6校を選び、さらにその中から339名の男子を無作為に抽出した。調査時期は、昭和53年11月14日より23日であった。また15才から17才の中等訓練校生を対象にしたため、総数339名に対して有効回収率は、92.8%の315であった。

なお、ここで職業訓練校の概要を調査結果の理解のためだけとすために付記する。

職業訓練校は、昭和33年制定の職業訓練法に基づき設立されたもので、現在、全国で400余校を数えるにいたっており、そこに学ぶものは、2万人にのぼっている。また訓練校生の年齢は、市広く分布している。

調査結果および考察

(1) 自主性診断検査の適応範囲は、小学五年から中学三年までであるため、このテストを訓練校生に実施しさいの信頼性を検討した。

その結果、自主性の総点を表わしたヒストグラムは、正規分布に近い分布をしており、各心理特性の平均点と標準偏差を他の学年のそれとくらべてみても、平均値には違いがあるものの、標準偏差に差はみられなかった。

しかし、自主性のテストの総点では小学五年から中学三年まで、わずかながらも年次上昇していく傾向にあるが、訓練校生の総点は、年次上昇している線上にあるとはいえず、特に、自己主義・独創性・自律性は、低い水準であった。

(2) 余暇時間は、訓練校生が高校生の生活時間帯とはほぼ同様なパターンのため、余暇時間量にも大きなちがいはなく、平日で5時間程度に集中し、休日では11時間以上が4割を占めた。

余暇活動について、実施率が高いものは、平日では、テレビ・ラジオ(85.0%)、雑誌・マンガ(58.1%)、何となくぶらつく(28.6%)、休日では、テレビ・ラジオ(77.9%)、ごろ寝・昼寝(42.8%)、雑誌・マンガ(38.1%)などであり、逆に実施率が低いものには、平日休日ともに、習いごと(平日1.2%、休日0.9%)、ボランティア活動(1.5%、0.0%)、同好者の会合(3.5%、5.6%)であった。しかしながら、テレビ・ラジオ、雑誌・マンガ、ごろ寝・昼寝は、長期休暇希望をたずねた結果では、それらは低い数値となった。

(3) 自主性の水準の高低と、自己啓発的余暇活動の実施率の高低が深く関係するのかわかるとするために、自主性の総点を標準偏差を尺度に、訓練校生を三つのグループに分け、それぞれの余暇活動内容を照らし合せた。

図-1 グループ別テレビ視聴時間

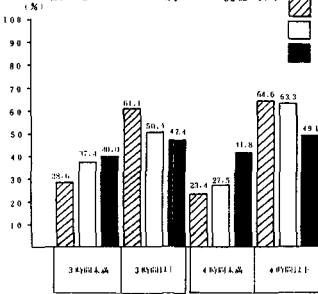
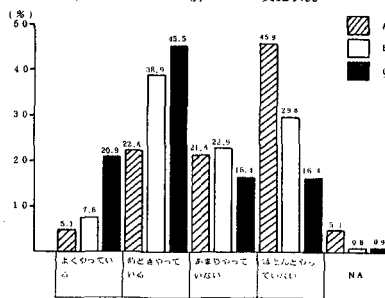


図1は、受身的・消費的活動の代表にテレビ視聴時間をとってみたものであるが、自主性の低いグループに視聴時間が長くみられた。

一方、図2は、自己啓発的・外向的活動の代表にスポーツ活動実施率であるが、自主性の高いグループに実施率が高くなされた。

以上のことをまとめると、訓練校生の余暇活動は、全体的には自主性の水準の低さを反映して、受身的・利便的傾向が強い。しかし、訓練校生の中でも自主性の水準の高低によって、傾向にちがいが表われた。

図-2 グループ別スポーツ実施状況



レジャーのイメージに関する一考察

— とくに東海大学学生におけるレジャーイメージについて —

東海大学大学院社会体育専攻
山崎 律子

1. 目的

この研究の目的は、個人のレジャーイメージを明確にすることにより、レジャー活動面のあり方に対する方向を見出し、今後の指導における示唆を再ようとするものである。とくに今回は、

1. レジャーイメージとしての反応は、どのような言葉、傾向を示すか。
2. 反応されたイメージがどのような強度傾向を示すか。

以上の2点の分析を中心に行なった。

II. 方法

刺 激 語 「レジャー」

- 記入方法 1. 「レジャー」という言葉を聞いて、頭の中に浮んでくる言葉を7つ記入する。ただし、この言葉は、形容詞(形容動詞も含む)とする。
2. 始めに記入した7つの言葉に対して、イメージ強度の尺度づけをする。尺度は、7から1までの段階となっている。

時間制限 20分間

対 象 者 表1. 表2を参照

東海大学体育学部社会体育学科
東海大学文学部北政文学科
各学科とも1年生を対象とし、合計190名(集計の対象は182名)

日 時 社会体育学科 昭和53年6月9日(金)
北政文学科 昭和53年6月13日(火)

III. 結果

1. 反応語について

① 反応語数について

表3に示すとおり反応語数となった。対象者182名に対して303種類である。ひとりあたり、1.66種類となる。学科別にみると、社会体育学科がひとりあたり、1.55種類、北政文学科が2.54種類であり、北政文学科の方がイメージが豊富でバラケティに富んでいる。男女別にみると、男子 1.87種類、女子 2.48種類となり、女性の方がイメージが豊富でバラケティに富んでいると思われる。

② 頻度の高い反応語について

表4に示すとおりである。「楽しい」「おもしろい」「うれしい」という言葉が上位3位までを占めている。学科別、男女別においても同じ傾向を示し、検定の結果、有意な差は認められない。

③ 反応語を傾向別に分類する

頻度の高かった20種類の反応語を、同じような傾向に分類すると、表5に示すとおりである。I類からIV類までの分類で、I類は、直接肯定的表現、II類は間接的表現、III類は中間的表現、IV類は否定的表現となっている。この結果、反応語の中には、肯定的なイメージと同様に否定的なイメージも存在する。しかし頻度数からみると、肯定的なイメージが数多く存在している傾向となる。

2. 反応語とイメージ強度について

① 強度の得点構成について

得点は、7段階に尺度づけをした7から1までをそのまま得点とした。表6に示されるように、最高得点合計4.9点から、最低得点合計1.6点までとなっており、平均得点3.4.98点となっている。ひとつの反応語の平均得点は4.89点となり、かなり高いイメージ強度として示される。学科別においては、社会体育学科、4.7点から1.6点、平均得点 3.4.28点、北欧文学科、4.9点から2.4点、平均得点 3.4.15点となっている。男女別にみると、男子4.9点から1.6点、平均得点3.3.93点、女子4.4点から2.7点、平均得点3.5.36点となっている。しかし、学科別、男女別において、検定の結果、有意な差は認められない。

② イメージ強度と反応の順位について

イメージ強度がどのように反応順位によって変化しているかをみてみると、表7、図1に示すとおりである。第1番目のイメージが最も強く、2番目、3番目になるにつれて、だんだん弱くなる傾向を示している。学科別、男女別においても、同じ傾向を示し、検定の結果、有意な差は認められない。このことは、私達がイメージするもの、第1番目にイメージするものが最も強いと考えられる。

③ 類別した反応語とイメージ強度

表8、図2に示すとおりである。第I類の直接的表現のイメージが強いイメージ強度を示している。これに対して、第IV類の否定的表現のイメージは、中程度のイメージ強度となっている。学科別、男女別においても、同じ傾向を示し、検定の結果、有意な差は認められない。このことは、レッジャーイメージにおいて、肯定的なイメージと同様に、否定的なイメージも存在するが、そのイメージ強度においては、肯定的なイメージが、強く存在していると考えられる。

IV. 考察 まとめ

1. レッジャーイメージを代表する言葉は、「楽しい」「おもしろい」「うれしい」の3種類である。
2. イメージは、第1番目にイメージする言葉が最も強いイメージ強度を示す。
3. レッジャーイメージの中には、肯定的な言葉の存在と、否定的な言葉の存在を認めることができる。しかし、肯定的な言葉の存在は、イメージ強度において、あまり強い傾向を示すに至っていない。

以上3つの傾向を知ることができた。この中において、とくに①否定的なイメージがありながら、強いイメージになっていないことは、レッジャーに対して肯定的であることがみられる。しかし反面、これらの否定的な側面を見逃してはならない。および②「楽しい」「おもしろい」「う

れしい」というイメージが、具体的にどのような活動となって具現するのか、楽しいとは、おもしろいとは、うれしいとは、どういうことか、個人にとってどうなのかを、さらに深く究明していかなくてはならないかと思われる。また今回の調査は、東海大学学生の一層に限られたが、今後さらに広範囲にわたる調査が必要と考えられる。

表1. 対象者、男女構成

性別	社会体育学科		北欧文学科		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%
男	87	87.00	58	64.44	145	76.32
女	13	13.00	32	35.56	45	23.68
合計	100	100.00	90	100.00	190	100.00

表2. 対象者、年齢構成

年齢	社会体育学科		北欧文学科		合計	
	人数	%	人数	%	人数	%
18	22	22.00	20	22.22	42	22.11
19	74	74.00	50	56.56	124	65.26
20	4	4.00	12	13.33	16	8.42
21	0	0	3	3.33	3	1.58
22	0	0	2	2.22	2	1.05
23	0	0	2	2.22	2	1.05
不明	0	0	1	1.11	1	0.53
合計	100	100.00	90	100.00	190	100.00
平均年齢	18.82		19.13		18.79	

表3. 反応語の頻度構成

	反応語数	人数	割合
社会体育学科	155	100	1.55
北欧文学科	208	82	2.54
男	258	138	1.87
女	109	44	2.43
合計	303	182	1.66

※ 集計対象
社会体育学科 100名
北欧文学科 82名
北欧文学科において、未解答者、2年生以上は集計対象外とした。

表4. 頻度の高い反応語

反応語	全 体			反応語	全 体		
	頻度	%	順位		頻度	%	順位
楽しい	171	93.96	1	すばらしい	24	13.19	11
おもしろい	104	54.14	2	健順的な	21	11.54	12
うれしい	95	52.20	3	かったるい	19	10.44	13
だるい	37	14.84	4	苦しい	17	9.34	14
つまらない	33	18.13	5	あきない	15	8.24	15
すがすがしい	28	15.38	6	ひまな	15	8.24	15
愉快な	28	15.38	6	高い	13	7.14	17
明るい	27	14.84	8	家族的な	12	6.59	18
疲れるような	27	14.84	8	自由な	11	6.04	19
優雅な	25	13.74	10	良い	11	6.04	19
				合計	733		

表5. 傾向別に分類した頻度の高い反応語

反応語	I. 類		II. 類		III. 類		IV. 類	
	頻度	頻度	頻度	頻度	頻度	頻度	頻度	
楽しい	171	明るい	27	ひま	15	だるい	37	
おもしろい	104	優雅な	25			つまらない	33	
うれしい	95	健順的な	21			疲れるような	27	
すがすがしい	28	高い	13			かったるい	19	
愉快な	28	家族的な	12			苦しい	17	
すばらしい	24	自由な	11					
		よい	11					
		あきない	15					
合計	450		135		15		133	
合計	733							

※ 類別における学科別、男女別の有意差 0.05 < P 有意差は認められない。

表6. イメージ強度と得点構成

得点合計	頻度	%	得点合計	頻度	%	
49	1	0.55	0.55	33	14	7.69
47	2	1.10	1.65	32	10	5.50
46	1	0.55	2.20	31	12	6.59
45	1	1.10	2.75	30	12	6.59
44	3	1.65	4.40	29	8	4.40
43	5	2.75	7.14	28	12	6.59
42	3	1.65	8.79	27	4	2.20
41	7	3.84	12.64	26	4	2.20
40	8	4.40	17.03	25	2	1.10
39	8	4.40	21.43	24	2	1.10
38	9	4.95	26.37	23	1	0.55
37	16	8.79	35.16	22	1	0.55
36	11	6.04	41.21	21	1	0.55
35	14	7.69	48.90	合計	182	100.00
34	10	5.50	54.40	平均	34.28	

※ 得点構成における 学科別 男女別の有意差 0.05 < P 有意差は認められない。

表7. イメージ強度と反応順位

反応語	第1反応語		第2反応語		第3反応語		第4反応語		第5反応語		第6反応語		第7反応語		合計
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%	
楽しい	69	37.91	37	20.33	26	14.29	25	13.74	16	8.79	26	14.29	22	12.09	231
おもしろい	77	42.31	57	31.22	49	26.94	35	19.23	39	21.47	27	14.84	35	19.23	219
うれしい	16	8.79	48	26.37	45	25.27	39	21.47	40	21.98	31	17.03	31	17.03	251
だるい	9	4.95	29	15.99	35	19.23	45	24.73	35	19.23	41	22.53	38	20.68	223
愉快な	3	1.65	11	6.04	17	9.34	28	14.99	27	14.84	29	15.91	39	21.47	142
すばらしい	2	1.10	6	3.30	6	3.30	8	4.40	12	6.59	13	7.14	16	8.79	63
かったるい	8	4.40	2	1.10	2	1.10	4	2.20	12	6.59	9	4.95	11	6.04	49
合計	182	100.00	182	100.00	182	100.00	182	100.00	182	100.00	182	100.00	182	100.00	182
平均強度	5.93		5.32		5.91		6.71		6.42		6.48		6.40		6.90

※ 強度と反応の関係における学科別 男女別の有意差 0.05 < P 有意差は認められない。

※ 強度と反応の関係において各反応ごとの傾向における有意差 0.05 > P 有意差は認められる。

表8. 傾向別に分類した反応語とイメージ数

	I 類		II 類		III 類		IV 類	
	頻度	%	頻度	%	頻度	%	頻度	%
7いっも	107	2378	18	1333	6	4884	13	977
6ほとんどいっも	184	4085	31	2296	3	2093	4	301
5たびたび	83	1844	33	2444	2	1165	17	1278
4時々	41	913	32	2370	4	1860	38	2857
3まれに	21	467	17	1259	0	0	31	2331
2ほとんどない	8	178	3	222	0	0	18	1353
1ほとんどない	6	133	1	674	0	0	12	902
合計	450	10000	125	10000	15	10000	133	10000
強度平均	5.9		4.91		5.73		3.71	

※ 強度と傾向別における学科別 男女別における有意差 0.05 < P 有意差認められない。

※ I 類とIV類における有意差 0.05 > P 有意差は認められる。

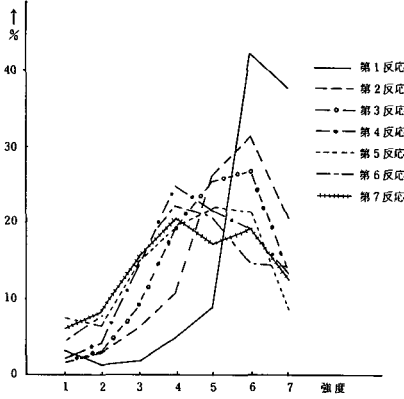


図1 イメージ強度と反応傾向

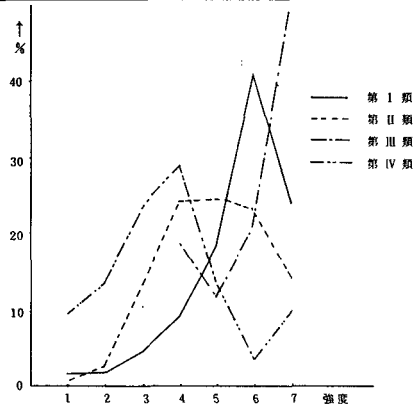


図2 傾向別に分類した反応語とイメージ数

学会ニュース

№20

MAY 1979

日本レクリエーション学会

本号の内容

- 昭和53年度事業報告
- 昭和53年度決算報告
- 昭和54年度事業計画
- 昭和54年度予算
- 第9回学会大会開催について

※昭和54年度の総会は諸般の事情により5月の開催を中止し、11月の第9回学会大会当日に開催されることになりました。

- 尚、①昭和53年度事業報告、②昭和53年度決算報告、③昭和54年度事業計画、④昭和54年度予算については4月18日の理事会において承認されました。

I 昭和53年度事業報告

1. 研究会の開催

No.	演 者	テ ー マ	期 日	会 場
1	シエーン E. シエロー 博士 (マサチューセツ 大学准教授)	アメリカにおける最近のレジャー動 向、公共レクリエーション行政シ ステム、大学における指導者養成 の現状について	53. 5.13	東京海洋 会 館
2	吉 田 正 志 (日本レクリエーション 協会事務局長)	全米レクリエーション会議に参加 して	53. 12.8	中野サン プ ラ ザ

恩 田 香 美	フィールドアスレチックの現状		
溝 原 祥 子 (東京女子体育大)			
都 丸 千 佳 子 (東京女子体育大)	精神薄弱者社会自立への過程と現状 —レクリエーションが 社会自立に果たす役割—		
中 村 友 治 (順 天 堂 大)	スイミングクラブの機能に関する研究 —某スイミングクラブに通う子供を 持つ母親の意識を中心にして—		
杉 浦 良 二 (東 京 農 大)	適正利用問題に関する計画的な研究 —特にSpace Capacity概念から みた尾瀬でのケーススタディー—	54. 2.23	岸 記 念 会 館
加 藤 正 (東 京 農 大)	遊楽施設における利用動線の調査研究 —スベリ台における 利用動線について—		
寺 光 鉄 雄 (職 業 訓 練 大)	訓練校生の余暇活動の特性に関する研 究		
山 崎 律 子 (東 海 大)	レジャーのイメージに関する研究 —とくに東海大学学生における レジャーイメージについて—		

* 学生による卒論発表会として実施

2. 総会の開催

- 期 日：昭和53年5月13日(土)
- 会 場：東京海洋会館
- 議 題：1) 52年度事業報告および決算報告
- 2) 53年度事業計画および予算
- 3) 役員改選
- 4) 第8回学会大会について
- 5) 国際余暇研究会について
- (注) 総会後に特別研究会が開催された
- (研究会開催№1 参照)

3. 第8回学会大会の開催

期日：昭和53年10月7日(土)
 会場：横浜市教育文化センター
 演題：20題
 特別発表：米國におけるレジャー・レクリエーション研究の動向
 A. V. サボラ博士(イリノイ大学名誉教授)

4. 国際余暇研究会の開催(他3団体と共催)

期日：昭和53年10月4日(水)～5日(木)
 会場：横浜国際会議場
 議題：POST MASS LEISUREを考える

5. 学会ニュースの刊行

№17号と別冊号 №18号

6. 研究助成

53年度研究助成金受領委員会

№	会員名	所属	研究課題	助成金
1	稲垣保彦	富山大学	農耕従事者 レクリエーション・トレーニングについて	100,000円
2	西野仁	東海大学	レクリエーション活動種目に 関する興味について 一人の性格との関係を中心として	100,000円

7. 組織の拡充

入会者 22名
 退会者 0名
 会員数 521名(昭和54年3月31日現在)

8. 支部活動

1) 近畿支部

- * 昭和53年度事業報告
- ① 定例研究会の開催

<第一回定例研究会>……昭和53年7月8日(土)、奈良女子大学文学部会議室

- 福田芳則(大阪体育大学)「組織キャンプ参加者の意識の分析
— 自己および他者修飾語による —」
- 永吉宏英()「学校体育施設開放利用スポーツ・グループの
社会的性格と機能」

- 山田 誠(神戸市外国語大学)「大学生の野外活動に関する研究」
- 丹羽昭明(奈良女子大学)「体育実技への態度を規定する要因の検討
— 女子大学の場合 —」

<第二回定例研究会>……昭和53年11月25～26日(土・日)、和歌山県白浜、
私学共済会館

- 座談会、「ゲーム指導の評価について」
- 小川寿一(大阪成蹊女子短期大学)「観光レクリエーションの意義と重要性について」

<第三回定例研究会>……昭和54年3月10日(土)、大阪体育大学会議室

- 卒業論文の紹介 —
- 魚田五郎(大阪体育大学)「婦人のスポーツ参加と意識について」
- 刈谷美智子()「ゲーム指導の評価に関する一試論」
- 才崎晋次()「大阪市民レクリエーションセンターの役割と今後の課題」

- ② 第8回日本レクリエーション学会大会への参加
昭和53年10月7日 横浜市教育文化センター

- ③ サボラ博士講演会、昭和53年10月2日、大阪府レクリエーション協会会議室
「米國の大学におけるレクリエーション発展の過程」

- ④ 学会近畿支部会ニュース(1～5号)の発行

- ⑤ 総会 昭和54年3月10日(土)、大阪体育大学会議室

* 近畿支部会会員数(S45年4月現在)
75名

2) 九州支部

※ 昭和53年度事業報告

① 総会(支部大会)

昭和54年3月25日 第5回大会 福岡市南区民センター
 講演・デスカッション
 テーマ「ヨーロッパのレクリエーション事情」
 川村英男(福岡大学)
 司会 林吉嘉(福岡教育大学)

② 定例研究会

(1) 6月22日 福岡市中央区福岡市青年センター
 発表者「福岡県のレクリエーション協会設立過程と
今後のビジョンについて」
 松延 一(福岡大学)

(2) 9月15日 福岡市中央区福岡市青年センター
 発表者「地域レクリエーションをめぐる管理上の問題点」
 石橋 保(福岡教育大学)

③ 機関紙発行

支部ニュース 第11号発行(昭和53年7月)
 第12号発行(昭和54年3月)

II. 昭和53年度決算報告

<収入の部> (昭和53年3月31日現在)

項目	予算額	決算額	増減額	内容
前年度繰越金	480692	480692	0	
入会金	50,000	22,000	△28,000	22人分
会費	1050,000	923,000	△127,000	235人分(新入会員、学生会員)
大会参加費	100,000	93,000	△7,000	75人分+18人分(当日会員)
雑収入	253,708	144,000	△209,708	抄録、機関誌
寄附	50,000	0	0	
計	1984,400	1533,092		

<支出の部>

項目	予算額	決算額	増減額	内容
事務費	14,400	4,160	△10,240	日常事務消耗品
会議費	7,000	8,000	△6,200	理事会会場費
通信費	160,000	85,190	△74,810	理事会通知、学会ニュース他雑誌
印刷費	600,000	342,950	△257,050	学会ニュースお知らせ誌総会印刷費
例会費	300,000	15,740	△14,260	会場費
大会費	255,000	15,710	△97,900	抄録代、竞选代、案内印刷代
総会費	50,000	5,610	6,010	会場費、通知
支部助成金	80,000	80,000	0	近畿支部、九州支部
研究助成金	200,000	200,000	0	福岡氏10万、西野氏10万
事務局運営費	20,000	20,000	0	交通費(学生アルバイト)
雑費	5,000	5,000	0	日本レク協会維持費
国際会議費	500,000	500,000	0	
計	1984,400	1474,150		

収入と支出の決算額差、589,42円が来年度繰越金

(注) △印は、予算額に対し、決算額の少ないもの。

III. 昭和54年度事業計画

1 研究調査活動

1. 昭和54年度総会の開催……………11月10日 徳山市
2. 第9回学会大会の開催……………11月10日 徳山市
3. 定例研究会の開催……………3回予定
4. 研究調査活動

2 広報活動

1. 機関誌「レクリエーション研究」№.7の発行
2. 学会ニュース発行……………№.19～22
3. 月刊「レクリエーション」への投稿

3 組織の拡充

1. 会員の獲得
2. 会員名簿の作成

4 日 程

月	東 京 地 区	近 畿 地 区	九 州 地 区
4	学 会 ニ ュ ー ス		
5	定 例 研 究 会		
6			
7	合 同 研 究 会		
8			
9	「レクリエーション研究」№7 投稿締切		
10			
11	第 9 回 学 会 大 会	学 会 ニ ュ ー ス	定 例 研 究 会
12			
1			
2	定 例 研 究 会	学 会 ニ ュ ー ス	
3	「レクリエーション研究」№7 発刊		

5 支部活動

1) 近畿支部

* 昭和54年度事業計画

- (1) 7月 第一回定例研究会
- (2) 10月 学会大会
- (3) 11月 第二回定例研究会(合宿研究会)
- (4) 3月 第三回定例研究会(卒業論文紹介、総会)
- (5) 会員名簿作成

2) 九州支部

* 昭和54年度事業計画

- ① 支部総会・研究大会
9月下旬 福岡市南区民センター
- ② 定例研究会(2回)
(1) 6月上旬 福岡大学
(2) 11月下旬 青年センター
- ③ 機関紙発行(2回)
13号 6月中旬
14号 9月下旬

IV. 昭和54年度予算(案)

<収入の部>

項 目	予 算 額	内 容
前年度繰越金	5,894.2	
入 会 金	5,000.0	50人分
会 費	1,050,000.0	350人分(新入会員も含む)
大 会 参 加 費	130,000.0	130人分
雑 収 入	161,058.0	
寄 付	50,000.0	
計	1,500,000.0	

<支出の部>

項 目	予 算 額	内 容
事 務 費	15,000.0	日常事務消耗品代
会 議 費	6,000.0	理事会、幹事会、会場費
通 信 費	16,000.0	理事会通知、機関誌郵送
印 刷 費	66,000.0	学会ニュース案内、その他
例 会 費	30,000.0	会場費
大 会 費	220,000.0	抄録代、発送代、会場運営費
総 会 費	8,000.0	会場費
支 部 助 成 金	100,000.0	近畿、九州
研 究 助 成 金	150,000.0	
事 務 局 運 営 費	20,000.0	交通費(アルバイト)
雑 費	5,000.0	日本レク協会維持費
計	1,500,000.0	

V. 第9回学会大会開催について

第9回学会大会が下記要領で開催されます。会員の皆様の研究発表と参加を期待しております。

期 日 : 11月10日

会 場 : 山口県徳山市

発表資格 : 昭和54年度会費を納入した学会員

発表形式 : 口頭発表

発表時間 : 一題15分(3分問答応答を含む)。

発表申し込み締切 : 昭和54年8月31日

昭和55年度事業計画(案)

- 1. 研究調査活動
 - 1. 第10回学会大会の開催.....8月2日 金沢市内
 - 2. 昭和55年度総会の開催.....5月
 - 3. 定例研究会の開催.....3回予定
- 4. 研究調査活動

- 2. 広報活動
 - 1. 機関誌「レクリエーション研究」№8の発行
 - 2. 学会ニュースの発行.....№21~22
 - 3. 月刊「レクリエーション」への投稿
- 3. 組織の拡充
 - 1. 会員の獲得
- 4. 日程

月	本 部	近畿支部	九州支部
4月			
5月	総会・研究会		
6月			九州レク学会ニュース
7月	学会ニュース	第1回定例研究会	
8月	第10回学会大会		
9月			講演会
10月	学会ニュース		
11月	研究会	第2回定例研究会	九州レク学会大会・総会
12月			九州レク学会ニュース
1月			
2月	研究会		
3月	「レクリエーション研究」発行 卒業論文		研究会

昭和55年度予算(案)

(収入の部)	
項目	予算額
前年度繰越金	22,112
入会金	30,000
会費	1,200,000
大会参加費	150,000
雑収入	80,888
募 入	30,000
計	1,513,000

(支出の部)	
項目	予算額
事務費	20,000
会議費	20,000
通信費	250,000
印刷費	788,000
印 象	30,000
大会費	50,000
雑費	50,000
支那助成金	100,000
研究助成金	150,000
事務局運営費	40,000
雑 費	15,000
計	1,513,000

日本レクリエーション学会役員および事務局(案)

(任期：昭和55年5月11日～57年度総会終了日)

名譽会長	三笠宮崇仁 親王殿下 (福岡大学)
名譽副会長	川 村 英 雄 (日本体育大学)
名譽幹事	高 橋 謙 昭 (国宗基督教大学)
名譽幹事	三 隅 達 郎 (相模女子大学)
名譽幹事	山 崎 謙 通 (相模女子大学)
名譽幹事	長 前 川 峯 雄 (東京大学)
名譽幹事	江 藤 慎 四郎 (近畿支部会長・福岡大学)
名譽幹事	梶 小 川 寿 一 (近畿支部会長・大阪成蹊女子短期大学)
名譽幹事	小 川 健 一 (カウンセラー協会)
名譽幹事	深 町 一 夫 (松戸商工会議所)
名譽幹事	浅 田 隆 夫 (筑波大学)
名譽幹事	池 田 勝 隆 (筑波大学)
名譽幹事	高 橋 浩 二 (女子聖学院短期大学)
名譽幹事	高 橋 士 五 八 (東京農工大学)
名譽幹事	遠 藤 和 敏 (東海大学)
名譽幹事	田 中 祥 子 (津田塾大学)
名譽幹事	田 村 喜 代 (東京学芸大学)
名譽幹事	長 谷 川 純 三 (筑波大学)
名譽幹事	野 野 田 洋 一 (スポーツコンクリート工学研究)
名譽幹事	松 浦 三 代 子 (東京女子体育大学)
名譽幹事	松 田 義 孝 (余暇開発センター・筑波大学)
名譽幹事	松 原 洋 三 (立教大学)
名譽幹事	高 下 桂 治 (順天堂大学)
名譽幹事	吉 田 正 志 (日本レクリエーション協会)
九州支部選出理事	秋 吉 高 範 (福岡教育大学)
九州支部選出理事	金 崎 良 三 (九州大学)
近畿支部選出理事	青 木 泰 三 (大阪産業女子短期大学)
近畿支部選出理事	草 川 一 枝 (滋賀大学)
近畿支部選出理事	山 口 守 隆 (大阪体育大学)
近畿支部選出理事	西 田 勝 次 (大阪産業大学)

幹 事	浅 野 晃 (日本レクリエーション協会)
幹 事	川 向 妙 子 (東海大学)
幹 事	西 野 仁 (東海大学)
幹 事	藤 岡 文 男 (上智大学)

九州支部事務局長	大 谷 壽 博 (福岡大学)
九州支部事務局長	T E L . 0 9 2 - 8 7 - 6 6 3 1
近畿支部事務局長	水 吉 宏 美 (大阪体育大学)
近畿支部事務局長	T E L . 0 7 2 6 - 3 4 - 3 1 4 1

※前、総会後開かれた5月理事会において、浅田隆夫氏(筑波大学)が理事長に選ばれた。

理事会だより

昭和55年度 5月理事会

昭和55年5月10日

於・大阪ガストレーニングセンター(7名)

新理事長に浅田隆夫氏(筑波大学)の就任が承認された。

昭和55年度 6月理事会

昭和55年6月6日

於・岸記念体育会館(12名)

- 1. 理事職務分担が下記の通り決定された。(○印は責任者、※印は幹事、△印は事務局長)。(企画委員会) 池田、岡田、篠田、田中、青木、*加藤 (企画研究委員会) 池田、進士、松澤、松浦、*野野田、*細野 (広報渉外委員会) 高橋、前野、宮下、田村、*浅野、*川向 (財務計画委員会) 長谷川、深町、松田、*藤田 (支部活動促進委員会(近畿)) 青木、*藤川、*山田、*水吉 (支部活動促進委員会(九州)) 秋吉、*金崎、*大谷
- 2. 第10回学会大会プログラム内容決定。
- 3. 学会員外の人にも学会大会への参加を積極的に呼びかける。
- 4. 第34回全国レクリエーション大会協賛承認。
- 5. 支部活動促進委員会(九州)の役員推薦を公認し、各支部は最低1名以上推薦する。入会申込書、日本レク協会公認推薦書に添付する。
- 6. 「レクリエーション研究」投稿規定第6項改訂版の提出義務をなくした。
- 7. 昭和55年度研究助成金は総額15万円のうち3割に支給する。
- 8. 能例研究会を月例研究会とし、研究活動の充実をはかる。
- 9. 理事会を毎月第1金曜日に行なうものとする。

昭和55年度 7月理事会

7月4日

於・上智会館(8名)

- 1. 財団に幹事として青木、藤氏(中央電通通信学)を承認し、庶務および広報渉外委員会に配属を決定した。
- 2. 入会希望者募集大会承認(氏名は「事務局だより」の欄参照)。
- 3. 3月理事会内容決定(「研究活動」の欄参照)。
- 4. 理事会内各委員会職務内容検討。
- 5. 「学会概要」パンフレット(協会のPR用)作成決定。

研究活動 昭和55年度 月例研究会開催要項

- (9月12日) 6:00~8:00 P.M. テーマ:「余暇生活促進モデル・プログラムについて」 ~余暇教育、余暇相談、余暇長官推薦への備前~ 講師:今井 毅(日本体育大学助教授) 会場:岸記念体育会館 参加費:1,000円
- (10月17日) 5:30~8:00 P.M. テーマ:「余暇およびレクリエーションに関する文献情報検索システムの開発動向」 講師:Gerald S. Kenyon(ウェオータル大学教授) 会場:上智大学 参加費:1,000円(講義費) 2,000円(レセプション)
- (11月22日) (23日) 研究会 テーマ:検討中 会場:筑波大学 参加費:未定 その他:ソラー・システム(太陽熱利用)レクリエーション施設見学の予定。
- (2月1日) 6:00~8:00 P.M. テーマ:「レクリエーション研究とレク指導との関係」 (日本レクリエーション協会加盟誌情報交換会を交えたシンポジウム) 会場:上智大学 参加費:1,000円
- (3月7日) 研究会、学位論文発表会 会場:未定 参加費:未定

◎参加希望者は、返信用切手50円を同封の上参加要項を事務局までご連絡下さい。

昭和55年度 特別研究会報告

80年代における企業レクリエーションの方向

~企業内の健康づくりはいかにあるべきか~

昭和55年5月10日

於・大阪ガストレーニングセンター

「企業レクリエーション対策をふりかえって」

松下電器産業㈱顧問 遊津 猛

氏は、企業のレクには大きな意義があるのに、それが十分に理解されていないと前置きし、近年、経営活動におけるレク的位置づけが変わってきており、レク活動そのものの目ざすも変わってきている。レクのめざすところは、働く人間の健康に他ならぬと強調した。

経営の責任者というものは、働く人間の懐に利益を上げることは許されない。レクを積極的に母と、自己実現できる場を多くつくること労働管理であり、またそのような経営理念に立たなくてはならない。レクの場を積極的に与え、労働時間を短縮し、自分で自由に活動できる時間をできる限り多く生活の中に作り出すことである。

これを氏はマズローの欲求の5段階を使って説明する。最初の3段階は消極的欲求であり、あと2の4、5段階は積極的欲求である。この第4、5段階を満足させることが人間性の尊重であり、これからの企業レクの課題であるという。これからの企業レクの方向としては、自己実現の場がなくなりレクであるという認識の上で、生産性をおとさず、コストを上げることなく、労働時間をできるだけ減らし、余った時間を健全な遊びに使ってもらう。それに対して企業がプログラムの展開やファシリティーにおいて120%に近い援助をすることが大切であると結んでいる。

「企業レクリエーションと行政」

~勤労者健康づくり対策の視点~

労働省労働衛生課長 林部 弘

とくに「中年労働者をどうするか」という新たな命題に対して労働衛生行政が推進してはならないことを述べた。めざすものとしては、①健康生活の確保、②労働衛生の教育をどうするか、③適切な運動習慣をつけるにはという3点である。そして、それを企業内でいかにかまえていくかという見地から、企業内健康づくりの一方策を提案した。

現状では、運動会の担当者と健康づくりの担当者との間に連携がない。今後は部門間の連携をはかって、総合的な健康づくりを推進していくことが大切である。そのためには、健康づくりに対してトータルな考え方のできる推進委員会を設置することが必要である。その委員会は、現場のリーダーを中心にしたプロジェクトであり、そのリーダーには、既存のレク・リーダーや衛生管理士を再教育して当てるのがよいだろうというのが氏の考えである。

「海外における企業内レクリエーションの動向」

筑波大学助教授 池田 勇

スライドを併用しながらの発表。今年の2月にアメリカのカーター大統領の呼びかけで、「全米みんなのフィットネス会議」が開催されたわけは、年間医療費2,450億ドル(約61兆円)を削減するための協力を得るところにある。カーター大統領の提案の一つに、企業内フィットネス・プログラムの実施と施設の設置がある。それに基づいてアメリカの企業が実施している方策と日本と比較してみる。その中でも項目の特徴があげられる。

- ①勤務時間中にフィットネス・プログラムが実施されている。業務命令で週2〜3回、1回1時間を実施していること。
- ②専任指導者(職員)を設置。フィットネス・ディレクターと称し、専門職としての位置を確立しつつある。全米フィットネス・ディレクター協会も存在する。
- ③施設の設置。フィットネス・センターとか、ヘルス・サービス・センターと称する施設を設置している。それを持たない企業はYMCAの施設を利用して。
- ④メディカル・チェックの実施。企業では運動負荷テストをするのが常態となっていて、それに要する経費には、税制優遇措置がほどこされるべきであると提言されている。
- ⑤ライフ・スタイルを変えようという。社内のカステリアのメニューに食事のカロリーを表示したり、肥満対策として標準体重を維持している者には、年間給与の1.5%のボーナスを支給するとか、体力に応じて5段階に色別したトレーニングウェアとシューズを支給するなどの方策を講じている。
- ⑥トップ層の理解が深い。ジョギングやラケットボールが経営者のステイタス・シンボルになっている。

現在、アメリカは一時期の「ノー・ワーク、ノー・ペイ」ではなく、「ノー・ワーク、パット・ペイ」に変わったという。健康づくりは企業にとってマイナスではなく、プラスであるという考え方が定着してきている。

80年代の職場レクは、過去の価値観から脱却し、人間の高度な欲求を完たしていく方向を基盤にして、中高年対象とも共通した健康づくりを推進していくために、新しい意義が示されている。

海外情報

▶全米企業体力づくり推進協会年次総会

と き：1980年9月9日(日)〜12日(水)
と ころ：カナダ トロント市
会場でのフィットネス(体力づくり)について考える世界唯一の会議である。日本からもこれに参加するなどのツアーが企画され、現在参加者を募集している。詳しくは事務局にお問合せ下さい。

▶全米レクリエーション協会(NRPA)年次総会

と き：1980年10月19日(日)〜23日(木)
と ころ：米国アリゾナ州フェニックス市
「Recreation Research Review」Vol. 7, No. 3 (December, 1979) 新刊!!
カナダのOntario Research Council On Leisureから機関誌が購送されてきました。内容は下記の通りです。閲覧希望の方は事務局までお問い合わせ(特出しは、禁止です)。

Contents

(Editorial)

A Surfeit of Surveys

(Research Articles)

1. Beyond Professionalism (William Thorsteinson)
 2. Goals for Municipal Recreation in Ontario: Issues for the Profession (Tom Goodale, Peter Witt)
 3. Recreation in Action: Some Thoughts on Application (Arthur Leonoff, Peter Witt)
 4. Co-operation Among Municipalities for Recreation Purposes (Donald Reid)
 5. The Recreation Graduates in the Field: University of Ottawa Recreation Graduates (Claude Cousineau)
 6. Organizational Commitment: Turning Employees On (George Nogradi)
 7. The Recreation Researcher and the Politician (Michael Steer)
- (Book Review)
Recreation and Outdoor Life Directory (Stephen Smith)
(New Resources)

公 示

▶研究助成金申請公募

昭和55年度事業予算の中に僅かながら研究助成金が組み込まれました。下記の要領に従って公募し、その中から理事会において選定された研究に対し助成を行ないます。

記

1. 研究分野 レジャー、レクリエーションの分野における研究。
2. 応募資格 昭和55年度会費を納入した日本レクリエーション学会会員。
3. 研究報告 本年度あるいは来年度においてレクリエーション学会大会に発表するか、「レクリエーション研究」に投稿することができるもの。
4. 助 成 額 総額15万円で、1〜3編に支給する。
5. 申込方法 申請書と事務局にご請求下さい。(50円の手回封のこ)。
6. 申込時期 昭和55年8月末日

▶機関誌「レクリエーション研究」第8号投稿募集

1. 投稿期限 昭和55年11月29日(日)
2. 投稿規定 「レクリエーション研究」第7号92頁参照。
※但し第6項は、6月理事会において下記の様に改訂されました。
「6. 邦文論文・欧文論文とも、邦文論文(800字以内)あるいは欧文摘要(Resume)のどちらかをつけること。ただし邦文論文の邦文摘要、欧文論文の欧文摘要については、編集委員会がそれぞれ英訳・和訳するものとする。
3. 郵 送 先 〒150 東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館
朝日本レクリエーション協会内
朝日本レクリエーション学会「編集委員会」

〇書けてご送付下さい。

事務局だより

8月理事会開催のお知らせ

と き：昭和55年8月7日(日) 11:30A.M.〜12:30P.M.
と ころ：石川県立社会教育センター
議題：①月別研究会について②各委員会報告③専門分科会設立について④その他

9月理事会開催のお知らせ

と き：昭和55年9月12日(金) 5:30〜6:00P.M.
と ころ：岸記念体育会館
議題：①「レクリエーション研究」第8号について②月別研究会について③その他

▶新入会員(承認期日：昭和55年7月4日)

市川道子(神戸YMCA)、原田克己(富士経済調査会)、日和三千男(上智大学)、近藤良幸・畑 孝幸・浜口義信(政大大学)、芳賀健治(山口女子大学)、新出昌明・瀬戸純子(東海大学)、斎藤虎臣・山本義典・松原 茂・朝倉徳雄・小川 貴・阿部博樹・黒木 京・松村悦博・井手幸太郎(日本大学)、宮崎良雄(地方公務員)、宮崎千恵子(主婦)、黒木 隆(中央電気通信大学)、藤生 恵(東京農業大学)、満井雅之(朝石橋エクステリア)

▶「昭和55年度会員名簿」について
訂正事項がありましたら、書置き事務局に必ずお知らせ下さい。

▶事務局専用電話開設!!
Tel. 03-460-5464(月〜金：9:00〜17:00)
※電話によるご連絡は、できる限り月曜日にお願ひします。

会費未納の方へ会費納入のお願い

昭和55年度の会費(正会員4,000円・学生会員500円)の納入期限は5月31日でしたが、未納の方は緊急納入されるようお願いいたします。
振替用紙が同封されている方は、会費未納の方です。振替用紙に記された金額を至急お支払い下さい。尚、領収書は「郵便振替払込受領証」をもちまして、かえさせていただきます。正式の領収書をご希望の方は事務局までご一報下さい。

▶資料販売

- 機関誌「レクリエーション」第1号(1972)〜第7号(1979年)
各号：1,000円(送料200円)
 - 「学会大会研究発表抄録」
・日本レクリエーション研究会
第1回大会号(1965)〜第7回大会号(1970)
各号：1,000円(送料300円)
 - ・日本レクリエーション学会
第1回大会号(1971)〜第9回大会号(1979)
各号：500円(送料140円)
- ※上記資料ご希望の方は、郵便振替(東京5-42971「日本レクリエーション学会事務局」)にて、ご注文・ご送金下さい。

会報「学会ニュース」No.21

発行日 昭和55年7月14日
責任者 日本レクリエーション学会
理事長 浅田隆夫
編 集 広報渉外委員会
事務局 〒150 東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館
朝日本レクリエーション協会内
電話 (03) 460-5464
印刷所 〒112 東京都文京区小日向4-4-12
三鈴印刷機 電話 (03) 941-1181

学会ニュース

№.22

OCTOBER 1980

日本レクリエーション学会

ご案内

< 研究合宿 開催要項 >

- 1 テーマ：レクリエーション理論と実践の統合をめざして
- 2 目的：レクリエーション研究の方向を現場サイドの観点から追求すると共に、会員相互の親睦を図る。
- 3 日時：昭和55年11月22日(土)～23日(日) (1泊2日)
- 4 場所：筑波大学体育センター

茨城県新治郡桜村 Tel. 0298 (53) 6376・6378 池田勝研究室
国政府整備土浦駅下車、駅前2番バス乗場より「筑波大学西」「筑波大学中央」「石下駅」行バスにて30分「筑波大学西」バス停下車歩5分、あるいは「高エネルギー研究所」行バスにて「筑波大学南」バス停下車、歩3分。タクシーでは土浦駅より20分。

- 5 宿舎：筑波大学資金財団 筑波研究センター
(茨城県新治郡桜村妻木字西山945-5 Tel. 0298 (57) 5152)
- 6 参加費：正会員・特別会員 7,000円
若年費・3 学生会員 5,000円
業を含む 学生会員でない方 8,000円
- 7 募集人員：30名
- 8 日程

日	11月22日(土)	11月23日(日)
7		
8		
9	現地集合	開会
10		講義 トレーニング・コンディショニング
11		講義 トレーニング・コンディショニング
12	夕食(体育センター)	夕食(体育センター)
1	講義 トレーニング・コンディショニング	講義 トレーニング・コンディショニング
2	研究論文(レクリエーションの歴史)	研究論文(レクリエーションの歴史)
3	研究論文(余暇生活の発展をめざして)	研究論文(余暇生活の発展をめざして)
4	研究論文(余暇生活の発展をめざして)	研究論文(余暇生活の発展をめざして)
5	研究論文(余暇生活の発展をめざして)	研究論文(余暇生活の発展をめざして)
6	研究論文(余暇生活の発展をめざして)	研究論文(余暇生活の発展をめざして)
7	研究論文(余暇生活の発展をめざして)	研究論文(余暇生活の発展をめざして)
8	研究論文(余暇生活の発展をめざして)	研究論文(余暇生活の発展をめざして)
9	研究論文(余暇生活の発展をめざして)	研究論文(余暇生活の発展をめざして)
10	研究論文(余暇生活の発展をめざして)	研究論文(余暇生活の発展をめざして)
11	研究論文(余暇生活の発展をめざして)	研究論文(余暇生活の発展をめざして)
12	研究論文(余暇生活の発展をめざして)	研究論文(余暇生活の発展をめざして)

◎尚、出欠の御返事を同封のハガキにて11月15日(土)迄にお知らせ下さい。

公示

< 『レクリエーション研究』第8号投稿募集 >

- 1 投稿期限 昭和55年11月28日(土)
- 2 投稿規定 『レクリエーション研究』第7号92頁参照。
※但し第6項は、6月理研会において下記の様に改訂されました。
① 6. 邦文論文・英文論文とも、邦文摘要(800字以内)あるいは英文摘要(Resume)のどちらかをつけること。ただし邦文論文の邦文摘要、英文論文の英文摘要については、編集委員会がそれぞれ英訳・和訳するものとする。
- 3 郵送先 〒150 東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館
財)日本レクリエーション協会内
日本レクリエーション学会【編集委員会】

研究活動

< 昭和55年度 月例研究会開催要項 >

- < 2月6日会 > 6:00～8:00 P.M.
テーマ:『レクリエーション研究』とレクリエーションの視点
(日本レクリエーション協会公認上級指導者会を交えたシンポジウム)
会場:岸記念体育会館
参加費:1,000円(学生 500円)
 - < 4月6日会 > 6:00～8:00 P.M.
内容:レジャー・レクリエーションに関する学士・学位論文発表
会場:岸記念体育会館
参加費:1,000円(学生 500円)
- ◎参加希望者は、返信用封手 50円を同封の上参加要項を事務局までご請求下さい。

< 第10回 学会大会 報告 >

第10回を迎えた今年度の学会大会は、8月2日に石川県金沢市で開催された。研究発表数は21題で、2会場に別れ、全国レクリエーション大会参加者を含めて約200名の参加者を得た。特別座談会に全米キャンプ協会の会長がキックオフ大会挨拶、ジョージ・カーク博士を招き、野外教育活動の動向について、わが国にも重要な多い意見を賜った。また、10周年を記念するシンポジウムが、前川、塩谷、三浦の3氏の切り掛けで三氏によって「(余暇・秋谷論議)」、10年間の学会活動の反省と今後の展望について協議がなされた。

さらに大会前後、金沢グランドホテルで10周年記念パーティが開かれ、約50名の会員が集まり、盛況な祝賀会となった。

< 9月 月例研究会 報告 >

日本体育大学レクリエーション研究室の今井敏夫教授を講師に、9月20日午後6時から岸記念体育会館講堂において開かれた。

今井氏のテーマは「余暇生活創造プログラムについて - 余暇能力開発(余暇教育/余暇相談/余暇地方)の現場への適用」という興味深いものであり、パンフレット「余暇生活創造プログラム - ゆとりある充実した生活の創造のために - その考え方と進め方」や「レジャーシート『ファンタジー』」「ライフスタイリング・ノート」などの資料を使いながら実技を含めた豊富な内容の発表であった。なお、発表の趣意については、雑誌『レクリエーション』11月号で紹介されている。

< 10月 月例研究会 報告 >

特別招待教授として来日中のカナダ・ウォータール大学教授レジャーおよびスポーツ社会学の世界的権威者であるシュルト・ケニン博士を迎え、10月17日夕刻に上智大学大会館で10月例会を開いた。

ケニン氏は、余暇文献情報検索システムの発展的動向を、さる1月にブラッセルで開催されたLINK(余暇情報ネットワーク)会議の成果およびその後の北米、ヨーロッパの動向、さらにはウォータール大学のSIRLSと称する文献情報センターの紹介などを聴き、余暇文献情報に関する国際的なネットワークの確立の重要性とそれに伴うさまざまな問題点を指摘し、研究者相互間の協力によってこれらの問題を克服していくべきことを強調された。

理事会だより

< 8月 理事会 >

昭和55年8月2日
於・石川県立社会教育センター(12名)

- 1) 入会希望者5名の入会を承認(氏名は、別刷「会員名簿追加・訂正」参照)。
- 2) 4～7月事業および収支報告。
- 3) 8～3月事業案(学会古資料整理・月例研究会開催・レクリエーション研究の分類検討・来年度研究プロジェクト検討・関連学会と機関誌交換・賛助会員獲得など)承認。

< 9月 理事会 >

昭和55年9月12日
於・岸記念体育会館(14名)

- 1) 昭和55年度研究助成金支給研究として、「レクリエーション教育とその関連領域との概念の明確化に関する研究」(近藤良幸・三浦 裕:筑波大学)と「大学・短期大学一般体育科目における野外レクリエーション教育の実態調査研究」(御岡文男:上智大学)の2題を選定し、それぞれ10万円ずつ支給することに決定した。
- 2) 第10回学会大会総括。
- 3) 11月研究合宿の内容検討。
- 4) 入会希望者2名の入会を承認(氏名は別刷参照)。

< 10月 理事会 >

昭和55年10月17日
於・上智会館(4名)

- 1) 入会希望者7名の入会を承認(氏名は、別刷参照)。
- 2) 第11回学会大会開催日について検討。期日・場所については理事長に一任することを決定(昭和56年11月上旬、埼玉県の予定)。
- 3) 11月研究合宿について最終打合せを行った。
- 4) 機関誌『レクリエーション研究』8号の投稿募集方法について検討。

事務局だより

< 会費納入のお願い >

昭和55年度の会費(正会員4,000円・学生会員500円)の納入期限は5月31日でしたが、未納の方は至今納入されるようお願いいたします。

振替用紙が同封されている方は、会費納入の方です。振替用紙に記された金額を至急お支払い下さい。尚、領収書は「郵便振替社会受領証」をもちまして、かえさせていただきます。正式の領収書をご希望の方は事務局までご一報下さい。

< 資料販売 >

- 機関誌『レクリエーション研究』第1号(1972)～第7号(1979年)
各号:1,000円(送料200円)
 - 『学会大会研究発表抄録』
 - 日本レクリエーション研究会
第1回大会号(1965)～第7回大会号(1970)
各号:1,000円(送料300円)
 - 日本レクリエーション学会
第1回大会号(1971)～第9回大会号(1979)
各号:500円(送料140円)
- 本上記資料ご希望の方は、郵便振替(東京5-42971「日本レクリエーション学会事務局」)にて、ご注文・ご送金下さい。

< 勤務先・住所などを要変更された方へ >

書面にて必ず事務局にお知らせ下さい。また「会員名簿」に訂正すべき箇所がありましたらお知らせ下さい。

< 事務局へのご連絡 >

事務局専用電話
Tel. 03-450-5464 (月～金:11:00～18:00)
*電話によるご連絡は、できる限り月曜日にお願いたします。

会報『学会ニュース』No.22

発行日 昭和55年10月31日
責任者 日本レクリエーション学会
理事長 浅田 藤夫
編集 広報部委員会
事務局 〒150 東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館
(財)日本レクリエーション協会内
電話 (03) 460-5464

学会ニュース

№23

MAY 1981

日本レクリエーション学会

ご案内

〈第11回日本レクリエーション学会大会・昭和56年度総会〉

開催要項

- 日時：1981年11月8日(日) 9:00～17:00
- 場所：国立編入教育会館
埼玉県比企郡嵐山町大字菅谷728番地
Tel. 049362-6711

3. 日程：

9:00	10:00	12:00	1:00	1:30	2:30	2:40	5:00
受付	研究発表	昼休み	総会	研究発表	休演	専門分野別総会	シンポジウム

- 総会議題：
 - 昭和55年度事業・決算報告
 - 昭和56年度事業・予算案議
 - その他
- 大会参加費：正会員・特別会員 1,000円
(当日徴収) 学生会員 500円
賛助会員 無料

研究発表申込み要項

- 発表資格：昭和56年度会費を納入した学会員
- 発表形式：口頭発表
- 発表種別：共同研究をのぞき、1人1回
- 発表時間：一題15分(質問3分を含む)
- 発表申込：同封の申込書に所定事項を記入し、返信用封筒(60円切手貼付)を添え、事務局へ郵送して下さい。
- 発表申込締切：1981年8月31日(必ず)
- 発表抄録願提出：申込書を受理後、1週間以内に、事務局から規定の原稿用紙を送りますので、タイプまたは楷書による手書き(墨字)の原稿を作成して、9月20日(必ず)までに事務局へお送り下さい。

公示

〈『レクリエーション研究』第9号投稿募集〉

- 投稿期限：1981年11月30日(月) 必ず

字におけるレク教育について熱弁をふるわれた。江藤氏は、産屋体大の特色として、フィジカル・レク・リーダーの養成、野外レクの重視、社会体育指導者という名称の上でのレク・リーダーの養成をあげられた。講演後、参加者から「是非総合レクの大学にしたい」との意見も出され、江藤氏も努力を約束された。なお、詳しい内容は、月刊誌『レクリエーション』6月号に掲載される予定。

◎月刊『レクリエーション』に掲載された各研究会報告のコピー入手希望の方は、1研究会に付40円分の切手と60円切手貼付の返信用封筒同封の上、お申込み下さい。
月刊『レクリエーション』購読ご希望の方は、直接日本レク協会(Tel. 03-468-4381)へ。

理事会だより

〈1月理事会報告〉

- 日時：昭和56年1月16日(金) 6:00～8:00 P.M.
場所：上智会館
出席者：江橋・小川・池田・岡田・窪田・進士・松浦・前野・田村(永吉・師岡)以上9名
- 入会希望者5名、退会希望者2名の入会・退会を承認。
 - 『レクリエーション研究』第8号内容決定、編集委員会組織(企画研究委員会・広報渉外委員会理事で委員会結成)。
 - 2月・3月例会研究会の内容検討。
 - 昭和56年度事業案検討。

〈昭和56年度第1回理事会報告〉

- 日時：昭和56年4月17日(金) 5:30～6:30 P.M.
場所：上智大学
出席者：池田・池田・窪田・進士・田中・松浦・宮下(永吉・浅野・黒木・師岡)以上7名
- 入会希望者17名(学生会員5名を含む)退会希望者1名の入会・退会を承認。
 - 新幹事として藤戸純子女士(財)日本レクリエーション協会を承認。
 - 『レクリエーション研究』第8号・『学会ニュース』№23印刷費用削減のため発行日を5月下旬に延期決定。
 - 昭和55年度事業・決算報告を承認し、昭和56年度事業・予算案を検討、修正案提出を事務局へ要す。
 - 2月研究会の成果を踏まえ、学会の今後についての提言が行われ、レク指導の実践現場と研究の接点をより求めていくことを確認。

〈第2回理事会報告〉

- 日時：昭和56年5月9日(土) 2:00～4:00 P.M.
場所：上智会館
出席者：池田・池田・進士・田中・前野・宮下・深町・松浦(師岡)以上8名
- 入会希望者2名の入会を承認。
 - (財)日本レクリエーション協会評議員として成田隆夫氏(学理理事長)を推せん。
 - 昭和56年度事業・予算案(修正案)を承認。
 - 学会員の研究動向・学会への要望などのアンケート調査実施決定。

- 投稿規定：『レクリエーション研究』第8号最終頁参照
但し、校正は編集委員会の責任校正とする。
- 郵送先：〒150 東京都渋谷区神南1-1-1
(財)日本レクリエーション協会内
日本レクリエーション学会 編集委員会

お知らせ

〈日本学術会議の登録学会に!!〉

日本レクリエーション学会は、3月5日付で、日本学術会議への登録を認められました。

研究活動

〈昭和56年度 研究集会開催要項〉

<4月17日(金)> 6:30～8:00 P.M.

特別講演会

「産屋体育大学におけるレクリエーション指導者養成構想について」(江藤慎四郎氏)

<3月>

レジャー・レクリエーションに関する学術・学位論文発表会

〈第1回研究会宿報告〉

去る11月22・23日、筑波大学において、34名の会員の参加を得て、学会創設以来初めての試みとして行われた。今回のテーマは「理論と実践の統合をめざして」というもので、研究者とレク活動実践者との間で貴重な意見や情報の交換が2回のシンポジウムでなされた。期間中、筑波大学芸術学系の土肥博至教授の講演「レク空間のデザイン」や研究助成金支給研究発表なども行われた。なお、詳しくは日本レク協会の月刊誌『レクリエーション』1月号で紹介されている。

〈2月 月例研究会 報告〉

創設院大学の鈴木寛建氏、日本レク協会の千原和夫氏、国民体育協会の藤澤博通氏、大阪体育大学の永吉宏英氏、東京都レク連盟の奥野正氏をパネラーに迎え、順天堂大学の宮下桂治氏の司会のもとで、2月6日(金)27名の参加者を集め、産屋体育大学でシンポジウムが行われた。

テーマは「レク研究とレク指導との接点」と題して、レク協会公認指導者と学会研究者の双方共、「実践をふまえた理論づくり」の重要性を強調し、研究と指導との接点を広げるための有効な示唆や具体的な提案がなされた。なお、詳しい内容は月刊誌『レクリエーション』4月号に掲載されている。

〈3月 月例研究会 報告〉

「レジャー・レクリエーションに関する学術・学位論文発表会」が、3月13日(日)産屋体育大学で開かれ、6大学10名の学術論文と1大学院2名の修士論文が発表された。全体に体育・スポーツ関係の発表が多かったが、研究対象としては、コンピュータ・レク、野外レク、セラピューティック・レクと多岐にわたっていた。詳しくは、月刊誌『レクリエーション』5月号に掲載されている。

〈昭和56年度第1回研究会報告〉

国立産屋体育大学副学長・学術副会長の江藤慎四郎氏を講師に、4月17日午後6時30分より上智大学において28名の参加者を得て、講演会が行われた。

テーマは「産屋体育大学におけるレク指導者養成構想」で、昭和56年4月に開学予定のわが国の国立体育大

昭和55年度 決算報告

(監査：岡田 優子・深町 一夫)

(収入の部)

項目	予算額	決算額	増減額	内容
前年度繰越金	22,112	22,112	0	
入会金	30,000	37,000	7,000	37人分
年会費	1,200,000	1,327,000	127,000	293人(学生会員前年度分を含む)
大会参加費	150,000	102,500	△47,500	99人分(会員78人・学生1人)
雑収入	80,888	220,806	139,918	一般20人 横尾忠・抄録・利息
寄付	30,000	20,000	△10,000	レク協会より(10周年パーティー)
計	1,513,000	1,729,418	216,418	

(支出の部)

項目	予算額	決算額	増減額	内容
事務費	20,000	46,350	△26,350	事務用品・コピー代
会議費	20,000	6,450	13,550	会場費(3回)
通信費	250,000	325,815	△75,815	切手・ハガキ・電話代
印刷費	788,000	500,800	287,200	名簿・抄録・ニュース他
別会費	30,000	174,050	△144,050	調査・会場費他
大会費	50,000	21,480	28,520	運営費・謝金他
総会費	50,000	250	49,750	運営費
支那助成金	100,000	100,000	0	
研究助成金	150,000	200,000	△50,000	10万×2冊
事務局運営費	40,000	3,480	36,520	バイト料・運営費他
雑費	15,000	10,000	5,000	レク協会維持費
計	1,513,000	1,388,688	124,315	

昭和56年度 予算案(修正案)

(収入の部)

項目	予算額	内容
前年度繰越金	340,733	
入会金	30,000	30人分×1,000円
年会費	1,300,000	325人分(新入会員も含む)×4,000円
大会参加費	110,000	110人分×1,000円
雑収入	199,267	機関誌・抄録・行事参加費など
寄付	20,000	
計	2,000,000	

(支出の部)

項目	予算額	内容	容
事務費	50,000	文具代、コピー代など	
会議費	20,000	理事会、各機関委員の会合費など	
通信費	400,000	電話代、機関誌・ニュースなどの郵送費	
印刷費	1,350,000	機関誌8・9号・ニュースなどすべての印刷費	
研究金費	20,000	会費、運賃	
大会費	120,000	運営費	
総会費	5,000	運営費	
支那助成金	0	中止	
研究助成金	0	中止	
共同研究費	0	中止	
事務局運営費	20,000	アルバイト料、交通費など	
雑費	15,000	日本レクリエーション協会維持委員会費	
計	2,000,000		

海外情報

「Recreation Research Review」Vol. 7, No. 4・Vol. 8-No. 1〜3到着!!

カナダの Ontario Research Council on Leisure (ORCL) から機関誌が郵送されてきました。閲覧およびコピー郵送(実費をいただきます)希望の方は、事務局までご一報下さい。

「世界レジャー・レクリエーション協会(WLRA)入会次ぎについて」

米国ニューヨークに事務局を置く世界レジャー・レクリエーション協会への入会次ぎ業務を10月1日より開始いたしました。入会ご希望の方は、下記の費用を事務局まで、現金書留または、郵便振替(東京5-42971:日本レクリエーション学会事務局)にてお送り下さい。

- ・入会・年会費 (U.S. \$ 1 = ¥ 220として算定)
 - 個人会員 ¥ 5,500 -
 - 学生会員 ¥ 3,500 -
 - 団体会員 ¥ 9,000 -

・特典

- 世界のレジャー・レクリエーション情報を掲載した会報(年4回)が郵送されます。
- WLRAの刊行物を1割引で購入できます。
- WLRAの主催する国際会議に参加できます。
- WLRAの主催する研修旅行に参加できます。
- 世界のレジャー・レクリエーションに関する情報サービスが受けられます。
- その他

「International Directory of Leisure Information Resource Centres - 1980」販売のお知らせ

世界レジャー・レクリエーション協会発行の「世界のレジャー・レクリエーション情報センター一覧」(B5版・172頁・英文)を下記料金にて販売いたします。日本を含め世界各国のレジャー・レクリエーションに関する情報の入手が一目で分かる世界初の手引書です。購入ご希望の方は、現金書留または郵便振替(東京5-42971)にて事務局までお申し込み下さい。 料金: ¥ 6,000 -

「Sociology of Leisure and Sport Abstracts」販売のお知らせ

10月研究会で議決されたカダグのウォーカー・大学教授 G・S・Kenyon 博士編集のレジャー・レクリエーション・スポーツに関する世界中の論文一覧で、年3回発行されるジャーナルです。著者・分野別の索引があり各論文の要約が記されています。購入ご希望の方は、現金書留または郵便振替(東京5-42971)にて事務局までお申し込み下さい。 料金: ¥ 25,000 - (1980年発行3冊分)

「会費納入のお願い」

昭和56年度の会費(正会員4,000円・学生会員500円)の納入期限は6月30日です。至急納入されるようお願いいたします。(経費・九州支部会費は各支部事務局へ納入して下さい)
 振替用紙に金額が印刷されている方は、昭和55年度以前の会費未納の方です。振替用紙に記された金額を至急お支払い下さい。尚、領収書は「郵便振替払込金受領証」をもちまして、かえさせていただきます。正式の領収書をご希望の方は事務局までご一報下さい。

「資料販売」

- 機関誌「レクリエーション研究」第1号(1972)～第7号(1979年) 各号: 1,000円(送料200円)
- 「学会大会研究発表抄録」

- ・日本レクリエーション研究会 第1回大会号(1965)～第7回大会号(1970) 各号: 1,000円(送料300円)
- ・日本レクリエーション学会 第1回大会号(1971)～第9回大会号(1979) 各号: 500円(送料140円)

※上記資料ご希望の方は、郵便振替(東京5-42971「日本レクリエーション学会事務局」)にて、ご注文・ご送金下さい。

「勤務先・住所などを変更された方へ」

書き替えて必ず事務局にお知らせ下さい。また「会員名簿」に訂正すべき箇所がありましたらお知らせ下さい。

「事務局へのご連絡」

事務局専用電話
 Tel. 03-460-5464 (月～金: 11:00～18:00)
 ※ 電話によるご連絡は、できる限り月曜日にお願いたします。

会報「学会ニュース」No. 23

発行日 昭和56年5月31日
 責任者 日本レクリエーション学会
 編集長 浅田隆夫

編集 正副編集委員会
 事務局 〒150 東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育館

(調) 日本レクリエーション協会内
 電話 (03) 460-5464
 郵便振替 東京5-42971「日本レクリエーション学会事務局」

学会ニュース

No.24

OCTOBER 1981

日本レクリエーション学会

「前川峯雄会長 逝去」



本学会会長、前川峯雄先生(東京教育大学名誉教授・日/出身園長・市川市教育委員会委員長)が、8月22日(午前1時20分、脳動脈硬化症のため、かねてから入院されていた東京都文京区の順天堂医院において)お亡くなりになりました。享年74歳でられました。

前川先生は、永年にわたる我が国のレクリエーション運動の普及と発展に尽くされ、日本レクリエーション協会の理事・顧問としても活躍されました。特に、早くからレクリエーション研究の重要性を提唱され、本学会の前身である日本レクリエーション研究会の創設に中心的立場で参加され、昭和40年設立後は初代会長三笠宮殿下のあとを継いで、会長に就任されました。昭和46年本学会が設立されたからも会長として、レクリエーション研究の向上、発展に尽力され、今日に至られました。特に、本学会が本年3月日本学術会議への登録認可を受けるまでには、先生の並ならぬご努力をいただきました。

先生は、学校教育、社会体育の指導者としても知られ、日本保健体育審議会副会長、日体育学会会長、日本スポーツ教育学会会長も務められました。

密葬は、8月24日(市川市真部)のご自宅で、本葬は、9月19日(東京都新宿区南元町)の千日谷会堂で行なわれました。本葬には、雨の中を学会関係者をはじめ多勢の方々が詰めかけられ、会場内に入れない程でした。学会としては、供花をお贈りし、浅田理事長が弔辞を読み上げました。日本レクリエーション協会からは、総裁三笠宮殿下親王殿下のお名前でお花が捧げられました。

学会も11月を迎え、レクリエーション研究の重要性がなお一層、叫ばれている今、前川先生を失ったことは痛恨のきわみであります。心より先生のご冥福をお祈り申し上げると共に、先生のご遺志を継ぎ、レクリエーション研究の発展のために、今こそ会員1人、1人が力を合わせていくことが求められています。

「レクリエーション研究」第9号投稿募集

1. 投稿期限: 1981年11月30日(月) 必着
2. 投稿規定: 「レクリエーション研究」第8号最終号参照
 但し、校正は編集委員会の責任校正とします。
3. 郵送先: 〒150 東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育館
 (財)日本レクリエーション協会内
 日本レクリエーション学会 編集委員会

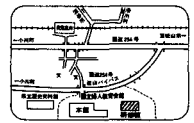
「昭和56年度 第2回研究集会開催要項」

< 3月6日(土) 2:00～5:00P.M. 於 上智会館(予定) >
 レジャー・レクリエーションに関する学士・学位論文発表会

「第11回日本レクリエーション学会大会-昭和56年度総会」

開催要項

1. 日 時: 1981年11月8日(日) 9:00～17:00
2. 場 所: 国立婦人教育会館 研修棟
 埼玉県北企郡嵐山町大字菅谷728番地
 (Tel. 0493 (62) 6711)



(交通案内)

1. 電車 (1) 池袋駅 発行1時間
 東武東上線 武蔵嵐山駅 15分
 8分
 (2) 小川駅 発行1時間
 東武東上線 武蔵嵐山駅 15分
 8分
 2. 自動車 練馬L.O. 陽越島崎駅 35分
 東松山L.O. 10分
 国立婦人教育会館
- * 定期バス利用 東武東上線嵐山駅 → 国立婦人教育会館 約30分
- | | | | | | | |
|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 東松山駅発 | 9:12 | 10:19 | 12:17 | 13:49 | 14:58 | 16:48 |
| 会館発 | 9:41 | 10:48 | 12:46 | 14:18 | 15:25 | 17:17 |

- * タクシー利用 (1) 東武東上線嵐山駅から約15分
 (2) 八高線小川明駅から約15分
- * 武蔵嵐山駅までの電車は少ない(1時間に約1本)が、東松山駅までの電車は多く(1時間に約3本)、定期バス、タクシーの便があります。

9:00	9:30 9:45	12:00	12:45	1:15	2:45	3:30	9:00
受付	研究発表	昼休み	総会	研究発表	休憩	専門分野別連絡シンポジウム	
理事会							

4. 総会議題: ・前川会長ご逝去報告・黙祷
 ・昭和55年度事業・決算報告
 ・昭和56年度事業案・予算案審議
 ・会則改正 審議
 ・支部に関する規程/制定 審議
 ・その他
5. 大会参加費: 正会員、特別会員 1,000円
 学生会員 500円
 賛助会員 無料
 全国レクリエーション大会参加費納入者 無料
 その他一般の方 1,500円
6. 発表者への注意
 (1) 発表時間は、発表12分・質問3分です。(10分ペーパー1回、12分ペーパー2回、15分ペーパー3回)
 (2) 発表資料を配布される方は、50部(シンポジウムは、100部)を当日受付に提出して下さい。
 (3) スライド映写の方は、発表の30分前までに各発表会場受付に提出して下さい。

- 「総会への出席ハガキ」(両封)は、11月5日(日)中午までご返送下さい。
- 学会大会不参加の方へ
 研究発表・シンポジウムの抄録希望の方は事務局へお切り手670円(含、送料)同封の上、お申し込み下さい。
- 「学会大会への派遣費」が必要の方は、返信用封筒(60円切手貼付)の上、事務局へご一報下さい。

＝ プログラム ＝

1. 研究発表

(A 会場) 研修棟 101号室 (1階)

紙 表 時 刻	発表 題	演 者	所 属	座 長
9:45	高齢者キャンプ参加者のキャンプに対する期待と現実との乖離とその要因について	高 尾 敏	筑波大学大学院	池田 勝 船野 淳一郎 船山 義典 船山 義典 船山 義典 船山 義典 船山 義典 船山 義典 船山 義典 船山 義典 船山 義典 船山 義典 船山 義典 船山 義典 船山 義典
10:00	高齢者の活動参加と日常生活の変化について	松 浦 三代子	東京女子体育大学	
10:15	高齢者の余暇の意識調査と利用度の考察	金 寿 祥	国立釜山大学	
10:30	精神障害(児)者の心身の発達と社会参加を促進するためのスポーツとレクリエーションに関する研究	鈴木 秀雄	関東学院大学	
10:45	パルコジニ研究② 園地空間に於ける身体的健康行動者層の安定要因のメカニズムを考察	進 士 五十八	東京農業大学	
11:00	中高齢者宅内における子どもを高齢者にかかわる野村ファミリーキャンプ活動のあり方	瀧 田 武 雄	船山 義典 コンサルタンツ・千葉 大学	
11:15	既設の野村ファミリーキャンプの利用に関する研究 ～明日の野村ファミリーキャンプについて～	水 嶋 正 信	東京農業大学	
11:30	自然療育の計画標準化に関する研究	藤 生 茂	東京農業大学	
11:45	森林のレクリエーション機能と地産地消について	藤 生 茂	東京農業大学	
11:15	現代社会におけるレジャーの検討 ～都市圏の発展を中心に～	力 野 由 美	筑波大学大学院	
11:30	InterestからみたRecreationのConcept designに関する研究 ～とくにそのInterest-Habituationについて～	新 保 謙 彦	筑波大学	
12:15	子どものスポーツ参加と非参加の要因について ～スポーツ組織参加者と非参加者の比較検討～	海老原 裕	東京大学大学院	
12:30	コミュニティ・スポーツとコミュニティ形成	堺 賢 治	愛媛大学	
12:15	スポーツクラブ参加と生活意識の変化	今 野 守 仁	日本大学	
12:30	公民館組織の委員とスポーツ参加に関する研究	新 出 昌 明	東 海 大 学	

(B 会場) 研修棟 110号室 (1階)

紙 表 時 刻	発表 題	演 者	所 属	座 長
9:45	ブレイクダンスの普及の考察	高 松 昌 広	筑波大学大学院	水 吉 宏 美 (大阪体育大学)
10:00	キャンプ・ウォークの普及に関する研究	平 野 吉 直	筑波大学大学院	
10:15	キャンプにおけるカンセラーの行動分析 ～特に「ふるま」を中心に～	久 保 田 雄 雄	筑波大学大学院	
10:30	Adventure Program参加者の不安に及ぼす影響	井 村 仁	筑波大学	
10:45	女子学生のキャンプにおける自己概念の変化に及ぼす影響	根 野 敏 明	明治大学	
11:00	長期キャンプの意義に関する研究 ～特に人間関係を中心にして～	清水 雅 己	筑波大学大学院	
11:15	キャンプ参加者のキャンプ活動に関する調査	仲 野 寛	筑波大学大学院	
11:30	青少年海外自然教育活動の発展に関する一考察	竹 谷 和 之	筑波大学大学院	
11:45	登山キャンプにおけるテントおよびグリーンの設置の実際について	金子 和 正	筑波大学大学院	
11:15	登山客さんにおける旅費負担の現状	藤 田 麻 玉	玉 王 大 学	
11:30	登山における幼児の心身活動	山 本 浩 信	筑波大学大学院	
12:15	日本における成徳カヌーの普及の現状と課題	芳 賀 健 治	山口女子大学	
12:30	スキーにおける非慣習者に関する研究	村 上 利 宏	筑波大学大学院	
12:15	イメージトレーニングを用いたパフォーマンスの向上について	浦 田 憲 二	筑波大学大学院	
12:30	全日本スキー連盟のスキー教程におけるスキー技術と指導者の実態	外 川 重 信	筑波大学大学院	

- (3) 入会希望者27名、退会希望者1名を承認(総会員数421名)。
- (4) 学会大会プログラム・総会組織検討、承認。
- (5) 「学会ニュース」第24・25号を編集、本の広告掲載企業紹介を理事に再度依頼。

第3回 世界レジャー・レクリエーション協会(WLRA) 入会取次ぎについて

米国ニューヨークに事務局を置く世界レジャー・レクリエーション協会への入会取次ぎ業務を昨年10月1日より開始いたしました。入会ご希望の方は、下記の費用を事務局まで、現金書留または、郵便振替(東京5-42971/日本レクリエーション学会事務局)にてお送り下さい。

○入会・年会費 (U.S. \$ 1 = ¥235として算定)

- 個人会員 ¥ 6,000.-
- 学生会員 ¥ 4,000.-
- 団体会員 ¥ 10,000.-

○特典

- (1) 世界のレジャー・レクリエーション情報を掲載した会報(年4回)が郵送されます(英文)。
- (2) WLRAの刊行物を1割引で購入できます。
- (3) WLRAの主催する国際会議に参加できます。
- (4) WLRAの主催する研修旅行に参加できます。
- (5) 世界のレジャー・レクリエーションに関する情報サービスが受けられます。
- (6) その他

第3回 南太平洋身体障害者競技大会のお知らせ
＝Third Far East and South Pacific Games for Physically Disabled＝

- 1. 期 日: 1981年10月31日(土)～11月6日(日)
- 2. 場 所: 香港
- 3. 問合せ先: Joint Council for the Physically and Mentally Disabled
P.O. Box 474
Wanchai, Hong Kong, China.

第3回 会費納入のお願い

昭和56年度の会費(正会員4,000円・学生会員1,000円)の納入期限は6月30日でした。未納の方は、至急納入されるようお願いいたします。(近畿・九州支部会員の方でも会費未納の方は、今回は直接本部事務局へ納入して下さい。)

振替用紙が同封されている方が、会費未納および会費納入不足の方です。振替用紙に記された金額を至急お支払い下さい。尚、領収書は「郵便振替払込金受領証」をもちまして、かえさせていただきます。正式の領収書ご希望の方は事務局までご一報下さい。万が一、今回の請求と、会費納入が入り違いになりましたら、ご容赦下さい。

II. 総 会

12:45～1:15P.M. (於: 大会棟室<2階>)

III. 専門分野別連続シンポジウム(於: 大会棟室<2階>)

- 2:50～3:00P.M. 専門分野別連続シンポジウムについての説明
- 3:00～4:00P.M. (レクリエーション資源・計画・評価 分野)
(テーマ) わが国野外レクリエーションの現状と課題
(パネラー) 進士五十八(東京農業大学)
中田健一郎(財・日本交通公社)
有賀一郎(サンコー・コンサルタンツ・林)
塚本 恵(東京農業大学)
毛 塚 宏(林・ラック計画研究所)
宮林 茂幸(東京農業大学)
- (閉 会) 船野淳一郎(林・スペース・コンサルタンツ・千葉大学)
- 4:00～5:00P.M. (レクリエーション・プログラム開発(教育・指導) 分野)
(テーマ) レクリエーション・プログラムの開発
(パネラー) 宮下桂治(順天堂大学)
安原 輝雄(習志野レクリエーション研究会)
鈴木秀雄(東京農業大学)
- (閉 会) 北 森 義 明(順天堂大学)
- ※ 理事会
- 9:00～9:30A.M. 第5回理事会を行います。

第3回 昭和56年度 第3回理事会 報告

- 日 時: 昭和56年7月17日(日) 6:00～8:00P.M.
 - 場 所: 上賀会館
 - 出席者: 池田・小川・池田・窪田・宮下・(師団)以上5名。
 - (1) 入会希望者14名(学生会員1名を含む)の入会を承認(総会員数395名)。
 - (2) 第35回全国レクリエーション大会協賛を承認。
 - (3) 第11回学生会大会プログラム検討。
 - (4) 昭和56年度総会の内容と進行について。
 - (5) 会員の研究活動と学会に対する要望についてのアンケート調査結果の中間報告。
- <性別>男86.5%、女13.5%。
<年齢>30～39才 29.8%、40～49才 24.3%、50～59才 18.9%、20～29才 16.2%、60才以上 9.9%、未回答 0.9%。
<職業>大学院生 55.9%、その他学際関係 10.8%、公務員 9.9%、団体役員 9.0%、会社員 6.3%、自営業 1.8%、その他 4.5%、未回答 1.8%。
<レクとのかかわり方>研究・指導 63.1%、計画 24.3%、指導 6.3%、興味 6.3%。
<研究領域>プログラム 33.4%、行動 30.6%、原簿 16.2%、資源・計画、政策、その他、未回答 各々 4.5%。
<研究・対象>野外 27.1%、地域 25.2%、全総 23.4%、福祉 9.9%、学校 8.1%、職場 3.6%、未回答 1.8%、その他 0.9%。

第4回 理事会 報告

- 日 時: 昭和56年9月22日(日) 6:00～8:00P.M.
- 場 所: 上賀会館
- 出席者: 池田・江崎・池田・進士・高橋・宮下・(師団・瀬戸)以上6名。
- (1) 前川会長ご逝去についての報告。
- (2) 会長職務代行として、会期第10条にのっとり、副会長 江橋慎四郎・梶山彦三郎・小川 秀一氏を承認。

新入会員 (昭和56年1月16日～9月22日承認)

東原昌郎(東京学芸大)、大野サク(オート電機)、生田由美子(小学校音楽専科教諭)、小関正一(スーパー経営)、遠藤和輝(日本ニューライフ学院)、金子直正(筑波大学大学院)、高橋健哉(筑波大)、小川佐知子・高木知恵美・手塚忠昭・中込康彦・馬淵一彦・沢田康雄・川村清児・武井 晃・奈須野正幸(早稲田大)、手塚麻美・千葉由美子(田中みや子・滝辺美千代・沖中よみ・鬼澤智子(東京女子体育大学)、丸山英彦(東京理科大学)、仲野 寛(筑波大学大学院)、川崎 永(つくしの幼稚園)、高正明(白百合学園中・高等学校)、水野英治(一橋大)、新保 謙・高松昌宏・力野由美(筑波大学大学院)、福地和夫(岐阜経済大)、大石道義(西日本短期大)、川名 彰・宮林茂幸(東京農大)、山本英男(大阪市立加美南中学校)、田中一行(尼崎南高校良元分校)、明山鏡光(無職)、川津健爾(都立小金井北高校)、川口光郎(中野学園大)、小川芳子(名古屋短期大)、増岡みこ(形彦レクリエーション協会)、長谷川雄(東光通信社)、藤井立三(明風大)、津島胤典(東京自動車機械製作所)、増田義典(東洋工業)、村藤善次(総合警備隊)、世戸俊夫(大阪YMCA)、毛 塚 宏(ラック計画研究所)、藤瀬幸貞(名古屋大)、田中鎮男(日本大)、大尾勝(東京YMCA)、外川重信・松田誠一・山本 浩・清水雅己・平野吉直・浦田憲二・村上利宏・久保田雄雄(筑波大学大学院)、山原明郎・梶沢聖子・武田正司(日本大)、梶村義雄(防衛府)、佐々木明男(芝浦工大)

退会会員 (昭和56年1月16日～9月22日)

知念一郎(沖縄)、諸濱敬之(東京)、金塚伸弘(東京)、轟島登志江(大阪)

資料販売

- 機関誌「レクリエーション研究」第2号(1973)～第5号(1975年)、第7号(1979年)～第8号(1981年)
- 各号: 1,000円(送料250円)
- 「学会大会研究発表抄録」
- 日本レクリエーション研究会
第1回大会号(1965)～第7回大会号(1970)
- 各号: 1,000円(送料250円)
- 日本レクリエーション学会
第1回大会号(1971)～第9回大会号(1979)
- 各号: 500円(送料170円)
- ※上記資料ご希望の方は、郵便振替(東京5-42971/日本レクリエーション学会事務局)にてご注文・ご送金下さい。

勤務先・住所などを変更された方へ

同封の「総会出欠ハガキ」にてお知らせ下さい。(変更箇所に乗ってアンダー・ラインを引いて下さい。)

事務局へのご連絡

- 事務局専用電話
TEL. 03-460-5464(月～金)
- ※電話によるご連絡は、できる限り月曜日の10:00～8:00P.M.にお願いします。

親と子のライフ＆スポーツ

日本学校体育研究連合会／編 A5刷・表裏カバー紙・2色刷
定価を980円(〒220)

子どもとおも菓子

おも菓子は、子どもの食事のしつけやよい食習慣を養い、疲労回復や気分転換に役立ちます。上手なお菓子づくりのつきあい方を解説。

子どもとボウリング

幼児のころから慣れ親しんでいるボール遊びの発明から、実際のプレーに役立つ知識や技術面まで、やさしく解説。

子どもと水あそび

水あそびは、子どものあそびのベストです。洗滌剤、漂白剤、塩素系漂白剤、川や海の水を汚してしまふおそひを、安全面も含めて紹介。

会報「学会ニュース」№24

発行日 昭和56年10月20日
責任者 日本レクリエーション学会 理事長 渡田 隆夫
編集 広報渉外委員会
事務局 〒150 東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館
(附)日本レクリエーション協会内
電話 (03) 460-5464
郵便振替 東京5-42971
「日本レクリエーション学会事務局」

We Like Sports

1缶(粉末タイプはコップ一杯)当り レモン46個分のビタミンC入り。

- スポーツドリンク・タゲダはスポーツの時に必要なビタミンCのほか、ビタミンB₆、ビタミンB₁₂、ナイアシンなどの栄養を補う、スポーツマンの健康飲料です。
- 汗として失われていく水分やミネラルをすみやかに補います。
- レモン・ミントの爽やかな香りと、甘さをおさえた味の良さは、スポーツマンの喉にフィットします。



●フタ付き缶 運動会的な人々を誘って、爽やかな香りを味わって、爽快です。

●レモン缶 本場系スポーツドリンクの真似は、出来ません。爽やかな香りと、爽やかな味を味わって、爽快です。

●粉末 缶タイプに比べ、2倍の量を簡単に持ち運び、持ち運びが楽です。200g(1箱)・100g(1箱)・50g(1箱)があります。

●スティック缶 粉末缶と同じく、持ち運びが楽です。200g(1箱)・100g(1箱)・50g(1箱)があります。

ビタミンCがレモン46個分
スポーツドリンク・タゲダ
▲武田薬品工業株式会社

学会ニュース №25

MAY 1982
日本レクリエーション学会

〈昭和57年度総会・第1回研究会〉

＝開催要項＝

1. 日 時：1982年6月12日(土)

11:00A.M.～12:30P.M. (全国理事会)
12:30A.M.～1:30P.M. (総会)
1:30A.M.～3:30P.M. (研究会)

2. 場 所：文化情報センター
〔大阪市北区中之島3丁目住友中之島ビル5F〕
TEL. (06) 444-1011
●地下鉄四つ橋線「肥後橋」駅下車2分
●地下鉄御堂筋線・京阪電鉄「淀屋橋」駅下車徒歩10分

(全国理事会) 11:00A.M.～12:30P.M.
(総会) 12:30～1:30P.M.
○議 題：●昭和56年度事業・決算報告
●昭和57年度事業案・予算案審議
●昭和57・58年度役員選出
●その他

○出欠のご返事：同封のハガキを6月5日(迄)に必ず到着するように返函して下さい。欠席の方も必ず「委任状」の欄にご署名・捺印の上、返送して下さい。

(研究会) 1:30～3:30P.M.
○テ マ：レジャー・カウンセリングについて
○講 師：ピーター・A・ウィット博士(Peter A. Witt, Ph. D.)
●「米国立州立大学レクリエーション・レジャー学科長」
●「余暇生活診断テスト(The Leisure Diagnostic Battery)」の開発をはじめ、余暇行動の社会心理的決定因子、レジャー・カウンセリング、余暇教育、レクリエーションの将来展望、特別レクリエーション(身体障害者のレクリエーション)など広範囲の研究をされています。
●「Leisurability」、「Leisure Counseling: An Aspect of Leisure Education」他著書論文は35以上にのぼっています。

○選 訳：田中祥子女士(津田塾大学助教授)
アメリカ留学中、ウィット博士と御学友であられました。

〈第12回日本レクリエーション学会大会〉

＝開催要項＝

1. 日 時：1982年10月31日(日) 9:00A.M.～5:00P.M.
2. 場 所：大分県別府市内(詳細未定)
3. 日 程：8:30 9:30 12:30 1:00 2:30 2:45 5:00

受付	研究発表	昼休み	研究発表	休憩	専門分野別シンポジウム
	理事会				

5. 大会参加費：正会員・特別会員 1,000円
(当日徴収) 学生会員 500円
賛助会員 無 料

＝研究発表申込み要項＝

- 発表資格：昭和57年度会費を納入した会員
- 発表形式：口頭発表
- 登壇回数：共同研究をのぞき、1人1回
- 発表時間：一題15分(質問3分を含む)
- 発表申込：同封の申込書に所定事項を記入し、返信用封筒(70円切手貼付)を添え、事務局へ郵送して下さい。
- 発表申込締切：1982年8月28日(厳守)
- 発表抄録原稿提出：申込書受理後、1週間以内に、事務局から規定の原稿用紙を送付しますので、タイプまたは楷書による手書き(墨字)の横書きで原稿を作成しコピー部を添えて、9月18日(必着)までに学会本部事務局へお送り下さい。

公 示

〈「レクリエーション研究」第10号投稿募集〉

- 投稿期限：1982年11月27日(日) 必着
- 投稿規定：「レクリエーション研究」第8号最終頁参照。
●必ず、コピー3部を添えて提出して下さい。
●校正は編集委員会の責任校正とします。
- 郵 送 先：〒150 東京都渋谷区神南1-1-1
(附)日本レクリエーション学会内
日本レクリエーション学会 編集委員会

総会報告

〈昭和56年度総会 報告〉

去る11月8日(日)、第11回学会大会会場の国立編入教育大会館大会場において行われました。渡田理事長の挨拶に次いで、8月22日に亡くなられた前川会長のご冥福を祈って全員で1分間の黙祷を行い、議事に入りました。議長として三隅達郎氏、議事録署名人として鈴木秀雄・今井 毅の両氏を選出の後、下記の事項について審議を行い、すべて全会一致で承認・可決されました。

記

- 昭和56年度事業報告
(事業)
(1)第10回学会大会開催：(発)石川康金沢市
(2)定例研究会開催：6回 (発)田中・(発)田中・(発)田中・(発)田中
(3)機関誌「レクリエーション研究」第8号発行 (3巻)
(4)会報「学会ニュース」No.21(7月)・22(10月)発行

第12回日本レクリエーション学会大会

研究発表申込書

発表テーマ、発表者(氏名、性別、年齢)、所属、住所、連絡先、共同研究者、器具、受付、会費、資料の記入欄。

※ 太枠内には記入しないでください。

4. 昭和56年度予算案 (収入の部)

Table with columns: 項目, 予算額, 内容. Includes items like 前年度繰越金, 入会金, 年会費, etc.

(支出の部)

Table with columns: 項目, 予算額, 内容. Includes items like 事務費, 会議費, 通信費, etc.

5. 会則改正案

- (現行) 第1条 本会を日本レクリエーション学会(英語名 Japan Society of Leisure and Recreation Studies)という。
(改正案) 第1条 本会を日本レクリエーション学会(英語名 Japanese Society of Leisure and Recreation Studies)という。
6. 「支部に関する規定」制定
1) 本学会会員が、支部を設けようとする場合には、下記により、本学会会長に申請し、理事会の議を経て総会の承認をえるものとする。
1) 設立の経緯概要 2) 名 称
3) 支部長および役員 4) 会 則
5. 会員名簿 6) その他
(2)各支部の運営は、本部との関係については本規程に従って行われるが、その他の事項については各支部規則においてこれを定めるものとする。
(3)支部は原則として隣接する地域に在動または在住する本学会正会員20名以上をもって構成する。
(4)支部運営のための経費は支部会費によって賚らるものとする。支部会費の額は各支部に決定するものとする。
(5)支部は次の事項について各年度ごとに本部に報告する。
1) 役員の変更 2) 活動状況の概要
3. その他必要と認められる事項
7. 前川会長ご逝去に伴い、会則第10条にのっとり、副会長3名を会長代行としたのを廃し、江橋福四郎氏(副会長)を会長とする案。

- (5)研究助成：10万円×2題
(6)日本学術会議に登録(承認可)
(7)学会創立10周年記念パーティー開催：予定
(8)組織の拡充：入会者37名・退会者7名(正会員349名・学生会員1名・特別会員12名・賛助会員0名・計361名一斉現在)

(会 議)

- (1)総会開催：5/26 大阪府大阪市
(2)理事会開催：7回(5/26・7/26・9/26・11/26・1/26・3/26)
(3)編集委員会開催：1回(5/26)
(4)幹事会開催：1回(7/26)

2. 昭和55年度決算報告および会計監査報告

(監査：岡田優子・深町一夫)

(収入の部)

Table with columns: 項目, 予算額, 決算額, 増減額, 内容. Includes items like 前年度繰越金, 入会金, 年会費, etc.

(支出の部)

Table with columns: 項目, 予算額, 決算額, 増減額, 内容. Includes items like 事務費, 会議費, 通信費, etc.

3. 昭和56年度事業案

(事 業)

- (1)第11回学会大会開催：5/26 埼玉県
(2)定例研究会開催：2回(5/26・7/26)
(3)機関誌「レクリエーション研究」第9号発行
(4)会報「学会ニュース」No.23(5月)・24(10月)発行
(5)組織の拡充：会員の獲得

(会 議)

- (1)総会開催：5/26 埼玉県
(2)理事会開催
(3)各種委員会開催

研究活動

〈昭和56年度第2回研究会報告〉

去る3月6日(土)、東京・上智会館第3会議室において「レジャー・レクリエーションに関する専門学校・短大・大学の卒業論文発表会」が開催された。
(学士論文)
久司光男(筑波大)「競歩選手の競技活動が家族の余暇生活に及ぼす影響の分析」/村田浩子(東海大)「家庭婦人レジャーロールの実態—女性の役割とまわりに与える影響について—」/中野幹男(順天堂大)「コミュニティ施設における自主的サークルの生成と発展に関する研究」/高野達彦(筑波大)「野外レクリエーション地域に居住する中学生の意識、イメージに関する研究」/横田竜雄(東京農業大)「海における基本問題と若者—児童の野外キャンプにおける自然との接触について—」/徳広洋一(筑波大)「中学校におけるサイクリング活動の現状と教師の意識に関する調査研究」/野田久(東海大)「キャンパスにおける衛生管理—ゴミ処理として—」/斎木秀夫(筑波大)「学生の望む将来のレジャー設計に関する研究」
(修士論文)
日野由美(筑波大学大学院)「現代社会におけるレジャーの検討—創造的レジャーの開発に向けて—」/山口芳一(日本体育大学大学院)「チャンピオン指導者の養成課程に関する研究」

理事会より

〈昭和56年度第5回理事会報告〉

- 日 時：昭和56年11月8日(日) 9:00~9:30A.M.
場 所：国立婦人教育会館研修棟中会議室(学会大会会場)
出 席 者：浅田(理事長)、深町(監事)、池田・進士・長谷・前野・松浦・秋吉・金崎・草川(以上理事)10名。永吉(近畿支部事務局長)、黒木(幹事)、川向(幹事)、瀬戸(幹事)、師岡(幹事) 以上事務局5名。
1. 入会11名(賛助1名・正会員10名)、退会1名を承認(総会員数431名)。
2. 会長代行3名(副会長)を廃し、会長として江橋福四郎氏、副会長を理事会推薦の形で総会に提案することを決議。
3. 総会提出議案の議決。
4. 秋吉理事(九州支部副会長)より、支部助成金の中止の見返りとして理事会出席のための交通費等の支給要請があり、将来的検討事項とすることを了承。
5. 永吉氏(近畿支部事務局長)より、研究会を東京地区だけでなく、地方でも開催して欲しい旨、要望があり、検討事項とすることを了承。
6. 近畿支部・九州支部より、昭和55年度事業報告、決算報告、昭和56年度事業案・予算案報告。
7. 近畿支部・九州支部会員の会費納入は、昭和56年12月1日より支部を經由しないで、直接支部事務局へ納入する方法に変更することを決議。

〈第6回理事会報告〉

日 時：昭和57年1月22日(金) 7:00~9:00P.M.
場 所：上智会館第1会議室(東京)
出 席 者：小川(副会長)、浅田(理事長)、池田・進士・高橋・田村・宮下(以上理事)7名。浅野(幹事)、黒木(幹事)、瀬戸(幹事)、師岡(幹事) 以上事務局4名。
1. 入会7名(正会員4名・学生会員1名・特別会員2名)、退会2名承認(総会員数436名)。
2. 第11回学会大会の報告と反省
(報告—参加者126名・発表題数30題・シンポジウム2題、参加費収入103,000円等)
(反省—一沢村博員会(東京)より、「レク学的取扱いをしていない発表がいくつかあった」とのご指摘があった。この点については、「どのような研究でも発表することは、会員の自由である。内容については、趣意欄が読料することによって学会の質の向上をめざす」ことを確認。その他、職場および身障者レクの研究発表が少なかったことが指摘された。)

- 昭和56年度総会の報告と反省
(報告一出席者76名・委任状213名)
(反省時間が短かすぎた。来年度より1時間にするべきであるとの意見が出された。)
- 第2回研究集会(4/21)半論発表会開催事項(案)を承認。
- 編集委員会を企画研究・広報渉外担当理事で構成することを決定。同委員会は投稿された7篇の論文の審査を審査員(論文内容によって選出・編集委員の兼任も可)に依頼し、その審査結果を理事等に報告、承認を得ることを決定。
- 「レクリエーション研究」9号の内容は、研究論文・学会大会報告(Kirk博士特別講演・11回大会シンポジウム)その他(理事會・総会報告、会則および支部に関する規定、投稿規定、編集委員名簿)とすることを決定。
- 編集規定(校内外関係)を制定することを今後検討することが進捗理事より提案され、了承された。
- 田村理事より、「レクリエーション研究」第4種学術刊行物(郵送費200gまで50円)として認可するように、郵政大臣に申請する提案が出され、了承された。
- 常任理事の設置を会期中に盛り込む方向で検討することが了承された。常任理事は、交通費支給が不可能な現状を鑑み、当分の間各都府県在住理事及び交通費を自己負担で了承いただける地方理事から選出する案が出された。
- 「ニュース」No.24「大会プログラム」の広告掲載料として浅田理事・宮下・青木・進士 吉田・池田の各理事のご協力の結果、195,000円が集まった旨、事務局より報告があった。
- 第12回学会大会を昭和57年10月31日(日)、別府市で開催することを決定(全国レク大会：10月30日～11月1日、大分県)。
- 次回理事會を3月6日(土)1:00P.M.から開催することを決定。

〈第7回理事會 報告〉

- 日 時：昭和57年3月6日(土) 1:00～3:00P.M.
場 所：上智会館第4会議室(東京)
- 出席者：江藤(会長)、浅田(理事長)、深町(監事)、池田・進士・田村・長谷川・前野・松浦・宮下・秋吉以上理事11名 黒木(幹事)、藤岡(幹事)以上事務局2名。
- 入会3名(正会員)、退会1名(正会員)と承認(総会員数438名)。
 - 第2回研究集会(半論発表会)発表予定11名(学生9名・専士2名)を報告。席上、「より多くの発表者・参加者を集めるために、開催日を2月下旬か、3月中旬以降にしようか」という意見が出され、来年度の検討事項とした。
 - 編集委員会より「レクリエーション研究」9号投稿原稿の審査結果報告。6篇の掲載を決定。
 - 昭和57年度事業案審議。第12回学会大会：10月31日(日) (大分県別府市) 研究集会：4回(6月12日(日)「レジャー・カウセリング」について、ピーター・ワット博士(大阪) 2月下旬「半論発表会」他)、総会：6月12日(土)(大阪)などを決定。席上、「第12回学会大会の開催について九州支部に大会事務局を依頼しては」との意見が出され、秋吉理事に支部での検討を依頼した。
 - 昭和57年度予算案承認
 - 昭和57・58年度役員候補(理事會案)として、名譽会長・顧問・会長は留任、副会長は九州・近畿支部長、監事は早川一枝(滋賀大学)と他1名とすることを決定。理事と監事もう1名については、役員候補選考委員会(浅田・池田・前野・松浦・秋吉)を発足させ、一任することを決定。選考委員会は、6月12日(土)の昭和57年度総会までに役員候補(理事會案)をまとめることになった。

【お知らせ】

〈世界レジャー・レクリエーション協会(WLRA) 内にレジャー研究委員会(WLRA-COR)設立〉

去年11月5日～12日、スイスのチューリッヒおよびトワンプークで行われたWLRA主催の国際レジャー・レクリエーション研究会(江藤会長、高橋理事出席)において、レジャー・レクリエーションに関する国際比較研究の必要性が叫ばれ、「レジャー研究委員会(WLRA-COR)」という世界的研究委員会が設立されました。詳しくは、月刊「レクリエーション」3月号・66～67頁(財)レクリエーション協会発行)をご覧ください。

〈本年の国際会議の予定〉

- 8月15日～19日 カナダ公園レクリエーション協会年次総会(Saskatoon, Saskatchewan, Canada)
- 8月16日～21日 国際社会学会協会年次総会(Mexico City, Mexico)
- 10月24日～28日 全米レクリエーション公園協会(NRPA)年次総会(Louisville, Kentucky, U.S.A.)
- 11月19日～27日 第8回国際精神療学会連世界大会(問合せ先: Secretariat I.L.S.M.H., Rue Forestiere 13, B-1050 Brussels, Belgium)

〈世界レジャー・レクリエーション協会(WLRA)入会取次ぎについて〉

米国ニューヨークに事務局を置く世界レジャー・レクリエーション協会への入会取次ぎ業務をいたしております。入会ご希望の方は、下記の費用を事務局まで、現金書留または、郵便振替(東京5-42971:日本レクリエーション学会事務局)にてお送り下さい。

- 入会・年会費(U.S. \$ 1 = ¥235として算定)
- 個人会員 ¥ 9,000.- 学生会員 ¥ 6,000.- 団体会員 ¥ 50,000.-

○特典

- (1) 世界のレジャー・レクリエーション情報を掲載した会報(年4回)が郵送されます(英文)。
- (2) WLRAの刊行物を1割引き購入できます。
- (3) WLRA主催する国際会議に参加できます。
- (4) WLRAの主催する研修旅行に参加できます。
- (5) 世界のレジャー・レクリエーションに関する情報サービスが受けられます。
- (6) その他

【事務局より】

〈会費納入のお願い〉

昭和57年度の会費(正会員4,000円・学生会員1,000円)の納入期限は6月30日です。至急納入されるようお願いいたします。(近畿・九州支部会員も、本年度より本部事務局へ納入して下さい)

振替用紙に金額が印刷されている方は、昭和56年度以前の会費未納の方です。振替用紙に記された金額を至急お支払い下さい。尚、領収書は「郵便振替払込金簿証」をもちまして、かえさせていただきます。正の領収書をご希望の方は事務局までご一報下さい。

万が一、今回の請求と会費のお支払いが入れ違いになりましたら、ご容赦下さい。

〈「レクリエーション研究」8号訂正箇所〉

- | | | | |
|---------------|------------|----------------|---------|
| (表紙) | 近藤良生 | (P.35左下から2行目) | Körper |
| (P.36左上から6行目) | Recreation | (P.36左上から19行目) | 定規 |
| (P.36右上から5行目) | 電燈 | (P.36右下から12行目) | 自己目的の遊び |
| (P.37左下から1行目) | 置かれて | | |

〈会報「学会ニュース」バック・ナンバーをお持ちの方はいませんか?〉

事務局では、事務局移転の際紛失した「学会ニュース」のバック・ナンバーを集めています。下記のNo.をお持ちでしたらコピーを1部お送り下さい。実費は、お支払いいたします。ご協力をお願い申し上げます。

記

紛失したNo. : 1～6, 8, 11, 13, 15, 16

親と子のライフ＆スポーツ

日本学校体育研究会/編 A5判・変厚カバー・装・2色刷

子どもお菓子

子どもボウリング

子ども水泳び

子ども自転車

子どもお楽しみ

子どもお楽しみ

子どもボウリング

子ども水泳び

子ども自転車

子どもお楽しみ

- 〈資料販売〉
- 機関誌「レクリエーション研究」第2号(1973年)・第3号(1974年)・第7号(1979年)・第8号(1981年) 各号：1,000円(送料250円)
 - 「学会大会研究発表抄録」
 - 日本レクリエーション研究会 第6・7回大会発表(1970年) 代金：1,000円(送料250円)
 - 日本レクリエーション学会 第2回(1972年)・第4回大会(1974年)・第8回大会(1978年)・第10回大会(1980年)・第11回大会(1981年) 各号：500円(送料170円)
 - 上記資料ご希望の方は、郵便振替(東京5-42971:日本レクリエーション学会事務局)にて、ご注文・ご送金下さい。〈購読先・住所などを重要された方へ〉
- 同封の要請にて必ず事務局にお知らせ下さい。(変更箇所は赤でアンダーラインを引いて下さい)
- 〈事務局へのご連絡〉
- 事務局専用電話 ☎03-460-5464(月～金) ●電話によるご連絡は、できる限り月曜日の1:00～8:00P.M.にお願います。
- 〈お知らせ〉
- レクリエーション研究 9号は、印刷所の都合で、発行は6月中旬の予定になる予定です。しばらくお待ち下さい。
 - 昭和56年9月23日以降の(新入会員)および(退会会員)のリストは、次号に掲載致します。

会報「学会ニュース」No.25

発行日 昭和57年5月20日
責任者 日本レクリエーション学会 理事長 浅田 隆夫
編集 広報渉外委員会
事務局 〒150 東京都渋谷区神南1-1-1 岸ビル4階
(財)日本レクリエーション協会内
電話 (03) 460-5464
郵便振替 東京5-42971「日本レクリエーション学会事務局」

学会ニュース

No.26

SEPTEMBER 1982

日本レクリエーション学会

〈第12回 日本レクリエーション学会大会特集号〉

後編 Ⅱ レクリエーション学会会長・理事長就任にあたって

会長 江 橋 慎 四 郎

昨夏、前川前会長の突然の御逝去により、本年4月、はからず会長をお引き継ぐこととなった。前川前会長が開拓してきた、新しいレクリエーション研究の道を、会員の皆さんと共に、さらに発展させてゆきたいと考えています。

さしあたりは、本学会も発足後11年、日本学術会議への加入も認められて、次の10年の発展に向けて第一歩を印すわけである。この11年で、会員数は約500名となったのであるが、さらに、レジャー・レクリエーション研究は、人の生活のさまざまな側面と関わりをもつものであり、多角的な研究を必要とする。したがって、関連する興った専門分野の方で、レジャー・レクリエーション研究に関心をもち、なおかつより多くの方々が学会員となって下さることを期待したい。次の10年間で会員数の倍増を期待するとは無理な注文なことである。もちろん、数の増減と共に、研究の質の向上と、多面的な観点からの総合的研究ということもあわせて考えられたいことであろう。この10年を臨むため、たんに、一定の発展のあとを回ることが出来るが、むしろ、現実の余暇・レクリエーションの分野の需要の増加、変化、多様化のほうが著しいのではあるまいか。研究の面でも、このような急激で、多様な現実の変化をみきわめ、それを予測し得るような面も開拓されてゆくであろう。また、研究方法の面でもいろいろな近代科学技術の粋を活用した研究成果も期待される。

さらに、広く、かつ大層になされていく内外の余暇・レクリエーション研究についての情報を予取し、会報に伝達してゆくことができるか学会としてもしっかりと検討することが、上述の研究の質を高めるべくゆく上でも大いに役立つのであり、余暇・レクリエーション研究についての情報システムの確立ということは、是非実現させてゆきたいと考えている。

そして、国際化時代といわれるように、余暇・レクリエーション研究の分野でも、国際的な交流や、国際的な共同研究の促進ということがについても、ともに一歩を進めてゆきたいと考えているが、つまるところは、会員一人一人が研究者としての力量を高めゆくことが第一であり、会員の皆さんと協力して、その向上に努めたいと考えています。

理事長 浅 田 隆 夫

日本レクリエーション（以下rec.と略記）学会は、学会設立以来11年目を迎えました。それまでは、何年か研究懇談会というかたちで10名足らずのメンバーで毎月集りをもっていました。私も懇談会当時からrec.研究に参画してはいたが、何かこの際お役にたればと切に願っています。

いまでもなく学会は、個人の自由参加に基づく研究団体ですから、学会はあくまでも個人の自由な研究発表の場でありました。しかし、rec.研究のような研究対象の限定の乏しい、しかも広域から理論化を成す必要のないような研究領域では、個人研究もまた多くなるとなると、組織的計画的なプロジェクト研究が必要となり得ます。このため2年程前から、従来の暫定的な領域を、原論、行動研究、プログラム開発、政策研究、資源、計画など、昨年度は、プログラム開発と資源・計画論に、本年度は政策と学会大会のテーマにのみ取りあげました。学会研究の積み重ねは、rec.研究総への積極的、月例会を隔月ごとで開催して研究を深化させることと、また、これとは別に、学会論、rec.概論の刊行等も開催しています。

学会は理事会によって運営されていますので、学会の活性化は、いつも理事の方々のアイデアとその実行力の如くにかかっています。何年よろしくお力添えのほどお願ひいたします。本年度も前年度に引き続き理事会の業務は5分掌（庶務・企画・編集・広報渉外・財務）としましたが、さらに、その他にそれぞれの業務ごとに委員長を選出し、これらの委員長5名と支部理事各1名、女性理事2名、理事長の計10名で常任理事会を構成し、業務の迅速・円滑化を図ることにしました。したがって、本年度は議事の内容によっては、さらにそれぞれの専門委員会で具体的な事項につき、つめをお願ひすることになるかも知れません。初期にも触れましたように、rec.評議は、rec.概念が不明確なため、すべての人の向かいの問題として、その事項が実行される過程そのものを現象論的に把握すること、action researchを重視することなどが望まれます。そしてできれば3ヵ年計画、5ヵ年計画といったかぎりの見直しや反省的思考、相違の可能な継続的研究が必要のように思います。会員諸兄姉の積極的な建設的な御意見のお寄せ頂けることを期待しています。一言、就任の御挨拶をさせて頂きました。

二 次 内 第12回 日本レクリエーション学会大会

＝ 開 催 要 項 ＝

1. 日 時：1982年10月31日(日) 9:00A.M～4:00P.M. 案内図

2. 場 所：日名子ホテル
[大分県別府市秋葉一24
Tel. 0977 (22) 1111]

3. 日 程：

8:30	9:00	11:45	12:15	1:45	2:00	4:00
開 会	学 生 発表	昼 食	理 事 会	休 息	専門分野別 シンポジウム	閉 会

4. 大会参加費：正会員・特別会員 1,000円
学生会員 500円
賛助会員 無料
全国レクリエーション 大会参加費納入者 その他一般の方 1,500円

無料：●別府駅より徒歩5分、タクシーにて39分
●別府駅北口より徒歩10分、バス、徒歩、自転車、乗り合わせにて10分
●大分空港からタクシーにて60分

5. 発表者への注意：
(1)発表時間は、発表12分・質問3分です。(10分ペナルティ、12分ペナルティ、15分ペナルティ)
(2)発表資料を配布される方は、50部(シンポジウムは、100部)を当日受付に提出して下さい。
(3)スライド映写の方は、発表の30分前までに各発表場受付に提出して下さい。

- ◎「学会大会への派遣費」が必要な方へ
返信用封筒(60円手紙付)の上、事務局へ一報下さい。
- ◎学会大会不参加の方へ
「学会大会プログラム(含、研究発表・シンポジウム抄録)」希望の方は、郵便振替(東京5-42971)にて学会事務局へ700円(含、送料)をお送り下さい。

第36回 全国レク大会について
第12回日本レクリエーション学会主催の全国レク大会への参加申込は受付中です。9月27日(日)迄に電話でご連絡下さい。
(Tel. 03(460)5464・(701)1559)開問文男・益坂不男
期日：昭和57年10月30日(日)～11月1日(日)
会場：大分市、別府市、竹田市、宇佐市
参加料：(1)大分県外在住の方 4,500円
(2) 県内在住の方 1,000円
※(1)(2)共、学会大会・国際会議への参加費が含まれています。

学会参加者宿舎について
学会会報の日名子ホテルを学会参加者のために予約してあります。9月27日(日)迄に電話でお申込み下さい。
(Tel. 03(460)5464・(701)1559)開問文男・益坂不男
料金：1泊2食付 6,000円(特別料金)※単食ご希望の場合は、追加料金が必要となります。
※お支払は、ホテルに直接お願いします。

Ⅰ. 研究発表 プログラム

No.	発表時間	発表演題	演者	所属	座長
1	9:00	レクリエーションの概論について	早崎正雄	宮崎法律経済研究所	
2	9:15	機能概念としての「体育」と「レクリエーション」に関する一考察	山下和彦	福岡大学	高橋和敬(東海大学)
3	9:30	子どもの水泳教室参加に対する親の役割	横沢聖子	日本大学	永吉宏英(大阪体育大学)
4	9:45	子どもの水泳教室参加に対する親の意識決定過程	山本明郎	日本大学	
5	10:00	レクリエーション研究に関する特許の考察	松原洋三	立教大学	
6	10:15	家庭婦人のスポーツ参加と家族関係	今野守	日本大学	松浦三代子(東京女子体育大学)
7	10:30	ランニング愛好者における意識的動向の調査	宮川博	日本大学	谷谷善博(福岡大学)
8	10:45	スキー・スキー参加者の意識調査	阿部信博	日本大学	
9	11:00	クリケットに関する研究ゲームの主要素についての分析(ベースボールとの比較から)	山田 誠	神戸外国語大学	
10	11:15	高齢者福祉ヘルスマネジメントの活動プログラム第1集	丸山久美子	康教湯温泉健康保養協会	金城良三(九州大学)
11	11:30	病院内における高齢者・身体障害者のレクリエーション行事のまとめ第1集	藤田 聡	康教湯病院	白木勝枝(中村学園大学)

No.	発表時間	発表演題	演者	所属	座長
1	9:00	おが野野レクリエーションの利用に関する研究I-特に日光地蔵の基礎条件について	永嶋正信	東京農業大学	
2	9:15	児童の野山活動における基本態性と意識-特に児童の野外キャンプにおける自然との接触について-	五十嵐 葉子	杉並区役所(スペース・コンサルタント)	前野 淳一郎(東京女子体育大学)
3	9:30	女子学生のキャンプにおけるプログラムと星野敏男	星野敏男	明治大学	藤 生 恵(東京農業大学)
4	9:45	野外活動指導者に関する管理的研究-Leader Serviceをめぐる基本的課題-	石橋 保	福岡教育大学	
5	10:00	野外レクリエーション活動が活動地域に及ぼすインパクトについて-特に、地産学学生の意識を中心に-	高野 透	筑波大学大学院	宮下 桂治(順天堂大学)
6	10:15	中高生住居のキャンプ生活による効果について	川村 協平	山梨大学	田中 祥子(津田塾大学)
7	10:30	陸奥海岸の山岳登山の現状と今後のあり方について-OJ山について-	堀 良子	帝塚山学院大学	
8	10:45	精神施設におけるゲーム活動-レクリエーション療法活動の一環として-	鈴木 定	順天寺総合病院	
9	11:00	精神障害者の集約的レクリエーション指導	永吉光彦	八幡厚生病院	今 井 毅(日本体育大学)
10	11:15	高齢者の身体能力発達調査からの一報告	渡部 孝生	専修大学	佐久本 秀代(精華女子短期大学)
11	11:30	高齢者の体育・スポーツ指導に関する研究-運動経験による体力の変化について-	大 藤 雅子	東京女子体育大学	

Ⅱ. 理事会

昭和57年度第2回理事会を開催します。
[時 間] 11:45A.M～12:45P.M.
[場 所] 大広間「九重」(ニュー日名子2階)

Ⅲ. 講演
[時 間] 12:45～1:45P.M.
[場 所] サンホール(日名子ホテル2階)
[テーマ] ライフ・サイクルとレジャー・レクリエーション-中高年の余暇関心をめぐって-
[講 員] ジョージ・R・ケリー(John R. Kelly, Ph. D.)
●米国イリノイ大学余暇行動科学研究所教授
●世界レジャー・レクリエーション協会(WLRA)余暇研究専門委員長

Ⅳ. 専門分野別シンポジウム(政策研究分野)
[時 間] 2:00～4:00P.M.
[場 所] サンホール(日名子ホテル2階)
[テーマ] シニア・エイジのレクリエーション行政とその展開(コーディネーター) 金崎良三(九州大学)
[パネリスト] 渡辺雅夫(筑波大学)・秋吉善嗣(福岡教育大学)・木下茂雄(日本大学)・津山秋夫(大分県立総合体育館)

〈昭和57年度 第2～5回研究会〉

- ＝ 開 催 要 項 ＝
昭和57・58年度は、「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究」という統一テーマでシリーズ研究会を開催していく予定です。奮ってご参加下さい。
- 第2回(10月5日(日)) 6:00～8:00P.M.
テーマ：「レクリエーション学の体系化をめぐる」(その方法と戦略をめぐっての)
会 場：東京農業大学(当日、正門に案内図を掲示します) フリース・ディスカッション)
話題提供者：鈴木忠英(東京農業大学)
コーディネーター：通士五十八(東京農業大学)
- 第3回(11月27日(日)) 2:00～4:00P.M.
テーマ：「レクリエーション学の対象と方法を中心として(レクリエーション学の体系化試案)」
会 場：日本体育大学
話題提供者：西野 仁(東海大学)他
コーディネーター：今井 毅(日本体育大学)
- 第4回(1月24日(日)) 6:00～8:00P.M.
テーマ：「レクリエーション運動を中心として」
会 場：上野大学
話題提供者：未定
コーディネーター：藤本 隆(中央電通通信学園)
- 第5回(3月12日(日)) 2:00～5:00P.M.
内 容：レジャー・レクリエーションに関する専門学校・大学・大学院の卒業論文発表会
会 場：上野大学
発表申込：ハガキに住所・氏名・電話番号・学校名、論文テーマ・指導教官名を明記の上、2月19日(日)迄に事務局へお送り下さい。学会員の方でも結構です。
- ◎第3・4回研究会の話題提供者を募集します。候補者の推薦事務局にお寄せ下さい。

公 示

「レクリエーション研究」第10号投稿募集

- 1. 投稿期限：1982年11月27日(日) 必着
2. 投稿規定：「レクリエーション研究」第8号最終頁参照(希望の方は、コピーをお送りします)
3. 郵 送 先：〒150 東京都渋谷区神南1-1-1 (財)日本レクリエーション協会内
日本レクリエーション学会 編集委員会

お知らせ

機関誌「レクリエーション研究」、第4種学術刊行物に認定される

昭和57年6月10日付で、「レクリエーション研究」は、郵政省により第4種学術刊行物に認定されました。

「レクリエーション研究」に国際コード番号が与えられる

昭和57年8月、国立国会図書館より「レクリエーション研究」に国際コード番号ISSN(International Standard Serial Number) 0287-1084が与えられた。学会は、要請により「レクリエーション研究」第1~9号を日本とアメリカの国会図書館に寄贈することにした。

理事会報告

昭和57年度 総会報告

去る6月12日(日)、大阪府文化情報センターにおいて昭和57年度総会が開催されました。後出席理事の関谷の辞、江崎会長の挨拶の後、議事として村川 賢氏、理事録署名人として市川 道子・福田芳朗の両氏を導出し、議事に入りました。下記の事項について審議を行い、すべて全会一致で承認・可決されました。

1. 昭和56年度事業報告

- 【事業】
(1)第11回学会大会開催：宮田玉瑛比嘉部
(2)定例研究会開催：2回(宮田・邦信)
(3)機関誌「レクリエーション研究」第9号発行：(%)
(4)会報「学会ニュース」発行：№23(5月)、№24(10月)
(5)組織の拡大：入会者76名・退会者6名。発展正会員408名・学生会員9名・特別会員14名・賛助会員1名(計)432名
【会 員】
(1)総会開催：宮田玉瑛比嘉部
(2)理事会開催：7回(宮田・邦信・邦敏・堀内・宮田・邦敏・邦信)
(3)幹事会開催：1回(宮田)

2. 昭和56年度決算報告

Table with columns: 項目, 予算額, 決算額, 増減額, 内 容. Rows include 前年度繰越金, 入会金, 年会費, 大会参加費, 雑収入, 寄付, 計.

5. 会則改正案

- (現行) 第14条 通常総会は、毎年1回開催し役員を選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。
(改正案) 第14条 通常総会は、毎年1回開催し役員を選出および本会の運営に関する重要事項を審議決定する。
(現行) 第16条 理事会は理事長が召集し、出席者の過半数をもって決定される。
(改正案) 第16条 理事会は理事長が召集し、幹事若干名および事務局員を選出し、会務を処理する。
6. 「理事会の運営に関する規定」制定案
1. 会則第16条の規定により、理事会の運営は、会則に定められているほか、この規定に基づいて行うものとする。
2. 理事会は、原則として年に1回以上開催するものとし、理事長がその議長となる。
3. 理事会の招集に当っては、書面によって付議事項を明示しなければならない。
4. 理事会は、理事の過半数の出席により成立し、議決は出席者の2分の1以上の賛成を必要とする。
7. 「専門分科会設置に関する規定」制定案
1. 会則第17条の規定により、本会会員が専門分科会を設置しようとする場合は、この規定に基づいて行うものとする。
2. 専門分科会の設置は、原則として研究分野を同じくする本学会正会員20名以上の要請のあった場合とする。
8. 「レクリエーション研究」投稿募集(改正案)
(現行) 10. 編集委員会は編集の都合により、執筆者の承諾を得て、原稿の一部を省略訂正することができる。
11. 論文の取捨は編集委員会に一任のこと。
12. 投稿期限 第9号 原稿/初日 昭和56年11月末日(予定)
13. 論文の送り先及び連絡先 〒150 東京都渋谷区神南1-1-1 (財)日本レクリエーション協会内
日本レクリエーション学会編集部
(改正案) 10. 投稿する原稿は、手書きのオリジナル原稿とそのコピーの合計3部とする。
11. 掲載論文の別刷を希望する投稿者は、その必要額をカシに朱書きする。ただし、この場合の実費は全額投稿者の負担とする。

(支出の部)

Table with columns: 項目, 予算額, 決算額, 増減額, 内 容. Rows include 事務費, 雑費, 印刷費, 研究会費, 事務局運営費, 雑費, 計.

3. 昭和57年度事業案

- 【事業】
(1)第12回学会大会開催：宮田大分県別府市
(2)研究会開催：数回(宮田他)
(3)機関誌「レクリエーション研究」第10号発行：(%)
(4)会報「学会ニュース」発行：№25(5月)、№26(9月)
(5)昭和57・58年度会費各種：発行：(7月)
(6)組織の拡充：会員の獲得
【会 員】
(1)総会開催：宮田大分市
(2)理事会開催
(3)各種委員会の開催
4. 昭和57年度予算案
(収入の部)

Table with columns: 項目, 予算額, 内 容. Rows include 前年度繰越金, 年会費, 大会参加費, 雑収入, 計.

(支出の部)

Table with columns: 項目, 予算額, 内 容. Rows include 事務費, 雑費, 印刷費, 研究会費, 大会費, 総会費, 事務局運営費, 予備費, 計.

- 12. 編集委員会は編集の都合により、執筆者の承諾を得て、原稿の一部を省略訂正することができる。
13. 論文の取捨は編集委員会に一任のこと。
14. 論文の送り先及び連絡先 〒150 東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育会館
(財)日本レクリエーション協会内
日本レクリエーション学会「レクリエーション研究」編集委員会

9. 昭和57・58年度役員案

- 名 譽 会 長 三笠宮崇仁親王殿下 (川 崎 一 (大阪理恵女子短期大学)
副 会 長 小 堀 吉 雄 (日本体育大学)
会 長 堀 吉 雄 (大阪理恵女子短期大学)
副 会 長 高 橋 英 昭 (淑 徳 大 学)
会 員 三 隅 達 朗 (國際基督教大学)
会 員 山 崎 進 (相模女子大学)
会 員 長 江 崎 慎 四 郎 (廣 聖 体 育 大 学)
副 会 長 長 岡 木 泰 三 (九州実業大学・福岡大学)
監 事 青 木 肇 三 (法政大学・大阪商業女子短期大学)
監 事 深 川 一 枝 (滋 賀 大 学)
監 事 深 町 久 夫 (松 戸 工 業 学 校)
理 事 長 淺 田 隆 夫 (筑 波 大 学)
理 事 長 池 田 勝 (筑 波 大 学)
理 事 小 井 隆 勝 (日 本 体 育 大 学)
理 事 岡 田 茂 子 (東京女子医科大学病院)
理 事 木 下 茂 徳 (日 本 大 学)
理 事 高 橋 五 十 八 (東 京 農 業 大 学)
理 事 藤 田 敏 和 (東 海 大 学)
理 事 田 中 祥 子 (津 田 塾 大 学)
理 事 田 畑 貞 秀 (千 葉 大 学)
理 事 長 谷 川 敏 二 (筑 波 大 学)
理 事 藤 本 祐 次 郎 (日 本 体 育 大 学)
理 事 前 野 淳 一郎 (駒 野 基 礎 大 学)
理 事 松 浦 三 代 子 (東 京 女 子 体 育 大 学)
理 事 松 原 洋 二 (立 教 大 学)
理 事 高 下 桂 治 (順 天 堂 大 学)
理 事 宮 田 正 志 (財)日本レクリエーション協会)
理 事 林 百 壽 郎 (福 岡 教 育 大 学)
理 事 金 崎 良 三 (九 州 大 学)
近 畿 支 部 選 出 理 事 仲 村 吉 宏 (同 志 社 大 学)
近 畿 支 部 選 出 理 事 永 吉 宏 英 (大 阪 体 育 大 学)
(任期：昭和57年6月12日~昭和59年度総会終了日)

お知らせ

昭和57年度 第1回研究会 報告

米国ノース・テキサス大学州立大学レクリエーション・レジャー・学部長のピーター・A・ウィット博士を迎えて、6月12日(日)昭和57年度総会にて、大阪・文化情報センターにおいて「レジャー・カウンセリング」についての講演会を開いた。内容は、アメリカでのレジャー・教育、レジャー・カウンセリングの現状から入り、レジャーをどうとらえるかを中心に、事例を挙げてわかりやすいレジャー・カウンセリングの考え方を説明したものであった。講師は田中淳子理事にお願した。なお、詳しくは、財)日本レクリエーション協会発行の「レクリエーション」8月号で紹介されている。

【注】

〈昭和56年度理事 最終理事会 報告〉

日時：昭和57年6月12日(日) 11:00A.M.~12:30P.M.
場所：文化情報センター(大阪市：昭和57年度総会会場)
出席者：江藤(会長)、小川(副会長)、横山(副会長)、浅田(理事長)、青木、秋吉、池田、草川...

〈昭和57年度 第1回理事会 報告〉

日時：昭和57年6月28日(日) 6:00 ~ 8:00P.M.
場所：上智会館第3会議室(東京都千代田区)
出席者：浅田(理事長)、池田、田中、田畑、藤村、松浦、宮下 以上理事7名。師岡以上幹事3名...

提案があり、了承された。

〈第2回常任理事会 報告〉

日時：1982年9月6日(日) 6:00 ~ 8:00P.M.
場所：上智会館第4会議室(東京都千代田区)
出席者：浅田(理事長)、秋吉、池田、高橋、前野、松浦、宮下 以上理事7名。黒木、西野、師岡以上幹事3名...

【参考】

〈国内での国際会議の予定〉

○11月1日(日) 9:00A.M. ~ 5:00P.M.
アジア地域レジャー・レクリエーション会議
(テーマ) アジア地域の組織の現状について...

〈海外での国際会議の予定〉

○10月24日~28日 全米レクリエーション協会(NRPA)年次総会(Louisville, Kentucky, U.S.A.)
第8回国際精神障害者会議(開会式先: Secretariat ILSMH, Rue Forestiere 13, B-1050 Brussels, Belgium)

〈世界レジャー・レクリエーション協会(WLRA)への入会取次ぎについて〉

米国ニューオーークに事務局を置く世界レジャー・レクリエーション協会への入会取次ぎ業務をいたしております。入会ご希望の方は、下記の費用を事務局まで、現金書留または、郵便振替(東京5-42971:日本レクリエーション学協会事務局)にお送り下さい。

- 入会・年会費
個人会員 ¥ 9,000,-
学生会員 ¥ 8,000,-
団体会員 ¥ 50,000,-
○特典
(1) 世界のレジャー・レクリエーション情報を掲載した会報(年4回)が郵送されます(英文)。
(2) WLRAの刊行物を1割引で購入できます。
(3) WLRAの主催する国際会議に参加できます。
(4) WLRAの主催する研修旅行に参加できます。
(5) 世界のレジャー・レクリエーションに関する情報サービスが受けられます。
(6) その他

- 6. 常任理事として下記の方々を選出。
秋吉、池田、進士、高橋、田中、仲村、前野、松浦、宮下 以上9名。
7. 第12回学会大会運営について下記の事項を決定。
(1) 発表申込受付・プログラム作成等の準備作業は、本部署事務局で行う。
(2) 大会当日の運営は、九州支部に委託する。
(3) 大会運営予算は、レシプロチーム運営費(講師謝金・資料作成費等)6万円を含み、12万円(総会決定額)とし、九州支部に当日の運営費(アルバイト代・文具代等)として6万円を支給する。
(4) 九州支部に当日の発表者・参加者の積極的勧誘を依頼する。
8. 第12回学会大会の専門分野別連続レシプロチームについて下記の事項を決定。
分 野 : 政策研究分野
テ ー マ : 高齢者レクリエーションの政策
コーディネーター: 金峰昌三(理事)
パネリスト: 木下茂徳(理事)他数名(金峰理事に選出を委託)
運 営 費 : 超へい講師謝金・資料作成費等として6万円を支給
事務局より全幹事に金庫書を7月末日迄に提出することを要請。

〈昭和57年度 第1回常任理事会 報告〉

日時：1982年7月19日(日) 6:00 ~ 8:00P.M.
場所：上智会館第4会議室(東京都千代田区)
出席者：浅田(理事長)、進士、田中、前野、松浦、宮下 以上理事5名。
藤生、瀬戸、師岡 以上幹事3名。
1. 入会10名(正会員9名、特別会員1名)を仮承認(総会員数500名)。
2. 理事会内専門委員会業務内容を次の通りに再決定。
(庶務) 事務局事務統括、事業案、予算案作成、事業報告・決算報告作成、専門委員会等の活期日開会、会議運営、各種文書作成、各種議案整理、(会員名簿)作成など。
(企画) 学会大会・研究集会企画立案、学会大会プログラム編集、調査活動、専門分科会議など。
(編集) 機関誌「レクリエーション研究」、編纂、出版事業計画など。
(広報渉外) 会報「学会ニュース」発行、「入会案内」学協会要覧の配布、会員獲得、支部組織の充実、関係学会・団体との交流促進など。
(財務) 会計および収支管理、増収活動(会費徴収・広告獲得・寄付団体獲得・研究資料バックナンバー頒布など)など。
3. 理事会内専門委員会の名称の一部変更を次の通りに行う提案を理事会を経て、来年度総会に出すことを決定。
(庶務) 総 務
(企画) 研究集会
4. 昭和57・58年度研究会の開催案が、進士企画委員長より提出されたが、浅田理事長他から回数を増やすこと、内容をより明確にすることの2つの要望があり、次回の常任理事会までに企画委員会が再検討することとなった。
5. 江藤会長より学会大会における特別講演をジョン・クリー博士(イリノイ大学行動科学研究所教授・世界レジャー・レクリエーション協会常任研究専門委員長:日本レクリエーション学会)に依頼した結果、講演依頼はどうかと、講演テーマ、時間帯などについては、江藤会長、浅田理事長、進士企画委員長の3者に一任することを決意。
6. 事務局より学会大会会場が白名子ホテル(別府市)に決定されたこと、できるだけ多くの学会員が同ホテルに宿泊してもらいたいこと(1泊5,000円)、会場費、警備費は全国緑化大会実行委員会が提供してくれること等の3つの事項が大分県実行委員会より伝達された旨、報告された。
7. 学会大会の事前準備は学会本部が行い、当日の運営は九州支部に一任する事が、再確認された。
8. 松浦理事より、学会大会(入会員の参加の便利をさせるために、旅行社に会場までの交通機関(航空機・バス、宿泊(白名子ホテル))をセットにしたツアーを組ませようかどうかの

〈会費納入のお願い〉

昭和57年度の会費(正会員・特別会員4,000円・学生会員1,000円・賛助会員20,000円以上)の納入期間は6月30日でした。未納の方は、至急納入されるようお願いいたします(近畿・九州支部会員の方も直接事務局へ納入して下さい)。
振替用紙が同封されている方が、会費未納および会費納入不足の方です。振替用紙に記された会費を至急お支払い下さい。尚、領収書は納入時に郵便局から渡される「郵便振替払込金簿」をもちまして、かえさせていただきます。正式の領収書をご希望の方は事務局まで一報下さい。
万が一、今回の請求と、会費納入が入れ違いになりましたら、ご容赦下さい。

〈新入会員〉 (昭和56年9月23日~昭和57年9月6日承認)

- 賛助会員
副会報(代表取締役 島田昭治)
○新入会員
石川隆興(芝浦工業大)、中村公博(御日本文化振興協会)、漢園成雄(御石原エクスナリア)、長井健二(三重大)、竹谷和之・高見彰(筑波大)、大森雄二(東海大)、三浦隆夫(芝浦工大)、石橋宏志(日体大)、加藤正志(筑波大)、山内隆夫(大阪体大)、天野勲(御日本レクリエーション協会)、関根正久(川越南高)、榎本昇三(筑波大)、大石達(神奈川県立体育専門学校)、五林正隆(大阪社会体育専門学校)、秋葉陽子(東京学芸大)、川口貴(横浜国立大)、高野透(筑波大)、白木幹枝(中村学園大)、佐々木博夫(精華女子短大)、梅田清次郎(西日本工業大)、佐々木美恵(御日本テレビ・サービス)、岩田博(日大)、北村清治(広島大)、古畑英道(七沢ウイ・ホーム)、清野政昭(御三重電機カービストン労働組合)、鈴木忠義(東京農大)、五十嵐肇子(岐阜県立尚志学院)、岡田智士(多摩学院体育専門学校)、森島大(田中千代短大)、松浦次(倉山校)、梅原保子(筑波大)、藤原隆(村上女子(神奈川県総合リハビリテーションセンター))、山田文男(大谷女子短大)、原巴津(御日本厚生福祉センター)、美谷津千広(日本観光サービス)、徳永幹雄(九州大)、清田勇男(筑波大スポーツクラブ)、堀地孝男(日大)、平塚一(中部電力短大)、末吉光彦(福島和成(八幡厚生病院))、丸山久美子、牧三代子・柏木ひとみ・尾立博(鹿嶋温泉健康保養協会)、藤田勉、金子野芳(鹿嶋温泉病院)、山下和彦(福岡大)
○学生会員
金 美香(筑山大)
○特別会員
李 麗珠(忠北大)、金 麗姫(洋学院)、具 移子(九州教育大)、松村恭三郎(カリフォルニア州立大学チカゴ)
○レクリエーション研究機関会員
日大文理学部図書

〈退会会員〉 (昭和56年9月23日~昭和57年9月6日)

野村静夫(小学校教育)、斎藤孝樹(秋田経済大)、長谷川洋司(沼島市教育委)、羽鳥真之(千葉YMCA)、榊木孝子(新潟大)

〈資料頒布〉

- 機関誌「レクリエーション研究」第2号(1973年)・第3号(1974年)・第7号(1979年)・第8号(1981年)
各号:1,000円(送料250円)
○「学会大会研究発表抄録」
●日本レクリエーション研究会発行
第6・7回大会合冊号(1970年)
各号:1,000円(送料250円)

- 日本レクリエーション学会発行
第2回大会(1972年)～第4回大会(1974年)・第8回大会(1978年)・第10回大会(1980年)・第11回大会(1981年)
各号:500円(送料170円)
- *上記資料ご希望の方は、郵便振替(東京5-42971「日本レクリエーション学会事務局」)にてご注文・ご送金下さい。

〈勤務先・住所などを変更された方へ〉

必ず事務局へお知らせ下さい。

〈事務局へのご連絡〉

事務局専用電話
TEL. 03-460-5464(月～金)
*電話によるご連絡は、できる限り月曜日の1:00～8:00P.M.にお願います。

〈おことわり〉

「昭和57・58年度会員簿」は、10月下旬発行予定です。もししばらくお待ち下さい。

会報「学会ニュース」№26

発行日 昭和57年9月16日
責任者 日本レクリエーション学会
理事長 浅田 隆夫
編集 広報渉外専門委員会
事務局 〒150 東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館
(附)日本レクリエーション協会内
電話 (03) 460-5464
郵便振替 東京5-42971
「日本レクリエーション学会事務局」

〈第12回 日本レクリエーション学会大会ご参加の皆様へ〉

私共(株)日本交通公社は、学会参加の皆様へ下記の要領にて大分までの航空券をご用意いたしております。行楽シーズンと全国レクリエーション大会とが重なり席の確保が難しい時期でございます。お申込ご希望の方はお早めに直接当社までご連絡下さい。

Aコース	10/30	東京08:40→大分10:20	10/31	大分19:15→東京20:45
Bコース	10/30	東京08:40→大分10:20	11/01	大分19:15→東京20:45
Cコース	10/30	大阪12:00→大分13:00	10/31	大分19:40→大阪20:30
Dコース	10/30	大阪12:00→大分13:00	11/01	大分19:40→大阪20:30

(時刻は変更になる場合もございます)

費用 A・Bコース共 48,780円
C・Dコース共 25,020円

申込受付月 9月30日

申込方法 直接お電話にて下記交通公社までお願いします。

(株)日本交通公社 国内・海外団体旅行新宿支店
〒160 東京都新宿区西新宿1-18-8 スカイビル4階
TEL. 03(346) 0161 磯山グループ 大戸戸・中沢
(月～金 09:30～17:30)

尚、座席に限りがございますので、先着順にてお申込受付をさせていただきます。最終の日程ご案内は、ご出発の10日前頃ご通知申し上げます。又、お申込金10,000円をお預りさせていただきます。

国内・海外

日本交通公社 団体旅行新宿支店
〒160 東京都新宿区西新宿1-18-8 新宿スカイビル4階

学会ニュース

№27

JANUARY 1983

日本レクリエーション学会

〈研究会集のお知らせ〉

- 1月29日(出) 3:00～5:00P.M. ←日時変更しました!
 - テーマ:「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その3)～レクリエーション原論を中心として～」
 - 会場:上智大学内上智会館第5会議室
(東京都千代田区紀尾井町7-1 Tel. 03(238)3000-3783)
 - 話題提供者:川村英男、近藤英男(近畿大学)、浅田隆夫(筑波大学)
 - コーディネーター:黒木 隆(中央電気通信学園)
- 3月12日(出) 2:00～5:00P.M.
 - 内容:レジャー・レクリエーションに関する専門学校・短大・大学・大学院の卒業論文発表会
 - 会場:上智大学内上智会館第5会議室(同上)
 - 発表申込:ハガキに住所・氏名・電話番号・学校名・論文テーマ・指導教官名を明記の上、2月19日(出)迄に事務局へお送り下さい。学会員外の方も結構です。
- 6月25日(出) 2:00～4:00P.M.
 - テーマ:「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その4)～レク資源、レク空間を中心として～」
 - 会場:東京農業大学(詳しくは、当日正門に掲示します)
 - 話題提供者:未定(募集中)
 - コーディネーター:道土五十八(東京農業大学)
- 9月20日(出) 6:00～8:00P.M.
 - テーマ:「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その5)～レク行動、レク指導を中心として～」
 - 会場:立教大学(詳しくは、当日正門に掲示します)
 - 話題提供者:未定(募集中)
 - コーディネーター:松原洋三(立教大学)
- 11月26日(出) 2:00～4:00P.M.
 - テーマ:「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その6)～レク政策、レク教育を中心として～」
 - 会場:上智大学(詳しくは当日正門に掲示します)
 - 話題提供者:未定(募集中)
 - コーディネーター:松浦三代子(東京女子体育大学)

〈日本学術会議第13期(昭和58～60年) 会員選挙有権者登録のお願い〉

1人でも多くの学会員が、日本学術会議会員選挙の有権者登録をすることが、本学会の発展のために重大な意義を持ちます。まだ有権者でない方は、速んでこの手続をとられるようお願い申し上げます。

○有権者とは:

日本学術会議事務局内の選挙管理事務室に備えられた有権者名簿に登録された者を有権者という。日本学術会議会員の選挙権、被選挙権は有権者のみに認められる。また、日本学術会議の各種委員会の委員となり、国際会議に派遣される代表になるにも原則として有権者であることが必要である。

○有権者の資格審査基準:

有権者の資格は下記(一～三)の各項により審査される。

(学歴又は研究歴)

一 日本の国籍を有する科学者であって、学歴又は研究歴が、次のいずれかに該当することが第一の要件である。

- 1 学校教育法(昭和22年法律第26号)による大学(短期大学を除く)又は旧大学(大正7年勅令第388号)による大学卒業後2年以上の者
- 2 学校教育法による短期大学若しくは高等専門学校、旧専門学校(明治36年勅令第61号)による専門学校、旧師範教育令(昭和18年勅令第109号)による教員養成専門学校又はこれらの学校と同等の以上の学校、養成所等を卒業後4年以上の者
- 3 その他研究歴5年以上の者

(注) ここにより卒業後2年、4年、研究歴5年の算定は、選挙期日(第13期の場合、昭和58年11月25日)現在を基準とする。

(研究論文又は業績報告)

二 次に、前項の科学者は、科学又は技術の研究者であって、研究論文又は業績報告により、研究者であることが選挙管理会の行う資格審査において認定されなければならない。そのためには、科学者から提出された登録用カードに記載の研究論文又は業績報告が左のいずれかに該当するものでなければならない。

- 1 研究論文は、その全文又はその内容を明らかにする概要等が、学術上の著書として発表されるか、又はしるべき学会の学術誌、研究機関の機関誌その他これらに準ずる学術誌に発表されたものとし、単なる速報又は抄録の類は認めない。
- 2 文書による業績報告は、例えば、研究報告、鑑定書、調査書、大工事の建設報告書等に関し、その全文又はその内容を明らかにする概要等が、学術上の著書として発表されるか、又はしるべき学会の学術誌、研究機関の機関誌その他これらに準ずる学術誌に発表されたものとし、単なる速報又は抄録の類は認めない。

なお、特許権を得た発明は、「特許公報」により公告されるので、必ずしも学会誌等に掲載されなくても差し支えない。ただし、学術上価値があると認められるものに限る。

- 3 口頭による業績報告は、例えば、研究、鑑定、大工事の建設等に関し、しるべき学会、研究機関主催の発表会等において口頭により発表され、かつ、その内容が学術誌、機関誌その他これらに準ずる学術誌に掲載されて明らかにされたものでなければならない。この場合当該学会誌等を登録用カードに添えて提出しなければならない。(掲載誌の名称及び巻号数を示す部分が含まれて、該当部分の切り抜き、抜き取り又は機械複写で差し支えない。)

(注)

- (7) 翻訳及び編纂は特に学術上価値があると認められるもの、教科書は学術上の著書として特に認められるものに限る。
- (4) 共著、共同業績は、その担当が学術上価値があると認められる場合に限る。

また、共著者は、刊行された学術的図書の表紙に掲載された者及びはしがき、序章の中にその図書の一部を執筆したことを明記してあるものに限る。

- (7) 座談会、対談会の記録程度のもは認めない。
- (8) しかるべき学会とは、全国的な専門学会及びこれに準ずるものとし、しかるべき研究機関とは、大学（短期大学を含め）、国公立の研究機関並びに当該第34条による公益法人の研究機関及びこれに準ずる民間研究機関とする。

（研究論文又は業績報告の発表の時期）

更に前項の研究論文又は業績報告は、その発表の時期（当該研究論文又は業績報告を発表した学会誌等の発行年月）が選挙期前日の9か月以内（昭和49年11月以降）でなければならぬ。

ただし、次に掲げる者については、その研究論文又は業績報告の発表の時期が選挙期前日の9か月を超えていても差し支えない。

- 1 大学（短期大学を含む）に勤務する講師以上の教職にある者
- 2 高等専門学校に勤務する助教以上の教職にある者
- 3 日本学術会議会員及びその職にあった者、日本学士院会員、大学名誉教授（短期大学を含む）、高等専門学校名誉教授
- 4 国公立研究所等の研究機関に研究員として勤務している者
- 5 博士の学位を有し、しかるべき学会に所属する者

○有権者登録の手続：

- (1) 日本学術会議中央選挙管理会（〒106 東京都港区六本木7-22-34 Tel. 03(403)6291）へ、「様式第1」により個人で登録用カード用紙を請求して下さい。
- (2) 登録用カード用紙に必要事項をもれなく記入、捺印して昭和58年2月28日必着で提出して下さい。

※前回（第12期：昭和55～57年）の有権者の方へ

前回の選挙の有権者については、提出されているカードにより、本年資格審査が行われました。

これに関し、日本学術会議中央選挙管理会から登録用カードを再提出されるよう通知（昭和57年6月30日付）のあった方以外の方は、引き続き、有権者名簿に登録されますから、改めて登録用カードを提出する必要はありません。

なお、提出されているカードの記載事項に変更があった場合は、「様式第3」により速やかに「有権者異動届」を提出してください。（「所属学会」の欄に日本レクリエーション学会を書き加えて下さい。2つ以上の学会名を併記できます）

また、前回の有権者名簿に登録された方が、その所属する部又は専門の変更を求めようとする場合は、登録のし直しをする必要がありますから、「様式第2」の「所属部又は専門変更届」により、登録用カード用紙を請求してください。

備考 様式第1～第3は「はがき」に必要事項を記入しても差し支えありません。

学会ニュース

№28

JUNE 1983

日本レクリエーション学会

〈案内〉 第13回日本レクリエーション学会大会・1983年度総会 = 開催要項 =

1. 日 時：1983年10月30日(日) 9:00～17:00
2. 場 所：北浜労働センター (大阪府大阪市)
3. 日 程：

9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00
受付	研究発表	昼休み	研究発表	体	専門分野別	
		理事会		総	シンポジウム	

4. 総会議題：
 - ・1982年度事業・決算報告
 - ・1983年度事業案・予算案審議
 - ・その他
5. 大会参加費：正会員・特別会員 1,000円
 学生会員 500円
 賛助会員 無料
 全国レクリエーション大会参加費納入者 無料
 その他一般の方 1,500円

＝ 研究発表申込み要項 ＝

1. 発表資格：1983年度会費を納入した会員
2. 発表形式：口頭発表
3. 登壇回数：共同発表をのぞき、1人1回
4. 発表時間：一題15分（質問3分を含む）
5. 発表申込：同封の申込書に所定事項を記入し、返信用封筒（70円切手貼付）を添え、事務局へ郵送して下さい。
6. 発表申込締切：1983年8月27日(日)（厳守）
7. 発表抄録原稿提出：申込書を受領後、1週間以内に、事務局から規定の原稿用紙を送付しますので、タイプまたは複写による手書き（墨字）の横書きで原稿を作成しコピー1部を添えて、9月17日(必着)までに学会本部事務局へお送り下さい。

- 「総会への出欠ハガキ」（同封）は、9月30日(必着)でご返送下さい。
- 学会大会不参加の方へ
 研究発表・シンポジウムの抄録希望の方は事務局へ切手670円（含、送料）同封の上、お申し込み下さい。
- 「学会大会への派遣願」が必要の方は、返信用封筒(60円切手貼付)同封の上、事務局へご一報下さい。

公 示 <「レクリエーション研究」第11号投稿募集>

1. 投稿期限：1983年11月26日(必 着)

<同封の会員名簿に記載ミスのあった方>

必ず事務局にハガキでご一報下さい。

<日本学術会議主催シンポジウムのお知らせ>

1. 主 催：日本学術会議体育学研究連絡会
 日本学術会議体力科学研究所連絡会
2. 日 時：昭和58年1月21日(金) 14時～16時30分
3. 会 場：日本学術会議大会議室2階
 東京都港区六本木7-22-34
 TEL. (03) 403-6291(代)
 (地下鉄千代田線「乃木坂」駅下車1分)
4. 次 業：
 1. シンポジウム題目：「女性とスポーツ」—21世紀に向けて—
 2. 開会の挨拶：体育学研連委員長 笠 井 忠雄（第1部会員）
 司 会：体育学研連幹事 岸 野 雄 三（第1部会員）
 3. 演題と演者：
 - 1) 「弓道と女性」
 日本武道学会副会長 弓道編士、文学博士 石 岡 久 夫
 - 2) 「社会変動と女性のスポーツ」
 日本レクリエーション学会理事長 筑波大学教授、教育学博士 浅 田 隆 夫
 - 3) 「女性の体力とスポーツ」
 日本体育学会理事 東大教授、教育学博士 宮 下 充 正
 4. 閉会の挨拶 体力科学研連委員長 伊 藤 忠 厚（第7部会員）
 （来場自由・参加費無料）

会報「学会ニュース」№27

発行日 昭和58年1月10日
 責任者 日本レクリエーション学会 理事長 浅田隆夫
 編 集 広報渉外専門委員会
 事務局 〒150 東京都港区神南1-1-1
 岸記念体育会館
 (財)日本レクリエーション協会内
 電話 (03) 460-5464
 郵便振替 東京5-42971
 「日本レクリエーション学会事務局」

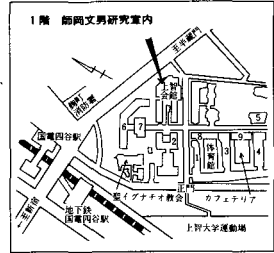
2. 投稿規定：【レクリエーション研究】第9号最終頁参照。
 - 必ず、コピー3部を添えて提出して下さい。
 - 校正は編集委員会の責任校正とします。
3. 郵 送 先：〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
 上智大学 国際文化研究室内
 日本レクリエーション学会 編集委員会

お知らせ

<事務局移転のお知らせ>

本学会は、1960年5月より本部事務局を幹日本レクリエーション協会内に設置し、使用料無料でご協力をいただいております。しかし、この棟御日本レクリエーション協会が岸記念体育会館から修業団会館にその大部分を移転させたため、学会が協会内に引き続き事務局を置くのに、毎月3万円の借料を支払わなくてはならなくなりました。

つきましては、1983年度第1回理事会で協議しました結果、下記の通り本部事務局を一時的に、1982-83年度幹事の師岡文男氏（上智大学）の研究室に移転させることになりました。よろしくご了承下さい。



〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
 上智大学 師岡文男研究室内
 (電話番号) 03 (238) 3911
 (業務開始日) 1983年7月1日(日)

研究活動

<1983年度 研究集会 = 開催要項 =>

- 6月25日(日) 2:00～4:00P.M.
 テーマ：「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その4)」
 ～レク資源、レク空間を中心として～
 会 場：東京農業大学図書棟 第1会議室
 (東京都世田谷区松丘1-1-1 TEL. 03 (420) 2131
 地下鉄 新玉川線 桜新町駅下車、東急バス 成城学園行に乗換 東京農業大学前下車
 話題提供者：●概 論……レク資源 空間計画学の体系 鈴木忠義(東京農業大学)
 ●公的レク施設……特に利用の実態と運営のプログラム、レクリエーターとの接 杉尾邦正(ブレイク研究所)
 ●商業レク施設……経営(組織)、管理 涌井史郎(石橋エクステリア)
 ●レクのまちづくり……行政との関係から 前田 豪(ラック計画研究所)

- コーディネーター：遠士五十八(東京農業大学)
- 9月20日(日) 6:30～8:30P.M.
 テーマ：「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その5)」
 ～レク行動、レク権を中心として～
 会 場：立教大学(詳しくは、当日正門に掲示します)

(東京都豊島区池袋3丁目 TEL. 03 (985) 2297
 国電 山手線 池袋下車徒歩10分
 話題提供者: ● レク 行 動……レク行動の構造・機能分析 今村浩明(千葉大学)
 健康障害者のレク行動 大瀬孝雄(東海大学)
 ● レク 指 導……レク指導を通じた健康教育の展開 千葉一夫(総日本レクリエーション協会)
 コーディネーター: 松浦三子(立教大学)

○1月26日(日) 2:00~4:00P.M.
 テーマ:「わが国におけるレクリエーションの体系化に関する研究(その6) ~レク政策、レク学教育を中心として~」
 会 場: 上智会館 第5会議室
 (東京都千代田区紀尾井町7-1 TEL. 03 (238) 3004・3785
 国電 総武線・中央線、地下鉄丸の内線 四谷駅前
 話題提供者: ● レク 政 策……新潟県長岡市のレク政策について 小林秀夫(長岡市レクリエーション課)
 ● レク学教育……専修大学(日本体育大学) 高橋和成(東海大学)
 中田祥子(津田塾大学)

○3月10日(日) 2:00~5:00P.M.
 内 容: レジャー・レクリエーションに関する短期大学・大学・大学院等の卒業論文発表会
 会 場: 上智大学(予定)
 発表申込: ハガキに住所・氏名・電話番号・学校名・論文テーマ・指導教員を明記の上、
 2月18日(由)迄に事務局へお送り下さい。学会員の方でも結構です。

理事会より <1982年度 第2回理事会報告>
 日 時: 1982年10月31日(日) 11:50A.M.~12:40P.M.
 場 所: 日名子ホテル 大広間 九重(大分県別府市)
 出席者: 江橋(会長)、櫻山(副会長)、青木(副会長)、草川(監事・近畿支部事務局長)、深町(監事)、
 磯田(理事長)、秋吉、池田、岡田、金崎、高橋、田中、仲野、永吉、前野、松浦、
 松原、宮下 以上18名。
 出席: 川田、菊岡 以上幹事3名。
 大分(九州支部事務局長) 以上1名。
 1. 入会希望者29名(正会員27名、特別会員2名)の入会と退会希望者2名(正会員2名)の
 1名名の退会を承認し、残り1名を退会保留とし、前野理事が退会保留の交渉をすること
 になった(総会員数518名)。
 2. 3年以内会費未納の会員は、退会処分とする(内規)。
 3. 1982年度上半期事業報告および会計執行状況報告(残額588,051円)を承認。
 4. 1983年度下半期事業予定および予算案を承認。
 5. 第13回学大会は、1983年10月30日(日)に大阪市内で開催することを決定(改、全国レ
 クリエーション大会:10月29日~31日、大阪府)。
 6. 機関誌「レクリエーション研究」第10号への広告協賛会員の紹介を理事に依頼。
 7. 第12回学大会の反省として、(1)大会前日の夜に会員相互の懇親会を行ってどうか、(2)
 大会運営と支店主任の役割、本部と支店の間で明確な取り決めを行った方がよい、という
 意見が出された。
 8. 第12回学大会運営委員長 櫻山三郎氏の挨拶。
 9. 江橋理事部会長の挨拶 (一)今後レクリエーション情報検索システムを学会で確立して
 いく必要性、(2)国際交流の促進、(3)1984年度全国レクリエーション大会の開催地は鹿児島。

<第3回常任理事会報告>
 日 時: 1983年1月29日(日) 1:00~3:00P.M.
 場 所: 上智会館 第4会議室(東京都千代田区)

7. 退士理事より、造園家集団主催「子供のそびえ坊シボジウム」(6月25日)に学会として
 協賛してどうかとの提案があり、協賛を退士理事に一任することに決定。

<1983年度 第1回理事会 報告>
 日 時: 1983年4月26日(日) 6:00~8:00P.M.
 場 所: 上智会館第3会議室(東京都千代田区)
 出席者: 江橋(会長)、草川(監事)、磯田(理事長)、池田、今井、金崎、木下、田中、藤本、前
 野、松浦、宮下 以上12名。
 麻生、師岡 以上幹事2名。
 1. 江橋会長より1)来年度の全国レクリエーション大会は鹿児島県で開催される。(2)本年度全
 国レクリエーション大会の研究機関から助言者を出すなどの協力をしてはどうかなどの内容の挨拶
 があり、来日中由学大会を要約訪問した世界レジャー・レクリエーション協会(WLRA) 事
 務局長 Nelson Melendez氏を紹介があった。
 2. Nelson Melendez氏より、WLRAは今後アジア地区のレジャー・レクリエーション研
 究活動に積極的に協力していくとの挨拶があった。
 3. 入会希望者16名(第3回・第4回常任理事会承認分を含む)、退会希望者1名(第3回常
 任理事会承認分)の入、退会を承認(総会員数536名)。
 4. 1982年度事業報告を承認。
 (1) 事 業
 1) 第12回学大会開催
 10月31日(日) 日名子ホテル [大分県別府市]
 ● 研究発表22題
 ● 講 演
 「ライフ・サイクルとレジャー・レクリエーション~中高年の余暇問題を含めて
 ~」John R. Kelly, Ph.D. (イノリノ大学)・通訳: 西野 仁(東海大学)
 ● 専門分野別連続シンポジウム(政策研究分野)
 「シニア・エイジのレクリエーション行動とその展開」浅田隆夫(筑波大学)、秋
 吉嘉範(福岡教育大学)、鎌田秋利(大分県立総合体育館)、吉田隆夫(福祉開発研
 究所)・司会: 金崎良三(九州大学)
 2) 研究発表会開催
 ● 6月12日(日)講演会「レジャー・カウンセリングについて」(大阪・文化情報センター)
 Peter A. Witt, Ph.D. (ノース・テキサス州立大学)・通訳: 中田祥子(津田塾大)
 ● 10月5日(日)シンポジウム「わが国におけるレクリエーションの体系化に関する研
 究(その1) ~レクリエーションの体系化をめざして(その方法と戦略をめぐって
 フォー・メーション) ~」[東京・東京農業大学]
 鈴木忠義(東京農業大学)・司会: 進士五十八(東京農業大学)
 ● 11月27日(日)シンポジウム「わが国におけるレクリエーションの体系化に関する研
 究(その2) ~レクリエーションの対象と方法(私はこう考える) ~」[東京・日
 体学院] 西野 仁(東海大学)、山崎進(相模女子大学)、前野洋一郎(千葉大学)・司
 会: 今村浩明(日本体育大学)
 ● 1月29日(日)シンポジウム「わが国におけるレクリエーションの体系化に関する研
 究(その3) ~レクリエーション理論を中心として~」[東京・上智会館] 川村英夫
 (前・顧問)、近藤英男(近畿大学)、浅田隆夫(筑波大学)・司会: 藤本隆(中央電
 気通信学園)
 ● 3月12日(日)卒業論文発表会「レジャー・レクリエーションに関する短期大学・大学
 ・大学院の卒業論文発表会」(東京・上智会館)
 学士論文文—13題、修士論文—1題
 3) 機関誌「レクリエーション研究」第10号発行(3月)
 4) 会報「学会ニュース」発行 第25(5月)・第26(9月)・第27(1月)
 5) 1982・1983年度会員名簿 発行(12月)
 6) 組織の拡充 入会者 98名 [1983年3月31日現在
 退会者 3名 正 会 員 474名(機関誌編集員2名)をまじ 特別会員 14名
 学生会員 42名 賛助会員 2名
 総 計 532名

出席者: 江橋(会長)、浅田(理事長)、池田・高橋・田中・前野 以上6名。
 浅野、野生、師岡 以上幹事3名。
 1. 入会希望者6名(正会員4名・特別会員1名・購読会員1名)の入会と、退会希望者1名
 (正会員)の退会を承認。
 2. 「レクリエーション研究」第10号について、下記の事項が第1回編集委員会(1983年1月29
 日開催)の決議事項として高橋和成編集委員長から報告され、承認された。
 (1) 内容は、原稿文、第1回研究大会報告(研究発表・講演・シンポジウム)、1982年度
 研究発表報告(第1~4回研究会)、1982年度支部研究活動報告、学会通信と、B5
 版100頁程度の出来上りとする。
 (2) 投稿論文の審定は、投稿された6篇の論文の内2篇と内容がレクリエーション研究では
 ないことから投稿者へ返戻しとし、残り4篇について審査を行うことにした。審査員と
 して高橋和成・進士五十八・中田祥子・前野洋一郎の各氏を選出した。
 (3) 発行日は、3月末日を努力目標とする。
 3. 第13回学大会について、来年度全国レクリエーション大会の主催者である師大附府レ
 クリエーション協会理事理事 岡田洋一郎氏との交渉の結果が退会保留委員長から報告された。
 (1) 第13回学大会を第37回全国レクリエーション大会の協賛行事とする。
 (2) 期間は1983年10月30日(日)とする。
 (3) 場所は大阪市北浜労働センター(予定)とする。
 (4) 全国レクリエーション大会参加費を納入したは、学会員・非学会員を問わず学大会
 の参加費を無料にする。
 (5) 全国レクリエーション大会および学大会の成功のために相互協力を行う(ex、研究協
 議等)。
 (6) 学会員に全国レクリエーション大会への参加を学会として呼びかける(全国レクリエ
 ーション大会参加申込書学会名簿に配布する)。
 (7) 学大会の開催費・費拠代は、全国レクリエーション大会実行委員会が負担する。
 4. 1982年度第5回研究会「レジャー・レクリエーションに関する専門学校・短大・大学
 ・大学院の卒業論文発表会」への発表申込連絡を理事に依頼することを決定。学校法以
 外の教育機関に所属する人からの申込みがあった場合は、進士五十八企画委員長にその取り
 扱いを一任することに決定。
 5. 日本学術会議シンポジウム「女性とスポーツ」(1月21日開催)に日本レクリエー
 ション学理事長として参加、「社会変動と女性のスポーツ」について講演を行った宮、浅田大
 理事長より報告があった。
 6. 「レクリエーション研究」第10号への広告協賛会紹介を理事に再度依頼することを決定。
 7. 次回、第4回常任理事会を3月12日(日)開催することを決定。

<第4回常任理事会 報告>
 日 時: 1983年3月12日(日) 11:50~12:40P.M.
 場 所: 上智会館第4会議室(東京都千代田区)
 出席者: 江橋(会長)、浅田(理事長)、池田・進士・田中・宮下 以上6名。
 野生、西野、師岡 以上幹事3名。
 1. 入会希望者3名(正会員1名・学生会員1名・賛助会員1名)の入会を承認(総会員数
 532名)。
 2. 機関誌「レクリエーション研究」第10号について、下記の事項が決定された。
 (1) 編集委員会の第2次投稿論文審査結果通り、1題を「掲載可」、2題を「一部訂正すべ
 掲載可」、1題を「掲載不可」とする。
 (2) 第5回研究会(卒業論文発表会)の報告(発表名・論文タイトルのみ)を「1982年
 度研究発表報告」の中に入れて。
 (3) 5月末日までには発行できるように最大限の努力をする。
 3. 第5回研究会(卒業論文発表会)の内容(学術論文13題・修士論文1題)の報告と承認。
 4. 「レクリエーション研究」第10号への広告協賛結果報告(4社・13万円)の報告。
 5. 全国レクリエーション大会実行委員会から研究協賛会の参加、協力願がきていること
 の報告。
 6. 第13回学大会の研究発表の演題の中に、全国レクリエーション大会のテーマで、毎
 年レクに関するものが多く出るように学会として努力する。専門分野別連続シンポジウムのテ
 マとの関連も合わせて検討する。

7) そ の 他
 ● 第36回全国レクリエーション大会(10月30日~11月1日)主催: 総日本レクリエ
 ション協会) 協賛。
 ● 日本学術会議体育学研究連絡会所属学会として、シンポジウム「女性とスポーツ
 21世紀に向けて」を共催、浅田隆夫理事長が演者として参加し、「社会変動と女性
 のスポーツ」を講演。
 (2) 会 議
 1) 総 会 議 6月12日(日)文化情報センター [大阪府]
 1981年度事業・決算報告、1982年度事業案、予算案承認、会則改正承認、「理事
 会の運営に関する規定」(案)承認、「専門科会設置に関する規定」(案)承認、「レ
 クリエーション研究」投稿制度」(案)承認、1982・1983年度役員選出
 2) 理事会開催 2回
 6月12日(日)、10月31日(日)
 3) 常任理事会開催 4回
 7月19日(日)、9月6日(日)、1月29日(日)、3月12日(日)
 4) 企画委員会開催 1回
 7月31日(日)
 5) 編纂委員会開催 1回
 1月29日(日)
 6) 幹事会開催 1回
 7月19日(日)
 5. 1982年度決算報告・監査報告を承認。

(収支決算書) 自: 1982年4月1日 至: 1983年3月31日(単位: 円)

項目	千 円 額	決 算 額	増 減 額
収 入 総 額	2,700,000	2,917,628	217,628
支 出 総 額	2,700,000	2,587,945	112,055
差 引(次年度繰越金)	0	329,683	329,683

(収入明細)

項 目	千 円 額	決 算 額	増 減 額	内 容
前年度繰越金	646,238	646,238	0	08年分
入 会 金	50,000	50,000	48,000	1名
年 度 会 費	1,717,000	1,708,278	8,724	82年度(正・特別会員354+8名、学生会員36名 購読会員1名)、83年度29名、女性10名、通込1 名、納入済定額3名、相違戻金3名、 返金3名
大 会 参 加 費	100,000	102,500	2,500	研究分(各会員2名(内学生1名)、総計10 名)、広報分(150,000円)、「レク研究」38冊、「大会抄録」 29冊、利息(5,131円)など
専 用 収 入	0	0	0	
計	2,700,000	2,917,628	217,628	

(支出明細)

項 目	千 円 額	決 算 額	増 減 額	内 容
事 務 費	40,000	106,385	66,385	文書代: コピー代(バックナンバー)など
会 費	30,000	19,500	400	レクリエーション研究、研究会など
運 賃 費	430,000	400,230	24,770	「レク研究」9号、千円会費、第25・26・ 27号の郵賃、ハガキ代、切手代、電話代、宅急 便料金など
印 刷 費	1,600,000	1,714,080	114,080	「レク研究」9号、「学会ニュース」第25・26・ 27、「第12回学大会」の「研究発表報告」の 印刷費、機関誌「レクリエーション研究」の 印刷費(各7万円)、シンポジウム運営費(6万円)、 印刷費(3万円)、写真代など
研 究 会 費	50,000	81,910	31,910	外編委員報酬、講師謝辞、資料代など
学 会 費	120,000	154,400	34,400	研究費(各7万円)、シンポジウム運営費(6万円)、 印刷費(3万円)、写真代など
編 纂 費	5,000	0	5,000	アマビタイ代、送達物運送費
専 用 費	15,000	20,400	5,400	レク協会維持費・振込手数料など
予 備 費	400,000	0	400,000	
計	2,700,000	2,587,945	112,055	

議決して適正であることを認めます。

1983年4月26日

監事 草川一 枝 ◎
深町一夫 ◎

6. 1983年度事業案を承認。

(1) 事業案

- 1) 第13回学会大会開催 北浜労働センター (大阪府大阪市) 10月30日印
●研究発表
●講演
●専門分野別連続シンポジウム (原論分野) (行動研究分野)
2) 研究会開催 4回
●6月25日(土) シンポジウム「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究 (その4) - レク資源、レク空間を中心として -」[東京・東京農業大学] 演者: 末定・コーディネーター: 進士五十八 (東京農業大学)
●9月20日(日) シンポジウム「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究 (その5) - レク行動、レク指導を中心として -」[東京・立教大学] 演者: 末定・コーディネーター: 松浦洋三 (立教大学)
●11月26日(日) シンポジウム「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究 (その6) - レク政策、レク学教育を中心として -」[東京・上智会館] 演者: 末定・コーディネーター: 松浦三代子 (東京女子体育大学)
●3月10日(日) 卒業論文発表会「レジャー・レクリエーションに関する短期大学・大学・大学院の卒業論文発表会」[東京・上智会館]
3) 機関誌「レクリエーション研究」第11号発行 (3月)
4) 会報「学会ニュース」発行第28 (5月)・第29 (3月)
5) 組織の拡充 会員の増進
(即任府県レクリエーション協会およびレク講座をもつ専門学校・短大・大学へ「入会案内」送付など)
(2) 会議開催
1) 総会開催 10月30日印 北浜労働センター (大阪府大阪市)
2) 理事会開催
3) 常任理事会開催
4) 各種委員会・幹事会議
7. 1983年度予算案を承認。

(収入明細)

Table with 4 columns: 項目, 予算額, 内, 外. Rows include 前年度繰越金, 年度会費, 大会参加費, 雑収入, 計.

(支出明細)

Table with 4 columns: 項目, 予算額, 内, 外. Rows include 事務所賃, 会議費, 雑費, 印刷費, 研究会費, 大会費, 総会費, 事務局運営費.

Table with 2 columns: 種別, 金額. Rows include 地下, 雑費, 計.

- 8. 「レクリエーション研究」第10号の発行日は、研究会報告の原稿提出の遅れにより6月初旬になる旨、事務局より報告があった。
9. 第13回学会大会について、下記の事項が決定された。
(1) 事前準備は、本部事務局が行い、当日の運営は、近畿支部が行う。
(2) 専門分野別連続シンポジウムの内容は、次の通りとする (4月7日の企画委員会案を承認)
(行動研究分野) コーディネーター: 池田 勝 (筑波大学)、パネリスト: 西山隆次 (大阪産業大学)、藤原達一郎 (大阪府立教育センター)
(原論分野) コーディネーター: 小田切毅 (奈良女子大学)、パネリスト: 影山 健 (愛知教育大学)、園田碩哉 (助日本レクリエーション協会)、仲村 要 (同志社大学)
2分野共、テーマ設定はコーディネーターに一任する。
10. 1983年度研究会内容について、松浦・今井両企画委員より案 (4月7日企画委員会決定) が出され、承認された (本「学会ニュース」2-3頁参照)。
11. 1980年5月より無断で学会本部事務局のために机を提供してきていた助日本レクリエーション協会が、5月9日よりその大部分を岸記念体育会館 (東京・原宿) より修養会館 (東京・代々木) に移転させるため、学会が引き続き助日本レクリエーション協会内に事務局を置くには毎月3万円の借料を支払わなくてはならなくなった旨、池田庶務委員長より報告があり、議決案を協議した結果、本部事務局を1982・83年度幹事の土上智大 師岡文男氏の個人研究室内に7月1日より一時移転することに決定した。
12. 1983年度助日本レクリエーション協会評議員として浅田隆夫氏 (理事長) を再選。
13. 九州支部金崎理事長より、九州支部の現状 (支部委員の減少など) について報告があった。
14. 近畿支部専川事務局長より、近畿支部の現状 (修養会館で京都府警に逮捕された近畿支部役員候補者の除名など) について報告があった。
15. 京都市の公共施設建設に伴う日向日京駅交差と絡む物販店に逮捕された河嶋健爾会員 (京都府) を、学会会則第8条により会員資格停止とすることを決議 (総会員数535名となった)。
16. 5月9日の日本学術会議と学・協会との懇話会出席者選出は、会長・理事長に一任することに決定。
17. 第14回学会大会 (1984年度) の開催予定地を鹿児島県鹿児島市 産屋体育大学にしようかと浅田理事長より提案があり、承認され、関係局と交渉することになった。

海外より <国際会議の予定>

- 7月23日~24日
World Federation of Mental Health Congress
-Special Sessions on "Leisure a Criterion of Mental Health"-
Washington, D.C. U.S.A.
(問合せ先)
World Leisure and Recreation Association (WLRA)
345 East 46th Street, United Nations Plaza
New York, N.Y. 10017, U.S.A.
Tel. 212 (697) 8783
○9月18日~25日
International Federation of Parks and Recreation Administrators
-Special Session on Children's Play Activities--
Barcelona, Spain
(問合せ先) WLRA (住所 前記)
○10月14日~16日
Leisure Information Network (LINK) II Congress, The Netherlands

(問合せ先) WLRA (住所 前記)
○10月17日~21日
Mexican Education and Recreation Association (AMER) Congress on "Leisure and Culture"
Oaxtepec, Mexico
(問合せ先) WLRA (住所 前記)
○秋
Asian-Pacific Regionalization Planning Meeting
Manila, Philippines
(問合せ先) WLRA (住所 前記)

○11月
Symposium on the Role of Public and Private Recreation Providers
San Juan, Puerto Rico
(問合せ先) WLRA (住所 前記)

○12月27日~1月2日
The International Council for Health, Physical Education and Recreation's 26th Annual Congress
Wingate Institute
Wingate Post Office
Israel 42902
Tel. 972 (523) 92951

○2月27日~3月3日
American Camping Association's National Convention
San Diego, California, U.S.A.
(問合せ先)
American Camping Association
Bradford Woods
Martinsville, IN 46151, U.S.A.

<文献紹介>

- "Leisure Recreation & Tourism Abstracts"
(季刊)・US \$ 49.50+航空便代 \$ 10.00
(発注先)
Central Sales
Commonwealth Agricultural Bureaux
Farnham House
Farnham Royal, Slough SL23BN
United Kingdom.
○ "Leisure Studies"
(年3回発行)・£ 22.00+航空便代 £ 35.00
(発注先)
The Periodicals Department
Associated Book Publishers (UK) Ltd.
North Way, Andover, Hampshire SP10 5BE
United Kingdom.
○ "International Directory of Leisure Information Centres"
(US \$ 14.00+航空便代 US \$ 7.00)
(発注先)

WLRA (国際会議の予定) の欄参照
<世界レジャー・レクリエーション協会 (WLRA) について>

米国ニューヨークに本部を置く世界レジャー・レクリエーション協会 (WLRA) への入会申込書が学会事務局に届いております。ご興味のある方は、返信用封筒 (60円手助付) を同封して、学会事務局にご請求下さい。
個人会員 US \$ 30.00 (年会費)
学生会員 US \$ 15.00 ()

事務局より <会費納入のお願い>

1983年度の会費 (正会員・特別会員 4,000円、学生会員 1,000円、賛助会員 20,000円以上) の納入を同封の郵便振替用紙にて6月30日までにお願います。近畿・九州支部会員の方も直接本部事務局へ納入して下さい。
なお、下記の項目は昨年度までの会費が未納になっております。記載額 (本年度会費を含む) をお支払い下さい。
領収書は、納入時に郵便局から渡される「郵便振払込金領証」をもちまして、かき添えていただきます。正式の領収書をご希望の方は、事務局までご相談下さい。
万が一、今回の請求と会費納入が入れ違いになりましたら、ご容赦下さい。
記

- ▶正会員
(北海道・東北)
宮川新子 8,000円・三沢拓而 12,000円・市山博美 8,000円
川村清児 8,000円・小関正一 12,000円・斎藤俊彦 16,000円
(関東)
(群馬) 富木知恵美 8,000円
(千葉) 井手孝太郎12,000円・島津一郎 8,000円・土井正浩 19,000円
平野吉直 8,000円・星野敏男 8,000円・安原照雄 12,000円
横山嘉一 19,000円
(埼玉) 今村浩明 16,000円・梅津通子 8,000円・金子和正 8,000円
毛塚 宏 8,000円・荻司正徳 8,000円・寺島善一 12,000円
中村忠輔 12,000円
(关西) 飯田 隆 8,000円・飯田隆博 19,000円・井村 仁 8,000円
久保田博康 8,000円・清水雅己 8,000円・志穂健哉 8,000円
武藤 晃 8,000円・田崎健太郎12,000円・伴野 重 8,000円
柳 孝幸 12,000円・山本 悟 8,000円・力野由美 8,000円
渡辺 務 8,000円
(神奈川) 加藤 隆 8,000円・木村 誠 12,000円・熊坂 実 8,000円
白山源三郎12,000円・清和洋子 12,000円・立崎栄一 16,000円
塚本真也 12,000円・瀧園武雄 4,000円・渡辺栄江 16,000円
渡辺利昭 8,000円
(東京) 会田昭一郎 8,000円・石井秀行 19,000円・石原妙子 16,000円
伊藤昭彦 16,000円・鈴木啓吾 8,000円・上田太郎 8,000円
近口泰弘 12,000円・大北文生 19,000円・大石達彦 8,000円
大森英美 8,000円・岡 英美 12,000円・岡部正博 19,000円
小笠原悦子 8,000円・沖中しゆみ 8,000円・片岡曉夫 12,000円
加藤敏夫 8,000円・神谷和男 8,000円・河野信弘 16,000円
小清水英司12,000円・小林伸喜 12,000円・小林 肇 19,000円
巖所達夫 16,000円・斎藤源吾 8,000円・渋谷美知子12,000円
杉原邦江 12,000円・杉野百合子 19,000円・園田碩哉 12,000円
高尾典子 12,000円・田村誠夫 12,000円・手塚英美 8,000円
長沢淑郎 13,000円・二宮代代 12,000円・成田誠三 8,000円
林 英 12,000円・巻 正平 12,000円・増嶋みえこ 8,000円

- 松戸良一 12,000円・村藤善次 8,000円・森園達子 8,000円
八尾 勝 8,000円・浦井雅之 8,000円
- 〔中部〕
(愛知) 勝瀬幸貞 13,000円・川村英男 16,000円・鈴木尚子 12,000円
(神奈川) 船江道弘 8,000円
(群馬) 原田克己 8,000円
(長野) 中込孝彦 8,000円
(富山) 竹内雅和 8,000円
- 〔近畿〕
(京都) 乾 道生 12,000円・大橋寅之助 12,000円・小林忠孝 19,000円
近藤英男 23,000円・浜田康隆 8,000円
(大阪) 今西隆次 8,000円・神崎清一 8,000円・寺岡一郎 12,000円
中島勝次 8,000円・中村茂高 8,000円・西山博次 8,000円
長谷川修一 19,000円・馬場太郎 19,000円・柳田雄三 8,000円
藤田好茂 8,000円・見正秀泰 8,000円・舟羽昭久 8,000円
山本英男 8,000円
(奈良) 栢 隆次 9,000円・瀬崎路子 16,000円・丹羽助昭 8,000円
(滋賀) 岩井重喜子 12,000円・清水源太郎 16,000円・岡司昌宏 8,000円
(三重) 刀根耕一郎 16,000円・藤田匡吉 16,000円
(兵庫) 谷内秀彦 8,000円・田端 太 8,000円
- 〔中国、四国〕
(岡山) 早川忠光 12,000円
(鳥取) 遠藤和輝 8,000円
(山口) 河村文入 12,000円・和田 實 12,000円
- 〔九州〕
(福岡) 小関康之 12,000円・角田良子 16,000円・内藤宗紀 8,000円
山崎尚徳 8,000円
(大分) 上島 彬 8,000円
(佐賀) 小川佐和子 8,000円
(熊本) 生田由美子 8,000円

▶特別会員

〔大韓民国〕

- 金 鍾仁 12,000円 (US \$ 60.00)
〔アメリカ〕
藤星 裕 8,000円 (US \$ 40.00)
山口泰徳 8,000円 (US \$ 40.00)

▶学生会員

- 鬼澤智子 2,000円・金 美香 2,000円 (US \$ 10.00) ・田中みや子 2,000円
千葉由美子 2,000円・渡辺美千代 2,000円

＜新入会員＞ (1982年10月31日～1983年4月26日承認)

▶正会員

- 北村丈夫 (日本大学)、久保木優 (日本大学)、松林 肇 (日本大学)、高橋 寛 (京都新聞社)、
永田順子 (主婦、相馬幸右衛門 (福井県)、宇田川光雄、北條明美 (前日本レクリエーション
協会)、鈴木 誠 (東京農業大学)、渡辺昭久 (田原農業改良普及所)、西村清己 (広島大学福
山分校)、植屋悦男 (日本体育問題研究所)、木村博人 (順天堂大学)、石原福造 (大阪YMCA
A)、勝矢光雄 (江戸川区役所)、相馬正弘 (相馬ランドスケープ計画事務所)、渡辺貴介 (三
重大学)

▶特別会員

CHASE David R. (ペンシルバニア州立大学)

▶学生会員

伊藤順子 (日本体育大学)、三上吉洋 (玉川大学)

▶賛助会員

ホックダ (社長 岡 義範、上塚裕朗 (長野県)

▶「レクリエーション研究」副読本

関東学院大学図書

＜退会会員＞

(1982年10月31日～1983年4月26日承認)

▶正会員

大野オク (オート電機)、春田八重子 (青山学院大学)、松井喜三 (関西YHセンター)、吉澤憲
大和利生 (日本医科大学附設)、古賀登美子 (川口市戸塚体育館)、新田伸三 (九州芸術工科大
学)

＜会員資格停止＞

河嶋健爾 (京都府・東山勤労青少年ホーム)
理由：詐欺容疑で京都府警に逮捕され、会の名誉を著しく損じたため、会則第8条のつとより、
1983年度第3回理事会の議決を経て、5月12日付文書で会員の資格停止を申し渡した。

＜資料頒布＞

○機関誌【レクリエーション研究】第2号(1973年)、第3号(1974年)、第4号(1975年)、第5号(1976
年) 各号：1,000円(送料200円)

○「学会大会研究発表抄録」
●日本レクリエーション研究会(1964～1970年)発行
第6・7回大会合併号(1970年)
付金：1,000円(送料200円)

●日本レクリエーション学会(1971年～)発行
第3回(1973年)、第9回(1979年)、第10回(1980年)、第11回(1981年)、第12回(1982年)
各号：500円(送料170円)

○「レクリエーションの発展～辞典・Encyclopaediaより～」(日本レクリエーション研究会発行)
500円(送料170円)

●上記資料ご希望の方は、郵便振替(東京5-4297)「日本レクリエーション学会事務局」にて、ご注文
ご送下さい。

＜勤務先・住所などを変更された方へ＞

同封の票書にて必ず事務局にお知らせ下さい(変更箇所にも赤でアンダーラインを引いて下さい)。次回「会
員名簿」の印刷にいたしますので、正確にご記入下さい。

＜おことわり＞

○「レクリエーション研究」第10号は、印刷都合で、発行は6月中旬になる予定です。しばらくお
待ち下さい。

○「会員名簿」の訂正事項は、「レクリエーション研究」第10号及び「学会ニュース」629号(9月発行)
に掲載します。

会報「学会ニュース」No.28

発行日 昭和58年6月11日

責任者 日本レクリエーション学会

理事長 浅田隆夫

編集 佐藤伸博(事務局)

事務局 〒150 東京都渋谷区神南1-1-1

岸記念体育会館

(附)日本レクリエーション協会内

電話 (03) 460-5464

郵便振替 東京5-4297

「日本レクリエーション学会事務局」

学会ニュース

No.29

OCTOBER 1983

日本レクリエーション学会

＜案内＞

＜第13回日本レクリエーション学会大会・1983年度総会＞

＝開催要項＝

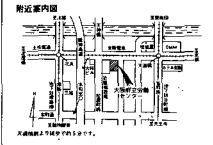
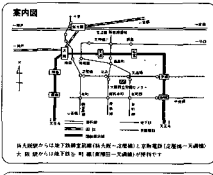
1. 日 時：1983年10月30日(日) 9:00～17:30
2. 場 所：大阪府立労働センター
大阪府大阪市東区京橋3丁目15番地
TEL. 06(942) 0001
3. 日 程：

9:00-9:30	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00
開	開	開	開	開	開	開	開	開	閉
会	研	研	研	研	研	研	研	研	研
場	究	究	究	究	究	究	究	究	究
所	会	会	会	会	会	会	会	会	会
付	場	場	場	場	場	場	場	場	場
表	発	発	発	発	発	発	発	発	発
裏	表	表	表	表	表	表	表	表	表
4. 総会議題：
 - ・1983年度事業・決算報告
 - ・1982年度会計監査報告
 - ・1983年度事業案・予算案審議
 - ・会則改正案(第6条・19条)審議
 - ・「理事会の運営に関する規定」改正案審議
 - ・その他
5. 大会参加費：正会員・特別会員 1,000円
学生会員 500円
賛助会員 無料
全国レクリエーション大会参加費納入者 無料
その他一般の方 1,500円
6. 発表者への注意：
 - (1)発表時間は、発表12分・質疑3分です。(10分～11分 1回、12分～13分 2回、15分～16分 3回)
 - (2)発表資料を配布される方は、50部(シンポジウムは、100部)を当日受付に提出して下さい。
 - (3)スライド映写の方は、発表の30分前までに各発表会場受付に提出して下さい。

◎「総会への出入りガキ」(前回開催に同封)は、10月26日(日)必着でご返送下さい。

◎「学会大会への派遣」が必要方へ
派遣用封筒(60円手貼付)を同封して事務局へお申し込み下さい。

◎「学会大会不参加の方へ」
「学会大会プログラム(含、研究発表・シンポジウム採録)」希望の方は、郵便振替(東京5-4297)にて学会事務局へ670円(含、送料)をお送り下さい。



＝プログラム＝

I. 研究発表 (A会場)		視聴覚室(5階)			
No.	発表時刻	発表演題	演者	所属	座長
1	9:00	学生のレジャー行動と交友関係についての研究 ～くま川、エタノールの側面から～	藤原 邦 秋	東海大学大学院	
2	9:15	大学生の余暇活動の要因	日比野 晴 郎	京都府立大学	西山 勝 水 (大阪産業大学)
3	9:30	子どものスイミングスクール参加に対する興味の 変化	沢 沢 淳 子	日本大学	
4	9:45	障がい者に対する家庭訪問リハビリテーション活動 の一考察	大 杉 淳 子	作樂音楽大学	
5	10:00	家庭内でのスポーツクラブ参加と家族関係 ～くま川、エタノールの側面から～	今 野 守 一	日本大学	原 川 一 枝 (筑波大学)
6	10:15	ランニング愛好者による健康志向 ～女性ランナーを中心に～	宮 川 輝 子	日本大学	
7	10:30	企業内における健康づくりの実践について	星 野 敏 明	明治大学	
8	10:45	勤労者の健康・体力に関する調査研究	横 山 文 人	筑波大学大学院	
9	11:00	精神科病棟患者における夜間時のレクリエーション 活動のあり方	鈴木 定 雄	順天堂総合病院	
10	11:15	肢体不随患者の運動場域に関する考察	金 一 台 洋	釜山大学	
11	11:30	学際的レクリエーションが健康成人の病後者 に及ぼす影響	植 屋 茂 子	日本体育大学	今 井 毅 (日本体育大学)
12	11:45	スポーツ・レクリエーション・養子者(障がい者) に与える影響の考察	村 松 悦 男	神奈川総合こころ センター	
13	2:00	第8回国際スポーツシミュレーション夏季大会 日本選手権大会とその足跡	鈴木 秀 雄	関東学院大学 日本選手権大会実行委員会	
14	2:15	高齢化社会における障害者受容(横浜市内) について	角 田 孝 子	津浦保健生活 文化専門学校 (附)公園緑地 管理 財 団	橋 良 子 (帝塚山学院 大学)
15	2:30	ゲートボール活動の普及と変化	田 中 史 郎		
II. 研究発表 (B会場)		606号室(6階)			
No.	発表時刻	発表演題	演者	所属	座長
1	9:00	職友レクリエーション	小 川 寿 一	大阪産業大学	座 長
2	9:15	楽しみ方の構想分析 ～レジャー行動における世代別、性別特性と 「満足」について～	山 本 清 洋	岡山大学 岡山大学	池 田 勝 郎 (筑波大学)
3	9:30	レジャー行動における「満足」と「期待」の 関係	西 野 仁 義	東海大学	
4	9:45	レクリエーション活動と社会・経済的状況の 関係	海老原 修	東海大学大学院	
5	10:00	公共レクリエーション施設における有効利用の あり方に関する研究	田 畑 由 紀 夫	石綿エクステリア	
6	10:15	国内の障がい者スポーツ施設に関する調査 ～東京・大阪・福岡・札幌・仙台～	村 上 美 江	石綿エクステリア	前 野 洋 一 (スウェーデン コンサルタ ンツ)
7	10:30	おが野村レクリエーションの発展と今後の展望 に関する研究	永 嶋 正 浩	東京農業大学	
8	10:45	児童への関与に関する調査研究 ～近畿圏内施設について～	中 嶋 博 雄	大阪親英女子 短期大学	
9	11:00	野外活動から自然環境へのアプローチ	松 本 雄 一		(附)日本音楽 文化振興会
10	11:15	キャンプの展開方法に関する一試み	谷 戸 一 雅	東海大学大学院	山 田 誠 (神戸外国語 大学)
11	11:30	海外長期キャンプの発展について	高 見 彰	筑波大学大学院	
12	11:45	クロスランニングスキーマの展開について	外 川 重 信	筑波大学	
13	2:00	スキー・乗馬とその責任に関する研究	特 上 利 実	筑波大学大学院	市 川 道 子 (神戸YMCA)
14	2:15	レクリエーション活動の発展と安全対策 ～上野動物園の発展と安全対策～	小 松 武 雄	日本大学	

II. 理事会

1983年度第2回理事会を開催いたします。
[時 間] 12:00~1:00P.M.
[場 所] 研修室 606 (6階)

III. 総 会

1983年度総会を開催いたします。
[時 間] 1:00~2:00P.M.
[場 所] 606号室 (6階)

IV. 専門分野別シンポジウム (原論分野)

[時 間] 2:45~4:30P.M.
[場 所] 606号室 (6階)
[テ-マ] 現代社会におけるレクリエーション概念の再検討
~ 我国のレクリエーション研究史からの問いかけ ~
[コーディネーター] 小田切敏一 (奈良女子大学)
[パネリスト] 奥田順哉 (財・日本レクリエーション協会)、仲村 泰 (同志社大学)、黒山 健 (愛知教育大学)、西野 仁 (東海大学)

※三笠宮殿下のご臨席
3:20~3:55P.M.の35分間、本学会の名誉会長であられる三笠宮崇仁親王殿下がシンポジウムに参加されます。殿下からもご発言をいただく予定です。

V. 懇親パーティー

奮ってご参加下さい。
[時 間] 4:30~5:30P.M.
[場 所] レストラン「なにお」(2階)
[参加費] 5,000円

協賛行事

第37回全国レクリエーション大会
= 大会内容 =

○第1日 (10月29日(土))

会場: 大阪市中央体育館 (TEL. 06 (941) 5096)
12:30~14:20 オープニングジョイ、開会式、日本レクリエーション協会運動方針説明、大会日程説明
14:30~15:45 シンポジウム「21世紀をひらくレクリエーション」
講 師 大阪府体育大学長 加藤 橋 夫
松下電器産業株式会社取締役 高畑 敏一
前全日本女子バレーボール監督 生沼 スミエ
司 会 N H K顧問アウンウン 北 出 清五郎

○第2日 (10月30日(日))

会場: 大阪府立体育会館 (TEL. 06 (631) 0121)
9:00~11:00 研究協議 (10部会)
[会場: 大阪市教育青年センター (TEL. 06 (943) 5021)、大阪府立青少年会館 (TEL. 06 (942) 2441)]
内容: (1)レク指導者、(2)高齢者レク、(3)レク行政、(4)地域レク組織、(5)子どもとレク、(6)学校レク、(7)職場レク、(8)高齢者レク、(9)野外レク、(10)レクと健康・体力づくり
※第1・2・3・5・6・7・8・9部会の助言者または司会者として12人の学会員が参加します。

(企画委員会)

6. 広告協賛団体募集 (『学会ニュース』629・『学会大会プログラム』)の要請 (事務局)

第2回常任理事会報告

日 時: 1983年9月20日(日) 5:00~6:00P.M.
場 所: 立教大学 5号館第1会議室 (東京都豊島区)
出席者: 浅田(理事長)・池田・進士・高橋・前野・松浦・高下 以上7名。委任状2名。
浅野・藤生・西野・師岡 以上幹事4名。
1. 入会希望者14名 (正会員14名) の入会と退会希望者2名 (正会員2名) の退会の仮承認 (総会員数591名)。
2. 第13回学会大会について下記の事項を決定した。
(1)日程・会場 (本会館1員の通り)。
(2)研究発表の座長選出は、進士企画委員長に一任。
(3)専門分野別シンポジウムは、時間の関係で〈原論分野〉のみとし、パネリストに新たに西野・仁氏 (東海大学) を加える。(行動研究分野) は、来年度の大会に延期する。
(4)名誉会長 三笠宮殿下の接待役は、会長・理事長とし、シンポジウムの会場でご発言をお願いします。
(5)組織支部より提出された運営委員会組織を承認。
(6)学会大会終了後、会員懇親パーティーを開催することを決定。
3. 1983年度総会議題を本会館第1会議室に決定。
4. 『レクリエーション研究』第10号発行の報告と、第11号への投稿募集の依頼 (編集委員会)。
5. 第4回研究集会 (11月26日開催) の内容を検討し、レク政策の分野を切り離して行うことに決定。
6. 広告協賛団体 『学会大会プログラム』 獲得のお願い (事務局)。
7. 近畿支部長 青木泰三氏より学会大会用宿舎として大阪ガーデン・パレスというホテルの紹介があった旨、報告。
8. 韓国レク学会が、会員を学会大会に派遣する予定がある旨、補 元任会員が手紙 (私信) で知らせてきたことを報告。
9. 高橋常任理事より、来年9月24日~28日にフランスで世界レジャー・レクリエーション協会 (WLRA) の研究調査委員会主催による「自由時間と余暇に関する世界研究大会」が開催される旨、報告があった。

海外より

国際会議の予定

○11月
Symposium on the Role of Public and Private Recreation Providers
San Juan, Puerto Rico
(問合せ先)
World Leisure and Recreation Association(WLRA)
345 East 46th Street, United Nations Plaza
New York, N. Y. 10017, U. S. A.
Tel. 212 (697) 8783
○12月27日~1月2日
The International Council for Health, Physical Education and Recreation's 26th Annual Congress
(問合せ先)
Wingate Institute
Wingate Post Office
Israel 42902
Tel. 972 (53) 92951
○2月27日~3月3日(1984年)
American Camping Association's National Convention
San Diego, California, U. S. A.
(問合せ先)
American Camping Association

11:15~12:30 記念講演

[会場: 大阪府立青少年会館文化ホール (TEL. 06 (942) 2441)
[講師: 堺屋太一
12:30~13:00 閉会式
会場: 同上

研究活動

1983年度第4~6回研究集会
= 開催要項 =

○11月26日(土) 2:00~4:00P.M.

テ-マ: 「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その6)
~レク学教育を中心として~」
会 場: 上智会館 第3会議室

(東京都千代田区紀尾井町7-1 TEL. 03 (238) 3004・3783

国電 総武線・中央線、地下鉄 丸ノ内線 四ッ谷駅南
話題提供者: 藤本祐二郎 (日本体育大学)、高橋和敏 (東海大学)、田中祥子 (津田塾大学)
コーディネーター: 松浦三代子 (東京女子体育大学)

○1月14日(土) 3:00~5:00P.M.

テ-マ: 「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その7)
~レク政策を中心として~」
会 場: 上智会館 (予定)

(東京都千代田区紀尾井町7-1 TEL. 03 (238) 3004

国電 総武線・中央線、地下鉄 丸ノ内線 四ッ谷駅南
話題提供者: 新潟県長岡市のレク政策について
小林秀夫 (長岡市レクリエーション課)
コーディネーター: 今村 毅 (日本体育大学)

○3月10日(土) 2:00~5:00P.M.

内 容: レジャー・レクリエーションに関する短期大学・大学・大学院等の卒業論文発表会

会 場: 上智大学 (予定)
発表申込: ハガキで住所・氏名・電話番号・学校名・論文テ-マ・指導教育を明記の上、2月18日(日)迄に事務局へお送り下さい。学会員外の方でも結構です。

公 示

『レクリエーション研究』第11号投稿募集

- 1. 投稿期限: 1983年11月26日(日) 必着
2. 投稿規定: 『レクリエーション研究』第10号85頁参照 (但し、郵送先は下記に変更)
●必ず、コピー3部を添えて提出して下さい。
●校正は編集委員会の責任校正とします。
3. 郵 送 先: 〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学 研究発表研究会
日本レクリエーション学会 編集委員会

理事会より

1983年度 第1回常任理事会報告

日 時: 1983年6月25日(日) 1:00~1:50P.M.
場 所: 東京農業大学造園学科特別研究室 (東京都東世田谷区)
出席者: 浅田(理事長)・進士・松浦・以上3名。委任状4名。
藤生・西野・師岡 以上幹事3名。
1. 入会希望者4名 (正会員3名・購読会員1名) の入会、退会希望者1名 (正会員1名) の退会を仮承認 (総会員数539名)。
2. 『レクリエーション研究』第10号の発行日は、7月下旬の予定と報告 (編集委員会)。
3. 第13回学会大会の研究発表申込を各方面に積極的に呼びかけることを要請 (企画委員会)。
4. 第13回学会大会専門分野別シンポジウムの進行状況の報告 (企画委員会)。
5. 第2回研究集会は、9月20日(日)午後6時30分まで立教大学において予定通り行うとの報告

Bradford Woods

Martinsville, IN 46151, U. S. A. TEL. 317 (342) 8456

○9月24日~28日(1984年)
World Research Congress on Free Time and Leisure
(問合せ先)
WLRA (前記)

世界レジャー・レクリエーション協会 (WLRA) について

米国ニューヨークに本部を置く世界レジャー・レクリエーション協会 (WLRA) への入会申請書が学会事務局に届いております。ご興味のある方は、返信用封筒 (60円切手貼付) を同封し、学会事務局にご請求下さい。
{ 個人会員 US \$ 30.00 (年会費)
{ 学生会員 US \$ 15.00 () }

事務局より

会費納入のお願い

1983年度の会費 (正会員・特別会員 4,000円 (US \$ 20)・学生会員 1,000円・賛助会員 20,000円以上) の納入期限は6月30日でした。未納の方は、至急納入されるようお願いいたします (近畿・九州支部会員の方も直接本部事務局へ納入して下さい)。
なお、前回の会報『学会ニュース』628) に昨年度までの会費未納者として発表された方は、その記載額をお支払い下さい。
領収書は、納入時に郵便局から渡される「郵便振替払込金受領証」をもちまして、かえさせていただきます。正式の領収書をご希望の方は、事務局までご連絡下さい。
万が一、今回の請求と会費納入が入り遅れになりましたら、ご容赦下さい。

新入会員 (1983年4月27日~9月20日承認分)

正会員
根本高久子 (東京都)、高倉正治 (日本 YMC A 問題)、清水章弘 (若狭学園)、横山文人 (筑波大学大学院)、中嶋梅雄 (大阪薫英女子短期大学)、岡本伸之 (立教大学)、三浦唯政 (高徳保育生活文化専門学校)、田中忠能 (財・公園緑地管理財団)、山本清洋 (岡山県立短期大学)、塚本達一 (平安大学)、村上美江・田畑由紀夫 (株・石勝エステリア)、藤田尚代 (日本大学)、栗原邦秋・三宅三子・谷戸一穂 (東海大学大学院)、WALSH Mary (イリノイ州立大学大学院)
購読会員
日本体育大学図書館

退会会員 (1983年4月27日~9月20日承認分)

正会員
瀧崎節子 (大阪キリスト教短期大学)、馬場太郎 (プール学院短期大学: 逝去)、川口 貞 (横浜国立大学)

資料頒布

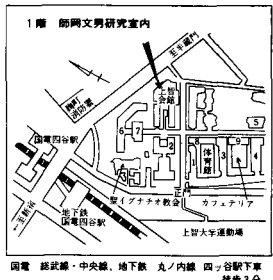
○機関誌『レクリエーション研究』第2号(1973年)・第3号(1974年)・第4号(1975年)・第5号(1976年)
各号: 1,000円 (送料200円)
○『学会大会研究発表抄録』
●日本レクリエーション研究会(1964~1970年)発行
第6・7回大会合併号(1970年)
代金: 1,000円 (送料200円)
●『世界レクリエーション学会(1971年~)』発行
第3回(1973年)・第9回(1979年)・第10回(1980年)・第11回(1981年)・第12回大会号(1982年)

各号：500円(送料170円)
 ○「レクリエーションの定義-辞典-Encyclopaediaより」(日本レクリエーション研究会発行)
 代金：500円(送料170円)
 *上記資料ご希望の方は、郵便振替(東京5-42971「日本レクリエーション学会事務局」にて、ご注文・ご送金下さい。

＜勤務先・住所などを変更された方へ＞
 前回会報に同封の葉書にて必ず事務局にお知らせ下さい(変更箇所は赤でアンダーラインを引いて下さい)。次回「会員名簿」の原稿にいたしますので、正確にご記入下さい。

○ことわり
 ○学会大会の準備等の関係で、「学会ニュース」№29の発行が大幅遅れたことをお詫言します。
 ○「会員名簿」の訂正事項は、紙面の都合上今回は掲載を取りやめました。ご了承下さい。

＜事務局移転のお知らせ(再)＞
 「学会ニュース」№28でお知らせしました通り、7月1日(金)より学会事務局は下記に移転しました。
 郵便物等の住所をお間違えにならない様、よろしくお願ひ申し上げます。



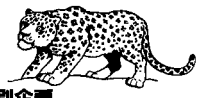
記
 〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
 上智大学 師岡文男研究室内
 (電話番号) 03(238)3911

1階 師岡文男研究室内
 同電 都立館・中央館、地下鉄丸ノ内線 四ツ谷駅下車 徒歩3分

会報「学会ニュース」№29

発行日 昭和58年10月15日
 責任者 日本レクリエーション学会
 理事長 浅田 隆夫
 編集 広報渉外専門委員会
 事務局 〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
 上智大学 師岡文男研究室内
 電話(03)238-3911
 郵便振替 東京5-42971
 「日本レクリエーション学会事務局」

ENJOY SAFARI



特別企画
野生の王国 8日間
アフリカ・サファリ大自然の旅
 ●特別価格 ￥342,000(送料別)
 おひとり様
 ●ご出発日
 11月 16日(木)・23日(木)・30日(木)
 12月 14日(木)・21日(木)・28日(木)
 1月 4日(木)・11日(木)・25日(木)
 2月 8日(木)・22日(木)・29日(木)
 3月 14日(木)・28日(木)

特別企画
アフリカ・サファリと古代エジプトの旅 12日間
 ●特別価格 ￥459,000(送料別)
 おひとり様
 ●ご出発日
 11月 19日(日)・26日(日)
 12月 10日(日)・24日(日)・31日(日)
 1月 7日(日)・14日(日)・21日(日)・28日(日)
 2月 4日(日)・11日(日)・25日(日)
 3月 17日(日)・24日(日)・31日(日)

ENJOY SKI

スイスコース(グリンデルワルト)
EUROPE

スイスアルプスの麓・インターラーゲンをベースにグリンデルワルトで楽しむスキーツアーです。

●旅行代金 お一人様 **285,000円**
※3月出発は305,000円
 ●出発日
 1月/12日(木)・19日(木)・26日(木)
 2月/2日(木)・9日(木)・16日(木)・23日(木)
 3月/1日(木)・8日(木)・15日(木)・22日(木)・29日(木)

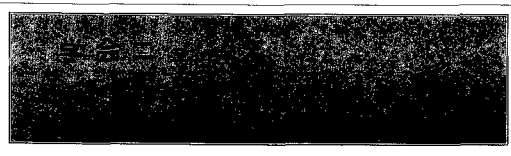
アメリカコース(ハフナーバール)
AMERICA

カリフォルニア州とネバダ州の州境、雄大なタホ湖へ向って滑るスキーは、まさにアメリカスキーの醍醐味です。

●旅行代金 お一人様 **255,000円**
※3月出発は285,000円
 ●出発日
 1月/14日(日)・21日(日)・28日(日)
 2月/4日(日)・10日(日)・11日(日)・18日(日)・25日(日)
 3月/3日(日)・10日(日)・17日(日)・24日(日)・31日(日)

●お申込み・お問合せは
 ☎ **03-348-0161**

池日本交通公社 観光団体旅行新宿支店
(〒160 東京都新宿区西新宿1-18-8 新宿スカイビル 担当：佐藤・中沢)



第14回日本レクリエーション学会大会
 = 開催要項 =

1. 日時：1984年11月4日(日) 9:00~16:00
 2. 場所：国立産星体育大学 (鹿児島県鹿児島市白木町1 Tel. 09944-6-4111)
 3. 日程：9:00 受付 12:00 昼食 1:30 開会式 4:30 閉会
 (予定)

受付	研究発表	昼休み	研究発表	休憩	専門分野別
	理事会				シンポジウム

 4. 大会参加費：正会員・特別会員 1,500円
 学生会員 無料
 名譽会員・賛助会員 無料
 全国レクリエーション大会参加費納入者 無料
 その他一般の方 2,000円

研究発表申込み要項

1. 発表資格：1984年度会費を納入した会員
 2. 発表形式：口頭発表
 3. 登壇回数：共同研究会のぞき、1人1回
 4. 発表時間：朝15分(質問3分を含む)
 5. 発表申込：同封の申込書に所定事項を記入し、返信用封筒(120円切手貼付・B5版の大きさ)を添え、事務局へ郵送して下さい。
 6. 発表申込締切：1984年8月25日(日)(厳守)
 7. 研究発表論文集「レクリエーション研究」第12号)原稿提出：申込書を受理後、1週間以内、事務局から規定の原稿用紙を渡しますので、タイプまたは楷書による手書き(墨字)の原稿を2~6枚の総枚数(3,500~11,520字)原稿を作成しコピー1部を添えて、9月20日(日)(必着)までに学会本部事務局へお送り下さい。

※会員懇親パーティー
 大会前夜11月3日(土)祝)7:00~9:00P.M. 鹿児島駅 南国グランドホテル (Tel. 09944-4-5511)において開催いたします。会費は4,000円です。奮ってご参加下さい。

◎「大会・懇親パーティーへの出入り券」(同封)は、9月29日(日)必着でご返送下さい。
 ◎「学会大会への派遣願」が必要な方は、返信用封筒(60円切手貼付)同封の上、事務局へご一報下さい。
 ※協賛行事 全国レクリエーション大会(呉)へ(鹿児島県)への参加(県内の方1,000円・県外の方3,000円)も希望される方は、事務局へご一報下さい。

公示 <「レクリエーション研究」第13号投稿募集>

1. 投稿期限：1984年11月24日(日) 必着
 2. 投稿規定：「レクリエーション研究」第10号最終頁参照。
 ●必ず、コピー3部を添えて提出して下さい。
 ●校正は編集委員会の責任校正とします。
 3. 郵送先：〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
 上智大学 師岡文男研究室内
 日本レクリエーション学会 編集委員会

総会報告 <1983年度 総会報告>

1983年10月30日(日)午後1時~2時、大阪府立労働センターにおいて1983年度総会が開催された。浅田理事長の開会の辞、江崎会長の挨拶の後、議案として青木義三氏、理事録置名人として三浦 裕氏、福田利明氏を提出し、議事に入った。下記の事項について審議を行い、すべて全会一致で承認、可決された。
 なお、審議の後、浅田理事長より次回第14回学会大会は1984年11月4日(日)、鹿児島県産星体育大学で開催する予定である旨、通告があった。また、最近設立された韓国レクリエーション学会について、呉 鎮英氏(特別会員)より説明があった。(出席者 63名)

1. 1982年度事業報告
 「学会ニュース」№28 P.5~6に記載。
 2. 1982年度決算報告および会計監査報告
 「学会ニュース」№28 P.6に記載。
 3. 1983年度事業予定
 「学会ニュース」№28 P.7に記載した内容に、下記の訂正・追加をする。
 2) 研究集会開催 6回
 ●5月27日(日) 特別講演会「アメリカにおける野外教育・野外レクリエーションの現状」(東京・上智会館)講師：ワイリアム・E・ニーボス(カリフォルニア州立大学チコ分校)
 ●11月26日(日) シンポジウム「お国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その6)ニエク教育を中心として」
 ●1月14日(日) シンポジウム「お国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その7)〜レクリエーション政策を中心として〜」(東京・上智会館) 演者：小林秀夫(元長岡市レクリエーション課)、半田まり子(経済学術院国民生活課)、他・コーディネーター：今井 毅(日本体育大学)
 4. 1983年度予算
 「学会ニュース」№28 P.7~8に記載。
 5. 会則改正(下線部が訂正・追加箇所)
 <改正> 第5条 本会は正会員の他、学生会員、特別会員、賛助会員、評議員、および名譽会員を置くことができる。
 5. 評議員は、本会の機関紙を購読する機関・団体とする。
 <改正> 第19条 会員の会費は次の通りとする。
 1. 入会金 1,000円(4米ドル)
 2. 正会員 年費額 4,000円
 3. 学生会員 1,000円(大学院生は除く)
 4. 特別会員 20米ドル
 5. 賛助会員 40,000円以上
 6. 購読会員 4,000円(20米ドル)
 7. 名譽会員 —
 6. 「理事会の運営に関する規定」改正 (下線部が訂正箇所)
 <改正> 6. 理事会には、業務を遂行するために次のような専門委員会を置く。
 総務、研究企画、編集、広報渉外、財務

＜1984年度 総会報告＞

1984年6月9日(午後3〜4時、上智大学)において1984年度総会が開催された。浅田理事長の開会の辞ならびに挨拶(江塚会長は、韓国レクリエーション学会に接いさむ。総会欠席のため)の後、議長として比野明典氏、議事録署名人として武田正司氏、谷戸一穂氏を導出し、議事に入った。下記の事項について審議を記し、すべて全会一致で承認・可決された。(出席者 33名)

1. 1983年度事業報告

- (事業)
(1) 第13回学会大会開催
10月30日(日) 大阪府立労働センター(大阪府大阪市)
●研究発表29題
●専門分野別連続シンポジウム<前編>分類学
●現代社会におけるレクリエーション概念の再検討 ～我園レクリエーション研究史からの問いかけ～
演者: 鹿田雅規(朝日本レクリエーション協会)、仲村 要(同志社大学)、影山 健(愛知教育大学)、西野 仁(東海大学)
司会: 小田切毅一(奈良女子大学)
(2) 研究会 6回開催
●5月27日(金) 特別講演会「アメリカにおける野外教育・野外レクリエーションの現状」(東京・上智会館) 講師: William E. Niepoth, Ph. D.(カリフォルニア州立大学チコ分校) 通訳: 田中祥子(津田塾大学)
●6月25日(日) シンポジウム「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その4) ～レクリエーション・学を軸として」(東京・東京農業大学) 演者: 鈴木忠義(東京農業大学)、松尾邦江(アレッポ研究所)、浦井忠郎(古野エクスプレス)、前田 憲(ラック計画研究所)、コーディネーター: 進士五十八(東京農業大学)
●9月20日(日) シンポジウム「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その5) ～レクリエーション・学を軸として」(東京・立教大学) 演者: 今村浩明(千葉大学)、松原孝雄(東海大学)、千葉和夫(朝日本レクリエーション協会)、コーディネーター: 大塚洋三(立教大学)
●11月26日(日) シンポジウム「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その6) ～レクリエーション・学を軸として」(東京・上智会館) 演者: 藤本祐次郎(日本体育大学)、高橋和敏(東海大学)、田中祥子(津田塾大学)、コーディネーター: 松浦三代子(東京女子体育大学)
●1月14日(日) シンポジウム「わが国におけるレクリエーション学の体系化に関する研究(その7) ～レクリエーション・学を軸として」(東京・上智会館) 演者: 小林秀夫(元長岡市レクリエーション課)、半田真理子(経済企画庁消費生活課)、長田晴太郎(東京都生活文化局レクリエーション課)、コーディネーター: 小井 毅(日本体育大学)
●3月10日(日) 卒業論文発表会「レジャー・レクリエーションに関する短期大学・大学・大学院等の卒業論文発表会」(東京・上智会館)
(3) 機関誌「レクリエーション研究」第11号発行(3月)
(4) 会報「学会ニュース」発行
528(6月)、529(10月)
(5) 組織の拡充
入会者 45名 1984年3月31日現在
退会者 12名 正会員 504名
学生会員 43名
特別会員 15名
賛助会員 3名
(+) 購読会費 3名
計 568名

(会議)

- (1) 総会開催 10月30日(日) 大阪府立労働センター(大阪府大阪市)
1982年度事業・決算報告、1983年度事業・予算承認、会則改正承認、理事会の運

- (1) 第14回学会大会開催
11月4日(日) 鹿屋体育大学(鹿児島県鹿屋市)
(2) 研究会開催 数回
●6月9日(日) シンポジウム「関連学会から見たレクリエーション研究への視点」(東京・上智大学) 演者: 除野信彦(日本観光学会、上智大学)、吉田隆彦(日本生活学会、社会工学研究所)、白石克己(日本生涯教育学会、玉川大学)、田畑貞典(日本造園学会、千葉大学)、コーディネーター: 池田 勝(日本レクリエーション学会、鹿屋体育大学)
●3月上旬 論文発表会「レジャー・レクリエーションに関する短期大学・大学・大学院等の卒業論文発表会」
●その他
(3) 機関誌「レクリエーション研究」第12号(学会大会号、10月)、第13号(2月)、第14号(研究企画目録、3月)発行
(4) 会報「学会ニュース」発行 530(6月)、531(10月)
(5) 「1984・1985年度の会員名簿」発行(8月)
(6) 「レクリエーション学研究法」(仮称)編纂(1986年1月発行)
(7) 組織の拡充 会員の増殖
(都道府県レクリエーション協会およびワグン講座をもつ専門学校・短大・大学へ「入会案内」を送付など)

4. 会則改正

- (現行) 会員の会費は次の通りとする。
1. 入会金 1,000円(4米ドル)
2. 正会員 年度額 4,000円
3. 学生会員 1,000円(大学院生は除く)
4. 特別会員 20米ドル
5. 賛助会員 20,000円以上
6. 購読会員 4,000円(20米ドル)
7. 名誉会員
(改正) 会員の会費は次の通りとする。
1. 入会金 1,000円(5米ドル)
2. 正会員 年度額 5,000円
3. 学生会員 1,500円(大学院生は除く)
4. 特別会員 25米ドル
5. 賛助会員 20,000円以上
6. 購読会員 5,000円(25米ドル)
7. 名誉会員

5. 1984年度予算案

(収入明細)
項目 千円額 内容
前年度繰越金 321,455
入会金 50,000
年会費 3,039,500
大会参加費 150,000
雑収入 239,045
計 3,800,000

(支出明細)
項目 千円額 内容
事務局費 59,000
会議費 470,000
印刷費 2,660,000

- 憲に関する規定改正案承認
(2) 理事會開催 3回
4月26日(日)、10月30日(日)、1984年6月9日(日)
(3) 常任理事會開催 3回
6月25日(日)、9月20日(日)、3月22日(日)
(4) 研究企画委員会開催 1回
4月7日(日)
(5) 編集委員会開催 1回
3月10日(日)
(6) 「レクリエーション概論」(仮称) 出版諮問委員会開催 1回
3月17日(日)

2. 1983年度決算報告および会計監査報告

(収支決算書) 自: 1983年4月1日 至: 1984年3月31日 (単位: 円)
項目 千円額 決算額 増減額
収入 3,000,000 2,611,815 △ 388,185
支出 3,000,000 2,790,360 788,545
差引(次年度繰越金) 0 321,455 321,455

(収入明細)

項目 千円額 決算額 増減額 内容
前年度繰越金 329,683 329,683 0
入会金 50,000 44,925 △ 5,075
年会費 2,004,000 1,831,259 △ 172,741
大会参加費 150,000 124,000 △ 26,000
雑収入 316,317 281,948 △ 34,369
合計 3,000,000 2,611,815 △ 388,185

(支出明細)

項目 千円額 決算額 増減額 内容
事務局費 80,000 45,700 △ 34,300
会議費 20,000 76,900 △ 56,900
通信費 450,000 427,410 △ 22,590
印刷費 2,000,000 1,412,460 587,540
研究費 50,000 137,580 △ 87,580
大会費 120,000 121,480 △ 1,480
雑費 5,000 0 5,000
事件経理費 60,000 48,030 11,970
雑費 15,000 20,800 △ 5,800
未償費 200,000 0 200,000
計 3,000,000 2,790,360 709,640

適法にして適正であることを認めます。
1984年4月21日
監事 草川一雄 深町一夫

3. 1984年度事業予定

- (事業)
研究会 80,000
大会費 120,000
事務局経費 150,000
印刷費 200,000
計 3,800,000

6. 1984・1985年度役員(選挙委員含む)

- 名誉会長 近野聖仁(慶応義塾大学)
会長 長 江 信 梧(鹿屋体育大学)
副会長 長 山 本 洋三郎(福岡大学)
副会長 今 井 謙二(大阪経済女子短期大学)
監事 鈴木 忠 義(東京農業大学)
理事 長 高 橋 和 敏(東海大学)
理事 長 秋 吉 範(福岡教育大学)
理事 池 田 勝(鹿屋体育大学)
理事 今 井 謙二(日本体育大学)
理事 金 崎 良 三(九州大学)
理事 木下 茂 徳(日本大学)
理事 進 士 五 十 八(東京農業大学)
理事 鈴木 秀 雄(関東学院大学)
理事 藤 田 茂(朝日本レクリエーション協会)
理事 田 中 祥 子(津田塾大学)
理事 田 中 鎮 雄(日本大学)
理事 野 村 要(同志社大学)
理事 夏 目 晴(神戸市立西宮市寮ひより荘)
理事 西 野 仁(東海大学)
理事 長 谷 川 純 三(筑波大学)
理事 日 比 野 明 典(京都府立大学)
理事 藤 本 祐 次 郎(日本体育大学)
理事 前 野 淳 一 郎(朝スベス、コンサルタンツ)
理事 松 浦 三 代 子(東京女子体育大学)
理事 松 原 洋 三(立教大学)
理事 宮 下 洋 浩(順天堂大学)
理事 濱 野 進 介(東京工業大学)

7. 名誉会員(理事會推薦)

- 小 川 寿一(大阪成蹊女子短期大学)
堀 谷 宗 雄(日本体育大学)
白 山 善 三郎(関東学院大学)
高 橋 眞 照(海徳大学)
三 橋 達 郎(国際基督教大学)
山 崎 達(第一経済大学)

＜1984年度 第1回研究集会＞

6月9日(日)、1984年度総会終了後、4:00〜6:00P.M. 上智大学において「関連学会から見たレクリエーション研究の視点」をテーマにシンポジウムを開催した。パネリストとして、日本観光学会会長 除野信彦氏、日本生活学会会長 吉田隆彦氏(社会工学研究所)、日本生涯教育学会会員 白石克己氏(玉川大学)、日本造園学会編集委員長 田畑貞典氏(千葉大学)をお招きし、コーディネーターは、本学会常任理事 池田 勝氏(鹿屋体育大学)に

お願いした

内容は、各学会の紹介をはじめ、レクリエーションについての研究事例、レクリエーションのとり方などについて熱心な討論が行われた。70名を越す参加者の中からも鋭い質問・問題提起がなされ、充実した会となった。

詳しくは、機関誌「レクリエーション研究」第12号(2月発行予定)に掲載する予定です。

理事会より <1983年度 第2回理事会報告>

- 日時: 1983年10月30日(日) 12:00-1:00P.M.
場所: 大阪府立労働センター 研修室4
出席者: 江藤(会長)、青木(副会長)、藤川(監事)、浅田(理事長)、秋吉・池田・進士・高橋・田中・仲村・松浦・今井・木下・長谷川・藤本(理事)、藤生・西野・師岡(幹事)
幹事長 藤生 6名
1. 江藤副会長長の挨拶
2. 入会希望者28名(正会員26名・特別会員1名・嘱託会員1名)の入会と、退会希望者5名(正会員5名)の退会を承認(総会員数559名)。
3. 1983年度総会提出議題(案)を承認。
4. 九州支部・近畿支部活動状況の報告。
5. 第13回学大会運営委員長 青木泰三氏の挨拶——今後、学大会と全国レクリエーション大会との関係を明確化する必要がある。

<1983年度 常任理事会報告>

- 日時: 1984年3月22日(木) 6:00-8:00P.M.
場所: 上智会館 第4会議室
出席者: 浅田(理事長)、進士・田中・松浦・宮下(常任理事)、藤生・西野・師岡(幹事)
1. 進士研究会委員長長 藤生、1983年度の研究会(連続シンポジウム「わが国におけるレクリエーション」の体系化に関する研究)の成果をもとに、学会が「レクリエーション」学体系(既刊)の編纂・出版を行うかどうか、との議案があり、了承され、理事長・研究会委員長 1982・1983年度研究会連続シンポジウム(その1-7)、コーディネーター・総務幹事でも出版準備委員会(進士五十八名委員)を組織することを決定した。
2. 入会希望者12名(正会員12名)の入会と退会希望者2名(正会員2名)の内1名の退会を(仮)承認し、残り1名の退会保留とし、各委員会候補として理事会に提案することとし(総会員数568名)。
3. 機関誌「レクリエーション研究」第11号の目次・原書論文審査員・編纂作業日程について田中編纂委員より報告がなされた。
4. 1984年度総会(4月6日)に出発式・上智大学で開催することを決定。
5. 第14回学大会(11月4日)田中健児、丸屋体育会員への参加委員のために、航空券・ホテルの特別割引の手配が完了し、エアー・サービス(運輸大臣登録一般第400号旅行代理店)に依頼し、100名分の手配が完了した旨、報告がなされた。
6. 事務局より、「レクリエーション研究」第11号および「学会ニュース」第30号の広告協賛社募集の要請がなされた。

<1983年度 最終常任理事会>

- 日時: 1984年6月2日(日) 3:00-5:00P.M.
場所: 上智大学7号館体育研究室会議室
出席者: 浅田(理事長)、池田(常任理事)、秋吉・高橋(常任理事)、西野・師岡(幹事)
幹事長 藤生 7名
1. 入会希望者4名(正会員4名)の入会と退会希望者3名(正会員3名)の退会を(仮)承認(総会員数569名)。
2. 1984・1985年度役員選出に関して、常任理事3名・非役員正会員3名からなる運営委員会(宮下祐治委員長)を組織し、役料案を総会に提出することを決定。
3. 1984年度総会提出議題(案)を承認。

<1983年度 最終理事会報告>

日時: 1984年6月9日(日) 1:00-2:30P.M.
場所: 上智大学7号館第4会議室
出席者: 浅田(理事長)、池田・木下・進士・高橋・田中・前野・松浦・宮下(理事)、藤生・西野・師岡(幹事) 幹事長 藤生 10名

- 1. 3回および最終常任理事会で仮承認された16名の入会(正会員16名)と3名の退会(正会員3名)を正式に承認(総会員数569名)。
2. 1984年度総会提出議題(案)を承認。
3. 田中健児氏(田中健児氏学術奨励)と、1980-1983年度顧問を務められた小川幸一・垣谷宗雄・高橋照照・三隅達郎・山崎 進の5氏を名誉会員として総会に推薦することを決定。
4. 今後、顧問は会長を務めた方を優先し、今後1名を推薦することを決定。
5. 夏目 晩近畿支部事務局長より近畿支部活動状況報告、大谷善博九州支部事務局長より九州支部活動状況報告(代読)がなされた。

<1984年度 第1回理事会報告>

日時: 1984年6月29日(日) 6:00-8:00P.M.
場所: 上智会館 第4会議室
出席者: 浅田(副会長)、高橋(理事長)、鈴木秀、進士、藤田、田中健、西野、藤本、松浦(理事)、師岡(1982・1983年度幹事) 幹事長 藤生 13名

- 1. 出席者自己紹介
2. 入会希望者3名(正会員2名・嘱託会員1名(校))の入会、退会希望者2名(正会員2名)と転居先不明・会費未納3年以上者41名(正会員34名・特別会員1名・学生会員6名)の退会を承認(総会員数529名)。
3. 常任理事として秋吉・池田・今井・進士・藤田・田中健・仲村・西野・前野・松浦・宮下の11名を提出。
4. 幹事として浅野・藤生・梅津・川向・寺島・芳賀・師岡の7名を提出。
5. 理事会内閣委員選出は、理事長一任となり、下記の通り決定。各委員長に、次回常任理事会において業務報告をすることを依頼することになった。
専門委員会(〇)委員長(〇)幹事
・総務: 〇西野・池田、〇川向、〇師岡
・研究会委員: 〇進士、田中(編)、西野、松浦、渡辺、〇藤生、〇梅津
・編集: 〇今井・秋吉、鈴木(秀)、田中(健)、前野、〇寺島、〇芳賀
・広報連絡: 〇藤田、鈴木(秀)、田中(健)、仲村、〇浅野
・財務: 〇宮下、木下、長谷川、藤本、松原、〇川向
6. 学会事務局を理事長・総務委員長の所属機関である東海大学内に移す方向で準備をすすめることが決定され、事務局長が東海大学退局と交渉することになった。
7. 「レクリエーション」研究(既刊)の編纂・出版について、(前)出版準備委員長 進士五十八氏理事よりこれまでの経過説明があった後、新編に入り、1984・1985年度出版準備委員長として進士五十八氏理事を再選。各委員長は、進士委員長に一任することを決定。
8. 機関誌「レクリエーション研究」第12-14号の内容を上記の通り決定。
・第12号(10月発行): 第14回学大会研究発表論文集
・第13号(2月発行): 原書論文集(総論の部)
・第14号(3月発行): レクリエーション学研究文獻分類目録(「レクリエーション学研究」法(既刊)編纂作業中間報告)
特に、第12号は従来の「学大会プログラム(含、研究発表要録)」の質・量を上向きにすることをめざし、研究発表要録を1題に付、見聞き頁(2-6頁の偶数頁)・シンポジウム要旨をパネリスト1人1行に付、見聞き頁(2-4頁の偶数頁)に掲載することを決定。また、従来無審査であった研究発表要録も、編纂委員会による原稿審査を行うことを決定。
9. 第14回学大会について下記の通り決定。
(1) 日程
・11月3日(日) 7:00-9:00P.M. 会員懇親パーティー
・11月4日(月)
・研究発表: 9:00-12:00A.M.、1:00-1:30P.M.、
・専門分野別シンポジウム: 1:45-4:00P.M.

理事会: 12:00-1:00P.M.

- (2) 専門分野別シンポジウム
テーマ: 行動研究分野のもの——コーディネーターに一任。
コーディネーター: 池田 勝(鹿屋体育大学)
パネリスト: コーディネーターに一任。
(3) 申込み
・研究発表 8月25日(月)切
・参加 9月29日(日)切
(4) 参加費
・正会員・特別会員 1,500円
・学生会員 1,000円
・有資格会員・賛助会員 無料
・全国レクリエーション大会参加費納入者 無料
・その他一般の方 2,000円
10. 「レクリエーション研究」・「学会ニュース」への広告協賛社募集のお願いが事務局より各理事にされた。

海外より <国際会議の予定>

- 07月27日
Symposium on Sports for Everyone
(Anaheim, California, U.S.A.)
<問合せ先>
Dr. Allan V. Sapiro
Department of Leisure Studies
University of Illinois
104 Huff Gymnasium, Champaign,
Illinois 61820, U.S.A.
Tel. 217(333)4410
09月24日-28日
World Research Congress on Free Time and Leisure
(Marly-le-Roi, France)
<問合せ先>
The Commission on Research
World Leisure and Recreation Association(WLRA)
345 East 46th Street, United Nations Plaza,
New York, N.Y. 10017, U.S.A.
Tel. 212(697)8783
10月16日-19日
International Conference on Gerontology
(Rome, Italy)
<問合せ先>
Centre International de Gerontologie Sociale
91 rue Jouffroy - 75017, Paris, France
01985年3月12日-15日
American Camping Association National Convention
(Atlanta, Georgia, U.S.A.)
<問合せ先>
American Camping Association
Bradford Woods, Martinsville, Indiana 46151, U.S.A.
01985年8月26日-28日
ユニバーシアード神戸大学スポーツ学研究会議(CESU Conference Kobe 1985)
(神戸国際会議場、神戸市)
メインテーマ: 変化する社会と大学スポーツ(University Sports in a Changing Society)

<問合せ先>
〒650 神戸市中央区通商中島6-9-1 神戸国際交流会館内
01985年ユニバーシアード神戸大会組織委員会
Tel. 078(302)8560

<文献紹介>

- 〇「Leisure Recreation & Tourism Abstracts」
(季刊・28,350円 航空便代を含む)
(発注先)
Central Sales
Commonwealth Agricultural Bureaux
Farnham House
Farnham Royal, Slough SL2 3BN
United Kingdom.
〇「Leisure Studies」
(年3回発行・£24.00 航空便代を含む)
(発注先)
Sweet & Maxwell, Spoo(Bookellers) Ltd.
North Way, Andover, Hampshire SP10 5BE
United Kingdom.
〇「International Directory of Leisure Information Centres」
(US\$14.00+航空便代US\$7.00)
(発注先)
WLRA((国際会議の予定)の備参照)
〇「Leisure and Aging」
(US\$10.00+送料US\$2.50)
(発注先)
WLRA((国際会議の予定)の備参照)
〇「Playing, Living, Learning」
(US\$13.95+送料US\$7.00)
(発注先)
WLRA((国際会議の予定)の備参照)

<世界レジャー・レクリエーション協会(WLRA)について>

米国ニューヨーク本部を置く世界レジャー・レクリエーション協会(WLRA)への入会申込書が学会事務局に届いております。ご興味のある方は、返信用封筒(60円切手貼付)を同封して、学会事務局にご届下さい。

事務局より

<会費納入のお願い>

1984年度の会費(正会員・特別会員・嘱託会員5,000円、学生会員1,500円、賛助会員20,000円以上)の納入を同時の郵便振替用紙にて8月15日までにお願いします。近畿・九州支部会員の方も直接本部事務局へ納入して下さい。
振替用紙に金額が記入されていない方は、1983年度以前の会費未納の方です。振替用紙に記入された金額を至急お支払い下さい。なお、領収書は「郵便振替払込金領収証」をもちまして、かまされていただきます。正金の領収書をご希望の方は事務局までご一報下さい。万が一、今回の請求と会費のお支払いが入れ違いになりましたら、ご容赦下さい。

なお、本年度より総会決定に基づき、正会員・特別会員・継続会員の年度会費が1,000円、学生会員の年度会費が500円値上げされました。これは、機関誌『レクリエーション研究』を年3回発行するなどの事業の拡大をはかるための必要経費です。悪しからずご了承下さい。

＜受贈図書報告＞

1983年10月～1984年6月の間、本学会に対し、下記の通り図書の寄贈がありました。寄贈下さった方々には厚く御礼申し上げます。

なお、下記の図書は学会事務局に大切に保管しておりますので、閲覧を希望される方はご一報下さい。入手ご希望の方は、発行所にお問合せ下さい。

(寄贈者)	(編者)	(題名・種別)	(発行所・価格等)
・高七 五十八	高七 五十八	「秘からの発想—環境設計論」	思考社 2,600円
・「この目で見た道徳建築」何月会	(英)ト 耶 敏 二	「この目で見た道徳建築」	「この目で見た道徳建築」発行会刊。03-202-5233) 3,900円
・田中祥子氏	東京キリスト教女子青年会 (東京YWCA)	「野営キャンプの50年」	東京YWCA 1,500円 (Tel. 03-395-5421)
・体育図書館協議会	体育図書館協議会	「体育図書館協議会 雑誌行録 和文編 1984年」	体育図書館協議会 (Tel. 03-704-7001) 日本体育大学図書部宛)
・日本学術会議	日本学術会議	「文科系新編目録 Ⅱ 心理学編 昭和58年1月6日」	日本学術会議
・日本学術会議	日本学術会議	「文科系新編目録 社会学編 昭和57年1月6日」	日本学術会議
・日本大学文学部 院門体育学会	院門体育学会	「院門体育研究 第18輯」	院門体育学会
・(財)大府府レクリエーション協会	(財)大府府レクリエーション協会	「50周年記念誌」	(財)大府府レクリエーション協会
・(財)大府府レクリエーション協会	(財)大府府レクリエーション協会	「第37回全国レクリエーション大会報告書」	(財)大府府レクリエーション協会
・(財)日本女子社会教育会 家庭科学研究所	家庭科学研究所	「家庭科学」第51巻第1号 (1984)	家庭科学研究所 (Tel. 03-434-7575)
・東京農業大学造園学科	東京農業大学造園学科	「造園誌集」(1983年1月)	東京農業大学造園学科 (Tel. 03-420-2131)
・東京農業大学造園学科	東京農業大学造園学科	「造園誌集」(1983年3月)	東京農業大学造園学科
・東京農業大学造園学科	東京農業大学造園学科	「造園誌集」(1983年4月)	東京農業大学造園学科
・日本観光学会	日本観光学会	「研究報告」第10-13号	日本観光学会 各1,000円 (Tel. 03-985-2577)
・山口朝雄氏	SIRLS (Univ. of Waterloo, Waterloo, Canada)	タイム・バリエーションに関する研究 論文目録 (英文)	SIRLS

＜1984・1985年度 会員名簿について＞

9月末日発行予定です。住所・勤務先などに変更があった方は、至急事務局にお知らせ下さい。

＜資料頒布＞

○機関誌『レクリエーション研究』第2号(1973年)・第3号(1974年)・第4号(1975年)・第5号(1976年) 各号1,000円(送料200円)・第11号(1983年)・第12号(1984年) 2,000円(送料200円)

○「学会大会発表要録」

●日本レクリエーション研究会(1964～1970年)発行
第6号・7回大会(併号1970年)
代金:1,000円(送料200円)
●日本レクリエーション学会(1971年～)発行
第3回(1973年)・第9回(1979年)・第10回(1980年)・第11回(1981年)・第12回(大会号) (1982年) 各号:500円(送料170円)

○「レクリエーションの定義—辞典・Encyclopaediaより—」(日本レクリエーション研究会発行) 500円(送料170円)

※上記資料ご希望の方は、郵便振替(東京5-42971「日本レクリエーション学会事務局」)にて、ご注文・ご送金下さい。

＜おことわり＞

○「レクリエーション研究」第11号は、一部の執筆委員(編集委員会より原稿を依頼した方)の方々の原稿提出が遅れたため、発行が大変遅れ、会員の皆様にご迷惑をおかけしています。9月初旬には必ず発行いたしますので、今しばらくお待ち下さい。

○1984・1985年度の会長・理事長挨拶は、次号(10月発行)に掲載いたします。

○1983年9月21日～1984年6月29日承認済の新人会員および退会会員は、「1984・1985年度会員名簿」の発行をもってかえさせていただきます。悪しからず、ご了承下さい。

○1984年度第1回理事会議開催日の関係で、「学会ニュース」第30の発行が大変遅れたことをおわび申し上げます。

○学会事務局が置かれている師岡文男研究室が、上智大学内上智会館1階から7号館2階に移転しました。住所・電話番号に変更はありません。

会報「学会ニュース」No.30

発行日 1984年7月20日
 発行人 日本レクリエーション学会
 理事長 高橋和敏
 編集 辻澤渉外専門委員会
 事務局 〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
 上智大学
 師岡文男研究室内
 電話 (03) 238-3811
 郵便振替 東京5-42971
 「日本レクリエーション学会事務局」

1985年1月25日

学会ニュース

No.31
January 1985

学会大会を終って

会長 江橋慎四郎

日本レクリエーション学会

発行人/高橋和敏 編集/辻澤渉外委員会
 事務局 〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1
 上智大学 師岡文男研究室
 電話03-238-3911 郵便振替東京5-42971

第14回学会大会終る

予想以上の参加者数/シンポジウムも好評

84年11月4日 鹿屋体育大学

第14回日本レクリエーション学会大会は、新設間もない鹿児島県鹿屋市の鹿屋体育大学で、11月4日(日)に開催された。参加者は、学生会員80名、一般参加者115名と予想を上回る盛況であった。

大会の前夜には、会員懇親パーティーが開かれ、浦本田鹿屋市長、早川鹿屋体育大学副学長をはじめ、多数の参加があった。席上、各審判委員の三隅達郎氏に、本学会の発展に貢献いただいたご功績を讃え、名誉会員として推薦申しあげた旨の名誉会員証を贈呈した。会は、なかなか事柄の中身がわからず、大会当日は、天気も上々で、まさに学会日和であった。鹿屋体育大学事務局長岡田孝郎氏の配慮や学生諸君、幹事の皆さんの協力により、早朝から準備がすすみ、研究発表は予定通り、9時から開始された。発表申し込みは20題あり、演者の都合で、1題が取り消されたものの、近代設備を誇る新教室での発表は、演者にも、聴衆にも、快適そのものであった。

今年から従来の「発表要録」を拡充して「レクリエーション研究」学会大会等とした試みは、おおむね好評であった。従来、1ページの発表要録のみにとどまっていたのに対し、2～6ページというボリュームの原簿作成に当たり、発表者から大変な協力をいただいた。しかし、より充実した大会にするために、投稿規定整備を急がねばならない。理事會をほさみ、午後からは、江橋会長によりこ

れからのレクリエーション研究について」という講演があった。研究方法の問題も含め、今後のレクリエーション研究に対する可能性と方向について、多くの示唆も深い内容であった。

専門分野別シンポジウムの最終日は、行動研究分野で「余暇行動研究の動向と今後の方向」というテーマのもと、コーディネーター、西野に、バネッホ・福田宗彦、山田春雄、川西正志の4氏によって行われた。

研究の方法論とまをしぼっての内容は、若手の研究者の発表だけに充てずりはあったが、アメリカがわが国の先進的の研究をふまえたフレッシュなもので、今後の研究のすめ方についてよい刺激を与えてくれたと思う。

シンポジウム途中に、三笠書記長のご臨席をいただいた。短時間ではあったが、江橋会長のご説明に、何度もうなづかっていたようであった。

シンポジウムは、4時30分に、フロアーからの発言が、まだまだあったのだが、帰路のバス時間の関係で打ち切ることになった。各地の研究者がそれぞれ

の分野で、ここで議論を継続されるよう望みたい。大会を振り返り、予想以上に多くの参加者が集まったこと、発表内容が今年充実してきたことなどが、印象に残っている。来賓さんがあるが、運営に尽力いただいた各位、とくに、鹿屋体育大学の皆さんに、感謝申しあげたい。

全国レクリエーション大会が鹿児島県で開催されたに伴って第14回の学会大会も鹿屋体育大学で開催された。御承知のように、84年4月より学生受け入れをはじめばかりであり、施設・設備もようやく3分の1が整備されたにすぎず、学会大会開催を引受けするには不十分な点が多かったと思うが、どんな大会ができていくのかの一端を会員の皆さんにも見ていただきたいと思ふ。

鹿児島市より大隅半島へフェリーで渡らねばならぬ程の僻地の地ではあったが、レクリエーションが都市居住者だけのものではない以上、また「地方の時代」ということが言われている以上、大隅市中心で学会が開かれたという偉業を、雨の嵐、嵐屋で開かれたことも大きな意味のあることではあるまい

か、鹿屋市にとっては、小なりとはいへ、全国的学会が開かれたのは初めてのことであり、84年4月健康・科学・国際都市」宣言をした市にとっても健康に達した行事であったということもできよう。

当日は予想以上の参加者のもと期待通りの充実した発表会が行われ、日本の南端に近い、定遠達上の新大学の学会大会は申し分なく成功した。参加者、協力者のみなさまには心から感謝を捧げたい。

私自身、会長をお引き受けしておきながら鹿屋市にいく、会の運営は浅田副会長、高橋理事長をはじめ、理事各位におまかせがらわらるが、今後の成功が学会発展の一つのステップとなるよう努力を尽したいと思ふ。

(鹿屋体育大学学長)

新理事長として～現場を志向した研究を

理事長 高橋和敏

いよいよ昭和60年を迎えることになりました。日本レクリエーション学会も、14年目になるわけですが、設立以来増かされてきた活動を、更に飛躍させたいものです。

いままでもなく、最近の社会の動向は、まさにコミュニケーションの出現によって、生活構造を大きく変えようとしております。これはとりもたず、レジャー・レクリエーションの分野の在り方にも、大きな影響を与えようことを意味しております。

このようなとき、まず大切なことは、人間の幸福を願う本学会の研究が、どれだけの貢献できるかを改めて問い直す必要があるのではないかと思います。

そのためには、学会員一人ひとりの力もさることながら、その力の結集が重要で、本学会会員は、さまざまな分野の専門家によって構成されております。学際的である。特徴を十分生かし、相互の協力・連携のもとに、新しい時代におけるレクリエーション活動を推進していかなければならないことを痛感します。

また、レジャー・レクリエーション問題は、常に現場の実践があります。レクリエーション研究も、現場に直結したものでなくてはならない筈です。もちろん基礎的研究は、必ずしも直接現場につながることもありますが、個人の生活とレクリエーション運動の発展を志向し、さらにフィードバックさせながら、研究活動を展開していくことが、極めて重要な課題と考えます。

本年度から、新たに指導に関する専門分科会が設立されました。研究者・実践者が共に問題を追及できることは、今後大いに期待するところですが、いっばう、学会活動のひとつとして、研究活動の成果をふまえて、研究法に関する出版も計画されております。本学会にとってはもちろん、役に立つものにとしたいと思います。

学会員の参加、励まし合い、そして果敢な研究活動を願って止みません。

(東海大学教授)

〈定例研究会報告〉

レク学研究の
対象と課題

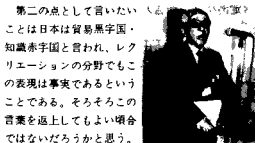
84年12月8日(土)上智大学で開催された研究会は標題のテーマのもと高橋和徳氏(東海大教授)が報告し40数名の参加者とともに活発な論議を行なった。高橋氏はレク学を基本的には「レジャーおよびレクリエーション問題の科学」と考え「人間が健康で明るい生活(幸福な人生)をおくる」という願いを果たすことを研究の使命とした上で、研究の全体像を次の5点に要約した。レク研究は、レジャー・レク問題を①客観的方法で資料を収集し(方法①)②実証科学的および実践・経験的な方法で(研究方法②)③一般的理論・法則を発見し(分析③)科学的に説明、予測、診断し理

論化④現実に適用し、さらに問題への対処を計る(検証・評価)ことである。つづいて研究の対象領域を①理論(概念、歴史、方法論)②経済・産業、③意識・行動、④活動、⑤プログラム・効果、⑥資源・空間、⑦教育・指導者、⑧政策・運動、⑨その他に分ける案を示した。その上で学会として取り組むことになっている「レク学研究法」(資源)の内容項目案を示し、研究の手法についても分類と整理の案を述べた。参加者との議論は、レク学の組み立てを中心に、手法と対象領域の組み合わせの問題、研究領域の分類の可否の問題が中心となった。また、これまでの研究のドキュメンテーションと内容分析が必要(浅田隆夫氏)、現場との協力体制を(三崎達郎氏)などの声も高く、これらの課題を乗り越げるために、3月には研究会合が行なわれることになった。(コーディネーター・西野仁、渡辺貴介)



思っていること 三隅達郎

11月4日慶応大学で開かれた第14回日本レクリエーション学会大会の前夜祭として、南国リゾートホテルに於いて3日夜懇親会を開くから是非出席しようとの連絡を受けたので、態を断つたところところ裏切られる破目になってしまった。名響などには遠くないが、それにも増して気恥かしい思いの方が強い。何もしていない老人だから。この機会に二つのことを記しておく。第一は私は学生時代から社会事業に入り、留学したのが社会事業の勉強が主であった。従ってレクリエーションもその分野からのものであったし、今もそうである。ところが学会は体育連盟の会が多数を占めているので、語会合では常々そんな考え方もあるのだから、そんな実地方面もあるんだなどと私の心を聞いてくれることが度々であった。その点、私は会員であることというよりも、視野を広くしてきた感謝の気持ちでいっぱいである。



第二の点として言いたいことは日本は貿易黒字国、知識赤字国と言われ、レクリエーションの分野でもこの表現は事実にあてはまることである。そろそろこの言葉を返上してもいい頃合ではないだろうかと思う。レクリエーションに関する日本人の理念を確立し、日本人らしい実施方法を編み出したものである。調査方法また然りである。その結果として諸外国の人たちは日本の〇〇の言として、それらを引用するようになるにちがいないのである。知識赤字国から知識黒字国になりたものである。明治維新以来の表現である文明開化という表現の文化の進歩になく劣等感がないように思っている。若い会員の方たちの奮起を期待したい。(国府基督教大学名誉教授)写真は懇親会であいさつされる三隅氏。

研究室訪問 現場の実践をふまえたレク哲学の確立を

日本体育大学
レクリエーション研究室

全国でも珍しいレク学研究室を擁する日本大を訪ねた藤本祐太郎教授の話をもとに、藤本教授の構想としては、レク学研究室ばかりではなく「レクリエーション学」科、そのものを設置したかったこと。実大基準等研究協議会の体育学専門分科会が昭和40年に作られた際、体育学系には、少なくとも体育学、健康教育学の2学科を置き、さらにレク専攻を置くべきであるとされた。そこで日本大は、昭和55年に「レク学」科、設置の申請を出すのだが、あまりに前進的だったせいで認められず、社会体育学科としてスタートする。今でも社会体育は呼称で、内実がフィジカル・レクリエーションだと思っている。

研究会予告
レジャー・レクリエーションに関する短大・大学・大学院等の卒業論文発表会

- 日時: 1985年3月16日(土)14:00-17:00
- 会場: 東京農業大学(東京・世田谷)
- 発表申込: ハガキに住所・氏名・電話番号・学校名・論文テーマ・指導者を明記の上2月23日(土)迄に事務局へお送り下さい。学会員外の方でも発表できます。
- 1985年度研究会の開催要綱の詳細は未定ですが、次のように計画で実施する予定です。
- 第2回1985年4月 レクリエーションの歴史・原論
- 第3回 5月 レクリエーションの基礎と活動
- 第4回 6月 レクリエーションのサービス(人材、組織、運営)
- 第5回 10月 レクリエーションの方法(活動、プログラム)
- 第6回 12月 レクリエーションの環境(設備、施設、空間)
- 第7回1986年1月 レクリエーションの発展(就業、施設展開、運動)

レクリエーションに関する専門分科会の設置

学会大会時の理事会で「レクリエーション指導」に関する専門分科会の設置が基本的に了承された。学会員の中には、公認レク指導者やレクの現場に限らず活動を行っているものも少なくない。この専門分科会は全国のレク上級指導者やレク協会のスタッフが大卒生と一緒に作り出してほしい。レク指導の体系化を中心課題に、各地の実践を整理・分析して理論化を行なうとされている。また1月19-20日に東京で開催された全国レク指導者研究協議会(日本レク協会主催)に協力して「レク指導学」の構想を検討した。

海外たより

南米に
余暇・レクリエーション協会

ブラジル、チリー、メキシコ、コロンビア、ウルグアイ等の参加を得て、ラテン・アメリカ余暇・レクリエーション協会(Latin American Leisure and Recreation Association)が創立されたことと連絡があった。なお、事務局は、プエルトリコにおかれることにし、設立総会は、84年10月11日に開かれた。主要な事業として、次のような事項が考えられている。

- (1) 地域の主要な情報を相互に伝達しようとする。年4回のNews Letterを発行すること。
- (2) 地域内の余暇およびレクリエーションに関する専門家および団体の名簿の発行
- (3) 年1回、専門的研究についての機関誌を発行すること
- (4) 必要に応じて、セミナー、ワークショップ、シンポジウムその他の教育的活動を実施すること。
- (5) 余暇・レクリエーション専攻で学位もしくは卒業資格の授けられるような専門指導者養成をせざるべき持久的な地域指導者養成センターの確立をはかること。
- (6) 余暇・レクリエーション全体を視野におきつつ、各国でも地域的配應の下にユネスコ・ホステルの建設の促進をはかること。
- (7) 南米地区内の学会および教育のため、研修および交換プログラムの確立をはかり、そのための協力をすること。
- (8) 余暇・レクリエーションおよび関連分野の研究活動を促進し、協力し、また実施すること。
- (9) 種々の余暇・レクリエーションに関する情報センターとの恒久的な連絡方法についての確立をはかり、個人および機関間の専門的情報の検索の便宜をはかること。

なお、この南米アメリカ地域余暇・レクリエーション協会の事務局長に、現地余暇・レクリエーション協会の事務局長にN.Melendez氏が就任した。(報告:江橋慎一郎)

〈国際会議の予定〉

○1985年3月12日~15日
American Camping Association Convention
(Atlanta, Georgia, U.S.A.)
〈問合せ先〉
American Camping Association
Bradford Woods, Martinsville, Indiana 46151, U.S.A.

○1985年8月26日~28日
ユニバーシアード神戸大会スポーツ研究会
(CESU Conference Kobe 1985)
(神戸国際会議場、神戸市)
メインテーマ: 堂りつつある社会と大学スポーツ
(University Sports in a Changing Society)
〈問合せ先〉
〒650 神戸市中央区港島中筋6-9-1
神戸国際交流館館内
(財)1985年ユニバーシアード神戸大会組織委員会
Tel. 078 (302) 8560

●1985年2月5日~6日
国際スポーツ科学シンポジウム
(関西体育大学)
慶應義済大学の開学を記念し、身体活動に関する科学的研究の成果について、世界各国の研究者・コーチ・指導者等が集り、その知見を交換し、今後の一層の発展を計ろうとするもの。演者はセオドラ・ペッカー博士(テキサス健康大学)など5氏の海外参加者を占める。基調講演、分科会、学内見学、レセプション等が行われる。〈問合せ先〉 〒811-23 徳島県鳴門市市町1 関西体育大学 TEL.09944-6-4111

世界レジャー・レク協会
(WLRA)
の事務局がカナダへ移る

レクリエーション運動の国際的センターである世界レジャー・レクリエーション協会の常務局長昨年11月にカナダのオタワにあるオタワ大学内に移った。新しいアドレスは次のとおり。
World Leisure and Recreation Assn.
559 King Edward Avenue
University of Ottawa Campus
Ottawa, Ontario, Canada K1N 7N6
WLRAへの入会申請書は学会事務局にあるので、興味のある方は直接用封封(60円切手貼付)同封の上、事務局までお申し込み下さい。
・個人会員 US \$30.00 (年費)
・学生会員 US \$15.00 (年費)

第1回常任理事会報告

●期日: 1984年8月22日(水) 1:30-3:30 PM
●会場: 日本余暇問題研究会議室(東京経済会館)
●出席者: 江橋(議長)、浅田(副議長)、高橋(理事) 池田、進士、黒田、西野、野村、松浦(以上9名、議長、理事、川、寺島、芳賀以上幹事5名)。
1. 各委員会の業務計画および業務目標などの進捗状況について
■研究委員会(進士理事) (1)仮報「レク学研究法」出版および、研究会内においてレク学研究法にかかわる基礎的学習を研究会員に行っていた。つまり、レク学研究法出版に向けて、基礎的作業を公開で行うスタイルをとりた。従って、研究会のテーマは、レク学研究法の目次だと関係がせまい。なお研究会の予定は次の通りである。
●1984.12. 8 レク学研究の現状と展望「レク学研究の対象と課題」
●1985.1-3月 ワークショップ(1泊2日)
代表的な研究会員の記事と、各幹事の方などについての作業を、委員会内で行った後、それらの成果をもとめて全体発表を行う。(学生の卒業発表は3月16日に行なう) 4月以降発表、原論、意識と行動、サービス、方法、環境、政策と就業等とりあげた卒業発表を行なう。「レク学研究法」出版に向けての作業は、編集委員会を分担とする。 文題目録の作成のためのワークショップは、編集委員会が行う。
■編集委員会(今井理事)の代表報告(代表説明) 1. 「レクリエーション研究」の編集方針について 焦点を絞った編集をこころがけた。 協賛機関の審査基準をより明確にしたい。 2. 実践を理論化するような研究にに対し、発表の窓口を広げたい。 3. 基礎研究や発展研究などを含めて、多角的な編集を行なった。 4. 文献目録の作成にあたっては、レク学会員による研究のほか、社会教育、社会福祉、生涯学習など関連領域の研究についてもできるだけ取り上げたい。また、これに関連して指導者、運動家、行政担当者にもレク学会への参加を呼び寄る必要がある。これらの作

業は研究会委員会と十分協議しすめていきたい。

◆広報渉外委員会(重田理事)

- 1. 学会ニュースについて
解説記事などを加え、中身を充実させたい。
- 2. 広報について
学会大会等の際のパブリシティ一括による広報手段を用いたい。日本レク協会などの持っている広報手段を使って会の活動を広く知らせたい。とくに、指導者には、関心を持っているものが多いものと感ずるので、研究会の内容などをより詳しく報告したい。
- 3. 渉外について
渉外を他団体、他機関と折衝することと理解し、他学会とのつながりをより深めていきたい。また、日本レク協会や指導者のグループとの協力関係も深めていきたい。

◆財務委員会(事務局の手遣いにより欠席)
次回に報告される旨、理事長より説明があった。

◆総務委員会(西野理事)

- 1. 各委員会活動が、より積極的に機能するよう配慮したい。
- 2. 顧問幹事の事情により、近い将来、事務局を移転する必要があるそうなので、来年4月頃までをめぐらそうとする結論づけた。

以上のような報告に対して、出席理事全員が了承した。なお、次のような意見があった。
◆学会としての研究をすすめるために、文部省科研費などの申請などを積極的にしてはどうか。(渡田)
◆学会ニュースには、会費の内容やお知らせだけではなく、学会活動の内容を、より具体的にのせる必要がある。(渡田)
◆学会ニュースには、学会の年間計画などについても、より詳しくのせて欲しい。どのような内容を伝えるべきかについて十分検討して欲しい。(渡田)
◆学会の長老を優先的に、論文あるいはそれに準ずるようなものを依先しレク研究や学会ニュースに掲載してはどうか。(渡田)
◆事務局がたびたび移転することは好ましいことではないと思う。永く継続して引き継いでいくことを探して欲しい。
2. 学会大会について (池田理事)
大会は予定どおりの内容で準備が進められ、前日(3日)夜には専断パーティーが開かれる。

専門分野別シンポジウムは「余暇行動研究の今後の動向」というテーマで実施したい。メンバーは、原田洋彦(ペンシルベニア大学)、山口孝雄(慶應体育大)、河西正志(中京大)の氏にお願いしたい。なお、コーディネーターは、当初、池田博(慶應体育大)が予定されていたが、大会準備等に専念したために、西野仁(東海大)に変更したい。
学会大会当日、三笠宮殿下のご視察があるかもしれない。
以上のような報告に対して、次のような意見があった。
◆シンポジウムのテーマが、応ずるよう思う。方法論に取れるような方向で考えて欲しい。(渡田、進士)
これらの意見を考慮することを、池田理事の提案を出席理事全員が了承した。

3. その他

W.L.R.A主催の国際会議が、9月来(来)に開催される。レク学会からは、会長と協議し、高橋理事長が代表として出席する(高橋)
入会希望者として、次の2名が報告された。
小俣知子・日本大学(指導者 田中誠理事)
伊藤俊枝・東京大(指導者 進士五十八理事)
これらの事項について、出席理事全員が了承した。(西野)

昭和59年度 第二回理事会報告

●日 時：昭和59年11月4日(日)11時45分～12時45分
●場 所：慶應体育大学 学生館2階会議室
●出席者：江崎(会長)渡田(副会長)高橋(理事長) 秋野・池田・今井・木下・鈴木・重田・田中(幹事)・田中(監事)・田中・神村・夏目・西野・長谷川・川原(理事)梅津・川向・寺島・芳男・三浦(幹事)

◆会費および(江崎)
慶應体育大学で学会大会が開催されたことに對しての返金と会長就任についての挨拶。
理事長報告(高橋)
1. 名譽委員にアラークを贈る。昨日の専断会の席上三浦理事氏に贈呈した。
2. 今大会で、会長職を行う。
専断委員会報告(重田)
1. 学術研究団体の登録のための書類が受理された。
2. 事務局の事務分室を上智大学と東海大学で行っている。

◆編集(今井)

- 1. レクリエーション研究は、12、13、14号を編集する。
 - 2. 投稿規程を整備したい。
 - 3. レク研究13号の切りがまわっているので、投稿を呼びかけて欲しい。
 - レク研究14号は、研究文庫目録として出したい。
◆編集
投稿論文の審査を今後まきとんとして欲しい。
大会号はできるだけ大会にまにあうように発送して欲しい。(秋吉)
- ### ◆広報渉外(重田)
- 1. 学会ニュースの2回目を12月に出したい。内容は、学会大会報告、支部などの動き、先輩会員の感なども加えたい。
 - 2. 学会を広く知ってもらうために、月刊レクリエーションやその他のパブリシティに学会関係の記事をのせてもらうよう働きかけたい。
 - 3. 渉外面としては、本年度は日本レクリエーション協会との協力関係を整備することを具体的目標とする。とくに、高齢者や職場関係の研究セミナーなどの研究イベント、レク指導者向けの出版活動について協力を密にしたい。
 - 4. 馬道学会との関係をより密にしたい。
 - 5. 広告あつめにも努力したい。
 - 6. 全国レク指導者研究協議会が指導者の研究活動をテーマに1月19～20日に開催されるので、学会も組織的協力をしたい。

◆財政(長谷川)

- 1. 広告収入が予算より少ないことや、賛助会員数が少ないなど問題がある。
 - 2. 各理事会は、協賛会員1名または、広告協賛1万円程度を獲得して欲しい。
 - 3. レク研究の販路ルートの開拓や贈答会員の拡大をしたい。そのために、ダイレクトメールを出すことや、学会紹介パンフレットを整備することなどを、広報渉外委員会とも相談して進めたい。
- ### ◆研究企画(田中)
- 1. 文庫目録は、編集委員会に協力しながら、作成する。
 - 2. 研究会例は、12月号を第一回とし、3月にワークショップ、4月以降、分科別シンポジウムを開催したい。
 - 3. 学術論文、修士論文の発表は9月に行いたい。
 - 4. 「レク学研究法」(仮)出版準備、まひに59～60年度

研究会担当のコーディネーターを選んだ。他に適当な会員を推薦して欲しい。

◆編集
学会の重要な活動なのでリストアップされているメンバーをより精進して欲しい。(秋吉、渡田)
◆委員長を中心に、整理したい。
◆審議事項
1. 第15回学会大会について
第15回学会大会の開催地、開催期日を決めて欲しい。(西野)
全国レク大会の開催予定地、三章でよいが、期日をレク大会と干渉しない方がいいと思う。レク大会参加者が学会に参加できるよう配慮できないか。(青木、田中(幹))
関係方面と調整したい。(高橋)
2. 「レクリエーション指導者研究専門分科会」の結成について
「レクリエーション指導者研究分科会」の結成を促したい。(資料に基づいて説明があった)(今井)
学会が活性化する意味からも、喜ばしいことだと思う。設立は認めるが、名称については、再検討して欲しい。(高橋)

◆入会金の承認

(進会希望)
◆賛助会員 (株)朝研 (S58年入会) ◆入会希望 ◆入会希望
◆副委員長 上智大学体育研究室
◆正会員
坂井明夫 (前橋V.M.C.A.)
北川洋一 (慶應体育大学)江崎慎四郎(慶應)
現代子一 (慶應体育大学)山口孝雄(慶應)
現代子二 (慶應体育大学)
川西正志 (中京大学) 池田 勝博
伊藤俊枝 (アイヤモンド造園社)進士五十八(慶應)
小俣知子(日本大学) 田中誠(慶應)
高橋正道 (横浜体育クラブ)田中誠(慶應)
志村幸一 (横浜体育クラブ) ◆
松井幸一郎(聖徳大学) ◆

◆学生委員
津 道子 (津田塾大学) 田中博子(慶應)
佐竹弘博 (筑波大学) 池田 勝博
◆特別委員
嶋 成雄 (釜山大学)、金 谷博雄
宮 実枝 (駐心外国語専門学校) ◆

以上の入会金が承認された。

学会ニュース

No.32
May 1985

発行人/高橋和 編集/広報渉外委員会
事務局 平102 東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学 新聞文芸研究室
電話03-226-3911 郵便振替東京5-4971

学会大会での発表方法変わる

—発表申込みは6月28日まで—

15回大会/10月28日三重県伊勢市

本年度の学会大会は、別記のように10月28日(月)三重県伊勢市に開かれることになった。あわせて大会時に研究発表を行うための手順が、本年度から大きく変わることになった。
昨年度の14回大会から、従来の「発表抄録」をやめ、発表内容を本格的な論文として提出してもらうことにし、所定の審査をへた上で「レクリエーション」の学会大会号として編集発行している。
ただし、昨年の大会号(12号)は、移行段階のため、活字の大きさが一部でまちまちであるなど、研究誌としては不十分な面があった。本年度はより充実した内容にするために、以下に掲げるような手続を取ることとなった。従来に比べて発表申込みの受け付けがより、本原稿のしめりも早くなるので、遅れないよう準備をお願いしたい。
研究発表の内容がB5判1頁の研究要旨にとどまっていた従来の「抄録」に比べると、昨年の大会号は、たいへん充実した内容となり、各方面から好評をもって迎えられた。当然に大会時の発表内容もいそう質の向上がはかられた。本年度この延長上にも、さらに内容のある大会号の刊行が期待されている。

研究発表申込み要項

- 1. 発表資格：1985年度会費を納入した会員
- 2. 発表形式：口頭発表

第15回学会大会に参加しよう

10月28日(月)/伊勢市
—全国レク大会の第三日目に併催—

第15回を迎える学会大会は、従来どおり、全国レクリエーション大会と時期を合わせて、本年10月28日に三重県伊勢市で行なわれることになった。

ただし、従来は全国レク大会の第二日目に開かれていたのを改め、今回は第三日目(最終日)に開くことになった。これはレク大会第二日目が実践活動の日であり、この日に学会を開くと、実践活動参加者は学会に参加できないという大会参加者の声に応じたものである。これによって現場のレク指導者などが学会大会に参加しやすくなったわけだ。また、学会員もレク大会の実践活動を経験することができるようになったことになる。これを機会に、学会員と実践活動家との交流が促進されること望まれる。

第15回日本レクリエーション学会大会・1985年度総会開催要項

1. 日 時：1985年10月28日(月) 9:00～17:00

受付	研究発表	12:00	1:00	2:30	4:30
		総会	総会	研究発表	シンポジウム
		理事会			

- 4. 総会議題：
1984年度事業・決算報告
1985年度事業・予算案審議
その他
- 5. 大会参加費：
正会員 1000円
学生会員 500円
賛助会員 無料
全国レクリエーション大会参加費納入者 無料
その他一般の方 1500円

事務局移転のお知らせ

1983年より、学会事務局は、上智大学新聞文芸研究室に設置していましたが、1985年6月より、東海大学社会体育研究室内に移転することになりました。これにともなって学会の郵便振替口座も次の口座になりました。新年度の会費振込は新口座へお願いいたします。
郵便振替 振込先 8-31789
(事務局)
〒259-12 平城市北目1117
東海大学体育学部社会体育研究室内
TEL0463-58-1211
内線3508、3531
担当：西野、川向

会費納入のお願い

1985年度の会費(正会員・特別会員・継続会員5,000円、学生会員1,500円、賛助会員20,000円以上)の納入を前回の郵便振替用紙にて6月15日までお願いいたします。近畿・九州支部会員の方も直接本部事務局へ納入して下さい。
振替用紙に金額が記入されている方は、1984年度以前の会費未納の方です。振替用紙に記載された金額を至急お支払い下さい。尚、領収書は「郵便振替口座受領簿」をもちまして、かえさせていただきます。正式の領収書ご希望の方は事務局までご郵送下さい。
万一、今回の請求と会費のお支払いが入れ違いになりましたら、ご容赦下さい。

〈研究省報告〉

仮題『レク学研究法』

編集案を固める

85年3月18日・19日の両日、学会研究省が東京・お茶の水の海鳥館で開かれた。これは学会が編集する『レク学研究法(仮題)』の内容検討のために行われたもので、全体の構成と内容項目について、全体会議とグループ討議、そして再び全体会議を行なってまとめた。あわせて執筆者の選定も行なった。

全体は二部構成で、第一部は6つの研究領域ごとに基本的な考え方、研究視点、研究法の概説が述べられ、第二部は多量な事例やアルファイ法など、代表的な研究手法の解説と応用例が示されることになった。

第一部の章立てと編集担当者は次のとおり。

- I. 歴史・原論 (宮下杜治、梅津進子)
- II. 意識と行動 (田中良雄)
- III. 政策と運動 (渡辺英介)
- IV. レク・サービスと運動管理 (西野仁)
- V. 活動とプログラム (松浦英代子)
- VI. 資源と空間 (進士五十八、麻生恵)

今後の手順としては、各章ごとに研究省を開き、執筆予定者が執筆案を報告した上で、出席者の意見を聞いて執筆案を決め、実際の執筆にかかることになった。

これに従って第1回の研究会が5月25日(土)に順天堂大学(国電お茶の水駅旁)で開かれる。テーマはIの歴史・原論分野の研究法で、片岡唯夫(筑波大学)小田切敏一(奈良女子大学)の両氏が発表を行う。

以降、毎月は一回ペースで、各分野ごとの発表と検討会が行われる予定。年度内には検討が済んで、いよいよ執筆に入る。

研究室訪問

レクリエーションの価値論を追及

同志社大学保健体育研究室

同志社大学は京都師範の北側、赤レンガが縁にはえてきた第一回の研究発表大会に参加して、保健体育研究の福田彰教授、仲村助教授は、学会創立以来の占参メンバーである。

福田教授は、日本レク学会の前身・日本レク研究会のころからかかわっており、同研究会が1985年に山形で開催された第19回全国レク大会ののりに行なった第一回の研究発表大会に参加して「仕事と余暇を結ぶレク理論について」と題する発表を行なった。「レクを研究してみよう」とした動機は、大学の課外活動の担い手になって、その模範づけをする必要が迫られたからです。アメリカからいろいろな本を取り寄せて、新しいレク概念への接近をはかろうとしてきました。その結果として

て見てきたのはレクの価値論ということ。価値の問題を抜きにしてレクを語ることはできない」と福田教授は語る。

同教授のレク研究は「レク概念への接近」と題する連作として「同志社保健体育」に発表され、プライとして、WORKとレク、レジャーとレク、教育とレクとのさまざまな角度から精力的な考察が行われていた。

仲村助教授もまた、レク概念の分析を課題としている。とくに、日本の現実の中で、レジャーやレクリエーションという概念がどういった実質的な意味を担っているかを調査して、学会大会で発表している。それによればレジャーとレクの峻別論はすでに論議がまわっているに過ぎない。社会の動機の中で新しいレク概念の構築が必要だというのが仲村助教授の考え方である。

日本の現実をもとにした新鮮なレクの価値論が二人の共同作業から生まれることを期待したい。(福田)

東海支部が結成される

三重県伊勢市での第15回学会大会を機に、東海支部の結成準備が進められ、5月12日、30名余の会員が集まって名古屋で結成大会が開かれました。理事會と総会の正式承認を待って活動が始められます。すでに、4月19日に開催された常任理事會では、この件について審議がなされ、結成の方向で準備をすすめていただくことを確認しております。

日本レクリエーション学会東海支部設立趣書

現代の社会の中で、人間が生産をより健康に生きていくためには、余暇を積極的に活用することこそ大切である。その意味において、レクリエーション活動やその研究が極めて重要な役割を担っていることはいまもでない。

このため、すでに昭和46年3月には日本レクリエーション学会が発足し、年1回の学会大会は14回を重ね、レクリエーション活動の健全な発展に寄与してきた。また、学会大会の開催とともに重要な事業のひとつである研究機関誌『レクリエーション研

究』の発行も12号を数え、最近では「かが国におけるレクリエーションの体系化」に関する問題にも取り組んでいる。

このたび三重県伊勢市において、第15回日本レクリエーション学会が開催(10月28日)されることになった。これを機会に、東海地区においてもレクリエーション研究の充実発展を考え、支部会を結成してはどうかという意見が、会員をはじめ関連する学会の会員から出された。そして地域の特質をよく見極めた調査研究に補助し、人々のより健全で幸福な、しかも文化的な生活の向上と発展に貢献すべきであるという結論に達し、ここに日本レクリエーション学会東海支部会を設立する次第である。

昭和60年4月10日

発起人

- 池田隆二、上田勇一、大内敬哉、
- 影山 健、河口光雄、川村英男、
- 木村吉次、坪田晴夫、寺沢 猛、
- 中島豊雄、西田完彦、藤田眞吾、
- 守能信次、山本英哉

レク指導研究専門分科会活動開始

昨秋の理事會で設置が認められたレク指導研究のための専門分科会が新年度に入っていく活動をはじめ「レク指導」に関する学問体系づくりの活動をつまあげている。分科会の名称についても、4月の常任理事會で「レクリエーション指導研究専門分科会」とすることが正式に承認された。

今年1月に、日本レク協会の主催する「全国レク指導者研究協議会」が開かれたおり、日本レク学会もこれを後援し、多くのメンバーが、研究協議会のテーマである「レク指導の体系的」の議論に加わった。(その詳細については「レク研究」誌13号を参照)また、現場の指導者からも、この協議会を機に多くの学会入会希望者が出ている。「レク指導研究専門分科会」は、このおりの討議を引つづかちて検討をすすめて、研究者と現場の指導者が協同して、レクリエーション学の応用学としての「レク指導学」の体系的整理をめざしている。具体的な研究課題と

してあげられているのは次のようなテーマである。

- ①レク指導の原理(その構造と機能)の明確化
- ②レク指導の内容の整理と体系化
- ③レク指導の素材となる文化財(レク財)の研究
- ④レク指導の記録法と指導内容の分析方法
- ⑤レク指導の効果測定の方法
- ⑥治療的レク指導の方法
- ⑦レク指導におけるグループワークの活用について
- ⑧レク指導者の養成カリキュラムについて

これらのテーマによって研究会を開く一方、地方在住のメンバーを生かした研究活動もすすめる。その成果を学会大会に発表すべく活動プランが考えられている。興味と関心のあふ多くの研究者の参加が望まれる。

(分科会の連絡先は日本レク協会調査広報課 電話 03-423-1241)

昭和60年度

第一回常任理事會報告

- 日 時：1985年4月19日(金)6:00-8:00 P.M
- 場 所：余部閣議事所
- 出席者：高原(理事長)、進士、西野、福田(常任理事) 藤本、梅津、寺島、芳賀、福岡(幹事)

報告事項

1. 学術委員候補者について(西野)
 - 日本レクリエーション学会から江崎隆四郎会長を推薦した旨報告された。
2. 編集委員会から(芳賀)
 - レクリエーション研究誌13、14、15号に関する準備進行状況が別資料をもって報告された。
3. 会費委員会(進士、発生)
 - 3月18、19日(月、水)海鳥館にて、出席者13名を招き、レクリエーション研究法ワークショップが開催された旨報告された。
4. 3月16日(土)東京農業大学にて学術論文発表会が開催され、各種学術の参加も含め、17期が発表され好評のもと終了した旨報告された。
5. 総務報告(福岡)
 - 1984年度の事業、決算報告が別資料をもって説明され承認された。

審議事項

1. 1985年度事業計画、予算案について(福岡)
 - 別資料をもって提案された。
2. 第15回学会大会について(西野)
 - 三重県伊勢市大会事務局から学会大会の日程等に関する要案があり、日時は、大会最終日の10月28日(月)場所は伊勢市市民生年体育センターに決定承認された。
3. レクリエーション研究誌15号の名称について(芳賀)
 - 名称は「レクリエーション研究、大会発表論文集」と決定した。また投稿規定(集)についても別資料をもって提案され、論文は400字詰原稿用紙20枚以上4ページ以上、活字はタイプライターまたはワードプロセッサに統一するなど検討された。なお詳細は編集委員会に任せられることとなった。
4. (仮)レクリエーション学研究法の内容について(進士)
 - 別資料をもとに原案が提出され審議された。具体的

1984年度事業報告

1. 事 業

- (1)第14回学会大会開催
 - 11月4日(日) 鹿屋体育大学(鹿児島県鹿屋市)
 - 研究発表 19題
 - 講演 「これからのレクリエーション研究について」 島崎：江崎隆四郎(鹿屋体育大学)
 - 専門分野別連続シンポジウム(行動研究分野)
 - 「余暇行動研究の動向と今後の方向-特に研究の方法論について-」
 - 演者：原田洋彦(ペンシルベニア州立大学)
 - 山口康彦(鹿屋体育大学)
 - 川西正志(中央大学)
 - 司会：西野仁(東海大学)
- (2)研究発表奨励金 4題
 - 6月9日(土) シンポジウム「関連学から見たレクリエーション研究への視点」(東京・上智大学)
 - 12月8日(土) シンポジウム「レクリエーション学研究の動向と展望」(仮)レクリエーション学

研究法 編集に向けて～(東京・上智会館)

- 3月16日(土) 卒業論文発表会「レジャー・レクリエーションに関する専門学校・短期大学・大学・大学院等の卒業論文発表会(東京・東京農業大学)」
- 3月18日(月)～19日(火)ワークショップ「(仮)レクリエーション学研究」編集に向けて(東京・海鳥館会館)
- (3)機関誌『レクリエーション研究』第12号(10月)第13号(3月)発行
- (4)会報『学会ニュース』No.30(7月)、No.31(1月)発行
- (5)『レクリエーション学研究法(仮)』編集(1985年発行予定)
- (6)組織の拡充(1985年3月31日現在)
 - 入会者 39名
 - 退会者 75名
 - (会費滞納者・転居不明72名を含む)
 - 正会員 481名
 - 特別会員 16名
 - 学生会員 39名
 - (人材、誌誌、運営)
 - 賛助会員 2名(機関)
 - 賛助会員 5名(機関)
 - 計 543名

2. 会 員

- (1)総会開催
 - 6月9日(土) 上智大学(東京都千代田区)
 - (2)理事會開催 2回 6月29日(金)、11月4日(月)
 - (3)常任理事會開催 2回 8月22日(水)、1月20日(日)
 - (4)理事會内専門委員開催 各3回

1985年度事業案

1. 事 業
 - (1)第15回学会大会開催
 - 10月28日(月) (三重県伊勢市)
 - (2)研究発表奨励金 7回
 - 5月25日(土)「レクリエーションの歴史・原論」
 - 6月「レクリエーションの意識と行動」
 - 7月「レクリエーションのサービス」
 - (人材、誌誌、運営)
 - 10月「レクリエーションの方法(活動、プログラム)」
 - 12月「レクリエーションの空間(設備、施設、環境)」
 - 1月「レクリエーションの発展(調査、発表、発展、運動)」

講演会のお知らせ

日本レクリエーション協会と共催で、下記の通り講演会を開催する予定です。

- 6月27日(木) 6:00-8:00 PM
- 会場は都内で選定中
- 題目：①「アメリカにおけるレク・スペース計画の動向」

- ②「レクリエーションとしてのフィットネスプログラム」
- ワグニア・A・コミュニケーションズ大学教授
- チャールズ・E・ハートソウ氏

詳細については学会事務局、または、日本レクリエーション協会にお問い合わせください。

学会事務局 0463-58-1211 内3508-3531 担当：西野、川向
日本レク協会 03-423-1241 担当：浅野野

1984年度決算報告

(収支決算書) 自：1984年4月1日 至：1984年3月31日 (単位：円)

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 増減額, 内容. Rows include 収入, 支出, 繰上, 繰下.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 増減額, 内容. Rows include 前年度繰越金, 入会金, 年会費, 大会参加費, 雑収入, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 増減額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 増減額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 増減額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 増減額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 増減額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 決算額, 増減額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

1985年度予算案

(収支明細) 自：1985年4月1日 至：1985年3月31日 (単位：円)

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 前年度繰越金, 入会金, 年会費, 大会参加費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

Table with 5 columns: 項目, 予算額, 内容. Rows include 事務費, 会議費, 通信費, 印刷費, 研究費, 大会費, 雑収入, 雑収入.

レクリエーション研究バックナンバーご案内

積債2000円 送料200円

第10号

(原稿論文)

- 河川空間におけるレクリエーションの研究
●山岳レクリエーション地域における廃棄物処理に関する研究
●山岳レクリエーション活動の導入が地域社会に及ぼす影響に関する調査研究
●山岳レクリエーション行動の予測に関する調査研究
●山岳レクリエーション行動の予測に関する調査研究
●山岳レクリエーション行動の予測に関する調査研究
●山岳レクリエーション行動の予測に関する調査研究
●山岳レクリエーション行動の予測に関する調査研究

(第12回学会大会報告)

- 研究発表
●講演「高齢化社会における余暇」
●講演「シニア世代のレクリエーション行政とその展開」
●講演「山岳レクリエーション」
●講演「山岳レクリエーション」
●講演「山岳レクリエーション」
●講演「山岳レクリエーション」
●講演「山岳レクリエーション」
●講演「山岳レクリエーション」

(第14回学会大会)

第14回学会大会(1984年)

お申し込みは事務局まで

第11号

(原稿論文)

- 山岳レクリエーション地域における廃棄物処理に関する研究
●山岳レクリエーション活動の導入が地域社会に及ぼす影響に関する調査研究
●山岳レクリエーション行動の予測に関する調査研究
●山岳レクリエーション行動の予測に関する調査研究
●山岳レクリエーション行動の予測に関する調査研究
●山岳レクリエーション行動の予測に関する調査研究
●山岳レクリエーション行動の予測に関する調査研究
●山岳レクリエーション行動の予測に関する調査研究

(第12回学会大会報告)

- 研究発表
●講演「高齢化社会における余暇」
●講演「シニア世代のレクリエーション行政とその展開」
●講演「山岳レクリエーション」
●講演「山岳レクリエーション」
●講演「山岳レクリエーション」
●講演「山岳レクリエーション」
●講演「山岳レクリエーション」
●講演「山岳レクリエーション」

(第14回学会大会)

第14回学会大会(1984年)

お申し込みは事務局まで

第12号

第14回学会大会(1984年)

お申し込みは事務局まで

研究発表

(A会場)

- 9:00 千重和夫(日本レクリエーション協会)
レクリエーションワークの効果測定法についての研究
9:20 山本清洋(京都府立大学)
伝承遊びの構造分析
9:40 花澤龍子(日本大学)
哲学思考とスポーツ・レクリエーション行動
10:00 小嶋聖子(日本大学)
高齢者ための健康・レクリエーション教室参加とその機能
10:20 増田 肇(日本大学)
従業員のレクリエーションと職場環境
10:40 綿田育代(日本大学)
スポーツクラブ参加に対する期待
一期待のタイプと関連要因との関係
11:00 上野 幸(余暇問題研究所)
キャンプ事前調査結果についての一考察
特に参加の動機と期待についての親子の比較を中心として
11:20 菅下健治(順天堂大学)
農村生活体験が子供に与える影響について
11:40 今井 毅(日本体育大学)
余暇生活診断法の開発に関する研究②
一診断法モデルの構築と機能
(昼食、総会)
13:40 菅田磯敏(日本レクリエーション協会)
レクリエーション指導の基本構造に関する一考察
(B会場)
9:00 高橋 伸(国際基督教大学)
キャンプ参加者の不安について
一障害児アイ・キャンプにおける初参加者への対応
9:20 植野悦男(愛知大学)
成人病罹患者の森林歩行(治療レクリエーション)時の循環器系反応
9:40 渡辺文男
(神奈川県総合リハビリテーションセンター)
中途覚醒障害者の余暇時間
一生活時間調査の結果から

- 10:00 水嶋正信(東京農業大学造園学科)
野外空間としての都道府県立自然公園の現状に関する調査研究
10:20 菅野悦夫(東京農業大学林学科)
大都市近郊山村における森林レクリエーションについて
一東京都多摩郡奥多摩町におけるレクリエーションの現状と問題点
10:40 小川 貴(日本大学)
都市公園の利用、評価に関する研究
11:00 金子和共(宗教学院短期大学)
キャンプにおけるスキーヤーの危険認知について
11:20 西田健夫(淑徳短期大学)
レジャーと身体活動の運動量に関する研究
一短大生の場合
11:40 川高正志(鹿屋体育大学)
スポーツ参加のコミュニティ・モラル形成機能に関する研究
一特に自治省モデル・コミュニティについて
(昼食、総会)
13:40 菅野一雅(余暇問題研究所)
三陽郡のレクリエーションに関する研究
14:00 三本勘夫(八王子レクリエーション学園)
地域レクリエーション協会による長期継続型指導者養成に関する研究(第1報)
一八王子レクリエーション学園の実践モデルの分析
(昼食、総会)

学会大会記念シンポジウム

地域文化とレクリエーション

日本レクリエーション学会の大会記念シンポジウムは、ここ数年「レクリエーション学の体系化とその領域別の課題」について連続的に報告されてきた。その成果の一部は学会誌に報告され、また学会員各位の関心意識に定着してきている。そこで、今回は以後は開催地の地域条件をふまえて、レクリエーションならびにレクリエーション学、或いはレクリエーション学会員としての視点に照準を合わせ、現代社会の課題をどのように受け止める、どのように研究活動に結びつけるべきかを、改めて論じたいと考える。

学会ニュース

NO.33

September 1985

日本レクリエーション学会

第15回学会大会に参加しよう

—10月28日(月) 伊勢市—

学会ニュース前号でお知らせしたように、第15回学会大会が下記のように行なわれる。すでに、研究発表の審査、シンポジウムの入選などを終えたほか、三重県現地本部の藤田匡氏(三重大学)を中心に、会場や宿泊施設の確保などの準備が着々と進んでいる。年々、発表内容も充実してきており、多数の会員の参加が望まれる。

開催要項

- 1. 日時：1985年10月28日(月) 9:00~17:00
2. 場所：三重厚生年金会館センター
伊勢市佐八町字池の11165-1
(伊勢神宮外官館)
TEL 0596-36-1200(代表)
3. 日種：
8:30 受付
9:00 研究発表(次ページ参照)
12:00 昼食・理事會
13:00 総会
13:30 研究発表
14:30 シンポジウム(次頁参照)
16:30

- 4. 大会参加費
●正会員 1,500円
●学生会員 1,000円
●賛助会員 無料
●全国レクリエーション学会参加費納入者 無料
●その他一般の方 2,000円

5. 参加申し込み及び「レクリエーション研究」学会大会等の送付について

事前に会員全員に発表内容をまとめた「レクリエーション研究」学会大会号を送付する。参加申し込みは、事務局には行なわないので、当日余暇生活診断法の開発に関する研究②一診断法モデルの構築と機能

- 交通のごんない
●三交バス時刻表
●車日・祝日連休

Table with 4 columns: 伊勢市発, センター発, 伊勢市発, センター発. Rows include 6:20, 7:45, 8:40, 9:40, 10:40, 12:40.

体育・スポーツ・レクリエーション
企画・講習・指導

さわやかスポーツライオン

Y.T.C

横浜体育クラス

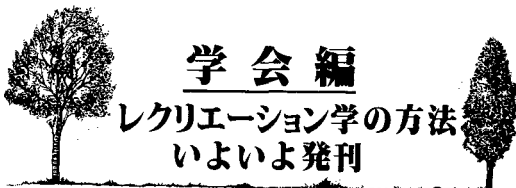
〒245 横浜市泉区和泉町2104-3 ☎045-804-7075(代)
F A X 045-804-7076



公園とレクリエーションシンポジウム終る

昨年11月20日、東京・飯田橋の福祉総合センターで開かれた。このシンポジウムは、本学会と、(財)公園緑地管理財団が共催し、(財)日本レクリエーション協会と、環境緑化新聞社が後援した。シンポジウムは、造園家、レクワカ、ボランティア関係者などが集まり、共に、公園利用の、新しい方法を考える目的で開催された。

参加者は、約150名と盛況ではあったが、公園づくりのハードとレクリエーションのソフトの連携の必要性が叫ばれている状況の中で、造園関係の参加者が目立つことに、少々、淋しさを感じた次第である。
このシンポジウムのまとめについては、早い機会に報告したい。



学会編

レクリエーション学の方法 いよいよ発刊

前理事会までは研究企画委員会が準備をすすめてきた『レクリエーション学の方法』が、現理事会出版委員会として仕上げの段階にはいっています。

学会編集、初の学術出版として念願であった本書には、実にたくさんの学会会員の直接間接の参加協力を得ています。執筆するには、学会役員はもとより学会大会の連絡シンポジウムや例会・研究会・ワークショップを通じて参加していただいた若手研究者に積極的に御協力をいただきました。こうした活動を通じて、レク学は活動も活性化していったと思います。今後も適切な企画が展開できれば、学会発展に寄与できるでしょう。そのためにも、本書の刊行を成功させなければなりません。本書の特徴や内容は下記の通りですが、一冊でも多く皆さんの手を通じた皆さんの読者を獲得していただきたいと存じます。切に御支援をお願いする次第です。幸い発行元の(株)きょうせいも努力もあって内容の割に安価な価格設定が出来ました。執筆者各位の御協力もあって、学会財政へのささやかな貢献も可能かと思えます。

そのためには、学会々員以外のレク関係者の皆さんへのアピールが今までに倍々必要です。直ぐに会員各位の御援助を心より御願ひ申し上げます。

『レクリエーション学の方法』の刊行概要

- 企画・編集 日本レクリエーション学会
- 出版 社 南ようせい
- 連絡先 (電) 03-571-2126
- 体 裁 A 5判 370ページ
- 定 価 2,800円
- 発 行 日 昭和62年(1987年) 4月
- 本書の特色と内容

従来は学校レク、職場レクなど現場対応の本が多かったわけですが、本書は次の章構成にあるように

レクを学問的に体系化しました。

- (構成) 第1章 歴史と原論
第2章 意識と行動
第3章 活動とプログラム
第4章 サービスと運営管理
第5章 資源と空間
第6章 政策と運動

レク学の基礎、概念、方法、技術、研究法と事例各種文献などについて、以上6章の体系に従って記述されていますので、本書は、どの分野のレク活動、レク実践者にとっても、その基礎から応用まで幅広い知識を学習できます。

また、学生や行政・企業関係者、ジャーナリストなど「レクリエーション」への入門者にとっては、その全体像がきわめて論理的でわかり易い概説書となっています。

レクリーダーやレク関係者の専論をめぐす学生の読者にとっては、研究分野ごとの基礎事項を、十分にふまえた上で、研究テーマの選定方法、その進め方や研究法、既刊研究文献リスト、論文のまとめ方などが得られます。

以上のように本書は「体系的なレクリエーション学の方法」であり、そしてまた「レクリエーション研究の基礎から方法論までをふくめた研究法」でもあります。「概説」は、各分野の研究史をふまえた上で、それぞれの分野の内容と特質やキーワードを述べ、「方法論」は具体的な研究や調査のすすめ方などの基礎と実例を整理しています。わが国初の本格的な『レクリエーション学』——レクリエーション学分野の基礎から実践、そして研究法論と事例紹介まで——を、是非一冊座右に置き、日本のレク発展に御尽力くださるようお願いいたします。(出版委員会委員長 辻士五十八)

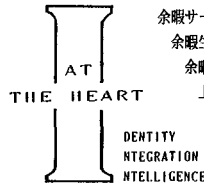
ヘルスプランナー

内 容

- 幼児体育指導 ● 児童体育指導
- 水泳指導 ● 体力測定
- 企業の体力作り ● トレーニングジム
- エアロビクス ● フィットネス
- 各種イベントの企画、運営
- レクリエーションリーダーの育成

(株)ワイルドスポーツクラブ

〒160 新宿区信濃町10 甲山ビル2F
T E L 03 (357) 8505



余暇サービス・健康づくりプログラムの開発と実践
余暇生活・健康づくりへのコンサルテーション
余暇開発問題に関する依託研究
上記に関する出版物の作成、販売



株式会社 余暇問題研究所

JAPANESE INSTITUTE OF LEISURE SCIENCE AND EDUCATION CO., LTD.
〒150 東京都渋谷区恵比寿南1-13-5 エビスハイイツ101
PHONE 03-715-0932

第9回レクリエーション指導者 協議会報告

理事会記録

全国のレク指導者が一堂に会してレク指導をめぐるホットな問題について論議する「レク指導者の研究集会」(学会が後援)が去る1月17、18日の両日におこなわれて、約100名の参加者が熱心に討議を行った。

今回の特色は、「レク指導の体系化」を新たな視点から取りあげたことであろう。これは論議のタキ台として学会の「レク指導研究専門分科会」の最初の成果である「レク指導学の探究」(『レクリエーション研究』第15号の特集)が使われた。その要点は、レク指導を、レクリエーション自立のための支援活動として捉え、その支援形態に「集団化」「社会化」「個人化」の三つのレベルを区別しようというものである。

レク指導はまず、メンバーを解放する素早い集団づくりの過程として捉えられる。さらにそれらの集団を組織し、相乗的なレクプログラムを定着させ、さらに社会の中にレクの理念と実践のためのシステムを確立する社会化のプロセスが認められる。そしてその両者を介して最終的には個人の余暇生活の確立をめざす「個人化」の課題がうかがいあがる。この考え方をふまえた新しいレク指導者養成のカリキュラムづくりの方向が検討された。

分科会の論議では、次のようなものがあった。①学校教育におけるレクの位置と、現在、教育現場で注目されている「教育技術の法制化」運動とから検討された。②個人化支援のレクプログラムを定着させ、さらに社会の中にレクの理念と実践のためのシステムを確立する社会化のプロセスが認められる。そしてその両者を介して最終的には個人の余暇生活の確立をめざす「個人化」の課題がうかがいあがる。この考え方をふまえた新しいレク指導者養成のカリキュラムづくりの方向が検討された。

各方面のレク指導者が参加した集会だったが、学会員は必ずしも多くなかったのは残念である。なお、この会は62年度からは「全国レク指導者研究大会」としていっそう拡充され、中央大会のみから地方大会(3回)も開かれることになっている。学会も、レク指導専門分科会を核として、継続的にこの開催に協力していくことが望まれる。(藤田恒政)

1986年10月24日 パシフィックホテル沖縄
次のことが了承された。

1. 理事会内専門委員及び、常任理事 (◎印)
昭和61年～62年度

理事会内専門委員会

- 総 務 ◎西野仁(総務担当) ◎川向妙子(会計担当)
研究 ◎鈴木忠義・辻士五十八・藤田恒政・宮下桂治
渡辺貞介
編 集 ◎今井 敏・飯田 隆・田中誠雄・渡辺貞介
広 報 ◎藤田恒政・田中祥子・大谷善博・守能信次
水谷嘉範

財 務 ◎宮下桂治・川向妙子・木下茂徳

規 約 ◎松吉善範・池田 勝・西野 仁

出 版 ◎辻士五十八・梅津 道子・松浦三代子

文 庫 ◎鈴木秀雄・今井 敏・川山光雄

国 際 ◎池田 勝・田中祥子・寺島善一

本報編集後援委員会

正 会 長・常任理事全員

正 会 員・高倉正治・大島 真・吉田正志

2. 第17回学会大会は、10月下旬山形市周辺で開催する。

3. 学会入会希望者 (12名)

新入会員の紹介

氏 名	所 属	推薦者
1. 松尾智夫	福岡大学助手	大谷善博
2. 若林次子	日本航空	高橋和敏
3. 本田真子		"
4. 小沢 孝	職業アスレチッククラブ	松浦良一
5. 小嶋 正俊	日本大学	沢村 博
6. 中村昭則	横浜体育クラブ	高垣正道
7. 菊地 宜		"
8. 開根弘文		"
9. 山崎治美	中日子ども会	三宅邦夫
10. 濱山穂子	女子聖学院	梅津道子
11. 泉次愛子	(財)幼児園発協会	高橋和敏
12. 山崎真紀子	沖縄キリスト教短大	江橋慎四郎

次号は、5月上旬発行予定です。
みなさまからの、自由な投稿を歓迎します。

学会ニュース

日本レクリエーション学会

1987年5月20日

No.37
May 1987

発行人/高橋和敏 編集/広報渉外委員会
事務局 〒259-12 神奈川県平塚市北金目1117
横浜大学体育学部社会体育研究室内
電話0463-58-1211(4) 3543, 3541
郵便振替 横浜8-131789

山形で第17回学会大会

10月17日(土)

- ★研究発表申し込みは、6月30日まで
- ★審査用原稿のべ切は、8月10日

今年の学会大会は、第41回全国レクリエーション大会(10月16日~18日)に時期を合わせ、山形市蔵王温泉で開催される。

口頭発表が問題とされるか未定のため、詳しい日程はまだ決定されないが、ほぼ例年を準じて、午前9時から研究発表を開始し、午後4時頃に、全日程を終了することにならうと思われる。

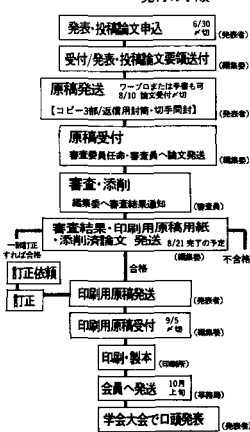
正会員が一名という状況の中で、幹事九十部会員に、準備をすすめていただいている。

みらの山形の秋を満喫せよ、多くの会員の参加と、さらに充実した研究発表を期待したい。

研究発表要領

発表資格: 1987年度会費を納入した会員
発表形式: 口頭発表および「レクリエーション研究第17号・大会発表論文集」への掲載
登壇回数: 共同研究を除き一人一回
発表時間: 一題15分(質問3分を含む)
発表申し込み先:
 〒194-02
 町田市相原町2600
 東京家政学院大学
 芳賀健治気付
 日本レクリエーション学会編集委員会宛
 電話: 0427-82-9811

昭和62年度「レク研究」大会発表論文集」発行の手順



学会大会発表のご案内

編集委員長 今川 毅

レクリエーション学会大会への発表は、『レクリエーション研究』大会発表論文集へ投稿していただくことが条件になっています。具体的には、右の投稿規定にそって、前ページの「発行の手順」で発表に至ります。これは、昨年とはほぼ同じ方法ですが、投稿者は、投稿規定及び発行の手順を熟読・理解し、締切り日等を十分厳守してください。

とくに、重要な点について下記のように、まとめておきます。

- 発表・投稿申込みは、6月30日 締切りです。ハガキまたは電話にて編集委員会宛てに申込み用紙をご請求ください。折返し申込み用紙、発表・投稿要領を送付させていただきます。
- 投稿論文受付は、8月10日、締切りです。その際に必要な書類は、以下の通りです。
 - オリジナル原稿
オリジナル原稿を投稿の際は、手書き原稿でも投稿できますが、出来るかぎりワープロで活字化したものを送付してください。理由は、論文審査終了後、審査結果によっては一部訂正を求められる場合がありますが、訂正・活字化の期間が2週間程度しかないからです。
 - 原稿のコピー3部
審査員に配布するためのコピー等を必ず3部添付してください。また、必ず自分の手元にもコピーを保存しておいてください。
 - 切手 1400円分
 - 論文返信用大型封筒1枚(ご自分宛てに、宛名を記入してください)
 - 論文受け付け確認用原稿2枚(ご自分宛てに宛名を記入してください)
- 審査合格後の印刷用原稿の締切りは、9月5日です。
審査結果の通知は、遅くとも、8月25日頃までには、お手元へ届きます。
合格者には、印刷用原稿に用いるB4判のタイプ用紙を同封します。次の要領で、原稿を作成し、返送してください。
 - 活字の大きさに注意すること。B4判の印刷用原稿が、製本時にはB5判(約半分の大きさ)に縮小されます。小さな活字は使用

しないでください。ワープロの場合は、通常の大文字で構いません。活字の字体は、明朝体をお願いします。通常ワープロの字体は明朝体です。タイプを専門家に依頼する場合には、ご注意ください。

b) 印刷用原稿は、4枚か6枚をお願いします。5枚の場合は、製本時は、見開き右側ページが余白となります。

なお、不明な点は、下記に、ご連絡ください。
〒194-02 町田市相原町2600
東京家政学院大学
芳賀健治 気付
日本レクリエーション学会編集委員会
電話 0427-82-9811

投稿規定

「レク研究(大会発表論文集)」

- 判定措置として昭和62年度は下記の投稿規定にて実施し、問題点があれば、次年度、修正を加えるものとする。
- 投稿者は本会の正会員・特別会員であること。
 - 論文は絶筆に未投稿のものに限る。ただし、外国人会員については英文での投稿も受け付ける。
 - 論文は新かなづかい、制漢字使用を原則とし、A4判、横書き、400字詰原稿用紙を使用する。また、本学会所定のタイプ用紙と同じサイズ、同じ様式(B4判・縦2段かラム)であればワープロソフトによる原稿も受け付ける。
 - 欧文要約は不要である。
 - 論文の第一頁の表題の下にはかならず氏名、所属をつけ、図版・写真にもタイトルをつける。
 - 図版はかならず白紙に監査せよとし、図版・写真類は、上下の別を明記し、原則として図表の文字も活字で入れる。
 - 論文は400字詰原稿用紙にて20枚以上30枚以内を原則とする。
 - 投稿する原稿は、手書き(またはワープロ)のオリジナル原稿とそのコピー3部とする。
 - 審査を通じた論文(手書き)は投稿者に返送する。投稿者は、本学会所定の用紙に和文タイプライターまたはワードプロセッサ(24×24ドット以上)にて原稿を活字化しなければならない。活字化されていないなど様式に適合しない論文は受

体育・スポーツ・レクリエーション 企画・講習・指導

さわやかスポーツライオン

Y.T.C

横浜体育クラス

〒245 横浜市区泉和泉町2104-3 ☎045-804-7075(代)
FAX 045-804-7076

ヘルスプランナー

- 内容**
- 幼児体育指導 ● 児童体育指導
 - 水泳指導 ● 体力測定
 - 企業の体力作り ● トレーニングジム
 - エアロビクス ● フィットネス
 - 各種イベントの企画、運営
 - レクリエーションリーダーの育成

(株)ワイルドスポーツクラブ

〒160 新宿区信濃町10 甲山ビル2F
TEL 03 (357) 8505

大英図書館に「レク研究」を寄贈

レク研究を、The British Library Document Supplyの要請により、寄贈することになり、日本ファクソン網を通じて送付した。

要請の理由は、最近、Document Supplyに日本のレク事情についての問い合わせが多く寄せられることから、それに答えるために、研究誌が必要になったことによる。これで、アメリカ合衆国国会図書館、大英図書館と、世界の二大図書館の蔵書目録に、わが「レク研究」が記載されたわけである。一冊の内容充実を期待する。

● 会員名簿を作成中です。
住所や、勤務先等の変更のある会員は、至急、事務局に、はがきにてお知らせください。

● 次の会員の移転先がわかりません。
学会ニュース36号が、転居先不明で戻ってきました。どなたか、移転先をご存知の方は、事務局までお知らせください。

〒	市区町村	氏名
154	世田谷区	佐藤 浩司
176	練馬区	浦田 憲二
192	八王子市	藤井 立三
228	相模原市	吉畑 英雄
305	桜花	新保 洋輝
332	川口市	日高 正明
473	豊田市	山田 竜一郎
514	津市	長井 健二
814	福岡市	江島 寛幸
940	長岡市	山口 芳一



余暇サービス・健康づくりプログラムの開発と実践
余暇生活・健康づくりへのコンサルテーション
余暇開発問題に関する依託研究
上記に関する出版物の作成、販売



株式会社 余暇問題研究所
JAPANESE INSTITUTE OF LEISURE SCIENCE AND EDUCATION CO., LTD.

〒150 東京都渋谷区恵比寿南1-13-5 エビスハイツ101
PHONE 03-715-0932

け付けない。校正は投稿者の責任において行うものとする。

10. タイプの打上がりは、本学会所定の用紙に原則として4枚以上6枚以内とする。規定の枚数を越えた場合は投稿者の実費負担とする。

11. 活字化するための論文を投稿者に返送するが、からず必要な切手および宛て先を記した返信用の封筒を同封すること。

「レク学の方法」発刊

初の学会編集の学術出版として念願でありました「レクリエーション学の方法」が、ようやく出版の運びとなりました。

花咲く緑の草原に、一本の木が、しっかりと、音楽いばいの枝をひろげ、澄みきった青空に熱気球が浮かぶという表紙デザインは、まさに、これからの、レクリエーション学の方法の、新たな前奏を象徴しているようにおもわれます。

すでに、学会ニュースの紹介で、お知らせしましたか、本書の概要は、次の通りです。

●企画・編集 日本レクリエーション学会
●出版社 鹿ぎょうせい
●連絡先 TEL 03-571-2126

●体裁 A5版 363ページ
●定価 2,800円
●発行日 1987年4月

●本書の構成
第1章 歴史と原論
第2章 意識と行動
第3章 活動とプログラム
第4章 サービスと運営管理
第5章 資源と空間
第6章 政策と運動

レクリエーション学の基礎、概念、方法、技術、研究法と事例、各種文献などについて記述されています。

研究者はもちろん、学生や行政、企業関係者、ジャーナリストなど「レクリエーション」への入門者にとっても、全体像をつかむうえで、きわめて、論理的で、わかりやすい概説書となっています。

是非一冊座右におかれませうことをお願いします。

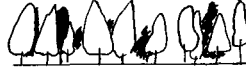
基本問題検討委報告

昨年10月の総会で話し合われた内容を受けて、基本問題検討委員会が、特別委員会として高橋理事長を委員長に設置された。

すでに、2月16日を第1回として、3回の会合が持たれた。

検討内容の概要は、次の通りである。

- 第1回(2月16日)
- 委員会の性格、役割について
 - (1)特別委員会として、目的が解決されれば解散する。
 - (2)各専門委員会と密接な連絡をはかる。
 - (3)広い視野にたって、将来の学会の在り方に係る基本的な問題を取り扱う。
 - (4)できるだけ幅広く、多くの意見を盛り入れる。
 - (5)方向性はするが、具体的な事項については、その問題に係る専門委員会に委ねる。
 - (6)6月頃を目途として、原則として毎月定期的に委員会議を開く。
- 第2回(4月6日)
- 支部の設立について
学会の活性化を図り、全国的な学会支部制の設立について、次の事項が討議された。
 - 支部制にあたり、その基本方針を打ち出す必要がある。その際、次のような事項を考慮する必要がある。
 - 支部規模のアンバランス、学会員の所属のあり方、本部と支部の業務内容の明確化、学会費、役員選出方法など。
- 第3回(5月8日)
- 役員選出について
役員選出について、現在の学会員の全国分布状況と資料を基に検討した。しかし、まだ十分な意見の集約はみていない。
- 引き続き、次回(6月26日を予定)に検討を継続する。



《支部だより》 近畿支部会 1986年活動報告

近畿支部会では、学会本部の活動に参加しながら1986年度は独自の下記活動を行いました。1987年4月現在、支部会会員数76名で頑張っています。

- 1 総会・理事会の開催
- 総会……6月30日
 - 理事会……5月15日、3月15日
- 2 研究会の開催
- 第1回研究会……12月13日 15:00～
於 大阪体育大学
『週休3日制採用企業の従業員への休暇行動について』
語提供者: 永吉実英氏(大阪体大)
 - 第2回研究会……3月15日 15:00～
於 大阪体育大学
『イギリスにおけるスポーツ・レクリエーションのありかた、ニュージーランドOBS最新情報』
語提供者: 山田誠氏(神戸市外語大)
 - レクリエーションに関する卒業論文発表会
☆子供レクリエーション参加の社会的背景および、スポーツ観戦に関する研究
発表者: 松本真壽 指導教官: 永吉実英(大阪体育大学)
 - ☆大学生の野外活動に対するイメージについて
発表者: 谷川耕一、藤子真美
指導教官: 福田芳則(大阪体育大学)
- 3 支部会ニュースの発行
N01～N03: 3回発行
各会案内、研究会要旨報告、学会大会シンポジウム特別講演要旨報告etc)

▶1987年度事業案

- 1 総会・理事会の開催
 - 総会は5月中旬までに文書で行う
 - 理事会は、6月、10月、3月の3回行う
- 2 研究会・講演会の開催
 - 定例研究会は2回(6月、3月の予定)行う
(他のレクリエーション関係団体と共催による講演会もしくはシンポジウム開催を含む)
- 3 支部会ニュースの発行
 - 年間4～6回の発行を予定
- 4 役員名簿の発行
- 5 会員の拡充

▶1986・87年度支部役員

支部会会長 青木泰三(日本ネットボール協議会)
副会長 仲村 要(同志社大)
理事長 永吉実英(大阪体大)

◎事務局 〒667 大阪府茨木市学園町1-1
大阪体育大学
レクリエーション研究室内
TEL 0726-32-7286
事務局担当 福田芳則

新入会員の紹介		
氏名	所属	推薦者
中野 由理	長崎ウエスタン短大	園田碩哉
川村 輝治	専修大北上保育専門学校	千葉 信
大島賢代子	精華女子短大	大谷善博
大崎由紀子	上田女子短大	高橋和敏
額谷 修二	東京文化短大	芳賀健治

次号学会ニュースは、7月中旬を予定してあります。

学会ニュース

NO.38
July 1987

発行人/高橋和敏 編集/広瀬洋子委員会
事務局 〒259-12 神奈川県厚木市北金11117
東海大学体育学部社会体育研究室内
電話0463-58-1211(内)3543,3541
郵便振替 帳號8-31789

日本レクリエーション学会

第17回学会大会 10月17日(土)

会場は、蔵王エコーホテル

開催要領決まる。

7月15日、開催された、第2回常任理事会で、第17回学会大会について、次のように開催要領が、決定した。

1. 趣旨 レジャーレクリエーションの発展をめざし、その関連領域での指導や研究に関心のある会員が、研究成果を発表したり、意見交換を行うとともに、講演を聴き、今後の分野での研究の方向やあり方を考える。
2. 主催 日本レクリエーション学会
3. 主催 第17回日本レクリエーション学会大会実行委員会
4. 期日と会場
昭和62年10月17日(土)
蔵王 エコーホテル
山形市蔵王温泉 TEL 0236-94-9533
5. 日程

8:30	9:00	12:00	13:30	15:00	16:00
受付	研究発表表	昼 食	総 会	研究発表表	記念講演 終了
6. 研究発表と特別講演
研究発表は、学会員に限られており、内容の審査を経て、発表が行われます。したがって、現7月の段階では、最終審査が終了していないため発表要領は公表できませんが、申込みでは、原論的なことから、具体的な指導まで多岐にわたっています。

特別講演は、全米レクリエーション協理事長でイリノイ大学教授の Dr. J. Bannon 氏を予定しています。

なお、学会大会の前日、10月16日(金) 15:00より、理事会が、また、18:00より、恒例の「懇親パーティー」が、エコーホテルにて開催されることになった。

山形大会を成功させるために。

★実行スタッフを導出することに決定
7月15日の第2回常任理事会で、山形大会を、成功させるために、実際に準備にあたる、実行スタッフを導出することに承認された。

人選にあたっては、実際に今大会に参加する会員で、事前の打ち合わせなどが可能な者とし、具体的には、総務担当理事を中心に、具体化する。

★大会に関する、インフォメーションの伝達方法について。

今後の大会に関するインフォメーションの伝達方法については、次のような方法を探ることとする。

学会ニュース№37 5月 研究発表申込みについて
同 上 №38 7月下旬 大会日程、特別講演申込み方法等
近畿ネットワークダイレクトメール
8月下旬 大会参加申込み、宿泊申込みなど
学会ニュース№39 9月下旬 研究発表の誘導など
同 上 №40 11月下旬 大会報告

Coming Events in 1988

1. 全米キャンプ協会会議
"American Camping Association Conference"
期 間: 1988年2月12日～20日
会 場: 米国テネシー州ナッシュビル、オーブライランドホテル
(Opryland Hotel, Nashville, Tennessee U.S.A.)
概 要: 全米キャンプ協会により毎年1回行われる全体会議。今回は開催地の特徴を生かしてカンントリーミュージックパーティなどの催物などが予定されている。
2. 第1回ウルラ(W.L.R.A.)世界大会
"First Congress of World Leisure and Recreation Association"
期 間: 1988年5月16日～22日
会 場: カナダ、アルバータ州 ジャートルレイク
クライズ (Chateau Lake Louise, Alberta, Canada)

概要:
「自由時間、文化、社会」Free Time, Culture and Society」を総合テーマに、世界各国からレジャーレクリエーション分野における研究者、実務家がそれぞれの国の文化を背景としたレジャー、レクリエーションに関する情報を提供し、その交換が行われる。

3. '88年世界万国博覧会 (World Expo'88)
期 間: 1988年4月30日～10月30日
会 場: オーストラリア、クイーンズ州ブリスベン (Brisbane, Queensland, Australia)

概要:
「技術時代のレジャー」Leisure in the Age of Technology」を総合テーマに、世界各国から新時代を予想するレジャーに関する数多くの出展が予想される。また、この期間には、オーストラリア建国200周年を記念する多くの催物が計画されている。

第41回全国レクリエーション大会 関係団体事務局長会議開催される。

6月9日 午後3時から、東京代々の松門工業クラブ特別会議室において、第41回全国レクリエーション大会関係団体による事務局長会議が開催され、西野総務担当理事が参加した。

参加者は、日本キャンプ協会、日本フォーカス連盟など、活動種目別の事務局長が中心であった。席上、山形県教育庁体育保健課の、鈴木寛亮補佐が、あいさつ、ついでに山形県の準備状況を説明した。学会関係では、会場が、蔵王エコーホテルに打診した旨報告があった。また、今大会では、近畿日本ネットワークに、宿泊関係の事務代行をお願いする旨の説明があった。

これらの件については、常任理事会で説明し、了承を得た。

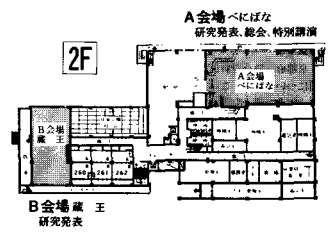
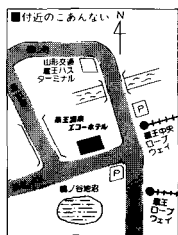
8. 13:30 竹内 正雄(産業医科大学)
「中・高年の社交ダンスに関する研究 — 参加者の意識とその運動強度について」
9. 13:50 手塚 麻美(獨協大学)
「生体スポーツとしてのディスク・スポーツに関する研究 (1) — 高齢者におけるディスク・ゴルフについて」

B会場 エコホテル「蔵王」

1. 9:30 藤田 育代(日本大学)、田中 謙雄、門脇 幸男、花沢 聖子、木村 多喜、武田 正司
「子どもの社会化過程と運動遊び」
2. 9:50 海津 雄子(女子聖学院短大)
「運動あそびの課題化」カリキュラム構成に関する研究」
3. 10:10 松浦 三代子(東京女子体育大学)
「幼児の運動あそびを規定する社会的背景」
4. 10:30 深山 千穂子(女子聖学院短大)
「保育内容としての「音楽・リズムあそび」の課題化」とその指導法」
5. 10:50 原田 崇雄(大阪体育大学)、世戸 俊夫
「スポーツ消費者のライフスタイルに関する研究」

※B会場は、11時10分に開場します。
11時20分以降の発表、総会、特別講演等はすべてA会場で行います。

会場のご案内



第5回 基本問題検討委員会報告

日時 昭和62年9月14日(月) 15:00~16:30
場所 柳余暇問題研究所会議室
出席者 浅田、川村、高橋、秋吉、今井、大島進士、高倉、西野、川向(敬称略)
検討議題 「役員選出」「学会大会」
◆役員選出について
規約委員会(理事會専門委員会)に委ねてあった権限の件について、委員長(秋吉氏)から、その検討状況の説明を受けた。引き続き規約委員会が検討を兼ね、来る10月16日開催予定の理事會に、その具体案提出を要請した。
◆学会大会について
その在り方について、自由討議の形で意見交換が行なわれた。

第3回 常任理事會報告

日時 昭和62年9月14日(月) 17:00~18:30
場所 柳余暇問題研究所会議室
出席者 江橋、浅田、川村、高橋、秋吉、今井進士、西野、川向(敬称略)
◆報告事項
1) 第17回学会大会の準備状況について、主に特別講演、および発表などの報告が、総務および編集担当から行なわれた。
2) 第17回学会大会準備のためのワーキング・グループを設け、その準備を円滑にすすめていることが、総務担当より報告があった。
◆審議事項
1) 京都府立総合資料館からの「レク研究」寄附依頼について……この件については、寄附ではなく、実費で購入してもらうよう要請することとなった。
2) 第18回学会大会開催期日および開催場所について……来年の全国レクリエーション大会は、両断で8月に開催されることとなっている。学会大会も同場所、同時期に行なうかどうかが審議され来年度(第18回大会)は、両断で8月に実施することとした。
3) 入会希望者の承認について……1名の申込み

があり承認された。以上

第17回学会大会 ワーキング・グループ

第2回常任理事會で、その設置が認められた第17回学会大会のワーキング・グループのメンバーに次の会員をお願いした。
芳賀健彦(研究発表担当) 藤岡文男(特別講演担当) 谷戸一雄(記録担当) 三宅基子(受付担当) 山崎律子(懇親会担当) 東原邦秋(会場担当) 川向妙子(会計、接待、会議担当) 西野仁(渉外、総務担当)
すでに、2回の会合を開き、準備をすすめている。

日本学術会議関係

日本学術会議推薦管理会より8月28日第14期の登録がなされたとの通知が届いた。
なお、関連研究連絡委員会は、体育学と、行動科学の2つの委員会である。

新入会員紹介

氏名	所属	推薦者
1 三井律子	柳余暇問題研究所	高橋和敏

おわびと訂正

会員の方から、学会ニュース№38に、誤植が二ヶ所あるとのハガキをいただきました。校正時の不注意です。申しわけありませんでした。次のように訂正してください。

誤	正
1982 → 1987	
1982 → 1987	

次回40号は、11月下旬に発行を予定しています。

学会ニュース

NO.40
December 1987

発行人/高橋和敏 編集/広瀬紗外委員会
事務局 〒259-12 神奈川県平塚市北倉目1117
東海大学体育学部社会体育研究室内
電話0463-58-1211(内)3543,3541
郵便振替 横浜8-31789

21世紀に向けて

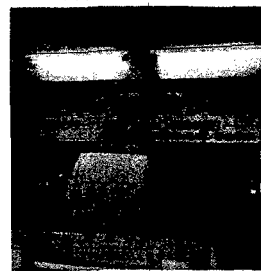
レクリエーション研究の重要性を再認識

—有意義だった第17回学会大会—

第17回日本レクリエーション学会大会は、スキーのメッカで知られる山形県蔵王で開かれました。この10月17日でした。会場は蔵王エコーホテルで、前日の学会懇親会に続いて、17名の参加者がありました。

今回の研究発表は、14題と数は少なめでしたが、それぞれの研究領域における特色があり、レクリエーション研究の発展に一石を投じた意義深い大会となりました。研究発表の詳細については「レクリエーション研究18号」をごらんください。
また午前の発表中には、立正佼成会、同教団下の二協会があり、熱心に発表をお聴きになりました。学会員に対して懇下自らの研究姿勢をお話しになり、あわせて、励ましの言葉がありました。

特別記念講演はDr. J. J. Bannonによる「レクリエーション研究の明日」と題しての発表がありました。未来学者の予測する社会的動向を思い合わせながら、レジャー・レクリエーション研究がいかに重要な役割を果さなければならないか、そしてそれにならざるを得ない研究者としてどう重要さを再認識させ、大きな感動を与えました。
こうして学会大会はこれからの期待を学会員ひとりひとり抱きながら午後4時に終了しました。



一回18回大会は、函館市で—

昭和62年度総会において、来年度(昭和63年)の学会大会が北海道函館市で開催されることが決定されました。期日は昭和63年8月20日~22日のいずれかになる予定です。例年より開催日が早くなります。今から研究発表、参加をご予定ください。

学会大会トピックス!!あれこれ……

・学会大会で恒例になった原日の懇親会は、約70名の学会員Dr. Bannonの参加を得て山崎律子氏の司会で和気あふの中に開かれました。互換係四郎長氏の挨拶につき、Dr. Bannonの紹介、浅田副会長の乾杯で会は始まりました。山形県特産の料理一あや、いも煮、山菜料理など一に舌づつみを行なうながらも楽しいひとときを通し青木潔之助会長の挨拶と、チヤコロールで会を閉じました。
今回の学会大会は、蔵王ということもあり、事務局でワーキング・グループを編成して、学会の運営に当たりました。学会員がこうして皆で力を合わせてできたことは素晴らしいことです。ワーキング・グループのメンバーの方々に心から感謝する次第です。



・今回の会報は蔵王温泉ということもあり蔵費温泉に入りながら紅葉しかかった山並を眺められたことは格別だったようす。これも学会大会へのよい参加記念といふべきでしょう。

・研究発表の会場には、ロビーで旧知を晤める学会員や、若手研究者が先輩にいろいろ質問したり、話を聞いたりしている光景がたくさん見られました。これも学会大会ならではのことと思われます。

第17回学会大会 報告事項

- 昭和61年度事業報告及び決算報告
 - 審査報告
 - 審議事項
 - 昭和62年度事業及び予算案について
 - 役員選出に関する内規について
 - 第18回学会大会開催について
 - 車庫移転について
 - その他
- ＜編 者＞
西野: 昭和61年度事業報告を資料にそって説明。
高倉: 何か質問は? (無し) 承認されたものとする。
新して決算報告を。
川向: 昭和61年度決算報告を資料にそって説明。議案が多くなった理由は研究誌、学会ニュースの遅れによる印刷代、発送費の未消化によるもの。
高倉: 何か質問は? 承認されたものとする。次に監査報告を。
前野: 以上、決算報告に相関ない。議案については有効に使ってほしい。

昭和62年度総会開催!

昭和62年度の総会が、10月17日、蔵王エコーホテルで開催された。
総会出席者は89名(委任状157名)であった。
昭和61年度の事業報告、決算報告が承認され、62年度の事業案、予算案が審議され、概算通り承認された。また、役員選出に関する内規、第18回学会大会開催、車庫移転についても説明があり了承された。
議事内容は、以下、要約の通りである。

昭和62年度総会議事録

期 日 昭和62年10月17日(土) 15:50~18:30
場 所 蔵王エコーホテル「べにはは」
出席者 89名 委任状 157
議 長 高倉正治

高倉：新年度事業案及び予算案についてお願いしたい。

西野：昭和62年度事業案を資料にそって説明。
川向：昭和62年度予算案を資料にそって説明。
高倉：昭和62年度事業案及び予算案について質問は？
Q：62年度はシンポジウムの開催はないのか？
西野：62年度研究定例会の中に入れてある。
高倉：他に質問は？ 62年度予算案は承認されたものとする。残いて役員選出内規について。
秋吉：役員選出の内規案が資料にそって説明。
高倉：何か質問は？
Q：理事数が15名程度とあるが、20名ではどうなるのか？
秋吉：20名以内とらえてほしい。
高倉：他に質問は？ なければ承認されたものとする。
西野：第18回学大会は、函館市で63年8月20日出席～22日休みの間に開催したい。
高倉：承認されるか？ 承認されたものとする。次に事務局移転について。
西野：学會事務局移転に関する経過を説明する。現在、事務局を置く大学を探している。また日本レクリエーション協会が63年4月にレクリエーション研究所を設立予定。その中に学會事務局の移転を検討する話があり検討中。
高倉：他に何か質問は？ なければ、以上で本年度総会を閉会する。

- W.L.R.A コー・ウエストランド氏
- 講演会の開催 6月21日 上野大学
長崎オランダ館のコンセプトとその企画から運営サービスまで
輪石静雄（スタジアム代表取締役 福井雅之氏）
 - シンポジウムの開催 11月20日
東京都社会福祉総合センター
公園とレクリエーション・サーモの方法と未来統一
コーディネーター 通士五十八氏
 - 研究例会の開催
12月20日 西武遊園地
2月21日 卒論発表会 東京農業大学
第15号 10月（1985年度予定のもの）
第16号 10月
4）会報「学会ニュース」の発行
№34 5月
№35 9月
№36 3月（1987年）
7）文庫目録ひけの作業
8）「レクリエーション学の方法」の発行
ぎょうせいより
 - 組織の拡充
正会員 576名（前年比+16）
特別会員 13（+2）
学生会員 23（-1）
幹事会員 6（0）
賛助会員 6（+1）
 - 設備
スポーツ科学情報システムに関する国際シンポジウム 10月 慶應体育大学
第9回レクリエーション指導者 1月（1987）
日本レクリエーション協会

昭和61年度事業報告

- 事業
 - 第15回学大会開催
10月24日函館市、パレフィックホテル沖繩
研究発表 25編
参加者 125名
特別発表 沖繩の生活とレクリエーション
琉球大学教授 金城光子氏
特別講演 北米におけるレジャー・レクリエーション研究の動向

- 会 員
 - 新1回 6月21日 上野大学
新2回 10月24日 パレフィックホテル沖繩
 - 理事会開催
新1回 6月21日 上野大学
新2回 10月24日 パレフィックホテル沖繩
 - 常任理事会
4月25日、5月22日、9月18日、12月5日
 - 基本問題検討委員会
第1回 2月16日 余賀朝陽研究所
 - 各種委員会の開催

*印刷費・研究誌17号-19号、学会ニュース6回分、
会員名簿、学大会案内、学大会案内、封筒、他

昭和62年度予算

(収入の部)		
項目	予算額	内容
総 額	1,340,109	昭和61年度分
入 会 費	50,000	1,000円×50名
年 度 会 員	3,250,000	5,000円×650名
大 会 参 加 費	150,000	1,500円×100名
雑 収 入	209,891	広告、研究誌販売費、他
計	5,000,000	

(支出の部)		
項目	予算額	内容
事務費	30,000	事務用品、他
会 費	200,000	会議室代、茶果費、他
通 信 費	600,000	研究誌、学会ニュース 名簿、他
印 刷 費	2,500,000	レク研究、学会ニュース、封筒 入会案内、ワープロ名簿、他
研 究 会 費	200,000	会場費、外賓講師謝礼、 送迎費、他
大 会 費	200,000	会場費、大会運営費、他
総 会 費	30,000	会場費、コピー代、他
事務局運営費	290,000	アルバイト費、 書類整理費、他
理事会内 事務局会議費	500,000	コピー代、送迎費、 アルバイト費
予 算 費	450,000	一部を支部に還元する。
計	5,000,000	

役員選出に関する内規

- 会則第12条の規定により、役員選出は、会則に定められているほか、この内規に基づいて行うものとする。
- 会長は原則として、副会長経験者であること。
- 顧問は、原則として会長経験者をもってあり、終身とする。
- 理事は選出方法により、支部選出理事、改選前理事選出理事、会長選出理事の3つに分け、理事数は15名程度とする。
支部選出理事は各支部最少1名とし、支部の会員数に比例して、理事数を決める。当分の間、東海、近畿、九州の各支部は、それぞれ1名、関東地区3名、関東地区以外の支部未所属者1名とする。
改選前理事選出理事は、専門領域、地域、研究機関、団体及び事務運営等を考慮して選出する。理事数は4名。
会長選出は、会長就任後、副会長と協議のうえ選出する。理事数は3名。
- 会長、副会長及び監事候補は、理事会において選出する。
- 理事長及び常任理事は、改選後初選理事で選出する。
- 役員兼任は認めない。
- 役員選出は総会承認事項であるため、役員選出の議事は、学大会前の適当な時期に開催する。付則 この内規は昭和63年度役員選出のみに適用する。

日本レクリエーション学会 昭和61年度決算報告

(昭和61年4月1日～昭和62年3月)

収 入			
	予算額	現収入	残
総 額	167,949	167,949	
入 会 金	50,000	55,000	(+) 5,000
年 度 会 費	3,271,000	2,746,000	(-) 525,000
大 会 参 加 費	150,000	170,000	(+) 20,000
雑 収 入	361,051	86,270	(-) 274,781
計	4,000,000	3,225,219	774,781

(支 出)			
	予算額	理支出	残
事務費	30,000	6,030	(+) 23,970
会 費	50,000	44,150	(+) 5,850
通 信 費	600,000	347,940	(+) 252,060
印 刷 費	2,200,000	1,171,830	(+) 1,028,170
研 究 費	100,000	0	(+) 100,000
大 会 費	150,000	150,530	(-) 530
総 会 費	35,000	20,000	(+) 15,000
事務局	150,000	144,630	(+) 5,370
計	4,000,000	1,885,110	

全 収 入 3,225,219 -
全 支 出 1,885,110 -
昭和62年度繰越金 1,340,109 -

昭和62年度第1回 理事会開催

昭和62年度総会に先立ち、第1回理事会が学大会前日の10月16日に蔵王エコーホテルで開催された。議事内容は、下記の通りである。

日 時 昭和62年10月16日(日) 15:00～17:30
場 所 蔵王エコーホテル 262号室 (山形県)
出席者 江藤、田中、青木、前野、高橋、秋吉、
藤田、池田、今井、津原、川口、川向、
木下、鈴木、田中誠、寺島、永吉、西野、
松浦、守影（数務務）

◇報告事項

- 昭和61年度事業報告が資料（総会報告を参照）をもって行われた承認された。（総務）
- 昭和61年度決算及び監査報告が行われた承認された。（総務）
- レク研究17号の発行状況は最終段階に入っている。また、19号に関しては来年3月頃には発行できる予定との報告があった。（編集）
- 学会ニュースが遅れた事、また今後のニュース内容に各支部の記事を掲載したいとの情報を送ってほしいとの報告があった。（広報）

◇審議事項

- 昭和62年度事業案及び予算案が資料（総会報告を参照）をもって説明された承認された。その結果、原案をそのまま規定事項としては学会の方向性を検討の課題点とされるため、今後1年間の検討期間とし、本原案は、規定を内規とし、昭和63年度役員選出においてのみ適用することが了承された。
- 第18回学大会について次のように審議された。開催地は北海道函館市とし、開催期日は8月中旬とすることが了承された。昭和64年度以降の開催地については検討の余地があることが了解された。
- 事務局移転についての現在の状況が説明された。議事については、常任理事会にて協議審議することが了解された。
- 入会希望者の承認 一以上一

収入の部 内訳
入 会 金 55人分
年 度 会 費 379人分
大会参加費 当日会員 21人×1500=31,500
一般会員 4人×2500=8,000
正 会 員 87人×1500=130,500
雑 収 入 研究誌 24冊、広告費

支出の部 内訳
事務費 ノート、領収書、事務用品
会 費 理事会、常任理事会他会議室使用料
通 信 費 学会ニュース3回、研究誌、理事会
案内及び報告、ハガキ、切手、学大会案内、他
印 刷 費 学会ニュース3回、レク研究15、16号
学大会案内、原稿、封筒、他
研 究 費
大 会 費 講師謝礼、会場費、昼食代、文具、
コピー、他
総 会 費 シンポジウム講演料
事務局運営費 アルバイト代、コピー代、他

昭和62年度事業案

- 事業
 - 第17回学大会開催
10月17日出席 山形市
 - 研究例会
年4回程度
 - 機関誌「レクリエーション研究」の発行
第17号、第18号、第19号
 - 会報「学会ニュース」の発行
№37～41
 - 文庫目録の発行
 - 会員名簿の発行
 - 学大会内の作業
 - 組織の拡充と整備
会員の獲得
財政基盤の整備
学大会運営のための諸規定等の整備
事務局体制の整備
- 会 員
 - 総会開催
第一回 10月17日出席 蔵王
 - 理事会開催
 - 常任理事会開催
 - 各種委員会開催

新入会員紹介

10月16日に開かれた理事会で、次の5名の方が入会を認められました。今後の活躍を期待します。
氏 名 所属名 推薦者

- | | | |
|---------|-----------|-------|
| 1 犬嶋 義秀 | 岡山県立短期大学 | 高橋 和雄 |
| 2 見戸 長治 | 岡山県立短期大学 | 高橋 和雄 |
| 3 金子 守男 | 中央大学大学院 | 園支 敏彦 |
| 4 吉田 正 | 名古屋YMCA学院 | 大内 敬造 |
| 5 佐野 公雄 | 日本大学 | 岡崎 信博 |

《事務局からのお知らせ》

◎連絡先を変更された会員の方は、事務局まで連絡を
現在、事務局では、来年度の会員名簿の発行に向けて会員各位の住所、勤務先、電話番号等の整理を進めています。正確な名簿を作成する為、今年度に登録していた連絡先に、何らかの変更がある会員の方は、至急、事務局まで御連絡下さい。

◎年次会費お支払いのお願い
62年度年次会費は、一部の会員の方のみ、納入して頂いています。

62年度年次会費を未納の方は、学会ニュース№40と同封しました振り込み用紙に、住所・氏名を記入して、学会事務局までお送り下さい。
年次会費は、正会員 ¥5,000
学生会員 ¥1,500
賛助会員 ¥2,000
です。

尚、年次会費を滞納されている会員の方は、62年度までの年次会費を、お支払い下さるよう御協力をお願いします。

体育・スポーツ・レクリエーション
企画・講習・指導

さわやかスポーツライフ
Y.T.C

横浜体育クラス

〒245 横浜市東区泉町2104-3 ☎045-804-7075代
F A X 045-804-7076

ヘルスプランナー

内容

- 幼児体育指導 ● 児童体育指導
- 水泳指導 ● 体力測定
- 企業の体力作り ● トレーニングジム
- エアロビクス ● フィットネス
- 各種イベントの企画、運営
- レクリエーションリーダーの育成

(株)ワイルドスポーツクラブ

〒160 新宿区信濃町10 甲山ビル2F
TEL 03 (357) 8505

スポーツをみんなのものに

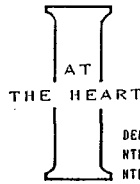


◆取扱品目◆

- スポーツウェア
- スポーツシューズ
- 球技用品
- スポーツ施設工事
- スポーツ用品全般

株式会社 サス・スポーツプロダクト

■本社 〒101 東京都千代田区神田西船場7-17 ☎03(233) 371100
■支店 東京都 北区 池袋 4-42-8 ☎03(425) 34336
■国立競技場前・丘店 ● 国立競技場前・丘店
■国立競技場代々木店 ● (財)スポーツ会館前



余暇サービス・健康づくりプログラムの開発と実践
余暇生活・健康づくりへのコンサルテーション
余暇開発問題に関する依託研究
上記に関する出版物の作成、販売



株式会社 余暇問題研究所
JAPANESE INSTITUTE OF LEISURE SCIENCE AND EDUCATION CO., LTD.

〒150 東京都渋谷区恵比寿南1-13-5 エビスハイタワー101
PHONE 03-715-0932

学会ニュース

NO. 41

February 1988

発行人・高橋和敏 編集 広瀬洋外委員会

〒209-12 神奈川県横浜市北多目1117
東海大学体育学部社会体育研究室
電話045-83-5812(内)3543, 3541
郵便番号 横浜8-31789

日本レクリエーション学会

第18回学会大会は8月22日(月)函館で

第18回学会大会は、8月22日(月)函館市で開催されます。青函トンネルの開通により、観光客の増加が見込まれますので、事務局では、6月にオープンする、ハーバービューホテルの部屋を確保しました。学会大会の内容は、例年のような研究発表に加え、

できるだけ多くの会員に研究成果を発表いただけるよう「報告」発表を予定しています。

詳しくは、次頁の発表のためのご案内を、熟読ください。

訃報

山崎 進先生の逝去を悼む

本学会の名誉会員、山崎進先生は昭和62年2月17日、心不全のため東邦大学付属病院に入院、急逝されました。享年78歳。

先主と日本レクリエーション(以下R&Eと略記)学会とのかわりは、昭和39年、R&E研究懇話会発足からですが、これがまた不肖私との最初の出逢いでもありました。46年、学会設立と同時に先生は副会長として、以後、顧問、名誉会員等として学会発表のために尽されました。亡くなる2年前の60春秋には、連綿とレクリエーションのスピーカーとして最大にお話し願った先生特有の格調高いご意見を拝聴することができました。先生は、学会設立の当初から「対象限定の至極なR&E」という用語は避けてレジャーという用語にしては」との意見をお持ちでした。思うに、37年、先生を中心におられる若手の同人から毎月定期的に精力的なセミナーを行い、その結果を世に開くこと(山崎進編『レジャー時代』東洋経済新報社)がありましたが、この書はレジャーにこそ人間エネルギーの創出と陶冶が存在していることを人間の具体的な生活行動とのかわりでも説いたものでした。当時、本書は簡易に比し、ある意味で発見の書でもありましたが、今この内容に触れてみまし

ても先生がいかに感通した先見性をお持ちであったかを伺い知ることができます。

先生は亡くなる当日も「情報社会と資本主義の変遷」の執筆中であつたと。

わけでも、先生の多くの著書のうち、晩年、公にされた『情報社会と生活経済学』(高井書店、60年刊)は経済学と娯楽学を新しいパラダイムのもとに統一されようとした開眼点の動いた著作であつたと聞き及んでいます。

ここに山崎先生が当学会に寄られたご遺言を深謝するとともに、心からご冥福をお祈りする次第であります。なお、福岡一区選出の衆議院議員・山崎祐氏(前内閣官房長官、現総務局長・広報委員長)は先生のご子息ですが、先生は、この祐氏を文武両道の人間に育てようとして中学生の頃から町の柔道場に通わせられたと聞いております。これをみても生前の先生の面目躍如たるものを感じることが出来ます。(成田隆夫記)



日本レク協会に レジャー・レクリエーション研究所開設

日本レクリエーション協会は創立40周年の記念事業として「研究所」づくりの準備を進めてきたが、9ヵ月に行われた準備委員会の活動を経て、いよいよ63年4月に開所の運びとなった。新しい研究所の名称は「日本レクリエーション協会レジャー・レクリエーション研究所」と決定した。これは協会の付属機関として設けられ、広く国民のレジャー・レクリエーション問題に関わる調査研究を進めることを土台としながら、レクリエーション運動の推進や指導者の養成と組織化などの実践的な課題にも取り組むことが予定されている。

研究所の場所は東京都渋谷区千駄ヶ谷で、J R千駄ヶ谷駅から徒歩2分ほどの大京第一ビルの2階。スペースは45坪ほどあり、研究室、企画室、相談室等のほかサロン兼用の会議室を備えている。ここに日本レク協会所蔵の各種の資料を、当研究所の研究員数名において研究調査やニュースレター、所報の発行、情報サービスやコンサルティング等の事業を展開する。所報には、日本レク協理事で東大

名誉教授の辻橋信四郎氏(学会現会長)の就任が予定されている。

学会としても「レクリエーション」の名を冠した初の研究所誕生であり、レク研究の発展のために、有機的な協力関係を作り出したいところである。3月の常任理事会では、東海大学にある学会事務局を同研究所に移すことが協議され、できるだけ速やかに移転をはかることが決定されている。事務の面をはじめに研究面でも、研究所を介しての協会と学会とのよりよい協力のあり方を追究したいものである。



新入会員

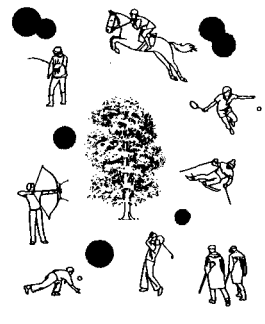
1988年1月14日及び2月18日の常任理事会で、次の2名の方が入会を認められました。今後のご活躍を期待します。

氏名	所属	推薦者
尹 光敏	東海大学大学院	高橋 和敏
大平 滋	浜松短期大学	蓮田 碩哉

退会希望者

1988年1月14日及び2月18日の常任理事会で承認され、退会される方は、次の6名です。

氏名	所属
上島 彰	地方公務員
伊藤 敏哉	ダイヤモンド設備技術
余野 豊	筑波大学
薄野 政昭	労働組合本部書記長
宮下 弘子	



第18回大会の発表・投稿申し込みは3月末日まで

第18回学会大会発表のご案内



実践報告・活動報告などの発表も
これまでの学会発表の形式に追加される。

日本レクリエーション学会
研究委員会 / 編集委員会

本学会では、昭和60年度より研究発表の質的向上を図るべく、これまで発表主旨のみであったものをレジャーつきのフル・ペーパー論文（学術論文）に改正した。

しかしながら、レクリエーション学の特徴からみて、論理的構成（論文形式）に馴染みにくい、学会の場で発表に値する貴重な実践報告や活動記録も数多く存在することも事実であり、会員サービスの面からも発表の機会を増やすべきものと考え、その方策を検討してきた。

そこで、昭和63年度大会より、1. 研究論文Ⅱ、報告、の2部門を大会号「研究発表論文集」に設け、発表していただくことにした。

これにより、研究論文は従来通り当学会指定原稿用紙4〜6枚の「発表論文」で、報告は当学会指定原稿用紙1〜2枚の「発表要旨」で投稿していただくことにした。

今年の学会大会は、いつもより早く開催されますので、「大会発表論文集」の発行を、図のような手順で進めます。

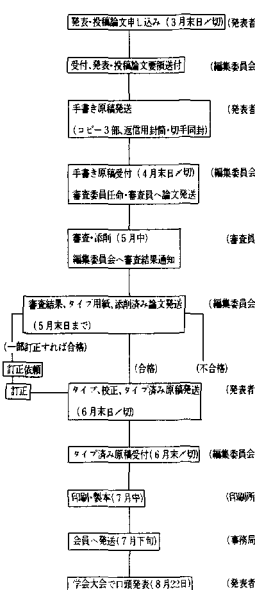
発表・投稿申し込みの締切りは、3月末日です。同封の発表申し込み用紙で編集委員会にお申込みください。

送り先および連絡先は、次の通りです。

〒150 東京都渋谷区北参道1-13-5-101
余暇問題研究所 谷川一穂 理事兼気分
日本レクリエーション学会編集委員会
電 03-715-0932



「レクリエーション研究・大会発表論文集」発行の手順



レジャー・レクリエーションに関する学生の卒論発表開催要項

学会編

『レクリエーション学の方法』の書評です。

日時 昭和63年3月19日(午後2時より)
場所 上野大学3号館 348教室 (西谷駅より徒歩3分)
発表資格 昭和63年3月に専門学校・短大・大学・大学院を卒業見込みの者(非学会員でも発表可)
発表形式 口頭発表 1題15分(質問3分を含む) スライド、OHP使用可
参加費 無料(懇親会のみ有料)
申込方法 各製ハガキに①氏名、②所属(学校名)、③論文タイトル、④指導教員名、⑤連絡先(住所、電話番号)を明記し3月5日(日)までお申し込み下さい。
申込先 〒156 世田谷区桜丘1-1-1 東京農業大学 遊園学科 鈴木忠義(研究委員長) 連絡・問合せ 電03-420-2131 内線506 麻生(担当幹事)まで ※なお発表終了後、簡単な懇親会を行います。

総務部の「国民生活に関する調査」によれば、これからの生活のどのような面を力を入れたいかという問いに対して、昭和58年以来「レジャー・余暇生活」が1位を占めている。

また、経済面でも余暇施設やリゾートの整備が重要な課題とされ、マスコミにも様々な話題が展開するようになっている。特に、リゾートの整備に関しては、国土庁などが6省庁により「総合保養地整備法」(いわゆるリゾート法)が制定され、それを契機に様々な構想・計画が発表され、ブームと呼んでもよいような状況が呈している。

このように、レクリエーション学が急速に高まる中で刊行された本書「レクリエーション学の方法」は、日本レクリエーション学会が「レクリエーション」の体系化を目指し続けてきたこれまでの検討の成果を集大成したものである。研究領域が広く、関連分野が多岐にわたるレクリエーションの入門書として、レクリエーション学を専攻する学生や、プランニング等の実務に携わる方々の手引書として希望の書と見えよう。

本書では、研究領域を、歴史と理論、意識と行動、活動とプログラム、サービスと運営管理、設備と空間、政策と運送の6領域に区分し、それぞれの領域ごとに、研究の視点、研究対象のとりえ、調査、研究の方法等について、具体例を記して紹介している。

レクリエーション学の学習・研究・実践への基本図書として編集した本書「まえばが」にあるが、領域ごとの研究の現状、今後の研究課題が表裏よくまとめられており、研究事例目録や参考文献リストとともに、レクリエーション学に関する情報源としても活用できようである。

5月7日(日)総会開催

63年度総会は、5月7日(日)00時に開催される予定です。また、当日、総会前に理事会も開催する予定です。

第4回常任理事会報告

日時 1988年1月14日 18:00~
場所 余暇問題研究所 会議室
出席者 江崎、藤田、高橋、今井、川向、鈴木、藤田、西野、宮下(敬称略)

- 報告事項
- 1: 各会員にデータベースの住所の確認してもらい、今年度内に住所簿を作成したい。
 - 2: 事務局の運営費の中から、各支部へ援助金を配布したい旨報告された。
 - 3: レク研究21号は大会号とし、3月末にテーマの申告してもらう予定との報告があった。
 - 4: 出版より、基礎資料として会員の素性を調査したい旨、報告された。

- 審議事項
- 1: 学術会議第14期会員の候補者と推薦人の選定について審議され、候補者に江崎会長、推薦人に高橋理事長が選ばれた。
 - 2: 会計より報告された各支部への援助金について審議され、援助していくことは、検討の余地があり、次回の常任理事会で検討することが了解された。
 - 3: レジャー・レクリエーションに関する専門学校短大・大学・大学院卒論発表会の開催について、広報より提案され、3月19日14時より、上野大学で開催することが了解された。
 - 4: 入退会希望者の承認

一以 上ー

第5回常任理事会報告

日時 1988年2月18日 18:00~
場所 余暇問題研究所 会議室
出席者 成田、川村、高橋、今井、進士、鈴木、藤田、宮下、西野(敬称略)

- 報告事項
- 1: 学会ニュースを、3月に発表する予定である。
 - 2: レク研究20号の原稿が、まだ揃っていない。
- 審議事項
- 1: 入退会の承認
 - 2: 各支部への援助金の金額について、会計より

年度会費(5000円)の内30%(1500円)に、各支部に所属する会員数をかけた金額とする案が提出され、了解された。

3: 事務局移転について
学会事務局の移転について、事務局より東海大学では継続不可能な状況が説明され、移転してはいけなかった。東京近郊の大学、レジャー・レクリエーション研究所などが、移転先として検討され、レジャー・レクリエーション研究所に移転することが、了解された。

4: 第18回学会大会について、次のことが審議された。宿泊先は、ハーパービューホテルとすること。発表については、申込は3月末日とする。さらに、発表論文の審査について、厳しすぎるとの声もあり、論文規定を検討する余地のあることが了解された。

5: 役員選出の経緯と日程について、昨年歳正で開催された総会において了承された役員選出に関する内規(総会資料)に基づいて行われることが了解された。そして、63年度理事会を5月7日11:00より、総会を同日13:00~開催されることが了解された。

事務局からのお知らせ

1. 昭和62年度会員名簿の作成について
現在、事務局ではデータベースの住所簿に基づいて会員名簿を作成する作業を進めています。そして各会員へ連絡先の変更をお願いしたところ、多数の会員より御連絡頂きました。ありがとうございます。
事務局としては、今後連絡先の変更があった場合は、御連絡頂くことを願っておりますが、62年度会員名簿については、63年2月までに御連絡頂いた住所で名簿を作成していく予定であります。
今後、連絡先に変更がある会員の方は御迷惑をおかけしますが、御承知下さい。
2. レク研究に論文を投稿しよう
レクリエーション学会として発行している論文集レクリエーション研究に論文の投稿がなく、研究誌の発行が遅れています。
各会員の方々が、日頃研究している成果を学会大会だけではなく、研究誌にも投稿して下さいことを希望しています。

学会ニュース

NO.42
July 1988

日本レクリエーション学会

Japanese Society of Leisure and Recreation Studies

発行人/田中鎮雄 編集/広報委員会
〒168 東京都杉並区永福1-9-1
明治大学和泉校舎内
電話 03-322-3151 (内)240,241

第18回学会大会

(8月22日(月))に積極的な参加を!

会場は、函館ハーバービューホテル

(詳しくは学会大会案内(4・5ページ)参照)

昭和63年度第1回総会

(昭和63年5月7日(出))にて新役員承認される
於: 東海大学校友会館

就任に当って

会長 浅田 隆夫 (目白学園)

このたび(5月)は、はからずも会長をお引受けすることになりました。微力ながら24年の伝統ある本学会の発展のために全員の手を携え努力したいと念じている次第です。

思うに、本学会のこれからの発展方向は、4半世紀に及ぶ学会の研究活動を回顧、反省し、その上に立てて方向づけをしなければならぬし、方向づけをするに当たっては、中長期的問題と短期的問題に分けて考えてみる必要があるが、いずれにせよ、3-5年の目標を立ててその中で当該年度の重点目標を決めてworkしていく。そして、1年後の成果と動向を精査して次年度に向かうといった plan-do-check の機能を作業過程の中でいかに発揮していくことが必要であろう。

しよ。研究発表の質的質的改善をわがけてやみません。

第2点は、研究発表と情報交換に関する国際化の推進であります。学会員の中には国際的に活躍されている優秀な学者が多数おられます。これらの方々を中心に海外の学会通信、研究情報などを告知いただくような方法を検討し実現していただきたいと考えています。「レクリエーション研究」の英文採録をページ増にして、研究誌の国際性を高めることも重要かと考えます。会員の皆様からの積極的な提言を期待しております。

第3点は、レクリエーション学の体系化を推進することです。今回の学会でシンポジウムを企画した意図もそこにあります。シンポジウムを発展的に企画しながら、学会内外の英知を結集して行きたいと思っております。レクリエーション学の体系化が実現していくならば、会員による従来の研究業績は「学」の体系のいずれかに定位され、一層の研究意欲が喚起されるようになることは疑いありません。陳し道でしようが、レクリエーション学会の存在証明ができる唯一の道ではないかと考えています。会員諸君からの積極的な提案を期待しております。

以上、本学会の発展を願って私の一途を述べさせていただきました。理事長就任のご挨拶にかえたいと存じます。

第1回常任理事会

6月25日(出)に開催された第1回常任理事会において、第18回日本レクリエーション学会大会について本学会ニュース4・5ページの要領の通り、決定いたしました。

▶ 事務局移転 ◀

本年度の学会は2ヶ月早い8月の開催ということとあって役員の変更、事務局の移転(東海大学より明治大学へ)があり現在、学会の事務活動の円滑化へ向け努力中です。

新事務局:

〒168 東京都杉並区永福1-9-1
明治大学和泉校舎内
TEL. 03-322-3151 内240・241

講される。

因みに、factの原義は、「人為的虚構」を指しており、抽象的虚構ですらある場合もあり、具体化されている場合すらありうるのである。したがって、rec.研究者には、特に事実と虚構を区別し、事実について議論になる態度が必要になる。また、このことは集団や共同体の知というよりも、時代性・地域性を越えることが難しいこととも関係がある。

さらには、一般に今日の科学はすべて、技術のみならず社会や経済・政治にもとつての linkage として抜き難く連がってきているので、これらの連がりが根付くと人類の破壊までいってしまふことになる。したがって、研究者たる者は知に隣ることなく、知に対する畏敬の念を如忠実に高める姿勢がなくてはならないと思ふ。

今日、学会(科学)はいずれも、21世紀の展望をそれぞれの立場で開こうと努力しているといえるし、本学会(rec.学)もまた同じである。しかし、本学会の現状からすれば、何よりも切望されることの一つは、各案ともに独自の学会としての自律性を確立することにあるように思われる。

例えば、本学会を一本の樹木に譬えれば、この樹木は4半世紀もたてば立派な木に成長(one generation)する筈である。日本rec.学会というひとつの樹木が立派に成長するには、大地にしっかりと自ら

の根を張らない限り、幹や枝葉とまた実果も期待し得ないであろう。

最近の本学会の研究状況は、質、量ともに決して高まっているとはいえない。むしろ、低調であるとの声を聞く。

このためには、いくつかの課題を設定して継続的にみ込んで取り組むことが、また、わたしが理事長時代に試みたテーマ別連続シンポジウム(月例会)の成果を踏まえ、これを「rec.学の方法」として結実させていったような、学会あげての共同作業を試みていくとか、また、このような過程で会員相互の意志疎通や研究能力、意欲をもっとも高めていくようなことができれば……などのことが、今後とも必要のように思われる。

これも、会員の皆さんの協力があってこそ可能なことだから、ともに手をとり合って学会発展のために能力を尽きたいと考えている。

(注1) 本学会の学名の標本は、「山」 創設の契機・理想と学会への動き、(注) 研究会・学会の研究活動、(注) 今後の展望などとして、「体育の科学」38巻・3号(昭和63年3月)で著した。

(注2) 当初の企画は、本学会の研究内容を中心に、国内のrec.関連の著作のdocumentationを試み、これに基づき、rec.の研究方法を確立しようとしたのであった。

理事長職をお受けして

理事長 田中 鎮雄 (日本大学)

因らずもこのたび理事長の重責を担うことになりました。幸いことに多数の有力な理事が御出立しておりますので、事務分掌を明確にし各委員会の活性化をはかりながら協調体制を強化し、学会の一層の発展に向けて微力を尽したいと存じております。

さて、本年度はご存知のように役員改選と学会事務局の移転とが重なりました。事務局移転については、明治大学の特別のご配慮をいただき学会事務局としてお世話願うことになりました。理事長として厚く御礼申し上げます。学会事務の引継ぎが終了すると、例年より2か月早く早午学会が開始か迫って来ており、学会討議業務が目白押しでした。発議深掘り10題と銘でたいという特殊事情を遂に生かし、理事長で検討を重ねた結果、8月の函館学会には

多数の会員が参加され、熱く研究発表と討論が行われますよう心から期待しております。

学会大会終了後には、理事長で審議を重ねた学会発展に向けて可能な措置を講じていく所存です。改善策検討に当たっては、即き台が必要でしょう。この機会に理事長として私見の一端を述べ、ご批判を仰ぎたいと存じます。

第一点は、学会発表演題数の減少傾向に対する施策であります。この数年の傾向は特に悪化にたまません。原因の所在と解決策については大会後の理事会で議論されると思いますが、大会開催の時期、場所、発表までの手続などに問題があるからかもしれません。手続改善などで演題数が増加し、研究誌への投稿不届傾向も解消できると考えている会員もおります。当面の目標は30題発表の実現にあるといえます。

第18回学会大会開催要項

- 主催 日本レクリエーション学会
- 主管 第18回日本レクリエーション学会大会実行委員会
- 日時 昭和63年8月22日(月)
9:00~16:00
- 場所 函館ハーバービューホテル
〒040 函館市若松町14番10号
TEL (0138) 23-0154
- 日程

8月21日(日)	18:00	懇親会 (函館ハーバービューホテル)
		20:00 (オプション夜景ツアー有)
8月22日(月)	8:30	受付
	9:00	研究発表
		12:20 理事会
		13:30 総会
		14:00 シンポジウム
		16:00 終了

(学会大会当日の会場も全て函館ハーバービューホテルとなっています)

rec.のように、人間とかかわる研究は、今日のように国際化時代を迎え、ますます情報化、価値多様化の進む社会では、研究対象・方法も当然複雑多様になるので、ともすれば、われわれはこのような情報の洪水に押しつぶされて受動的になり、目新しい内容に心を奪われ易い。特に、現象の解析を積み重ねるような場合には、研究の連続性や方法が対象限定に立って決められたりもする。

たしかにrec.研究の難しさは、何といっても「rec.とは何か」といった対象限定が至難点にある。しかし、rec.研究は、研究対象となる現象が人間であるだけに、現象(fact)だけを解析しても果してその現象がrec.現象なのかどうか問題になるし、この解決のためには当事者への「問いかけ」が必要だし、研究者自身にも研究の前提としてこのことが要

例年の学会大会のように研究発表およびシンポジウムと共に懇親会(¥6,000)(風景ツアーオプション¥2,000実費)理事長、総会が予定されています。

新会長、新理事長、新事務局体制での学会大会ですが、会員皆様への積極的な参加を期待しております。尚、発表は10題となっております。

シンポジウムで意見交流を

第18回日本レクリエーション学会大会開催要項の

という内容でシンポジウムが行われます。日本人のレクリエーション行動がどうなっているのかを解析するために、現状を把握した上で論じ、外間から日本を見たいときにそのレジャー・レクリエーションがどうなっているか、そしてそれらの現状も含め今後どのような角度からのレクリエーション研究をすすめていかなければならないか……。

テーマはレクリエーション研究の今日的課題と題し、総会後午後2時より午後4時迄開催いたします。各委員の研究活動に対する積極的な意見交流を希望いたします。

広報委員会より

学会誌活動の広報はもとより、会員のニーズに沿った学会ニュースの発行をすすめていきたいと諸計画を立てておりますので、会員の方からの御意見や御希望を何なりと事務局にお寄せください。

学会派遣依頼

学会派遣依頼を必要とされます方は事務局へ御連絡ください。

6. 大会参加費

- 正会員.....1,500円
学生会員.....1,000円
賛助会員.....無 料
その他、一般の参加者.....2,000円

7. 参加申し込みについて

- 参加申し込みは、すでに送付済みの(第18回学会大会、航空便、宿泊ホテル、懇親会、エクスカーション等お申し込み御案内)によって申し込みをさせていただきます。
●当日会場での学会大会参加も受け付けます。

8. 「レクリエーション研究」学会大会号の送付について

- 大会前、会員全員に研究発表内容をもとめた学会大会号を送付する予定です。

研 究 発 表

- 9:00 ★子供の人間関係、生活技 大平 滋
能の形成と学校外教育に (浜松短期大学)
関する実証的研究(1)
★遊びをととの対人関 鈴 兼 信 子
係について (第一養育短期大学)
9:40 ★体力レベルと日常生活 海 原 修
達要因の関係とその研究 (横浜国立大学)
上の問題点について
★事務職員のレクリエーシ 伊 藤 順 子
ョン活動の疲労回復効果 (日本体育大学)
に関する研究
10:20 ★キャンプ期間についての 福 田 芳 則
基礎的研究 (大阪体育大学)
★リゾート開発の現状と課 堀 原 敏
題 (住環境計画研究所)
11:00 ★社会体育「専門職」の指導 原 田 宗 彦
者マーケットに関する研 究 (大阪体育大学)

★レクリエーション・スポ 島 健
ーツにおけるフライング、(上 智 大 学)
ディスクの普及と発展に
関する一考察(1)

11:40 ★ソビエトの社会人レクリ 里 見 悦 郎
エーション制度成立過程 (東 海 大 学)
に関する研究

★ノルマルマラソン日本比 山 田 文 男
較研究 (大谷女子大学)

シンポジウム

▶ テーマ ◀
レクリエーション研究の今日的課題
1. 日本人のレクリエーション行動の現状と解析
筑波大学 松 田 義 行

2. 比較文化的見地からみたレジャー・レクリエーション
北海道教育大学 村 山 紀 昭

3. これからのレクリエーション研究・政策の課題
総 合 司 会
関東学院大学 鈴 木 秀 雄

学会大会に御協力を...

学会大会実行委員会ではワーキングスタッフを募集いたしております。学会当日も含め御協力いただければ幸いです。事務局へ御一報ください。

新入会員のご紹介

- 黒田 健 寛 (明 治 大 学)
佐 藤 由 典 (阪 波 大 学 大 学 院)
福 満 博 隆 (都留文化大非常勤講師)
杉 内 伸 生 (東京V.M.C.A.専門学校)
久 川 太 郎 (滋 通 経 済 大)
小 島 哲 (国立新潟甲子少年自然の家)
遠 藤 浩 (阪 波 大 学)
葛 松 京 一 (神 田 外 語 大 学)

学会大会と共に総会への出席を

学会日程のお知らせの通り総会を学会当日13:30-14:00迄開催いたしますので、学会員の多くの皆様の出席をお願いいたします。

事務局より

◎永年におたり会長、理事長として学会の発展に御努力いただきました、江崎慎四郎先生、高橋和敏先生に心よりの感謝と御礼を申し上げます。また事務局を担当していただきました東海大学の緒生先生にも御礼申し上げますと共に今後も新事務局を御支援いただきますようお願いいたします。
◎学会大会の準備は着々と進行しております。函館市役所の渡辺係長、JTBの函館支店の作田課長の両名の現地準備における努力は、敬服するの一語につきます。さらに函館の会員がいるというハンディを克服するために、北海道教育大学函館分校の鈴木博教授のご協力を得ています。学生ボランティア数名を確保して頂くことを手始めに、種々、高配を賜っています。
8月の函館は、観光シーズンの真只中であり、昨今の函館ブーム、青函博のピークとも重なり、航空券・宿舎の確保は至難のワザであります。会員の皆様には、JTBのご案内にありました、航空券・宿舎をご利用下さるようお願い申し上げます。また、宿舎・学会大会場となります函館ハ

ーバービューホテルは、この6月12日にオープンしたばかりの、函館唯一の豪華ホテルです。さきにJTBからのご案内がありましたような料金設定になっておりますが、現地へお申し込みすれば、それがリーズナブルなものであることが、ご理解頂けるものと確信しております。

学会大会前日の、懇親会も、当ホテルのメインバンクエントホールにて、シェフの腕によりをかけた、北海道ならではの料理を提供して頂けることになっております。多数の会員の皆様のご参加を、お待ちしております。

(総務・寺島)

次号は10月下旬の予定です

学会総会において追認されました昭和63-64年度の新役員一覧をはじめ、研究会活動、事業等についてのニュースをお知らせいたしますのでこのNo.42のニュースでは学会大会のニュースを中心といたしました。

学会ニュース

NO. 43
Nov. 1988

日本レクリエーション学会

Japanese Society of Leisure and Recreation Studies

発行人/田中眞雄 編集/広報委員会
事務局 〒168 東京都杉並区永福1-9-1
明治大学和泉校舎内
電話 03-322-3151 (内)240,241

新 役 員 紹 介

日本レクリエーション学会役員
(任期1988年5月17日~1990年総会終了日)

- 名誉会長 三笠宮崇仁親王殿下
会長 長 渡 田 隆 夫(目白大学短期大学)
副会長 長 水 三(大原真英女子短期大学)
廣 山 彦 三郎(福 岡 大 学)
川 村 英 男
館 野 洋一郎(御スベスコンサルティング)
顧問 長 渡 慎四郎(中央大学)
監 事 秋 吉 篤 範(福岡教育大学)
長谷川 純 三(日本体育・学校保健センター)
理事長 田 中 眞 雄(日 本 大 学 大 学)
理事(兼任) 飯 田 隆(筑 波 大 学)
* 梅 田 進 子(女子聖学院短期大学)
* 黒 田 信 寛(明 治 大 学)
* 鈴 木 秀 雄(関東学院大学)
* 寺 島 善 一(明 治 大 学)
* 松 浦 三 代 子(東京女子体育大学)
* 吉 田 真(筑 波 大 学)
理 事 大 谷 善 隆(福 岡 大 学)
小田切 毅一(奈良女子大学)
花 沢 梨 子(日 本 大 学)
川 口 光 雄(名古屋経済大学)
水 塚 宏(ラック計画研究所)
岡 一 誠(早稲田大学)
黒 田 眞 雄(レジャー・レクリエーション研究所)
永 吉 宏 英(大阪体育大学)
田 中 眞 一(東 海 大 学)
松 本 真 高(新潟女子短期大学)
宮 下 佳 池(環 天 堂 大 学)
(五十音順)



長渡田隆夫会長



田中眞雄理事長

日本レクリエーション学会理事会内
専門委員会業務分掌
(1988年5月~1990年総会終了日)

- 総務 寺島、黒田、梅津、柘枝
研究 飯田、黒、鈴木、松浦、宮下、水吉、大谷、川口、小田切、松本
編集 吉田、鈴木、松浦、宮下、関
広報 鈴木、関、宮下、水吉、大谷、川口、寺島、柘枝
財務 黒田、黒田、西野、毛塚、松本、水吉、大谷、川口
出版 梅津、宮下、西野、飯田、毛塚
文庫 松浦、吉田、黒田、小田切
太字は、各専門委員会の責任者であり、常任理事会メンバーである。

第18回学会大会

函館において盛大に開催される

第18回日本レクリエーション学会大会実行委員会の主催により成功裡に大会が開催されました。8月21日(日)には懇親会が開かれ、函館市の御協力も得て、なごやかな会員相互の交流が行われました。8月22日(月)は予定通りの研究発表があり、学会理事會、総会の後、シンポジウムでは「レクリエーション研究の今日的課題」のテーマのもと2時間行われる討議をもって学会の全てのスケジュールを終了しました。
本年5月に事務局の移動があり、新役員の下での初めての学会大会でしたが、会員の皆様の御協力により無事開催することができました。また、今学会では同かと不都合な部分や、御迷惑をおかけいたしました。が、諸問題を解決し、次回学会大会では一層の発展が出来ますことを願っておりますので、学会員の皆様今後共の御協力をお願いいたします。

第19回学会大会

福岡開催決定までの経緯

理事長 田 中 眞 雄
本年度の学会大会の開催では、来年度の大会開催地等について結論を出せぬまま理事会がずれとなり。恐らく異例のことでしょう。われわれの学会大会は全国レクリエーション大会の協賛行事として同時開催を慣例としてきたからです。しかしそうすることが当然視されてきたわけでもありません。

函館大会の総会で負託を受けた理事会は10月8日と10月29日の2回にわたって開かれました。議論はかなりのまぶしく、曲折をみましたが、ここではその経緯を簡潔に御報告したいと思います。

10月8日の理事会では、本学会九州支部からの来年度学会大会開催の主旨説明に加えて、日本レクリエーション協会からも学会大会を全国レクリエーション研究大会との同時開催が望ましい旨の報告があり、論議を深めていきつつ「共催行事」として同時開催を要請しているわけでした。しかし主体的に学会開催を決定すべきであるという主張には変化はありませんでした。全国レクリエーション研究大会と学会大会の同時開催計画についてもメリット論とデメリット論は明白な対立をみせました。福岡開催案に一步ゆずるとしても、秋季実施案には現段階が拒否する構えをとる有様でした。

10月29日の理事会では最終的結論を引き出すべく開催されました。(1)わが国レクリエーション運動推進のために日本レクリエーション協会とは緊密な連携をとり、全国レクリエーション研究大会には応分の協力をすること。(2)学会大会は、しかし学会独自の立場で企画運営すべきであること。(3)ただし来年度の学会大会は、九州支部の協賛ある要員と周知の準備状況等を評価し、日程を調整したうえで福岡開催としました。

福岡開催決定が学会大会自立への経過措置であることをご理解いただき、会員各位の御賛意と日本レクリエーション学会の一層の活性化を祈念して報告いたします。

日本レクリエーション協会への学会開催等に関する回答
 日本レクリエーション協会 昭和63年 月 日
 会長 佐 藤 雄 哉 日本レクリエーション学会 会長 浅 田 隆 夫

第19回日本レクリエーション学会大会開催等について(ご回答)

秋の終、春の初めのお返しがあつきます。また、平素より学会発展のため格別のご高配を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、貴会より、発行第33号、第47号を通じて標記の件につき検討するよう要請され、本学会としては慎重審議を重ねて参りました。

上記、第33号における「貴会の全国大会の協賛行事として日レクリエーション学会大会を開催する件」につきましては、この数年間、本学会の検討課題でもありまして、今夏の第18回学会大会(函館)の重要課題となつていました。ところが、学会開催前に本学会の九州支部から日程(昭和64年8月25日～27日)を決定した上の依頼があり、手続き上の問題としても、また、研究発表者の行事予定から考えてもこの日程には当初から異議のあるところでした。

第47号では「全国レクリエーション研究大会の主催者に加わり」よう要請されていますが、本学会に加えられた場合、開催プログラムのどの内容にどんな形で加わっていくのか等より一層詳しく調べれば有難く思います。

実際には、これらの問題は、第1回全国レクリエーション研究大会も先方大行事を遂行する過程で解るべきを待たないと懸念いたします。貴会の立場も充分配慮いたし、昭和64年度、第1回全国レクリエーション研究大会に限り、下記の諸点を考慮されるなら、主催者として全面的に加わらせて頂きたいとお願い申し上げます。

記

- (1) シンポジウム・講演、研究協議、討論会などの内容、スピーカー・助言者等の選考に当たっては、本学会本部に連絡連絡を頂きたいと思つます。もちろん、本学会としては九州支部の意向を十分反映するよう留意した所存であります。
- (2) 本学会の第19回大会は、昭和64年8月27日、28日の両日とします。
- (3) 昭和65年度以降の日本レクリエーション学会大会の開催期日・会場等については、改めて審議・決定することにしたいたしと思つます。

以上、本学会の意向のあるところを記載いたし、本学会活動の発展のために、今後ともご高配賜りますようお願い申し上げます。

新入会員紹介

下記の方々が新入会員として承認されましたので、ご紹介いたします。

塚井 安 (東海大学短期大学)
 石田 朝子 ()
 中村 正雄 (工 学 体 育 大 学)
 吉藤 美余子 (日本体育大学)
 飯田 雅也 (東京体育専門学校)
 田中 利美 (廣水省森林総合研究所)
 小川 克博 (山形女子短大)
 山本 洋 (関西体育専門学校)
 熊井 万紀子 ()
 岡本 聡子 ()

理事学会報告

第2回 理事会

(日時) 昭和63年9月22日
 (場所) 新築パーヴェーニキル
 (出席者) 佐藤、青木、前野、田中、寺島、鈴木、黒田、松浦、梅津、黒田、田中、川口、齋、成沢、毛塚、西野、(武田、綿田、芳美)

議程

- (1) 会長挨拶
- (2) 新入会員承認の件(別編)
- (3) 新理事(追加)承認の件(別編)
- (4) 各委員会報告
- (5) 総務部-1989年5月7日承認された予算のうち、事務局を東海大学より引き継いだ時点ですでに予算額を超過している費目(総費金)がある中で、予算費から補充したいとの提案がありました。
- (6) 研究会の発表形式(フルペーパー)を受け入れるについて検討し、学会大会の発表の活性化を図りたいとの提案があった。
- (7) その他の委員会から報告があり承認された。
- (8) 支那奨励金について支那の要領もあり、今年度も従来どおり各支部10万円とすることが承認された。
- (9) 昭和64年度学会大会について九州支部より、昭和64年度の学会大会を第18回レクリエーション研究大会と前後して開催したいとの申し出があり、開催時期の段階、学会の主体性の問題など検討すべきことが多々あり、次回の理事会で引き続き検討することになった。

(7) 「レクリエーション研究」光栄について会員より送られた投稿をいただいたと田中理事長より発言があった。

第3回 理事会

(日時) 昭和63年10月8日
 (場所) 明治大学駒台校舎研究棟5会議室
 (出席者) 佐藤、前野、田中、寺島、鈴木、黒田、吉田、松浦、梅津、毛塚、黒田、松木、大谷、(武田、綿田、芳野)

議程

- (1) 昭和64年度学会大会について第18回レクリエーション研究大会と前後して学会大会を開催することについて種々論議されたが、第18回レクリエーション研究大会をそのものについても不明の点が多いので資料を取り寄せ検討することとし、学会大会の開催地については結論が出ず、次回の理事会で再議することにした。
- (2) 第4回 理事会(日時) 昭和63年10月29日(場所) 明治大学 研究棟第5会議室(出席者) 佐藤、前野、秋吉、田中、寺島、鈴木、黒田、梅津、松浦、黒田、大谷、宮下
- (3) 昭和64年度学会大会開催地などについて第18回レクリエーション研究大会の後、8月27～28日の日、福岡市にて開催することに決定した。尚、前回の大会以降については、第19回大会と第18回レクリエーション研究大会との関係・結果などを考慮に入れ、日本レクリエーション学会が主体性をもって独自に決定してゆくこととした。
- (4) 学会大会の発表形式について現在のフルペーパー形式をやめ、発表資料を受けつける方法に変更することについて、研究・編集委員会を設けることを承認した。
- (5) 学会員の金銭納入方法について従来の申し込み方式から、銀行の自動引落し方式にして如何かという提案がなされ、編集委員会では如何かという賛成がなされ、編集委員会では如何かという賛成がなされた。本年度の費目記入も進められ、次回の学会ニュースに再度添付用紙を封入し、さらに会員自身の納入状況についてもお知らせすることにした。
- (6) 学会ニュースの発行について鈴木編集委員会委員長より11月下旬に発行出来る。報告があった。
- (7) 日本レクリエーション学会の名称について日本名と英文名の要について話しが出て、今後検討することとした。

事務局より

以下、会員の消息についてのお問い合わせの納入方法について、学会大会の申し込み様式について、学会大会の開催地について、現在の名称(英文との関係)の件、「レクリエーション研究」への投稿、など諸連絡事項をお知らせしておりますので、会員の皆様からのアイデアや御意見をお寄せください。「レクリエーション研究」への投稿につきましては、年報を通じて受け付けし、研究部の発刊にまわすこととなる。上記関係について理事部、各専門委員会におかれも検討をすすめておきたい。皆様からの御意見を御覧を重んじておりました。

1. 会員の消息についてお問い合わせの方々に送りました郵便物が戻って参りました。会員の消息についてご存知の方はご一顧下さい。(郵務所) 藤井 隆、藤井 智子、戸村 宗光、村田 二英、坂井 隆、中田 敏一、山田 敏一、古畑 英雄、宮本 礼一、中村 茂、山口 一、黒木 求、黒田 雄三、平野 吉道、早野 忠、五十嵐 宗子、岩田 淳、西田 俊夫、鈴木 敏子、沢村 隆、江 真、三上 吉洋
2. 会費の納入方法について従来の振り込み方式から、銀行自動引落し方式に変更することについて、議定を致しました。早速なご意見をお寄せ下さい。
3. 学会大会の申し込み様式について従来の添付された論文を受け付けていたが、本学会の発表数増減の一因にもなっているため、この様式を再検討しようということになりました。研究委員会が検討中です。ご意見をお聞かせ下さい。
4. 学会大会の開催地について従来のレクリエーション大会と同じ場所で行なうという方法を再検討しようという所があらう。特に若い会員にとっては、遠隔地の開催地は経済的負担が多過ぎて、発表、出席に困難であるという意見を良くもみまします。20歳を超える本学会大会の更なる発展のために、会員の皆様が発見しやすく、参加しやすい学会大会のあり方を探つていきたいと思つています。皆様の御熱心なご意見をお待ちしております。
5. 現在の名称「日本レクリエーション学会」の件英文(Japanese Society of Leisure and Recreation Studies)との関係から日本語での名称変更について検討することかどうかという意見が理事部からありました。
6. 「レクリエーション研究」への投稿を「レクリエーション研究」への投稿をお待ち申し上げております。学会の活性化にも多くの皆様のご協力を期待しています。レクリエーション研究20号の締切は12月25日とします。投稿先は〒305 沼津市天王台1-1-1 京大体育学部 吉田 卓研究室

学会ニュース

NO. 44
 FEB. 1989

日本レクリエーション学会
 Japanese Society of Leisure and Recreation Studies

発行人/田中 誠雄 編集/広報委員会
 事務局 千188 東京都杉並区水越1-9-1
 電話 03-322-3151 (内)2221, 2222

第19回学会大会
 福岡市 開催<8月27日(日)～8月28日(月)>決定

主催: 日本レクリエーション学会
 主管: 第19回日本レクリエーション学会大会実行委員会
 期日: 8月27日 午後 シンポジウムまたは講演会(予定)
 終了後懇親会
 8月28日 終日 研究発表
 会場: セントラルホテルフクオカ
 〒810 福岡市中央区渡辺通り4丁目1の2
 TEL (092) 712 1 212
 FAX 761-8980

※学会大会についての詳細は後日各会員宛にお知らせいたします。

学会大会の準備状況について

第6回常任理事会への報告が大会前理事長より以下の通りなされた。

- 宿泊先・会場はセントラルホテルフクオカ(1泊)6,000朝食付)を確保、100名程度の宿泊が可能となっている。
- 全体会、懇親会、分科会各会場の確保
- 大会開催の印刷物、用紙、封筒(発用用)、宿泊案内に関する交通等の書類は、博多JTBより各会員に発送される。

第19回学会大会委員会結成

平成元年2月2日(木)に開催された常任理事会において、昨年の第18回大会と同様、実行委員会の結成が確認された。構成員は理事会内専門委員会の責任者が中心となっている。

- 委員長 田中 誠雄 (理事長)
 事務局 寺島 善一 (総務)
 黒田 信実 (財務)
 黒田 悠 (研究)
 吉田 幸 (編集)
 鈴木 秀雄 (広報)
 大谷 善博 (支那出席理事)
 秀實 健治 (幹事)
 星野 敏男 ()
 師岡 文男 ()

第19回学会大会発表論文集 原稿提出要領

1. 印刷・製本 発表論文は、提出された原稿をそのまま縮写し、論文一題につき5版見開き2頁にオフセット印刷後、レクリエーション研究(大会発表論文集)として製本される。
2. 原稿用紙 提出原稿は、指定の原稿用紙(A4版)2枚に限る。なお予備を含め合計4枚の原稿用紙が同封されている。
3. 文字 本文文字は、邦文タイプ(4号活字)またはワープロプロセス(12ポイント・24ドット以上)を用いて、横書き印刷したものに限る。
4. 横線・氏名等 ①横線は、原稿用紙上部第1行と2行を用い、副題がある場合には行を改めて記載する。②横線には、本文より大きな活字または角角文字を用いること。③氏名は、横書きと共同研究者について行を改めて区別し、横書きには氏名のすぐ前に○印を付けること。④所属機関名は、氏名に続いて()内に記入する。また複数の共同研究者が同一の機関に所属する場合には、まとめて()内に記入する。
5. キーワード 論文の内容を適確に表現するようキーワードを、第6行目に2～5語程度記載すること。
6. 本文 ①本文は、目的、方法、結果、考察、結論など、でき次第に分りやすくすため、研究論文として完結していること。②本文名は、最初の一文字を付けて書き始めること。③原稿用紙の字数は、40字×40行の1,600字となっている。④図表などを使用する場合には、必ず本文内に収めること。
7. 送付書類 ①原稿の写紙には、原稿とそのコピー2部を同封すること。②原稿の提出用紙を使用し、書留郵便(簡易書留可)で郵送のこと。③提出要領が守られていない場合は、原稿を受け付けない場合がある。
8. 締切期日 平成元年5月31日(水)当日消印有効
9. 送付先 〒305 つくば市天王台1-1-1 京大体育学部 吉田 卓 実行委員会 宛

理事・常任理事会報告

第1回理事會

日時：昭和63年5月24日(火) 18:00～20:30
場所：目白学園図書部会議室
議題：1. 事務局移転の件
2. 業務分享の承認の件
3. 事務局引継ぎの件
4. 学会大会に関して

第2回常任理事会

日時：昭和63年6月4日(土) 14:00～17:00
場所：目白学園図書部会議室
議題：1. 学会大会のシンポジウムの件

第3回常任理事会

日時：昭和63年6月25日(土) 16:00～18:00
場所：明治大学駿河台校舎大学会館
議題：1. 学会大会について

第4回常任理事会

日時：昭和63年8月6日(土) 16:00～18:30
場所：本郷本明館
議題：1. 新入会員承認の件
2. 新理事退任の件
3. 各委員会報告
4. 63年度予算について
5. 支那奨励金について
6. 第19回学会大会について
7. 「レクリエーション研究」充実につて

第5回理事會

日時：昭和63年8月22日(月) 12:40～13:30
場所：新館ハーパービュートホテル
議題：学会ニュース№43に掲載

第6回理事會

日時：昭和63年10月8日(土) 16:00～18:00
場所：明治大学駿河台校舎研究棟第4会議室
議題：学会ニュース№43に掲載

第4回理事會

日時：昭和63年10月29日(土) 18:00～20:00
場所：明治大学駿河台校舎研究棟第5会議室
議題：学会ニュース№43に掲載

第4回常任理事会

日時：昭和63年11月12日(土) 15:00～16:30
場所：明治大学和泉校舎研究棟會議室
議題：1. レクリエーション協会への返書
2. 学会大会発表論文集について
3. 「レク研究」について
4. 学会ニュース加筆の件
5. その他

第5回常任理事会

日時：昭和63年12月10日(土) 15:00～17:00
場所：明治大学和泉校舎研究棟會議室
議題：1. 第19回学会大会発表論文集記載要領等について

第6回常任理事会

日時：平成元年2月2日(木) 17:00～21:00
場所：明治大学駿河台校舎大学会館
議題：1. レクリエーション協会との話し合いについて
2. 学会大会の準備状況について
3. 第19回学会大会発表論文集について
4. 「レクリエーション研究」投稿規定(改正案)について
5. その他

<編集委員会より>

1. 第19回日本レクリエーション学会大会における論文発表形式について

学会大会における発表者は、従来フルページによる論文形式をとってその発表内容を提出していただいておりますが、今回からは簡略化した形での論文を提出していただくことになりました。

詳細については大会案内と共にお知らせ致しますが、主な変更点は、「発表論文一冊につき、A4版をB5版に縮写したものを2頁に掲載する」ということです。

これによって、会員の皆様による一層活発な学会発表がなされることを期待申し上げております。なお、第19回学会大会発表申込みの手順については、以下の予定となっておりますので、御準備いただきますようお願い申し上げます。

- ・大会案内・発表原稿提出要領送付 4月上旬
・発表論文原稿提出締切り 5月31日
・第19回学会大会(於：福岡市)8月27～28日

2. 「レクリエーション研究」掲載論文の募集について

編集委員会では、現在第20号の刊行作業を進めております。それと共に投稿規定の整備・改定を行い、会員の皆様にとってより一層親しみと価値のある研究機関誌とすべく努力を致しております。

新投稿規定については、第20号に掲載して御案内させていただきますが、そこでは年2回の刊行を予定し、論文の投稿は随時受け付けております。日本レクリエーション学会の活性化と発展のためにも、どうか積極的に御投稿下さいますようお願い申し上げます。

なお第20号の刊行に先立ち、新投稿規定の御講

求および論文の投稿は次の窓口宛に御連絡下さい。

〒305 つくば市天宮台1-1
筑波大学体育科学系 吉田 章 気付
Tel. 0298(53)6334(直通)
日本レクリエーション学会 編集委員会

新入会員紹介

下記の方々が新入会員として承認されましたので、御紹介いたします。

Table with 2 columns: (氏名) and (所属). Members include 山下彰一 (水面水産試験), 下村彰男 (東京大学農学部), 古賀浩次郎 (政経工業大学), etc.

事務局より

第19回学会大会の発表申し込み様式が従来のものと異なり、発表論文原稿記載要領に沿って各会員からの多数の発表を期待しております。

また、「レクリエーション研究」への記載論文も随時受け付けることになりましたので重ねて御投稿くださいますことをお願いいたします。

学会ニュース

NO.45
Jan.1990

日本レクリエーション学会

Japanese Society of Leisure and Recreation Studies

日本レクリエーション学会

第19回大会報告

第19回日本レクリエーション学会大会

- 1. 主催 日本レクリエーション学会
2. 主催 日本レクリエーション学会第19回大会実行委員会
3. 日時 平成元年8月27日(日)・28日(月)
4. 場所 セントラルホテル フクオカ
5. 日程 8月27日(日)
14:00 受付
17:00 シンポジウム
18:00 懇親会
20:00 (セントラルホテル)
8月28日(月)
8:30 受付
9:00 研究発表
11:40 理事会
13:00 総会
14:00 研究発表
16:00 終了

- ◎総合テーマ 「魅力あるレクリエーション行動に向けて」
◎基調講演 「人間にとって遊びとは何か、そして今」
◎シンポジウム 「人間にとって遊びとは何か」
◎企業レクリエーションの立場から
◎ディベロッパーの立場から
◎可会

第19回日本レクリエーション学会発表演題

- 9:00<座長：原田 宗彦>
A-1 自然遊戯について
A-2 環境教育の視点を持つ野外レクリエーション・プログラムの開発に関する研究(I)
A-3 山荘リゾートにおける総合化の分析
10:00<座長：飯岡 文男>
A-4 地域住民側からみたリゾート開発(I)
A-5 地域住民側からみたリゾート開発(II)
A-6 西暦2000年の我が国レジャー・施設業の方向
11:00<座長：藤田 敏>
A-7 民間スポーツクラブの将来予測に関する研究
A-8 スポーツクラブ会員のプログラム参加に
12:00 理事会
13:00 総会
14:00<座長：塚本 理一>
A-9 登校拒否・不登校に対する冒険キャンプの効果

- 松尾哲矢 (福岡大学)
- B-8 スポーツイベントにおけるボランティア活動の継続性に関する研究
～満足度が継続動機に及ぼす影響について～
- 嶋 佑二 (東京理科大学大学院)
- 14:00<座長:山口 幸雄>
- B-9 オープンベースでの体育・スポーツ的活動について
○青沼増美 (勤労青少年指導者大学講座)
- B-10 複定数障害者のレクリエーションに関する研究
○永松義博 (福岡県立久留米商業高校)
- B-11 精神障害者のレクリエーション活動における心拍数の変化について
○御代田成人 (相模原市つやき体育館)
- 15:00<座長:松尾 哲矢>
- B-12 ユーザーから見た海洋スポーツの需要に関する研究 (門)
- 西井哲雄 (鹿屋体育大学)
- B-13 水辺レクリエーション活動における水難事故の統計的推移
○真竹昭宏 (筑波大学)

◎今年学会大会では始めて2日間にわたる大会プログラムが生まれ、総合テーマは「魅力あるレクリエーション行動に向けて」とし、基調講演では「人間にとって遊びとは何か、そして今」、またシンポジウムも総合テーマを採り、探求めざして観望点としての提言が盛り、140名の参加を得て、成功裡に開催された。

各会場での発表も活発に進められ、会員相互の交流をはかることができた学会でもあったといえる。

第5回理事会

日時 平成元年8月28日(日) 12:10～13:20
会場 セントラルホテル フクオカ(ルビーの間)
出席者 浅田、中村、前野、田中、大谷、秋吉、中村、黒田、寺島、藤田、鈴木、徳久、松浦、西野、毛塚、松木、関、梅津
(幹事 芳賀、星野、朗阿)

- ン研究」第19号・第21号の発送
 - (4) 学会案内の発行
 - (5) 第19回日本レクリエーション学会大会の準備実行委員会の形成・連絡
 - (6) その他
- 【編集委員会】
- (1) 「レクリエーション研究」第19号(函館大会号)の発行
掲載論文数 10題(フルペーパー様式による)
 - 1988年8月10日発行 印刷部数1,000部
 - (2) 「レクリエーション研究」第21号(福岡大会号)の発行
掲載論文数 25題(抄録形式による)
 - 1989年8月1日発行 印刷部数1,000部
 - (3) 「レクリエーション研究」第20号(研究論文集)の発行(連行中)
掲載論文数 3題(ただし、研究資料として3題)
 - 1989年9月10日発行(予定)
印刷部数1,000部
 - (4) 投稿規定の改正
①「レクリエーション研究」(学会大会号)投稿規定の改正
フルペーパー様式から抄録形式(2頁)にした。
 - ②「レクリエーション研究」(研究論文集)投稿規定の改正
研究論文としての投稿様式を整備した。
 - (5) その他
独立した編集委員会の開催が物理的に不可能であったため、全ての事業を理事会に諮りながら事業を推進した。
19号編集段階中からの引継ぎであったため、当初の事業に多少の混乱をきたしたが、今後は研究論文の充実と事業の主体を置く方針である。

- 【出版委員会】
- 平成元年度計画
- (1) 「私たちのレク学」発行に向けて
 - (2) レクリエーション文庫の索引作成

- 1. 議長および議事録署名人選出について
議長は中村要氏、議事録署名人は金崎良三氏、梅田三朗氏にお願いする事になった。
- 2. 昭和63年度事業報告
各委員会からの報告
- 3. 昭和63年度会計報告および監査報告
決算報告は再度検討して専断変更することになった。
- 4. 平成元年度事業案について
- 5. 平成元年度予算案について
予算案は会員数の会費納入による予算案で、実質納入予算と相違がみられる。ゆえに、予算のため、会計の処理のしかた等について再検討することになった。
- 6. 平成2年度以降における役員選出に関する規定案について

- 役員選出に関する内規(案)
- 1 会則第12条の規定により、役員は選出は、会則に定められているほか、この内規に基づいて行なうものとする。
 - 2 会長は原則として、副会長であることが望ましい。
 - 3 顧問は、会長経験者をもってあてる。
 - 4 理事は選出方法により、(1)支部選出理事、(2)改選前の理事会によって選出される理事、(3)会長退任理事の3つに分け、理事数20名程度とする。
 - (1) 支部選出理事は、各支部最少1名とし、支部の会員数に比例して、理事数を決める。当分の間、東海、近畿、九州の各支部は2名、関東地区4名、関東地区以外の支部未所属者1名とする。
 - (2) 改選前の理事会によって選出される理事は、専門領域、地域、研究機関、団体、及び事務運営等を考慮して選出する理事は5名。
 - (3) 会長退任理事は、会長経験者、副会長と協議のうえ選出する。理事は4名程度。
- 会長、副会長および監事候補は、前記4-1(1)、(2)によって選出された理事会において選出する。
- 理事と、及び常任理事は、改選後、初理事会で選出する。役員は兼任は認めない。
- 役員選出は、総会承認事項であるため、役

- 員選出の理事会は、学会大会前の適当な時期に開催する。
- 7. 日本レクリエーション学会会則の一部改訂について
11条、17条は異議なし。12条(役員任期は2年とする。任期は原則として1期とし、2期を再任の限度とする。役員選出についての規則は別に定める。)について説明がなされたが、現文書で突進みてはどうか、2年ごとの改選では事務局運営が困難である等の意見があり、原案を総会において論議する事になった。
- 8. その他
(1) 事務局移転について
現在の明治大学から、平成2年4月1日より青山学院大学に移転の予定、それに伴い徳久雄氏(青山学院大学)が会長推薦の理事として承認された。
- (2) 20回学会大会について
開催地は東京、期日は秋期であることが確認された。

平成元年度総会開催

日時 平成元年8月28日 午後1時～2時
場所 セントラルホテル フクオカ (ダイヤモンドホール)

<総会挨拶>

開会挨拶
1 会長挨拶
2 議長および議事録署名人選出
3 昭和63年度 事業報告
4 昭和63年度 会計報告
5 平成元年度 事業案審議
6 平成元年度 予算案審議
7 平成2年度以降における役員選出規定案について
8 日本レクリエーション学会会則の一部改訂(案)について
9 その他(第20回大会開催地:東京、秋)

閉会挨拶
(昭和63年度事業報告)

- 1. 事業
(1) 第18回学会大会開催
昭和63年8月22日
函館市 ハバービューホテル
(2) 機関誌
「レクリエーション研究」の発行
第20号は平成元年にすべくむ
(3) 会報
「学会ニュース」発行 №42～44
(4) 学会案内の作成
(5) 組織の充実・拡充
会員の獲得～41名
支部における研究会～東海支部など
(6) その他
- 2. 会議
(1) 総会開催 8月28日
(2) 理事会議
(3) 常任理事会議 11回開催
第1回～6回までは学会ニュースにて報告
第7回～11回までは別紙にて
(4) 各委員会報告
[総会委員・広報委員会]
(1) 理事会、常任理事会の開催
第1回～4回理事会議、第1回～6回常任理事
会はニュースで既報
第7回～12回常任理事会において審議された
事項は下記の通り(別掲報告参照)
<主たる議題>
1 第19回日本レクリエーション学会大会開催
地の件
2 「レクリエーション研究」充実のための
諸方策
3 レクリエーション学会大会活性化のための
諸方策
4 レクリエーション学会大会と日本レクリエ
ーション協会主催の研究大会との関係について
5 第19回日本レクリエーション学会大会の
内容について
(2) 日本レクリエーション学会と日本レクリエ
ーション協会の関係について日本レクリエ
ーション協会 吉田事務局長と懇談
田中理事長、寺島常任理事
(3) 学会ニュース(№41～44)、「レクリエ

- 【文献委員会】
- 昭和63年度報告
- (1) 文献収集のための調査用紙・内容の検討
平成元年度計画
(1) 日本レクリエーション学会会員を対象に調査
予定
- 【財務委員会】
- 昭和63年度報告
- (1) 財政強化のための会費獲得
41名の新人会員を獲得
 - (2) 広告収入の獲得
- 平成元年度計画
- (1) 新入会員の獲得
新しい分野の会員の発掘
 - (2) 広告収入・事業収入の強化

常任理事会 報告

- (第6回までは学会ニュースにて既報)
- 第7回
- 日時 平成元年3月3日(日)14:00～17:00
場所 明治大学和歌山校舎第2会議室
議題 1 学会ニュース44号 発行・発送の件
2 第19回学会大会開催要項について
- 第8回
- 日時 平成元年4月15日 14:00～17:00
場所 明治大学和歌山校舎体育会講堂
議題 1 学会大会について(基調講演・シンポジウムの内容と演者を中心に)
2 レク研究20号の原稿の集まり状況と発行予定について
- 第9回
- 日時 平成元年5月20日 18:00～20:00
場所 明治大学研究棟第6会議室
議題 1 第19回学会大会について
大谷理事(現地実務委員会)より報告
a シンポジウムの演者の交渉について
b 大会運営について その他
基調講演、シンポジウムの司会者の決定(秋吉安事)
- 2 学会大会の議事について
- 第10回
- 日時 平成元年6月17日 14:00～17:00
場所 明治大学研究棟第2会議室

- 議題 1 学会大会の基調講演者(原田三三氏)とシンポジウムの演者(岡部、藤、石川の三氏)の確定
 - 2 研究発表の順序と座長の決定
 - 3 役員選出に関する内規の検討委員会の選出 秋吉、毛塚、鈴木(秀)、寺島、深山、前野、(オブザーバー 田中理事長)
- 第11回
- 日時 平成元年7月28日 16:00～18:00
場所 明治大学研究棟第3会議室
議題 1 基調講演・シンポの準備状況について、秋吉氏より報告
2 役員選出に関する内規の検討委員会の報告、了承。
3 第20回学会大会について
- 第12回
- 日時 平成元年8月27日(日)18:00～18:30
場所 セントラルホテル フクオカ(ルビーの間)
出席者 浅田、前野、田中、秋吉、黒田、寺島、幹事(芳賀、朝岡、星野)
- 議題 1 事務局移転の件
現在の明治大学から、平成2年4月1日より青山学院大学に移転、それに伴い徳久雄氏(青山学院大学)が、会長推薦の理事として承認された。
- 2 総会議事の件
議長は中村要氏(同志社大学)
議事録署名人は金崎良三氏(九州大学)、梅田三朗氏(西日本工業大学)に依頼することになった。

- 第13回
- 日時 平成元年10月9日 18:00～19:30
場所 青山学院大学総合研究所 7F12会議室
出席者 浅田、田中、秋吉、黒田、鈴木(秀)、松浦
1. 報告事項
(1) 学会大会について
(2) 事務局の移転について
(3) その他
2. 議題
(1) 規約検討委員会の設置について
(2) 第20回学会大会について

- (3) 徳久理事の常任理事への推薦について
 - (4) その他
- 第14回
- 日時 平成元年10月28日(日)18:30～20:00
場所 明治大学駿河台校舎 第4会議室
出席者 浅田、田中、黒田、寺島、鈴木(秀)、松浦、梅津、幹事(星野)
- 欠席者 前野、吉田、飯田、幹事(郎阿、芳賀)
1. 報告事項
(1) 学会大会の会計報告について
参加者数140名
学会本部支払
講師謝礼(14万)、交通費(10万)、宿泊費(1.4万)
本大会開催地、大会号編集の問題、学会大会の予算化等が今後の課題とされた。
2. 協議事項
(1) 学会会則について
常任理事会で学会会則について検討した結果、不備な点が確認されたため、再度、規約検討委員会をつくり検討することになった。
規約検討委員会のメンバーは下記の通りである。
鈴木祐一氏、徳久雄氏、鈴木秀雄氏、寺島善一氏、毛塚宏氏、岡岡文男氏、深山千穂氏
- (2) 第20回学会大会について
会場 明治大学駿河台校舎
期日 平成2年11月10日(日)11時の予定

- <平成元年度事業計画>
- (1) 各編集委員会の開催
 - (2) 理事会・常任理事会の開催
 - (3) 研究例会の開催
 - (4) 会員名簿の作成
 - (5) 第19回日本レクリエーション学会大会の開催
 - (6) 「レクリエーション研究」
 - (7) 学会ニュース(№45～49)の発行
「レクリエーション研究」№20・№22の発行
 - (8) 第20回日本レクリエーション学会大会開催準備
 - (9) 学会会則と役員選出に関する規約の見直し
 - 00 その他

第7回常任理事会以降の 新入会員

西宮重信、賀戸一郎、編・江澤一、下村孝（近畿大学九州短期大学）、長々誠、緒祐二、佐藤史幸、藤本淳也、天野利宏、五十嵐秀司、井坂保子、小山公彦、永松昌樹（龍溪体育大学大学院）、千足新一、遠藤浩、真竹昭宏、中西純司、波越一善（筑波大学大学院）、安田恭子（ロイヤルアスレチック）、菊地秀夫、貴多野乃武次（緊急電線）、菊幸一（九州大学健康科学センター）、梶原和幸（横浜国立大学）、磯崎剛（沼津郵便局）、梶浦英香（仏教大学）、色澤正雄（聖徳学園短大）、菅原成臣（東京YMCA）、村松正之（第一保育短大）、河田隆（聖徳学園短大）

「レクリエーション研究」への投稿を!

編集委員会では「レクリエーション研究」への投稿を常時受け付けていますので、研究ノート、論説等お寄せください。

事務局より

◎各種委員会の開催と共に研究会の開催など学会としての役割を果たすべく活性化へ向けての努力を重ねていかなければと痛感しています。

◎第20回学会大会も1990年11月10日(土)、11日(日)の両日、明治大学駿河台校舎での開催が決定されました。会員の皆様には研究成果の発表につきまして、御準備いただきたいとおもっています。

◎総会の議題ともなりました学会会則の一部改訂と、役員選出規定の検討は、真似検討委員会が設置され、第14回常任理事会でその委員が選出されましたが、会員の皆様からの御意見もお待ちしておりますので事務局へお寄せ下さい。

◎平成2年4月1日より事務局が現在の明治大学和泉校舎より青山学院大学に移転いたしますが、スムーズな事務局運営をめざし、新年より事務局の一部移転をすませ、会議の開催も両大学を利用させていただいています。

◎会員のニュース性に富む活動状況などについては広報委員長鈴木秀雄宛にお寄せください。(連絡：寺島)

第20回学会大会決定!

日時：平成2年 11月10日(土)、11日(日)
場所：明治大学駿河台校舎

学会ニュース NO.46 August 1990

日本レクリエーション学会

発行人 田中綱雄 編集 総務委員会
事務局 〒150 東京都渋谷区渋谷4-4-25
青山学院大学2号館2002号室兼付
電話 03-498-6939
郵便振替 東京 4-3 3 6 6 3

学会会長に就任して

会長 浅田 隆夫



去る6月3日の学会総会で会長を引き継ぐことになりました。この光栄に堪えるため、レクリエーション研究はもちろん、現在、学会が進んでいる疑問問題解決に向けて努力を尽くし、学会より一層活動させたいと思っております。ここでは日頃、学んでおきたい多くの具体的なことから始めていきます。

学会は、いろいろな面で、会員が学術的・社会的課題に直面し、会員相互の連絡・組織の強化を促す役割を担っています。従来、本学会は設立の経緯(加藤・日本レクリエーション学会[加藤]第18巻 第3号「1989年3月187-191頁参照」)もあり、第18回大会まで日本レクリエーション学会と共同して学大会を行ってまいりました。数年前から、学会は独自で学大会を開催できないものかと取り懸念してきましたが、第20回大会からの希望(独自で学大会を開催することは加藤の意向)がかなえられることになりました。この意味では、一つの新しい転機を迎えたともいえます。

いままでもなく、レクリエーション研究(レクリエーションとは何かを絶えず反復的に思考しながら)、特に、生活文化の広領域とかかわる研究ですから、それぞれの専門分野の研究者が、個人で研究することもままあることなら、むしろ、研究領域ごとに集まって、それぞれテーマを定め、個人の研究を生かしながら共同で研究していくプロジェクト的研究を推し進めていくことが、実り多い成果をあげることができるのではないかと思います。それは、本学会の特質から、いろいろな専門分野の関わりあふ多く加入して頂き、これらの会員の方向性のあるプロジェクトを計画し、共同の成果をあげられるようにすることが望まれます。

もちろん、国際的な研究交流により外国の情報の入手も必要ですが、現在のところ、研究の質・量を高めていくことが先決だと思えます。

かつて、わたしは会員の皆さんからの協力を得て暫定的な研究機関「歴史・源流」「意識と行動」「活動とプログラム」「サービズと運営・管理」「質問と空間」「政策と運動」の6領域とし、この領域ごとに学会大会や月別研究会のテーマを計画・設定し、数年かけて体系的な研究計画を進め、かくして、会員の皆さんがのびのびと活動して「レクリエーション」の方法を上手にすることができたが、このようにレクリエーションの研究を進めていくことが、学会の一つのめざした研究進路として必要でしょう。また、このような体系的取り組みの中での内外的情報・資料の収集も影響するし、資料もまた生きるべきではないでしょうか。

また、約700名という本学会の会員数からすれば、学会大会に対する参加人数は50～70名程度にとどまるところです。もちろん、研究は量だけでなく、質の問題ですが、より質の高い論文を志向するだけでは活動もままならないが、研究機関の活動が個人にも必要であること(長足当初からすれば本年で27年の歴史を歩いているので)、ここで、これまでの歩みを振り返るとともに大別したことでしよう。

要するに、現代では、レクリエーション分野は、国民生活の生活の質に関わり多岐にわたります。また、国民の日常生活で占める生活の質の多岐化が急進に進んでいくにも拘らず、問題の多岐化は、これに足るレクリエーション研究のテーマ・方法も、また、組織もそれに対応しつづけて、研究成果もそれが高まることが期待されています。したがって、きまのプロジェクト的な取り組みが必要になります。公費の集約や協力を求めねばなりません。願くは、会員の皆さんの熱意と協力によって、これらの研究上の課題が解決されますよう、切にお願ひする次第です。

1990～1991年度新役員きまる

会長	浅田 隆夫 (白百合学園大)	理事	越智 三三 (東海大学)
副会長	前野野一郎 (福スペースコンパルタント)	〃	石井 光 (立教大学)
〃	木下 茂樹 (日本大学)	〃	西野 仁 (東海大学)
〃	青木 肇三	〃	永嶋 正徳 (東京農業大学)
〃	石橋 保 (福岡教育大学)	〃	川口 光男 (名古屋経済大学)
理事	田中 綱雄 (日本大学)	〃	守能 清次 (西京大学)
監事	江藤慎太郎 (中央大学)	〃	永吉 安英 (大阪教育大学)
〃	秋吉 寛樹 (関西教育大学)	〃	柳田清次郎 (南山学院大学)
〃	藤本敏次郎 (日本体育大学)	幹事	赤井 利男 (青山学院大学)
常任	徳久 雄一 (青山学院大学)	〃	稲岡 文男 (上智大学)
理事	鈴木 孝一 (東京女子体育大学)	〃	芳賀 純治 (東京家政学院大学)
〃	黒田 啓寛 (明治大学)	〃	星野 敏男 (明治大学)
〃	鈴木 秀雄 (関東学院大学)	〃	下村 彰男 (東京大学)
〃	吉田 軍 (筑波大学)		
〃	松田 典中 (筑波大学)		
〃	杉尾 淑江 (ゾック研究所)		
〃	松浦三代子 (東京女子体育大学)		
〃	藤澤 油子 (女子学院大学)		
〃	寺島 善一 (明治大学)		
〃	北條 明夫 (関東理科大学)		

※日本レクリエーション学会本部・事務局
〒150 渋谷区渋谷4-4-25
青山学院大学2号館2002号研究室兼付
☎03(409)8111 内2385 03(498)6939…直通
FAX 797-6870 読者研究所 徳久宛

1990年度 第一回総会

総会に先だち午前10時より「生涯学習とレクリエーション」と題して文部省生涯学習社会教育官の藤田克彰氏と松下真子氏の特別講演が行われた。

日時 1990年6月3日(日) 午後2時
会場 青山学院大学総合研究所ビル11階 第19号会議室

【総会議事】

1. 会長挨拶
2. 議長および議事録署名人名目選出
3. 1989年度 事業報告
4. 1989年度 会計報告および監査報告
5. 1990年度 役員選出について
6. 1990年度 事業家事項
7. 1990年度 予算案審議
8. その他

1989年度 事業報告

1. 事業
 - (1) 第19回学会大会の開催
福岡 — セントラルホテルフクオカ
 - (2) 雑誌誌
「レクリエーション研究」21号の発行
 - (3) 会報
「学会ニュース」46・47号の発行
 - (4) 研究会 月別発表会
「幸福論文発表」1990年3月16日(日) 講演会
「人生80年時代の労働と余暇」
— 70分間隔の人間化へむけて —
松田 義孝 氏 (筑波大学)
2. 学大会の作成
3. 組織の充実
新入会員の募集 13名

2. 会費
 (1) 総会開催 6月3日
 (2) 理事會開催
 (3) 常任理事會
 第14回 10月28日(出)までは「学会ニュース」A45に報告

総務委員会

- (報告)
 1. 理事會、常任理事會の開催
 (1) 理事會
 >8月28日開催
 (2) 常任理事會
 >第13回、第14回は学会ニュースにて既報
 >第15回-第17回は別掲
 2. 学会ニュース(A45)
 「レクリエーション研究」第21号の発行
 3. 規約検討委員会の形成
 4. 役員選考(総会にむけての)委員会の形成
 5. 第20回日本レクリエーション学会大会の準備
 6. 年論発表研究会の開催

1990年度事業計画案

- 会費第4条に基づき次の事業を行う。
 1. 学会大会の開催
 11月10、11日 於 明治大学
 2. 研究会、講演会
 各研究会及び東京において年報発行し、その資料を交換する。
 3. 機関誌の発行及び情報活動
 「レクリエーション研究」の発行(会費)の発行
 4. 研究の助成
 各研究会の研究成果の公表を促進するよう助成する。
 5. 関連団体との連絡
 日本レクリエーション協会、日本観光学会その他と連絡を取り情報交換を行う。
 6. 会員相互の親睦
 7. 会則、規程の改正について検討委員会を発足
 8. 組織の充実、資料その他の整備を行う。
 9. その他 (徳久 球雄)

広報委員会 報告及び計画

- (報告)
 学会ニュース A44
 学会ニュース A45
 (計画)
 ・本年度は学会大会も第20回になるので、学会ニュース(A46-A48)の発行にとどまらず、研究会や月例会等の活性化にむけて広報としての情報提供をすすみたい。
 ・広報としての課題である支部組織とのネットワークづくりをすすみ、会員の意見も反映できる学会ニュースを発行したい。(鈴木 秀雄)

文獻委員会

- 文獻収載について
 レクリエーション文獻の性質上、広範囲における調査、整理が必要であるが、まず会員の文獻について現状の調査を進めらる。
 1. 調査を各会員に送付。
 (調査に対する記入を個人にお願いする。
 (個人の様態詳細になる心配は?→登録?))
 2. 文獻に対する記入は、自己申請性をとるもの整理可能なコード化を行う。
 3. 氏名(学会名簿では登録番号を用いていないが文獻整理の上でナンバリングはどうか?)
 (2) 筆名欄(筆名から分組執筆を含めその他の項で区分付)
 (3) タイトル(テーマ)
 (4) 文獻種別(書評、論文、記事、調査、その他)
 (5) 研究対象(8領域の区分を用いる)
 (この時領域の後に「比用意し、そこに次の領域の区分を用います。か。例一(理論)→レクリ、レジャー、プレイ、スポーツ、棋類、漢学、など)
 (6) 文獻出所
 (7) 文獻年月日
 (8) 主たる内容の説明
 (9) キーワード、最大三語で重要と思われる順に。
 調査票の形態
 1. 必須に応じて記入すべき個人がコピーできる用紙とするか
 2. 文獻記入を1件1票のようにするか
 3. コンピューター利用による整理をどうするか

整理の形態

1. 氏名一キーワードにおける内容のどこを確保
 先として文獻目録を作成するか。
 2. 会員でない個人が共同(共著)の場合の区分。

1990年度予算

一般会計

項目	予算額	摘要
前期繰越金	638,247	
年度会費	3,000,000	平成2年度5,000×400人 過年度分5,000×200人
入会金	30,000	1,000×30人
預金利息	1,000	富士銀行
計	3,669,247	

1989年度会計報告

収入総額	3,256,713円
支出総額	2,618,466円
残高総額	638,247円

収入の部

項目	予算額	決算額	内 容
繰越金	1,611,961	1,611,961	
平成元年度会費	2,850,000	1,043,500	のべ292名
大会参加費	250,000	198,000	
雑収入	238,039	367,252	研究誌、広告料
入会金	50,000	36,000	36名
計	5,000,000	3,256,713	

支出の部

項目	予算額	決算額	差引
事務費	30,000	5,962	24,038
会費	200,000	75,354	124,646
通費	600,000	183,521	416,479
印刷費	2,500,000	1,131,501	1,368,399
研究会費	200,000	200,000	180,000
大会費	300,000	498,770	-208,770
総会費	30,000	100,000	-70,000
事務局運営費	290,000	81,000	209,000
専門委員費	500,000	100,000	400,000
印刷費	450,000	512,258	-62,258
計	5,000,000	2,618,466	2,381,534

会計編集 秋吉 篤哉

長谷川純三

支出

項目	予算額	摘要
印刷費	500,000	ニュース、名簿、コピー代
通信費	250,000	ニュース、名簿、その他
事務用品	40,000	文具、その他
事務局運営費	300,000	事務局員手当20,000×12 7アルバイト他
支部奨励金	45,000	150,000×3
専門委員費	400,000	
会費	200,000	
特別会計 I	1,000,000	研究報告印刷
特別会計 II	200,000	大会運営
雑費	50,000	予備費を含む
繰越金	279,247	
計	3,669,247	

広告その他をともなうものは特別会計で処理し、一般会計は原則として会費収入によるものとする。

II 特別会計

- (1) レクリエーション研究関係

収入	
項目	予算額
前期繰越金	0
一般会計より	1,000,000
広告費収入	500,000
雑収入	0
計	1,500,000

支出	
項目	予算額
印刷費	1,000,000
委員会費	200,000
通信費	100,000
次期繰越金	200,000
計	1,500,000

(2) 大会関係

原則として独立採算として、実行委員会の責任において行い、一般会計よりは大会運営費補助の形とする。但し、年度により大会関係を主催する側の事情によりこの額は変動があると考えられる。

理事会議事録

日時 1990年6月30日(出) 午後6時-8時30分
 場所 青山学院大学総合研究所9階第15会議室
 出席者 後田、前野、田中、鈴木祐、徳久、黒田、吉田、松浦、梅津(敬称略)
 協議事項
 (1) 会長推薦書について
 理事は松浦三代子、松田義孝、経菅三三、石井元、寺島善一、永嶋正徳氏。
 幹事は赤井利男、前野文男、芳賀徳治氏が推薦され承認された。
 進士五十九理事は総会で承認されたが幹事の関係で今回は辞退され、後任は杉尾江氏(武蔵工業大学工学部)を推薦承認された。
 (2) 理事、幹事の委託について
 会長推薦書および幹事(従来口頭)の各氏に委託願いと承諾書事務局から送付するこ

常任理事會報告

(第14回まではA45学会ニュースに掲載)
 第15回
 日時 1990年3月10日(出)
 午後5時-7時30分
 会場 明治大学和泉校舎第一棟第二会議室
 議題 1. 規約検討委員会の報告による役員選出委員会について
 2. 総会日程について
 3. 月例発表会について
 4. レクリエーションの編集について
 5. 学会名簿の変更について

第16回
 日時 1990年4月23日(月)
 午後7時-8時30分
 会場 青山学院大学総合研究所7階第12会議室
 議題 1. 総会日程について
 2. 第20回学会大会について

第17回
 日時 1990年5月23日(金)
 午後7時-9時
 会場 青山学院大学総合研究所7階第14会議室
 議題 1. 新入会員の件(13名)
 2. 講演部一部変更について
 3. 次期役員選出について
 4. 総会について

第18回
 日時 1990年6月3日(日)
 午前9時-10時
 会場 青山学院大学総合研究所11階第19会議室
 議題 1. 1990年度予算案について
 2. 1990年度事業案について
 3. その他

東海支部活動報告

1. 1989年度総会
 日時 1989年6月28日(内)
 午後6時-6時40分
 場所 名古屋大学総合保健体育科学センター2階会議室
 議事 1) 1988年度事業報告
 2) 1988年度決算報告
 3) 1989年度事業計画
 4) 役員選出
 5) 理事の役割分担
 6) その他
 2. 1989-90年度役員
 会長 川村 英男
 副会長 藤原 義男 (中央大学)
 川口 光雄 (名古屋経済大学)
 理事長 中島 豊雄 (名古屋大学)
 理事 池田 隆二 (中部大学)
 山田 龍 (愛知教育大学)
 木村 吉次 (中央大学)
 佐司 節子 (市野学園短期大学)
 西田 亮造 (愛知独立芸術大学)
 山口 隆生 (名古屋Y.N.C.A.)
 午後7時-9時
 藤田 和夫 (岐阜経済大学)
 藤原 正尚 (三重大学)
 三宅 邦夫 (中日子とも会)
 守本 悠次 (中央大学)
 山本 英毅 (日本福祉大学)
 八幡 好宏 (名古屋YMCA)
 大内 敬哉 (中央大学)
 藤次 盛 (盛徳技術大学)
 幹事 岡次 宏彦 (名古屋文理短期大学)
 仲野 達士 (中央大学)
 3. 研究報告
 今年度の研究会の題名は、外国のレクリエーション事情及びその研究活動を報告していくことが総会において決定され、以下に示す研究報告がなされた。

それに伴い変更通知のハガキ、地図を70枚印刷し、各理事まで郵送のための手伝いをする事になった。

- 2) 会費徴収について
2) 協議事項
1) 総会について
2) 新入会員について
3) 月例研究会の第1回は12月15日(日)に変更する。

- 第4回
日時 1990年12月15日(日)午後5時30分~8時
会場 弘学会館
1. 報告事項
1) 20回大会の会計報告(残金は研究誌発行費用の一部とする)
2) 月例研究会第1回の報告
2. 協議事項
1) 総務の役割分担について次回に提案することが確認された。

会則規約検討委員会

12月17日(月) 午後6時 於 青山学院大学
出席 田中、鈴木(祐)、鈴木(孝)、徳久
現会則の10条、12条を中心に他学会の会則等も参照し、できるだけ簡潔に表現するようにして、次期常任理事会に原案を提出するものとした。出席者も明記するようにし、また会費の米ドル表示は必要ないという意見もあった。

研究月例会のおさそい

- 1. 1990年12月から月例研究会を開き、会員間の研究交流と親睦をはかっていくことになりました。
2. 研究会の進め方としては、会員の共通テーマと専門領域を組み合わせたプログラムにいたします。当初、この様な形式で研究会をすすめて、いずれ専門領域の月例部会がスタートすることが出来るようにしたいと思っております。
第1回は、12月15日に開かれましたが(別項)当分の研究会の日時を次のように予定しております。
3. 期 日
1991年1月12日(日)
東京家政学院大学三番町キャンパス会議室
1991年2月2日(日) 第3回 市ヶ谷日大会館

提案している。こうした動向を踏まえながらの意見交換を行なった。

- PART 3
わが国において、今日、学習社会(Learning Society)、リゾート開発モデルとしてのAspen Resort(U.S.A.)に関心が寄せられているが、このコンセプト、プログラムを開発したシカゴ大学のR.M.ハッチンス、M.J.アードラーの業績はあまり知られていない。そこで、1930年代から生涯学習運動として展開してきたアメリカのGreat Books プロジェクトの基本理念を、

レジャーとしての自由学芸教育
-M.J.アードラーを中心としての考察-
1. レジャーとしての自由学芸教育
2. アメリカの自由学芸教育運動
3. ヒューマンフォの危機克服に向けて

と題し、Discussion Papersをつくり報告を行った。

この報告に対する参加者の関心は高いものであったが、討論、意見交換が3:00~5:00という時間的のために十分行なうことができなかった。

そこで、浅田会長、田中理事から、この問題はわが国の教育のあり方、レジャー・レクリエーション、文化のあり方の基本にかかわる重要な資料であり、ひき続き意見交換を行ってほしいとのコメントをいただき、第2回月例研究会に持ち込むこととした。(共通問題意見交換として)

第2回月例研究会のおさそい

- 日時 1991年1月12日(日) 午後3時~5時
会場 東京家政学院大学三番町キャンパス会議室
千代田区三番町2-2
電話 03-362-2231
市ヶ谷駅徒歩8分 清国神社方面出口
都町郵便局
半蔵門駅徒歩8分 大妻学院方面出口
大妻学院講堂
司会 赤井利男 芳賀健治
テーマ
1) 赤井利男 野外スポーツとマナーについて

- 3月2日(日) 第4回
東京家政学院大学三番町キャンパス会議室
4月6日(日) 第5回
東京家政学院大学三番町キャンパス会議室
時間 午後3時~5時30分
※2/2のみ日大会館、あとは東京家政学院大学三番町キャンパス会議室です。毎月研究会のお知らせは致しませんのでよくごらんになってお出かけ下さい。
4. 第1回、第2回をフォーラム、トークインのスタイルにします。
共通テーマ
レジャー・レクリエーションの昨日・今日・明日
・レクリエーション研究とは何か。
・レクリエーション研究が直面している現在の課題
・将来に向けてレクリエーション研究はいかにあるべきか。
・レジャー研究とは何か。
・レジャー研究はいかにあるべきか。
次の領域があげられていますが、この領域について(設定)皆さんと話し合いたいと思います。

- 専門領域
・レジャー・レクリエーションの環境
・レジャー・レクリエーションの理論
・レジャー・レクリエーションカンセリング
・レジャー・レクリエーションの産業
・レジャー・レクリエーションの行政

第1回月例研究会

- テーマ レジャー・レクリエーション研究
一日・今日・明日
期日 1990年12月15日 午後3時~5時
場所 東京・市ヶ谷日大会館201号室
会年度の学会の講演、シンポジウム、発表の成果を受けて、フォーラム形式による「レジャー・レクリエーション研究の昨日、今日、明日」の話し合いがもたれた。
全体の構成は3部からなり、
① 各大学のレクリエーション講座が、現在どのよ

- 2) 芳賀健治 東洋の自然観・人間観と野外スポーツ
3) 浦田重二 心を自由にする野外活動プログラム
4) 川村協平 野外活動と個性づくり
5) 佐藤初雄 プログの野外教育指導者としての役割
6) 下村彰男 レクリエーション活動の複合化について
7) 梶野敏男 野外教育の定義について
その他、参加予定者 中島一、藤岡文男
上記の通り実施予定です。

次期大会について
1991年11月に開催予定の第21回大会は、東海支部を中心として名古屋で開催されることとなりました。
詳しい日程等につきましては東海支部で予定が決まりました次第、お知らせいたします。

会員動静

- 新入会員
氏名 所属 推薦者
西田 栄子 二松学舎大学 梅津 由子
藤田 基行 国際武道大学 中島 一郎
藤岡 孝文 筑波大学大学院 藤田 聡
有根 正 筑波大学大学院 阪田 聡
成田 修久 IWNC, Int.
長田 麗明 武田病院
松本 耕二 鹿屋保健体育大学大学院 菊池 秀夫
住所変更
北川 宗忠 大阪成蹊女子短期大学
滋賀県野洲郡野洲町行権122-6
電話 0775-86-1612
高 藤 美奈子 福島大学研究生
960 福島市宮町4-31
電話 0245-22-4623

- うな考え方のもとなされているか。
② これからレジャー・レクリエーションの概念をどのようにとらえて、パンスンとれたた教育を進めていくべきか。
③ 生涯学習の社会に向けて、教育・学習支援システムほどのような理念に沿って開発・整備されるべきか。
④ について、資料をもとに意見を交換した。

PART 1
ここではイギリスのLeisure Studies Associationの研究トレンドをみながら、これまでのPark and Recreation中心の研究領域が、Leisure and Cultureにまで広がってきていることを、みんなで見とった。こうした変化は、わが国の大学のレクリエーション講座はすでに読みとっており、レクリエーション講座の名称で実際にはレジャー・レクリエーションの授業を行っているところが多いということもわかった。また、レクリエーション講座からレジャー講座へリネーションをはかっている大学も出てきているとの報告があった。しかし、現実の教育委員会、企業内教育の現場においては、まだ「レクリエーション」の概念、組織、運営がなされており、この現実に対する教育的配慮となりながら、リフォーミングをはかるとの意見も出された。

- PART 1の資料の一部
イギリスのLeisure Studies Associationの研究トレンド
1. Sport and Leisure in Contemporary Society
2. Leisure and Public Policy
3. Forecasting Leisure Futures
4. Leisure and The Community
5. Tourism-A Tool for Regional Development
6. Leisure and Urban Society
7. Community Leisure and Culture: Arts/Sports Provision
8. Social and Economic Costs and Benefits of Leisure
9. Leisure and Family Diversity

- 10. Leisure and Rural Society
11. Leisure in the 80s: Alternative Futures
12. Prospects for Leisure and Work
13. Leisure Research: Current Findings and Future Challenge
14. Leisure and Learning
15. Work and Leisure: Unemployment, Technology and Lifestyles
16. Leisure and the Media
17. Leisure and Youth
18. The Sociological Study of Sport
19. Leisure and Social Control
20. Leisure and Popular Cultural Forms
21. Explorations in Football Culture
22. Politics, Planning and People
23. Work, Non-work and Leisure
24. The Politics of Leisure
25. Leisure and Social Relations
26. The Media and Cultural Forms
27. Policy and Planning, Part 1
28. Policy and Planning, Part 2
29. No longer distributed

PART 2
現場の方も、「レクリエーションからレジャー・レクリエーションへ」の変化を読みとっているところが出てきており、例えば、東京都特別職員研修所は「研修のひろば」の機関誌で、
▶人生80年代のライフデザイン
▶人生80年70時間人間化ーレジャー・レクリエーションの意義
▶学習社会に向けて

を特集し、現実研修もしている。このような研修会は神奈川県、静岡県、山形県をはじめとして、自治体の重要なプロジェクトになりつつある。経済企画庁も国民生活審議会全職・生活文化委員会に2年間におたり検討してもらい、平成2年5月に「豊かな時の創造をめざして」の報告書をとらまとめた。この中でも、休息・休養・保養を中心としたレクリエーション概念のように、自己実現、自己表現、自己開閉につながるレジャー・生活文化・文化概念を重んじた施策の推進の重要性を

- レク学生会所不明者 <12/18現在>
青木 芳江 足立 邦子 池田 真徳
石井 茂夫 石川 光隆 石塚由美子
井村 仁 大野 智子 片岡 正泰
河野 順 栗原 愛弓 黒木 孝
藤原 政明 古畑 智子 佐藤 隆二
佐藤 泰雄 佐野 公雄 鈴木 健二
鈴木 喜一 鈴木 総子 関根 弘文
高田 智光 戸村 光宏 富山 浩三
中田純一郎 中村 昭嗣 長友 敏
根岸 哲也 早野 忠昭 藤枝 孝一
本多真寿美 宮田 正照 宮田 幸平
柳田 優 山口 栄三 山口 芳一
山田亮一郎

退会者
金 野 豊 天理大学

佐 橋 由 美
奈良県北葛城郡香芝町藤山1
瀬山台ハイッ302

中 西 純 司
茨城県つくば市並木2-112-102
電話 0298-52-0266

佐 竹 弘 晴 専修大学
町田市町町1-20-6 ミニカー版本203
電話 0427-24-5952

鳴 井 啓
広島県佐伯郡大野町高島3-7-18-302

山 田 彰 一
992 沢市町表町1-4-2 山形県水産水産試験場
電話 0238-38-3214

住所不明者について
下記の方は住所が不明で、事務局で困っております。御存知の方がいましたら事務局まで御一報下さい。また住所変更の方がいましたら、至急御連絡下さい。名簿を近日中に発行の予定です。

会費納入について
学会では会費の未納の方が多いため、運営に支障を来している状況です。至急御納入下さい。納入状況不明の方もとりあえず今年度分を御納入下さい。詳細については整理の上御連絡いたします。御納入は郵便振替(東京4-33963)を原則といたしますが、会社、学校等で銀行を御利用の方は「富士銀行 青山支店」普通預金 205550 口座名 日本レクリエーション学会」を御利用下さい。よろしくお願いたします。

「創業基礎科学研究の推進について(勧告)」を採択

平成2年11月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る10月17日から19日まで、第110回総会を開催しました。今回の日本学術会議だよりは、その総会で採択された勧告を中心とし、同総会の議事内容等についてお知らせします。

日本学術会議第110回総会報告

日本学術会議第110回総会(第14期・第6委員)は、平成2年10月17日-19日の3日間開催された。1 総会第1日目の冒頭に、先に死去された、時永誠委員(第3部)及び大谷茂隆委員(第5部)を追悼して祝詞を述べた。続いて、会長の経路報告、各部・委員報告の後の、内閣改正、勧告、対外報告の3案の採決説明が行われた。これらの案件については、同日の午後の各部会での議決を経て、第2日目の午前中に議決された。2 今回総会で採択された事項は以下の通りである。

- (1)日本学術会議の運営の刷新に関する内閣の閣内改正
(2)創業基礎科学研究の推進について(勧告)
(3)第6常設委員会報告-外国人研究者・大学院留学生受入れに関する問題と改善の方策について(要旨)

本日は、創業基礎科学研究推進委員会と地理学研究所委員会の提案から検討結果を勧告案として取りまとめ、第7部議決まで、今回総会に付議したものである(この勧告の採決は、別項参照)。この勧告は、同日午後3時に内閣総理大臣に提出され、関係府省に送付された。

(3)第6常設委員会報告-外国人研究者・大学院留学生受入れに関する問題と改善の方策について
本日は、第6常設委員会が、今回の重要課題の一つとして事業を重点として「特別報告」として取りまとめたものを、外閣に提案することにより採択したものである(この報告の詳細は、別項参照)。

3 以上の採決及び提案議決のほかに、特に、近畿委員長から、前回総会で採決されたアフリカ共和国科学者の我が国入国をめぐる問題については、その後、外務省と折衝した結果、ビザ発給手続の合理化(議決が差し戻し、折衝された結果)の採決が採られたとの報告があった。また、建築事項採決後行われた自由村議決は、大学等高等教育関係予算算出問題、通信手段に関する法規制問題等について意見交換が行われた。

4 第2日目の午後は、「特別委員会審議状況報告に基づく意見交換」が開催された(この意見交換の詳細は、別項参照)また、第3日目の午前中には各特別委員会が、午後には各常設委員会がそれぞれ開催された。

創業基礎科学研究の推進について(勧告)

(勧告本文)

複雑な技術の創製すなわち創業の研究は、空前の老練化社会を目前にして、若い男女長等を担担する産業社会発展のための、さらに日経的立場から地球上の全人類の福祉に貢献するため、我が国にとって大きな意味を持つのである。特に、多くの人類、老若無別、またエスエスやいかなる種族等についての年齢を予見し、治療の効果が期待されている。しかしながら、これらの患者に対する優れた医療の創製は世界的にみて医療創製のよりどころとなるべき基礎理論、研究技術の発達が十分でない状態を占めている。とりわけ我が国は先進国の一角を占めているとはいえず、大学、企業、公的研究所間に、ひとつの情報の手掛り、治療に必要とする知見と技術の隔絶が顕著である。これによって人類の福祉の上で重要なことは、現地の我が国にとって重要な課題である。

このため、早急に創業基礎科学研究の推進組織を設け、これを核とした強力かつ広範な研究態勢の確立を図るべきである。これに当たっては、医療の創製における倫理の厳格な基本理念とし、主体倫理及び倫理の解析研究とそれに基づいた創製、創製過程の創製を指向する分子設計並びに倫理・安全性評価の基礎理論の創製、さらに薬物・安全性の創製技術、生体の動物モデル・シミュレーション技術等、各種の新技術の開発研究を特に重視すべきである。

この研究推進組織の設けには、関係者が関係すると共に、地方自治体、大学及び民間の参画を可能とし、また、関係科学分野の学際的ネットワークを構築するなど多大の社会的努力と資源による研究の推進を図らねば、期待の効果を創製し得る影響が十分である。

日本学術会議は、創業基礎科学研究の推進を図るため、上掲の趣旨に基づいた必要な施策を速やかに講ずるよう勧告する。

第6常設委員会報告-外国人研究者・大学院留学生受入れに関する問題と改善の方策について(要旨)

(平成2年10月18日 第110回総会承認)

外国人研究者・大学院留学生の受入れを促進するうえで、言語、研究環境、外国人研究者の活用、大学院留学生の学位、外国人研究者・大学院留学生の生活問題がある。日本学術会議は研究の対象とする学問分野や研究職との関係が保たれなければならない。分野によらず、日本語能力は日常生活に必要なものであり、研究のためには英語の能力が必要である。研究者の受入れに当たり、その研究に結ぶべき利益が又実現の能力を有する者を中心とするべきである。研究を奨励するものとするべきである。

1 貴国が研究環境の備え、また十分な研究費を持たないまま外国人研究者を受け入れるべきではない。外国人研究者の受入れを促進するだけでなく、日本人研究者の海外を奨励する。また劣悪な居住環境や、事務局等の対応組織の不備も、外国人研究者の研究活動を妨げる。国は、研究環境を整備することに対して十分な予算措置を講ずべきである。

在外国の大学における外国人研究者の雇は、その適性が認められていると見做され、また十分な、外国人研究者の任用に関して広く情報を提供する機関の確立、あるいは大学等において外国人研究者を一定数受け入れる体制の確立が望まれる。

外国人研究者の選考については、受入れ機関の研究者の意見を理解し、公正な審査を行うことが大切である。大学院留学生については、素養の多様化と学生の意欲に伴って多くの問題が生じており、日本学術会議に該案の改善が望まれる。

第110回総会特別委員会報告-日本における創製学の教育と研究(現状の考察と将来への展望)(要旨)

(平成2年9月21日 第110回総会承認)

自然科学の急速な発展に伴い、医学部、医科系における創製学、研究・教育の分野に、大きな変化が生じた。すなわち研究手法の革新、研究分野の分化、既知の学問領域の進歩に加えて、新たな学問分野が分化し、教育内容は多様化すると共に難しくなった。さらに人口の増加と高齢化、経済の成長と種々の学問領域の分化も増加しており、医学における教育・研究の重点も目的も変化が激しく、それらは、これまで医学の基礎を形成してきた伝統的な論理に、とりわけ倫理を尊重し、その在り方について検討し、改善をはかる必要性が生じた。

本報告は、このような状況を踏まえ、我が国における創製学の教育と研究について、現状を考察し、今後の在り方に関する指針をまとめたものである。報告では、創製学の基礎理論、医学教育と研究における創製学、創製学の基礎理論、創製学の意義、医学部組織及び社会との関係などの、現状と問題点について検討し、将来の取組と対応すべき改善の方策を明らかにすると共に、将来に向けての展望が示唆された。

総会中の「特別委員会審議状況報告に基づく意見交換」

今回総会の第2日目の午後は、1時から4時間行われて「特別委員会審議状況報告に基づく意見交換」が行われた。従来の総会には、その時々学術上の重要課題を取り上げて、会による「自由討論」が行われてきた。今回は、これに代わり、議題となる問題を抽出し、余りこの9か所が不足となったこの議題として、今期第110回総会に採択された第14期活動計画において、「緊急に審議を待たされた第14期に適切に報告・採決を取りまとめるべき重要課題」として採択された各特別委員会から、今までの審議状況を報告して、それに基づいて会員の意見交換を行っていただくこと、研究を奨励するものとするべきである。

1 まず最初に、医療技術と社会に関する特別委員会審議状況報告(第7部)から、同委員会が「創製学の発展」に関する審議の経過を取りまとめた「中環まとり」について報告がなされた。これは「日本人の国民性に関する死の概念との取り方」編者採決を必要とする患者と倫理提供の取組の両方、「死の決定の権利のあり方」。「前期の学術会議における倫理問題に関する審議状況」の関係、等について意見交換が行われた。

2 次に、農業、農村開発特別委員会の水産委員長(第6部)から、同委員会が今後取りまとめることを予定している「農業、農村の今後の発展と課題」の報告について報告がなされた。報告の先進国との比較の重要性、「国内の政治との関係」、「農業の発展に資する日本農業の競争力強化」、「農業を始める農業」、「農村の発展と地域開発に関する特別委員会の方針」(第4部)から、同委員会が採決を取りまとめる「人間関係と地域開発」に関する日本学術会議の「特別委員会」について報告がなされた。これは「地球環境問題の重要性」、「国際協力」等の国際的定率のあり方、「医学・保健問題との関係」、「地域環境保全と経済成長との関係」、「南北問題との関係」等について意見交換が行われた。

第110期日本学術会議委員選出のための登録学術団体の状況

本委員会は、現在第110期(平成3年7月22日-平成6年7月22日)委員(定員20人)選出のための手続が完了しているが、登録委員は平成2年12月31日現在、学術団体からの登録申請が受け付けられた。その後日本学術会議委員推薦管理規定が施行され、結果は次のとおりであった。

- 登録学術団体の登録申請の書類数
申請団体数.....92団
登録団体数.....91団体

日本学術会議委員推薦管理規定が登録した91団体は、日本学術会議月報平成2年12月号に掲載されるので、御参照ください。

御意見、お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。
〒106 東京都港区六本木2-22-34
日本学術会議広報委員会 電話03(403)6291

6月定例研究会

特別フォーラム

生涯スポーツ時代に向けての「新大学体育」ビジョン
-人生80年代のレジャーとスポーツ-

現在、わが国の大学は、大学環境の急激な変化に適合するために、現行の大学システムをいかにリフォーミングするか他に「関心」を寄せている。この大きな変化の流れの中で、教養課程の大学体育を、いかにリフォーミングするか、この問題も関係者の間で、真剣に議論されております。日本レクエーション学会のメンバーには、大学体育の関係者が多いということもあって、一度この問題を取り上げ、全員討論参加のフォーラムを開催することになりました。みなさまお誘い合わせの上、多数ご参加下さいませようご案内申し上げます。

フォーラム構成

- ①基調講演 教養としてのスポーツ
-大学体育に期待されていること-
宮丸 凱史 筑波大学教授
②PART I 大学体育のリフォーミングとイノベーションの現状
問題提起者 師岡 文男 上智大学
③PART II 大学スポーツの価値
-大学体育・体育会・同好会の未来-
問題提起者 黒田 信寛 明治大学教授
④PART III 生涯学習時代に向けてのスポーツ・サービス
-ハードウェアとソフトウェアのデザイン-
問題提起者 村越 真 静岡大学助教

- ⑤期日 1991年6月29日(出午後1:30-6:00)
⑥場所 日本大学文理学部会議室(原下階下海井中庭、発行者の場合は原上水車庫)
⑦懇談会 フォーラム終了後会員相互の親睦をはかるためにパーティを開きます。
⑧参加費用 資料代、パーティ代の実費(3,000円を予定)を当日いただきます。
⑨申込方法 電話またはハガキで日本レクエーション学会事務局へ
電話 03(3498) 6 9 3 9 (直線)

学会ニュース

NO.48
June 1991

日本レクレーション学会

発行人 田中誠雄 編集 広報委員会
事務局 〒150 東京都渋谷区渋谷4-4-25
青山学院大学2号館202室気付
電話 03-3498-6939
郵便振替 東京4-33963

第21回学会大会開催

日時 1991年11月9日(土)・10日(日)
会場 名古屋市朝日会館

11月9日(土) 基調講演
シンポジウム
懇親会
11月10日(日) 研究発表
理事会・総会*
研究発表

- *総会議題
1. 中間会計報告について
2. 学会名称変更について
3. 規約改正について
4. その他

〈研究発表申込みについて〉

○本号ニュース4ページを御覧ください。

常任理事会報告

- (第5回)
日時 1991年1月25日(山午後6時～8時30分)
会場 青山学院大学総合研究所
議題
1. 新入会員の件
2. 21回学会大会の件
... (第7回)
日時 1991年3月2日(出) 午後5時～7時
会場 東京家政大学三番町キャンパス

報告事項

- 1. 退会者の確認
2. 入会者の件
3. 月例研究会の件
協議事項
1. 学会大会のテーマについて
2. 学会名称変更について
... (第8回)
日時 1991年4月6日(出)午後6時～8時
会場 東京家政大学三番町キャンパス
報告事項
1. 入会者の件
2. 退会者の件
3. 学会名称について (各支部の報告)
大阪支部.....
レジャー・レクリエーションがよい。
九州支部.....
レジャー・レクリエーションがよい。
現状でよい。
... (第8回)
日時 1991年6月29日、会場は日大文理学部

第21回学会大会研究発表申込について

研究発表申込は各自ハガキに演題、発表者名、所属、住所、電話番号を記入して下記宛に送付して下さい。

宛先 〒305 茨城県つくば市玉台1の1
筑波大学体育科学系 吉田 章
大 学 0298-53-6334
F A X 0298-53-6507

切日 1991年 7月10日

第21回日本レクリエーション学会大会発表論文集

原稿提出要領

- 1. 印刷・製本
発表論文は、提出された原稿をそのまま編
写し、論文一冊につきB5版見開き2頁にオ
フセット印刷され、レクリエーション研究大
会発表論文集として製本される。
2. 原稿用紙
提出原稿は、指定の原稿用紙(A4版)2
枚に限る。なお予備を含め合計4枚の原稿用
紙が同封されている。
3. 文 字
本文文字は、邦文タイプ(4号活字)または
ワードプロセッサ(12ポイント・24ドット
以上)を用いて、横書きも印字したものに
限る。
4. 演題・氏名等
① 演題は、原稿用紙上部第1行と2行を用
い、副題がある場合には行を改めて記載す
る。
② 演題は、本文より大きな活字または倍
角文字を用いること。
③ 氏名は、演者と共同研究者について行を
改めて区別し、演者には氏名のすく前に○
印を付けること。
④ 所属機関名は、氏名に続いて()内に記
入する。また複数の共同研究者が同一の機
関に所属する場合は、まとめて()内に
記入する。

〈会員動静〉

●新入会員

Table with 4 columns: 氏名, 所 属, 推 薦 者. Includes members like 長 嶺 仁 (筑波大学), 小 河 幸 次 (北海道東大), etc.

●退会者

Table with 2 columns: 氏名, 所 属. Includes members like 村 山 幸 子 (日本女子体育大), 斎 芳 江 (同志社女子大), etc.

学会ニュース

No. 49
Oct. 1991

日本レクリエーション学会

発行人 田中麻雄 編集 広報委員会
事務局 〒362埼玉県上尾市戸崎-1
女子聖学院短期大学・聖学院大学
電話 048-781-0031
FAX 048-726-2962
郵便振替 東京5-602353

第 21 回 学 会 大 会

日 時 1991年11月9日(土)・10日(日)
会 場 朝日会館
〒460 名古屋市中区栄1-3-3
大会テーマ『人生80年代の
レジャー・レクリエーション』

11月9日(出)

- 13:30 受付
14:00 基調講演『豊かな時を創る為にー70万時間の人間化ー』
講師 加藤 雅氏 (経済企画庁国民生活局長)
15:00 シンポジウム
テーマ『現代レジャー・レクリエーションの直面する課題』
1. 村おこし・町おこし
講師 山崎 充氏 (静岡県立大学教授)
2. リゾート開発
講師 辻 静氏 (株・名鉄総合企業取締役)
講師 下村彰夫氏 (東京大学農学部助手)
3. 福祉・教育
講師 大田弘子氏 (生命保険文化センター・研究員)
18:00 懇親会

第21回日本レクリエーション学会発表演題

= A会場 =

- 9:00 〈座長:松田編導〉
A-1 「我が国古典文学に見る「余暇・生活文化」
能力の評価」
～「赤氏物語」を中心に～
木村 恵子 (財・余暇開発センター)
A-2 「社会体育専攻学生の友人関係における話題
と契機についての調査研究」
～とくにその生きがい感とのかわりから～
真田 倫子 (余暇問題研究所)
A-3 「現代女子大生のスポーツ意識の動向」
～大学間の比較～
松浦 三代子 (東京女子体育大学)
10:00 〈座長:野川肇夫〉
A-4 「女性の余暇活動に影響を及ぼす要因に関
する研究(1)」
～妻の余暇活動に対する夫側の意識調査から～
野村 一徳 (日本体育大学)
A-5 「女性の余暇活動に影響を及ぼす要因に関
する研究(2)」
～妻の余暇活動参加パターン分析から～
三宅 基子 (財・日本レクリエーション会)
A-6 「余暇行動の実態に関する日・韓比較研究」
～経済発展と内住・外出の要因との関わりから～
伊 光敏 (中央大学大学院)
11:00 〈座長:山口善雄〉
A-7 「レクリエーション運動の展開に関する一考察」
～偏に視点をあてたプログラムの試み～
宮下 桂治 (順天堂大学)
A-8 「レクリエーション運動の展開に関する一考察」
～偏に視点をあてた余暇情報提供システムの
開発について～
戸田 安信 (船橋市自選人協会)
A-9 「レクリエーション運動の展開に関する一考察」
～市民の意識変化に対応した英政策から～
木村 博人 (東京水産大学非常勤講師)

12:00-13:00 理事会

13:00-14:00 総会

14:00 〈座長:宮下桂治〉

- A-10 「公共体育館の利用とその誘因に関する研究」]
～利用者の居住分布との関係～
原田 淳子 (中央大学)
A-11 「公共体育館の利用とその誘因に関する研究」]
～利用者の活動内容と施設満足度との関係～
佐藤 肇 (中央大学大学院)
A-12 「スポーツ施設のプロダム評価に関する研究」]
～特にプログラム・ライフサイクル分析につい
て～
原田 尚幸 (大阪体育大学特別研究生)
15:00 〈座長:藤原健司〉
A-13 「スポーツイベントへの評価に関する比較研究」]
～ホノルルマラソンvs指宿菜の花マラソン～
野川 肇夫 (鹿屋体育大学)
A-14 「トライアスロン参加者の満足要因の分析」]
太田 繁 (聖徳大学短期大学部)
A-15 「日常的ライフスタイル因子とパケージ
ン・ライフスタイル」]
北村 尚浩 (鹿屋体育大学大学院)
A-16 「幼少年期のレジャー行動と青年期のチャン
ピオンスポーツ志向」]
田辺 英夫 (日本大学)

＝B会場＝

- 9:00 (座長:守能信士)
B-1「商業スポーツクラブ指導者の職務満足に関する研究」
～因果理論を適用して～
岳藤 史幸 (大阪VCA社会体育専門学校)
- B-2「レクリエーション上級指導者に関する研究Ⅰ」
～指導者の活動実態について～
永松 昌樹 (中央大学大学院)
- B-3「レクリエーション上級指導者に関する調査研究Ⅱ」
～指導及び資格に対する意識を中心に～
仲野 隆士 (中央大学)
- 10:00 (座長:鈴木秀雄)
B-4「社会福祉分野における“レクリエーション指導”概念の変遷と展望」
～主として高齢者福祉分野を中心として～
千葉 和夫 (日本社会事業大学)
- B-5「障害児キャンプ指導者のボランティア活動の継続に関する研究」
～ボランティア活動に対する価値意識と役割意識について～
楠 祐二 (東京国立大学)
- B-6「重症障害者を対象とした関わり方に関する一考察」
～重症心身障害者の余暇生活支援を促進する～
茅野 宏明 (武蔵川女子大学)
- 11:00 (座長:千葉和夫)
B-7「ブランドスキー参加者の意識」
～アンケート調査の結果から～
渡辺 文治 (神奈川総合リハビリテーションセンター)
- B-8「熟年者の余暇活動に関する研究」
藤本 達也 (大阪体育大学スポーツ産業特別講座)
- B-9「高齢者のスポーツに関する調査研究」
～グラウンド・ゴルフ愛好者を対象として～
佐橋 由美 (樟蔭女子短期大学)
- 12:00～13:00理事会
- 13:00～14:00総会
- 14:00 (座長:嵐野勉男)
B-10「高齢者のスポーツイベント参加における意識と行動」
山口 泰雄 (神戸大学)
- B-11「キャンプに対する高齢参加者の意識(2)」
～事前事後における不安の変化を中心として～
中島 一郎 (国際武道大学)
- B-12「キャンプと健康(第2報)」
～キャンプにおける高齢者の加速老化および血圧の変化～
川村 協平 (山梨大学教育学部)(スライド)
- 15:00 (座長:松浦三代)
B-13「ダンスパーティー中心の心拍反応について」
竹内 正雄 (星薬科大学)(スライド)
- B-14「レクリエーションダンスにおけるattractiveな動きの研究」
～上肢について～
井上 九美 (樟蔭女子短期大学)
- B-15「環境教育の視点を持つ野外レクリエーションプログラムの開発に関する研究Ⅱ」
～環境教育プログラム・ネイチャーゲームの分析～
大島 順子 (日本体育大学)(スライド)
- 16:00 (座長:下村彰男)
B-16「都市近郊の歩く道“京都トレール”の思考と設定方法」
塚本 瑠一 (大阪薫英女子短期大学)
- B-17「関東地方におけるゴルフコースの立地特性について」
油井 正昭 (千葉大学園芸学部)

□(規約改正(案)に伴う参考資料)

下記の通り規約改正検討委員会(8月30日・於日本大学文学部)および常任理事会(9月28日・於日本大学文学部)において討議・検討された規約の改正および問題点を報告致します。学会大会総会において、規約改正も議題となっておりますので会員のみなまから事前のご意見を文書にて事務局にお寄せください。

－現行－

日本レクリエーション学会会則

- 【第1章 総則】
第1条 本会を日本レクリエーション学会(英語名: Japanese Society of Leisure and Recreation Studies)とする。
第2条 本会の目的は、レクリエーションに関する調査研究を促進し、レクリエーションの発展に寄与する。
第3条 本会の事務局は、東京都港区六区4-4-21 青山学院大学正門東2000研究室に置く。
- 【第2章 事業】
第4条 本会は第1条の目的を達成するため、次の事業を行う。
1. 学会大会の開催
2. 研究会、調査会の開催
3. 機関誌の発行ならびにその増補活動
4. 学費の徴収
5. 内外の機関団体との連絡との連絡と情報の交換
6. 会員相互の連絡
7. 本会の事業の発展に資する事業
第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、議決事項を議決する。
- 【第3章 会員】
第6条 本会は正会員のほか、賛助会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。
1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の権利および、理事会の承認を経て、規定の会費および会費を納入した者とする。
2. 賛助会員は、学費、研究費等を支拂い、かつ自らに集むる資を充てる。
3. 特別賛助員は、本会の目的に賛同する特定の責任者とする。
第7条 正会員の申請は、本会の事業に賛同の意思をもった者で、理事会の承認を得た者とする。

－改正(案)－

日本レジャー・レクリエーション学会会則

- 【第1章 総則】
第1条 本会を日本レジャー・レクリエーション学会(英語名: Japan Society of Leisure and Recreation Studies)とする。
第2条 本会の目的は、レジャー・レクリエーションに関する調査研究を促進し、レジャー・レクリエーションの普及・発展に寄与する。
第3条 本会の事務局は、埼玉県上尾市(旧1)聖学院大学、女子聖学院短期大学内に置く。
- 【第2章 事業】
第4条 (現行どおり)
第5条 (現行どおり)
- 【第3章 会員】
第6条 本会は正会員のほか、賛助会員、賛助会員、および名誉会員を置くことができる。
1. 正会員は (現行どおり)
(旧2、3は削除)
2. 賛助会員は (現行どおり)

第16回常任理事会議事録

日時 1991年12月24日(火)午後6時25分～
場所 鍋茶屋 新宿区歌舞伎町
出席者 浅田 田中 松田 杉尾 松浦 吉田 梅津 深山

1. 学会大会の反省
・基調講演加藤局長への公文書(実行委員長)発送を怠った件につき、実行委員会の依頼により11月9日田中氏、松田氏が謝罪に伺った。
・全国理事会を前日の午前中にしてはどうか。
・常任理事会で整理された議題を全国理事会にかける。
・全国理事会では採決で議案を決定してはどうか。
・学会大会の開催システムを確立するとうい。
・学会運営の合理化をはかるため、外注もとりいれてはどうか。
・大綱は本部、その他を支部にまかせてはどうか。
・実行委員長が理事会に出席してはどうか。今回は名古屋から2回、東京から1回。
・秋吉氏が90年度の監査をしたことにより、徳久氏が事務局運営を続けられた。
・本部の役員が実行委員に加わる。
・会長の補佐がより必要ではないか。
・役員が少なく、機能失調だったのでは。
・発表者に学会費未納者が多かった。
2. 次回大会
・立教大学池袋校舎、11月14、15日前後。
・学会大会会長を立教大学学長にお願いしてはどうか。
・地方での開催は当然無理なので、暫くは本部で企画・開催する方向で1年間検討。
・シンポジウムは会員で行ってはどうか。
3. 研究会
・日大文学部本館1階会議室
・2月29日(土)卒論発表とシンポジウム「学校の週5日制」
・4月4日、6月6日、9月5日、12月5日に開催の予定。
4. 学会ニュース
・次回は1月発行。
5. その他
・国際レジャー学会に加入する。
・徳久氏からの詫げ状を理事にコピーして送る。
・名簿は3月中に発行予定。あいうえお順、果別。
・会費未納者については、再入会と同額の年度まで遡って請求する。
・四国に支部をという要望がある。
・大会の会計報告を提出してもらおう。
・通称「JLRR学会」とし、マークを公募する。

－現行－

5. 議決委員は、本会の機関誌を編集・刊行する。
6. 名誉会員は、本会に特別貢献のあった者で、理事会の議決を経て承認された者とする。
7. 賛助員は、本会の機関誌に特別の寄稿(紙)等の寄稿を受けるか、自らに集むる資を充てることとする。
8. 賛助員は、本会として会費の納入を受けた者か、自らに集むる資を充てることとする。
9. 賛助員は、本会の事業に賛同の意思をもった者で、理事会の承認を得た者とする。
10. 特別賛助員は、本会の目的に賛同する特定の責任者とする。
- 【第4章 役員】
第10条 本会を運営するために、総会において正会員のの中から次の役員を選出する。
顧問1名、会長1名、副会長若干名、理事若干名、理事若干名、監事若干名
第11条 顧問は、機関誌、機関誌の発行に賛同して活動する。会長は本会を代表し、会務を統括する。副会長は、会長を補佐し、会長を補佐する。副会長は、会長を補佐し、会長を補佐する。理事は、理事会を組織し、理事会を執行する。監事は、理事会に賛同の意思を有する者とする。
- 第12条 役員は任期は2年とする。但し再任をさまたげない。役員の出選についての規則は別に定める。
第13条 本会に名誉会員および顧問を置くことができる。
2. 名誉会長は理事会の推薦により会長が委嘱する。
3. 顧問は、本会の会長又は副会長であった者および本会に功勞のあった者の中から理事会の推薦により会長が委嘱する。

－改正(案)－

3. 議決委員は (現行どおり)
4. 名誉会員は (現行どおり)
第7条 (現行どおり)
第8条 ()
第9条 ()
【第4章 役員】
第10条 本会を運営するために、総会において正会員のの中から次の役員を選ぶ。理事25名以上30名以内(うち会長1名、副会長若干名、および理事長1名)、監事2名
2. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるとき又は会長が欠けたときは、会長が予め指名した順序により職務を代行する。
3. 理事長は、理事会を統括し、理事は会務を執行する。
4. 監事は、会計および会務の執行状況について監査する。
第12条 役員は任期は2年とする。但し再任をさまたげない。役員の出選についての規則は別に定める。
第13条 本会に名誉会員および顧問を置くことができる。
2. 名誉会長は理事会の推薦により会長が委嘱する。
3. 顧問は、本会の会長又は副会長であった者および本会に功勞のあった者の中から理事会の推薦により会長が委嘱する。

一実行一

〈第5章 会議〉

第14条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第15条 総会には、毎年1回開催し、役員選出および本会の重要に関する重要事項を審議決定する。

第16条 理事会は、毎月1回開催し、役員選出および本会の重要に関する重要事項を審議決定する。ただし、正会長の同意をもって決定される。

第17条 理事会が重要事項を議決し、出席者の過半数をもって決定される。

第18条 理事会が重要事項を議決し、出席者の過半数をもって決定される。ただし、正会長の同意をもって決定される。

第19条 理事会が重要事項を議決し、出席者の過半数をもって決定される。ただし、正会長の同意をもって決定される。

第20条 理事会が重要事項を議決し、出席者の過半数をもって決定される。ただし、正会長の同意をもって決定される。

第21条 理事会が重要事項を議決し、出席者の過半数をもって決定される。ただし、正会長の同意をもって決定される。

〈第6章 支部および専門分科会〉

第22条 本会の事業を推進するために、支店ならびに専門分科会を置くことができる。

第23条 支店ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

〈第7章 会計〉

第24条 本会の経費は、会費、寄付金およびその他の収入をもって支拂する。

第25条 本会の会計は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円
2. 正会費 年額 1,500円
3. 学生会費 〃 〃
4. 賛助会費 〃 〃
5. 副会費 〃 〃
6. 購読会費 〃 〃
7. 名譽会費 〃 〃

第26条 本会の会計年度は毎年4月1日から、翌年3月31日までとする。

付 則

1. 本会の会計は、総会において出席者の2/3以上の賛成により変更することができる。

尚、規約検討委員は鈴木秀雄（委員長）、鈴木祐一、寺島善一、毛塚宏、師岡文男、深山千穂子、梅津由子氏の各氏です。

*役員選出方法については、常任理事会において規約改正検討委員（鈴木秀雄）の報告を得て審議することになっています。

〈会員動静〉

●入会者

氏 名	所 属	推 薦 者
大 橋 理 恵	聖徳大学	野 川 春 夫
佐 藤 馨	中央大学	仲 野 隆 士
田 原 淳 子	中央大学	仲 野 隆 士
徐 相 王	中央大学	藤 原 健 樹
金 忠 晃	中央大学	守 能 信 次
梶 守 甫	中央大学	守 能 信 次
西 村 登 美 子	聖ヨハネ桜町病院	会 長
西 岡 英 則	株・余暇問題研究所	高 橋 和 敏
橋 本 和 秀	株・余暇問題研究所	高 橋 和 敏
萬 田 倫 子	株・余暇問題研究所	高 橋 和 敏
萩 由 美 子	鹿屋体育大学	野 川 春 夫
太 田 繁	聖徳大学短期大学部	野 川 春 夫
太 田 あ や 子	団順武道大学	野 川 春 夫
神 吉 賢 一	神戸大学	山 口 泰 雄
鈴 木 明	聖学院大学	梅 津 由 子

●退会者

- 坂本忍
- 久保田康夫
- 建田恭子
- 森園啓子
- 里楽悦郎

〈研究誌論文募集〉

レクリエーション研究第24号の論文を募集しています。
 〓切は12月末日。

事務局が以下の通りに変更になりました

女子聖学院短期大学
聖学院大学

〒362 埼玉県上尾市戸崎1番1号
 電話 (048)781-0031 (代)
 F A X (048)726-2962
 郵便振替 東京5-602353
 住 当：梅津・深山

常任理事会報告

〈第9回〉

日時 1991年5月11日(日)午後6時～8時
 会場 日本大学文学部
 出席者 浅田、田中、前野、鈴木祐、黒田、松田、松浦、梅津、師岡

議題 1. 学会ニュースについて
 2. 学会大会の内容について
 発表者の申し込み、学会テーマ、シンポジウム、基調講演
 東海支部との連絡方法等
 3. 6月のフォーラムについて
 「大学スポーツビジョン、大学にとってのスポーツの価値」
 6月29日(土)午後1時30分～6時
 基調講演…宮丸眞史氏、PART I…師岡文男氏、PART II…寺島善一氏、PART III…中田裕久氏

〈第10回〉臨席

日時 1991年6月1日(日)午後6時～8時
 会場 私学会館(アルカディア市ヶ谷)
 出席者 浅田、田中、松田、松浦、梅津

議題 1. 学会テーマ・シンポジウムについて
 東海支部からの提案を報告・検討
 大会テーマ「人生80年時代のレジャー・レクリエーション」シンポジウム基調講演「70万時代の人間化」加藤雅氏(案)

1. 村おこし・町おこし
2. リゾート開発と環境
3. 福祉と教育(大田氏案)

講演者は松田氏が担当交渉する。

〈第11回〉

日時 1991年6月29日(日)午後6時30分～8時
 会場 日本大学文学部
 出席者 浅田、田中、前野、黒田、松田、杉原、梅津、師岡、芳賀、赤井

議題 1. 学会テーマ・シンポジウムの講師について
 ①村おこし・町おこし…中田裕久氏から山崎友氏に変更、交渉は松田氏が担当。
 ②リゾート開発…前野氏と下村氏で相談し、近鉄、名鉄、阪急の会社内で該当者の

人選にあたる。
 ③福祉・教育…大田弘子氏…松田氏が交渉する。
 2. 学会大会の発表申し込み締め切りを8月10日に延長する。

〈第12回〉

日時 1991年7月8日(日)午後6時～8時
 会場 私学会館(アルカディア市ヶ谷)
 出席者 浅田、田中、前野、黒田、松田、杉原、梅津

議題 1. 事務局の現状について
 現在の事務局運営に問題が生じ、同時に徳久氏から辞任の申し入れもあることから、事務局移転について検討。
 2. 研究フォーラムについて
 7月・8月は中止、9月から開始する。
 次回は9月28日(日)午後3時～日本大学文学部「ゆとりプロジェクト研究について」
 講師 米村恵子氏の予定

〈第13回〉

日時 1991年8月19日(日)午後1時～3時
 会場 明治大学和泉校舎
 出席者 浅田、田中、前野、黒田、藤本、松浦、梅津

議題 1. 事務局移転と編纂について
 1991年7月13日(日)午前11時、女子聖学院短期大学において学長(W-Gレラー)と浅田会長が事務局受入れの承諾書を取り交わした。
 前事務局との引継ぎは藤本氏と星野氏(秋吉氏の代理)が会計監査をし、理事長が立ち会う。

〈第14回〉

日時 1991年9月28日(日)午後6時～8時
 会場 日本大学文学部
 出席者 浅田、田中、前野、鈴木祐、黒田、杉田、梅津、松浦、梅津、深山、師岡、木村、梅津

議題 1. 会員の退会・入会者
 2. 規約改正について
 3. 大会ニュースについて
 4. 総会の内容について
 5. 編集委員会について

学会ニュース

No. 50
January 1992

1992年1月
日本レジャー・レクリエーション学会
(Japan Society of Leisure and Recreation Studies)
発行人 田中綱雄 編集 広報委員会
事務局 〒362 埼玉県上尾市戸崎 1-1
女子聖学院短期大学・聖学院大学
電話 048-781-0031
FAX 048-726-2662
郵便振替 定款5-602353

年頭所感

会長 浅田隆夫

新しい年を迎えて心をあらたにし、今年もまたよい年でありませう。会員のみならずともども学会発展のために努力したいと思っておりますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

Ⅰ「申」年所想

原にちなんだ感はかなたりますが、その殆どは人間のあまりよくない行為に対していわれているように。

しかし、私にとっての象のイメージは、3才頃、当時小学校の教師をしていた母が話してくれた「狩人」と母の「子」の会話の内容です。

それは、「竹深い山奥で、ある日、狩人が1匹の母鹿を射止めた。それをわが家に持ち帰って十四日も居ておいた。ところが、どこから来たのか子鹿が3匹、代わるがわるやってきて悲しみが冷たくなった母鹿の体を自分の体で温め、生き返らせようとする夢になっていた。この夢をみていた狩人は、母を餌子鹿の愛情に胸をうたれた。それ以後、鹿を止めぬ」といった内容の話でした。

この夢の母の愛情の物語は、以後の私の情緒の発達に決定的な役割を果たしたことは言うまでもありませんが、この物語は何から、「思いやり」の心が欠如しているといわれる現代人に1つの教訓を与えてくれているように思います。

Ⅱ「人は石垣」ということ

本学会は創設以来、今年で28周年を迎えますが、当初より学会開催などは「日本レクリエーション協会」と共催という形でなされてきました。3年前から学会の独自性を考え、学会会・行事は独自で開催されるようになりました。ひとりだちで、開かれた日だけに行っていた行事を会員の方々と構築していきたいと思っています。

石垣は、それが崩れないように崩れかかっている。石垣はもう一度積みなおしをしなければなりません。再構築するには平素からご意見を改訂し、みなおすの力を培っておくこと、本来、学会員としては研究能力の基礎が形成されていないと新しい探求心も養われないと思います。

また、石垣を積み重ねていく場合、老若男女それぞれの経験が役に立つようなしなやかさも必要でしょう。若い者でも絶えず新しい知識を求めて研究に意欲を燃やしていき、地道に知識を貯えている年長者にとっても比類すべきものない程、能力差が生じてくるものです。特に、研究のサジェッションとコメントの豊かさについては、人文社会科学の分野では顕著な差が出て参ります。とにかく、老若男女貴重な経験や知識・独創性をうまく組み合わせるよりよいものと石垣を再構築していくことができたいと思います。

Ⅲ「脚不踏踏」ということ

不透明な今日の社会状況下では、自らの行動規範となる共通の価値観を自覚が容易に把握できず、そのためどこにおいても確固たるリーダーシップが発揮できないといえます。このような状況の中では、「道徳知識」、平凡でかつ斬新なアイデアをこめて作り出すだけでなく、ならないことをまっすぐな気持ちでやり抜くようにしたいものです。つまり、自分の属する世界を把握し、右顧左眈することなく、自分の与えられた日常の役割分掌を完全に遂行していくことが期待されます。

結論的には、個々が魅力的になることだともいえます。その人が魅力的になれば、行動のすべてが魅力的になるわけです。これと同じく学会が魅力的になり一躍活性化していくためには、会員の皆さん、わけても学会の運営に当られる方々の魅力的な活動が希求されるということです。今年もよろしくお願ひ申し上げます。

1) 第21回学会大会・総会開催される

第21回学会大会は、1991年11月9日(土)10日(日)の両日、朝日会館(名古屋市中区)において開催されました。講演者の都合によりプログラムの一部変更がございましたが、予定通りシンポジウム及び演題33題の研究発表が行われました。

2) 総会報告

(1) 規約改正案(学会ニュースNo.49で既報)が総会において承認されました。新規約全文を掲載します。

日本レジャー・レクリエーション学会会則

<第1章 総則>

第1条 本会を日本レジャー・レクリエーション学会(英語名 Japan Society of Leisure and Recreation Studies)とする。

第2条 本会の目的は、レジャー・レクリエーションに関する調査研究を促進し、レジャー・レクリエーションの普及・発展に寄与することとする。

第3条 本会の事務局は、埼玉県上尾市戸崎1-1 聖学院大学、女子聖学院短期大学内に置く。

<第2章 事業>

第4条 本会は第2条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 学会大会の開催
2. 研究会、講演会等の開催
3. 機関誌の発行ならびにその情報活動
4. 研究の助成
5. 内外の諸団体との連絡と情報の交換
6. 会員相互の提携
7. その他本会の目的に資する事業

第5条 学会大会は、毎年1回以上開催し、研究結果を発表する。

<第3章 会員>

第6条 本会は正会員のほか、賛助会員、講読会員、および名誉会員を置くことができる。

1. 正会員は第2条の目的に賛同し、正会員の推薦および理事会の承認を得て、規定の入会金および会費を納入した者とする。
2. 賛助会員は、本会の事業に財政的援助をなした者で、理事会の承認を得た者とする。
3. 講読会員は、本会の機関誌を講読する機関・団体とする。
4. 名誉会員は、本会に特別に貢献のあった者で、理事会の推薦を経て総会で承認された者とする。

第7条 会員は、本会の編集発行する機関誌(紙)等の配布を受け本会の営む事業に参加することができる。

第8条 会員にして会費の納入を怠った者および会費の名義を譲渡した者は、理事会の議を経て会員としての資格を停止されることがある。

第9条 会員は原則として、いずれかの支部に所属するものとする。

3) その他

(1) 学会名称変わる

日本レジャー・レクリエーション学会 (Japan Society of Leisure and Recreation Studies)

(2) 理事長報告

学術会議への登録手続き不履行については、前事務局長徳久雄雄氏(青山学院大学)の不手際によるものであり、遺憾ながら学術会議登録が次期に先送りされることとなった旨が理事長より報告があった。

(3) 1991年度 会計報告

前事務局(青山学院大学)における1991年3月末迄の報告です。(監査は秋吉嘉範氏、藤本祐次郎氏)

	収入の部	支出の部	
	勘定	予算額	決算額
前期繰越金	638,247	638,247	
年度会費	3,000,000	1,106,000	
入会金	30,000	18,000	
基金利息	1,000	2,762	
雑収入		3,000	
合計	3,669,247	1,768,009	

	支出の部	決算額	
	勘定	予算額	決算額
印刷費	500,000	358,810	
通信費	250,000	154,114	
事務用品費	40,000	26,947	
事務経理費	300,000	143,020	
寄附金助成	450,000	0	
専門委員会費	400,000	0	
会議費	200,000	151,123	
特別会計Ⅰへ	1,000,000	500,000	
特別会計Ⅱへ	200,000	200,000	
雑費	50,000	46,696	
繰越金	279,247	187,299	
合計	3,669,247	1,768,009	

年 度	会 費	人 数	小 計
1988年度	5,000円	1人	5,000円
1989年度	5,000円	13人	65,000円
1990年度	3,000円	12人	36,000円
	4,000円	1人	4,000円
	5,000円	182人	910,000円
1991年度	5,000円	20人	100,000円
1992年度	5,000円	2人	10,000円

<第4章 役員>

第10条 本会を運営するために、総会において正会員の中から次の役員を選挙。理事25名以上30名以内(うち会長1名、副会長若干名、および理事長1名)、監事2名

第11条 会長は本会を代表し、会務を統括する。

第12条 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは会長が欠けたときは、会長が平級指名した順序により職務を代行する。

第13条 理事長は、理事会を総括し、理事は会務を執行する。

第14条 監事は、会計および会務の執行状況について監査する。

第15条 役員任期は2年とする。但し再任をさまたげない。役員選出についての規則は別に定める。

第16条 本会に名誉会長および顧問を置くことができる。

第17条 名誉会長は理事会の推薦により会長が委嘱する。

第18条 顧問は、本会の会長又は副会長であった者および本会に功勞のあった者のうちから理事会の推薦により会長が委嘱する。

<第5章 会 議>

第14条 本会の会議は、総会および理事会とする。

第15条 総会は、年1回開催し本会の運営に関する重要事項を審議決定する。

総会は、会長が召集し、当日の出席正会員をもって構成する。

議事(会則改正を除く)は、出席者の過半数をもって決定される。

第16条 理事会が必要と認めた場合、もしくは正会員の1/3以上の開催請求があった場合、臨時総会を開くことができる。

第17条 理事会は理事長が召集し、会務を処理する。理事長は、運営の円滑化をはかため、常任理事会および幹事若干名を置くことができる。

<第6章 支部および専門分科会>

第18条 本会の事業を推進するために、支部ならびに専門分科会を置くことができる。

支部ならびに専門分科会についての規則は別に定める。

<第7章 会 計>

第19条 本会の経費は、会費、寄付金およびその他の収入をもって弁済する。

第20条 会員の会費は次の通りとする。

1. 入会金 1,000円
2. 正会員 年度額5,000円
3. 賛助会員 20,000円以上
4. 講読会員 5,000円

第21条 本会の会計年度は毎年4月に始まり、翌年3月に終わる。

付 則

1. 本会の会則は、総会において出席正会員の2/3以上を得た議決により変更することができる。
2. 本会則は、昭和46年3月21日より一部改訂する。
3. 本会則は、昭和51年5月1日より一部改訂する。
4. 本会則は、昭和55年5月11日より一部改訂する。
5. 本会則は、昭和56年11月8日より一部改訂する。
6. 本会則は、昭和57年6月12日より一部改訂する。
7. 本会則は、昭和58年10月30日より一部改訂する。
8. 本会則は、昭和59年6月9日より一部改訂する。
9. 本会則は、昭和62年10月17日より一部改訂する。
10. 本会則は、1991年11月10日より一部改訂する。

(特別会計Ⅰ) (単位：円)

収入の部		
摘要	予算額	決算額
前期繰越金	0	0
一般会計より	1,000,000	500,000
広告費収入	500,000	0
雑収入	0	16,500
合計	1,500,000	516,500

支出の部		
摘要	予算額	決算額
印刷費	1,000,000	306,940
委員会費	200,000	0
通信費	100,000	143,430
次期繰越金	200,000	66,130
合計	1,500,000	516,500

(特別会計Ⅱ) (単位：円)

収入の部		支出の部	
摘要	金額	摘要	金額
一般会計より	200,000	通信費	176,250
実行委員会より	100,000	印刷費	133,060
寄付		次期繰越金	-9,310
合計	300,000	合計	300,000

預金・現金残高

(平成3年3月31日現在) (単位：円)

種類	摘要	金額
銀行預金	富士銀行 211-2055550	28,582
郵便振替	郵便局 東京4-33963	* 214,000
現金	事務局保管	1,537
合計		244,119

注) * 4月25日現在(4月に印刷費の支払いをさかのぼってしたため)

一般会計繰越金	187,299 円
特別会計Ⅰ)繰越金	66,130 円
特別会計Ⅱ)繰越金	+) - 9,310 円
	244,119 円

1992年度 事業・予算計画

1. 事業・会計(現事務局)

現事務局における1992年、3月迄の事業計画に基づく予算ですが
総会で承認されました。

- | | |
|---|--------------|
| (1)機関誌
「レクリエーション研究」第24号、26号
第21回大会論文発表集 | (4)学会案内の作成 |
| (2)会報
「学会ニュース」NO48, NO49, NO50 | (5)月例研究会の開催 |
| (3)名簿の作成 | (6)発表論文発表会開催 |
| | (7)組織の充実・拡充 |

(一般会計)

収入の部		
科目	予算額	摘要
前期繰越金	187,299	
専攻会費	3,000,000	5,000×600名
過年度会費	2,000,000	5,000×400名
入会金	40,000	1,000×40名
広告費	300,000	
預金利息	2,000	
合計	5,529,299	

(特別会計Ⅰ)

収入の部		
科目	予算額	摘要
前期繰越金	66,130	
一般会計より	1,300,000	
合計	1,366,130	

支出の部		
科目	予算額	摘要
印刷費	1,000,000	
委員会費	100,000	
通信費	200,000	
予備費	66,130	
合計	1,566,130	

支出の部		
科目	予算額	摘要
印刷費	1,500,000	ニュース、名簿
通信費	500,000	ニュース、名簿
事務用品費	50,000	印刷、フロッピー
事務局運営費	300,000	アルバイト
専門委員会費	400,000	
会費	300,000	
支部補助金	450,000	150,000×3支部
特別会計Ⅰ	1,300,000	研究誌
特別会計Ⅱ	300,000	通信、印刷
予備費	429,299	
合計	5,529,299	

(特別会計Ⅱ)

収入の部		
科目	予算額	摘要
前期繰越金	-9,310	
一般会計より	300,000	
合計	290,690	

支出の部		
科目	予算額	摘要
印刷費	130,000	
通信費	160,000	
予備費	690	
合計	290,690	

卒業論文発表会及びシンポジウム

日時：1992年2月29日(土)

発表会 午後1時より
シンポジウム 午後3時より
「学校の週五日制について」(予定)

場所：日本大学文理学部1階会議室

なお、1992年度の研究会の開催は、4月4日、6月6日、9月5日、12月5日を予定しています。

総合スポーツ用品

エーススポーツ

大宮市日進町2-1735
TEL 048-651-8212

<会員動静>

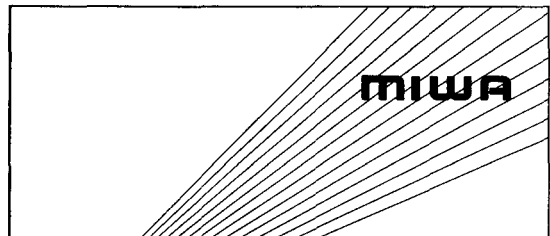
●入会者

氏名	所属	推薦者
柳 敏晴	鹿屋体育大学	川西正志
戸田安信	船橋市自遊人協会	宮下桂治
堀 健治	愛知教育大学大学院	影山 健
村岡真澄	愛知教育大学	山中島豊雄
降旗信一	ネイチャーゲーム研究所	会 長
西川佳克	松山学園松山福祉専門学校	藤田 碩哉
クリスティナ・カミレスカ	筑波大学大学院	松田 義幸

<研究誌論文募集>

レジャー・レクリエーション研究第24号は
3月末発行の予定です。なお、第26号の論文を募集しています。

(お知り合いの会員の方で郵便物が届かない方は、事務局まで御連絡ください。)



MIWA

総合印刷

三輪印刷株式会社

東京都北区滝野川7-9-4 宇114
TEL 03-5567-0321 10
FAX 03-5567-0323

第22回日本レジャー・レクリエーション学会発表演題

= A会場 =

の形成と提供は風自然的、環境保全に効果的な持続性をもたぬものでなくてはならぬ。
第三の問題として、以上のことを如何に普遍的に誘発実行していくかという手法、手法論を提出することである。
第四の問題点としては、以上の3つの点を具体的に検証し、問題点、課題点を明確にし、これを克服することにである。

本学会のシンポジウムで以上のことを次に記す4つの課題として、懇談会を行い、これに対してコメントターのコメントによって、更に論議を深め、参加者全員の意見交換を行ったワークショップ方式によって進行し、最後に総括を行って終了させることとする。

・第2シンポジウムの課題とバリエーション

- 1) "持続可能性"から見た地球環境と人間：共存するレジャーレクリエーションの新たな概念を構築
2) 地球環境と調和共存するレジャーレクリエーション資源、空間、施設の開発整備と環境保全
3) 都市環境における地球環境と調和共存するレジャーレクリエーション活動の展開と課題
4) 環境と調和共存するレジャーレクリエーション資源、空間、施設のデザインとその展開について
5) コメンテーター
6) 総括
7) 司会・進行

16:00 休憩

16:30 総括・記念講演「新・日本人の余暇」 青木利夫氏(文政大学教授)
元朝日新聞社ヨーロッパ総局長で20年間の名産企画「日本人の余暇」の担当責任者。
中でも花びらの数は多くの人に感動を与えた。

18:00 懇談会(セントポールの会館)

11月8日(日)

- 8:30 受付
9:30 研究発表
13:30 総会
14:30 研究発表

参加費 4,000円 当日いただきます。
懇親会費 6,000円 当日いただきます。

皆様のご参加をお待ちしております。

常任理事会報告

(第15回)

日時 1991年10月21日(月)午後8時~9時
場所 明治大学和歌校
出席者 浅田 中 鈴木 黒田 松田 杉原 松浦 吉田
梅津 梅津 岡山

(第16回)

日時 1991年12月24日(火)
場所 新宮 藤田 中山
出席者 浅田 中 松田 杉原 松浦 吉田 梅津 岡山
議題 1 学会大会の反省。
2 1992年度学会大会は立教大学で開催。
3 2月29日(土)早稲田発表シンポジウム「学校の週5日制」
4 国際レジャー学会に参加する。

(第17回)

日時 1992年2月29日(土)午後5時45分~7時30分
場所 日本大学文理学部
出席者 浅田 中 松田 杉原 松浦 吉田 梅津 岡山
議題 1 1992年度学会大会は11月17、8日に開催。
2 研究会は4月4日(土)「PLAYから見た表現世界」PLA出演。記号集、文化人語彙を再考し置きながら、現代日本人の心を映写している風情感、ダンス・フォークロア・音楽などの意味・関係を覆り、日本人のこれからのレジャーの意味を考える。

(第18回)

日時 1992年3月28日(土)午後4時~7時30分
場所 日本大学文理学部
出席者 浅田 中 黒田 鈴木 杉原 松田 松浦 梅津
下村 梅津 岡山

(1992年第1回)

日時 1992年1月18日(土)午後2時30分~6時30分
場所 明治大学和歌校
出席者 浅田 中 黒田 鈴木 杉原 松田 松浦 梅津
議題 1 研究誌の件につき吉田氏に原稿の送付を再三要請した結果、黒く4月20日に原稿を一括して送付する旨。当人が約した。
2 次期役員候補者選考委員会からの報告があった。

(1992年第2回)

日時 1992年5月30日(土)午後2時~4時20分
場所 明治大学和歌校
出席者 浅田 中 松田 杉原 黒田 松浦 梅津
議題 1 研究誌の件につき吉田氏に原稿の送付を再三要請した結果、黒く4月20日に原稿を一括して送付する旨。当人が約した。
2 次期役員候補者選考委員会からの報告があった。

<会員動静>

Table with 4 columns: 新入会者, 氏名, 所属, 推薦者, 氏名, 所属, 推薦者. Lists members and their details.

<研究誌論議募集>

レジャー・レクリエーション研究第26号の原稿を募集しています。

= B会場 =

- 議長: 佐田 義孝
A-1 「『レクリエーション指導』からみた高齢者福祉サービスの考究」
A-2 「中高年層における定年退職後生活活動に関する研究」
A-3 「高齢者のレクリエーションとボランティアの役割」
A-4 「児童観客のレクリエーションとボランティアの役割」
議長: 岡崎 文男
A-5 「ネイチャージームの普及と指導者養成に関する一考察」
A-6 「社会的な野生活かワゴンツアー」
議長: 梅津 雄子
A-7 「子どもスポーツクラブ参加者の期待と満足について」

- A-8 「学校五日目の余暇的考察」
A-9 「女性市民のスポーツ活動の実施環境状況とニーズに関する研究」
A-10 「ライフコースの観点から見たスポーツ活動参加パターンに関する研究」
A-11 「体力と生き甲斐の関連性検証の試み」
A-12 「レジャー行動からみた身体活動量に関する研究」

- 議長: 須山千鶴子
B-1 「女子大生におけるレジャー教育の現況と今後の期待」
B-2 「『空野野郎』参加による中高年層の生活活動に関する研究」
B-3 「台湾における早期レクリエーションに関する研究」
B-4 「スポーツとしてのゴルフに関する一考察」
B-5 「ニューエターナルのゴルフを専攻として」
議長: 鈴木 秀雄
B-6 「『スポーツ』としてのゴルフに関する一考察」
B-7 「『新宮温泉』の温泉地に関する研究」
B-8 「『温泉』の温泉地に関する研究」
B-9 「『温泉』の温泉地に関する研究」
B-10 「『温泉』の温泉地に関する研究」
B-11 「『温泉』の温泉地に関する研究」
B-12 「『温泉』の温泉地に関する研究」

= 各支部報告 =

九州支部

九州支部活動報告表。包含収入の部(単位:円)と支出の部(単位:円)の表。

東海支部

東海支部活動報告表。包含収入の部(単位:円)と支出の部(単位:円)の表。

1991年度第21回名古屋大会収支報告

1991年度第21回名古屋大会収支報告表。包含収入の部(単位:円)と支出の部(単位:円)の表。

近畿支部

活動報告(未着) 決算報告(未着)

1993年4月

学会ニュース

No.52
April 1993

日本レジャー・レクリエーション学会
(Japan Society of Leisure and Recreation Studies)
発行人 黒田信寛 編集 広報委員会
事務局 〒362 埼玉県浦和市大久保1-1
電話 048-781-0031
FAX 048-726-2962
郵便振替 東京5-602353

'93年を迎えて ——「不易流行」断想——

会長 浅田隆夫

今年も会員の皆さんとともに学会の充実のために力を尽したいと存じます。引き続きよろしく願います。

「不易流行」ということ
昔から「不易流行」ということがいわれています。「不易」は詩的生命の永遠性。「流行」は時代と共に変化する流動性をいい、「流行性」こそ「不易」の本質であるとされていますが、この語は、元来、蕉風俳諧の理念の一つで、俳諧の特質は新しさにあり、その新しさを求めて変化を重ねていくところにこそ、ものごとの本質が存在するということ、つまり、「不易流行」とは、変わる部分が変わらざる部分が存在するということなのです。

日本文化の象徴と「不易流行」
新春早々、皇太子殿下ご婚約がマスコミに流れ、19日公式決定をみました。国民がひたすら待ち望んでいたことだけに、日本中がバウバウ明かになったように感じました。皇太子殿下はこれから日本の国際化に向けて皇室外交を遂行していくのには、小和田隆子さんという明晰な性格のキャリアウーマンを伴侶に選ばれました。これによって、若い女性はもちろん国民すべてが一段と夢と希望が湧いてきたのではないかと思います。

お妃となられる隆子さんには、やがて皇室の伝統的格式への参与という皇室の最も重要なお勤めが生じますし、これが皇室の重要な宮中祭祀として義務づけられてくるでしょう。

日本文化の象徴である皇室は、天皇が世襲の変わらざる(本質的には「閉鎖された静置」)の部分とすれば、現皇后は変わる部分と史料されますが、今回の皇太子妃は変わる部分として考えられます。これが開かれた皇室ということになるでしょう。

皇太子殿下のご婚約に当たり、日本文化の象徴という重荷を背負われた二人に祝福とご多幸を切にお祈りする次第です。

【レジャー・レクリエーション】の再考は「不易流行」

行」
第21回大会総会(名古屋)時に、学会の名称が変わりました(レジャー・レクリエーション。以下、L/Rと表記)。時代の要求とはいえ、学会としては名称変更せざるを得なかったなら、その理由を会員に理論的に明らかにする必要があるでしょう。従来、L/Rの領域は、正統派から外れた体系的な研究領域でしたが、今日では生活文化の必須的研究領域として重要な関心がもたれるようになりました。

①一般に、概念を明らかにするためには、(1)いつの時代に、どこで、誰が、どのような状況で説明する言葉としてその概念を用いたかの経緯を辿ることが重要でしょう。(2)このようにして明らかになった概念を、①時代別 ②地域別 ③細別専門科学別 ④カテゴリー別などに分類・整理したり、また、(3)L/R概念を今日の日本の生活文化を規定する新しい運動観に立ってなげめたり、違った立場の人間が集まってこれらの断片的な意味を再構成したりするようなことも必要でしょう。

さらに、(4)L/Rといった大きな問題領域は諸外国との比較を試みたり、また、(5)普通の論文の書き方(序論・本論・結論)とは逆に最初に結論を書き、これを裏証していくというやり方でやってみるのもよいのでは、と思います。

②社会や文化は時代と共に変わっていきますが、また、変わらない側面もあります。特に、生活の背後にある本質はそう簡単に変わるものではないでしょう。L/Rもまた然りです。

最近、いずれの科学も実践的なものを追いつめる雰囲気が強くなりましたが、これでは政策決定の手段になり果ててはならないでしょうか。やはり、学問研究は理論の価値・立場が断として存在していることが重要だと思います。21世紀に向けて、わが国のL/Rが新しい節目を迎えつつある時、このような意味の熱気が本学会に生まれることを期待したいと思います(1月31日記)。

第23回学会大会開催概要

日時 1993年10月16日(土)・17日(日)
会場 埼玉大学 〒338 埼玉県浦和市下大久保225
大会テーマ 「自然に遊び、自然に学ぶ」

基調講演: 講演者・柴田 敏隆 (山崎鳥類研究所研究員、三浦平島自然保護の会理事長)
シンポジウム: 「自然に学ぶレジャー・レクリエーション」
・野外活動分野
・環境分野
・自然博物分野
・レジャー産業分野

実行委員会構成

委員長: 山市 孟
委員: 野沢 巖、金子 和正、永嶋 正信、鈴木 秀雄、
寒川 恒夫、杉尾 邦江、柴田 太、坂口 正治、
野村 一路、梅沢 佳子、深山 千穂子、梅津 諭子、

学会大会研究発表の申し込み

1. 発表申し込み方法

各自、ハガキに演題、所属、氏名(共同研究・個人研究の区別)、住所、電話番号をご記入の上、5月31日迄に、下記のところにお申し込み下さい。所定の原稿用紙を送付致します。

発表原稿の締切は8月20日(金)までです。

2. 申し込み先

〒338 埼玉県浦和市下大久保225
埼玉大学教育学部保健体育講座 山市 孟 気付
日本レジャー・レクリエーション学会大会事務局
TEL 048 (852) 2111 内線 2693 (山市) 2694 (野沢)
FAX 048 (855) 9693 (野沢)
大会誌広告掲載のご協力をお願いします。 協賛金(5千円以上)

常任理事会報告

<第1回>

日時 1992年6月25日(木) 午後6時~9時
場所 明治大学和泉校舎
出席者 浅田、前野、黒田、鈴木祐、山市、杉尾、油井、永嶋、松浦、寒川、寺島、石井、矢川、坂口、野村、梅津、深山
議題 1 学会大会
2 業務分掌
3 新入会員
4 その他

<第2回>

日時 1992年7月25日(土) 午後5時~8時
場所 明治大学和泉校舎
出席者 浅田、前野、黒田、永嶋、山市、油井、松田、松浦、下村、石井、坂口、矢川、梅津、深山
議題 1 学会大会
2 その他

<第3回>

日時 1992年9月19日(土) 午後4時30分~7時30分
場所 明治大学和泉校舎
出席者 浅田、前野、黒田、山市、油井、杉尾、永嶋、松田、鈴木秀、下村、石井、矢川、坂口、野村、西野、梅津、深山
議題 1 学会大会
2 各委員会
3 新入会員
4 その他

常任理事会報告

<第4回>

日時 1992年10月23日(金) 午後6時~10時
場所 明治大学和泉校舎
出席者 浅田、黒田、油井、松田、松浦、石井、寺島、矢川、野村、梅津、深山
議題 1 学会大会
2 各委員会
3 新入会員
4 その他

<第5回>

日時 1992年11月7日(土) 午前9時10分~10時
場所 立教大学
出席者 浅田、黒田、秋吉、鈴木祐、永嶋、山市、松田、松浦、杉尾、石井、矢川、坂口、野村、梅津、深山
議題 1 学会大会
2 事業案
3 内規
4 予算案
5 第23回学会大会
6 資料代

<第6回>

日時 1993年1月23日(土)
午後5時25分~8時30分
場所 明治大学和泉校舎
出席者 浅田、黒田、前野、松田、永嶋、山市、松浦、油井、杉尾、鈴木(秀)、石井、矢川、梅沢、梅津、深山
議題 1 学会大会反省
2 次回学会大会
3 学術団体登録
4 委員会報告
5 新入会員
6 その他

常任理事会報告

<臨時常任理事会>

日時 1993年2月5日(金) 午後6時15分～
場所 明治大学和泉校舎
出席者 浅田、黒田、山市、松浦、杉尾、梅津、野村
議題 1 学会大会
2 大会実行委員会組織
3 テーマ、基調講演
4 その他

<緊急常任理事会>

日時 1993年3月13日(土) 午後4時～
場所 明治大学和泉校舎
出席者 浅田、黒田、高橋、前野、山市、油井、師岡、下村、坂口、梅沢、梅津、深山
議題 1 学会大会
2 学術登録

<第7回>

日時 1993年3月27日(土) 午後5時～
場所 明治大学和泉校舎
出席者 浅田、黒田、前野、松田、松浦、油井、梅沢、野村、坂口、梅津、深山
議題 1 学術登録
2 学会大会
3 その他

月例研究会についてのお知らせ

「21世紀に向けてのレジャーの価値」

- 学会名を日本レジャー・レクリエーション学会に改めたことを契機に、定例月例研究会のテーマを「21世紀に向けてのレジャーの価値」におくことに致しました。このテーマの研究交流を継続し、研究領域の広がりと、深まりを追求していきたいと考えております。
- 年間を通じての研究会プログラムとスケジュール等を立てましたので、会員のみなさまにお知らせ申し上げます。できるだけ多くの方々に、ご参加をいただきたいと願っておりますので、ぜひ、年間計画の中に位置づけていただきますようお願いいたします。
- 各会の研究プログラム 過去3年間の月例研究会、研究者の所属領域を直する課題を考慮にいれ、「教育」「環境」「産業」「行政」の4分野と、4分野に共通する「レジャーの価値とライフスタイル」分野の5分野(将来は分科会を想定)を、とりあえず設定してみました。各会の研究プログラムは、この5分野との関連でつくってあります。
- 研究会の進め方 各会、プログラムに際した資料を研究部で作成配布し、問題提起(会員またはゲスト)資料解説の後に、ご参加いただいた会員の皆さん全員とのトークンを考えております。トークンも2部、ないし3部構成にし、トピックの問題に関連して進めていきます。分野の研究テーマを2回、あわせて10回を予定しています。

5) 研究会開催スケジュール(レジャー・レクリエーションをL/Rで略)

研究分野	テーマ	日時
第1回 L/R=Value&Life style	レジャーの本質について	H 5年 1月23日(土)
第2回 L/R=Value&Life style	レジャーの本質について	H 5年 3月27日(土)
第3回 L/R=Education	世界のL/R教育研究の現状と課題	H 5年 4月10日(土)
次回 第4回 L/R=Education	日本のL/R教育研究の現状と課題	H 5年 5月 8日(土)
第5回 L/R=Environment	日常性L/R環境の課題	H 5年 6月 5日(土)
第6回 L/R=Environment	非日常性L/R環境の課題	H 5年 7月 3日(土)
第7回 L/R=Industry	L/Rのマーケティング課題	H 5年 9月 4日(土)
第8回 L/R=Industry	L/Rの産業政策課題	H 5年10月 9日(土)
第9回 L/R=Policy	時短推進を支える社会経済理論①	H 5年12月 4日(土)
第10回 L/R=Policy	時短推進を支える社会経済理論②	H 6年 1月29日(土)

・研究会の開催場所は、「明治大学和泉校舎」(井の頭線、京王線、明大前下車)会場の案内は守衛室にあります。
・時間は2:00 P.M.～5:00 P.M.

W. L. R. A. (世界レジャー・レクリエーション協会) 会議案内

期 日: 1993年12月5日～10日
開 催 国: インド
メインテーマ: "Leisure, Tourism And Environment: Issues For Human Development"
会議登録先: WLRA Secretariat/Congress 1993 P. O Box 309 Sliarbot Lake, Ontario, Canada KOH 2 P0
詳細については学会事務局にお問い合わせください。

日本公園緑地全国大会及び IFPRA アジア太平洋支部大会

期 日: 1993年5月11日～15日
場 所: 茨城教育会館(11日)
水戸プラザホテル(13日～15日)(茨城県水戸市)
主 催: 建設省、茨城県、水戸市、
財団 日本公園緑地協会
財団 公園緑地管理財団
IFPRA ジャパン
申 込 方 法: 〒100 千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル4階
日本コンベンションサービス株式会社 1993 IFPRA大会登録事務局
TEL 03-3508-1213
会 場 連 絡 先: 茨城教育会館 茨城県水戸市三の丸1-1-42
TEL 0292-31-5611 FAX 0292-25-2497
水戸プラザホテル 茨城県水戸市水府町986-1
TEL 0292-31-8111 FAX 0292-31-2385

会 員 の 動 静

●入会者 氏 名 所 属 推薦者
古 谷 勝 則 千葉大学 油 井 正 昭
木 下 晴 雄 千葉大学 油 井 正 昭
川 上 和 久 明治学院大学 松 田 義 幸
栗 田 房 穂 朝日新聞 松 田 義 幸
柴 田 丈 埼玉県立戸田高等学校 山 市 孟
高 橋 敏 夫 御近代マネジメント・ビューロー 浅 田 隆 夫
朴 元 任 高麗大学 師 岡 文 男
兼 子 隆 三 朝日鉄テクノス 浅 田 隆 夫
趙 泰 東 千葉大学 由 井 正 昭
吉 田 豊 西国学院大学 浅 田 隆 夫
杉 田 文 章 多摩大学 松 田 義 幸
●退会者 北 村 靖 治 近畿大学(定年退職のため)
市 山 博 美
※現会員の方で住所変更等がありましたら事務局宛お知らせください。

学 会 費 納 入 について

1992年度会費未納の方は至急手続をお願いします。
振込番号 東京 5 602353

《研究誌論文募集》

レジャー・レクリエーション研究の原稿を募集しています。

《賛助会員募集》

賛助会員を募集しています。事務局までお問い合わせ下さい。

1993年9月

学会ニュース

No.53

September 1993

日本レジャー・レクリエーション学会
(Japan Society of Leisure and Recreation Studies)

発行人 黒田信寛 編集 広報委員会
事務局 〒352 埼玉県上尾市戸崎1-1
女子聖学院短期大学・聖学院大学
電話 048-781-0031
FAX 048-726-2962
郵便振替 東京5-602353

日本レジャー・レクリエーション学会第23回大会開催要項

期 日 1993年10月16日(土)・17日(日)

場 所 埼玉大学(大学会館、教育学部棟)

〒338 埼玉県浦和市下大久保255

大会テーマ 「自然に遊び、自然に学ぶ」

日 程

10月16日(土)

- 10:00 理 事 会
- 12:00 受 付
- 13:00 基 調 講 演
「生態学的文明に向けた」
—自然に学ぶレジャー・レクリエーション—
講 師 柴田敏隆氏(財)日本自然保護協会理事
シンポジウム
テーマ「自然教育とレジャー・レクリエーション」
パネリスト
飯田 穂 氏 筑波大学教授(野外活動分野)
柴田敏隆氏(財)日本自然保護協会理事(自然博物館教育分野)
瀬田 信 哉 氏(財)自然公園文化管理財団専務理事(自然環境教育分野)
塚田 弘 一 氏 山形県観光物産課観光開発室長(ツーリズム分野)
司 会 油井正昭氏 千葉大学
- 17:30 懇 親 会(大学会館)

10月17日(日)

- 9:00 受 付
- 10:00 研 究 発 表
- 13:30 総 会
- 14:30 研 究 発 表

第23回日本レジャー・レクリエーション学会大会発表演題

= A会場 =

- <10:00~11:00>
A-1「鶴岡の国立公園における自然環境保全のための利用規制について」
題 幸東(千葉大学大学院)
- A-2「鶴岡の賀茂山国立公園の景観特性と土地利用」
古谷勝則(千葉大学大学院)
- A-3「八溝山地域の景観特性について」
油井正昭(千葉大学薬学部)
- <11:00~12:00>
A-4「ネイチャーゲームの普及と指導者養成に関する一考察2」
藤崎信一(日本ネイチャーゲーム協会)
- A-5「アウトドア・レジャーや自然志向の高まりにおけるネイチャーゲームの役割と可能性」
大島順子(日本体育大学・日本ネイチャーゲーム協会)
- A-6「地図づくり」プログラムについての研究」
塚本達一(大阪産業女子短期大学)
- <14:30~15:10>
A-7「日本厚生協会の活動に関する一考察」
谷戸一雄(余暇問題研究所)
- A-8「Russell L. Durginに関する研究」
—Russell L. Durginが果たした我が国レクリエーション運動における功績—
半谷龍尚(東京YMCA社会体育専門学校)
- <15:10~16:30>
A-9「ラケットボールの経緯と今後の動向」
石塚千登勢(明治大学)
- A-10「レジャー及び生涯スポーツとしての海洋講座(マリノプログラム)」
—大学におけるヨットカリキュラムの検討—
上野直紀(明道大学)
- A-11「周遊型旅行者の旅行動態に関する研究」
—特に北海道でバイクツーリングをしている旅行者に注目して—
永井 信(大阪体育大学大学院)
- A-12「スポーツに関するコマーシャル・フィルムが企業イメージに与える影響に関する研究」
松岡宏高(大阪体育大学大学院)

= B会場 =

- <10:00~11:00>
B-1「レクリエーション指導者の養成制度をめぐる諸問題について」
堀 進治(名古屋化学工業専門学校)
- B-2「レクリエーション・ワークショップが指導者養成に果たした役割について」
—その足跡と時代背景とのかわり—
高橋 伸(国際基督教大学)
- B-3「地域社会におけるリーダー育成の事例報告」
阿部信博(日本大理工学部)
- <11:00~12:00>
B-4「高齢者の生活充足と余暇活動参加に関する研究」
—愛好スポーツの性格と関連して—
佐藤由美(神蔵女子短期大学)
- B-5「軽度痴呆患者に対する現実当識訓練を用いたレクリエーションについて」
松本あづさ(鶴巻温泉病院 リハビリテーション科)
- B-6「盲学校におけるレクリエーション・スポーツについて」
—行事・体育・クラブの種目—
渡辺文治(神奈川県総合リハビリテーションセンター)
- <14:30~15:10>
B-7「キャンプと健康(3)」
—キャンプにおける幼児とカウンセラーの加速度観察—
川村綿平(山梨大学教育学部)
- B-8「高校生のライフスタイルと身体活動量との関係」
—活動群と非活動群との比較—
西田俊夫(淑徳短期大学)
- <15:10~16:30>
B-9「ボールルームダンスの健康意識に関する研究」
竹内正雄(産業科大学)
- B-10「川崎市在住女性の自由時間行動に関する分析」
—とくに休日の実態・希望及び目的について—
川向妙子(東海大学)
- B-11「民住意識と地域スポーツ活動の関連性についての検討」
大北文生(東海大学)
- B-12「余暇生活相談室利用者の分析」
三本勲夫(八王子レクリエーション学院)

役員選出内規(案)(新旧対照表)

下記の修正案については、学会大会(10月17日)の総会の協議事項になっています。御意見のある方は文書にて10月8日迄に本部事務局までお寄せ下さい。

[旧規約]	[新規約]
1. 会則第10条の規定により、総会の選出に、会則に定められているほか、この内規に基づいて行われるとする。	1. (現行どおり)
2. 会則は総会として、議決権者であること。	2. (現行どおり)
3. 総会は、原則として会則規程をもって、総会とする。	(旧 第3項は削除)
4. 理事は選出方法により、各選出理事、改選前理事会選出理事、会則規程第10条の規定により、各選出理事の3つに分け、理事数25名以上30名以内とする。	3. 理事は選出方法により、支部選出理事、改選前理事会選出理事、会長選出理事の3つに分け、理事数25名以上30名以内とする。
5. 会則、議決権、及び選挙の資格は、理事会において規定する。	(1)支部選出理事は6名とし、その候補者の選出は各支部が行なう。
6. 理事及び常任理事は、改選前理事会で選出する。	①東海支部2名
7. 総会の執行は認めない。	②近畿支部2名
8. 役員選出は総会承認事項であるため、役員選出の理事会は、学会大会の議事日程に開議する。	③九州支部2名
(旧) この内規は1989年度以降の役員選出に適用する。	(2)関東地区およびその他の地域より選出される理事は5名とし、その理事数は以下の通りとする。なお、その選出については理事会の議を経て、役員改選前年の総会で承認された委員長を含む7名の「役員候補者選考委員会(以下「選考委員会」という)によりその候補者を選出する。
[編註 1] 現規約第3項第3号(旧規約第4項)の理事候補者(5名より9名への増)については、本規約施行の理事数25名は「30名以内とする」とあるとの事情から、下掲の理事候補者とするためにもこの増は必要とする。	④関東地区4名
[編註 2] 旧第5項(旧第6項)もその趣意を継承して、規定するがその旨は旧第5項の規定により、開議すべきであるとの意見はなしとする。	⑤その他の地域(東海、近畿、九州、関東地区を除く)1名
	(3)改選前理事会によって選出される理事は9名とし、その選出については専門領域、地域、研究機関、団体および事務運営等を考慮して選考委員会により候補者を選出する。
	(4)会長推薦により選出される理事は5名とし、その候補者の選出は会長就任後副会長と協議し、会長が指名する。
	4. 会長、副会長、及び監事の各候補は、選考委員会により選出された者のなから理事会において選出される。
	5. 理事長及び常任理事は、(旧第6項の現行どおり)
	6. 役員兼任は、(旧第7項の現行どおり)
	7. 役員候補者選出の理事会は学会大会前あるいは学会大会期間中の適当な時期に開催する。
	付則 この内規は平成5年10月17日より施行する。

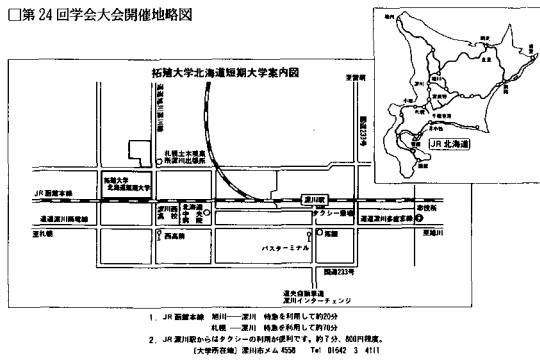
●9月11日(日)

- 8:30 受付開始
9:00 研究発表
13:15 総会
14:30 公開講座……地域へ情報を提供いたします。学会員の皆様もご参加下さい。
テーマ:「遊びとまちづくり」
1)「豊かな遊びの場づくり」
講師 前野淳一郎(学会副会長・スペースコンサルタント)
2)「楽しみながら、まちづくり」
講師 宮下桂治(学会常任理事・順天堂大学教授)
司会 永嶋正信(学会理事・東京農業大学教授)
16:30 終了

□第24回学会大会参加への連絡

第24回学会大会開催に当たり、大会及び懇親会参加に関する連絡用はがきをこの学会ニュースとともにお届けしましたので、大会準備を進めていく都合上できるだけ早くご返信下さい。(7月26日必着のようご投函下さい。)
大会へご参加のご連絡を頂いた方には、交通機関・宿泊等に関する資料を送付致します。

□第24回学会大会開催地地図



第24回日本レジャー・レクリエーション学会発表演題

- 1. 夜間学生の余暇意識について 藤 慶治(名古屋文化学園保育専門学校)
2. 沖縄におけるリゾート開発の一考察 ○小泉秀次郎(神戸YMCA学院専門学校)
3. 「地図づくり」プログラムについての研究(2) 塚本圭一(大阪英英女子短期大学)
4. 大学におけるレジャー教育・生涯スポーツとしてのヨット ○上野直紀(いわき明星大学)
5. 民間スポーツクラブにおけるプログラムサービスの進化-特にoff-siteプログラムとしてのイベントに注目して- ○原田宗彦(大阪体育大学)
6. セラピーティックレクリエーションの視点からみた社会福祉施設支援 -ディノームのプログラムサービスについて- ○飯田 明(東京体育専門学校)
7. 障害者スポーツ施設職員のリクリエーション認識に関する研究 野村一銘(日本体育大学)
8. 韓国の智異山国立公園における公園政策の変遷について ○趙 秉業(千葉大学)
9. 人遊戯公園における利用状況の調査方法に関する研究 東田和弥(東京農業大学)
10. 国民体育大会の意義と役割に関する研究 -特に沖縄、京都、東西四国における地域住民の意識の比較について- ○長瀬 仁(大阪体育大学)
11. サッカーくじ入場の罪状に関する一考察 山田文男(大谷女子大学)
12. 大学生のレジャースポーツ行動の参加動機に関する研究 -定期的参加者と不定期参加者との比較- 西田徹夫(高徳短期大学)
13. 白山源三郎・三郎連郎にみる日本における初期のレクリエーション観-関東学院大学でのインタビュー(1980年1月13日)を中心に- ○鈴木秀雄(関東学院大学)
14. 高齡者のQOLに対する余暇活動参加の影響 佐藤由美(樟南女子短期大学)
15. キャンプと健康(第4報) 川村昭平(山梨大学 教育学部)
16. 野外活動における子どもの健康状態の評価 正武敦治(札幌市立上野幌東小学校)
17. 幼児の「自然-自由あそび」の教材化に関する試み-特に教材化とその価値の決め手の問題を述べて- 佐藤朝代(けやの高等学校)
18. キャンプにおけるボランティア指導者の研究 -東京YMCAキャンプリーダーの調査から- 杉形伸生(東京YMCA野外教育研究所)
19. 女性の「ライフスタイル」と学習意識との関係 -特にM短大卒業生について- ○藤 良子(帝塚山学院大学)
20. 女性の学習行動の現状と課題 -学習内容の比較から- ○荒井善子(武野短期大学)
21. 「学習のタイプ」からみた女性の生き方について ○松浦三代子(東京女子体育大学)
22. 生涯学習の意識に関する一考察 -「家族の収入」上「ライフコース」を中心に- ○嶋崎文代(都立北多摩高校)
23. FM法を用いたファミリー・レジャー行動研究の試み 西野 仁(東海大学)

日本レジャー・レクリエーション学会 1994~1995年度役員

Table with columns for position (役員), name (氏名), affiliation (所属), and title (敬称略・順不同). Lists members including 会長 浅田 隆夫, 副会長 前野 淳一郎, 常任理事 松田 義孝, etc.

●会員の動向

Table with columns for membership status (入会者/退会者), name (氏名), affiliation (所属), and recommender (推薦者). Lists names like 飯田 明, 松下のぞみ, etc.

●会計よりお知らせ

- 1. 年会費(¥5,000)納入の郵便振替番号が0150-3-620353に変わりました。
2. 第24回大会参加者は大会参加費(¥4,000)、懇親会参加費(¥5,000)、11日のお弁当(¥1,000)を現金で納入する人は年会費納入時に一括して振込まれますようお願いいたします。

なお、お手数ですが郵便振替の通帳面に記載された項目を○でお開ください。
3. 年会費の徴収について 規約第8条に基づき、未納者については、3年間の追学期間を過ぎ、会員サービスを停止する。

●常任理事会報告

- (第1回) 日時 1994年4月16日(土)14:00~16:00
場所 明治大学泉校舎研究会講堂
出席者 浅田、鈴木(秀)、前野、黒田、松田、寺島、杉尾、芳賀、下村、池口、松嶋、
監事・船橋
幹事・大森、野村、金子、杉浦、荒井、
審議事項
1. 常任理事について 理事の中から常任理事12名が決定した。また、理事の役割分担により専門委員会の構成が決まり、専門委員会委員長連絡会議を設けた。
2. 副会長の担当制について 5名の副会長の役割担当が決定した。
3. 幹事の選任について 幹事3名とその役割分担が決定した。
4. 事業計画について 25周年記念事業特別委員会を設け、記念事業の検討を行うことになった。
5. 学会ニュースの発行について 6. 事務局開設日時について
7. 郵便振替、電話、FAX等の変更について
8. 第24回学会大会について

- (第2回) 日時 1994年6月11日(土)15:30~18:00
場所 明治大学泉校舎第2会議室
出席者 浅田、鈴木(秀)、石井、坂口、下村、杉尾、寺島、芳賀、松浦、宮下、油井、
幹事・大森、金子、荒井、
審議事項
1. 第24回学会大会について 学会大会開催に対する組織・運営、基調講演、シンポジウム、公開講座等に関して検討を行った。学会大会発表申込締切の24日が承認された。学会大会参加費は4,000円と決定した。
2. 学会ニュースの発行について 学会ニュース55号の発行内容を審議した。
3. 会員の入会金について 4. 日本レクリエーション協会からの協力依頼について 第48回全国レクリエーション大会開催に当たり協力依頼がありました承した。

●事務局移転

平成6年4月1日から事務局が「東京女子体育大学レクリエーション研究室」へ移転いたしました。
住所、電話番号、FAX番号等は下記のとおりです。事務局との連絡にご留意下さい。郵便振替番号も変更になりましたので「会計よりお知らせ」の記事をご覧下さい。

なお、事務局開設日と開設時間についてもご注意ください。
事務局住所 〒186 東京都国立市青柳台川上620
東京女子体育大学レクリエーション研究室
電話 FAX 0425-72-4136
事務局開設日 月・火・木・金
各曜日13:00-17:00

いま、われわれを促すもの

— 四半世紀の節目に当って —

会長 浅田隆夫

本学会は、研究時代の6年と研究懇談会時代の1年を加えると、32年の歴史をもつ。私は、昭和39年3月の研究懇談会発足当初よりメンバー(20人)の1人として参加して来たが、まさに「光陰矢の如く、学成り難し」の感が深い。

本学会は、いまでも問題を抱えているが、ここでは紙面の関係上、最近二つの出来事に関連し、かつ、研究上のことに限って触れることにした。1 今、世界は冷戦の終結によって国際関係も国内の地域間、また組織(団体)間においても関係が多様化し、分割傾向の強い関係が創出されつつある。そして、これらの影響を受けて社会科学や人文科学における研究内容・方法にも大きな変化がみられる。

このような状況に鑑み、地域を中心に理論の構築を計るべきだとする考え方や、否、それよりもこれまでの考え方を広範囲に問ひ直し、さらに検討すべきだとする考え方があられる。前者は、いわば「小さな物語」を、後者は「大きな物語」を発掘しようとする動きとなる。また、この両者に関心をもつ「ミクロ」と「マクロ」の接合を意図しようとする考え方もある。L/R研究においても、これと同

じことがいえる。

Ⅱ 今回の阪神大震災が、私達に与えたものは、第1に、いかに高度に発展した文明の利器も破壊に帰してしまつたあ惨状を、私達が目の辺りにした時、文明のはかなさを改めて驚愕させられたこと。第2に、私達が「生きる」ということは「助け合いをする」ということであり、当然、そこにはおのずから文化が生み出されることになるわけだが、このことに着目すれば、私達がいま必要な「もの」こそが文化といえるものであり、また、生き残つた人の生活のしかたやスタイルこそが文化といふべきものであるということ。そして、生活に必要なものは、むしろ遺産といった方がよいのではないかということ。第3に、文化の継承は自然だから、新しい都市の再建に当っては、自分の住む自然環境のあるべき姿を創造し、これを社会システムとして構築すべきだということ。第4に、このためには下からのボラントリーズムに変えられたネットワークづくりより新しい文化の再生へ向けて継続的な努力が望まれるということ(生活環境が最初に起つたのも阪神間であった)……などであった。L/R文化に対するあり方や考え方も今回の大震災に学ぶところが、多い。

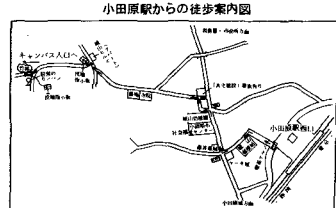
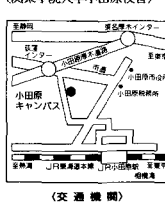
● 大会プログラム

- 第1日 9月23日(土)
午前中 研究発表、実践報告、理事会等(発表順数により時間決定)
13:00 記念講演 浅田隆夫 学会長
14:00 基調講演
15:00 シンポジウム
18:00 懇親会

- 第2日 9月24日(日)
午前・午後ともに研究発表、実践報告

■ 第25回学会大会開催地略図

(関東学院大学小田原校舎)



(交通機関)

● 大会発表の方法

本年度の学会大会は、第25回記念大会という趣旨から従来の研究発表に実践報告を加えて研究と実践の融合化をはかり、さらに幅広く学会員の研究交流を促進する。

- (1) 発表形式 1. 研究発表
2. 実践報告(新規)
(2) 研究発表の概要
a) 従来通りの原稿提出要領に従う。発表者は学会会員に限定する。
学会指定の原稿用紙(40字×40行、1ページ、1,600字)にて見開き2枚または4枚とする。これを超過する場合は編集委員会の了解を得て可とする。
(3) 実践報告の概要
a) 発表者
* 発表者は原則として学会会員に限定するが、特に常任理事会が認めた場合にはこの限りではない。
* 会員は、研究発表と実践報告の2つの発表ができる。

第25回学会大会(記念大会)

期 日 : 平成7年9月23日(土)～9月24日(日)
会 場 : 関東学院大学法学部(小田原校地)
住 所 : 神奈川県小田原市坂道1192-2
交 通 : 東海道新幹線、東海道線、小田原線の小田原駅から徒歩約17分、タクシー約8分
発表申込み : 5月末日締切
完成原稿 : 6月末日締切

- b) 実践報告の発表提出要領および大会名の掲載方法について
* 研究発表と同じ様式に従う。学会指定の原稿用紙(40字×40行、1ページ、1,600字)にて見開き2枚とする。図版、写真等の掲載も可とする。
* 第25回大会発表論文は、第一部 研究報告、第二部 実践報告の順に掲載する。
c) 発表の期日
* 1日目(9/23、土曜日・祝日)、2日目(9/24、日曜日)両日にわたり研究発表と実践報告を並行して行う。
d) 発表内容
* レジャー・レクリエーションに関連した内容の中で、特に実践と関わる内容の事項。実践に至る経緯、実践者の意見、現状と課題、活動内容の目的、特徴、参加者の影響など、幅広い領域の実践例を報告する場を設ける。内容については、発表者の裁量に委ねる。
* なるべく、スライド、ビデオ、図表などの資料を使用すること。
* 発表の方法については、慣れた発表者については、朝々の発表内容に応じて円滑に発表できるよう、編集委員会がバックアップする。
e) 発表までの日程
研究発表、実践報告とも下記の日程で作業を進めます。
5月末日 研究発表、実践報告申込み締切。
6月末日 研究発表、実践報告完成原稿提出締切。
f) 実践報告の領域
下記は、実践報告の発表内容の領域の参考例です。下記以外の領域でも、レジャー・レクリエーションに関わる内容ならば受け付けます。
1. 実施機関別
ア) 大学における実践例
* 学外実習の最近の傾向
* 大学設置基準大綱化に伴った大学改革が学外実習へ与える影響について
* 特色のある学外・学内のレク・プログラム etc.
イ) 専門学校における実践例
* 資格について
* 学内外実習の変遷状況について etc.
ウ) 地域における実践例
* 特色のある活動内容等
* まちづくり実践におけるレク・プログラム
* 地域活動におけるレク企画の実践
* 地域におけるレク組織の運営
* イベントにおける広報等の特色ある集客方法
* イベントにおけるボランティアの活用について etc.
エ) 医療・福祉機関における実践例
* 高齢社会に対応したレクリエーションの実践例
* 老人ホーム、特別養護老人ホームなどにおける実践例
* 介護福祉士、ソシアルワーカーの実践例
* リハビリセンターにおけるレクの実践例 etc.
オ) 小・中学校・高校における実践例
* 各学科における野外教育・野外活動
* 特色ある学校行事の実践例 etc.
カ) 民間および公共のレク・スポーツ・健康施設における実践
* 大都市における事例
* 農村地域における事例 etc.
キ) 自治体のレクリエーション課の事例
* 環境、緑地、造園関係の実践、施工例
* 特色あるレジャー・レクリエーション空間の事例
* 環境教育の実践例
* 今後のレクリエーション空間づくりのトレンド etc.
ク) 実技指導発表(発表会場 体育館)
* ゲーム・ソング、ダンスの実技指導
* 新しいレクリエーションプログラムの指導例 etc.

● 理事会報告

日 時 1994年9月10日(土) 11:00～12:00
場 所 拓殖大学北海道短期大学
出席者 浅田、鈴木(秀)、伏木、黒田、前野、石井、坂口、下村、鈴木(文)、寺島、松浦、松田、宮下、藤岡、塚本、中島、永嶋、西野、原田(深)
監事……越智 幹事……大森、藤田(明)、金子、杉浦、西田、野村、荒井

- 1. 報告事項
(1) 役員選出の結果について

- 1994～95年度役員が報告された。
2) 1993年度事業報告について
1993年度事業報告が了承された。
3) 1993年度決算報告について
1993年度決算報告及び、経理監事より会計監査報告が行われた。
4) 第25回学会大会開催地・日程について
第25回学会大会は、1995年9月23日(土)・24日(日)に関東学院大学法学部小田原校舎において開催することが報告され、記念大会とすることが了承された。
5) 郵便振替番号の変更について
学会の郵便振替番号が、00150-3-602353に変更された報告があった。
6) その他
* 新入会員の報告
* 特別委員会設置の報告
各委員会設置を中心に学会の様々な課題を検討する特別委員会設置の報告があった。委員長は鈴木理事長、副委員長は寺島常任理事であった。
* 名誉会員の三隅達郎氏が6月5日に逝去された報告があった。
* 九州支部からの活動報告があった。
7) その他
IV. 審議事項
1) 1994年度事業計画(案)
2) 1994年度予算(案)
3) 役員候補者選考委員会設置について
4) その他
● 1993年度事業報告
I. 事業
1) 第25回学会大会開催
期 日 1993年10月16日(土)・17日(日)
場 所 埼玉大学
2) 機関誌の発行
「レジャー・レクリエーション研究」27号、28号(大会号)
3) 会 報
「学会ニュース」の発行 No.52、No.53、No.54
4) 学会大会案内の作成
「世界のL/R教育・研究の現状と課題」
「我が国のL/R教育・研究の現状と課題」 1993. 4. 10
「日中のL/R環境の課題」 1993. 5. 8
「非日常性L/R環境の課題」 1993. 6. 3
「生活・重視の産業構造への転換」 1993. 9. 4
「レジャー産業と企業経営」 1993. 10. 9
「短時間推進を支える社会経済理論II」 1993. 12. 4
「短時間推進を支える社会経済理論I」 1993. 1. 29
6) 組織の拡充
会員の拡充34名
II. 会 議
理 事 会 (2回) 1993.10.17 (学会大会) 1994. 3.26 (臨時総会)
常 任 理 事 会 (9回) 1993.10.17 (学会大会) 1994. 3.26 (臨時総会)
明治大学和泉校舎
明治大学和泉校舎)
● 1993年度決算監査報告
日本レジャー・レクリエーション学会の、1993年度決算監査報告について監査を行った結果、正確・妥当であることと認めます。
1994年7月16日
監 事 越智三王
監 事 鈴木祐一

日本レジャー・レクリエーション学会

第24回総会

- 日 時 1994年9月11日(日) 13時15分～14時15分
場 所 拓殖大学北海道短期大学
I. 会長挨拶
II. 議長および総務理事名人選出
報 告 事 項
1) 役員選出の結果について
2) 1993年度事業報告について
3) 1993年度決算報告について
4) 郵便振替口座変更について
5) 各委員会活動報告
6) 第25回学会大会開催地・日程について

学会ニュース

日本レジャー・レクリエーション学会

(Japan Society of Leisure and Recreation Studies)
 発行人 鈴木 秀雄 編集 広報委員会
 事務局 〒186 東京都国立市高士1-4-30-1
 東京女子体育大学 レクリエーション研究室内
 電話 0425-72-4136
 FAX 0425-72-4136
 郵便振替00150-3-602353

No.57

日本レジャー・レクリエーション学会 第25回記念大会の開催によせて

会長 浅田 隆夫

今日のわが国の社会状況は、円高の進行と産業の空洞化が深刻化しつつあり、このままでは雇用不安と失業率の増大を来す。経済社会は資本主義を崩壊させる方向に進んでいるように思われます。

周知のように、近代資本主義は、地球を駆け回りこの環境を悪化させ、より多くの「モノ」と金・土地を求める「モア・アンド・モア」の競争を繰り返してきた。のために、私達は、従来、わが国社会を支えてきたキャッチアップ型の仕組みを自らの創造性によるバイネアミア型の新しい仕組みへと構造転換させるを得なくなりました。これはまた、供給サイド(企業)の経済から需要サイド(生活者)の経済システムへの変革でもあります。しかし、両者の相剋とその動向は不透明なまま推移しています。

このように、今日の社会は、いわば、学会草創期の30年前とはまるで違った「ラグダム」へとソフトセザるを得ない状況にあります。また、21世紀は、人間の個性(創造性)を活かすに「働きながら共に生きる」といった世界の創造にあり、その原理は「自然との共育・調和」にあるといえます。そして、これを見分けるか、それでは、その現象が自然の掟か否か、それによって「もの」が誕生するか、また、それは環境に

溶け込んでいるか……といったようなところにあり、それが「本もの」の生活だと思えます。「本もの」の生活は、体験的に肌で感得するしかないものでしょう。

L/R生活もまた、これと同じことだと思います。「本もの」のL/Rがどのようなかたちで自らの生活文化の中に入り込んでいるのか、また、L/Rを愉しんでいる人達の生活文化は、自己意識を生み出した自己完結型のものなのか……ということですが、であるだけ早く、このような「本もの」のL/R生活の内容や方法、仕組みを個人から仲間へとネットワークにより徐々に普及・拡大していくこと、また、そのためのボランティアの活動に大きな期待が寄せられています。

90年代後半は、このような意味を持つ生活文化としての「本もの」のL/Rの創造へ志向し得るか否かの分水嶺にましかかっているといっても過言ではないでしょう。本大会では、多くの会員の参加を得て、21世紀の新しい生活文化としてのL/Rのあり方・考え方、それに基づく実践を踏まえたアプローチなどについて熱心な対話のうまれることを願って止みません。

第25回記念大会

第25回記念大会の開催にあたって

理事長 鈴木 秀雄
 (関東学院大学法学部教授)

本学会は、多くの先人のご努力により、前身である、懇談会、研究会、レクリエーション学会から、日本レジャー・レクリエーション学会へと時代と共にその名称も果たすべき役割も変化させて現在に至っているのですが、本年は第25回記念大会であることから、「研究発表と実践報告に伴う研究と実践の融合による実践家と研究者の相互交流の活性化」を計画いたしましたところ、多岐にわたる議題の発表を得て開催することとなりました。この融合と活性化のためにさらに「工夫、活動・実践を伴う分野・領域を扱う学会としての使命を果たし、市民活動への影響力も増していく学会へと発展するための大会にしたいと願っております。会長による記念講演、そして基調講演、シンポジウム、と多くの企画を用意しております。また、学会25周年の視点から、学会開催と共に学会の歴史的名とめとして『日本レジャー・レクリエーション学会の歩み 1964~1995』の刊行も計画いたしております。学会そのものの存在や内容を詳細につき、会員の皆さんそれぞれが今後の方向性を積極的に見いだしていただけましたらと願っております。

「新しい酒は新しい皮袋に盛れ」の例えのごとく、第25回記念大会を開催するキャンパスとなる関東学院大学法学部も、開学111年目となる学院の伝統の中で、本年が設立5年目となる新しい学部であります。小高い丘に建ち、海と山を一望できる自然環境豊かな会場で、新しいレジャー・レクリエーションを創出し、その方向性をお考えいただけましたら幸いです。会員皆様の多数のご参加を心からお待ちしております。

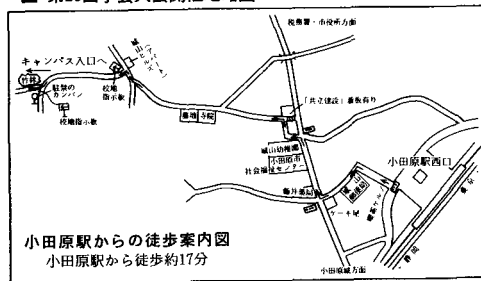
謝辞

日本レジャー・レクリエーション学会第25回学会大会を、関東学院大学法学部(小田原校舎)で開催するに当たり、大学関係者の方々には大変お世話になりました。特に、伊香橋信男学長先生、加藤良二法学部長先生には、格別のご配慮を頂戴した。厚く御礼申し上げます。

平成7年8月

会長 浅田隆夫

第25回学会大会開催地略図 (関東学院大学小田原校舎)



第25回記念大会開催

期 日 : 平成7年9月23日(土) ~ 9月24日(日)
 会 場 : 関東学院大学法学部(小田原校舎)
 住 所 : 神奈川県小田原市歌渡 1162-2
 交 通 : 東海道新幹線、東海道線、小田急線の小田原駅から
 徒歩約17分、タクシー約8分

第25回記念大会

大会プログラム

- 第1日 9月23日(土)
- 大会テーマ 「新しい時代の創造的余暇」
 - 受付 12:00~
 - 記念講演 13:00~13:40
『21世紀への提言
これからのレジャー・レクリエーションのあり方を探る
— 若者のレジャーライフを中心に —』
浅田 隆夫 : 学会会長
 - 基調講演 14:00~15:00
ボランティアに見る創造的余暇
福永 佳津子 海外生活カウンセラー
 - シンポジウム 15:20~17:20
テーマ: 新しいレジャー・レクリエーション時代の生き方
コーディネーター
芳賀 健治 家政学院大学助教授・学会常任理事
 - パネリスト
(1) グローバル時代のレジャー・レクリエーション
原田 宗彦 大阪体育大学教授・学会理事
(2) 生涯学習社会の到来と新しい時代の余暇のあり方
松田 義孝 実践女子大学教授・学会常任理事
(3) ボランティアに見る新しい時代の方向性とネットワークづくり
宮下 桂治 順天堂大学教授・学会常任理事
 - 懇 親 会 18:00~19:00
- 日 程 第2日 9月24日(日)
- 受付 9:00~
 - 研究発表 9:30~12:10, 14:30~15:50
 - 実践報告 9:30~12:30, 14:30~16:10
 - 懇 会 13:30~14:30
- 大会参加費 4,000円 ● 懇親会費 5,000円

大会実行委員会から

第25回学会大会を開催する関東学院大学法学部(小田原校舎)の周辺には、昼食をとる食堂等がありません。弁当を持参するか、または、弁当(1,000円)の注文を受付いたしますのでご利用下さい。

第25回記念大会

第25回記念大会研究発表・実践報告

- 研究発表 A会場
- 座 長: 杉浦 恭 9:30~10:30
A-01 過去3年間のNRPAシンポジウム抄録にみられるレジャー・レクリエーションの研究動向—1992~1994年—
○ 黒原 邦枝(余暇問題研究所)
高橋 和敏(余暇問題研究所)
 - A-02 「社におけるリラクセーション研修の試みとその自覚効果について
—その研修内容と追跡調査の結果から—
○ 本田 真次(日本航空株式会社)
山崎 操子(余暇問題研究所)
川向 妙子(東海大学)
 - A-03 リハビリテーション・トレーニングにおける質的指導重視の事例研究
—慢性後縦脊骨痛性症候群の場合—
○ 若林 義子(日本航空株式会社)
松島 良一(日本航空株式会社)
飛鳥田一郎(日本航空株式会社)
 - 座 長: 梅沢 佳子 10:30~11:30
A-04 小中学生の野外活動に関する課題と方向性について
—特にプログラム展開を中心に—
○ 藤 孝雄(横浜市立南名小学校)
鈴木 秀雄(関東学院大学)
 - A-05 大学生におけるレジャー活動の満足度に関する比較研究
—日本(東海大学) 韓国(ギョンス大学) アメリカ(アリゾナ州立大学)の学生を対象として—
○ 岡 延福(韓国レクリエーション協会)
高橋 和敏(余暇問題研究所)
 - A-06 フィットネス指導と健康に関する一考察
—ホリスティック・アプローチから—
○ 藤原 武志(スポーツ・エデュケーション学会)
 - 研究発表 B会場
 - 座 長: 荒井 啓子 9:30~10:30
B-01 大学受験とそのあり方に関する研究
—特に一次集計の結果からみた女子学生の
 - 座 長: 下村 彰男 11:30~12:10
A-07 日本における国土開発に伴う風景問題について
—1960年代~1970年代前半までの自然公園を対象として—
○ 萩 重雄(千葉大学大学院)
油井 正昭(千葉大学)
 - A-08 アメリカの国立公園利用におけるベットの規則について
○ 古谷 勝剛(千葉大学)
油井 正昭(千葉大学)
 - 座 長: 西野 仁 14:30~15:10
A-09 スポーツ産業・レジャー産業に従事している体育系大学の卒業生の実態調査
○ 黒田 次郎(日本体育大学)
 - A-10 公共と民間の体育・スポーツ施設における棲み分けと統合に関する一考察
○ 松永 敬子(一宮女子短期大学)
原田 宗彦(大阪体育大学)
池田 勝(大阪体育大学)
 - 座 長: 坂口 正治 15:10~15:50
A-11 商業スポーツ施設における会員の満足度に関する研究
—満足空間モデルにおける満足度の変化について—
○ 原田 尚幸(中央大学大学院)
原田 宗彦(大阪体育大学)
池田 勝(大阪体育大学)
守能 信次(千葉大学)
 - A-12 レジャー経験における主観的要素の分析法に関する検討
—ESMによるデータ収集と主要な構成概念に注目して—
○ 佐藤 由美(佛羅里達女子短期大学)

第25回記念大会

- 一般的傾向へ
○小西 啓子 (竹南教員養成所)
浅田 隆夫 (筑波大学)
- B-02 女子高学生の入学選択理由 (5因子) とその受験者との関係
～高群と低群の比較を中心に～
○田中美智子 (新潟女子短期大学)
浅田 隆夫 (筑波大学)
- B-03 大学受験とそのあり方に関する研究・母親の大学教育観
～女子高生の志望・母親の年齢・子どもの数との関係から～
○崎嶋 文代 (都立北多摩高校)
浅田 隆夫 (筑波大学)
- 座 長: 手塚 麻実 10:30～11:10
B-04 家族関係からみた女子高生の大学受験意識
○角田 亨子 (神奈川大学)
浅田 隆夫 (筑波大学)
- B-05 女子高生の入学受験意識と母親の大学教育に対する期待感との関係
～特に文系と理系と比較～
○深瀬 嘉子 (山形女子短期大学)
浅田 隆夫 (筑波大学)
- 座 長: 大森 雅子 11:10～12:10
B-06 国際交流を知る地域づくりの視点
～オーストラリア・クイーンズランド州ノーサダのホームステイ・自然活動を通して～
○坂口 正治 (東洋大学短期大学)
石井 光 (筑波大学)
矢川 洋子 (Cultural Exchange Holidays オーストラリア理事)
鈴木 秀雄 (関東学院大学)
- B-07 学外コースにおける (Physical Recreation "ヨット" を用いたレジャー・キャンプ) ～ヨット実践プログラムからの満足度の研究～
○上野 直紀 (いわき明星大学)
鈴木 秀雄 (関東学院大学)
五十嵐幸一 (いわき明星大学)
- B-08 ファミリーレクリエーション活動の実態調査
～初の運動部経験による比較から～
○横原 俊子 (あさひな幼稚園)
- 座 長: 金子 和正 14:30～15:30
B-09 キャンプの教材化とその価値の決り手の問題を巡って (第2報)
○佐藤 朝代 (けやくの森学園)
- B-10 1960年代における野外活動の傾向に関する研究
○中村 正男 (東横学園女子短期大学)
○中村 正男 (東横学園女子短期大学)
- B-11 救済法・更生法カリキュラム指導の検討
○杉浦 俊之 (東京体育専門学校)
鈴木 秀雄 (関東学院大学)

■ 実践報告 A会場

- 座 長: 師岡 文男 9:30～10:30
A-01 神奈川における視覚障害者のレクリエーションの展開①
～神奈川の現状とサポート体制～
○古畑 英雄 (光栄会障がい障害者自立生活援助センター)
渡辺 文治・塩沢 哲夫・末田 靖則 (神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢ライオホーム)
- A-02 神奈川における視覚障害者のレクリエーションの展開②
～盲人卓球～
○渡辺 文治 (神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢ライオホーム)
塩沢 哲夫・末田 靖則 (同上)
古畑 英雄 (光栄会障がい障害者自立生活援助センター)
- A-03 神奈川における視覚障害者のレクリエーションの展開③
～フロアボール(盲人バレーボール)～
○塩沢 哲夫 (神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢ライオホーム)
渡辺 文治・末田 靖則 (同上)
古畑 英雄 (光栄会障がい障害者自立生活援助センター)

- 座 長: 芳賀 健治 10:30～11:30
A-04 神奈川における視覚障害者のレクリエーションの展開④
- 戸田 安俊 (船橋市自遊人協会)
宮下 桂治 (順天堂大学)
杉本 晴夫 (船橋市自遊人協会)
- 座 長: 丸山 正 11:30～12:10
B-06 消化不良困窮・構成員レクリエーション指導研究会
～オーナーナイト・ウェーク実践活動報告～
○藤 正晴 (相模原市レクリエーション指導研究会)
- B-07 フライング・ディスク・ゴルフによる「楽しさ」を導き出す授業の実践
～生涯スポーツの視点から～
○杉本 晴夫 (船橋市自遊人協会)
宮下 桂治 (順天堂大学)
戸田 安俊 (船橋市自遊人協会)
杉本 晴夫 (船橋市自遊人協会)

第25回記念大会

- ～視覚障害者のスキー、ブラインドスキー～
○堀田 良二 (神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢ライオホーム)
間嶋 和子 (神奈川県視覚障害者援助会十手塚支団)
末田 靖則・渡辺 文治 (神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢ライオホーム)
- A-05 神奈川における視覚障害者のレクリエーションの展開⑤
～スポーツ以外のレクリエーションについて～
○末田 靖則 (神奈川県総合リハビリテーションセンター七沢ライオホーム)
渡辺 文治・丸山 秀雄 (同上)
間嶋 和子 (神奈川県視覚障害者援助会十手塚支団)
古畑 英雄 (光栄会障がい障害者自立生活援助センター)
- A-06 知的障害者施設におけるレクリエーションの実践
～楽しく、豊かな生活をおくるには～
○大塚 伸 (東京都千代田福祉会)
- 座 長: 野村 一路 11:30～12:30
A-07 高齢障害者を対象としたグループレクリエーションの選択
～能力に合わせたレクリエーションゲームについて～
○松本あぶさ (鶴巻温泉病院)
- A-08 高齢者レクリエーションの視点からみたエルダージェンズ活動について
～北米インテグレーション・キャンプの事例から～
○広田 治久 (余暇問題研究所)
山崎 律子 (余暇問題研究所)
川向 妙子 (東海大学)
- A-09 第54回 NESRA 年次大会にみられる職場レクリエーションの動向
○渡辺 佳知子 (余暇問題研究所)
橋本 和秀 (余暇問題研究所)
山崎 律子 (余暇問題研究所)
- 座 長: 寺嶋 善一 14:30～15:30
A-10 学外コースにおけるマリンプログラムとしてのヨット授業の実践
○上野 直紀 (いわき明星大学)
鈴木 秀雄 (関東学院大学)
五十嵐幸一 (いわき明星大学)
- A-11 神戸YMCA学院専門学校体育学科・海洋スポーツ専門におけるレジャー・レクリエーション実習実践報告
○小泉勇治郎 (神戸YMCA学院専門学校)
山下隆一郎・片岡 麻理 (同上)
- A-12 東京家政学院大学におけるカヌー実習について
○芳賀 健治 (東京家政学院大学)
- 座 長: 西田 俊夫 15:30～16:10
A-13 オーストラリア・クイーンズランド州ノーサダのホームステイ・自然活動を通してのレジャー・レクリエーション
○田村都貴哉 (貞徳学園)
石井 光 (筑波大学)
矢川 洋子 (Cultural Exchange Holidays オーストラリア理事)
鈴木 秀雄 (関東学院大学)
坂口 正治 (東洋大学短期大学)
加藤 惠子 (立教大学研究生)
- A-14 オージズスポーツ・プログラムと受講生の反応について
～5 専門学校の場合～
○下田 由香 (スポーツ・エデュケーション・アカデミー)
田代みよ子 (同上)

■ 実践報告 B会場

- 座 長: 宮下 桂治 9:30～10:30
B-01 高齢化・福祉化社会の新しい生涯スポーツ (バーンボウル) (BAHN GOLF)
～日本バーンゴルフ協会の設立と今後の方向性～
○西田 俊夫 (滋慶短期大学)
荒井秀治 (日本バーンゴルフ協会)
- B-02 市町村レク協会における生涯学習事業の可能性を探る
～8王子レクリエーション協会の実践紹介～

第25回記念大会

- を通して～
○丸山 正 (八王子レクリエーション協会)
- B-03 レクリエーションダンス教育課程構築への実践報告
○浦江 千幸 (BLUE THREE レクダンス研究会事務局)
- 座 長: 松浦 洋子 10:30～11:30
B-04 レク指導者が地域スポーツに果たす役割～制度・活動上の関わりから～
○杉本 晴夫 (船橋市自遊人協会)
宮下 桂治 (順天堂大学)
戸田 安俊 (船橋市自遊人協会)
- B-06 地域余暇情報提供の実践活動
～ベルクソンの発行から～

役員選挙規定検討委員会の設置を決めた。委員会5名構成とし、委員長に前野昭彦、副委員長に油井常任理事、委員に坂口、宮下、部岡の3名が事務局長、委員に坂口、宮下、部岡の3名が事務局と連絡を取りながら規模の検討を進めることとした。

2. 第25回学会大会について
第25回学会大会の記念講演、基調講演、シンポジウム等について募集した。

① シンポジウムのテーマは、「新しいレジャー・レクリエーション時代の生き方」、コーディネーターに芳賀健治、シンジストに原田宗彦、松田義幸、宮下桂治の名義を決めた。

② 基調講演は、第1候補に福永佳津子氏を選び交渉を行うことを決めた。

3. 1995年度年間計画について
1995年年度予定表を審議した。
第25回学会大会に合わせて常任理事会を開催し、この時までには第26回学会大会開催地を決定できる

第25回記念大会実行組織

- 大会 会長 浅田 隆夫 学学会長
● 大会 実行委員会
● 大会 実行委員長 石井 正昭 常任理事
● 大会 実行委員 油 井 允 常任理事
● 大会 実行委員 藤 田 明 常任理事
● 大会 実行委員 坂 西 正 常任理事
● 大会 実行委員 宮 下 治 常任理事
● 大会 実行委員 西 田 俊夫 常任理事
● 大会 実行委員 杉 本 晴夫 常任理事
● 大会 実行委員 方 賀 健治 常任理事
● 大会 実行委員 松 浦 洋子 常任理事
● 大会 実行委員 松 浦 義幸 常任理事

● 常任理事会報告

＜1994年度 第9回＞
日時 1994年2月28日(火) 14:30～16:30
場 所 国立オリンピック記念青少年総合センター
出席者 前野、黒田、鈴木(秀)、石井、坂口、寺島、芳賀、宮下、松浦
監事……越智
理事……大塚(第24回学会大会委員長)
幹事……大塚、西田、荒井

報告事項
1. 各委員会報告
総務委員会 学会ニュースNo.56用の事務局原稿

を広報委員会に送達した。
広報委員会 学会ニュースNo.56を3月1日に発行予定である。

2. 第24回学会大会会計報告
1994年9月に拓殖大学北海道短期大学で開催した、第24回学会大会委員長の火輪理事から大会報告があり、事務局から同大会会計決算が報告された。また、越智監事から会計監査の結果、会計は適正であったことが報告された。
なお、第24回学会大会の剰余金129,337円は、普通会計に繰り入れることが決定した。

審議事項
1. 役員選挙規定検討委員会について

● 第24回学会大会決算報告

総 収 入	1,721,691 円
総 支 出	1,592,334 円
残 額	129,337 円

科 目	予 算 額	決 算 額	備 考
学 会 補助金	400,000円	430,000円	補助(57,000)増
参 加 費	330,000	300,000	4,000×75名
正 会 費	670,000	689,591	
懇 話 会 費	225,000	255,000	5,000×51名
当 代 費	40,000	47,000	1,000×47名
合 計	1,655,000	1,721,691	

支 出 の 部	予 算 額	決 算 額	備 考
印 刷 費	550,000	515,000	大会 引
通 信 費	50,000	9,346	広告依頼等
小 計	600,000	524,346	
会 議 費	190,000	196,815	実行委員会等
会 費	40,000	32,340	
事 務 費	5,000	15,748	
会 場 費	70,000	37,500	
選 び 替 当 代 費	60,000	75,000	議決, 案内表等
小 計	365,000	357,403	
講 師 謝 礼	170,000	170,000	
開 催 員 謝 礼	50,000	50,000	
入 場 料	118,000	99,000	3,000×118×3日
合 計	338,000	319,000	
報 告 費	225,000	272,425	送附(47)名
当 代 費	40,000	47,000	1,000×47名
予 備 費	87,000	72,180	
合 計	1,655,000	1,592,334	

3. 阪神大震災被災学会員の会費免除について
 阪神大震災被災学会員6名の1995年度会費免除が承認された。
4. 会員の入会について
 5名の入会を承認した。

<第2回>

日 時 1995年6月5日(月)18:30~22:00
 場 所 国立オリンピック記念青少年総合センター
 出席者 浅田、前野、黒田、鈴木(秀)、石井、坂口、芳賀、宮下、油井、松浦
 幹事……大森、杉浦、西田、荒井

報告事項

1. 各委員会報告
 財務委員会 学会事務局の合理化及び省力化を図るために会費等の集金システムを提案。具体的には、日本信販による集金代行システムが提案され、日本信販側の担当者から取付条件の説明を受けた。これに基づいて、今後財務委員会で検討を進めることが了承された。また、入会者は入会と初年度会費を事務局に直接納入し、次年度から振替にするなど手続きが簡便にならないルールづくりを検討することになった。

編集委員会 学会誌29号を6月20日過ぎに発行する。
 研究会企画委員 今後の研究会の内容について検討を進めている。

2. 第25回学会大会発表申込状況
 発表申込数は46題である。

発表者は、1994年度第7回常任理事会で決定したとおり、「発表者は原則として学会員に限定するが、特に常任理事会が認めた場合の限りではない」とを再確認した。この規定より、発表申込者に共同研究者も含めた非会員がいる場合、入会を呼びかけることとした。ただし、入会を希望しない場合は、上記規定の「特に」以下を今回限り適用することが承認された。

3. 日本レクリエーション協会評議員の交代
 日本レクリエーション協会評議員を黒田信寛副会長から鈴木秀雄理事長に交代する。

審議事項

1. 第25回学会大会について
 1) 学会大会実行組織について
 学会大会実行組織の構成について鈴木理事長から提案があり協議と承認された(1頁の第25回記念大会実行組織を参照)。
- 2) 広告掲載依頼について
 第25回記念大会発表論文集と、第25回学会記念誌「日本レジャー・レクリエーション学会の歩み」への広告掲載依頼を出すことが承認された。

- なお、広告掲載及び寄付申込期限は1995年7月8日、版下締切りは同15日に決定した。
2. 1994年度決算報告及び1995年度予算案について
 1994年度決算報告案と1995年度会計収支予算案を審議した。
3. 会員入会について
 6名の入会を承認した。

<第3回>

日 時 1995年7月10日(月)10:00~21:30
 場 所 国立オリンピック記念青少年総合センター
 出席者 浅田、前野、黒田、秋吉、鈴木(秀)、石井、油井、杉尾、下村、坂口、松浦
 監事……越智
 幹事……大森

報告事項

1. 各委員会報告
 役員候補選考委員会 1996~1997年度の役員候補者の選考経過が黒田委員長から報告された。
 総務委員会 ①第25回記念大会の1席開設を行った。1席は日本レジャー・レクリエーション学会第25回記念大会実行委員会、代表坂口正治、横井銀行小田原支店、1291489。②学会大会開催に對し地元小田原市民への協力依頼の準備を行っている。③会員名簿の整理、作成を行った。
 編集委員会 学会誌第29号を発行した。
 研究会企画委員 月例研究会の今後の進め方を検討中である。

審議事項

1. 第25回学会大会について
 1) 学会大会日程、プログラム、研究発表と実践報告の会場割当て等の詳細を審議し決定した。
 2) 学会大会の予算を審議し決定した。調査は、原則として基調講演、シンポジウムの権利が当学会員である場合は支払わないこととする。今回は基調講演を会員外に依頼しており予算に盛り込むことを決定した。
2. 1994年度会計決算報告案について
 1994年度会計決算報告案に対して、監事の越智正氏から決算報告書は満足であることが報告され、承認した。
3. 1995年度会計予算(案)について
 事務局案の説明があった。
4. 第25回学会大会開催地について
 浅田会長から経過説明があり、今後の交渉を会長に一任した。
5. 会員の入会について
 11名の入会を承認した。
6. その他
 大会予算の広告料の取り扱い方法の改善を今後検討することを決めた。

● 会員の動向

入会者	所	員
神谷明宏	子どもの城全国連絡協議会	(平成7・4・17承認)
高橋良秀	横浜市野外活動講座	"
深瀬昌子	山形女子短期大学	"
服部伸一	赤穂市立尾崎小学校	"
金 宝康	千葉大学国際言語大学院生	"
田中美智子	飯田女子短期大学	(平成7・6・5承認)
黒原俊子	あまのなご幼稚園	"
黒田次郎	日本体育大学	"
森 孝明	横浜国立薬学小学校	"
上村都貴絵	自浄学園	"
加藤恵子	立教大学(研究生)	"
橋本麻季	倉敷芸術科学大学	(平成7・7・10承認)
大崎 伸	東京都千代田区ホーム	"
小寺高志三	東北福祉大学	"
片岡理恵	YMCA学院専門学校	"
吉田 康雄	総合希望の郷ヶ丘センター	"
塩沢 勇夫	神奈川ハビタライトホーム	"
末田 晴則	神奈川ハビタライトホーム	"
砂川 康彦	東京農工大学専門学校	"
坂口 寿子	新潟中央短期大学	"
増田良一	養育赤十字病院	"
丸山 正	東京YMCA専門学校	"

● 事務局からお知らせ

第25回学会大会に合せ、下記の日時に常任理事会、理事会を開催します。常任理事、理事の各位には通知を別途お届け致します。

常任理事会 9月22日 17時~19時
 関東学院大学法学部(小田原校舎)

理事会 9月23日 10時~12時
 関東学院大学法学部(小田原校舎)

2. 学会費の納入について
 本年度の学会費が未納になっている会員は、下記の郵便振替番号を利用して納入をお願いいたします。
- 平成6年度以前の会費未納会員は、早急に納入して下さい。なお、3年間会費未納の場合は、規約第8条に基づき会員サービスを停止させていただくことになります。
- 郵便振替番号 00150-3-602353

◆ 編集後記 ◆

盛夏の季節になり、海も山もレジャー・レクリエーションを楽しむ人々で賑わっている。近年は、子どもも大人も新しいタイプのレジャー・レクリエーション活動を盛んに行う。従来は利用していなかった土地に新しいレジャー空間が誕生し、目新しい施設やレジャー用品が開発される。指導者の養成も欠かせない社会的要請である。世界の長寿国であるわが国は、これから 高齢化社会が進むので、高齢者のためのレジャー・レクリエーション問題は、今日以上に考えていく必要がある。21世紀という新しい時代のレジャー・レクリエーションはどのような展開になるのだろうか。

第25回という節目の学会大会のテーマは、「新しい時代の創造的余暇」である。多数の会員が参加し、討論が行われることを期待したい。この第25回記念大会は、従来からの研究発表に実践報告を加え、研究と実践の融合をはかり、幅広く学会員の研究交流を促進するという目的を設定している。研究発表は23題、実践報告は21題、合計44題が発表される。

学会ニュース57号は、こうした状況をふまえ、学会大会関係の記事を学会ニュースを当てた。

なお、学会の運営状況を学会ニュースを通じて周知できるように、常任理事会報告を紙面の許す限り詳しく報告します。(M.Y)

研究論文・実践報告の投稿募集

第25回学会大会で発表した研究、実践報告を学会誌「レジャー・レクリエーション研究」に投稿して下さい。

第25回学会大会を契機に、学会の一層の発展に向けて、学会誌の充実をはかる必要があります。

既刊の学会誌「レジャー・レクリエーション研究」に掲載されている投稿規定によって、多数の投稿を期待しています。

編集委員会

編集後記

理事長 鈴木秀雄
(関東学院大学法学部教授)

レジャー・レクリエーションの概念そのものの広さ、加えてその概念把握の曖昧さから生じる“研究領域の輪郭のぼやけ (Fuzzy)”……、これを学際的研究領域 (Interdisciplinary Academic Domain) としてよいのだろうか？ この視点だけから捉えても、現在会員が飛び越えなければならないハードルは高くそして多岐にわたっている。その中でも概念の曖昧さからくる認識や行動そのものの曖昧さに対する論理的枠組みの構築、研究活動と実践活動との融合、実社会でなされている活動に対する機能分類や内容分析を通してレジャー・レクリエーション活動の位置づけや意味づけ、社会変革や社会構造の変化のときにおいて、研究活動の方向性を求めて研究活動の動向を探り、新たに補完すべき領域や新領域の開拓、など様々である。今後受託研究についても実績を重ね、内外からの期待に応えていかなければならないことは言うまでもない。

学会が発足してから歴史を遡り源流を辿れば、本年は32年目の年にあたる。『日本レジャー・レクリエーション学会の歩み-1964~1995-』の発刊にいたる経緯は、学会として本年第25回学会記念大会開催の年であり、学会としてもなんらかのまとめをする必要があるのではないかと論議を尽くし、タイトルにも25周年記念とは記さずに発足から現在までの時代を標記 (-1964~1995-) し32年間のまとめを試みたものである。

研究の自主性や主体性あるいは自由度は、当然個人の裁量に委ねられるとしても、ややもすると個人の研究課題は、自身の興味や関心のみにとらわれる嫌いがなきにしもあらずなので、領域として必要な研究の推進を活性化する観点からも、学会として不足している領域や強化すべき当該研究領域プロジェクトの設置などにより研究領域全体のバランスを考えていく必要がある。それにはまず現在までの学会としての研究の全体がどのようになっているかを会員一人ひとりが認識することである。学会

としての継続性の中で、学会の新しさを求めていることとするものであることから、『日本レジャー・レクリエーション学会の歩み-1964~1995-』の内容については、事実をより客観的に整理し、恣意的判断をできる限り避け、学会全体の資料提供の視点から編集することを試みたことは言うまでもない。学会会則などの整理も全てにわたり精査したが、改訂の手続が明示されていないものもあり、時代を緋いて理事長の責任において正確を期した。事務局の移転に伴う諸手続きの繁雑さの中にあってもその時々にはすべき事柄の確認も重要な学会運営の仕事である。

学会や研究の評価は、継続性と積み重ねによるところが大きいのであるから、会員一人一人の絶え間ざる努力の延長線上に、学会の存在があることを確認しておきたいと思う。この『日本レジャー・レクリエーション学会の歩み-1964~1995-』の発刊により、学会員の研究動向、領域が明確となり、現会員にとって新たな研究領域の開拓と共に、会員相互のコミュニケーション、さらにはネットワークの確立に貢献し、今後の研究に関する方向性を確認するための一助となって欲しいと期待するものである。『日本レジャー・レクリエーション学会の歩み-1964~1995-』の発刊を通し、多くの先人の努力により、前身である、懇親会、研究会、レクリエーション学会から、日本レジャー・レクリエーション学会へと時代と共にその名称や果たすべき役割も変化させつつ、日本学術会議所属の学術団体として大きく成長し現在に至っている。これらの多事にわたる先人が果たしてきた努力にまさる諸活動により、学会が抱える諸課題を会員の意志(総意)をもって解決していく姿勢が重要であり、それこそが先人へのご恩返しであると共に、これからの日本レジャー・レクリエーション学会にとっても求められている方向であることを改めて認識しつつ、編集後記としたい。おわりに、発刊にあたり、快く広告掲載やご寄付を頂いた企業・個人の皆さんに心からのお礼を申し上げます。酷暑にも関わらず会長はじめ多くの企画委員、編集委員の皆さんから精力的な御協力をいただき、そして合同印刷(株)の中澤淳氏より多大の御支援とご協力を頂

いたことに重ねての感謝の意を表したい。

尚、表紙の題字“歩み”は浅田隆夫現会長に、学会の歴史32年間におよぶ全てに関わられた万感の想いを込めて書いていただいた。We have come a long way... and hang in there.

編集企画

浅田隆夫 (会長)
前野淳一郎 (副会長)
木下茂徳 (副会長)
秋吉嘉範 (副会長)
高橋和敏 (副会長)
黒田信寛 (副会長)
鈴木秀雄 (理事長)
石井允 (常任理事)
坂口正治 (常任理事)
下村彰男 (常任理事)
杉尾邦江 (常任理事)
寺島善一 (常任理事)
芳賀健治 (常任理事)
松浦三代子 (常任理事)
松田義幸 (常任理事)
宮下桂治 (常任理事)
師岡文男 (常任理事)
油井正昭 (常任理事)

編集委員会

鈴木秀雄 (委員長)
石井允
坂口正治
下村彰男
松浦三代子
西田俊夫
大森雅子
嵯峨寿
荒井啓子

『日本レジャー・レクリエーション学会の歩み -1964～1995-』

第32号

1995年9月15日 印刷

1995年9月20日 発行

発行人： 鈴木 秀雄

発行所：日本レジャー・レクリエーション学会事務局

〒186 東京都国立市富士見台 4-30-1

東京女子体育大学レクリエーション 研究室内

電話 0425-72-4131

FAX 0425-72-4136

印刷所：合同印刷株式会社

東京都墨田区業平 2-9-13

電話 03-3624-6111 (代)



関東学院大学

学長
伊香輪恒男

金沢八景キャンパス [所在地]〒236 横浜市金沢区六浦町4834 [電話](045)786-7019(入試課直通) [交通]京浜急行金沢八景駅下車徒歩15分
金沢文庫キャンパス [所在地]〒236 横浜市金沢区釜利谷南3-22-1 [交通]京浜急行金沢文庫駅下車バス12分、徒歩3分
小田原キャンパス [所在地]〒250 小田原市荻窪1162-2 [交通]JR・小田急 小田原駅下車徒歩18分

国際都市「横浜」を拠点に創造的人間教育を展開



1884年創立、キリスト教精神に基づく総合大学
関東学院大学は、キリスト教に基づく学校教育を行うという建学精神のもとに歩みつづけてきた百年以上の長い歴史と伝統をもち、人文、社会、自然の各系列に学部を置く総合大学です。創立以来蓄積された有形、無形の財産は計り知れません。
現在は、文学部、経済学部、法学部、工学部および、大学院、研究所などを設置し、学問の発展と社会への貢献に努めています。

潮風香る国際都市「横浜」で学ぶ

キャンパスは、今若者に人気のベイシティ横浜に金沢八景(六浦)キャンパスと金沢文庫(釜利谷)キャンパスの2つがあります。それぞれ首都圏横浜市の中でも、自然と歴史に囲まれた金沢区にあり、東京からでも約1時間と通学にも大変便利な環境です。文学部生が学ぶ金沢文庫キャンパスには、最新の視聴覚施設をはじめ豊富な教育施設を整えとともに、ナイターも可能な野球場、公認陸上競技場兼ラグビー場など課外活動の施設も充実しています。

経済学部・工学部生および大学院生が学ぶ金沢八景キャンパスは、潮風香るキャンパスとして有名です。すぐ近くを新都市交通シーサイドラインが走っています。図書館では卒論の資料を紐解く学生の姿がみられます。また新しい礼拝堂もお目見えしました。

小田原を加えて充実の3キャンパス

横浜の2つのキャンパスに、4年前より法学部の小田原キャンパスが加わりました。小田原駅から徒歩で約18分、雄大な自然を望む高台に広大なキャンパスは位置しています。歴史と文化の薫る都市・小田原の理想的な環境の中にあるキャンパスは、小田原市との公私協力のもとに生まれたもの。既設の学部と有機的な連携を図りながら、時代の要請に応える教育を展開しています。

■設置学部・学科(募集定員)

- 文学部 英米文学科(180) 社会学科(180)
- 経済学部第一部 経済学科(350) 経営学科(350)
- 法学部 法律学科(350)
- 工学部第一部 機械工学科(110) 電気・電子工学科(110)
建築学科(110) 土木工学科(90)
工業化学科(90) 建築設備工学科(90)
- 経済学部第二部 経済学科(経済系/経営系)(260)
- 工学部第二部 機械工学科(50) 電気工学科(50)
建設工学科(建築系/土木系)(110)
工業化学科(50)

7年度入試データ

学部	学科	志願者数	受験者数	合格者数			倍率(受/合)
				正規合格	種欠合格	計	
文	英米文学科	1,093	1,078	474	0	474	2.3
	社会学科	1,977	1,959	451	0	451	4.3
	計	3,070	3,037	925	0	925	3.3
経一	経済学科	4,348	4,242	1,005	0	1,005	4.2
	経営学科	4,943	4,836	984	196	1,180	4.1
	計	9,291	9,078	1,989	196	2,185	4.2
法	法律学科	2,524	2,461	761	0	761	3.2
	計	2,524	2,461	761	0	761	3.2
工一	機械工学科	1,218	1,178	300	4	304	3.9
	電気・電子工学科	1,006	985	345	10	355	2.8
	建築学科	1,337	1,309	280	0	280	4.7
	土木工学科	905	881	181	100	281	3.1
	工業化学科	760	735	250	60	310	2.4
	建築設備工学科	649	632	192	36	228	2.8
	計	5,875	5,720	1,548	210	1,758	3.3

8年度入学のしおり 5月下旬完成 無料
8年度募集要項 9月上旬から配布予定 有料
請求先=金沢八景キャンパス入試課

夢がフィット！心がウェルネス！

社会体育学科

- スポーツ・健康コース
- スポーツ・マネジメントコース
- アウトドア・アクティビティコース
- マリン・アクティビティコース

授業時間 / 18:00~20:30

キャンパスは、お洒落なカフェやブティックが並ぶ「自由が丘」。満足度120%のスクールライフを応援する好環境です。本校の大きな特色のひとつは、日本で初めて社会体育専門学校の認可を受けているところ。各分野のエキスパートを講師に迎え、少人数制による交流ゆたかな授業展開を実施して

ます。また2年生時にはカリフォルニア大学ロングビーチ校へ2週間にわたる研修旅行を実施。先進のフィットネス理論にふれたり、ディズニーランドをエンジョイしたり充実の体験学習を行っています。スポーツインストラクターへのウォーミングアップ、本校がサポートします。

取得可能な資格

- 厚生大臣認定 健康運動実践指導者 (講習免除)
- キャンプ指導者初級
- スポーツクラブ専門指導員
- 日赤 救急施設救急員
- 日赤 水上安全法救助員
- 文部大臣認定 公認スキー指導員(級申請中)

ホクたちの体専、君の目で確かめて
学校見学随時受付中
水〜金PM6:30~PM8:00
※試験期間などには見学できない場合もあります。
事前に電話でご確認ください。

主な就職先

フィットネスクラブ、スイミングスクール、スポーツ関連企業など

東京体育専門学校

〒152 東京都目黒区自由が丘2-19-8
TEL / 03-3718-8251 (代表)

あなたの「国際交流」、お手伝いします。

市民レベルで多彩なひろがりを見せる、
国際交流新時代。その主役はもちろん、あなたです。

時代のニーズに応じて、 「JTB国際交流センター」、誕生!

Q
少年サッカーチームの
コーチをしています。
本場ブラジルで交流試合を
したいのですが…。

A
ブラジルではサッカーは国民的な
スポーツです。クラブの数も驚く
ほど多くあります。せっかくです
から、あのラモスが少年時代に所
属していたチームと腕試しなんて
いかがですか。試合相手はもちろん、
スタジアム探しまで、すべて
おまかせください。

Q
来年、北京で開催される
世界女性会議の
NGOフォーラムに
参加したいのですが…。

A
NGO(非政府組織)フォーラムの
ある国際会議は、いつ、どこで開
催されるのか、プログラムの詳細
や会議登録の方法はどうなってい
るのか、そしてどんなNGO団体が
世界から参加しているのか等、す
べてあなたに代わって調べ、必要
な手続きを代行します。

Q
市制30周年を迎え、
海外の都市と姉妹都市提携を
考えているのですが、
どうすればいいのでしょうか。

A
姉妹都市交流で大切なのは、未永
相互の交流です。でも交流の相
互性から、その内容を決めるま
では、大変な労力と豊富な情報
が必要です。JTB国際交流センタ
ーなら、あなたの市にマッチした
プランを提案できます。

Q
ドイツでは、若者が農村を
大切にして、活気と魅力ある
ものに育てている
ということですが、本当ですか。

A
ヨーロッパでは美しい自然と豊か
な作物を売り物にして農家が民
宿を営み、活気と魅力に満ちあふ
れた村作りを多くの地域で行なっ
ています。実際にそうした農家に
泊りこんで、作業の手伝いをして
みると、あなたが求めているもの
がきっと見つかるはずです。

Q
茶道を教えています、
その中に留学生がいて
「私の国の友達にも日本の伝統文化を
教えてほしい」と言われているのですが…。

A
茶道はもちろん、華道や折り紙な
ど日本の文化を知りたがっている
人々は、世界中にたくさんいます。
そうした人々を訪れ、ふれあう場
をつくるもの、私たちの役割です。
民間の文化大使としてのあなたの
意欲を力いっぱい応援します。

Q
友達と励んでいる
コーラスの一周年の成果を
海外で発表するなんて、
できるのでしょうか。

A
それならいっそ、音楽の都ウィー
ンで、現地の同好の人たちと交流
して、コンサートを開催するなんて、
いかがですか。相手先を探すことか
ら、コンサートホールの手配まで、
すべておまかせください。絵のサ
ークルの方々には、パリでの交流
展示会もお手伝いします。



JTB国際交流センターは、 あなたの「国際交流」を期待通りに実現します。

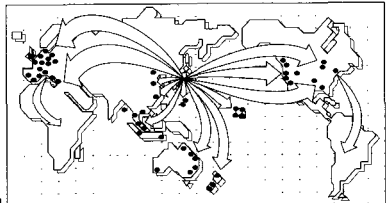
いま、国際交流は、個人やグループが主流となって、世界の各地で活発で多彩な活動を繰りひろげる市民レベルの新しい時代を迎えています。それに伴い、いままでの観光旅行の枠を超えたご要望やご相談が、私たちに寄せられています。「JTB国際交流センター」は、そうした多彩なニーズにお応えするべく、30年にわたる豊富な実績とノウハウ、そして業界一のグローバルなネットワークを結集して誕生。あらゆるジャンルで、あなたが実現したい国際交流を強力にバックアップします。

JTB国際交流センターなら、 例えばこんな国際交流ができます。

- 主婦のホームステイ・異文化体験
- 地域の国際化(姉妹都市・市民間交流)
- 熟年世代の国際体験交流
- 農村休暇体験
- 趣味・スポーツ・サークルの国際交流
- NGO(非政府組織)海外交流支援プログラム
- 世界の自然環境・動物保護の交流(エコツアー)
- 海外ボランティア活動・交流
- 伝統文化・芸能の海外紹介
- 青少年の国際交流プログラム



JTB Global Link



いま国際交流をご検討されている方。まず私たちに、お気軽にご相談ください。

JTB国際交流センター

JTB Global Link

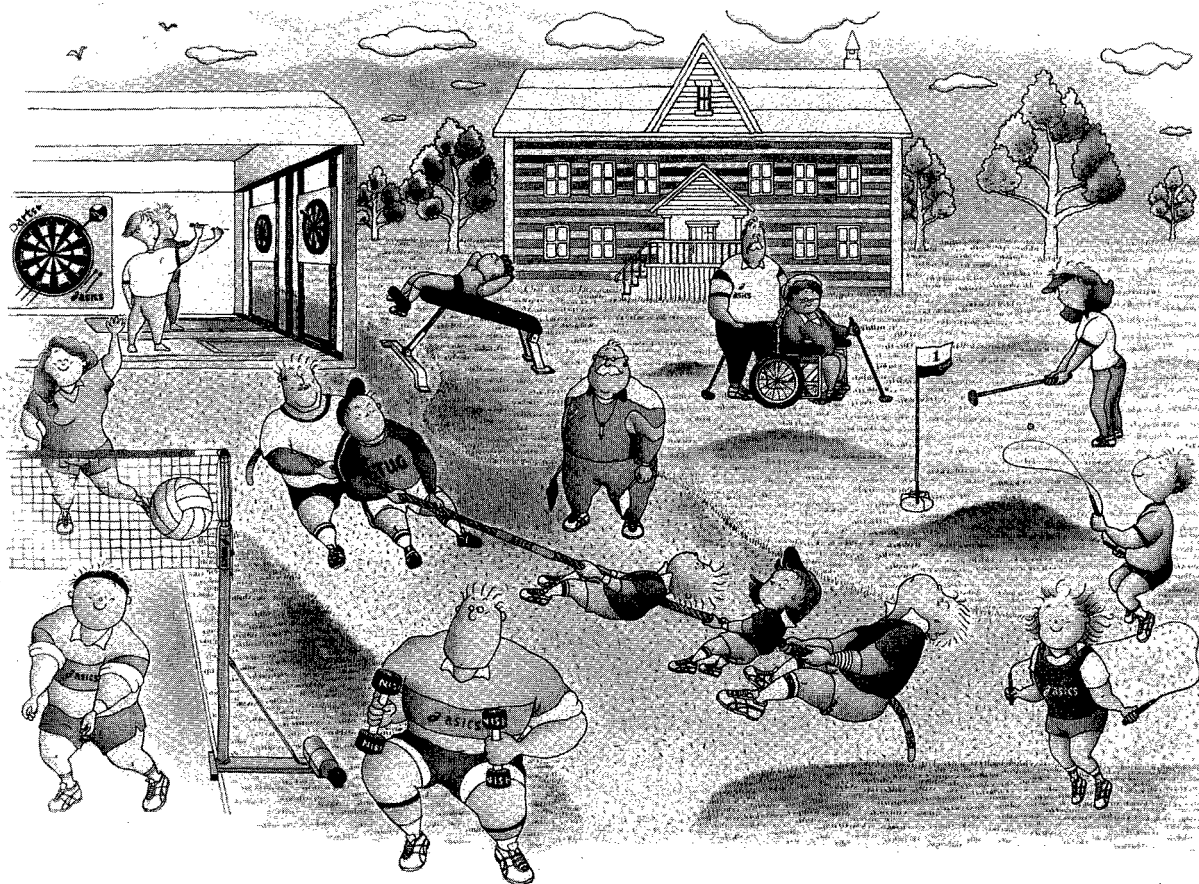
☎ 03-5512-0510

FAX. 03-5512-0526 受付時間(月~金 9:30~17:30)

JTB海外旅行虎ノ門事業部

東京都港区虎ノ門1-26-5 虎ノ門17森ビル7階

我ら、生涯スポーツ家族



アシックスは
生涯スポーツを応援します。



株式会社 アシックス

- この広告に掲載されている商品についてのご提案がございましたら
当社健康スポーツ事業部生涯スポーツチームまでどうぞ
TEL.(078) 303-6873(専用)
- 商品についてのお問い合わせは、株式会社アシックスお客様相談窓口までどうぞ。

〒550 神戸市中央区港島中町7丁目1番1号
TEL.(078) 303-2233(専用)・(078)303-3333(大代表)
〒130 東京都墨田区錦糸4丁目10番11号
TEL.(03) 3624-1814(専用)・(03) 3624-2221(大代表)



NLGS17-005
OFFICIAL SPONSOR



JGS-18
OFFICIAL SPONSOR



スポーツあげたい、
スポーツほしい。
全日本体育協会



体力、それはあらゆる活動のエネルギー。
そして自分開発のエネルギーでもある。

 **Columbine**

コロンバインスクールスポーツウェア

(財)日本学校体育研究連合会特別参助会員

(財)日本学校体育研究連合会推薦品

児島株式会社

岡山県倉敷市児島小川2-4-60

TEL(086)473-4634

<関東営業所>

埼玉県大宮市上小町1085

TEL(048)642-5883

<盛岡営業所>

岩手県盛岡市流通センター北1丁目4-18

TEL(0196)38-7501

ジェイアイは、みなさまのレジャー活動や、
レクリエーション活動を、バックアップします。

- ◆傷害保険
- ◆海外旅行保険
- ◆レクリエーション保険
- ◆イベント保険
- ◆キャンパー保険



●各種損害保険に関するお問い合わせは、フリーダイヤルでお気軽に。

 **0120-292-797**



インターナショナル安心ネットワーク

ジェイアイ傷害火災保険株式会社

〒102 東京都千代田区一番町20-5 TEL03(3237)2111

スポーツ用品全般

山田スポーツ商会

〒130 東京都墨田区本所2-20-9

細井ビル3F

電話 (03) 3621-7766

FAX (03) 3621-7770

旅の笑顔をお届けするのが 京王観光の仕事です。

▷ JR・航空券

JRをはじめ、すべての航空会社の指定代理店として発売を承っております。

▷ 旅館・ホテル

全国の一流旅館やホテル協会に加盟のホテルと協定を結び、ご予約を承っております。

▷ 各種パッケージツアー

オリジナル商品「キングツアー」の他、各種の国内・海外パッケージツアーの予約販売を承っております。

▷ 団体旅行

職場旅行・ご招待旅行などのグループ旅行のご相談も承っております。



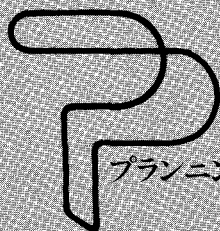
渋谷支店 ☎(03)3462-0351

本社：東京都渋谷区初台1-53-7 京王初台駅ビル ☎(03)5351-7141

KEIO

旅 京王観光株式会社

運輸大臣登録一般旅行業第10号
JATA(日本旅行業協会)加盟



プランニングからプリンティングまで

信頼と実績の

● 御注文専門の印刷デパート



東京
墨田

合同印刷株式会社

東京都墨田区業平2-9-13 TEL(3624)6111代 FAX(3621)4620

代表取締役会長

長棟至元

代表取締役社長

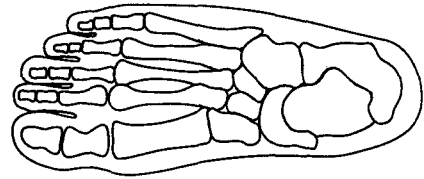
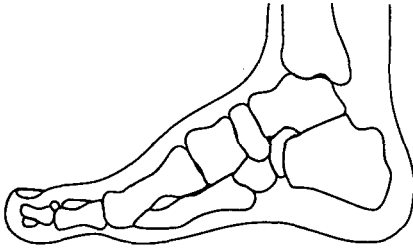
長棟和子

JES

JAPAN EDUCATION SHOES

足から生まれた、シューズです。

運動時に足の関節は、前後左右に広がり、身体を支えています。直立時の足型を考えただけのシューズでは、本来足が持つ様々な能力が発揮されないばかりか、健康を害することにもなります。教育シューズは、足を科学することから生まれた、学校体育シューズです。



文部省許可 (雑体第32号)

公益信託

日本教育シューズ学校体育振興基金



日本教育シューズ協議会

本部事務局 岡山市西川原1-11-6-1 TEL.086-272-5463

MADARAO KOGEN SNOW RESORT

リゾートは 遠くにおいて思うもの。

スキーはもちろん、モーグルやスノーボード、さらにはスノーモビルなど、ウィンタースポーツを楽しむのもいい。そして北信濃の美しい雪景色につつまれ、ただただ、のんびりするのめまた格別です。あわただしい日常を離れ、ちょうど遠い斑尾でバカンスしましょう。



上信越自動車道/須坂・長野東I.C.より60分



斑尾高原ホテル・スキー場

〒389-22 長野県飯山市斑尾高原

☎0269-64-3311(ホテル代表) ☎03-3216-2611(東京予約)

幼児の運動あそびの 新しい進め方

浅田隆夫 編

近刊 A5判 240頁 予価2060円

幼児のころとからだのよりよい発達をめざし、1人1人の運動能力に応じて、運動あそびをどのように援助し発展していったらよいか、豊富な具体例を盛りこんで、系統だてて解説したテキスト。

〈もくじ〉 幼児の運動あそびの発達と健康/ 幼児の基本運動/ 幼児の技能と運動あそび/ 幼児の模倣・表現の運動あそび/ 行事としての運動あそび/ 運動あそびのへたな幼児の指導技術/ 幼児の運動あそびのプログラミング

改訂新版 幼児の体育指導

勝部篤美 編

A5判 240頁 定価1751円

幼児の運動あそびを強調しながら体育について積極的に取り上げて解説した。今日の問題や発達順序にそったあそびを盛り込んだユニークなテキスト。

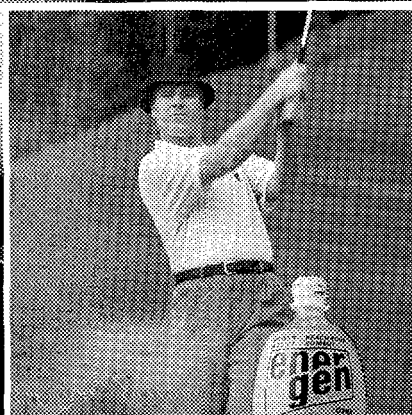
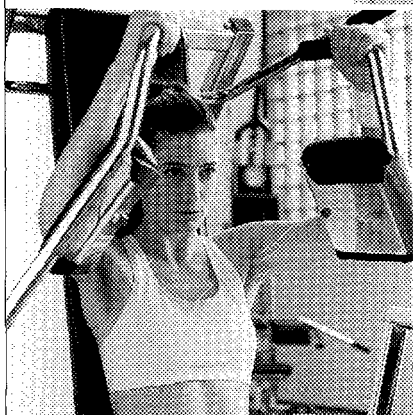
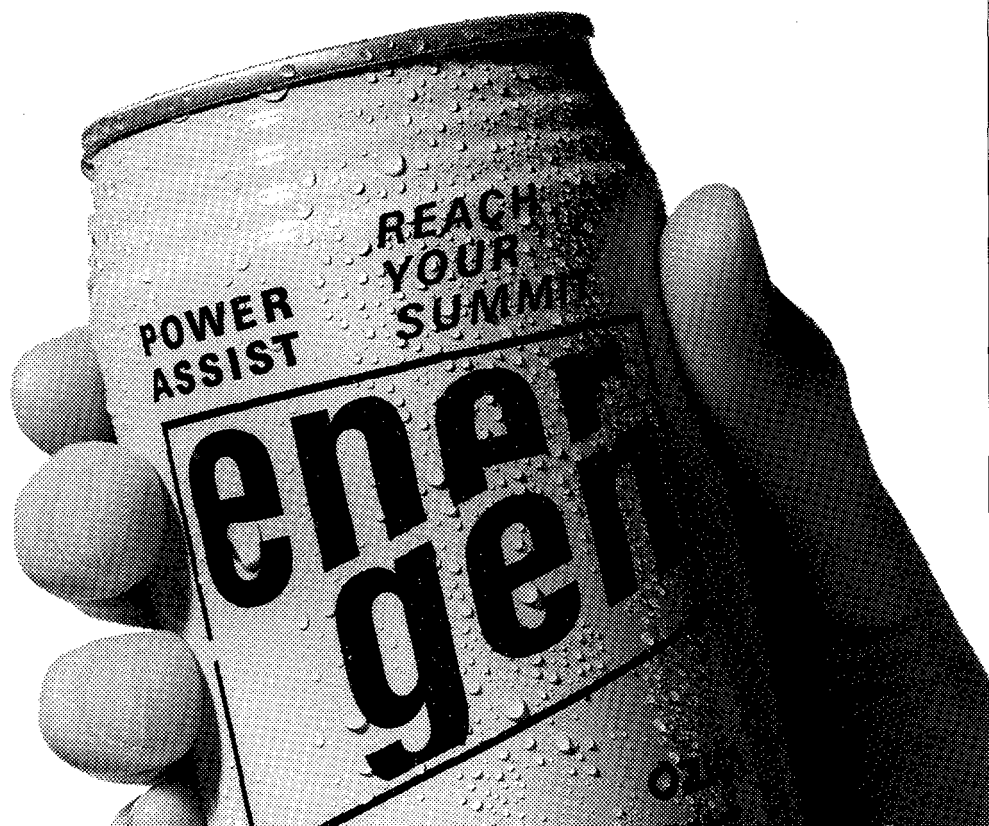
〈もくじ〉 **第1部 幼児体育の理論**/ 幼児体育の理念/ 幼児という存在/ 幼児の体力・運動能力/ 幼児の運動技能/ 幼児体育の指導方法/ 幼児体育における遊具/ 幼児体育持論
第2部 幼児体育の実際/ 幼児体育の教材/ 3歳児の指導/ 4歳児の指導/ 5歳児の指導

※価格は税込みです。お近くの書店または直接弊社までご注文ください。

株式
会社 学術図書出版社

〒113 東京都文京区本郷5-4-6 振替00110-4-28454
TEL 03-3811-0889 FAX03-3811-2464

飲むイミがある。



- ① エネルギーのメカニズムに着目
- ② 脂肪のエネルギーに着目
- ③ 身体をいたわるベータカロチンとビタミンC

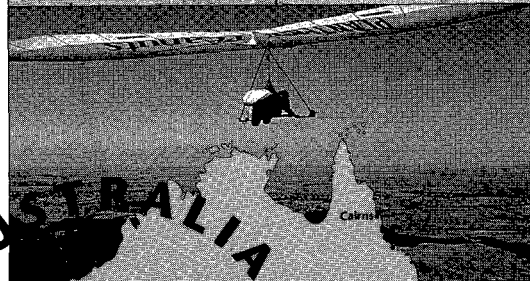
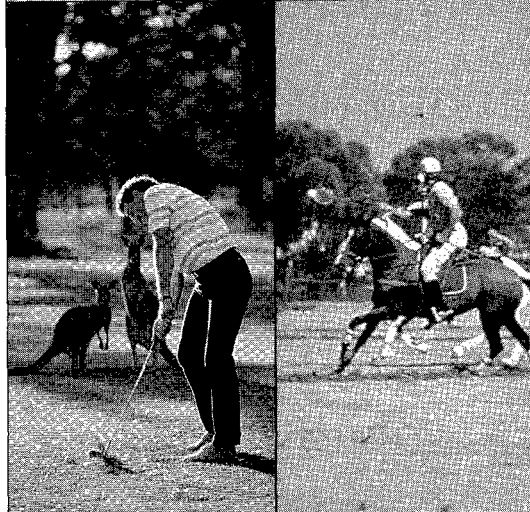
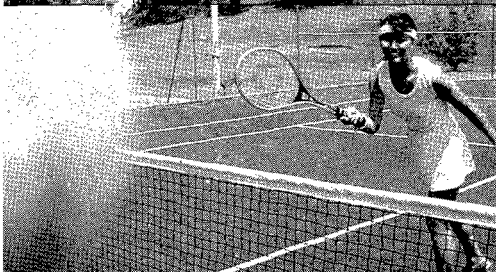
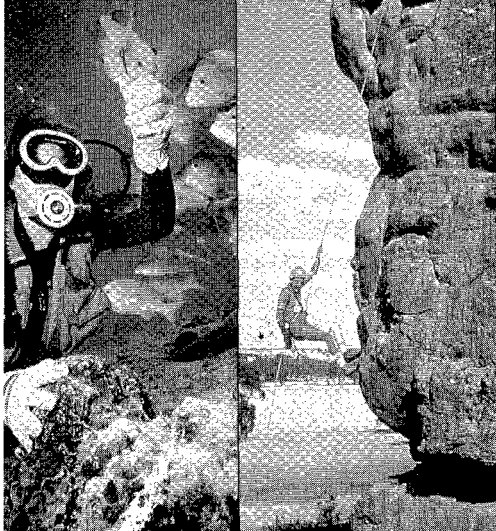
サイエンス スポーツドリンク

エネルゲン

480ml 1.5L 1.8L 2.0L 2.5L 3.0L

© 2000 Otsuka Pharmaceutical Co., Ltd.

初め、文化は遊ばれた。



未来のレジャー・レクリエーションを見据えて Indian Ocean

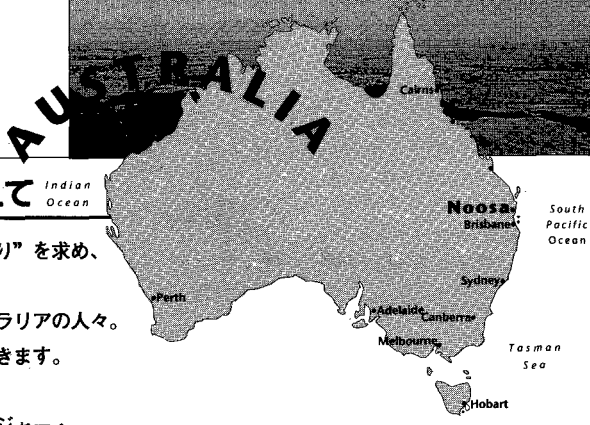
私たちは、理想的なレジャー・レクリエーションのかたちの中に“真のゆとり”を求め、日本とオーストラリアにおいて調査・研究活動を始めました。

豊かな自然に囲まれ、生まれながらにしてレジャーマインドを持つオーストラリアの人々。ここでは古くて新しいレクリエーションとのつき合い方を見いだすことができます。

さらに環太平洋の国々の大なるマツリの数々。

私たちは異文化・国際交流における諸活動を通じて、新しい世紀へ向かうレジャー・レクリエーションの新たな創造と探究を目指します。

また、2,000年に開催されるシドニーオリンピックに照準を合わせ、関連する事業・情報収集・研究者の相互交流を推進・サポートするなど、活動の場を広げていきます。



太平洋レジャー・レクリエーション交流会議 Pacific Exchange And Recreational Leisure Committee (PEARL)

PEARL研究所 : 8 Seamount Quay Noosa Waters QLD. 4566 Australia Tel./Fax. 001-61-74-42-4898
PEARL東京事務局 : 〒113 東京都文京区向丘1-16-4 矢川律子 Tel./Fax 03-3811-6016

加盟団体
Cultural Exchange AUSTRALIA
Sunshine Coast Language and Cultural Centre
KGCI Pty. Ltd.
日本セラピューティックレクリエーション協会
日本野外活動教育振興会議 (EQOL)